

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34

## 平成29年度発掘調査報告

(第5分冊)

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

釈迦堂遺跡

釈迦堂遺跡

徳泉寺跡

能蔵寺跡

平成30年3月

鎌倉市教育委員会

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34

## 平成29年度発掘調査報告

(第5分冊)

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

釈迦堂遺跡

釈迦堂遺跡

徳泉寺跡

能蔵寺跡

平成30年3月

鎌倉市教育委員会





## ご あ い さ つ

本市は、市域の6割以上が埋蔵文化財包蔵地であり、多くの市民が埋蔵文化財の眠る土地で生活を送っています。

そのため、家屋や店舗の建て替えに伴い、埋蔵文化財に影響を及ぼす工事が行われることも多く、毎日、市内数ヶ所で発掘調査が行われている状況です。

私たちが日々の生活を送っていく上で、やむを得ず失われる埋蔵文化財について記録を保存し後世に残すことは、現在を生きる私たちの責務であると言えます。

鎌倉市教育委員会では、昭和59年度から個人専用住宅等の建設に係る発掘調査を実施しています。本書は平成18～21年、23年、27～29年度に実施した、個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査27ヶ所の調査記録を掲載しています。

本書が、武家政治発祥の地として知られ、今なお観光・文化都市として栄える鎌倉の歴史を解き明かす一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査の実施に当たり、関係者の皆様に発掘調査に対し深いご理解を賜るとともに、調査の期間中、さまざまなご協力をいただきましたことを心からお礼を申し上げます。

平成30年3月30日

鎌倉市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は平成29年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書(第5分冊)である。
- 2 本書所収の調査地点は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施し、報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

## 第5分冊 目次

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
本誌掲載の平成18・19・20・21年度発掘調査地点一覧	V
調査地点位置図	VI

### 19 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 大町一丁目1084番4地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	5
第二章 堆積土層	12
第三章 発見された遺構と遺物	13
第四章 若宮大路周辺遺跡出土の動物遺体	32
第五章 まとめ	33

### 20 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 雪ノ下一丁目187番4地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	56
第二章 堆積土層	62
第三章 発見された遺構と遺物	64
第四章 若宮大路周辺遺跡出土の動物遺体	95
第五章 まとめ	102

### 21 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目349番1の一部地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	141
第二章 堆積土層	148
第三章 発見された遺構と遺物	148
第四章 まとめ	152

### 22 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町三丁目418番4地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	163
第二章 堆積土層	170
第三章 発見された遺構と遺物	170
第四章 まとめ	199

<b>23 釈迦堂遺跡 (No.257) 浄明寺一丁目598番21地点</b>	
第一章 遺跡と調査地点の概観	225
第二章 堆積土層	231
第三章 発見された遺構と遺物	232
第四章 まとめ	238
<b>24 釈迦堂遺跡 (No.257) 浄明寺一丁目598番35地点</b>	
第一章 遺跡と調査地点の概観	253
第二章 堆積土層	259
第三章 発見された遺構と遺物	260
第四章 まとめ	275
<b>25 徳泉寺跡 (No.173) 山ノ内字東管領屋敷168番4地点</b>	
第一章 遺跡と調査地点の概観	296
第二章 堆積土層	301
第三章 発見された遺構と遺物	302
第四章 まとめ	305
<b>26 能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目293番2地点</b>	
第一章 遺跡と調査地点の概観	317
第二章 堆積土層	323
第三章 発見された遺構と遺物	324
第四章 自然科学分析	383
第五章 まとめ	399

本誌掲載の平成18・19・20・21年度発掘調査地点一覧

第5分冊

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 原 因	遺跡種別	調査面積 (㎡)	調 査 期 間
19	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	大町一丁目1084番4	個人専用住宅 (地盤表層改良工事)	都 市	16	平成19年11月6日 ～平成19年12月7日
20	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目187番4	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	25	平成20年2月15日 ～平成20年3月14日
21	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目349番1の一部	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	14	平成20年8月26日 ～平成20年9月12日
22	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町三丁目418番4	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	58	平成22年1月21日 ～平成22年3月24日
23	釈迦堂遺跡 (No.257)	浄明寺一丁目598番21	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	17	平成21年1月9日 ～平成21年2月6日
24	釈迦堂遺跡 (No.257)	浄明寺一丁目598番35	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	20	平成21年2月10日 ～平成21年3月16日
25	徳泉寺跡 (No.173)	山ノ内字東管領屋敷 168番4	個人専用住宅 (柱状改良工事)	寺 院	20	平成20年12月2日 ～平成20年12月15日
26	能蔵寺跡 (No.314)	材木座二丁目293番2	個人専用住宅 (柱状改良工事)	墓	52	平成18年8月10日 ～平成18年11月6日

# 鎌倉市全図

本書掲載の平成18・19・20・21年度発掘調査地点(19~26)  
※遺跡名は一覧表を参照




若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

大町一丁目1084番 4 地点



## 例 言

1. 本報は「若宮大路周辺遺跡群」(神奈川県遺跡台帳No.242)内、鎌倉市大町一丁目1084番4地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成19年11月6日～同年12月7日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約16㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 宇都洋平  
調査員 本城 裕・小野夏菜  
作業員 安達越郎・清水政利・鯉沼 稔(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 第四章の出土動物遺体の鑑定・執筆は、東京国立博物館客員研究員金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を宇都洋平、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図5に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「WA1302」または「WA0712」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。
  - ・  煤およびタール状の黒色物が付着している部分
  - ・ 石製品の矢印は磨面範囲を示す。
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介(玉川文化財研究所)
14. 報告書作成にあたっては、宇都洋平氏・伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。

## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	5
第1節 調査に至る経緯と経過	5
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	5
第3節 周辺の考古学的調査	8
第二章 堆積土層	12
第三章 発見された遺構と遺物	13
第1節 第1 a面の遺構と遺物	13
第2節 第1 b面の遺構と遺物	21
第3節 第1 c面の遺構と遺物	25
第四章 若宮大路周辺遺跡群出土の動物遺体	32
第五章 まとめ	33

## 挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	7	図18 第1 a面 土坑10出土遺物	19
図2 若宮大路周辺遺跡群の周辺遺跡	8	図19 第1 a面 土坑7～11	19
図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡	9	図20 第1 a面 土坑11出土遺物	20
図4 調査区位置図	11	図21 第1 a面 ピット出土遺物	20
図5 調査区配置図	11	図22 第1 b面 遺構分布図	21
図6 調査区土層断面図	12	図23 第1 b面 竪穴状遺構1 出土遺物	22
図7 第1 a面 遺構分布図	13	図24 第1 b面 竪穴状遺構1・2	23
図8 第1 a面 井戸1	14	図25 第1 b面 土坑12出土遺物	24
図9 第1 a面 井戸1 出土遺物	15	図26 第1 b面 土坑12・13	24
図10 第1 a面 土坑1 出土遺物	15	図27 第1 c面 遺構分布図	25
図11 第1 a面 土坑2 出土遺物	16	図28 第1 c面 竪穴状遺構3	26
図12 第1 a面 土坑3 出土遺物	16	図29 第1 c面 竪穴状遺構3 出土遺物	27
図13 第1 a面 土坑5 出土遺物	16	図30 第1 c面 竪穴状遺構4	28
図14 第1 a面 土坑1～6	17	図31 第1 c面 竪穴状遺構4 出土遺物	29
図15 第1 a面 土坑7 出土遺物	18	図32 第1 c面 竪穴状遺構5	29
図16 第1 a面 土坑8 出土遺物	18	図33 第1 c面 竪穴状遺構5 出土遺物	30
図17 第1 a面 土坑9 出土遺物	18	図34 第1面 遺構外出土遺物	31

## 表 目 次

表 1	若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧	10	表 5	第 1 面 遺構外出土遺物観察表	38
表 2	第 1 a 面 出土遺物観察表	36	表 6	遺構計測表	39
表 3	第 1 b 面 出土遺物観察表	37	表 7	出土遺物一覧表	39
表 4	第 1 c 面 出土遺物観察表	37			

## 図 版 目 次

図版 1	1. 調査区北壁土層断面(南から)	43	3. 第 1 c 面 竪穴状遺構 4・竪穴状 遺構 5 土層断面(西から)	46	
	2. 調査区東壁土層断面(西から)	43	図版 5	1. 第 1 a 面 井戸 1 出土遺物	47
	3. 調査区南壁土層断面(北から)	43		2. 第 1 a 面 土坑出土遺物	47
図版 2	1. 第 1 a 面 I 区全景(南から)	44		3. 第 1 a 面 ピット出土遺物	47
	2. 第 1 a 面 II 区全景(南から)	44	図版 6	1. 第 1 b 面 竪穴状遺構 1 出土遺物	48
	3. 第 1 a 面井戸 1 (北から)	44		2. 第 1 b 面 土坑 12 出土遺物	48
	4. 第 1 a 面土坑 1 (北から)	44		3. 第 1 c 面 竪穴状遺構 3 出土遺物	48
図版 3	1. 第 1 b 面全景(南から)	45		4. 第 1 c 面 竪穴状遺構 4 出土遺物	48
	2. 第 1 c 面全景(南から)	45	図版 7	1. 第 1 c 面 竪穴状遺構 5 出土遺物	49
図版 4	1. 第 1 c 面 竪穴状遺構 4 根太痕跡 検出状況(北から)	46		2. 第 1 面 遺構外出土遺物	49
	2. 第 1 c 面 竪穴状遺構 5 根太痕跡 検出状況(北から)	46			

# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市大町一丁目1084番4地点で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳No.242）の範囲内にあたり、建築主から地盤の表層改良工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成19年7月18日～同年7月19日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺跡が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議した。その結果、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される範囲の約16㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、宇都洋平が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成19年11月6日～同年12月7日までの約1ヵ月で、調査面積は約16㎡である。現地表の標高は約6.3～6.4mを測る。掘削に伴う残土を場内処理する都合から調査区を東西に分割し、便宜上東側をⅠ区、西側をⅡ区と呼称した。調査はⅠ区から実施することとし、まず重機により20～40cmほどの表土を除去することから始め、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、表土直下で検出した第1面で中世に属するすべての遺構を検出したため、新しい段階の遺構から第1a～1c面として順に遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。Ⅰ区の調査終了後に重機による埋め戻しを行い、その後Ⅱ区の調査に着手した。Ⅰ区と同様に重機による表土の除去から始め、Ⅰ区と同様に第1面ですべての遺構を確認し、調査を実施した。なお、Ⅰ区では第1面を便宜的に第1a～1c面と区分したが、Ⅱ区では第1a面のみとした。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA 9）に準じた、鎌倉市四級基準点2点（ $X = -76175.347$ 、 $Y = -25236.363$ ）、（ $X = -76177.309$ 、 $Y = -25203.524$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53231（標高4.471m）を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群（No.242）は、鎌倉市街地のほぼ中心地区に位置し、国指定史跡「若宮大路」を挟んでおおむね東西に展開している。遺跡の南限は、県道鎌倉葉山線の六地藏から大町四つ角までの範囲、西は現在の「今小路通り」の寿福寺前から六地藏までの範囲、東は宝戒寺裏の滑川に架かる宝戒寺橋から夷堂橋を経て小町大路を南に下った大町四つ角までの範囲、北は鶴岡八幡宮前の三ノ鳥居の南を東西に走る横大路から窟堂前を通過して西の今小路通りに至るまでの範囲に相当し、南北約1,000m、東西500～700mの広がりをもつ。

この遺跡範囲内には、その中心に国指定史跡の若宮大路が南北に通り、若宮大路北端の東側には北条小町邸跡（泰時・時頼邸）（No.282）、その隣接地には宇津宮辻子幕府跡（No.239）の包蔵地範囲が、また西側には北条時房・顕時邸跡（No.278）の包蔵地範囲が所在している。

本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群の南東隅側にあたり、夷堂橋の南、小町大路と滑川に挟まれたほ

ほ中間地点に位置している。現住所表記は鎌倉市大町一丁目に属し、調査地点の南側は道路に面しており、滑川の護岸までは約20mを有する。現地表面の標高は約6.3～6.4mである。

地形的には、鶴岡八幡宮を背にして東と西の三方が山に囲まれ、南が海に面して開けた鎌倉市内では最も広い沖積平野を形成している地点に位置する。若宮大路周辺遺跡群の東側には鎌倉の市街地を貫く滑川が北東から流下して、本地点の西側で扇川や佐助川などの小河川と合流する地域である。このことから分かるように、下馬交差点の付近は鎌倉市街地の中でも一際低い土地となっている。若宮大路の三ノ鳥居付近で標高約9.7m、二ノ鳥居付近で約6.0m、若宮大路が大町大路と交差する下馬四つ角付近では約3.8～4.0mとなっている。

当初源頼朝は、幕府中枢の大倉御所(大倉幕府跡/No.253)を荏柄天神社の西に造営し、鶴岡八幡宮を由比郷から現在の地に移して周辺に持仏堂(法華堂)や永福寺などを造営し、鎌倉幕府を開いた。また、八幡宮から海に至る直線道が若宮大路で、御所が若宮大路に遷されると鶴岡八幡宮は鎌倉の中心となる。遺跡名ともなった若宮大路は、寿永元(1182)年3月、頼朝が妻政子の安産を願って自らの指揮のもとに造成したといわれるが、以後、鶴岡八幡宮への参詣道として、また都市鎌倉の基準線となっている。

遺跡範囲内および周辺域を概観すると、鶴岡八幡宮の周辺は幕府(宇津宮辻子幕府、若宮大路幕府)や有力御家人などの住居が造営された地域である。三代執権北条泰時は、大倉幕府を宇津宮辻子幕府、そして11年後には若宮大路幕府に遷すが、若宮大路を挟んだ東側の地域は、当時、北条小町邸跡(泰時・時頼邸)や若宮大路幕府などが営まれた最重要拠点である。また北条時房・顕時邸跡のある西側地域では若宮大路沿いに走る幅約3m(1丈)にも及ぶ木組み大溝が発見され、若宮大路に面した大規模な屋敷地の存在が推定されている。

一方、二ノ鳥居の南東側では、若宮大路沿いの調査地点でも発見される遺構の多くが方形竪穴遺構や小規模な掘立柱建物や井戸・土坑・柱穴・溝などで、これらが確認される地点は武家屋敷とは異なる庶民居住区、いわゆる「町屋」に相当する地域と推定されている。同じ大路沿いでも、二ノ鳥居を境に北と南側ではまったく様相が異なっていたことが知られるのである。また、二ノ鳥居以北でも大路沿いからやや離れると、大路に対して遺構の軸方向が異なるものも見受けられる。

また、遺跡群南東隅の交差点は大町四つ角と呼ばれ、この四つ角およびその周辺には建長3(1251)年と文永2(1265)年に定められた『吾妻鏡』記載の米町や大町などの商業地区があったとされる。さらに若宮大路と大町大路が交差する現在の下馬四つ角付近は、当時の繁華街として賑わった地域とされている。また、下馬四つ角から鶴岡八幡宮までは馬の乗り入れが許されず、若宮大路を横切るときもここで馬を下りて礼拝したことから「下馬」と呼ばれるようになったという。同様に南西隅の六地藏一帯も、鎌倉時代に刑場があった場所といわれ、これを弔うために六地藏が祀られ、それが地名となったといわれている。六地藏から今小路通りを北に向かうと、やがて佐助川に架かる鎌倉十橋の一つ「裁許橋」がある。鎌倉時代、この橋の付近に問注所があって、そこでの裁判の結果、無罪放免となった者が渡った橋であることがこの名の起こりとされ、有罪だった者は六地藏辺りにあった刑場に連れていかれて処刑されたという。

このように、若宮大路周辺遺跡群の範囲内は、幕府中枢の施設や有力御家人の武家屋敷地をはじめ、その周辺域には様々な性格を有する、都市ならではの遺構が混在している地域といえよう。





図1 遺跡位置図

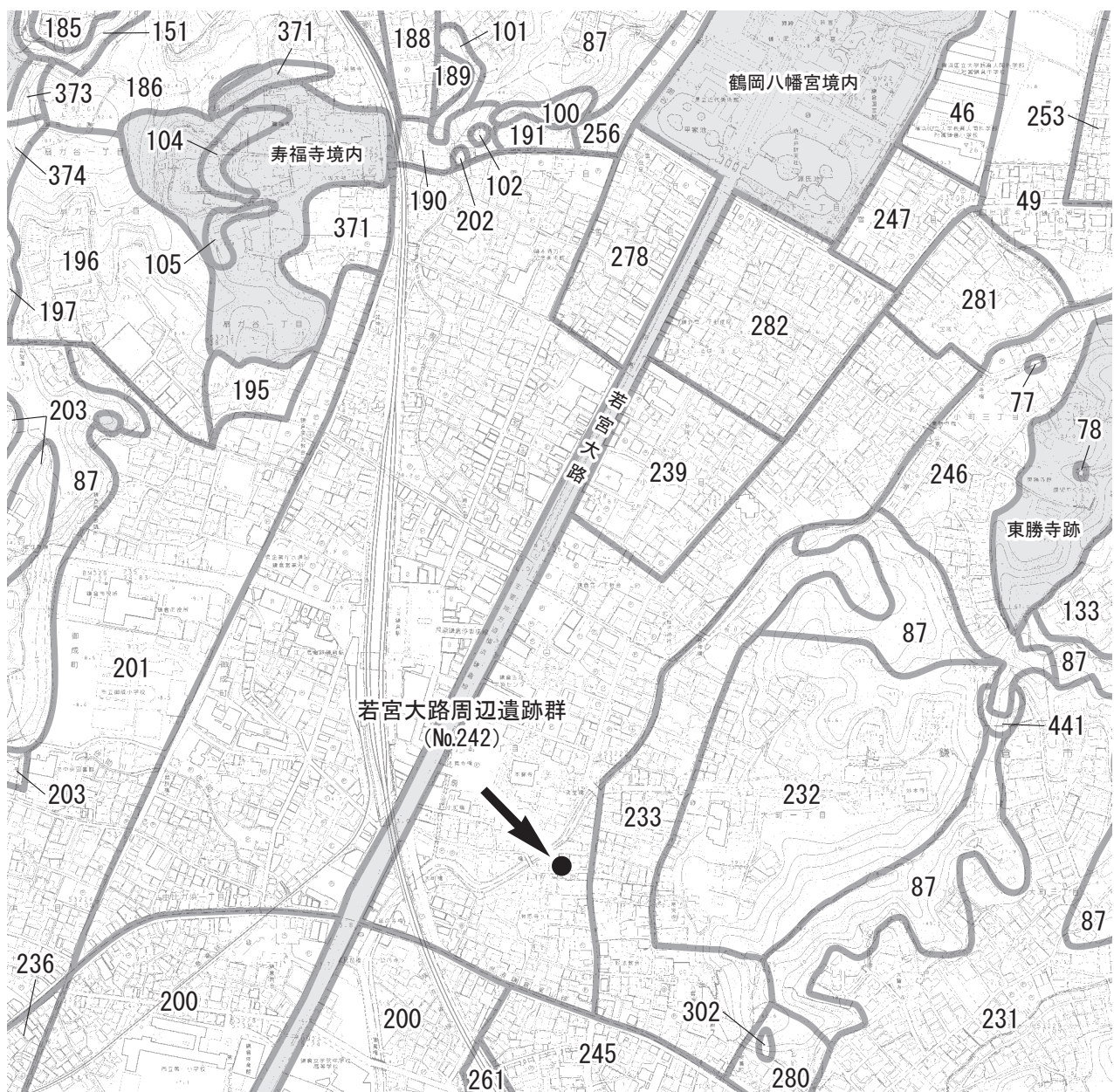


### 第3節 周辺の考古学的調査

本地点を含む若宮大路周辺遺跡群の発掘調査事例は、市街地に起因する開発件数の多さもあり、大小様々なものまでを含めて数えると、これまでに150地点以上が知られている。多くは小規模な調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、前節でみてきたように二ノ鳥居以北と以南では様相が大きく異なっていることが知られている。

本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群の中でも南東隅側に位置し、二ノ鳥居以南にあたる。詳細は次章に譲るが、検出した遺構からは武家の屋敷地とは異なった、庶民居住地区を想定させるような様相がうかがえる。以下、本節では本遺跡群内の南東側で調査された主な事例を中心に概観したい。

本調査地点の周辺域では、扇川が滑川に合流する大町橋付近で3地点の調査事例がある。その中で⑧大町一丁目1034番9地点では、南北道路(13世紀～14世紀代)を中心とする中世の土地利用の一端が明らか



※矢印は本調査地点、数字は神奈川県遺跡台帳による遺跡Noを示す。

図2 若宮大路周辺遺跡群の周辺遺跡





※矢印は本調査地点、●印・丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡



表1 若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	大町一丁目1084番 4 地点	
①	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目325番イ外地点	佐藤・小林 1994
②	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目302番地点	松尾 1983
③	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目302番地点	
④	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目287番13地点	齋木 1992
⑤	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目276番18・22・38地点	宮田・滝澤ほか 2006
⑥	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目1028番 1 地点	大河内 1997
⑦	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	大町一丁目1032番 1 地点	
⑧	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	大町一丁目1034番 9 地点	押木 2016

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

かにされている。道路は4面からなり、3面では路面上に混貝砂が敷かれている。また、2面では道路の西側に方形竪穴建物が繰り返し構築され、東側では小規模な土坑やピット、溝などが確認されている。

滑川以北側では、若宮大路の両側および小町大路沿いで調査が多くなされている。図3中において若宮大路沿いでは、駅側で5地点、大路の東側で6地点の調査事例が知られている。東側の小町大路沿いでは7地点の調査が行われている。また、調査例は少ないが両者間でも3地点で調査が行われ、⑤小町一丁目276番18・22・38地点は扇川の左岸に位置している。これらの中で、北側寄りの宇津宮辻子幕府があったと推定される地区に近い①小町一丁目325番イ外地点の調査では、方形竪穴建物を主とする中世の遺構群がまとまって発見されている。方形竪穴遺構29棟、掘立柱建物1棟、ピット約200基、道路1条、溝7条、土坑70基などで、特に方形竪穴遺構の調査事例は特筆される。若宮大路二ノ鳥居以南の大町や由比ヶ浜、今小路周辺地区では普遍的に存在するが遺構であるが、二ノ鳥居以北では少ない。これは幕府中枢の施設や有力御家人らの居住区域にはなく、今小路や若宮大路沿いなどの庶民居住域に建てられた遺構といわれており、本調査地点も同様の性格の遺跡であったと考えられる。

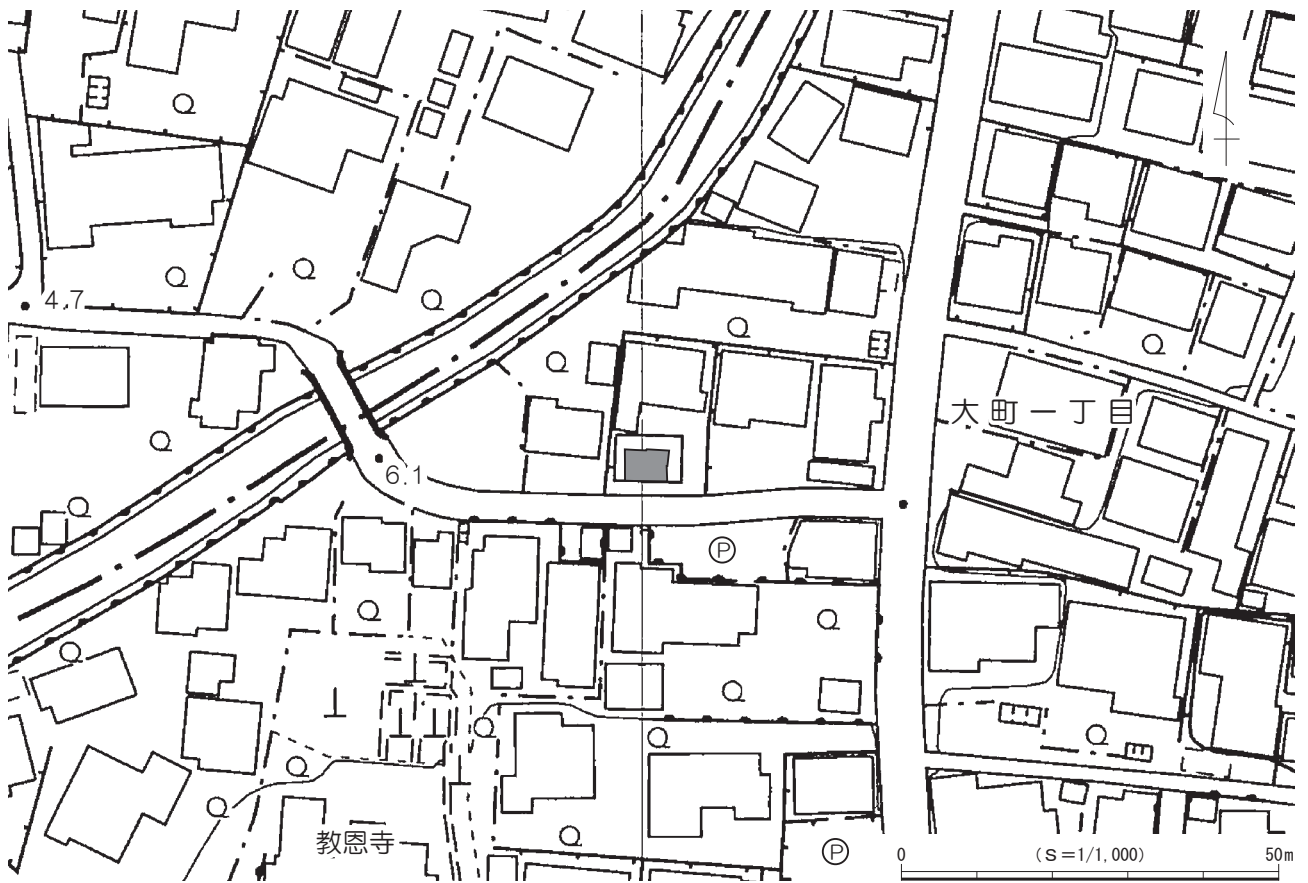


図4 調査区位置図

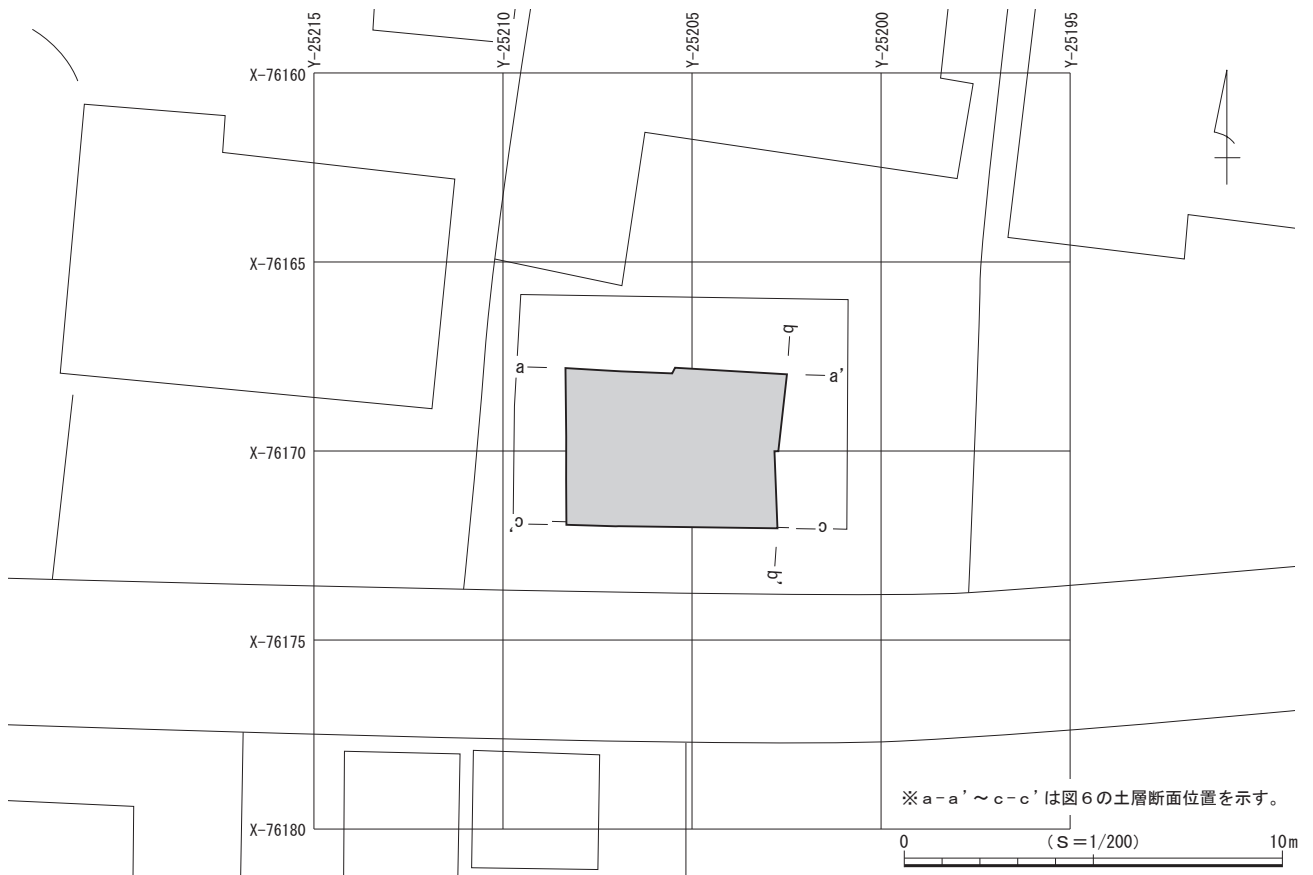


図5 調査区配置図

## 第二章 堆積土層

今回の調査では、第1面ですべての遺構を確認した。本報告では、調査の過程で確認された新旧関係をもとに便宜上第1 a~1 c面として報告を行うが、遺構の確認面はいずれも表土直下で露出した暗灰色地山層の上面であり、遺構確認面としては1面である。ここでは調査区北・東・南壁面の土層断面を図示し、各遺構の帰属面について説明する。なお、土層断面で確認されたが平面的には不明瞭であった遺構、また、平面で確認されたが土層断面では不明瞭であった遺構がいくつか認められた。

現地表面の標高は約6.3~6.4mを測る。表土層の厚さは約20~40cmを測り、均等ではない。また、地表下深くまで攪乱が及ぶ部分もあり、調査区北西隅では約1.5mの深さに達する。調査区南西側で表土最下層に黒褐色土の堆積が認められ、近年に行われた整地の痕跡である可能性が考えられる。

表土を除去すると直下に暗灰色を呈する地山層があらわれる。今回の調査で検出した遺構はすべてこの地山層の上面で確認しており、以下に生活面は存在しない。確認面の標高は約6.0~6.1mを測る。暗灰色の地山層は30cm前後の厚さが認められ、その下層は標高約5.7~5.8m付近で黄褐色砂の堆積となる。

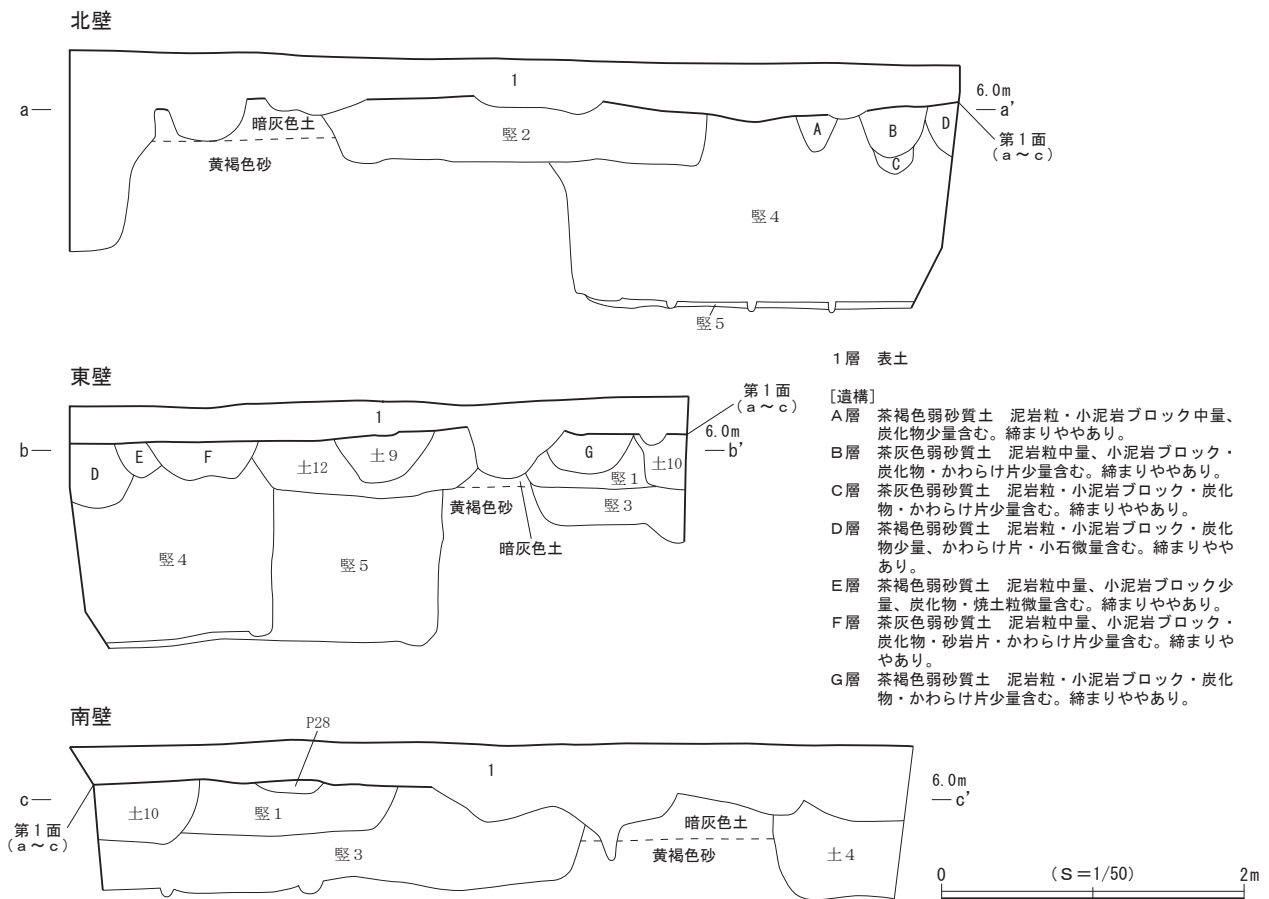


図6 調査区土層断面図

### 第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1面のみである。表土直下を精査し同一の遺構確認面(地山層)においてすべての遺構を検出したが、各遺構は重複しており新旧関係が認められ、時期の異なる遺構が一括して確認された状況であった。調査区南西側で表土最下層に比較的新しい整地の痕跡とみられる堆積土が確認されたことから、本調査区周辺はある時期に削平を受け整地された可能性があり、その結果として遺構の掘り込み面が失われたものと考えられる。また、表土直下に地山層があらわれることから、第1面以下には生活面が存在しない。ここでは、遺構を検出した際に確認した新旧関係に基づいて各遺構を3段階に区分し、新しい段階の遺構から順に第1 a面・第1 b面・第1 c面に分離して図示し、説明することとする。検出した遺構は、竪穴状遺構5基、井戸1基、土坑13基、ピット31基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して6箱を数える。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1 a～1 c面)に説明する。

#### 第1節 第1 a面の遺構と遺物

第1 a面の遺構は暗灰色を呈する地山層の上面で検出され、確認面の標高は約6.0～6.1mを測る。今回の調査ではすべての遺構が表土直下の第1面で確認されたが、遺構間の重複関係により時期的に3段階に区分でき、そのうち最も新しい段階に属する遺構を第1 a面の遺構とした。調査区西側のⅡ区の遺構については、重複関係が少ないことからすべて第1 a面の遺構とした。検出した遺構は、井戸1基、土

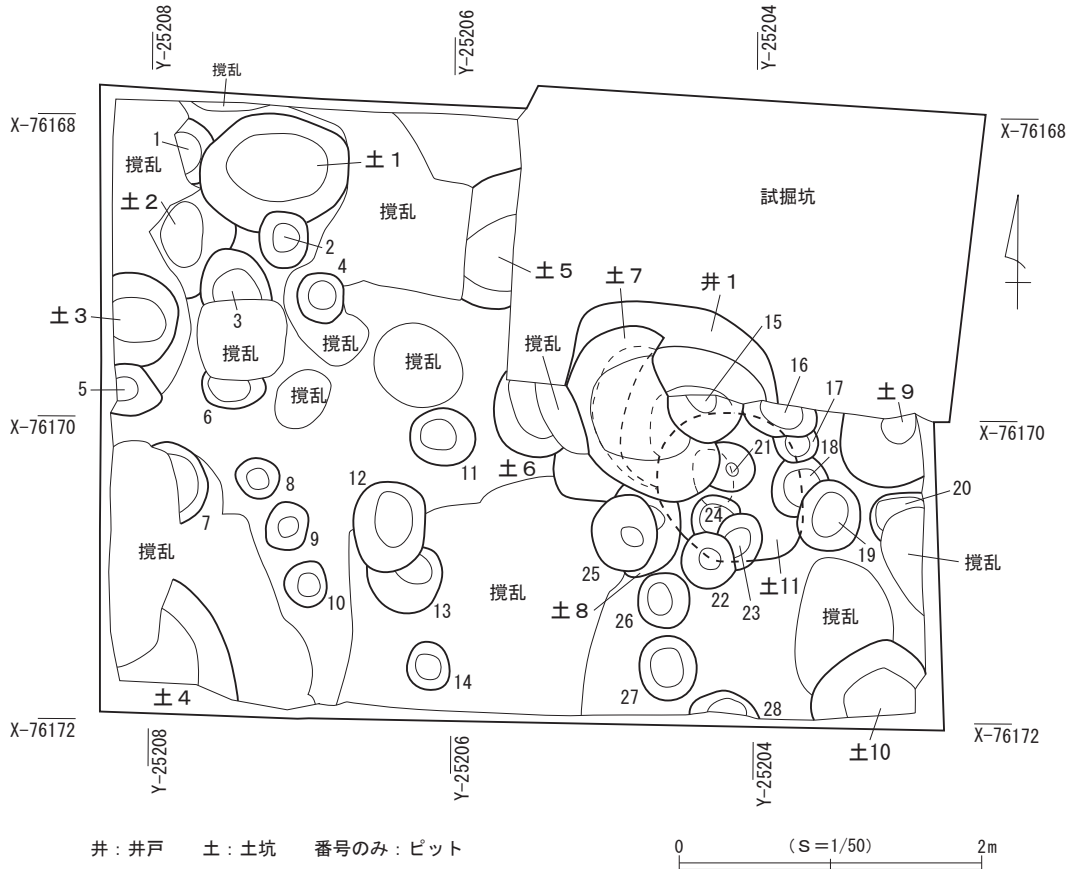


図7 第1 a面 遺構分布図

坑11基、ピット28基である(図7)。試掘坑や攪乱で失われた部分以外はほぼ全面に遺構が分布しており、重複するものも多く、遺構の密度は高いといえる。

遺物は主にかわけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から大半の遺構は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられるが、井戸1、土坑6～8・11、ピット15～19・21～25については15世紀前葉の埋没年代が想定される。

### (1) 井戸

第1 a面では、1基を検出した。隅丸方形を呈する素掘りの井戸である。

### 井戸1(図8)

調査区のほぼ中央に位置する。土坑6～8・11およびピット15・16・21・25と重複しており本址が古く、壁あるいは覆土の一部が壊されているが、ほぼ全容が把握できた。現在も湧水がみられる素掘りの井戸である。平面形は西側半分が角が張って隅丸方形に近く、東側が丸みを帯びて半円状を呈する。底面が丸く、壁は円筒状に延びて中ほどで開き、断面形は全体的にはU字状に近い。規模は東西1.45m、南北1.42m、深さ1.35mで、底面の径は55cm、底面の標高は4.68mを測る。覆土は下層から暗灰色砂質土、暗茶灰色弱砂質土、明茶褐色弱砂質土、茶灰色弱砂質土が水平に近い状態で堆積しており、いずれも泥岩粒・泥岩ブロックを含む。

### 出土遺物(図9)

遺物はかわらけ11点、磁器2点、陶器11点、瓦3点、金属製品4点が出土し、このうち7点を図示した。

1～3は瀬戸窯産の製品で、1が碗、2・3が壺である。4は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類である。5は備前窯産の挿鉢である。6・7は銭貨で、6が紹聖元寶(北宋・1094)、7が聖宋元寶(北宋・1101)である。

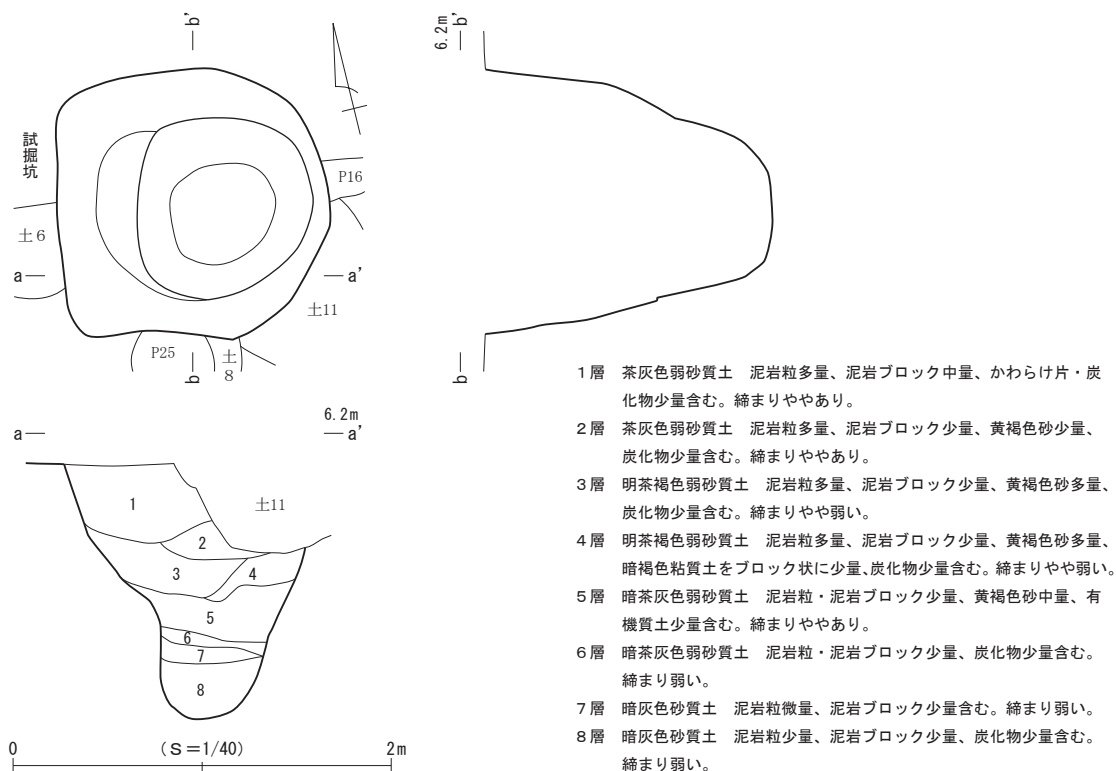


図8 第1 a面 井戸1

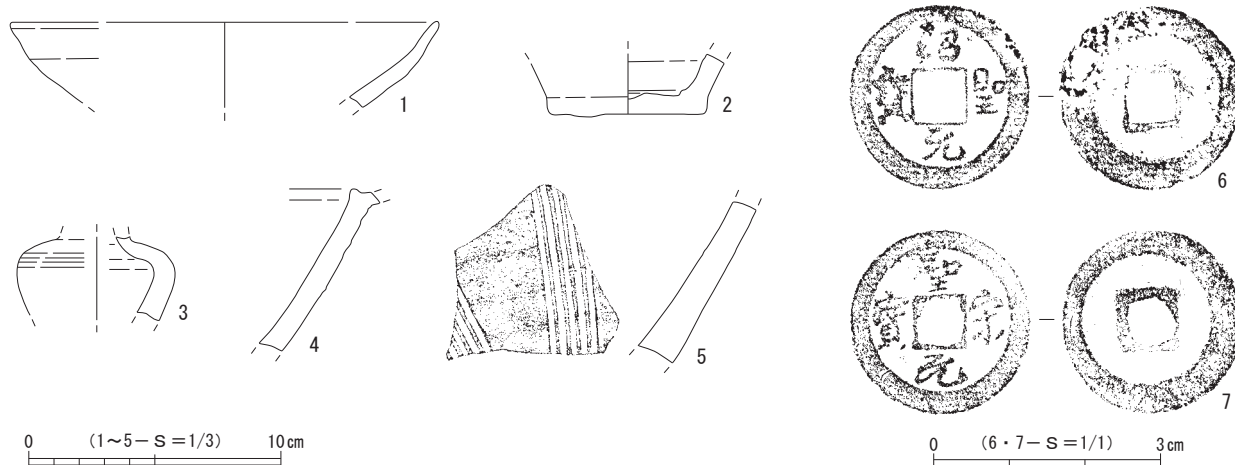


図9 第1 a面 井戸1出土遺物

## (2) 土 坑

第1 a面では、11基を検出した。調査区西側および中央付近にややまとまって分布しているものの、試掘坑や攪乱の影響を考慮すると目立った傾向はないといえる。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は現状で長軸0.62~1.23m、深さ19~64cmである。攪乱に壊されるものや調査区外に及ぶものが多いことから、遺構の全容が把握できたものは少ない。

### 土坑1 (図14)

調査区北西側に位置する。西側で重複する土坑2およびピット1より新しく、南側で重複するピット2より古く壁の一部を壊されている。平面形は楕円形を呈する。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸99cm、短軸78cm、深さ43cmで、坑底面の標高は5.57mを測る。主軸方位は東西を指す。覆土は泥岩粒・褐鉄を少量、炭化物を微量含む暗褐色粘質土である。

#### 出土遺物 (図10)

遺物は陶器1点が出土し、それを図示した。

1は常滑窯産の甕である。

### 土坑2 (図14)

調査区北西側に位置する。北側で土坑1およびピット1、南側でピット3と重複しており、本址が古く壁の一部を壊されている。また、西側が攪乱により失われている。検出した範囲からは、平面形は楕円形を基調とするものと推定される。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈するものと推定される。規模は南北現存長72cm、東西現存長56cm、深さ36cmで、坑底面の標高は5.62mを測る。覆土は4

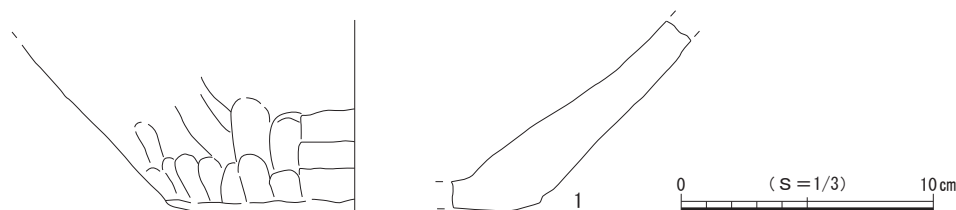


図10 第1 a面 土坑1出土遺物



層に分けられ、上層は泥岩粒・小泥岩ブロックを少量、黄褐色砂を中量含む暗茶灰色弱粘質土、中層は泥岩粒を微量、炭化物を少量含む暗褐色粘質土、下層は炭化物を微量、黄褐色砂を中量含む茶褐色弱粘質土である。

#### 出土遺物(図11)

遺物はかわらけ3点、磁器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は同安窯系青磁の椀I類である。

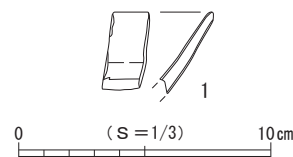


図11 第1 a面 土坑2出土遺物

#### 土坑3(図14)

調査区西壁中央に位置する。南側でピット5とわずかに接しており、本址が古い。また、上面を攪乱により削平され、西側は調査区外に及んでいることから遺構の全容は明らかでない。検出した範囲からは、平面形は円形を呈するものと推定される。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は南北現存長62cm、東西現存長43cm、深さ24cmで、坑底面の標高は5.54mを測る。覆土は2層に分けられ、上層は泥岩粒と小泥岩ブロックを少量含みやや締まりのある暗褐色弱粘質土、下層は泥岩粒と炭化物を少量、黄褐色砂を中量含みやや締まりのある暗茶褐色弱粘質土である。

#### 出土遺物(図12)

遺物はかわらけ1点、陶器3点が出土し、このうち1点を図示した。

1は手づくね成形によるかわらけである。

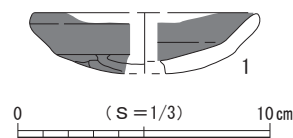


図12 第1 a面 土坑3出土遺物

#### 土坑4(図14)

調査区南西隅に位置する。攪乱により上面を削平され、南側は調査区外に及んでいることから遺構の全容は明らかでない。検出した範囲からは、平面形は円形を基調とするものと推定される。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は隅丸長方形に近いものと推定される。規模は東西現存長82cm、南北現存長70cm、深さ64cmで、坑底面の標高は5.34mを測る。覆土は6層に分けられ、上層は泥岩粒や炭化物を含む暗茶褐色弱砂質土と明茶灰色砂質土、中層は炭化物や貝殻片を含む暗灰色砂質土と茶灰色砂質土、下層は炭化物と黄灰色砂を含む暗黄褐色砂質土である。

遺物はかわらけ14点、磁器1点、陶器1点、石製品1点、金属製品1点が出土した。

#### 土坑5(図14)

調査区中央北側に位置する。西側が攪乱、東側が試掘坑により失われており、遺構の全容は明らかでない。検出した範囲からは、平面形は円形ないし楕円形を基調とするものと推定される。壁は北側が大きく開いて立ち上がり、断面形はやや歪んだU字状を呈する。規模は南北現存長90cm、東西現存長31cm、深さ19cmで、坑底面の標高は5.86mを測る。覆土は拳大の泥岩ブロックを多量、炭化物を中量含む暗黄灰色弱砂質土である。

#### 出土遺物(図13)

遺物はかわらけ6点、土器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は土器の火鉢である。

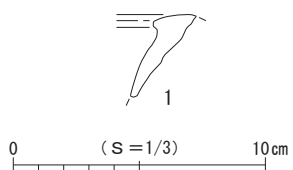


図13 第1 a面 土坑5出土遺物

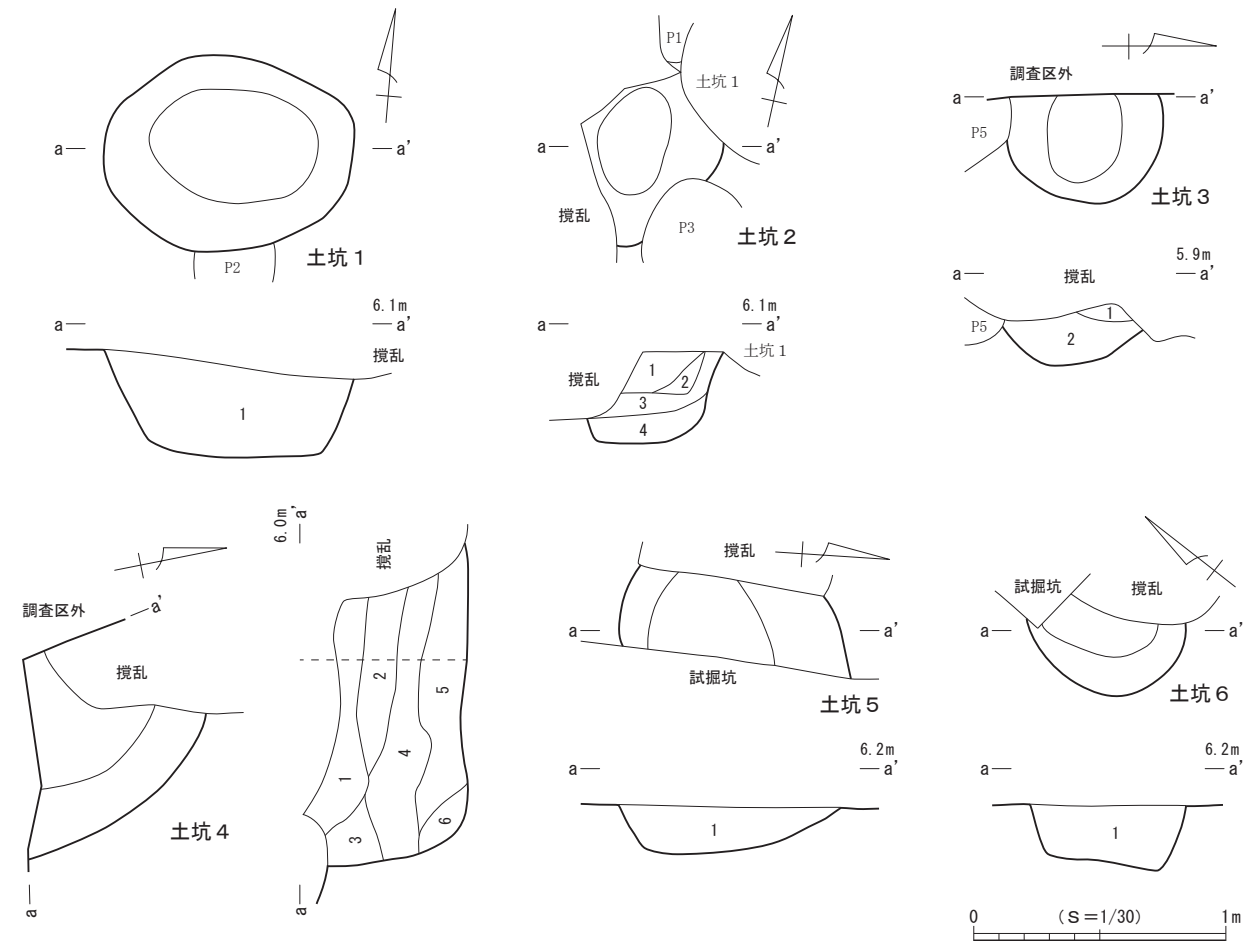
## 土坑6 (図14)

調査区中央に位置する。北側から東側が攪乱と試掘坑により失われており、遺構の全容は明らかでない。検出した範囲からは、平面形は略円形を呈するものと推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形はやや歪んだ逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長63cm、北東-南西方向の現存長40cm、深さ26cmで、坑底面の標高は5.80mを測る。覆土は小泥岩ブロックと炭化物を少量含む茶褐色弱砂質土である。

遺物はかわらけ2点、磁器1点、陶器1点が出土した。

## 土坑7 (図19)

調査区中央に位置する。南側で重複する土坑8より新しく、東側で重複するピット15より本址が古い。また、北側の上層が試掘坑に削平され、西側の壁の一部が攪乱により失われているが、おおよそ全容が把握できたと考えられる。平面形は楕円形を呈する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は丸みを帯びた逆台形を呈する。規模は長軸1.23m、短軸現存長80cm、深さ27cmで、坑底面の標高は5.76mを測る。主軸方位はN-32°-Wを指す。覆土は4層に分けられ、中央から北側は泥岩粒・泥岩ブロック・炭化物



- 土坑1  
1層 暗褐色粘質土 泥岩粒・褐鉄少量、炭化物微量含む。
- 土坑2  
1層 暗茶灰色弱粘質土 泥岩粒・小泥岩ブロック少量、黄褐色砂斑状に中量含む。粘性・締まりややあり。  
2層 暗褐色粘質土 泥岩粒微量、炭化物少量含む。粘性・締まりあり。  
3層 暗褐色粘質土 泥岩粒微量、小泥岩ブロック中量、炭化物少量含む。粘性・締まりややあり。  
4層 茶褐色弱粘質土 炭化物微量、黄褐色砂中量含む。粘性ややあり、締まりあり。
- 土坑3  
1層 暗褐色弱粘質土 泥岩粒・小泥岩ブロック少量含む。締まりややあり。  
2層 暗茶褐色弱粘質土 泥岩粒・炭化物少量、黄褐色砂中量含む。締まりややあり。

- 土坑4  
1層 暗茶褐色弱砂質土 泥岩粒・炭化物少量、黄褐色砂斑状に中量含む。締まりややあり。  
2層 明茶灰色砂質土 小泥岩ブロック・炭化物・黄褐色砂少量含む。締まり弱い。  
3層 暗灰色砂質土 泥岩粒微量、炭化物・貝殻片少量含む。締まり弱い。  
4層 茶灰色砂質土 炭化物・貝殻片少量含む。締まりややあり。  
5層 暗黄褐色砂質土 炭化物微量、黄灰色砂中量含む。締まりややあり。  
6層 暗黄褐色砂質土 炭化物・黄灰色砂少量含む。締まり弱い。
- 土坑5  
1層 暗黄灰色弱砂質土 拳大の泥岩ブロック多量、炭化物中量含む。
- 土坑6  
1層 茶褐色弱砂質土 小泥岩ブロック・炭化物少量含む。

図14 第1 a面 土坑1~6



などを含む暗茶褐色弱砂質土、南側は泥岩ブロック・茶褐色砂あるいは炭化物などを含む茶灰色弱砂質土である。

**出土遺物 (図15)**

遺物はかわらけ15点、陶器3点、石製品1点が出土し、このうち4点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3は備前窯産の播鉢である。4は砥石である。

**土坑8 (図19)**

調査区中央南東側に位置する。北側で土坑7、中央にピット25が重複しており本址が古く一部を壊されるが、おおよそ全容が把握できたと考えられる。平面形は楕円形を呈する。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長62cm、短軸現存長48cm、深さ50cmで、坑底面の標高は5.55mを測る。主軸方位はN-5°-Eを指す。覆土は小泥岩ブロックを中量、炭化物を微量含む暗褐色弱砂質土である。

**出土遺物 (図16)**

遺物はかわらけ3点、陶器3点が出土し、このうち1点を図示した。

1は瀬戸窯産の壺である。

**土坑9 (図19)**

調査区東壁中央に位置する。東側が調査区外に及んでおり、北側が試掘坑により失われていることから遺構の全容は明らかでない。検出した範囲からは、平面形は円形を基調とするものと推定される。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は調査区東壁の土層断面で確認すると南北現存長66cm、東西現存長57cm、深さ35cmで、坑底面の標高は5.78mを測る。覆土は小泥岩ブロックを多量、炭化物を少量含みやや締まりのある茶灰色弱砂質土である。

**出土遺物 (図17)**

遺物はかわらけ12点、磁器1点、陶器4点、金属製品1点が出土し、このうち2点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は瀬戸窯産の折縁皿である。

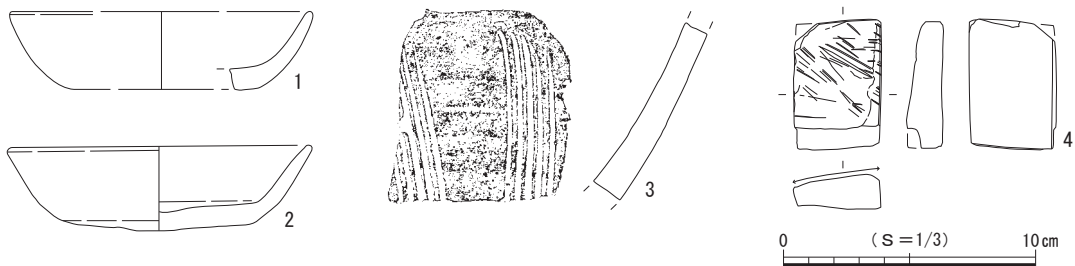


図15 第1 a面 土坑7出土遺物

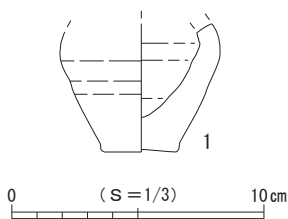


図16 第1 a面 土坑8出土遺物

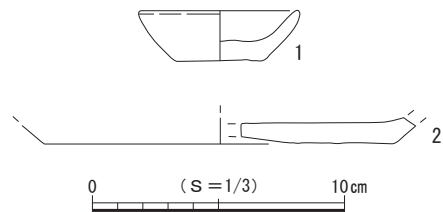


図17 第1 a面 土坑9出土遺物

## 土坑10 (図19)

調査区南東隅に位置する。東側および南側が調査区外に及んでおり、北西側の壁の一部が攪乱により失われることから遺構の全容は明らかでない。検出した範囲からは、平面形は円形ないし楕円形を基調とするものと推定される。壁は西壁が丸みを帯びて立ち上がり、断面形は歪んだ逆台形を呈するものと推定される。規模は東西現存長74cm、南北現存長50cm、深さ41cmで、坑底面の標高は5.70mを測る。覆土は2層に分けられ、泥岩粒・小泥岩ブロック・炭化物を含む暗茶褐色弱砂質土が堆積し、上層は泥岩の含有量が多い。

### 出土遺物 (図18)

遺物はかわらけ5点、陶器3点、金属製品1点が出土し、このうち2点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は常滑窯産の甕である。

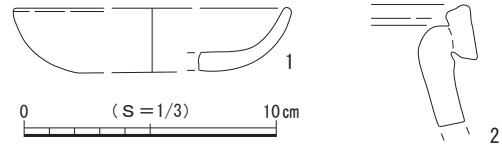
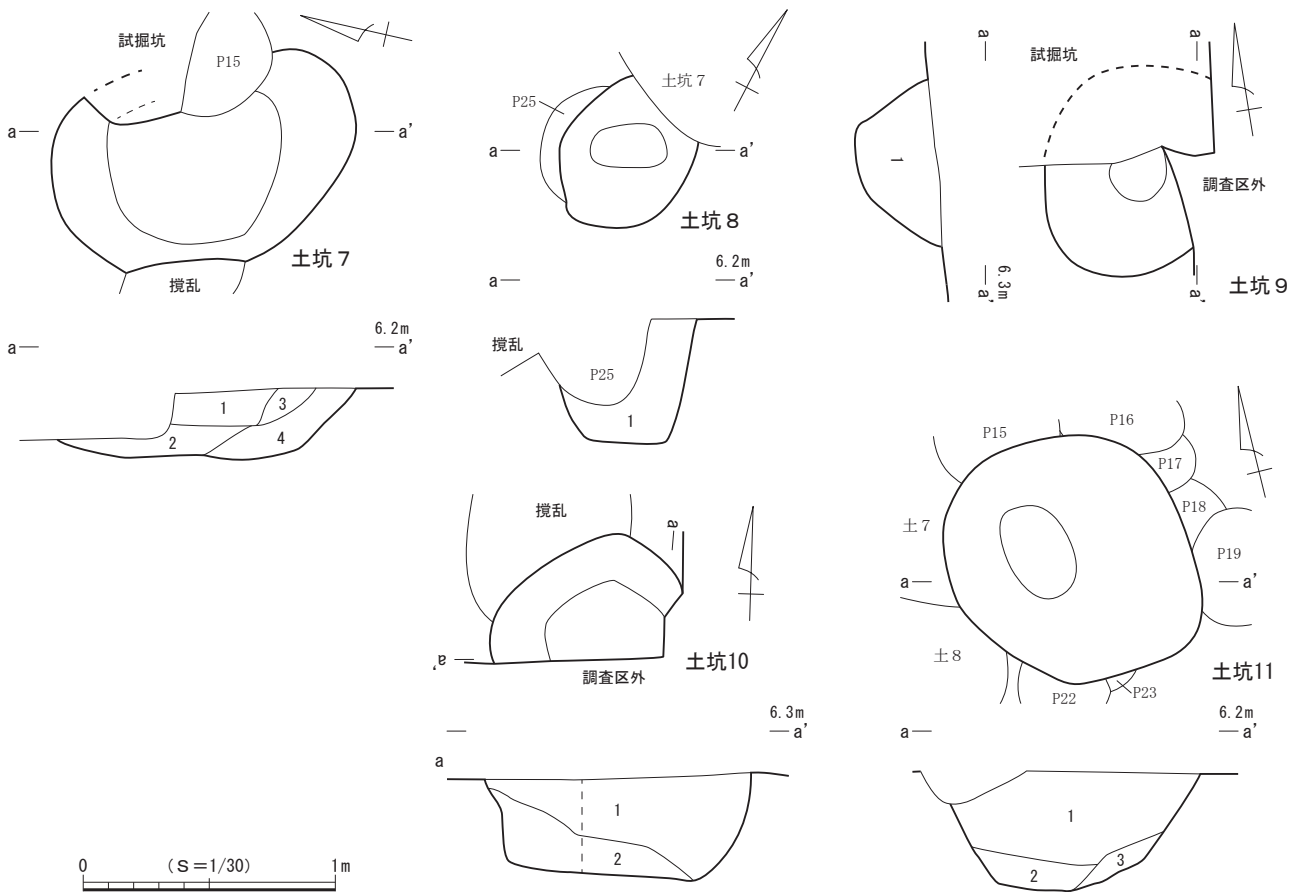


図18 第1 a面 土坑10出土遺物



#### 土坑7

- 1層 暗茶褐色弱砂質土 泥岩粒中量、小泥岩ブロック・炭化物・黄褐色砂質土少量含む。締まりややあり。
- 2層 暗茶褐色弱砂質土 泥岩ブロック多量、炭化物・茶褐色砂質土少量含む。締まりややあり。
- 3層 茶灰色弱砂質土 小泥岩ブロック・茶褐色砂少量含む。締まりややあり。
- 4層 茶灰色弱砂質土 泥岩ブロック中量、炭化物・小石少量含む。締まりややあり。

#### 土坑8

- 1層 暗褐色弱砂質土 小泥岩ブロック中量、炭化物微量含む。

#### 土坑9

- 1層 茶灰色弱砂質土 小泥岩ブロック多量、炭化物・かわらけ片少量含む。締まりややあり。

#### 土坑10

- 1層 暗茶褐色弱砂質土 泥岩粒中量、小泥岩ブロック多量、炭化物少量、かわらけ片含む。締まりややあり。
- 2層 暗茶褐色弱砂質土 1層に類似するが泥岩の含有量が減少する。

#### 土坑11

- 1層 暗灰色弱砂質土 泥岩粒・泥岩ブロック多量、かわらけ片・炭化物少量含む。締まりあり。
- 2層 暗褐色弱粘質土 泥岩粒多量、茶灰色砂質土中量、炭化物少量含む。締まりややあり。
- 3層 暗褐色弱砂質土 泥岩粒多量、茶灰色砂質土・炭化物少量含む。締まりややあり。

図19 第1 a面 土坑7～11

## 土坑11 (図19)

調査区中央東側に位置する。土坑7・8、ピット15~19・21~24と重複しており本址が古く、北西側に重複する井戸1より新しい。多数のピットと重複するが、おおよそ全容を把握できた。平面形は略円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は底面が丸みを帯びた逆台形を呈する。規模は径1.08m、深さ47cmで、坑底面の標高は5.57mである。覆土は上層に泥岩粒・泥岩ブロック・炭化物を含む暗灰色弱砂質土、下層は泥岩粒・茶灰色砂質土・炭化物を含む暗褐色弱粘質土と暗褐色弱砂質土が堆積していた。

### 出土遺物 (図20)

遺物はかわらけ7点、磁器1点、陶器2点が出土し、このうち3点を図示した。

1は龍泉窯系青磁皿I類である。2は瀬戸窯産の瓶子である。3は常滑窯産の甕である。

### (3)ピット (図7)

第1 a面では、28基を検出した。調査区の全面に密に分布し重複するものも多いが、建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は現状で長軸29~59cm、深さ9~34cmを測る。礎石や礎板を伴うピットは確認されなかった。覆土は泥岩粒や炭化物を含む茶灰色弱砂質土あるいは暗黄褐色弱砂質土である。

### 出土遺物 (図21)

各ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表7)を参照されたいが、このうち6点を図示した。

1はピット1から出土した同安窯系青磁皿I類である。2はピット11から出土した龍泉窯系青磁碗I類である。3・4はピット18から出土した。3はロクロ成形によるかわらけ、4は砥石である。5はピット19から出土した青白磁碗である。6はピット27から出土した龍泉窯系青磁の盤と思われる製品である。

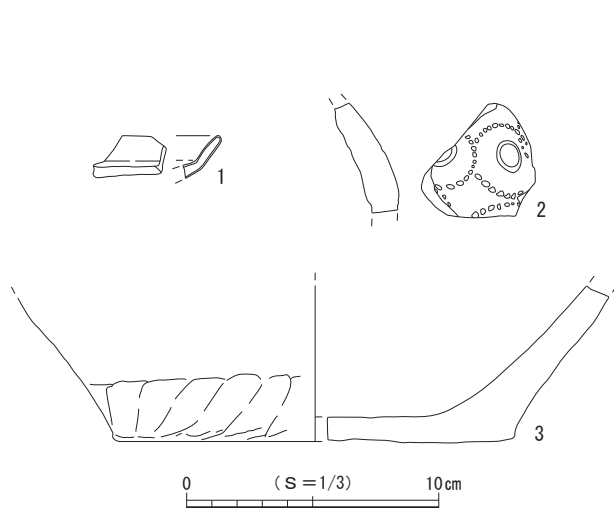


図20 第1 a面 土坑11出土遺物

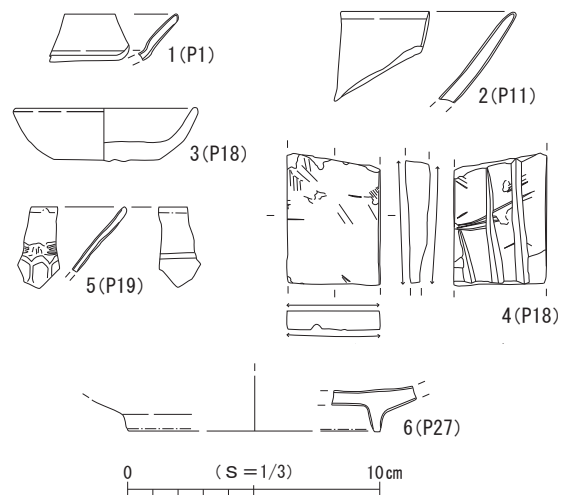


図21 第1 a面 ピット出土遺物

## 第2節 第1 b面の遺構と遺物

第1 b面の遺構は、第1 a面と同様に暗灰色を呈する地山層の上面で検出され、確認面の標高は約6.0～6.1mを測る。今回の調査ではすべての遺構が表土直下の第1面で確認されたが、遺構間の重複関係により時期的に3段階に区分でき、そのうち第2段階に属する遺構を第1 b面の遺構とした。また、調査区西側のⅡ区で検出した遺構はすべて第1 a面に帰属する遺構と考えた。検出した遺構は、竪穴状遺構2基、土坑2基である(図22)。調査区の制約により、全容が把握できた遺構は土坑1基である。なお、図上では煩雑になることを避けるため、第1 a面の遺構は可能な範囲で省略している。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

### (1) 竪穴状遺構

第1 b面では、2基を検出した。上層が削平を受けていると考えられることから掘り込みは浅く、またいずれも調査区外に及ぶ範囲が大きいとみられ、遺構の全容を把握するには至らなかった。

### 竪穴状遺構1(図24)

調査区南東隅に位置する。北西隅の壁上部に第1 a面の土坑8・11およびピット22・25が重複し、北東側は攪乱を受けてそれぞれ壁の一部を壊されている。さらに、遺構の東側および南側は調査区外に及んでおり、検出した範囲は北壁から西壁にかけてである。確認できたのは遺構全体のごく一部とみられ

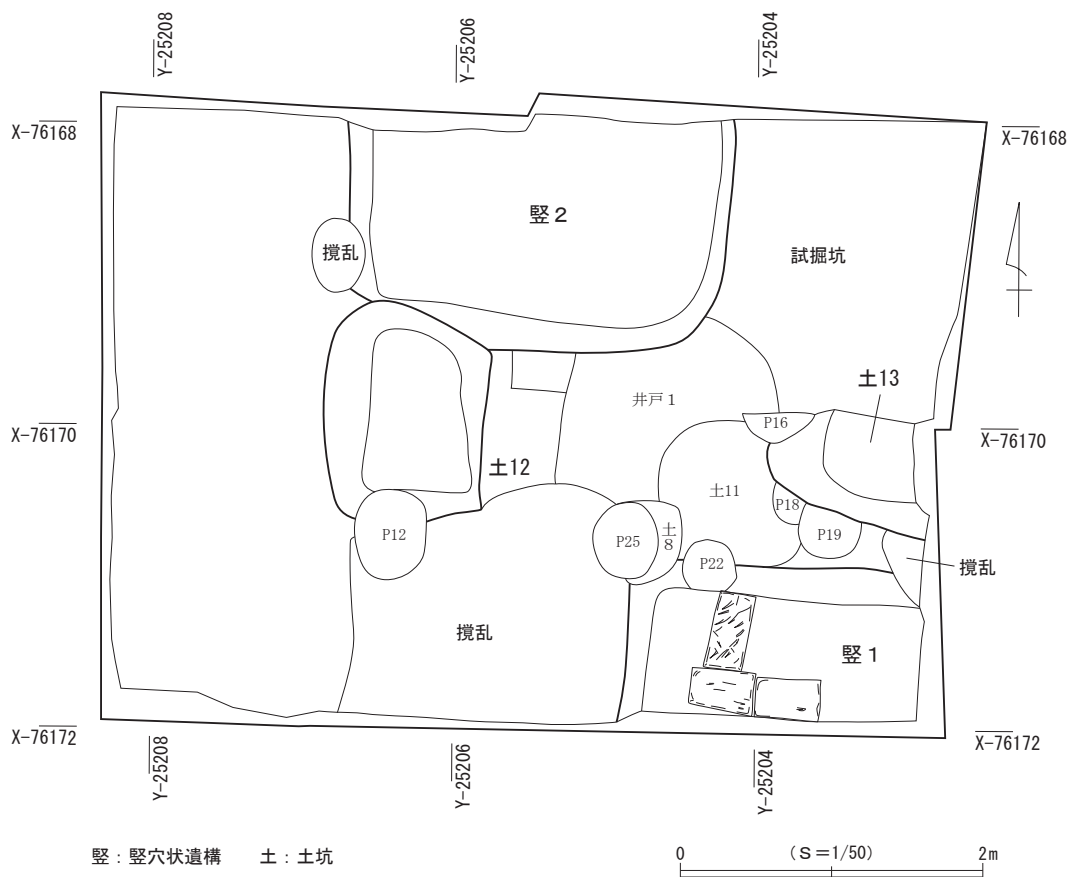


図22 第1 b面 遺構分布図

ることから、全容は明らかでない。

平面形は、北壁と西壁が直線的であることから、方形を呈するものと推定される。壁は北壁・西壁ともにやや開いて立ち上がる。規模は東西現存長1.94m、南北現存長1.05m、底面直上で発見された切石上面までの壁高は最大で10cmを測る。掘り方の深さは調査区南壁の土層断面をもとに計測すると最大36cmで、底面はおおよそ平坦だが東壁際が5cm程度低く、底面の標高は5.67～5.75mである。本址が地下式の構造であることに加えて、直上に表土が堆積しており上面が削平・整地されている可能性を考慮すれば、構築時の深さは大きく損なわれているものと考えられる。主軸方位は、北壁を基準にするとN-87°-Wを指す。覆土は4層に分けられ、泥岩粒・小泥岩ブロックなどを含む暗茶褐色弱砂質土、暗茶灰色弱砂質土、茶褐色弱砂質土が堆積している。

内部の構造として、掘り方の底面直上から凝灰質砂岩の切石が出土していることから、床面は切石を土台とした板張りの構造であったと考えられる。出土した切石は3点で、東西方向に長軸を揃えて2点が連なり、うち西側の切石の北辺中央に長軸方向を直交して1点の切石が連結し、3点でL字状を呈している。切石の大きさは、東西に連なる2点のうち北側が長さ43cm、幅27cm、厚さ19cm、南側が長さ43cm、幅28cm、厚さ22cm、南北方向に長軸をもつ1点が長さ50cm、幅26cm、厚さ20cmを測り、南北方向の1点がやや長いが規格性が認められる。切石の上面の標高は5.99mで揃う。出土状況からは切石が壁の全面に沿うタイプの構造である可能性は低いと考えられるが、現状では部分的な検出に留まるために詳細は明らかにできていない。

#### 出土遺物(図23)

遺物はかわらけ21点、磁器6点、陶器15点、土器2点、石製品1点、金属製品5点が出土し、このうち11点を図示した。

1は同安窯系青磁碗I類である。2は青白磁の壺である。3は瀬戸窯産の卸皿である。4～6は常滑窯産の製品で、4・5が片口鉢I類、6が片口鉢II類である。7・8は山茶碗窯系の片口鉢である。9・10は土器の火鉢である。11は銭貨で、元祐通寶(北宋・1086)である。

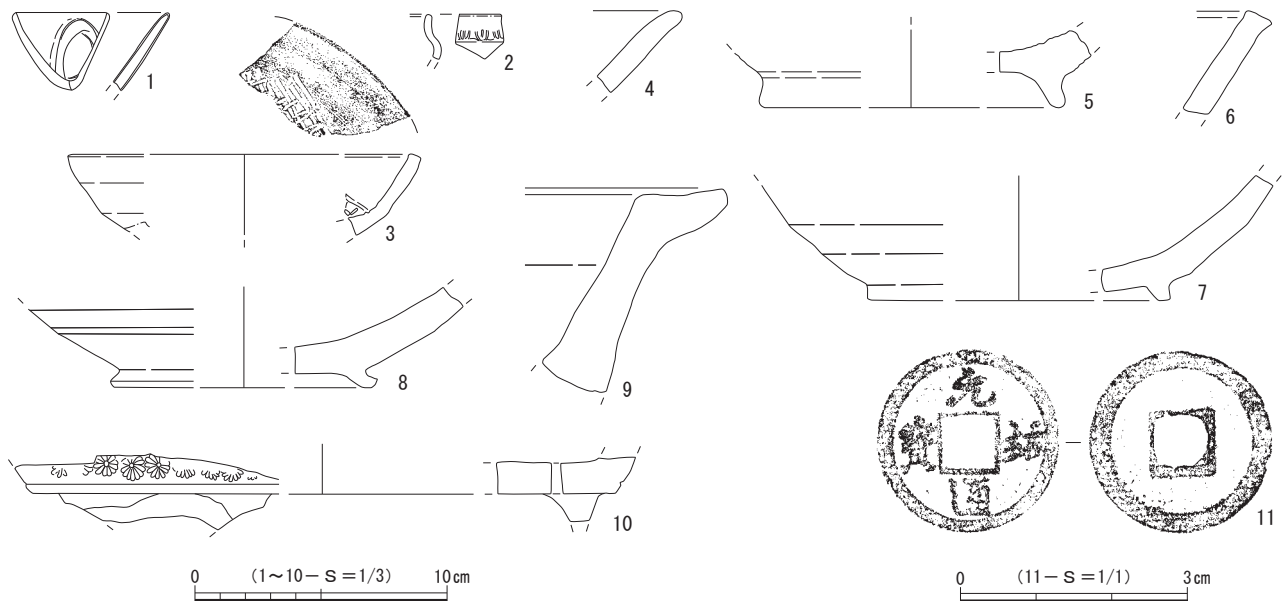


図23 第1b面 竪穴状遺構1出土遺物



## 竪穴状遺構 2 (図24)

調査区北壁中央に位置する。南東側に重複する井戸1より古く、南西側に重複する土坑12との新旧関係は不明である。南西壁の一部に攪乱を受け、東側の半分ほどの範囲は試掘坑により壁の上部が失われている。東・西・南壁の3辺が確認されたが、遺構の北側1/2ほどが調査区外に及んでいると考えられ、全容は明らかでない。

平面形は、確認できた3辺がいずれも直線的で隅は丸いことから、隅丸方形を呈するものと推定される。底面は直床式の可能性が考えられ、多少の凹凸があるもののほぼ平坦で、東西壁の付近はやや低くなる。壁は東壁がわずかな傾きで立ち上がり、南壁および西壁は緩やかな丸みを帯びて開きぎみに立ち上がる。規模は東西2.56m、南北現存長1.57m、壁高は調査区北壁の土層断面をもとに計測すると47cmで、底面の標高は5.64mを測る。本址の直上には表土が堆積しており、さらに本址が半地下式の構造であることを考慮すれば、竪穴状遺構1と同様に構築時の深さは大きく損なわれているものと考えられる。主軸方位は、東西壁の方位を考慮しつつ南壁を基準にするとN-87°-Wを指す。

覆土は13層に分けられ、上層は暗茶灰色弱砂質土および暗茶褐色弱砂質土、下層は暗茶褐色弱砂質土と茶灰色弱砂質土が堆積している。東壁際の12・13層は壁に沿ってほぼ垂直に堆積しており、西壁際の10・11層は傾斜するが同様である。本址からは壁の構成材とみられる板材などは出土していないが、これらの土層はその堆積状況からみて裏込めの痕跡である可能性が考えられる。

遺物はかわらけ17点、陶器1点、石製品1点が出土した。

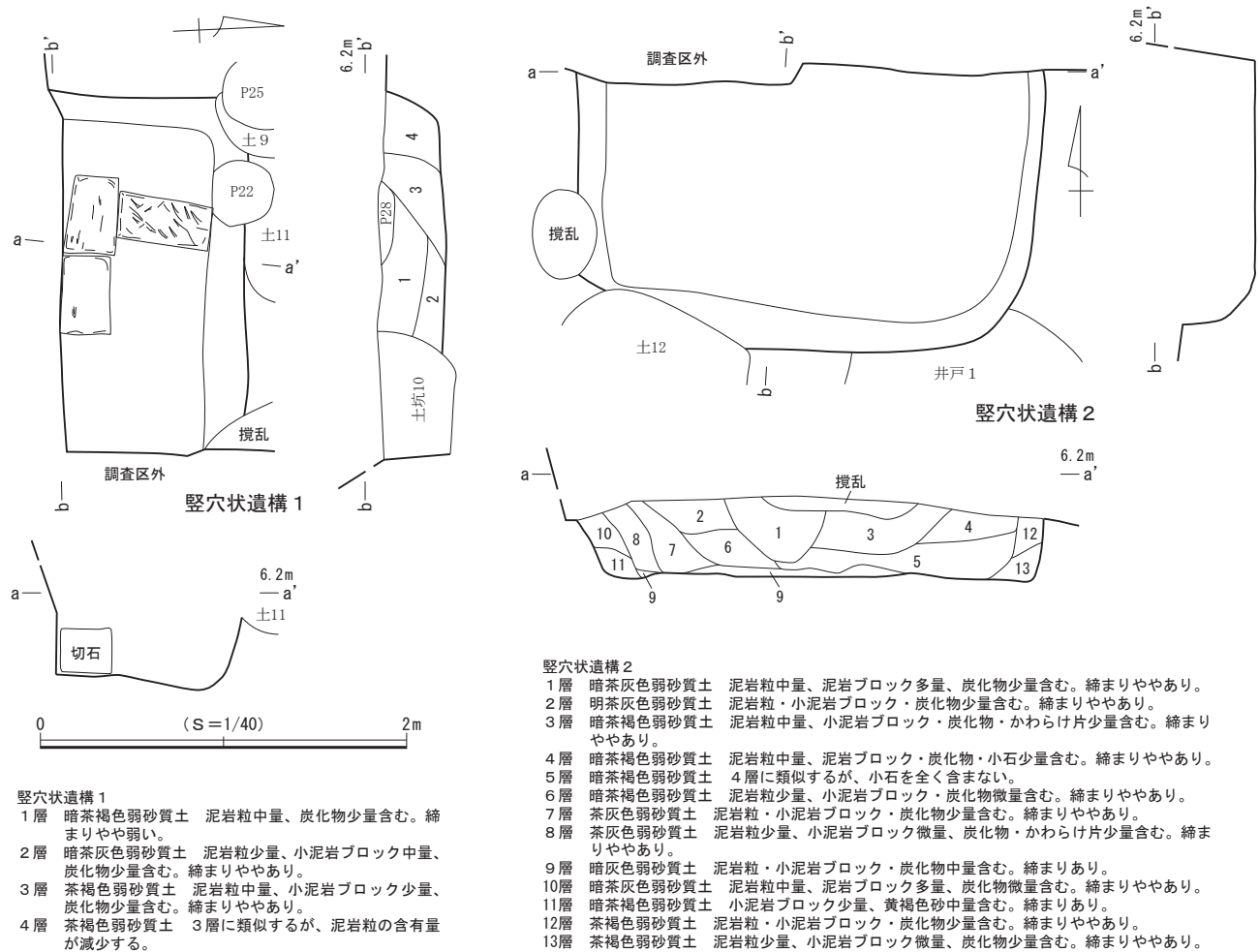


図24 第1b面 竪穴状遺構1・2

## (2) 土 坑

第1 b面では、2基を検出した。攪乱や試掘坑などの影響があるが、第1 a面と比較して遺構密度は低い。規模は現状で長軸1.45mと1.12m、深さ30cmと46cmである。調査区の制約により、全容が把握できたものは1基である。

### 土坑12 (図26)

調査区中央西側に位置する。竪穴状遺構2と重複しており、新旧関係は不明である。南側に第1 a面のピット12が重複しており壁の一部を壊されるが、おおよそ全容は把握できた。平面形は北側がやや丸みを帯びた隅丸長方形を呈する。壁は西壁が大きく開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は長軸現存長1.45m、短軸1.08m、深さ30cmで、坑底面の標高は5.78mを測る。主軸方位は南北を指す。覆土は泥岩粒・泥岩ブロックを中量、炭化物を少量含む暗茶褐色弱砂質土である。

#### 出土遺物 (図25)

遺物はかわらけ8点、陶器4点、石製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は砥石である。

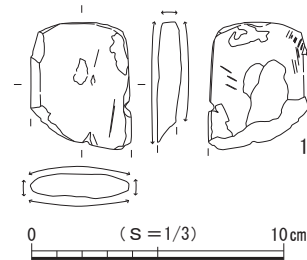


図25 第1 b面 土坑12出土遺物

### 土坑13 (図26)

調査区東壁中央に位置する。第1 a面の土坑11およびピット16・18・19が重複しており、壁の一部が壊されている。また、北側は試掘坑により失われ、東側は調査区外に及ぶことから、遺構の全容は明らかでない。

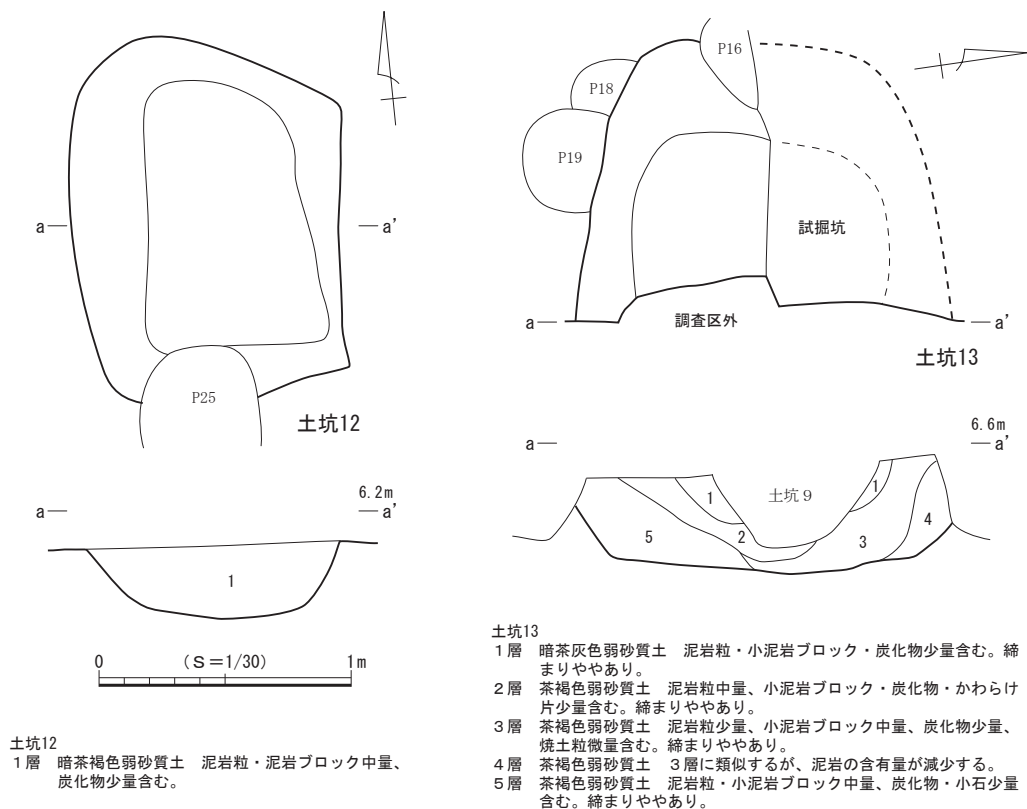


図26 第1 b面 土坑12・13

かでない。検出された範囲では、平面形は楕円形ないし隅丸方形を基調とするものと推定される。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は底面が緩やかな逆台形を呈する。規模は東西現存長1.12m、南北現存長76cmで、調査区東壁の土層断面をもとに計測すると南北1.50m、深さ46cmを有する。坑底面の標高は5.98mを測る。覆土は5層に分けられ、中央上層は泥岩粒・炭化物などを含む暗茶灰色弱砂質土、中～下層は泥岩粒などを含む茶褐色弱砂質土が堆積していた。

遺物はかわらけ11点、磁器2点、陶器2点が出土した。

### 第3節 第1c面の遺構と遺物

第1c面の遺構は、第1a・1b面と同様に暗灰色を呈する地山層の上面で検出され、確認面の標高は約6.0～6.1mを測る。今回の調査ではすべての遺構が表土直下の第1面で確認されたが、遺構間の重複関係により時期的に3段階に区分でき、そのうち最古の段階に属する遺構を第1c面の遺構とした。なお、調査区西側のⅡ区で検出した遺構はすべて第1a面に帰属する遺構とし、第1c面の遺構はないものとした。検出した遺構は、竪穴状遺構3基、ピット3基である(図27)。ほとんどの遺構は重複し、また調査区の制約により一部が調査区外に及ぶ遺構も多く、全容が把握できた遺構は少ない。なお、図上では煩雑になることを避けるため、第1a・1b面の遺構は可能な範囲で省略している。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

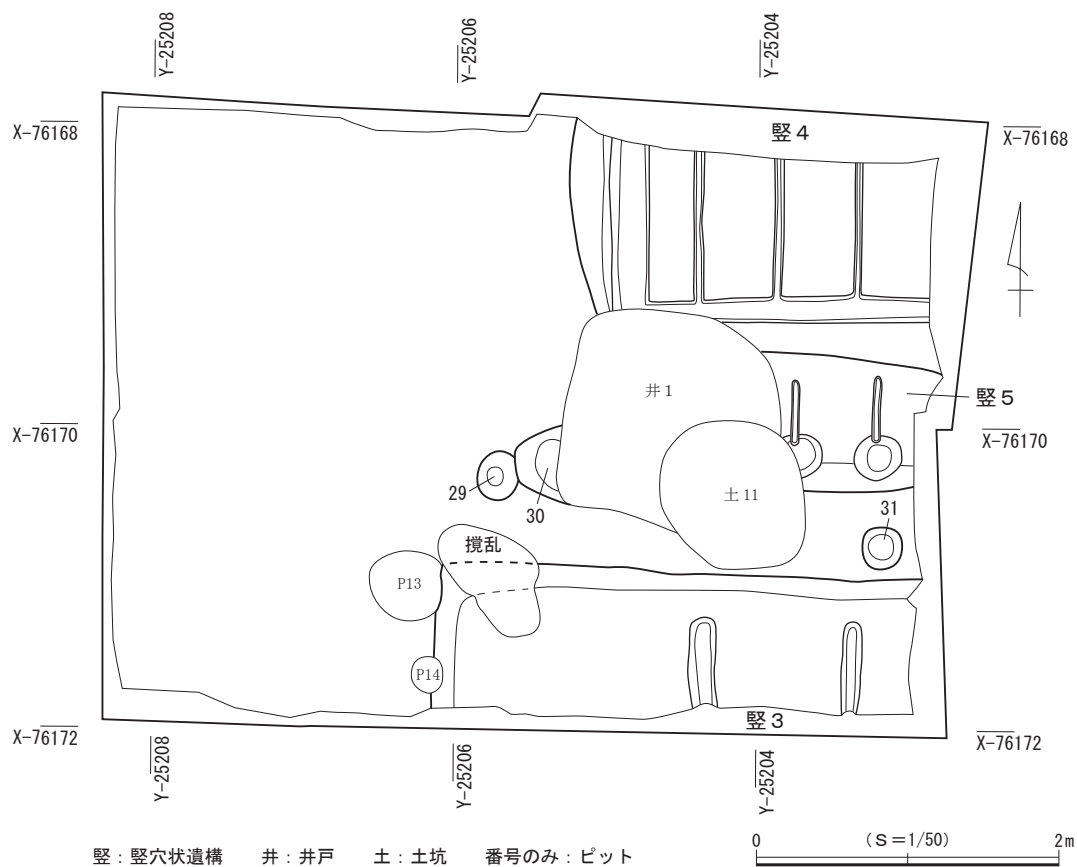


図27 第1c面 遺構分布図



### (1) 竪穴状遺構

第1 c 面では、3基を検出した。すべて調査区東側に分布し、いずれも調査区外に及ぶことから全容は把握できなかったが、遺構の遺存状態は良好で床面施設の痕跡などが発見された。

### 竪穴状遺構3 (図28)

調査区南東隅から中央南側にかけて位置する。壁の上部に第1 a 面のピット13・14が、本址の直上に第1 a 面の土坑10および第1 b 面の竪穴状遺構1が重複しており本址が古く、北西側の壁の一部は攪乱によって壊されている。また、調査区内で確認できた範囲は、北西隅と北壁から西壁にかけての一部である。遺構の東側から南側にかけて全体の大半が調査区外に及んでいるとみられ、全容は明らかでない。

平面形は、壁が直線的で隅はほぼ直角に曲がることから、方形ないし長方形を呈するものと推定される。壁はやや開きぎみに立ち上がる。規模は東西現存長3.16m、南北現存長1.00m、床面までの壁高は調査区南壁の土層断面をもとに計測すると最大70cm、標高は5.53~5.61mを測る。掘り方の深さは最大75cmで、底面の標高は5.38~5.49mである。主軸方位は、北壁を基準にするとN-89°-Wを指す。覆土は15層に分けられ、1~13層は暗茶褐色弱砂質土と暗灰色弱砂質土を主体とし、中層から下層にかけて炭化物が多く含まれる。

内部構造をみていくと、床面については底面直上で検出された茶灰色砂質土ないし黄褐色砂質土で構成された硬化面(10・11層)が該当すると考えられるが、有機質土を含まず、床板の痕跡は確認されなかった。この層には幅15cm前後、深さ3~4cmの浅い溝状の掘り込みが南北方向に平行して2条認められた。調査区南側の土層断面ではこの掘り込みが確認できないため、壁の直前で収束していた可能性が高い。調査の過程で、床面検出後に調査区南壁際を先行して細いトレンチ状に掘削した際に、この溝状の掘り込みの端部が失われたものと考えられる。掘り方の底面はおおむね平坦だが、調査区南壁際が浅く掘り窪められ緩やかに下がっている。壁については、西壁際の14・15層は掘り方底面から壁に沿って薄く堆積しており、木質などは発見されていないが、堆積状況から壁材あるいは裏込めの痕跡であると考えられる。

### 出土遺物 (図29)

遺物はかわらけ27点、磁器2点、陶器9点、瓦質土器1点、石製品2点、金属製品2点が出土し、このうち11点を図示した。

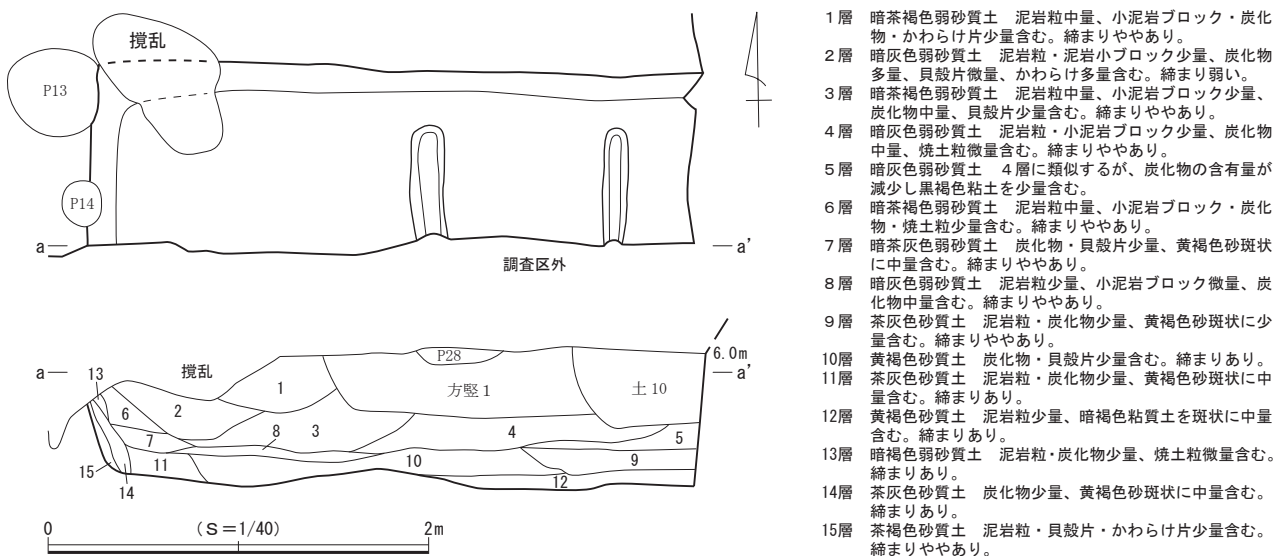


図28 第1 c 面 竪穴状遺構3

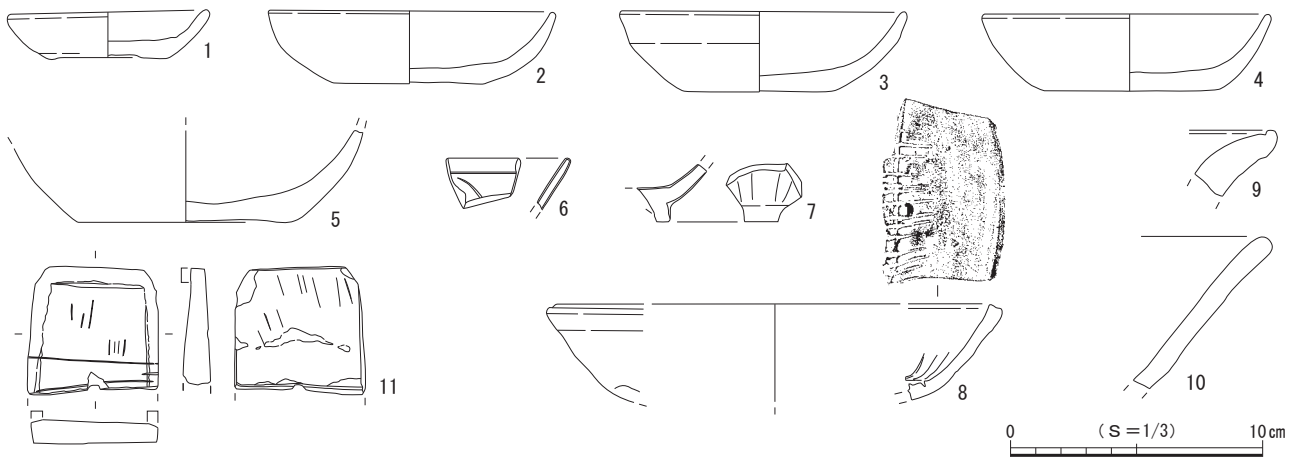


図29 第1c面 竪穴状遺構3出土遺物

1～5はロクロ成形によるかわらけである。6は同安窯系青磁椀Ⅰ類、7は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。8は瀬戸窯産の卸皿である。9は渥美窯産の甕である。10は常滑窯産の片口鉢Ⅰ類である。11は硯である。

#### 竪穴状遺構4 (図30)

調査区北東隅に位置する。南西隅が第1a面の井戸1と重複しており、本址が古く壁の一部を壊されている。また、本址と西壁を揃え、南側に約90cmずれて相似形に重複している竪穴状遺構5より新しい。遺構全体のうち北側から東側にかけては調査区外に及んでおり、検出されたのは南西隅と西壁から南壁の一部に留まる。全容は明らかでないが、掘り込みが深いため他の遺構から受ける影響が少なく、遺存状態は良好である。

平面形についてみると、西壁は丸みを帯びてやや膨らみ、南壁は東側へ向かって開きぎみに歪んでいるが、壁の下端は直線的で直角に接することから、整った方形ないし長方形を呈するものと推定される。壁は西壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁はやや開いている。規模は東西現存長2.44m、南北現存長1.48m、床面までの壁高は最大で1.20m、床面の標高は4.77m前後である。掘り方の深さは最大で1.25m、底面の標高は4.73mである。主軸方位は、南壁を基準にすると東西を指す。覆土は35層に分けられ、1～28層は大小の泥岩ブロックを多く含む砂質土で、人為的な埋土と考えられる。

床面構造について述べると、竪穴の最下層に有機質の腐植土(29層)が堆積しており、その直上に薄い炭層の広がりが見られた。これらは床板や敷物などの痕跡と考えられ、この層の直下から腐食した根太木および根太の痕跡とみられる帯状の腐植土が発見された。根太の痕跡は14～25cm幅で壁際をめぐり、5～7cm幅の細い木材が南北方向に渡されていた。根太木の下に礎石や礎板はなく、直下の竪穴状遺構5の床面に接して置かれたものと考えられる。木材の継ぎ方などの詳細は腐食が進んでいるため明らかでないものの、礎石や礎板を用いず、地面(掘り方底面)に直接根太木を置いて床板を支える構造が想定される。

壁の構造については、西壁付近では壁に沿って堆積する35層が裏込めであると考えられ、根太痕跡の上に堆積する32～34層は腐植土あるいは炭化物を含み、さらに35層に沿う堆積状況であることから、壁材の痕跡を示している可能性がある。南壁については、根太痕跡の上に垂直方向に堆積する31層が壁の痕跡であると考えられ、裏込めはないものと捉えられる。

本址の特徴を踏まえて、直下に位置する竪穴状遺構5との関係を考えてみたい。両者は主軸方向が揃い、西壁を共有していると推測される位置関係にある。また、本址底面で確認された根太の直下は竪穴

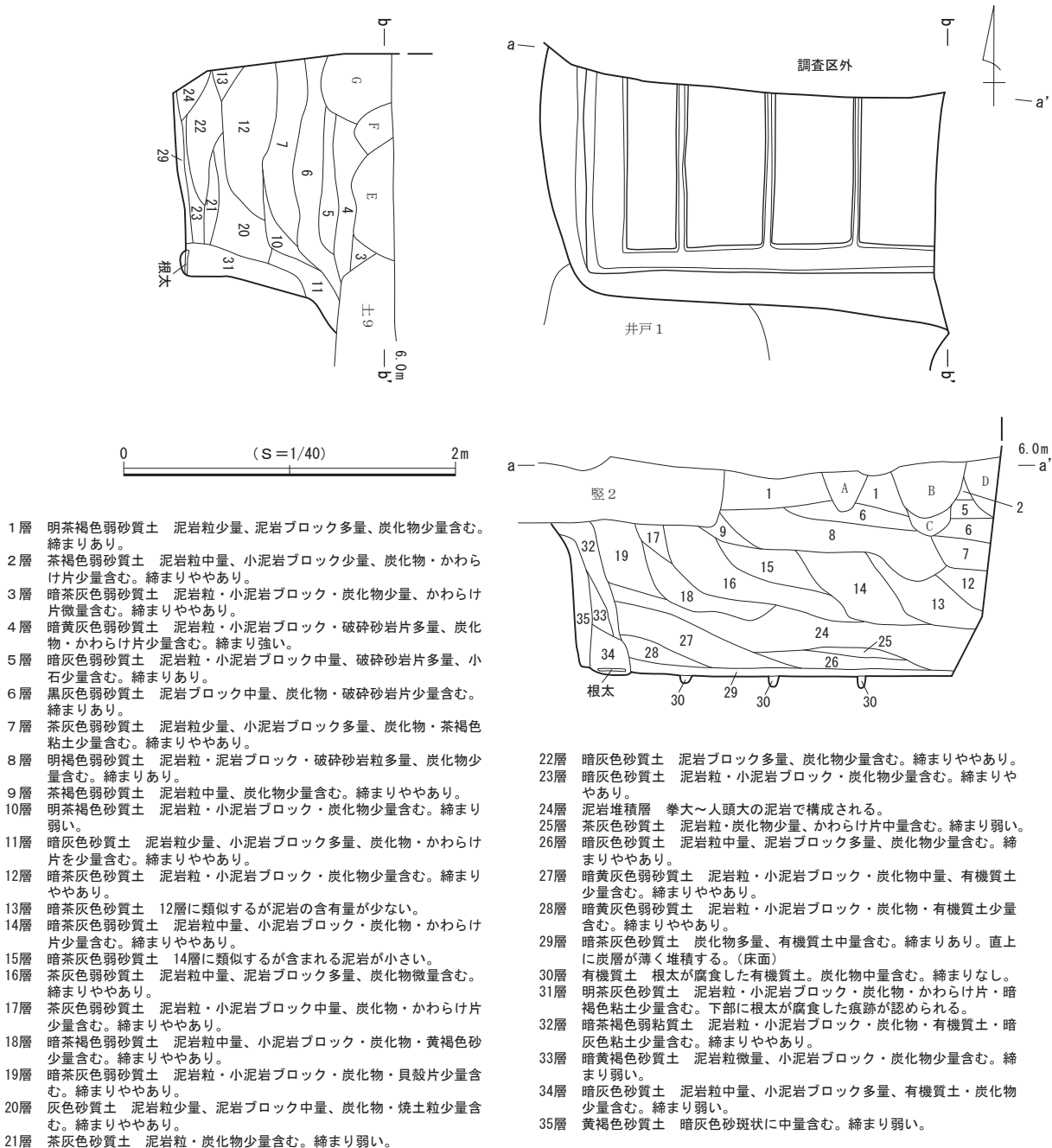


図30 第1c面 竪穴状遺構4

状遺構5の床面であり、竪穴状遺構5の埋没後に掘り直して設置したとは考えにくい。そのため本址の構築時の状況として、まず竪穴状遺構5を廃絶してその掘り込みを利用し、南壁を北側に移動させ規模を変更して建て替えられた可能性が推測される。本址南壁に裏込めが認められないのは、竪穴状遺構5の廃絶と本址の構築がほぼ同時期であったことを示すものと考えられよう。

#### 出土遺物(図31)

遺物はかわらけ48点、磁器7点、陶器16点、土器3点、金属製品7点が出土し、このうち13点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2は手づくね成形によるかわらけである。3は青白磁の合子蓋である。4・5は同安窯系青磁で、4が皿I-a類、5が皿I類である。6～9は龍泉窯系青磁で、6・9が椀I類、7が椀I-b類、8が椀I-4類である。10～12は常滑窯産の製品で、10が片口鉢II類、11・

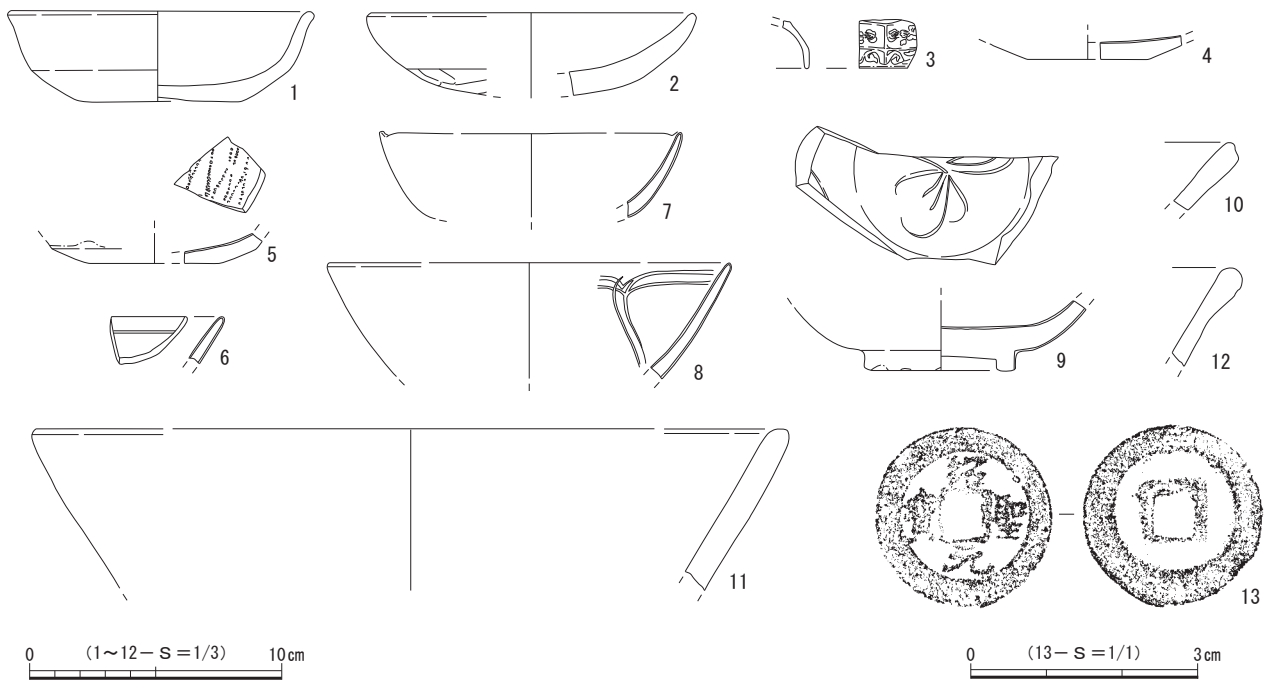


図31 第1c面 竪穴状遺構4出土遺物

12が片口鉢I類である。13は銭貨で、紹聖元寶(北宋・1094)である。

### 竪穴状遺構5(図32)

調査区北東隅に位置する。第1a面の井戸1が重複しており本址が古く、南西隅を壊される。また、直上に重複する竪穴状遺構4は、本址廃絶後の掘り込みを利用して建てられた可能性がある。検出されたのは南西隅および西壁と南壁の一部で、遺構の北側から東側にかけては調査区外に及んでいる。全容は明らかでないが、掘り込みが深いため、遺存状態は比較的良好である。

平面形は、西壁と南壁がほぼ直角に接するため、方形ないし長方形を呈するものと推定される。壁は

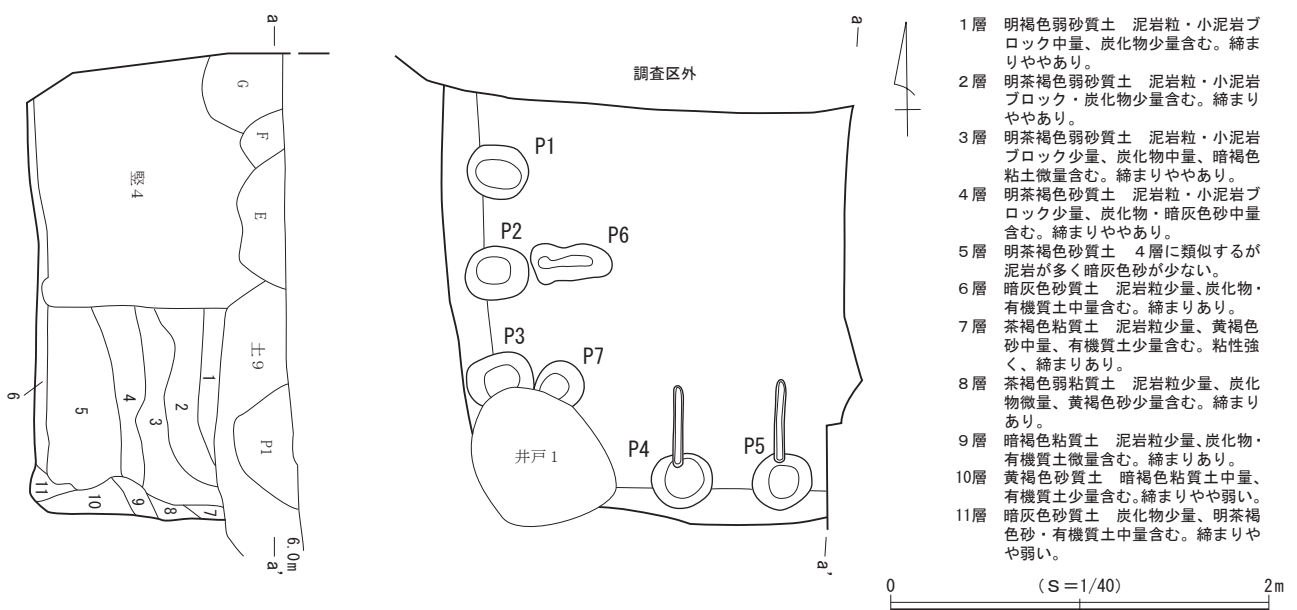


図32 第1c面 竪穴状遺構5



ほぼ垂直に立ち上がる。規模は東西現存長2.15m、南北現存長2.46m、床面までの壁高は最大で1.27m、床面の標高は4.80m前後である。掘り方の深さは最大で1.33m、底面の標高は4.69～4.73mを測る。主軸方位は南壁を基準にすると、N-89°-Wを指す。覆土は11層に分けられ、下層に明茶褐色砂質土、上層に明茶褐色弱砂質土ないし明褐色弱砂質土が堆積していた。

内部構造については、最下層に有機質土を含み締まりのある暗灰色砂質土（6層）が薄く均一に堆積しており、板張りの床の痕跡と考えられる。この層に掘り込まれた施設として、南壁に直交し、同一規模をもつ小溝状の掘り込みが平行して2条認められた。規模は長さが43cmと45cm、幅5cm、深さ3cmである。掘り方の底面には、ピット状の掘り込みが7基認められた（P1～P7）。このうちP1～P5は壁際をめぐることから、壁あるいは上屋を支えるための壁柱穴と推定される。P6・P7については、壁柱穴に隣接していることから、壁柱穴に関連した補助あるいは補修などの用途が考えられる。床面上で検出された2条の小溝との位置関係に注目すると、小溝がP4・P5にわずかに入り込んでおり、関連性がうかがわれる。板材を柱に接合して支えた棚状施設など、何らかの施設を柱に作り付けた痕跡と推測される。壁の構造については、南壁付近で認められた壁に沿って垂直な堆積（7～11層）が、裏込めの痕跡であると考えられる。

#### 出土遺物 (図33)

遺物はかわらけ37点、磁器3点、陶器8点、石製品1点、骨製品1点、金属製品2点が出土し、このうち5点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は同安窯系青磁碗Ⅰ類で、3は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。4は骨製の筭である。5は銭貨で、熙寧元寶（北宋・1068）である。

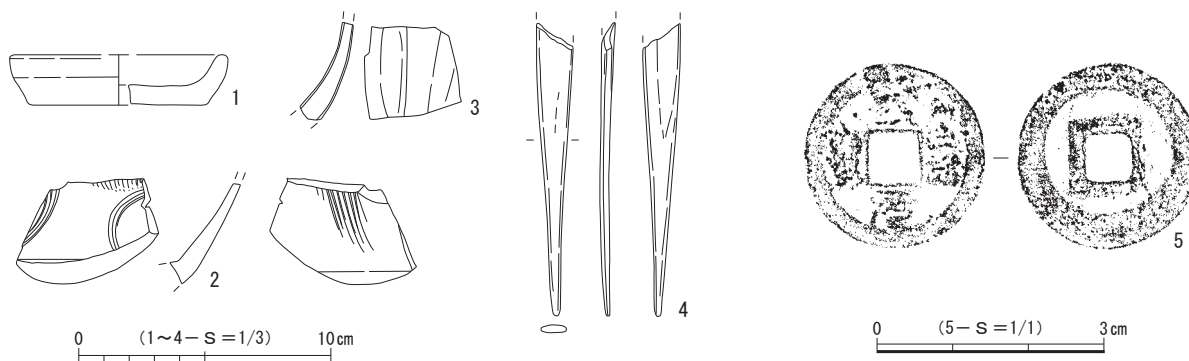


図33 第1c面 竪穴状遺構5出土遺物

#### (2) ピット (図27)

第1c面では、3基を検出した。調査区中央に2基、東側に1基が分布する。平面形は略円形を呈し、規模は現状で径32～50cm、深さ11～31cmを測る。礎石や礎板を伴うピットは確認されなかった。覆土は泥岩粒・炭化物・粘土ブロックを含む暗褐色弱砂質土である。

各ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表（表7）を参照されたい。



(3) 遺構外出土遺物 (図34)

第1 a ~ 1 c 面では遺構以外からも多くの遺物が出土している。ここではまとめて第1面の遺構外出土遺物として22点を図示した。

1~4はロクロ成形によるかわらけで、5~7は手づくね成形によるかわらけである。3・6には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。8は白磁壺である。9は青白磁花瓶である。10~12は同安窯系青磁で、10が椀I類、11・12が皿I類である。13~16は龍泉窯系青磁で、13が椀I類、14が小碗I-b類、15・16が折縁鉢である。17~20は瀬戸窯、瀬戸・美濃窯(大窯期以降)の製品で、17が天目茶碗、18が縁釉小皿、19が折縁小皿、20が志野皿である。21・22は常滑窯産の製品で、21が片口鉢I類、22が片口鉢II類である。

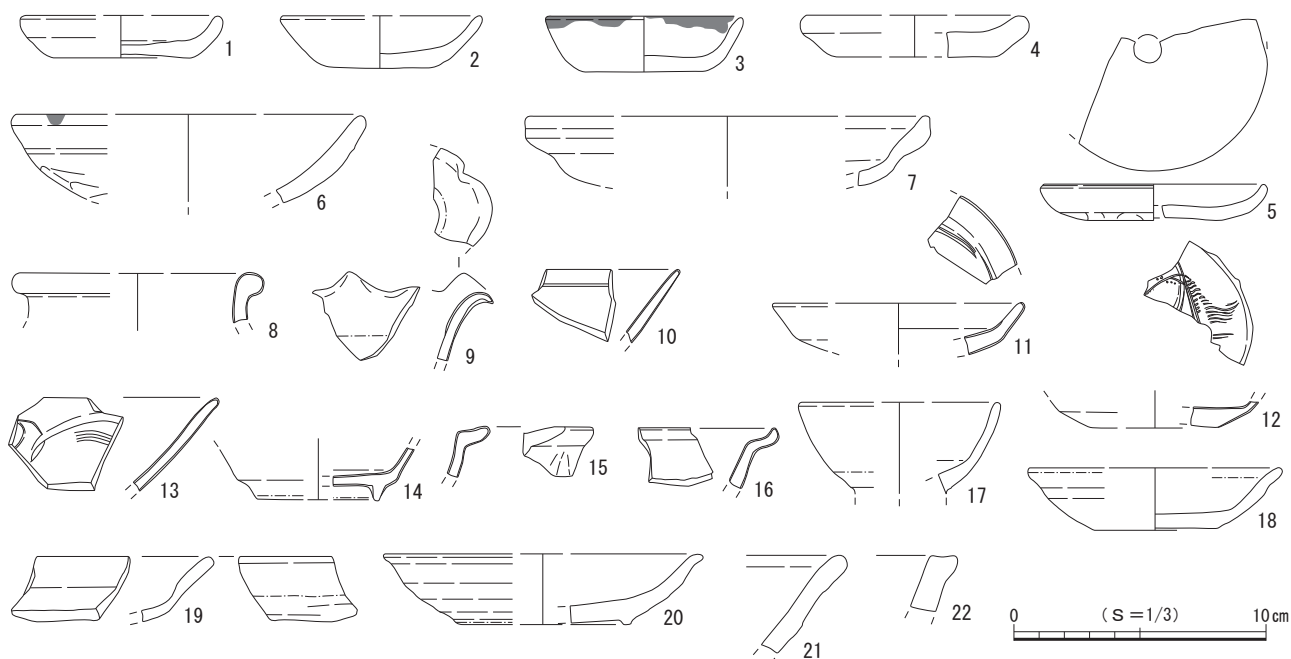


図34 第1面 遺構外出土遺物

# 第四章 若宮大路周辺遺跡群出土の動物遺体

東京国立博物館客員研究員  
金子 浩昌

付表1 検出された動物遺体の種名表

<b>軟体動物門</b> 腹足綱 ..... 新腹足目 アッキガイ科 アカニシ <b>脊椎動物門</b> 哺乳綱 クジラ目 マイルカ科 イルカ類	ネコ目 イヌ科 イヌ ウマ目 ウマ科 ウマ ウシ目 シカ科 ニホンジカ
--	---

## 貝類

アカニシは鎌倉で最も普通にみられる貝種であるが、ここでも殻柱の下端の基部があった。おそらく殻高10cmになったと思われる。中大型であろう。

## 獣類

イルカ類の頭蓋骨片、下顎骨片、頸椎骨と解体された各部位が出土している。運び込まれたイルカを解体したのであろう。断片的な骨の中にも異なった部位が含まれているので、一頭体があったと思われる。イルカが盛んに食べられたことがここでも分かる。

イヌは軸椎1点があったのみである。小型でおそらく日本の在来犬の系統を引くイヌであったと思われる。

ニホンジカは若い個体であるが、おそらく雄と思われる個体の上腕骨片である。骨体の略中央で輪切りにするように切断されている。横位の切痕をみる。

ウマは臼歯1点のみがあった。歯冠高61.7mmで5才と推定される。

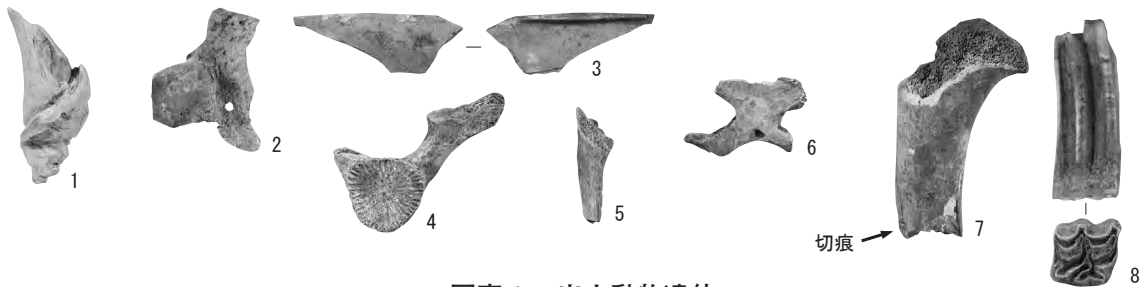


写真1 出土動物遺体

付表2 出土動物遺体一覧

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
井戸1	第1 a 面	アカニシ				1	
井戸1	第1 a 面	イルカ類	後頭骨片	右		2	
井戸1	第1 a 面	イルカ類	下顎骨枝部片			3	
井戸1	第1 a 面	イルカ類	頸椎		椎体径：34.28	4	小形
井戸1	第1 a 面	イルカ類	肋骨片			5	
井戸1	第1 a 面	イヌ	軸椎			6	小型犬
井戸1	第1 a 面	ニホンジカ	上腕骨	右		7	近位骨端外れ、切断痕が付く。
竪穴状遺構4	第1 c 面	ウマ	上顎歯 P <sup>1</sup>	右	歯冠高：61.7	8	5才と推定

## 第五章 まとめ

今回報告する大町一丁目1084番4地点は、若宮大路周辺遺跡群の南東側に所在する。小町大路と大町大路の交差点にほど近い滑川の左岸にあたり、若宮大路から東へ約210m、小町大路から西へ約30m、大町大路から北へ約160mの位置である。若宮大路周辺遺跡群は面積が広く、また商業地を含むため調査事例が多いが、その多くは若宮大路あるいは小町大路沿いであり、滑川左岸に限定すると本地点を除くと2例と調査事例は少ない(図3⑦・⑧)。このうち大町一丁目1034番9地点では、竪穴状遺構あるいは竪穴建物が複数検出されており、本地点と類似した様相を示すといえる。

今回の調査では、調査地点周辺が削平を受けている可能性が高く、表土直下ですべての遺構を確認した。そのため遺構確認面としては1面であるが、遺構を検出した際に確認した新旧関係に基づいて各遺構を3段階に区分し、新しい段階の遺構から順に第1 a面・第1 b面・第1 c面に分離した。検出した遺構は、竪穴状遺構5基、井戸1基、土坑13基、ピット31基である。遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して6箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

### 〈第1 a面〉

第1 a面の遺構は暗灰色を呈する地山層の上面で検出され、確認面の標高は約6.0～6.1mを測る。今回の調査において、第1面で確認された遺構を重複関係から3段階に区分し、最新段階に属する遺構を第1 a面の遺構とした。調査区西側のⅡ区の遺構については、重複関係が少ないことからすべて第1 a面の遺構とした。検出した遺構は、井戸1基、土坑11基、ピット28基である。試掘坑や攪乱で失われた部分以外はほぼ全面に遺構が分布しており、遺構の密度は高い。第1 b・1 c面で構築されていた竪穴状遺構は本面ではみられず、土坑とピットが主体となる。また、井戸1と土坑11については、他の第1 a面の遺構と比較して出土遺物が相対的に新しく、特に井戸1が第1 b・1 c面で構築された竪穴状遺構を壊して掘り込まれている点を考慮すると、土地利用のあり方に変化があった可能性が考えられる。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から大半の遺構は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられるが、井戸1と土坑11および、それらより新しい土坑6～8・11、ピット15～19・21～24については15世紀前葉の埋没年代が想定される。

### 〈第1 b面〉

第1 b面の遺構は、第1 a面と同様に暗灰色を呈する地山層の上面で検出され、確認面の標高は約6.0～6.1mを測る。今回の調査において、第1面で確認された遺構を重複関係から3段階に区分し、第2段階に属する遺構を第1 b面の遺構とした。検出した遺構は、竪穴状遺構2基、土坑2基である。第1 a面の遺構の影響や調査区の制約により、全容が把握できた遺構は土坑1基である。2基検出された竪穴状遺構には構造上の相違が認められたため、後に簡単にふれたい。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

### 〈第1 c面〉

第1 c面の遺構は、第1 a・1 b面と同様に暗灰色を呈する地山層の上面で検出され、確認面の標高

は約6.0～6.1mを測る。今回の調査において、第1面で確認された遺構を重複関係から3段階に区分し、最古段階に属する遺構を第1c面の遺構とした。検出した遺構は、竪穴状遺構3基、ピット3基である。ほとんどの遺構は重複し、また調査区の制約により一部が調査区外に及ぶ遺構も多く、全容が把握できた遺構は少ない。本面の主な遺構は竪穴状遺構3基で、これらについてもそれぞれに特徴が異なるため、第1b面で検出された遺構とあわせて後述する。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

次に各遺構に目を向けると、本地点の主な遺構としては竪穴状遺構が挙げられる。第1b面で2基、第1c面で3基の合計5基を検出した。調査区の制約から全容が把握できた遺構はないものの、底面施設の構造について異なる特徴が認められた。ここでは、これらの竪穴状遺構について、それぞれの構造に着目してふれてみたい。

第1b面で検出された2基のうち、南東側に位置する竪穴状遺構1で凝灰質砂岩の切石が認められた。一方、北側に位置する竪穴状遺構2では、直床構造の可能性が推測されるものの、明瞭な床面施設の痕跡は確認されなかった。この2基は重複関係をもたず、先後関係を決定し得る出土遺物もないことから時期差の有無は明らかでないが、本地点における竪穴状遺構の最新段階に相当するものである。

第1c面では、南東側で竪穴状遺構3、北東側で竪穴状遺構4・5が検出された。竪穴状遺構3は第1b面の竪穴状遺構1の直下に位置し、硬化面を伴うものの床板の痕跡は確認されなかった。竪穴状遺構4・5は第1b面の竪穴状遺構2の直下に位置し、また両者は重複しているため、竪穴状遺構5(古)→竪穴状遺構5(新)という先後関係が明らかとなった。さらに踏み込むと、竪穴状遺構4・5は底面と西壁を共有している状況から、規模の変更を伴う建て替えであった可能性が推測され、長期間にわたる時期差はないものと思われる。

床面の構造を示すものとして、竪穴状遺構4では「目」字状に配されたと思われる根太木とその痕跡が検出された。竪穴状遺構5では底面直上に有機質土を含む土層の堆積が認められ、床板の痕跡を示すものと考えられる。また、竪穴状遺構5で構築されていた壁柱穴は竪穴状遺構4には認められず、建て替えに伴い工法・構造に変化があったものと捉えられる。検出面からの掘り方の深度を比較すると、竪穴状遺構3は75cm、竪穴状遺構4・5は約1.3mを測り、55cmほどの比高差が認められる。床面構造などの相違を考慮すると、竪穴状遺構3と竪穴状遺構4・5の相違は機能差を示している可能性がある。

以上、簡単ではあるが本地点で検出された竪穴状遺構についてまとめた。本地点の南方には、中世当時の商業地であったといわれる大町大路、米町が所在する。竪穴状遺構は町屋的な性格をもつ地域に多くみられる遺構であり、本地点周辺での調査成果も相反しないものであった。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 大河内 隆 1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 小町一丁目1028番1地点』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 押木弘己 2016「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町一丁目1034番9地点」『平成27年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書32 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄 1992「若宮大路周辺遺跡群(本覚寺ビル)の調査」『鎌倉考古』No.22 鎌倉考古学研究所
- 佐藤仁彦・小林重子 1994「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町一丁目325番イ外地点」『平成5年度発掘調査報告(第3分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 鎌倉市教育委員会
- 宮田 眞・滝澤晶子ほか 2006『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 鎌倉市小町一丁目276番18・22・38地点』株式会社 博通
- 松尾宣方 1983「36. 本覚寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 昭和46年度～52年度』鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980



表2 第1 a面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
井戸1出土遺物(図9)							
1	陶器	瀬戸碗	(17.0)	-	現3.4	胎土: 微砂 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰緑色	口縁部小破片
2	陶器	瀬戸壺	-	(6.0)	現2.2	底部-糸切痕 胎土: 微砂、軟質 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰緑色	底部小破片
3	陶器	瀬戸壺	-	最大径6.3	現3.3	胎土: 微砂、軟質 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰緑色	1/3
4	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現6.8	胎土: 粗、白色粒 色調: 胎土-灰色、自然釉-暗褐色 備考: 9型式	口縁部小破片
5	陶器	備前播鉢	-	-	現6.0	内面-播目、条線5本一単位 胎土: 白色粒、小石粒、硬質 色調: 灰黑色	胴部小破片
6	銅製品	銭貨	直径2.5	孔径0.6	厚0.1	銭名-紹聖元寶(北宋・1094)	完形
7	銅製品	銭貨	直径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭名-聖宋元寶(北宋・1101)	完形
土坑1出土遺物(図10)							
1	陶器	常滑甕	-	(14.8)	現7.6	内面摩耗 胎土: 粗、白色粒 色調: 胎土-灰黄色、自然釉-茶褐色	底部小破片
土坑2出土遺物(図11)							
1	磁器	青磁碗	-	-	現3.2	色調: 胎土-灰色、釉-淡緑色 備考: 同安窯系青磁碗Ⅰ類	口縁部小破片
土坑3出土遺物(図12)							
1	土器	手づくねかわらけ・小	(9.0)	-	2.4	内外面が黒色化 底面-指頭ナデ消し 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、やや良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/6
土坑5出土遺物(図13)							
1	土器	火鉢	-	-	現3.2	口唇部-内面側に凸帯状に張り出す 断面-釘頭状 胎土: 微砂、白色粒 色調: 暗黄橙色 焼成: 良好	口縁部小破片
土坑7出土遺物(図15)							
1	土器	ロクロかわらけ・中	(12.0)	(7.5)	(3.1)	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/7
2	土器	ロクロかわらけ・中	12.0	7.7	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	3/4
3	陶器	備前播鉢	-	-	現6.7	内面-播目条線5本一単位 胎土: 微砂、白色粒、小石粒、硬質 色調: 灰黑色	胴部小破片
4	石製品	砥石	現長5.2	幅3.5	厚1.5	仕上砥、側面切出し痕、砥面は1面のみ遺存 備考: 鳴滝産	1/2
土坑8出土遺物(図16)							
1	陶器	瀬戸壺	-	3.0	現5.1	底面-糸切痕 色調: 胎土-灰白色、釉-淡灰黄色	底部破片1/2
土坑9出土遺物(図17)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	(6.3)	3.4	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/4
2	陶器	瀬戸折縁皿	-	(14.0)	現1.0	胎土: 微砂、石英 色調: 胎土-灰黄色、釉-淡灰緑色	底部小破片
土坑10出土遺物(図18)							
1	土器	ロクロかわらけ・中	(10.8)	(5.7)	(2.6)	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/5
2	陶器	常滑甕	-	-	現4.8	胎土: 微砂 色調: 胎土-灰褐色、自然釉-暗褐色 備考: 6 a型式	口縁部小破片
土坑11出土遺物(図20)							
1	磁器	青磁皿	-	-	現1.7	裏面-無文 色調: 胎土-灰白色、釉-緑青色 備考: 龍泉窯系青磁皿Ⅰ類	口縁部小破片
2	陶器	瀬戸瓶子	-	-	現4.3	外面-点描と線刻による円文 色調: 胎土-灰色、釉-濃灰緑色	胴部小破片
3	陶器	常滑甕	-	(15.9)	現6.1	胎土: 白色粒、小石粒、粗土 色調: 胎土-灰褐色、自然釉-茶褐色	底部小破片
ピット出土遺物(図21)							
1	磁器	青磁皿	-	-	現1.8	内外面-無文 色調: 胎土-灰色、釉-淡緑色 備考: 同安窯系青磁皿Ⅰ類 出土遺構: ピット1	口縁部小破片
2	磁器	青磁碗	-	-	現3.7	内外面-無文 色調: 胎土-灰色、釉-淡緑色 備考: 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類 出土遺構: ピット11	口縁部小破片
3	土器	ロクロかわらけ・小	7.2	4.2	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好 出土遺構: ピット18	1/2
4	石製品	砥石	現長5.3	幅3.7	厚1.0	仕上砥、側面切出し痕、砥面は2面、片面V字状の切痕が遺存 備考: 鳴滝産 出土遺構: ピット18	1/2
5	磁器	青白磁碗	-	-	現3.2	口唇部-露胎 外面-突帯がめぐる 内面-雷文、蓮華文型押し 色調: 胎土-灰白色、釉-淡青色 出土遺構: ピット19	口縁部小破片
6	磁器	青磁盤?	-	(10.0)	現1.8	二次焼成 内外面-無文 豊付-無釉 色調: 胎土-灰色、釉-淡青色 備考: 龍泉窯系青磁 出土遺構: ピット27	底部小破片

表3 第1b面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
堅穴状遺構1 出土遺物(図23)							
1	磁器	青磁碗	-	-	現3.1	内面-劃花文 色調:胎土-灰色、釉-淡緑色 備考:同安窯系青磁碗I類	口縁部小破片
2	磁器	青白磁壺	-	-	現1.8	口唇部-無釉 外面-蓮弁文 色調:胎土-灰色、釉-淡青色	口縁部小破片
3	陶器	瀬戸卸皿	(14.0)	-	現3.2	胎土:微砂 色調:胎土-灰白色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸前期様式IV期	口縁部小破片
4	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現3.3	胎土:粗、白色粒 色調:胎土-灰色、自然釉-灰褐色 備考:6a型式	口縁部小破片
5	陶器	常滑片口鉢I類	-	(11.8)	現3.2	内底の器壁剝離 胎土:粗、白色粒 色調:胎土-灰色、自然釉-灰褐色	底部小破片
6	陶器	常滑片口鉢II類	-	-	現4.0	胎土:粗、白色粒 色調:胎土-暗褐色、自然釉-暗赤褐色 備考:8型式	口縁部小破片
7	陶器	山茶碗窯系片口鉢	-	(11.9)	現4.6	内面摩耗 胎土:きめ細かい 色調:暗褐色	底部小破片
8	陶器	山茶碗窯系片口鉢	-	(10.0)	現3.3	内面摩耗 胎土:きめ細かい 色調:暗褐色	底部小破片
9	土器	火鉢	-	-	現8.0	口唇部二次焼成 胎土:緻密 色調:橙色~黒灰色 焼成:良好	口縁部小破片
10	土器	火鉢	-	(23.0)	現3.0	脚1カ所残存 胎土:緻密 色調:黄橙色~黒灰色 焼成:良好	底部小破片
11	銅製品	銭貨	直径2.3	孔径0.7	厚0.1	銭名-元祐通寶(北宋・1086)	完形

土坑12出土遺物(図25)

1	石製品	砥石	現長5.0	幅4.0	厚1.0	5面に使用痕跡 石材-凝灰岩	1/2
---	-----	----	-------	------	------	----------------	-----

表4 第1c面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
堅穴状遺構3 出土遺物(図29)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.9)	(4.9)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
2	土器	ロクロかわらけ・中	11.3	6.0	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、泥岩粒、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
3	土器	ロクロかわらけ・中	11.3	6.0	3.2	口唇部3カ所打ち欠き 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
4	土器	ロクロかわらけ・中	11.4	7.0	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
5	土器	ロクロかわらけ・中	-	(8.5)	現3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	3/5
6	磁器	青磁碗	-	-	現2.2	内面-劃花文 色調:胎土-灰色、釉-灰緑色 備考:同安窯系青磁碗I類	口縁部小破片
7	磁器	青磁碗	-	-	現2.3	外面-鎚蓮弁文 暈付-無釉 色調:胎土-灰色、釉-灰緑色 備考:龍泉窯系青磁碗II類	底部小破片
8	陶器	瀬戸卸皿	(17.3)	-	現3.8	胎土:微砂 色調:胎土-淡灰黄色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸前期様式IV期	1/6
9	陶器	渥美甕	-	-	現2.6	口唇部摩耗 胎土:微砂 色調:胎土-灰色、自然釉-灰褐色 備考:2b型式	口縁部小破片
10	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現6.0	内面摩耗 胎土:粗、白色粒 色調:胎土-灰色 備考:5型式	口縁部小破片
11	石製品	硯	現長5.1	幅5.2	厚1.1	未製品? 側面切出し痕 海部	1/2

堅穴状遺構4 出土遺物(図31)

1	土器	ロクロかわらけ・中	(12.0)	6.5	3.6	底面-回転糸切 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、やや良土 色調:灰黄色 焼成:良好	2/3
2	土器	手づくねかわらけ・中	(12.8)	-	3.3	底面-指頭痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、泥岩粒、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/6
3	磁器	青白磁合子蓋	-	-	現1.9	外面-印花文 内面-無釉 色調:胎土-灰白色、釉-薄青色	1/5
4	磁器	青磁皿	-	(4.8)	現0.9	内外面-無文 底面-無釉 色調:胎土-灰色、釉-灰緑色 備考:同安窯系青磁皿I-a類	底部小破片
5	磁器	青磁皿	-	(5.0)	現0.9	底面-釉掻き取り、糸切痕 内面-柳点描文 色調:胎土-灰色、釉-淡緑色 備考:同安窯系青磁皿I類	底部小破片
6	磁器	青磁碗	-	-	現1.9	内面-沈線1条 色調:胎土-灰色、釉-淡緑色 備考:龍泉窯系青磁碗I類	口縁部小破片
7	磁器	青磁碗	(11.9)	-	現3.4	内外面-無文 色調:胎土-灰色、釉-灰緑色 備考:龍泉窯系青磁碗I-b類	口縁部小破片
8	磁器	青磁碗	(15.9)	-	現4.7	内面-区画文 色調:胎土-灰色、釉-淡黄色 備考:龍泉窯系青磁碗I-4類	口縁部小破片
9	磁器	青磁碗	-	6.0	現2.5	見込-劃花文 暈付-無釉 色調:胎土-灰色、釉-灰緑色 備考:龍泉窯系青磁碗I類	底部小破片
10	陶器	常滑片口鉢II類	-	-	現2.9	胎土:粗、白色粒 色調:灰色 備考:5型式	口縁部小破片
11	陶器	常滑片口鉢I類	(29.8)	-	現6.4	内面摩耗、口唇部を意図的に擦っている 胎土:白色粒 色調:胎土-赤褐色、自然釉-灰褐色	口縁部小破片

12	陶器	常滑片口鉢Ⅰ類	-	-	現3.9	内面摩耗 胎土：粗、白色粒 色調：灰色、自然釉：灰色 備考：6a型式	口縁部小破片
13	銅製品	銭貨	直径2.3	孔径0.7	厚0.1	銭名-紹聖元寶(北宋・1094)	完形

竪穴状遺構5出土遺物(図33)

1	土器	ロクロかわらけ・小	(8.4)	(7.0)	2.0	底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
2	磁器	青磁碗	-	-	現4.0	内面-ヘラによる文様と櫛点描文 外面-櫛目文 色調：胎土-灰色、釉-淡黄色 備考：同安窯系青磁碗Ⅰ類	体部小破片
3	磁器	青磁碗	-	-	現3.8	外面-鎚連弁文 色調：胎土-灰色、釉-淡緑色 備考：龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	体部小破片
4	骨製品	筭	現長11.7	現幅1.5	厚0.4	シカ中足骨製	1/2
5	銅製品	銭貨	直径2.3	孔径0.7	厚0.1	銭名-熙寧元寶(北宋・1068)	完形

表5 第1面遺構外出土遺物観察表(図34)

法量内( )=推定値

遺物番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
2	土器	ロクロかわらけ・小	(7.9)	4.2	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	2/3
3	土器	ロクロかわらけ・小	(7.7)	(4.8)	2.2	口唇部が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	2/3
4	土器	ロクロかわらけ・小	(8.7)	(6.6)	1.7	底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
5	土器	手づくねかわらけ・小	(8.7)	-	1.5	内底焼成後に穿孔(径1cm) 底面-指頭ナデ消し 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
6	土器	手づくねかわらけ・大	(13.6)	-	現3.5	口唇部に煤附着 底面-指頭痕 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/6
7	土器	手づくねかわらけ・大	15.8	-	現2.8	底面-指頭痕 胎土：微砂、雲母、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/6
8	磁器	白磁壺	(9.5)	-	現1.8	二次焼成、口縁部玉縁 色調：胎土-灰白色、釉-透明	口縁部小破片
9	磁器	青白磁花瓶	-	-	現3.5	二次焼成のため釉剝離 口唇部-花卉形 色調：胎土-灰白色、釉-淡青色	口縁部小破片
10	磁器	青磁碗	-	-	現3.0	内面-口縁部に沈線がめぐる 色調：胎土-灰色、釉-淡緑色 備考：同安窯系青磁碗Ⅰ類	口縁部小破片
11	磁器	青磁皿	(10.0)	-	現2.0	内面-劃花文 色調：胎土-灰色、釉-淡緑色 備考：同安窯系青磁皿Ⅰ類	口縁部小破片
12	磁器	青磁皿	-	(5.0)	現1.0	底面-釉掻き取り 内面-ヘラによる文様と櫛点描文 色調：胎土-灰色、釉-淡緑色 備考：同安窯系青磁皿Ⅰ類	底部小破片
13	磁器	青磁碗	-	-	現3.7	内面-劃花文 外面-口唇部に沈線がめぐる 色調：胎土-灰色、釉-淡緑色 備考：龍泉窯系青磁碗Ⅰ類	口縁部小破片
14	磁器	青磁小碗	-	(4.8)	現2.0	内外面-無文 色調：胎土-灰白色、釉-緑青色 備考：龍泉窯系青磁小碗Ⅰ-b類	底部小破片
15	磁器	青磁折縁鉢	-	-	現2.0	外面-鎚連弁文 色調：胎土-灰白色、釉-緑青色 備考：龍泉窯系青磁	口縁部小破片
16	磁器	青磁折縁鉢	-	-	現2.4	内外面-無文 色調：胎土-灰白色、釉-緑青色 備考：龍泉窯系青磁	口縁部小破片
17	陶器	瀬戸天目茶碗	(7.9)	-	現3.6	外面-体部以下は無釉 胎土：微砂 色調：胎土-淡黄色、釉-黒褐色	口縁部小破片
18	陶器	瀬戸縁釉小皿	(11.0)	(4.5)	2.6	口唇部-鉄釉 胎土：微砂、緻密 色調：胎土-灰褐色、釉-黒褐色	口縁部小破片
19	陶器	瀬戸折縁小皿	-	-	現2.6	底面-無釉 色調：胎土-灰白色、釉-灰褐色 備考：古瀬戸後期様式Ⅲ期	1/8
20	陶器	志野皿	(12.6)	(6.8)	2.8	長石釉 胎土：微砂 色調：胎土-灰色、釉-灰白色 刷毛塗り	1/3
21	陶器	常滑片口鉢Ⅰ類	-	-	現3.9	内面摩耗 胎土：粗、白色粒 色調：胎土-灰色 備考：5型式	口縁部小破片
22	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現2.2	胎土：粗、白色粒 色調：胎土-灰褐色、自然釉-茶褐色 備考：8型式	口縁部小破片



ピット 12		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 1

ピット 22		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
		合計 3

【金属製品】		
産地	器種	破片数
	銭貨	1
	釘	4
		合計 50

ピット 13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
【青磁】		
龍泉窯系	椀Ⅱ類	1
		合計 4

ピット 23		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

堅穴状遺構 2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	17
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
【石製品】		
	軽石	1
		合計 19

ピット 14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
		合計 4

ピット 24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 2

土坑 12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【陶器】		
常滑	甕	4
【石製品】		
	砥石	1
		合計 13

ピット 15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
【青磁】		
龍泉窯系	椀Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 9

ピット 25		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【青白磁】		
	器種不明	1
【青磁】		
龍泉窯系	椀Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	器種不明	1
【金属製品】		
	釘	2
		合計 9

土坑 13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	11
【青磁】		
龍泉窯系	椀Ⅱ類	2
【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 15

ピット 16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【白磁】		
	器種不明	1
【金属製品】		
	釘	1
		合計 4

ピット 26		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
【金属製品】		
	釘	2
		合計 5

第 1 c 面		
堅穴状遺構 3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	26
	かわらけ 手づくね成形	1
【青磁】		
同安窯系	椀Ⅰ類	1
龍泉窯系	椀Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	卸皿	1
渥美	甕	1
常滑	甕	6
	片口鉢Ⅰ類	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【石製品】		
	滑石製石鍋	1
	硯	1
【金属製品】		
	釘	2
		合計 43

ピット 17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

ピット 27		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【青磁】		
龍泉窯系	盤?	1
		合計 3

第 1 b 面		
堅穴状遺構 1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	21
【白磁】		
	皿	1
【青磁】		
同安窯系	椀Ⅰ類	1
龍泉窯系	椀Ⅱ類	2
	器種不明	1
【青白磁】		
	壺	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	1
	卸皿	1
常滑	甕	8
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	1
山茶碗窯	片口鉢	2
【土器】		
	火鉢	2
【石製品】		
	滑石製石鍋	1

ピット 18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	椀Ⅱ類	1
【石製品】		
	砥石	1
【金属製品】		
	釘	1
		合計 4

ピット 19		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
【青白磁】		
	碗	1
【石製品】		
	砥石	1
【金属製品】		
	釘	1
		合計 6

第 1 b 面		
堅穴状遺構 1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	21
【白磁】		
	皿	1
【青磁】		
同安窯系	椀Ⅰ類	1
龍泉窯系	椀Ⅱ類	2
	器種不明	1
【青白磁】		
	壺	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	1
	卸皿	1
常滑	甕	8
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	1
山茶碗窯	片口鉢	2
【土器】		
	火鉢	2
【石製品】		
	滑石製石鍋	1

堅穴状遺構 4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	46
	かわらけ 手づくね成形	2
【青磁】		
同安窯系	皿Ⅰ-a類	1
	皿Ⅰ類	1
龍泉窯系	椀Ⅰ類	4
【青白磁】		
	合子蓋	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
瀬戸	器種不明	1
常滑	甕	9
	片口鉢Ⅰ類	3
	片口鉢Ⅱ類	2
【土器】		

ピット 20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1









1. 調査区北壁土層断面(南から)



2. 調査区東壁土層断面(西から)



3. 調査区南壁土層断面(北から)





1. 第1 a面Ⅰ区全景(南から)



2. 第1 a面Ⅱ区全景(南から)



3. 第1 a面 井戸1(北から)



4. 第1 a面 土坑1(北から)





1. 第1 b面全景(南から)



2. 第1 c面全景(南から)



図版 4



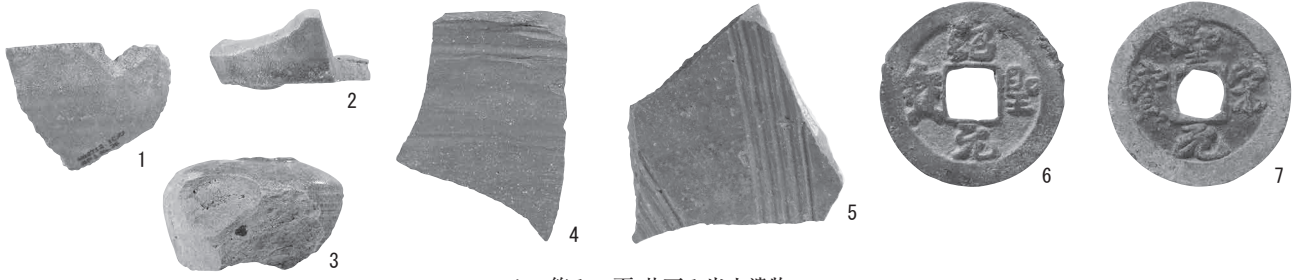
1. 第1c面 竪穴状遺構4根太痕跡検出状況(北から)



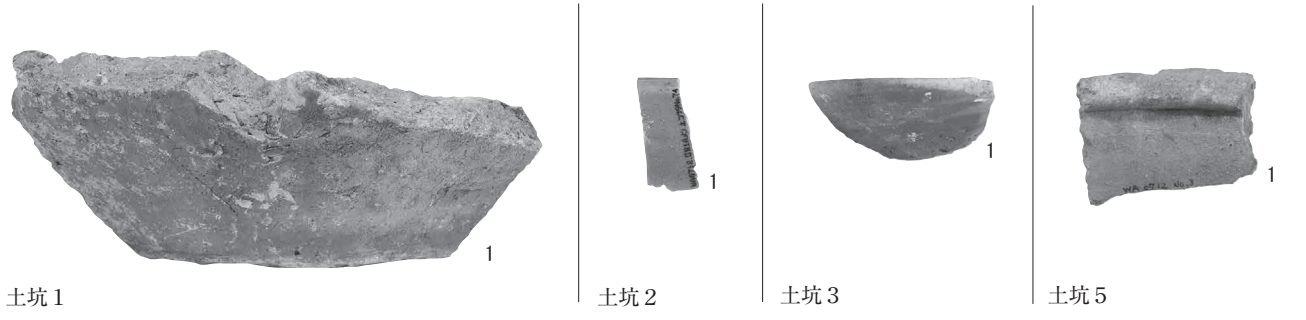
2. 第1c面 竪穴状遺構5根太痕跡検出状況(北から)



3. 第1c面 竪穴状遺構4(左)・竪穴状遺構5(右)土層断面(西から)



1. 第1 a面 井戸1 出土遺物

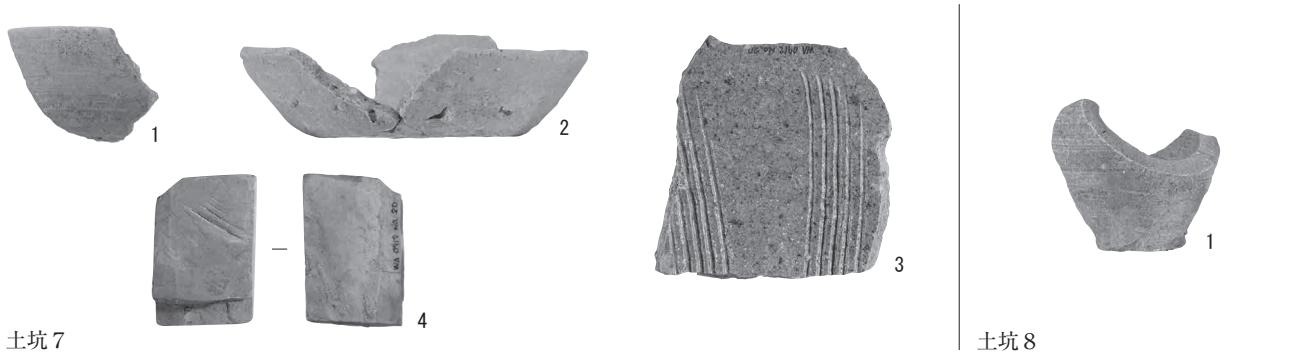


土坑1

土坑2

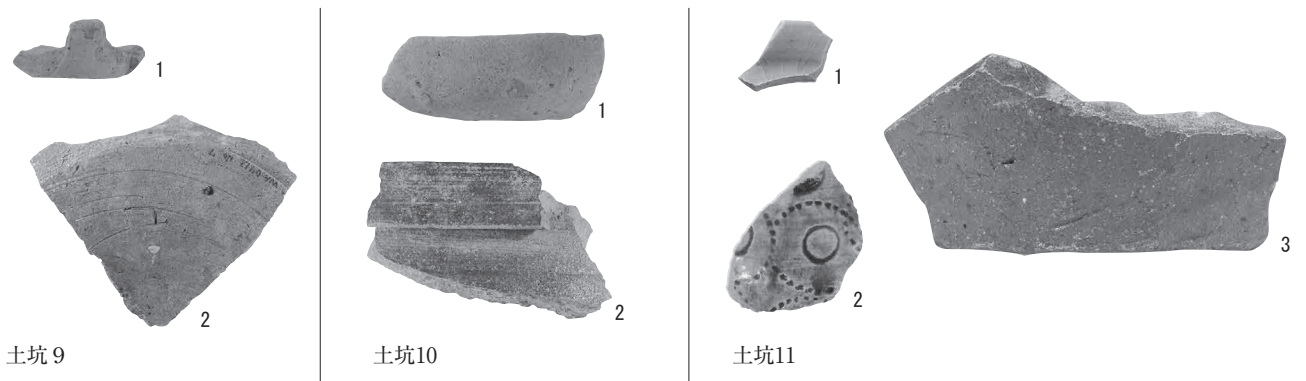
土坑3

土坑5



土坑7

土坑8

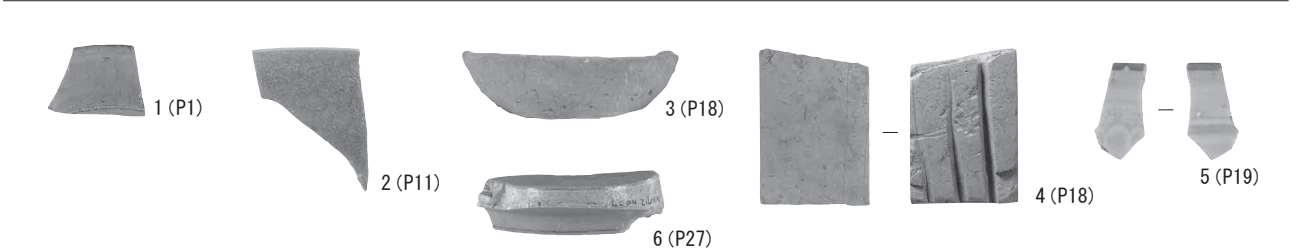


土坑9

土坑10

土坑11

2. 第1 a面 土坑出土遺物



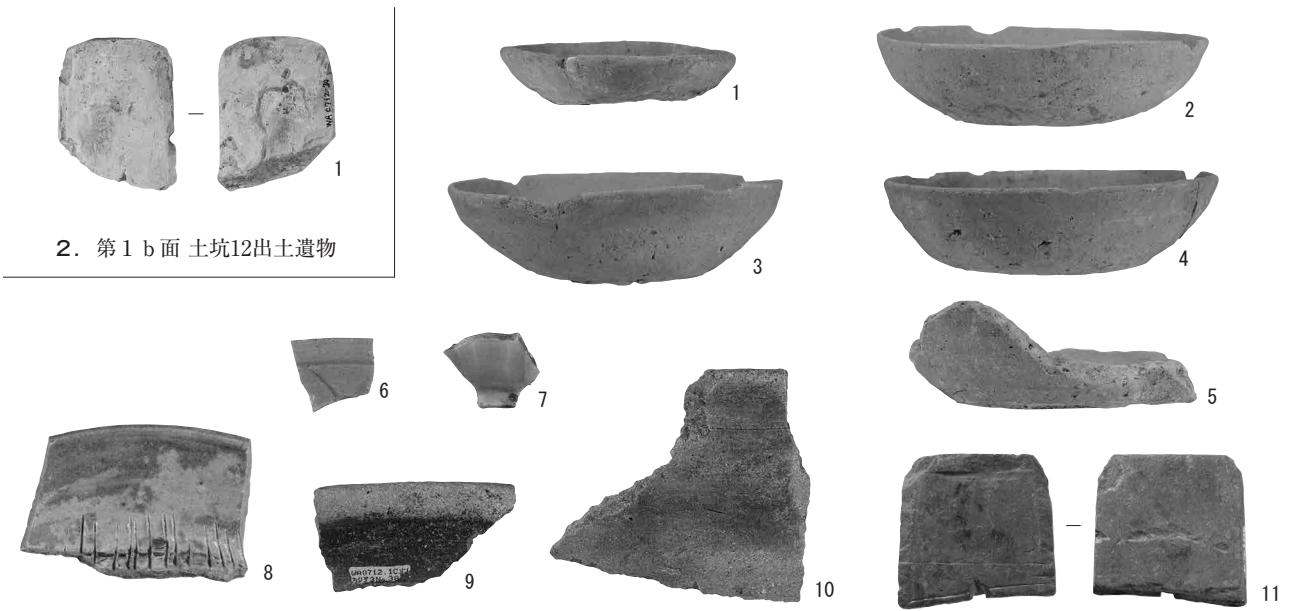
3. 第1 a面 ピット出土遺物



图版6

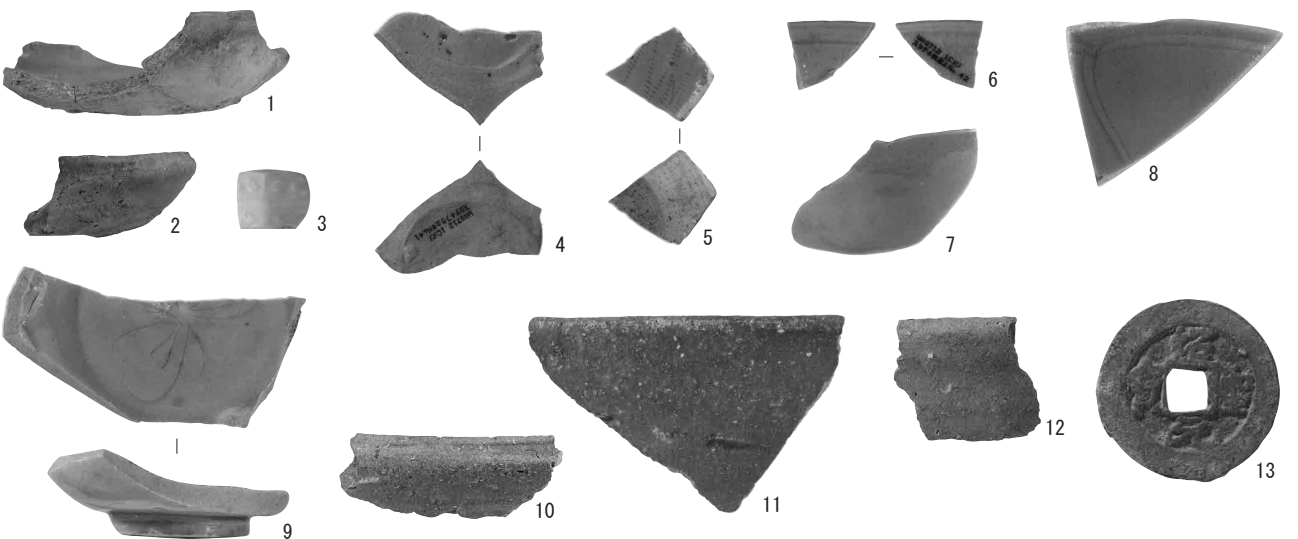


1. 第1 b面 竖穴状遺構1出土遺物

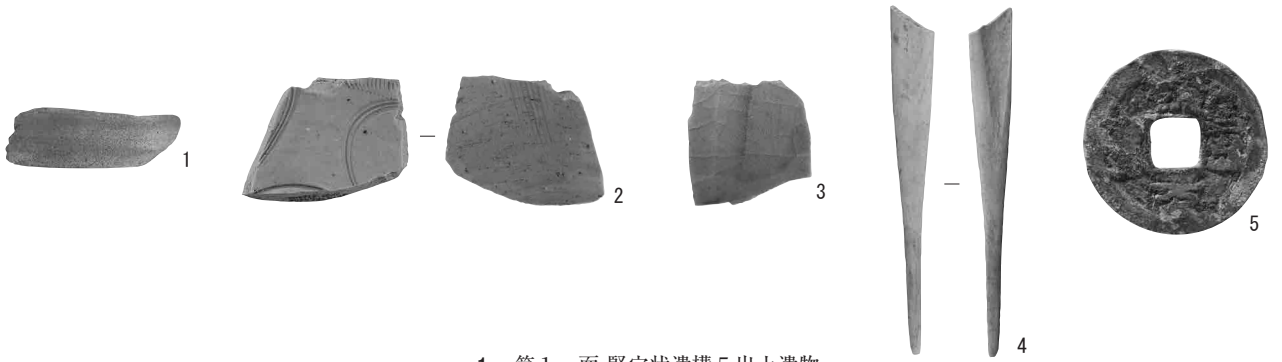


2. 第1 b面 土坑12出土遺物

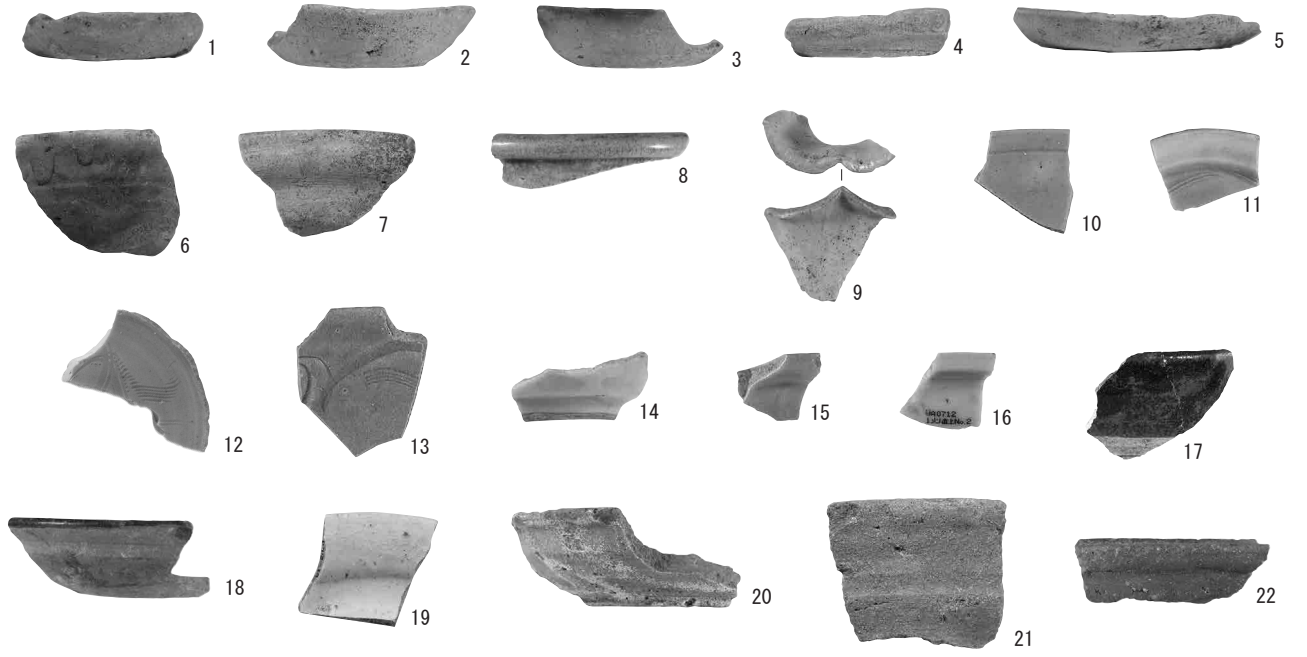
3. 第1 c面 竖穴状遺構3出土遺物



4. 第1 c面 竖穴状遺構4出土遺物



1. 第 1 c 面 竖穴状遺構 5 出土遺物



2. 第 1 面 遺構外出土遺物







# 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)


雪ノ下一丁目187番4 地点

## 例 言

1. 本報は「若宮大路周辺遺跡群」(神奈川県遺跡台帳No.242)内、鎌倉市雪ノ下一丁目187番4地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年2月15日～同年3月14日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約25㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 馬淵和雄  
作 業 員 杉浦永章・倉澤六郎・浅香文保・片山直文・片山 昭  
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 第四章の出土動物遺体の鑑定・執筆は、東京国立博物館客員研究員金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を馬淵和雄、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、世界測地系第Ⅸ系(JGD2000)を用い、図5に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「WY1187」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：  整地・地業範囲  
 道路状遺構

遺物：  煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲

  - ・手描き施文が施される漆器は、文様を濃色、地を白で示した。
  - ・石製品の矢印は磨面範囲を示す。
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介(玉川文化財研究所)
14. 報告書作成にあたっては、伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。

## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	56
第1節 調査に至る経緯と経過	56
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	56
第3節 周辺の考古学的調査	59
第二章 堆積土層	62
第三章 発見された遺構と遺物	64
第1節 第1面の遺構と遺物	64
第2節 第2面の遺構と遺物	66
第3節 第3面の遺構と遺物	69
第4節 第4面の遺構と遺物	79
第5節 第5面の遺構と遺物	86
第6節 第6面の遺構と遺物	92
第四章 若宮大路周辺遺跡群出土の動物遺体	95
第五章 まとめ	102

## 挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	57	図16 第2面 遺構外出土遺物	69
図2 若宮大路周辺遺跡群の周辺遺跡	59	図17 第3面 遺構分布図	70
図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡	60	図18 第3面 道路状遺構1 a	71
図4 調査区位置図	61	図19 第3面 道路側溝1 a 出土遺物	72
図5 調査区配置図	61	図20 第3面 竪穴状遺構1	73
図6 調査区土層断面図	63	図21 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(1)	74
図7 第1面 遺構分布図	64	図22 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(2)	75
図8 第1面 土坑1	65	図23 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(3)	76
図9 第1面 ピット2	65	図24 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(4)	77
図10 第1面 遺構外出土遺物	66	図25 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(5)	78
図11 第1面 遺構分布図	67	図26 第3面 土坑2	78
図12 第2面 溝状遺構1	68	図27 第3面 土坑2 出土遺物	78
図13 第2面 溝状遺構1 出土遺物	68	図28 第3面 遺構外出土遺物	79
図14 第2面 ピット3・4	68	図29 第4面 遺構分布図	80
図15 第2面 ピット出土遺物	69	図30 第4面 道路状遺構1 b (新)	81

図31	第4面 道路側溝1 b 出土遺物(1)……………82	図39	第5面 道路側溝1 c 出土遺物(3)……………90
図32	第4面 道路側溝1 b 出土遺物(2)……………83	図40	第5面 土坑3・4……………90
図33	第4面 遺構外出土遺物(1)……………84	図41	第5面 土坑3 出土遺物……………91
図34	第4面 遺構外出土遺物(2)……………85	図42	第5面 土坑4 出土遺物……………91
図35	第5面 遺構分布図……………86	図43	第5面 ピット12・13・16出土遺物……………92
図36	第5面 道路状遺構1 b (古)……………87	図44	第5面 遺構外出土遺物……………92
図37	第5面 道路側溝1 c 出土遺物(1)……………88	図45	第6面 遺構分布図……………93
図38	第5面 道路側溝1 c 出土遺物(2)……………89	図46	第6面 遺構外出土遺物……………94

## 表 目 次

表1	若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧……………62	表6	第5面 出土遺物観察表……………114
表2	第1面 出土遺物観察表……………106	表7	第6面 出土遺物観察表……………116
表3	第2面 出土遺物観察表……………107	表8	遺構計測表……………116
表4	第3面 出土遺物観察表……………107	表9	出土遺物一覧表……………116
表5	第4面 出土遺物観察表……………112		

## 図 版 目 次

図版1	1. 調査区近景(小町通りから調査区を望む)……………119	図版6	1. 第1面 遺構外出土遺物……………124
	2. 調査区北壁土層断面(南西から)……………119		2. 第2面 溝状遺構1 出土遺物……………124
図版2	1. 第1・2面全景(南西から)……………120		3. 第2面 ピット出土遺物……………124
	2. 第3面全景(南西から)……………120	図版7	1. 第2面 遺構外出土遺物……………125
図版3	1. 第3面 竪穴状遺構1(南東から)……………121		2. 第3面 道路側溝1 a 出土遺物……………125
	2. 第3面 竪穴状遺構1 上層遺物出土状態(南東から)……………121		3. 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(1)……………125
図版4	1. 第4面全景(南西から)……………122	図版8	1. 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(2)……………126
	2. 第5面全景(南西から)……………122	図版9	1. 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(3)……………127
図版5	1. 第6面 東西トレンチ(北西から)……………123	図版10	1. 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(4)……………128
	2. 第6面 南北トレンチ(北東から)……………123	図版11	1. 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(5)……………129
	3. 第6面 道路状遺構1 a～1 b 土層断面(北東から)……………123	図版12	1. 第3面 土坑2 出土遺物……………130
	4. 第6面 木組遺構1(南西から)……………123		2. 第3面 遺構外出土遺物……………130
	5. 第6面 木組遺構2(南東から)……………123		3. 第4面 道路側溝1 b 出土
	6. 第6面 東西トレンチ土層堆積状態(南西から)……………123		

	遺物(1) ……………	130	図版16	1. 第5面 道路側溝1 c 出土 遺物(2) ……………	134
図版13	1. 第4面 道路側溝1 b 出土 遺物(2) ……………	131	図版17	1. 第5面 土坑3 出土遺物 ……………	135
	2. 第4面 遺構外出土遺物(1) ……	131		2. 第5面 土坑4 出土遺物 ……………	135
図版14	1. 第4面 遺構外出土遺物(2) ……	132		3. 第5面 ピット12・13・16 出土遺物 ……………	135
図版15	1. 第4面 遺構外出土遺物(3) ……	133		4. 第5面 遺構外出土遺物 ……………	135
	2. 第5面 道路側溝1 c 出土 遺物(1) ……………	133	図版18	1. 第6面 遺構外出土遺物 ……………	136



# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市雪ノ下一丁目187番4地点で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳No.242）の範囲内にあたり、建築主から柱状改良工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成19年9月4日から同年9月10日にかけて6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約25㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、馬淵和雄が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年2月15日～同年3月14日までの約1ヵ月で、調査面積は約25㎡である。現地表の標高は約10.2mを測る。調査はまず重機により20～40cmほどの表土を除去することから始め、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する第1～5面の合計5面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。また、第5面の遺構調査を終えた段階で、調査区北壁際から西壁際にかけて幅約70cmの範囲についてトレンチ調査を行い、木製品などが出土したため第6面とした。第6面の記録作業を終え、3月14日に現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては世界測地系第IX系（JGD2000）に準じた、鎌倉市四級基準点2点（ $X = -75372.884$ 、 $Y = -25165.027$ ）、（ $X = -75419.474$ 、 $Y = -25180.152$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53207（標高10.907m）を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群（No.242）は、鎌倉市街地のほぼ中心地区に位置し、国指定史跡「若宮大路」を挟んでおおむね東西に展開している。遺跡の南限は、県道鎌倉葉山線の六地藏から大町四つ角までの範囲、西は現在の「今小路通り」の寿福寺前から六地藏までの範囲、東は宝戒寺裏の滑川に架かる宝戒寺橋から夷堂橋を経て小町大路を南に下った大町四つ角までの範囲、北は鶴岡八幡宮前の三ノ鳥居の南を東西に走る横大路から窟堂前を通過して西の今小路通りに至るまでの範囲に相当し、南北約1,000m、東西500～700mの広がりをもつ。

この遺跡範囲内には、その中心に国指定史跡の若宮大路が南北に通じ、若宮大路北端の東側には北条小町邸跡（泰時・時頼邸）（No.282）、その隣接地には宇津宮辻子幕府跡（No.239）の包蔵地範囲が、また西側には北条時房・顕時邸跡（No.278）の包蔵地範囲が所在している。

本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群の北西域にあたり、若宮大路の西150mほどに位置している。現住所表記は鎌倉市雪ノ下一丁目に属し、本調査地点の東20mほどには鎌倉駅東口から鶴岡八幡宮まで若宮大路と並行して走る「小町通り」に面している。この小町通りの北端、鶴岡八幡宮前の横大路（県道金沢



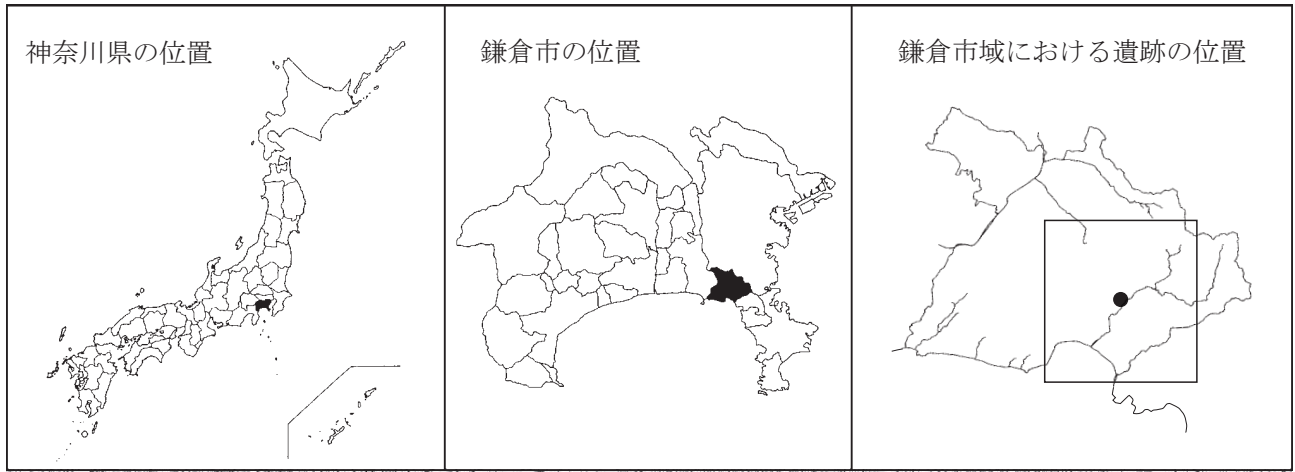


図1 遺跡位置図



鎌倉線)と交差する手前に「鎌倉十井」のひとつ、「鉄ノ井」がある。横大路は『吾妻鏡』にもその名が記されており、鶴岡八幡宮南側の瑞垣に沿って走る東西に敷設された基幹大路である。東端は宝戒寺前で小町大路に接し、西は鉄ノ井の先で窟小路へと続き、その先は今小路に至ったという。この道路は若宮大路に至る県道の一部となっているが、今も横大路と呼ばれている。また、「鉄ノ井」から扇ガ谷へ向かう小道を窟小路というが、この小路を寿福寺に向かう途中、横須賀線の踏切の手前にあるのが小道の由来となった頼朝入府以前から存在したといわれる窟堂である。現在は、小道の北側に窟不動として残っている。踏切を越えると寿福寺がある。鎌倉五山の第三位で、境内は「寿福寺境内」として国の史跡に指定されている。小町通りはまた、北条時房・顕時邸跡の西辺の区画にあたり、本調査地点付近は鎌倉中世都市の中心部分に位置しているといえよう。

本調査地点周辺の地形は、鶴岡八幡宮を背にして東と西の三方が山に囲まれ、鎌倉市街地の平野部では最奥部に位置している。本遺跡群の東側には市街地を貫く滑川が北東から南西方向に流下し、本地点の西を南に流下する扇川は小町通りを抜けて大町橋付近で滑川に合流している。現地表面の標高は約10.2m、小町通り南端の鎌倉駅西口付近で約6.4m、滑川の合流付近では5.0m内外となる。

当初頼朝は、幕府中枢の大倉御所(大倉幕府跡/No.253)を荏柄天神社の西に造営し、鶴岡八幡宮を由比郷から現在の地に移して周辺に持仏堂(法華堂)や永福寺などを造営し、鎌倉幕府を開いた。また、八幡宮から海に至る直線道が若宮大路で、御所が若宮大路に遷されると鶴岡八幡宮は鎌倉の中心となる。遺跡名ともなった若宮大路は、寿永元(1182)年3月、頼朝が妻政子の安産を願って自らの指揮のもとに造成したといわれるが、以後、鶴岡八幡宮への参詣道として、また都市鎌倉の基準線となっている。

遺跡範囲内および周辺域を概観すると、鶴岡八幡宮の周辺は幕府(宇津宮辻子幕府、若宮大路幕府)や有力御家人などの住居が造営された地域である。三代執権北条泰時は、大倉幕府を宇津宮辻子幕府、そして11年後には若宮大路幕府に遷す。若宮大路の東側地域は当時、北条泰時・時頼邸や若宮大路幕府などが営まれた最重要拠点である。また北条時房・顕時邸跡のある西側地域では、若宮大路沿いに走る幅約3m(1丈)にも及ぶ木組み大溝が発見され、若宮大路に面した大規模な屋敷地の存在が推定されている。

一方、二ノ鳥居の南東側では、若宮大路沿いの調査地点でも発見される遺構の多くが方形堅穴遺構や小規模な掘立柱建物や井戸・土坑・柱穴・溝などで、これらが確認される地点は武家屋敷とは異なる庶民居住区、いわゆる「町屋」に相当する地域と推定されている。同じ大路沿いでも、二ノ鳥居を境に北と南側ではまったく様相が異なっていたことが知られるのである。また、二ノ鳥居以北でも大路沿いからやや離れると、大路に対して遺構の軸方向が異なるものも見受けられる。

また、遺跡群南東隅の交差点は大町四つ角と呼ばれ、この四つ角およびその周辺には建長3(1251)年と文永2(1265)年に定められた『吾妻鏡』記載の米町や大町などの商業地区がある。さらに若宮大路と大町大路が交差する現在の下馬四つ角付近は、当時の繁華街として賑わった地域とされている。また、下馬四つ角から鶴岡八幡宮までは馬の乗り入れが許されず、若宮大路を横切るときもここで馬を下りて礼拝したことから「下馬」と呼ばれるようになったという。同様に南西隅の六地藏一帯も鎌倉時代に刑場があった場所といわれ、これを弔うために六地藏が祀られ、それが地名となったといわれている。六地藏から今小路通りを北に向かうと、やがて佐助川に架かる鎌倉十橋の一つ「裁許橋」がある。鎌倉時代、この橋の付近に問注所があって、そこでの裁判の結果、無罪放免となった者が渡った橋であることがこの名の起こりとされ、有罪だった者は六地藏辺りにあった刑場に連行されて処刑されたという。

このように、若宮大路周辺遺跡群の範囲内は、幕府中枢の施設や有力御家人の武家屋敷地をはじめ、様々な性格を有する都市ならではの遺構が混在している地域といえよう。

### 第3節 周辺の考古学的調査

本地点を含む若宮大路周辺遺跡群の発掘調査事例は、市街地に起因する開発件数の多さもあり、大小様々なものまでを含めて数えると、これまでに150地点以上が知られている。多くは小規模な調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、前節でみてきたように二ノ鳥居以北と以南では様相が大きく異なっていることが知られている。

本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群が位置する沖積平野部の中でも最も北西側に位置し、その東側は若宮大路を挟んで大規模な屋敷地が居並ぶ幕府の最重要地点とされている。小町通りに面した場所は、北条時房・顕時邸跡の範囲で、北面を鶴岡八幡宮、東面を若宮大路に面した、東西約110m、南北約240mにも及ぶ広大な地区である。また、若宮大路を挟んだ東側の地区は、北条小町邸跡(泰時・時頼邸)や宇津宮辻子幕府跡、若宮大路幕府跡などと推定される場所である。そこでは大路側溝の築成を示す木簡

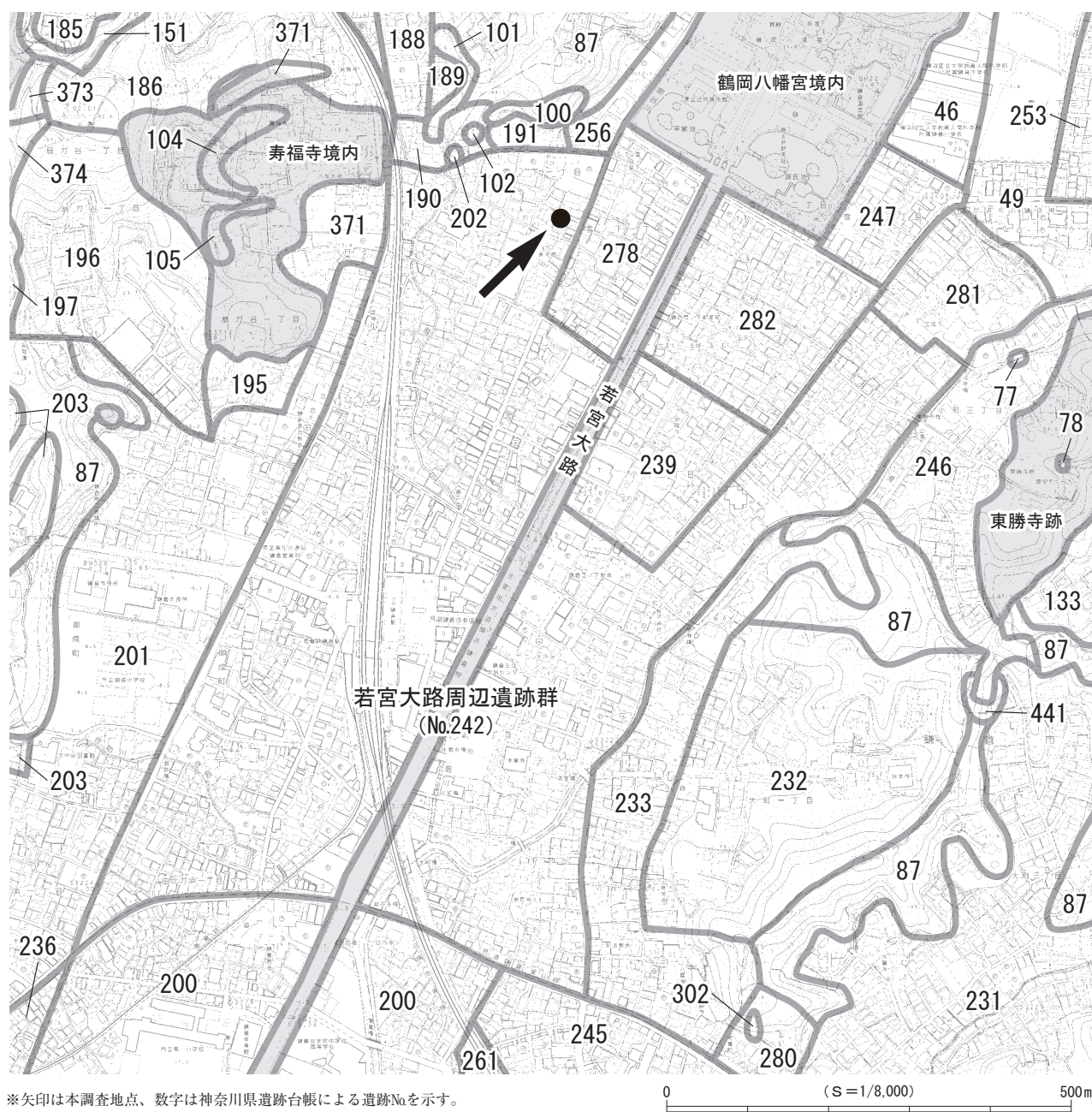


図2 若宮大路周辺遺跡群の周辺遺跡





※矢印は本調査地点、●印・丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡





図4 調査区位置図

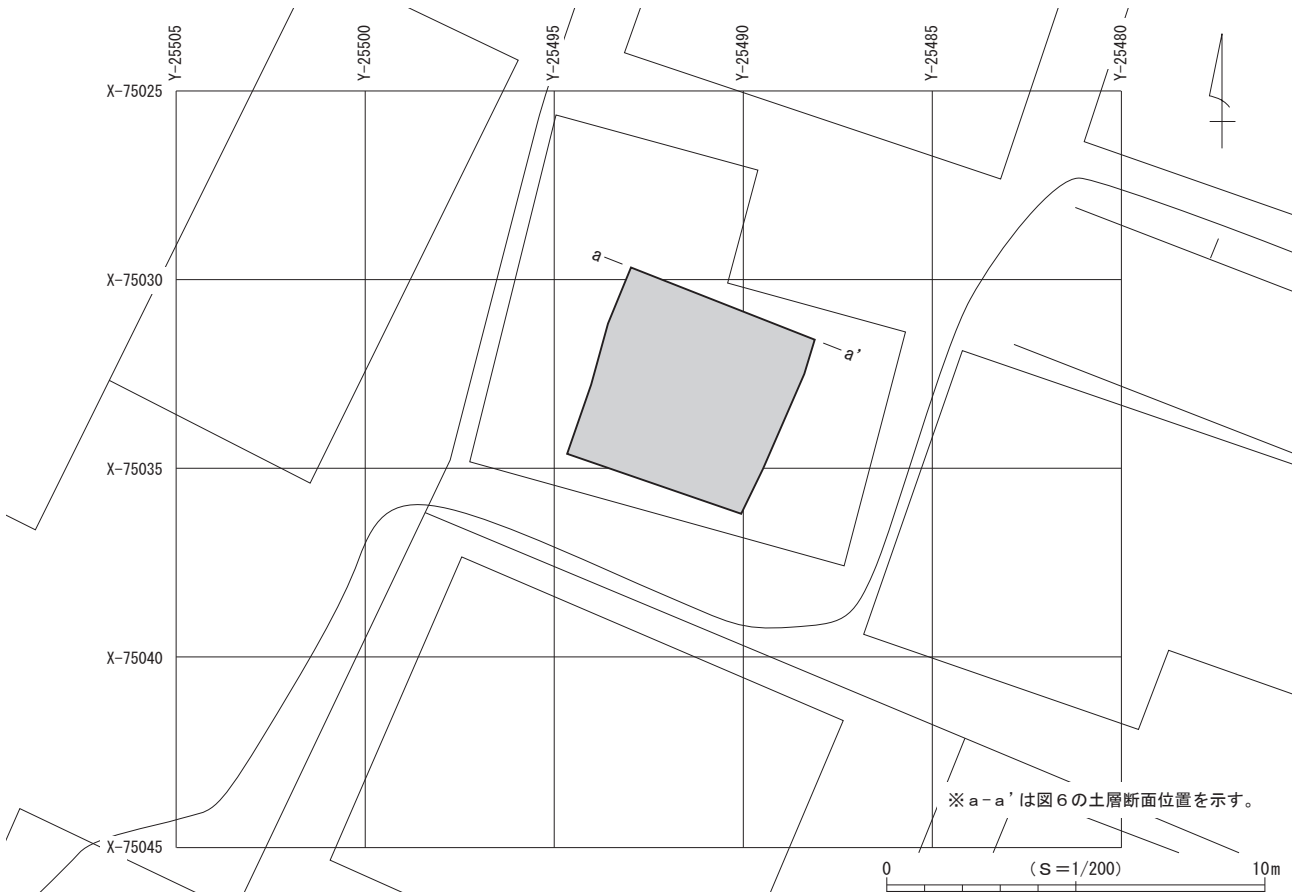


図5 調査区配置図

表1 若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目187番4地点	
①	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目148番4外地点	宮田 2014
②	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目161番33の一部地点	馬淵・鍛冶屋ほか 2006
③	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目200番3地点	宗墓(秀)・宗墓(富) 2003
④	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目210番他地点	馬淵 1990
⑤	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目198番6地点	小林・菊川ほか 2000
⑥	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目198番1地点	
⑦	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目39番6他地点	田代・佐藤 1989
⑧	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目24番14地点	沖元 2016
⑨	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目24番20地点	滝澤 2010
⑩	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目28番3・5地点	原・秋山ほか 1998
⑪	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目19番外地点	
⑫	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目69番6外地点	田代・原 1991
⑬	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目11番2地点	森・赤堀 2012
⑭	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目5番27外地点	三ツ橋 2014
⑮	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目12番15地点	菊川 1992、菊川・兼行 1998

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

が出土しており、発見された遺構の規模や方向などは幕府や北条得宗家の屋敷地の存在をうかがわせる。本調査地点に近い北条時房・顕時邸跡のある大路の西側地区も同様に、すでに10数カ所の発掘調査が行われている。その中で特に注目されたのが大路の側溝と推定された木組みの大溝である。その構造が最も良く残っていたのが雪ノ下一丁目273番口地点で、この調査によって幅約3m(約1丈)、深さ約1.5m(5尺)の規模であることが明らかにされた。

本調査地点の周辺では、今までに本地点を含めて8地点(◀、①～⑦)の発掘調査が行われている。その中で調査面積が比較的広い④雪ノ下一丁目210番他地点の調査では、13世紀後葉から14世紀中葉にわたる上下2面の遺構面が検出された。遺構の構成は、上層面では方形の小さな板囲い建物が多いのに対して、下層では床束をもつ大規模な掘立柱建物が主屋で板囲い建物が付随する形となる。調査者は下層から上層に至る経緯について居住者の変化があったと推定し、当初の屋敷地の中の主屋と家人達の住居から、上層の時代には庶民階層の住居とその作業場という組合せに変わったと考えており、基幹道路との関係や町割り、屋敷地の区割りなどの問題とも深く関係しているものとみられる。

## 第二章 堆積土層

今回の調査では、第1～6面の合計6面にわたる遺構確認面が認められた。ここでは調査区北壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する土層を中心に詳述する。

現地表面の標高は約10.2mを測る。表土層の厚さは約20～40cmを測り均等ではなく、下面は凹凸がある。表土を除去すると灰褐色弱砂質土、茶褐色弱砂質土、灰褐色弱砂質土(2～4層)が堆積しており、その下に堆積している暗褐色弱砂質土(5層)は池あるいは水田の可能性が考えられる土層である。

第1面は標高9.05mで確認した。後世の削平を受けており、調査区南東隅に1.2㎡ほどがわずかに残存するのを確認したのみであった。よって図示した調査区北壁面の土層断面には現れていない。炭が混入する灰褐色弱砂質土に泥岩と砂岩を加えた整地層であり、上面はほぼ平坦である。

第2面は堆積土層の7層上面で確認した。第2面も第1面と同様に削平を受けていることから、調査区北壁際で帯状に約2.5㎡が残存するのみであった。木材と炭を含む暗褐色粘質土を主体として、粒状から拳大までの泥岩あるいは砂岩を用いた整地層である。層上面の標高は約8.9～9.0mを測る。

第3面は調査区内のほぼ全面が遺構であるため、堆積土層としては調査区北壁面の土層断面には現れていない。第2面の整地層を掘り下げると、直下が遺構の覆土あるいは道路状遺構1aの路面であった

ことから、第2面の構成土である7層の下面を第3面とした。また、調査区南東側で破碎泥岩による整地層が約1.4m確認され、これも第3面とした。遺構を確認した標高は8.8m前後だが、調査区西側では道路状遺構1 aが第2面の確認時に同時に検出された。

第4面については、第3面において調査区南東隅で検出された破碎泥岩による整地層の下面を第4面とした。調査区北東側は第3面の竪穴状遺構の掘り込みが及んでいるため、堆積土層としては調査区北壁面の土層断面には現れていない。標高は約8.5mである。また、第3面で検出された道路状遺構1 aの路面を掘り下げると古い段階の道路である道路状遺構1 bの路面が現れ、それに付随するとみられる溝状遺構(道路側溝1 b)が検出されたことから、これらを第4面の遺構とした。道路状遺構1 b路面の標高は約8.8mを測る。

第5面は、道路状遺構1 bに付随する側溝として、第4面で確認した道路側溝1 bより古い溝状遺構が検出されたため、これを道路側溝1 cとして第5面の遺構とした。また、調査区東側では竪穴状遺構1の直下から土坑とピットが検出され、その同一レベルで調査区南東隅にて土坑が検出されたため、これらも第5面に帰属する遺構とした。調査区東側での遺構確認面の標高は約8.4~8.5mを測る。

第5面の調査を終了した段階で、さらに下層の様相を把握するため、調査区北壁から東壁にかけて幅約70cmのトレンチを設定して調査を行った。トレンチ底面は標高約7.7mまで掘り下げたが、湧水が著しく計測が困難であった。おそらく底面は基盤層に到達していないと思われる。トレンチ内から木組状の板材や杭が出土したため、これを木組遺構1・2とした。また、木組遺構1が検出されたレベルを第6面の遺構確認面とみなし、土層断面図の標高約6.1mの位置に破線で示した。なお、第5面の道路状遺構1 bと第6面の間に2面の道路状遺構と思われる整地層が確認されている(道路状遺構1 c・1 d)。また、トレンチ内からはこの他にも遺構に伴う部材とみられる木材が多数出土しており、出土した標高は異なるが、これらを一括して第6面に帰属するものとした。

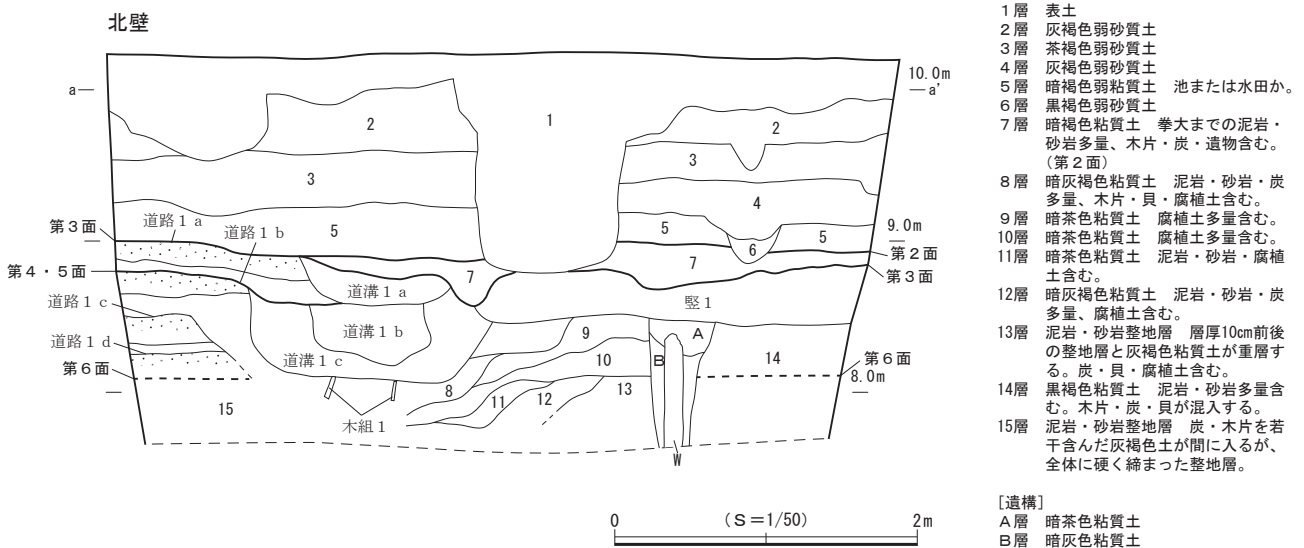


図6 調査区土層断面図

### 第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～6面までの合計6面である。第5面までの調査が終了した段階で、調査区北壁から東壁際で幅70cmのトレンチ調査を行い、内部で発見された遺構と遺物を第6面に帰属するものとした。検出した遺構は、道路状遺構4条、道路側溝3条、竪穴状遺構1基、溝状遺構1条、木組遺構2基、土坑4基、ピット19基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して26箱を数える。第1面検出時から湧水がみられ、調査は困難であった。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～6面)に説明する。

#### 第1節 第1面の遺構と遺物

第1面は標高9.05mで遺構を確認した。炭が混入する灰褐色弱砂質土とともに、泥岩と砂岩を用いて整地された層である。広く後世の削平を受けているため、調査区の南東隅で1.2㎡ほどが残存するものの、大半は失われていた。わずかに残されたこの整地層を掘り込んで構築された遺構について、第1面に帰属するものとした。検出した遺構は、土坑1基、ピット2基である(図7)。削平の影響により、検出さ

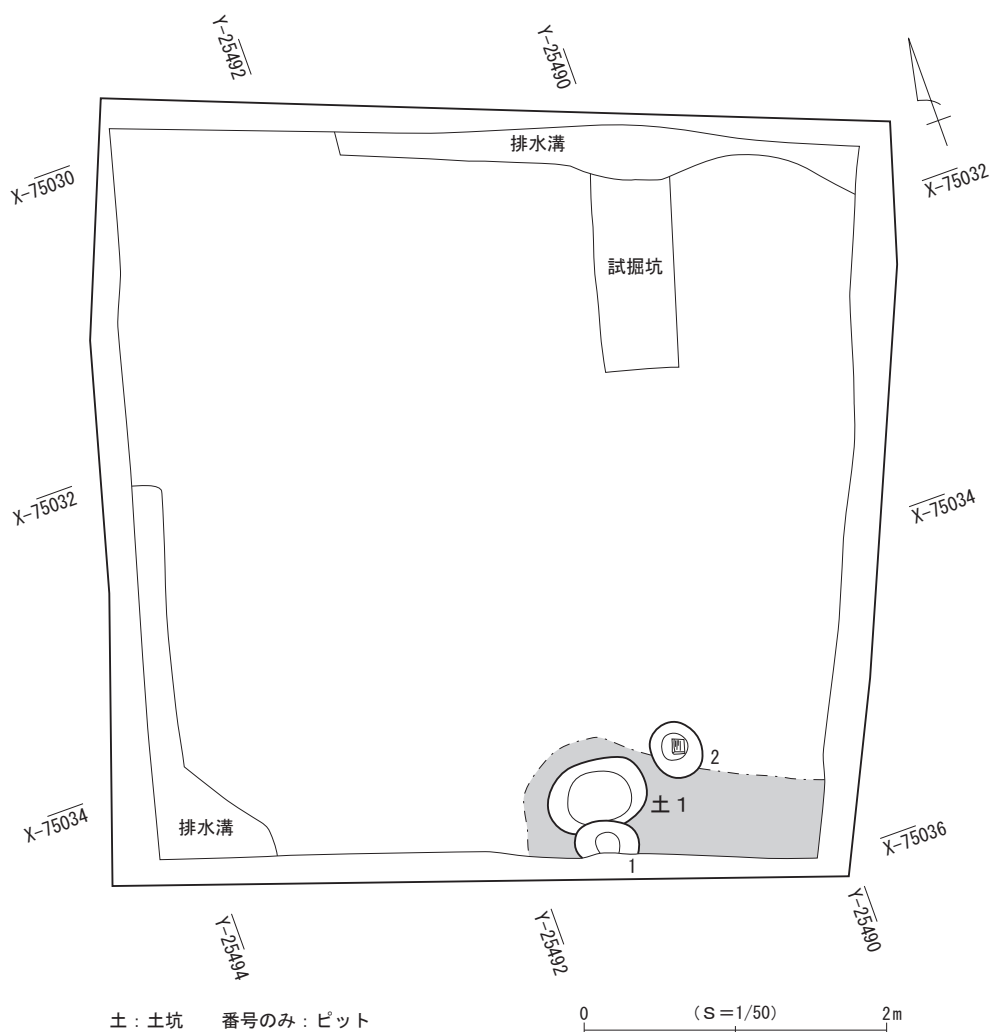


図7 第1面 遺構分布図

れた遺構はわずかである。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀前葉頃に属すると考えられる。

### (1) 土 坑

第1面では、1基を検出した。一部をピットに壊されるが、おおよそ全容は把握できた。

#### 土坑1 (図8)

調査区南東側に位置する。南側がピット1と重複しており、新旧関係は明らかでない。平面形は楕円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸67cm、短軸現存長45cm、深さ14cmで、坑底面の標高は8.93mを測る。主軸方位はN-87°-Wを指す。

遺物はかわらけ12点が出土した。

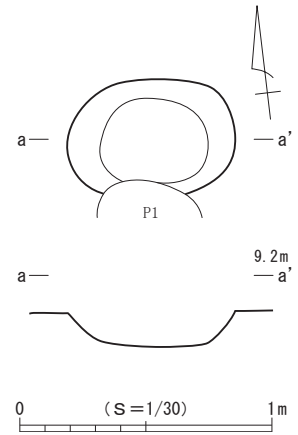


図8 第1面 土坑1

### (2) ピット (図7)

第1面では、2基を検出した。調査区南東隅に分布する。平面形は略円形ないし楕円形で、規模は現状で径43cmと38cm、深さ15cmと23cmを測る。以下、礎板が据えられたピット2を図示し、説明する。

また、各ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表9)を参照されたい。

#### ピット2 (図9)

調査区南東隅に位置する。平面形は略円形、断面形は逆台形を呈し、規模は径38cm、深さ23cmを測る。礎板はピット東壁寄りの底面直上から出土しており、大きさは長さ10cm、幅8cm、厚さ2cmを測る。礎板上面の標高は8.75mである。

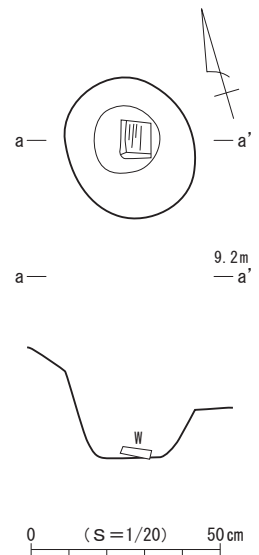


図9 第1面 ピット2

### (3) 遺構外出土遺物 (図10)

第1面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち35点を図示した。

1は白かわらけで、2～20はロクロ成形によるかわらけである。5・10・12には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。21・22は龍泉窯系青磁で、21が碗、22が盤と思われる製品である。23は瀬戸窯産の卸皿である。24～29は常滑窯産の製品で、24～27が甕、28・29が片口鉢Ⅱ類である。30は瓦質土器の香炉である。31は土錘である。32は丸瓦である。33・34は石製品で、33が温石、34が硯である。35は銭貨で、元豊通寶(北宋・1078)である。



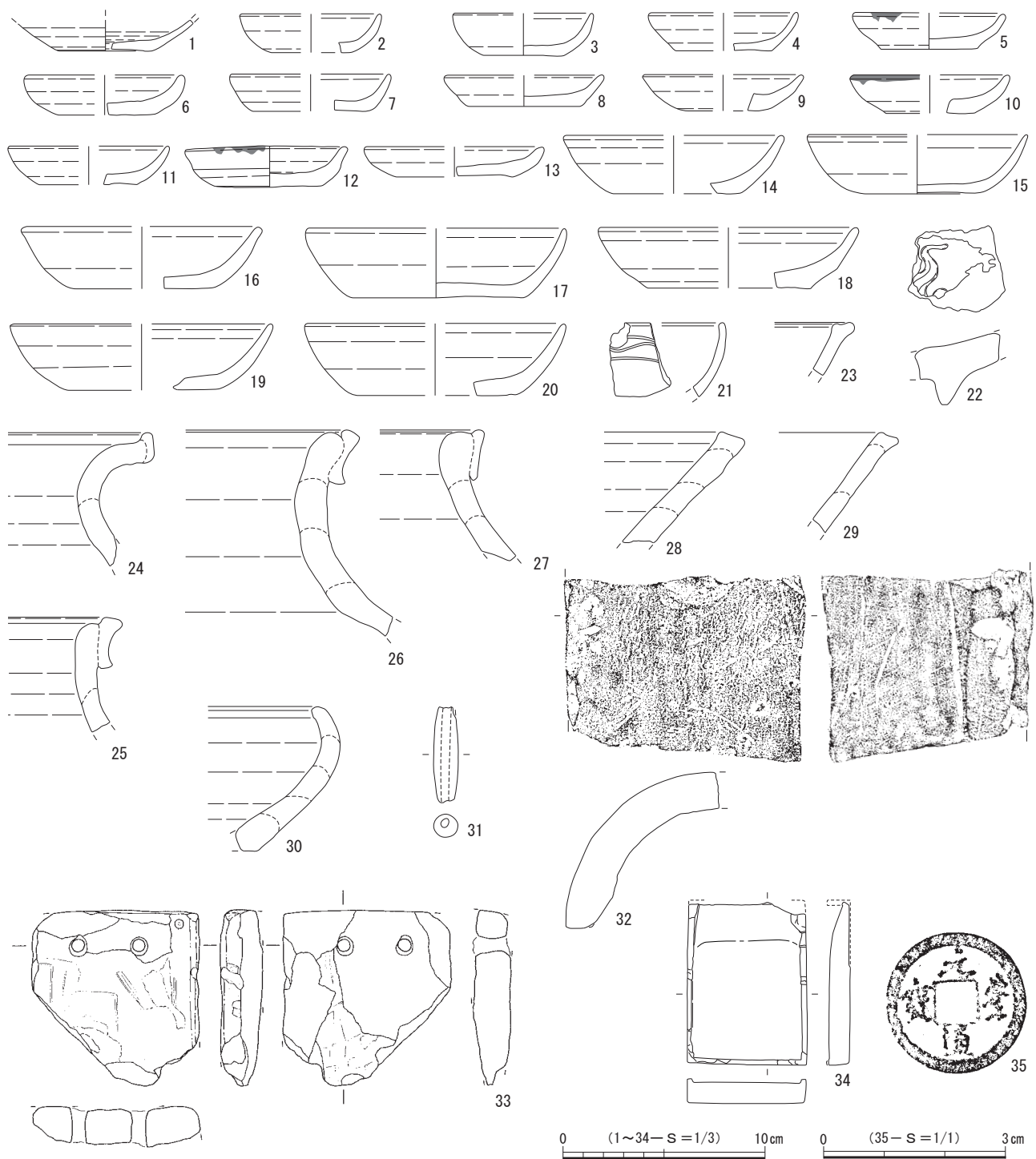


図10 第1面 遺構外出土遺物

## 第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土層の7層上面で確認され、確認面の標高は約8.9～9.0mを測る。木材と炭を含む暗褐色粘質土と、粒状から拳大までの泥岩あるいは砂岩を用いた整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。しかし、この整地層は後世の削平により大幅に失われており、北壁際に約2.5㎡が带状に残るのみであった。検出した遺構は、溝状遺構1条、ピット7基である(図11)。調査区北側から中央付近にかけて遺構が分布しており、遺構密度は低いといえよう。

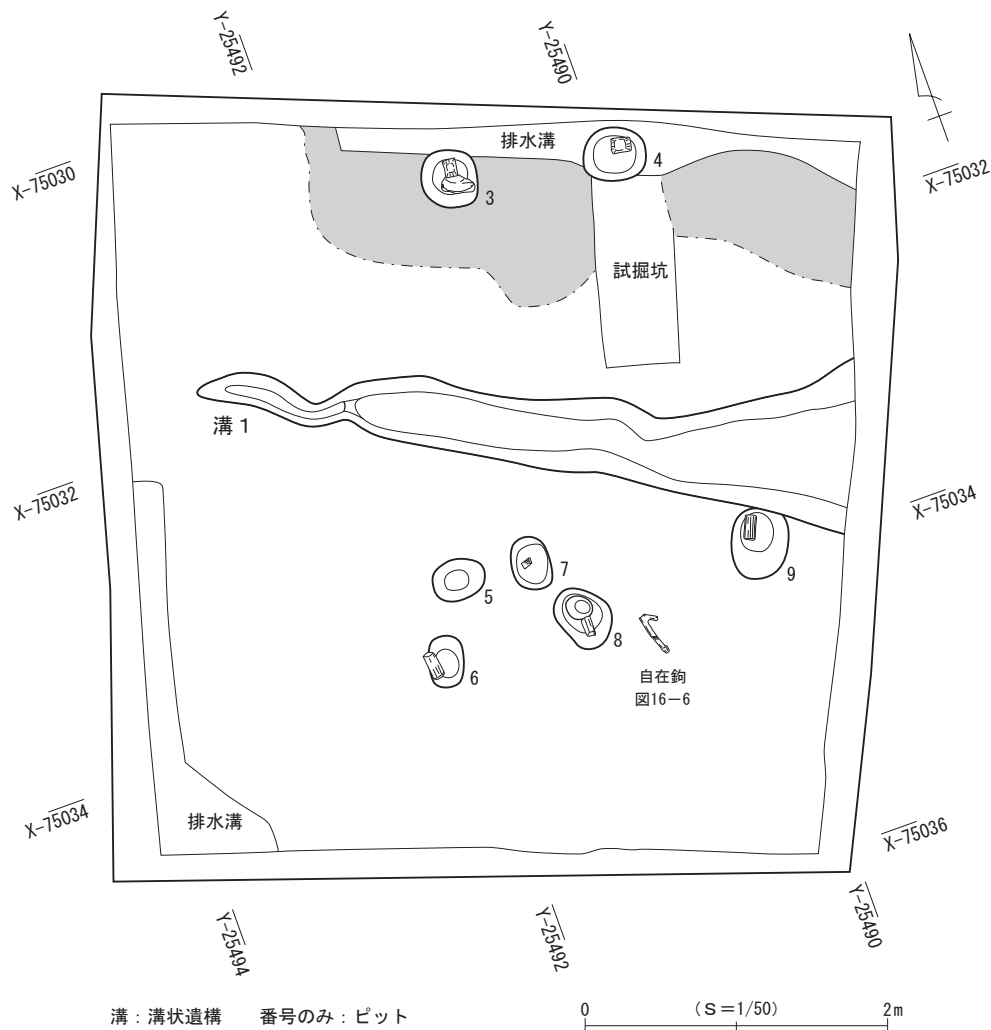


図11 第1面 遺構分布図

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉～後葉に属すると考えられる。

#### (1) 溝状遺構

第2面では、1条を検出した。調査区のほぼ中央を東西方向に走る。東側は調査区外に及んでおり、遺構の全容は把握できなかった。

#### 溝状遺構 1 (図12)

調査区中央に位置する。やや蛇行しながら、北西－南東方向に延びる。調査区内では南東側が最も幅が広く、北西側は徐々に幅を減じて途絶えている。東側は調査区外に及んでいることから、全容は明らかでない。規模は現存長4.37m、幅0.15～1.17m、深さ4～20cmを測り、主軸方位はN-63°-Wを指す。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面の標高は西端で8.77m、中央で8.61m、東端で8.56mを測り、東側へ傾斜している。

#### 出土遺物 (図13)

遺物はかわらけ52点、磁器3点、陶器13点、瓦質土器2点、石製品1点、木製品1点、金属製品3点が出土し、このうち3点を図示した。

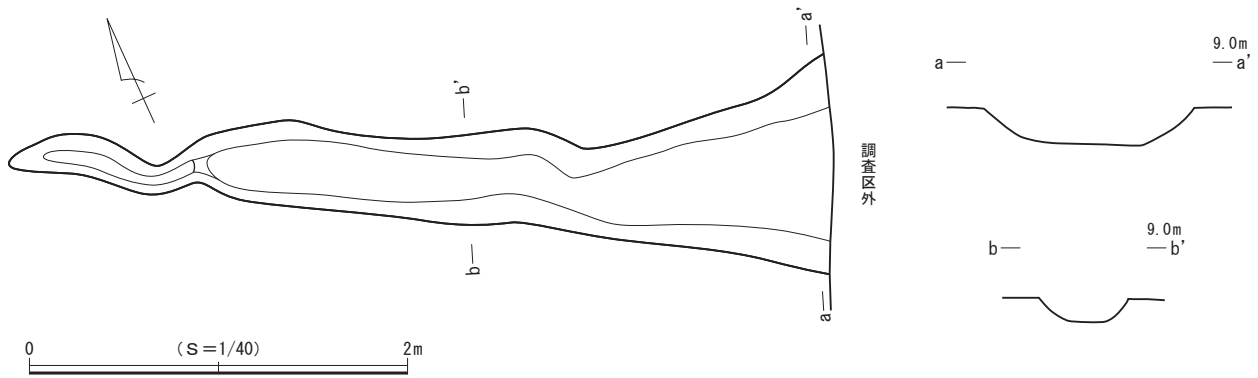


図12 第2面 溝状遺構 1

1はロクロ成形によるかわらけである。2は石製品でスタンプである。3は器種不明の漆器である。

(2) ピット (図11)

第2面では、7基を検出した。調査区北壁際と中央付近にややまとまっており、分布に偏りがある。建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は略円形ないし楕円形で、規模は現状で径33~47cm、深さ6~26cmを測る。角柱が遺存するピットが2基検出されており、1基は石が添えられ固定されていた。また、ピット9は礎板が据えられていた。

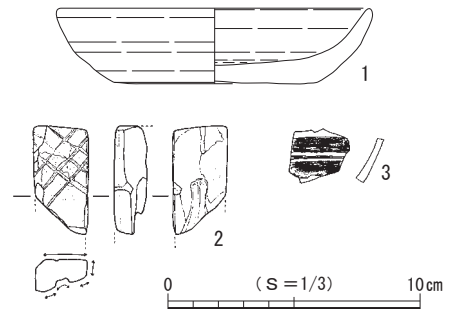


図13 第2面 溝状遺構 1 出土遺物

以下、角柱が出土したピット3・4を図示し、説明する。

ピット3 (図14)

調査区北側に位置する。調査時に設けた排水溝により北側の一部を壊されている。角柱の端部と、その押さえとみられる石が出土した。ピットの平面形は略円形、断面形は現状で皿状を呈する。規模は径43cm、深さ6cmで、底面の標高は8.74mを測る。角柱は北壁寄りに位置し、南壁側に石が角柱に添って据えられていた。角柱の寸法は幅12cmと8cmで、長さは16cmまでが遺存していた。

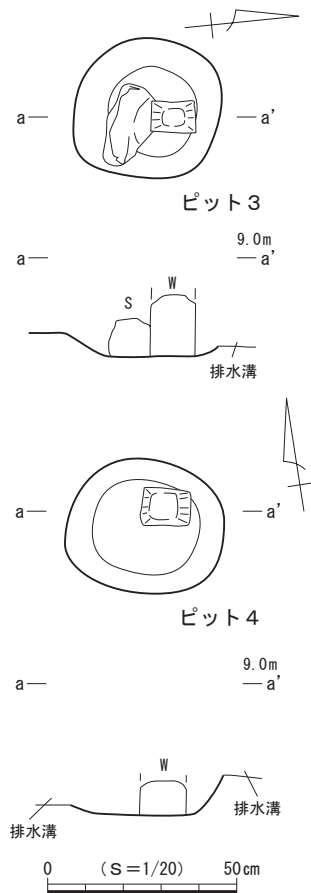


図14 第2面 ピット3・4

ピット4 (図14)

調査区北側に位置する。調査時に設けた排水溝により上面を壊されている。角柱の端部が出土した。ピットの平面形は略円形、断面形は現状で皿状を呈する。規模は径41cm、深さ10cmで、底面の標高は8.64mを測る。角柱は北東壁寄りに位置し、寸法は幅13cmと10cmで、長さは9cmまでが遺存していた。

### ピット出土遺物(図15)

各ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表9)を参照されたいが、このうち4点を図示した。

1・2はピット4、3はピット5、4はピット7から出土したロクロ成形によるかわらけである。

### (3) 遺構外出土遺物(図16)

第2面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち5点を図示した。

1～4はロクロ成形によるかわらけである。5は瀬戸窯産の入子である。6は自然木を利用した自在鉤である。

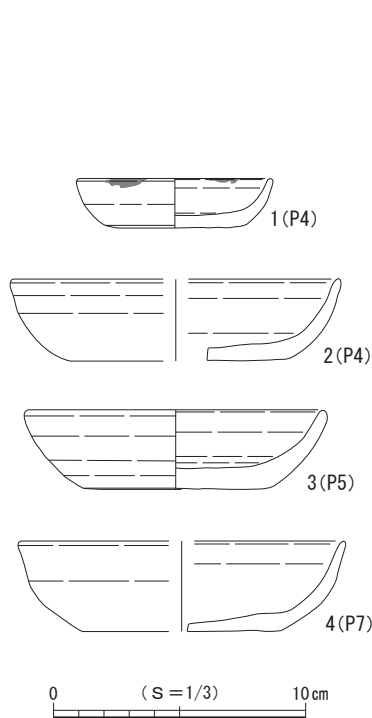


図15 第2面 ピット出土遺物

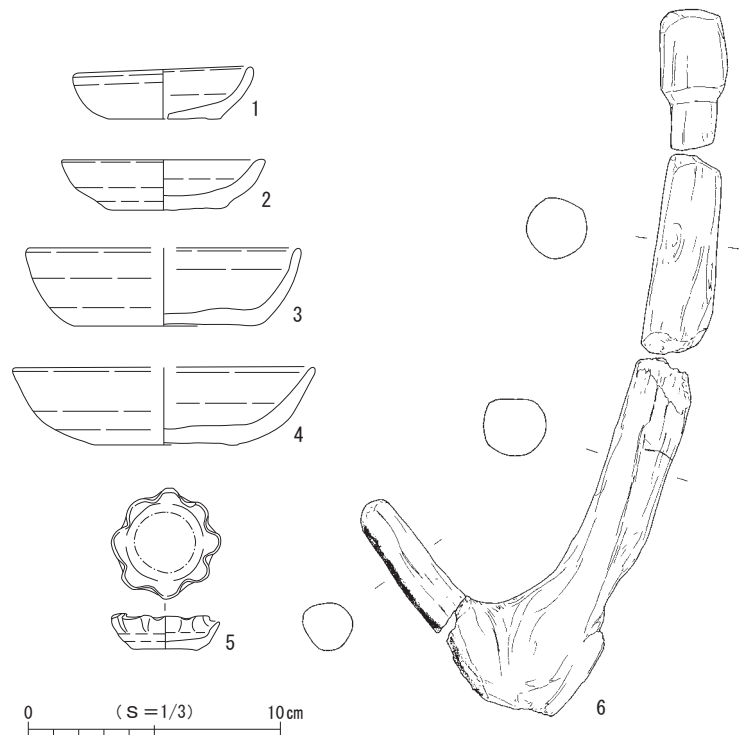


図16 第2面 遺構外出土遺物

## 第3節 第3面の遺構と遺物

第3面は標高約8.8m前後で遺構を確認した。第2面の整地層(堆積土層7層)を掘り下げたところ、その直下で遺構が検出されたため、これを第3面の遺構とした。また、調査区南東側で破碎泥岩による整地層が確認されたため、これも第3面の確認面とした。本面にも後世の削平が広く及んでおり、調査区西側では遺構の破壊が著しい。検出した遺構は、道路状遺構1条、道路側溝1条、竪穴状遺構1基、土坑1基、ピット2基で、調査区のほぼ全域が遺構ないし遺構覆土である(図17)。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉頃に属すると考えられる。

### (1) 道路状遺構

第3面では、側溝を伴う道路状遺構1条を検出した。調査区内の約半分を占め、ほぼ南北方向に延びる。

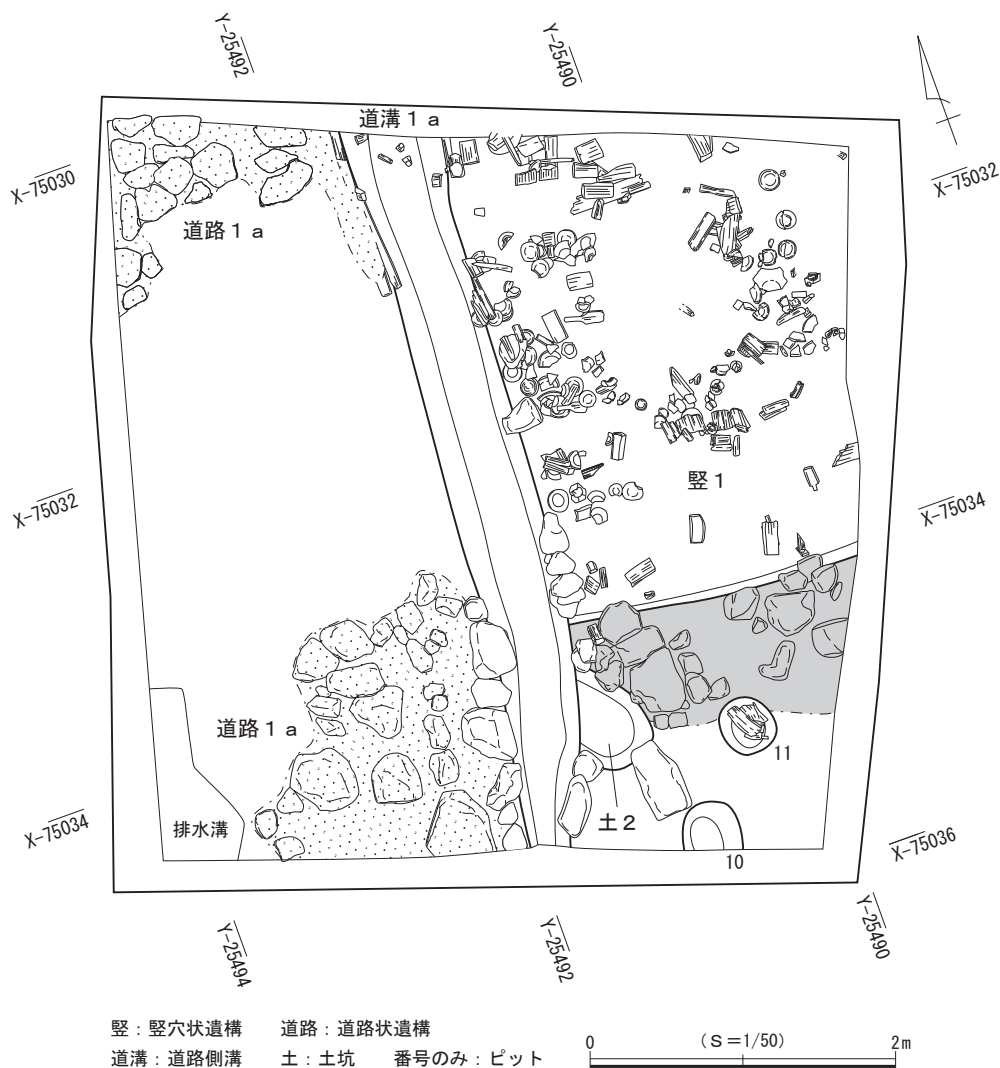


図17 第3面 遺構分布図

第3～6面にわたって継続して利用されているため、新しい段階から道路状遺構にa～d、道路側溝にa～cの枝番を付し、対応する面ごとに説明する。

### 道路状遺構 1 a (図18)

調査区中央から西側に位置する。泥岩および砂岩による整地面と、それに沿って東側に溝状遺構が検出されたため、側溝を伴う道路状遺構として一体で機能した遺構であると判断した。また、第4面以下の調査において、より古い段階の道路状遺構と側溝を改修しながら継続して利用していた様相が認められ、本面で検出した遺構が最新段階であることから、路面を道路状遺構 1 a、側溝を道路側溝 1 aとした。道路状遺構 1 aは調査区の西側半分を占めており、南北端および西端は調査区外に及んでいる。道路側溝 1 aは調査区中央を縦断しており、南北端は調査区外に及んでいる。道路側溝 1 aは東壁が竪穴状遺構 1と重複する可能性があるが、今回の調査では明らかにできなかった。また、土坑 2と南東側で重複するが、新旧関係は不明である。

道路状遺構 1 aは、後世の削平により中央を広く壊されており、調査区北西隅と調査区南側で部分的に検出された。走行方位は、東側に併設された道路側溝 1 aの主軸方位を参考にすると、南北方向の道路であると理解される。規模は、現存長4.97m、現存最大幅1.80m、路面の標高は8.90～9.00mを測る。



最大で50cm大の扁平な泥岩と砂岩が10~20cm内外の厚さで敷かれ、路面が形成されていた。路面は泥岩・砂岩の凹凸が多少あるものの、ほぼ平坦に整えられている。道路側溝の東西で10cmほどの高低差がみられ、路面側が高い。掘り方には泥岩・砂岩・木片・炭を含む暗褐色粘質土が充填されていた。

道路側溝1 aは、道路状遺構1 aの東側側溝に相当する。ほぼ直線的で、南端付近で幅が狭まるが、東壁の崩落の影響と考えられる。規模は、現存長4.77m、幅27~56cm、深さ38cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面形はU字状を呈する。底面の標高は北側で8.57m、南側で8.52mを測り、目立った高低差は認められない。南北方向に走行し、主軸方位はN-3°-Eを指す。北端の東西両壁に沿って板材が渡され杭で留められており、木組構造の側溝の一部と考えられる。また、南側の西壁付近では泥岩ないし砂岩による地固めが認められ、それが道路状遺構1 aの路肩と一体となっている状況であった。覆土は木片・炭・腐植土を含む暗茶色粘質土である。調査区北壁の土層断面では、西壁に裏込めとみられる土層が確認された(図18-2層)。

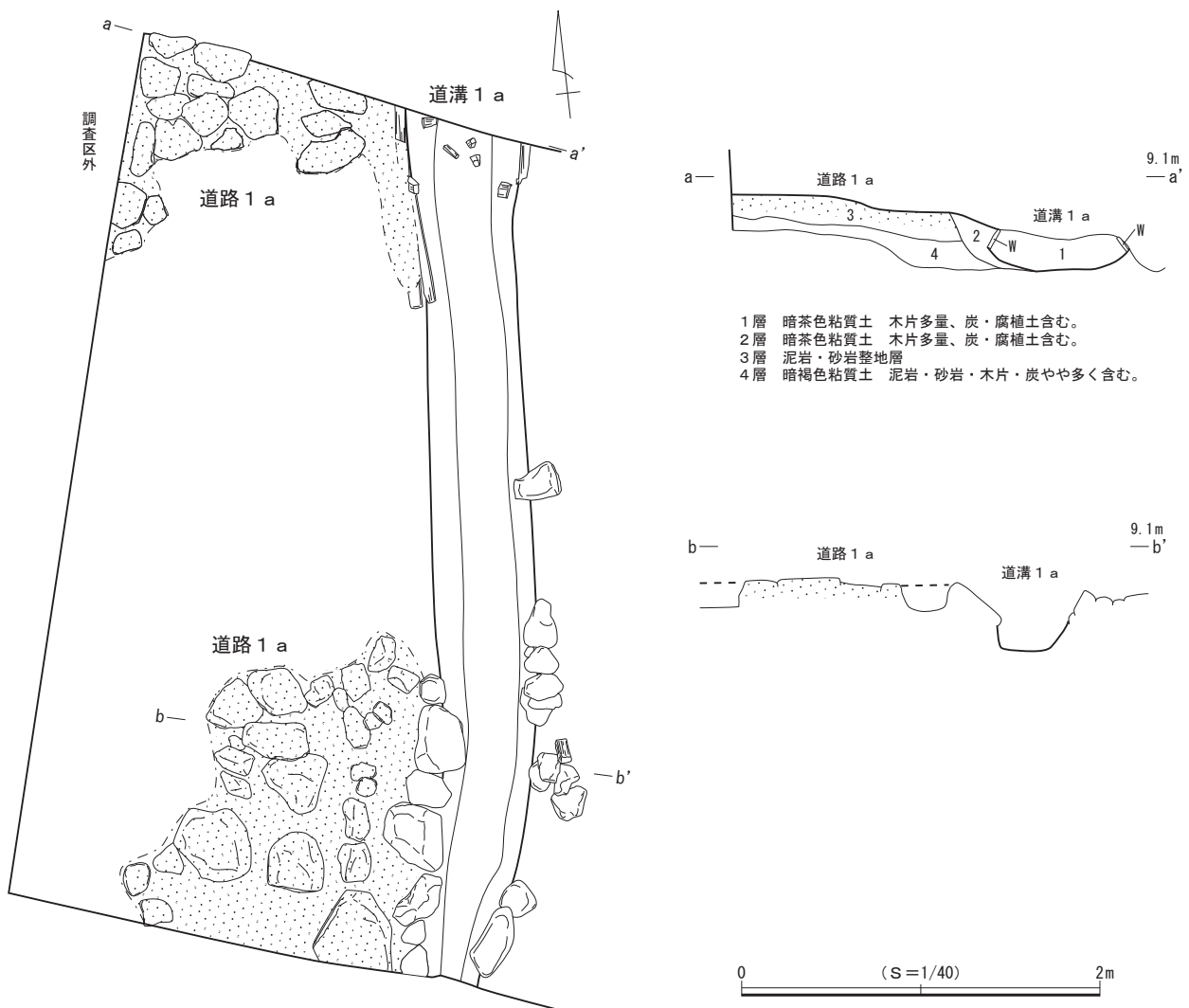


図18 第3面 道路状遺構1 a

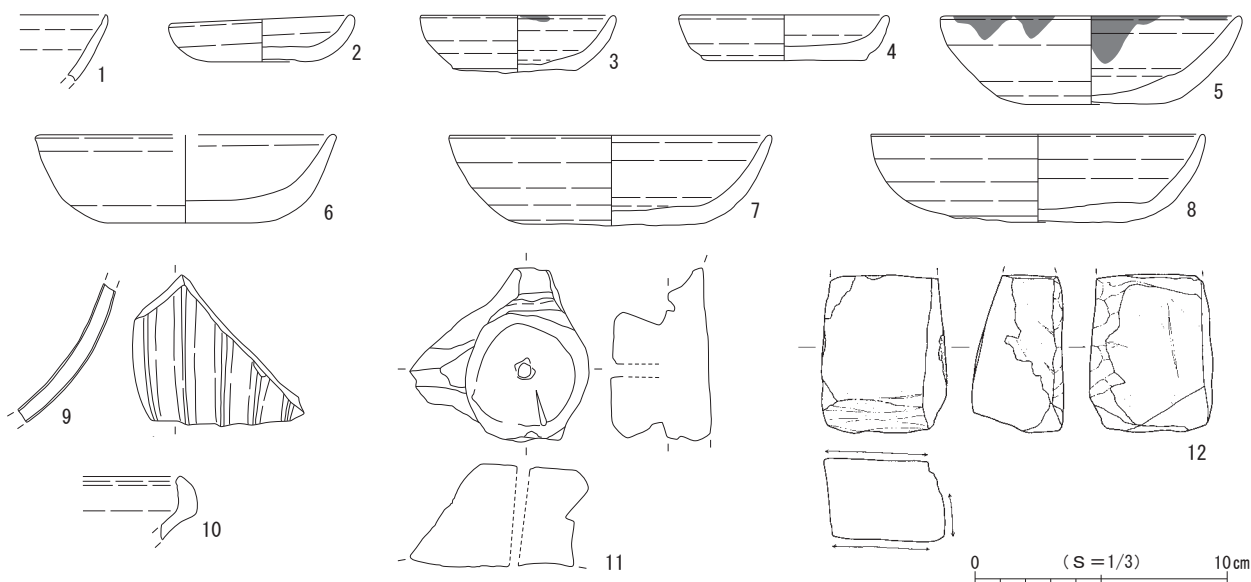


図19 第3面 道路側溝1a出土遺物

### 出土遺物 (図19)

遺物は道路状遺構1aに付属する道路側溝1aからのみ、かわらけ26点、磁器1点、陶器15点、土器1点、石製品1点が出土し、このうち12点を図示した。

1は白かわらけ、2～8はロクロ成形によるかわらけである。3には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。9は龍泉窯系青磁の酒会壺と思われる破片である。10は東播系の鉢である。11は土器の火鉢である。12は砥石である。

### (2) 竪穴状遺構

第3面では、1基を検出した。上面に削平を受け、東側から北側が調査区外に及んでいることから、全容は把握できなかった。

### 竪穴状遺構1 (図20)

調査区中央から北東側に位置し、調査区内の1/3ほどを占める。遺構の中央から南側は後世に削平され、北壁際は第2面の泥岩整地面の影響を受けているため、構築時の深度は保たれていないと思われる。また、遺構の北側および東側が調査区外に及んでおり、全容は明らかでない。他の遺構との関係としては、西側に道路状遺構1aに付随する道路側溝1aが隣接するが、削平などの影響により重複関係または先後関係の有無は捉えられなかった。位置関係および、道路状遺構と竪穴状遺構という遺構の性格から、両者は重複あるいは併存の可能性も考えられる。

平面形についてみると、検出できたのは現状では南壁のみで、おおよそ東西方向に直線的に延びている。西壁は遺存していなかったが、調査区北壁土層断面にわずかに壁の立ち上がりが認められた。加えて大量に出土した遺物の分布が道路側溝1aを越えて西へ及んでいないため、本址西壁の軸方位は道路側溝1aにおおよそ沿っていたものと考えられる。それを前提とすれば、南壁と西壁はほぼ直角に交差し、全体の平面形は方形ないし長方形を基調とするものと推定される。

規模は調査区北壁から本址南壁までの現存長が3.28m、東西方向はおおよそ2.6mが検出された。壁高は南壁で26cmを測り、床面の標高は8.45～8.50mである。主軸方位は、南壁を基準にするとN-85°-W

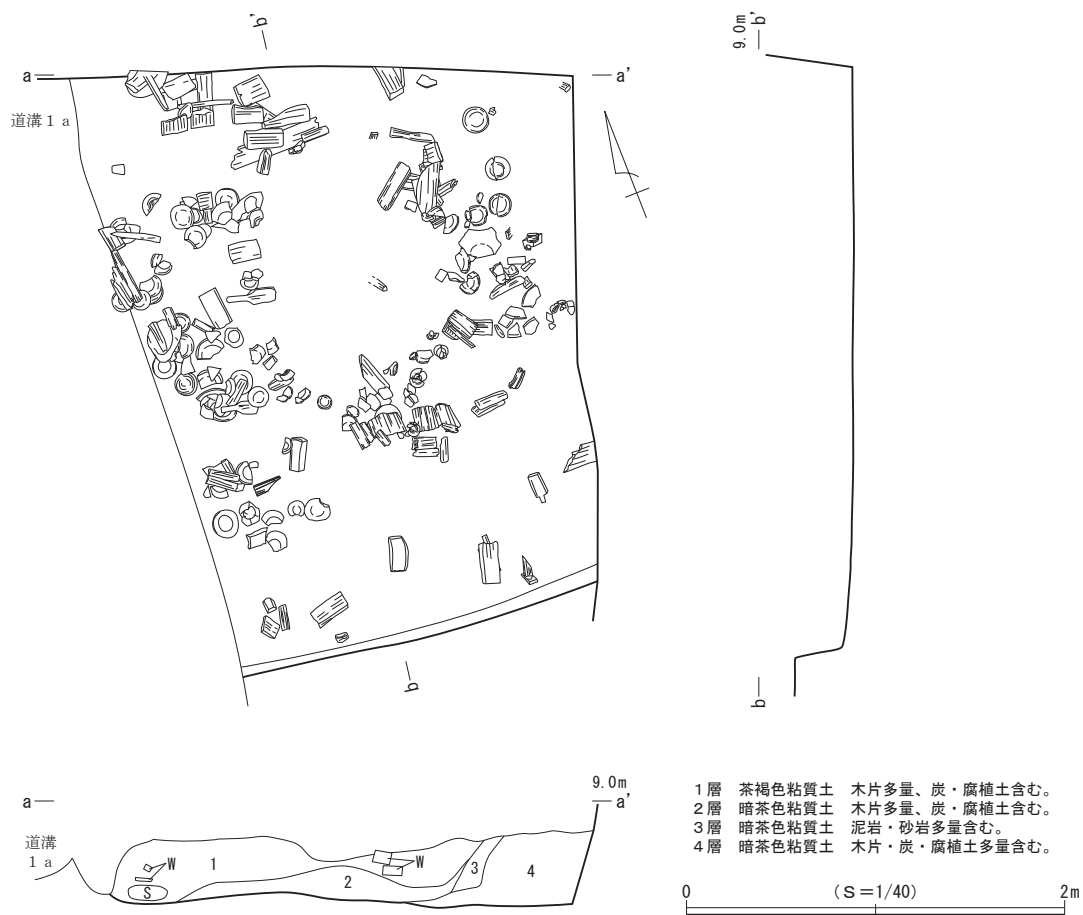


図20 第3面 竪穴状遺構 1

を指す。床面は直床式の構造である。覆土は4層に分けられ、1・2・4層は木材・炭・腐植土を含む粘質土で、3層は多量の泥岩および砂岩を含む。土層の堆積状況をみると、2層の東端が急角度で立ち上がり、それに3層が10cmほどの幅で沿うようなあり方を示している。3層が1・2・4層と異なり多量の泥岩と砂岩を含む点を考慮すると、裏込めの痕跡とも捉えられる。したがって、本址は規模の縮小を伴う建て替えなどが行われた可能性が指摘される。床面直上および覆土中から、かわらけと木製品を主体とする多量の遺物が出土した。

#### 出土遺物 (図21～25)

遺物はかわらけ451点、磁器7点、陶器46点、瓦質土器3点、石製品2点、木製品100点、金属製品6点が出土し、このうち149点を図示した。

1～90はロクロ成形によるかわらけである。4・8・12・13・17・26・27・43・44・46・52・53・61・68・77・79には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。91は青白磁の皿である。92は瀬戸窯産の卸皿である。93～98は常滑窯産の製品で、93が広口壺、94が甕、95が片口鉢Ⅰ類、96～98が片口鉢Ⅱ類である。99は用途不明の石製品である。100は銭貨で、祥符通寶(北宋・1008)である。101～149は木製品である。101～111は漆器椀、112～119は漆器皿、120は盆と思われる漆製品、121・122は漆製品の櫛である。123・124は曲物、125～129は杓子、130～136は草履芯、137は籠状、138～140は串状、141・142は棒状、143・144は用途不明の木製品、145～149は箸状である。

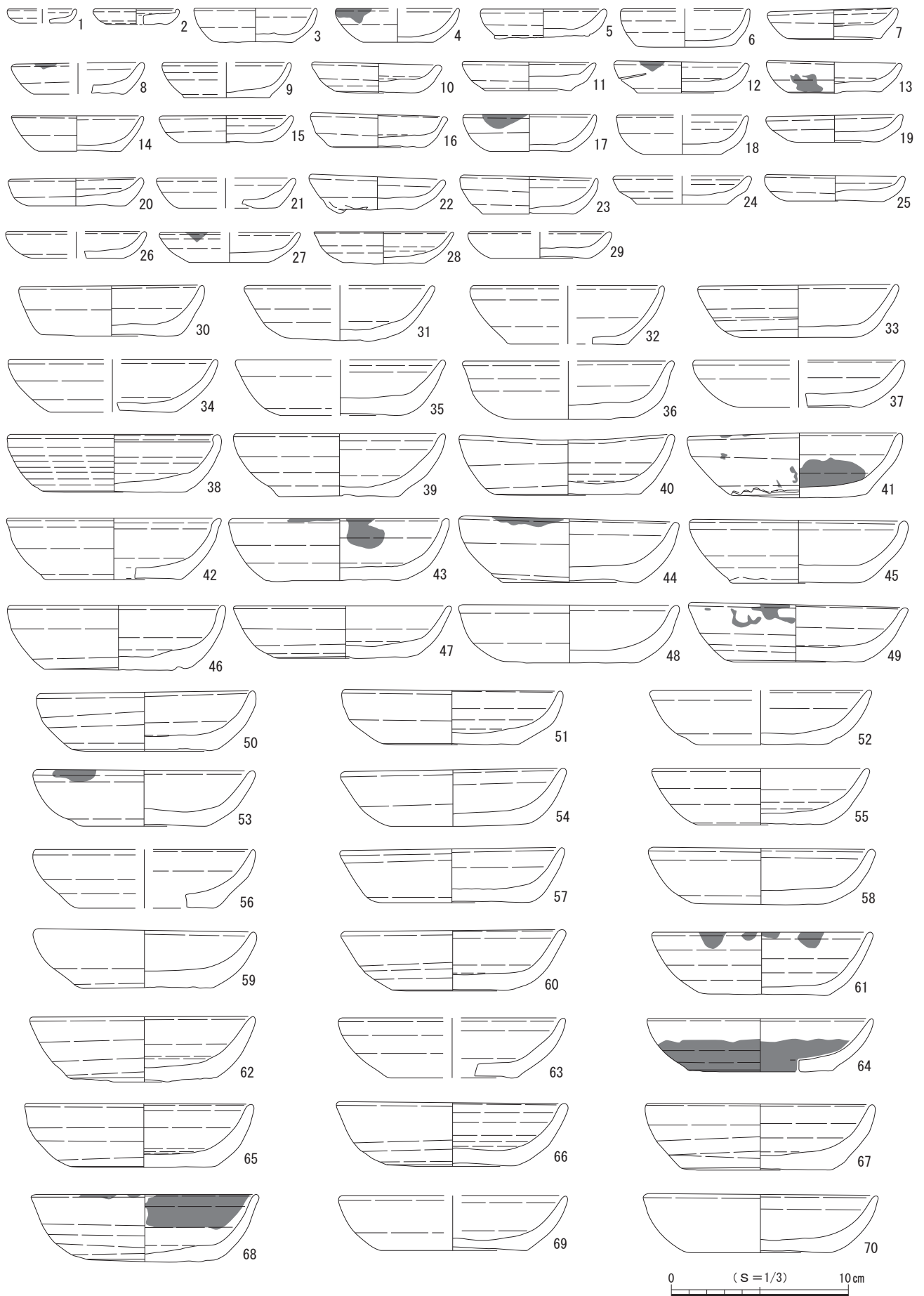


图21 第3面 竖穴状遺構1 出土遺物(1)

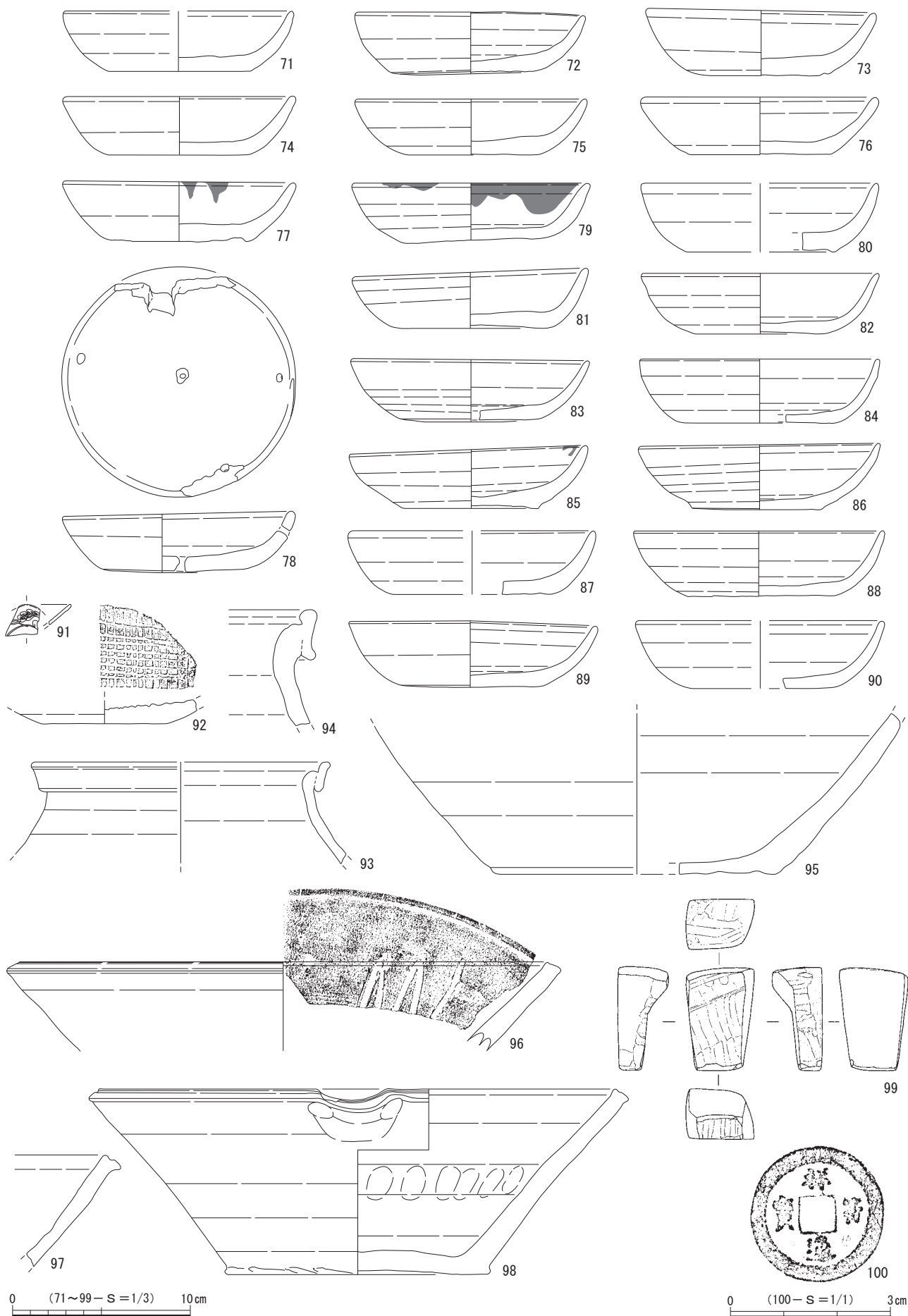


图22 第3面 竖穴状遺構1 出土遺物(2)



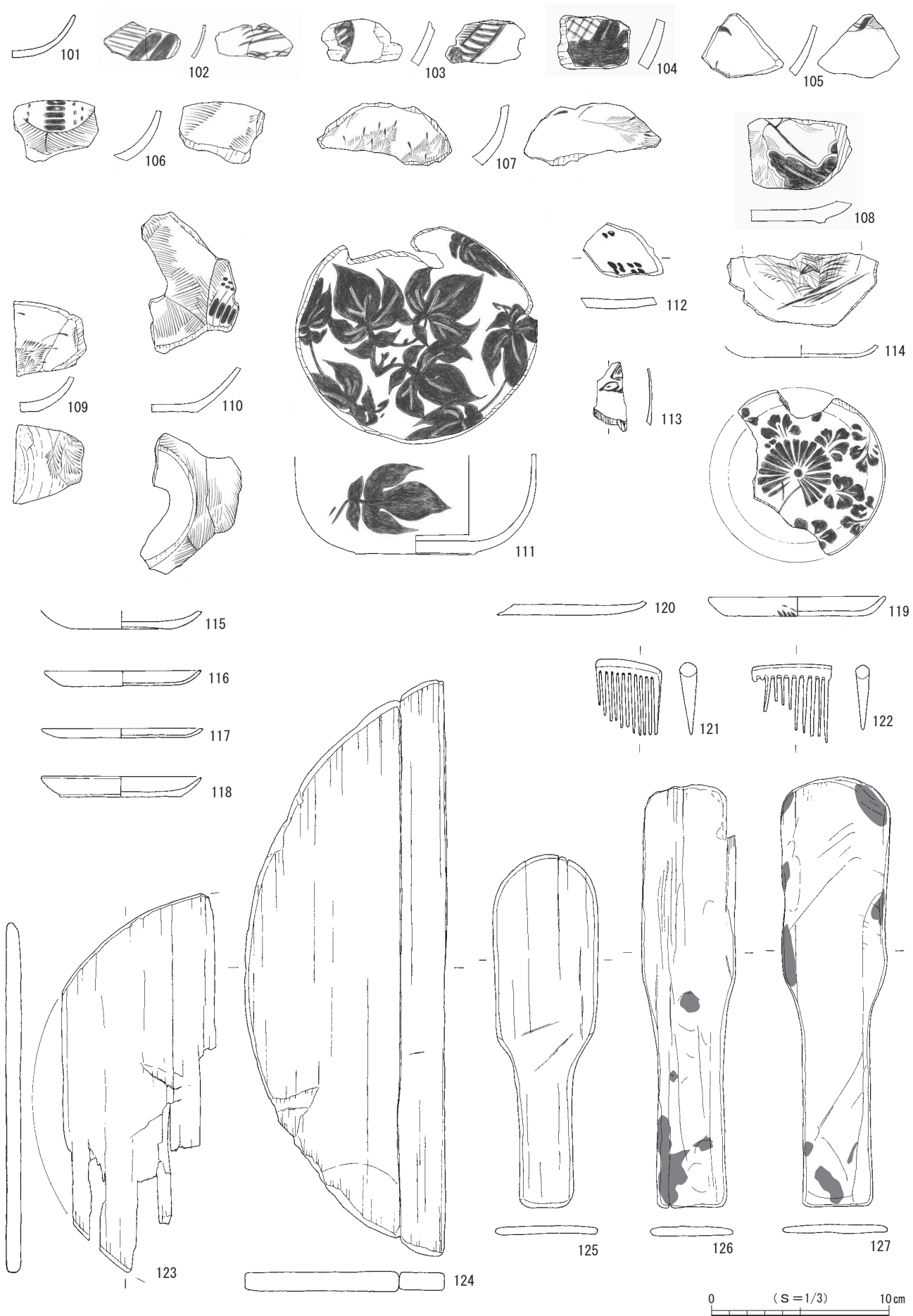


图23 第3面 竖穴状遺構1 出土遺物(3)

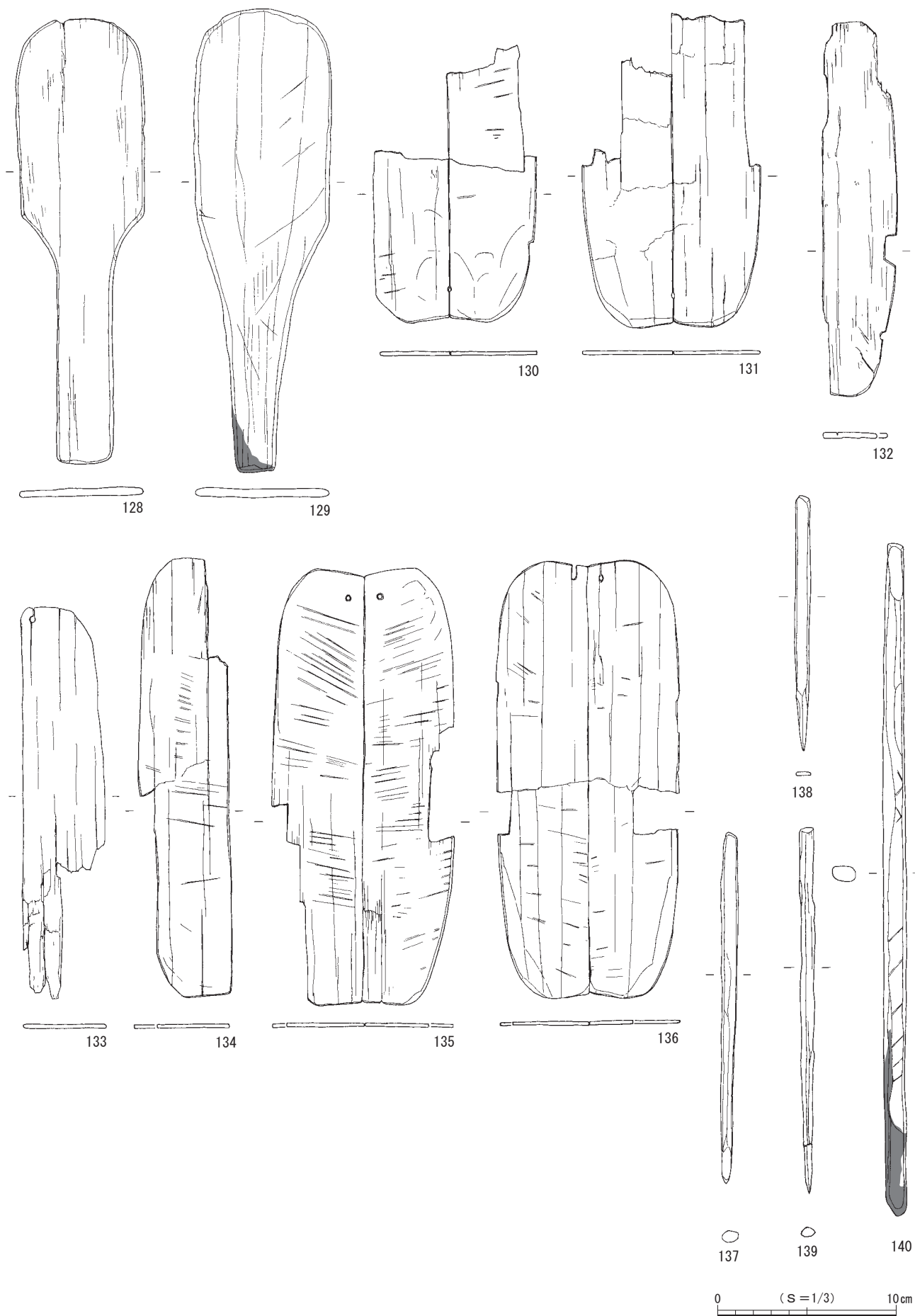


图24 第3面 竖穴状遺構1 出土遺物(4)

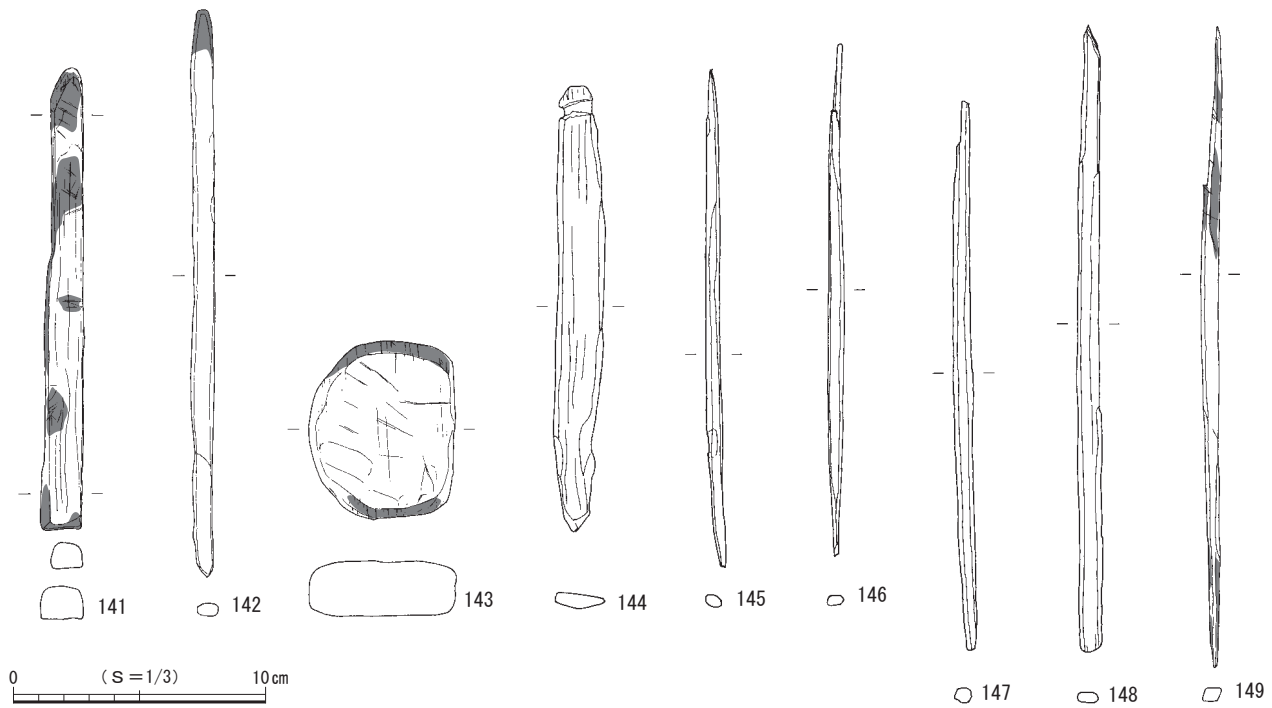


図25 第3面 竪穴状遺構1出土遺物(5)

### (3) 土坑

第3面では、1基を検出した。道路側溝1 aと重複しており、内容は明らかでない。

### 土坑2 (図26)

調査区中央南側に位置する。北西側が道路側溝1 aと重複しており、新旧関係は不明である。検出した範囲からは、平面形は楕円形を呈するものと推定される。壁はほぼ真っすぐに立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は長軸現存長68cm、短軸50cm、深さ27cmで、坑底面の標高は8.56mを測る。主軸方位はN-35°-Wを指す。

### 出土遺物 (図27)

遺物はかわらけ18点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。

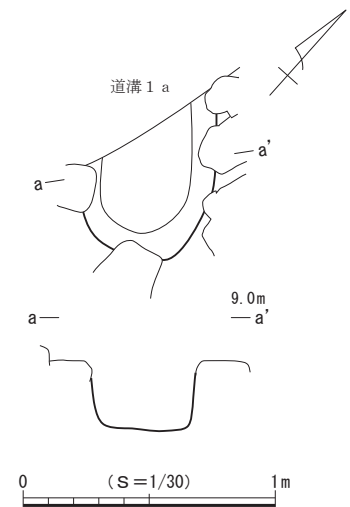


図26 第3面 土坑2

### (4) ピット (図17)

第3面では、2基を検出した。いずれも調査区南東側に分布し、ピット10は調査区外に及んでいる。平面形は略円形ないし楕円形と推定され、規模は現状で径39cmと38cm、深さ11cmと20cmである。礎石や礎板を伴うピットは検出されなかったが、ピット11から板材がややまとまって出土した。

また、各ピットからは板材以外にも少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表9)を参照されたい。

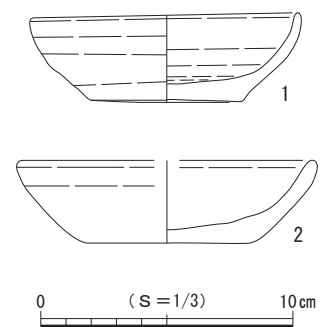


図27 第3面 土坑2出土遺物

(5) 遺構外出土遺物 (図28)

第3面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち19点を図示した。

1～6はロクロ成形によるかわらけである。7は青白磁の梅瓶である。8は瀬戸窯産の卸皿である。9～13は常滑窯産の製品で、9・10が甕、11・12が片口鉢Ⅱ類である。13は東播系の鉢である。14は瓦質土器を転用したスタンプである。15～19は木製品である。15は漆器椀、16は漆器皿、17は漆製品の調度具、18は串状、19は箸状である。

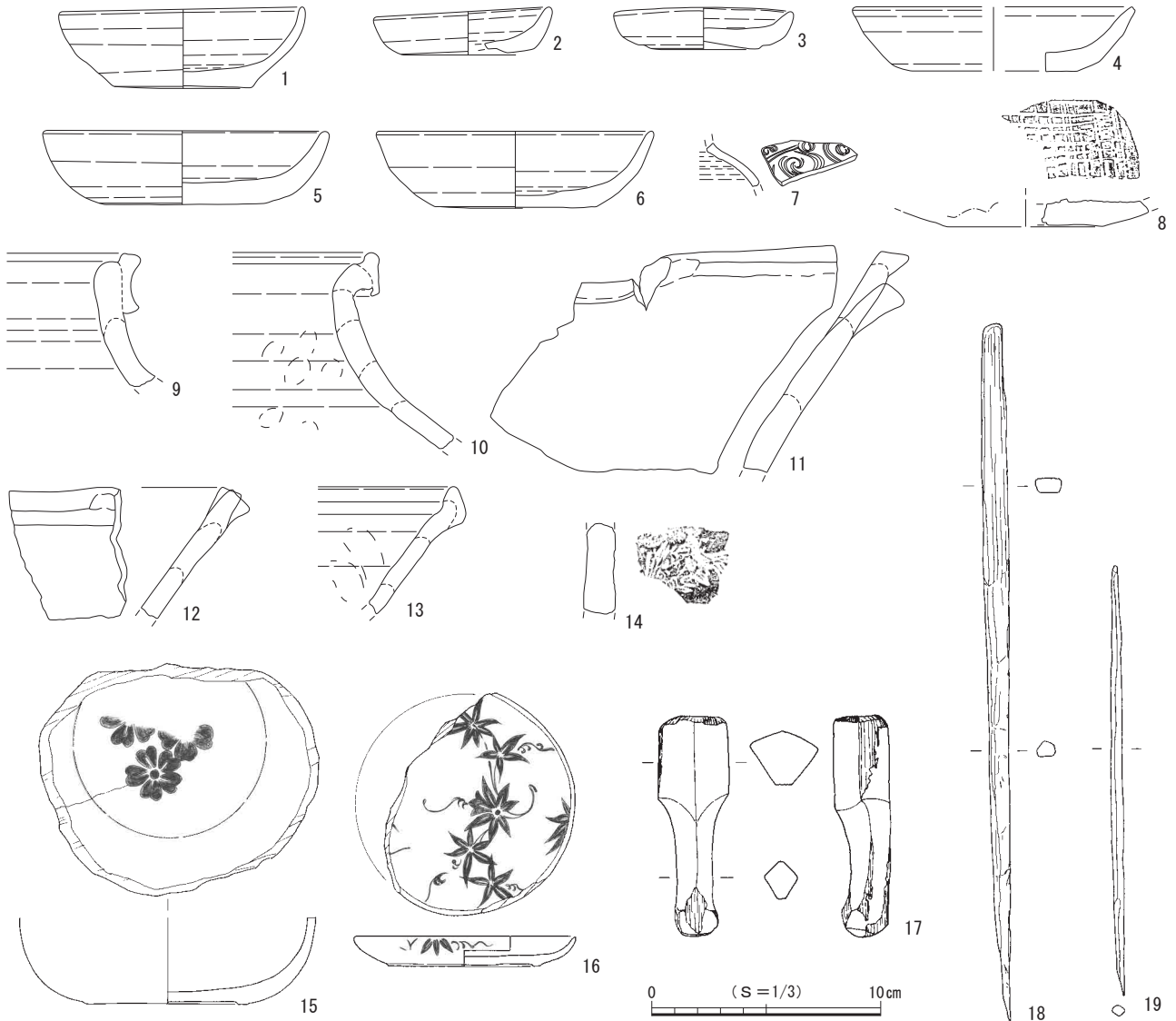


図28 第3面 遺構外出土遺物

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面は調査区東側において検出された第3面の整地層直下の標高約8.5mで遺構を確認したが、第3面の竪穴状遺構1の掘り込みが本面まで及んでいることから遺存面積は狭小であり、この面で遺構は検出されなかった。また、第3面で検出された道路状遺構1a・道路側溝1aの直下に古い段階の道路状遺構・道路側溝が発見され、これを第4面に帰属する遺構とした。検出した遺構は、道路状遺構1条、道路側溝1条である(図29)。



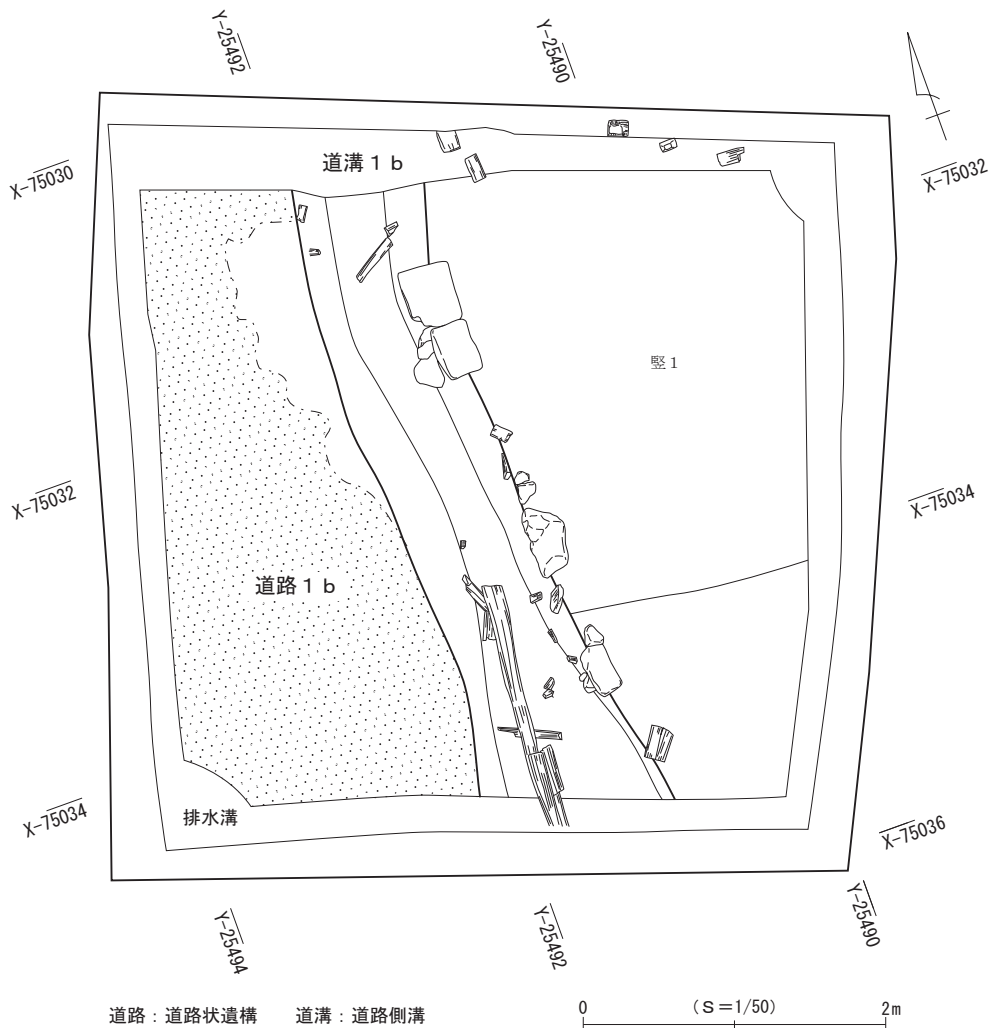


図29 第4面 遺構分布図

遺物は主にかわらけ、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀中葉頃に属すると考えられる。

#### (1) 道路状遺構

第4面では、第3面で検出した道路状遺構1 aの下層から、その前段階にあたる道路状遺構が検出された。同一の道路状遺構を継続して利用していたと考えられるため、これを道路状遺構1 bとして説明する。

#### 道路状遺構1 b (新) (図30)

調査区中央から西側に位置する。第3面で検出された道路状遺構1 aの下層で整地面が検出されたため、これを道路状遺構1 aの前段階に相当するものとして道路状遺構1 bとした。同様に、第3面の道路側溝1 aの直下からも溝状遺構が検出されたため、これを道路状遺構1 bに伴う東側側溝と考え、道路側溝1 bとした。また、第5面以下の調査において、道路側溝1 bはより古い段階の道路側溝(第5面の道路側溝1 c)を作り替えたものであり、付随する路面は本面で検出された道路状遺構1 bと同一であることが明らかとなった。つまり、第5面で道路状遺構1 bと道路側溝1 cが敷設され、道路状遺構1 bが機能している期間に道路側溝1 cから1 bへと側溝の改修が行われたと考えられる。したがって、

道路状遺構 1 b・道路側溝 1 bを道路状遺構 1 b (新)として第 4 面の遺構とし、道路状遺構 1 b・道路側溝 1 cを道路状遺構 1 b (古)として第 5 面の遺構とした。ここでは道路状遺構 1 b (新)について説明する。

道路状遺構 1 bは調査区の約1/3の面積を占め、南北端および西端は調査区外に及ぶ。北東側が一部崩落しているものの、比較的良好な遺存状態であった。規模は、現存長4.15m、現存最大幅1.93m、路面の標高は8.72~8.80mを測る。40cm大までの泥岩と砂岩を用いて形成されており、岩石の隙間が埋められ、道路状遺構 1 aより凹凸が少なく平坦である。道路側溝を挟んで東西で高低差があり、20cmほど路面が高い。

道路側溝 1 bはわずかに蛇行するものの、南端付近の西壁にみられる膨らみは崩落の影響によるものである。その崩落土を除去すると、側溝木組みの用材とみられる横板と杭が土圧で溝の内側に倒れ込む状態で出土した。その検出状態を考慮すれば、本来はおおむね直線的であったと考えられる。東壁は木組み裏込めに用いられたと考えられる切石が部分的に遺存していた。規模は、現存長4.30m、幅は切石が遺存する部分で60~75cm、深さは道路状遺構 1 bの路面から計測すると60cmである。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は箱形~逆台形を呈する。底面の標高は北側で8.17m、南側で8.20mを測り、南北で高低差はほとんど認められなかった。覆土は多量の木片・砂岩・泥岩などを含む暗茶色粘質土である。

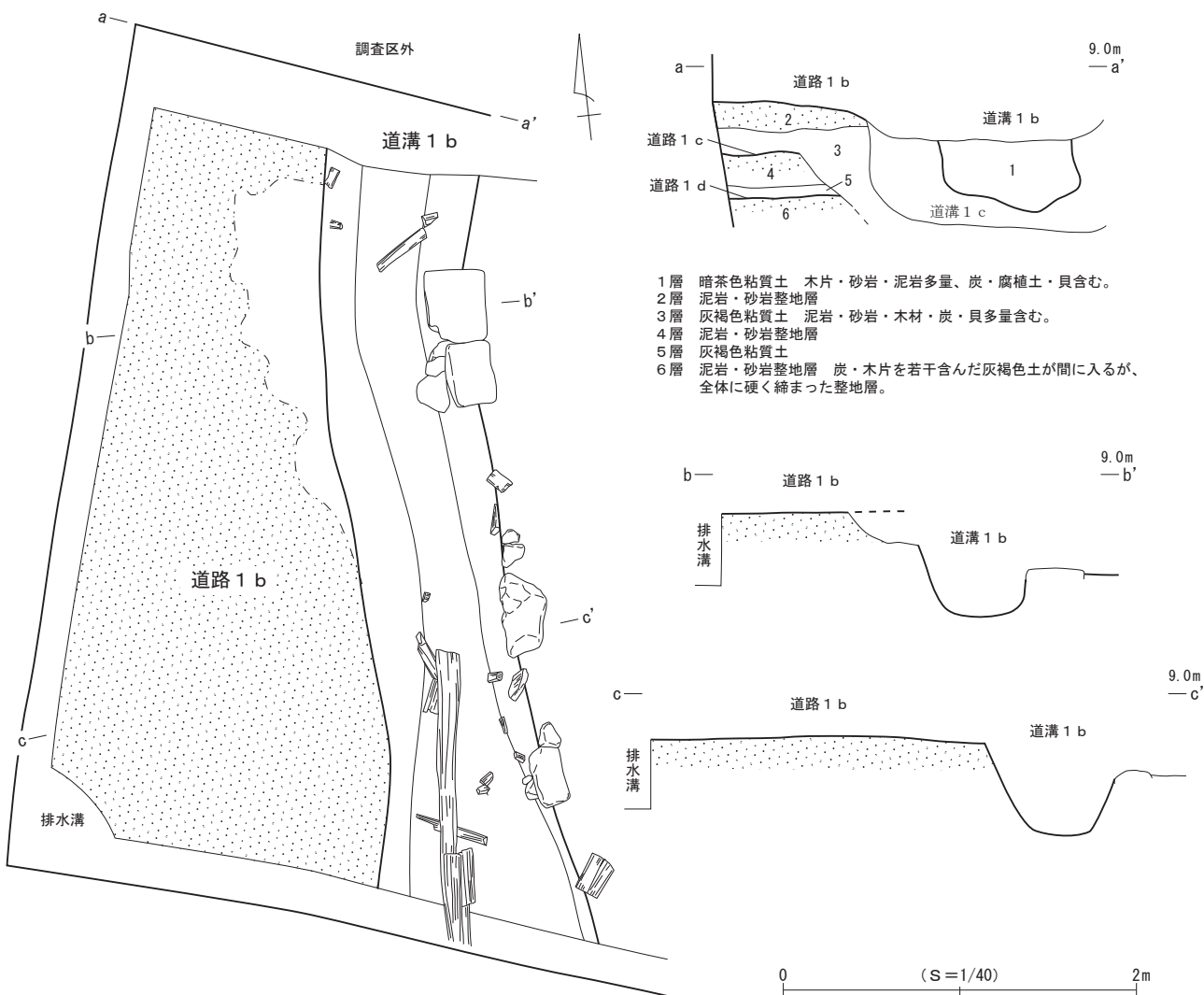


図30 第4面 道路状遺構 1 b (新)

なお、調査区北壁の土層断面で道路状遺構 1 b の掘り方を確認する過程において、より古い段階の道路状遺構と考えられる整地面が少なくとも 2 面確認されたため、道路状遺構 1 c ・ 1 d として断面図を図 30 に示した。道路状遺構 1 b の掘り方 (3 層) は、道路側溝 1 c の裏込めと一体となって道路状遺構 1 c ・ 1 d を覆っていることから、道路状遺構 1 b と道路側溝 1 c が一連のものとして同時期に構築された状況が想定される。続いて、道路側溝 1 c が埋没していく過程で改修が行われ、幅を狭めて新たに道路側溝 1 b が作られたと考えられる。

### 出土遺物 (図 31 ・ 32)

遺物は道路状遺構 1 b (新) に付属する道路側溝 1 b からのみ、かわらけ 38 点、磁器 2 点、陶器 19 点、瓦質土器 4 点、瓦 1 点、石製品 3 点、木製品 26 点、金属製品 1 点が出土し、このうち 41 点を図示した。

1 ~ 13 は口クロ成形によるかわらけである。4 ・ 12 には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。14 ・ 15 は常滑窯産の甕である。16 は丸瓦である。17 は銭貨で、開元通寶 (南唐 ・ 960) である。18 ~ 41 は木製品である。18 ~ 20 は漆器椀、21 ・ 22 は曲物、23 は調度具、24 ・ 25 は荷札、26 は下駄、27 ・ 28 は草履芯、29 は籠状、30 ~ 32 は串状、33 ・ 34 は棒状、35 ~ 38 は用途不明の木製品、39 ~ 41 は箸状である。

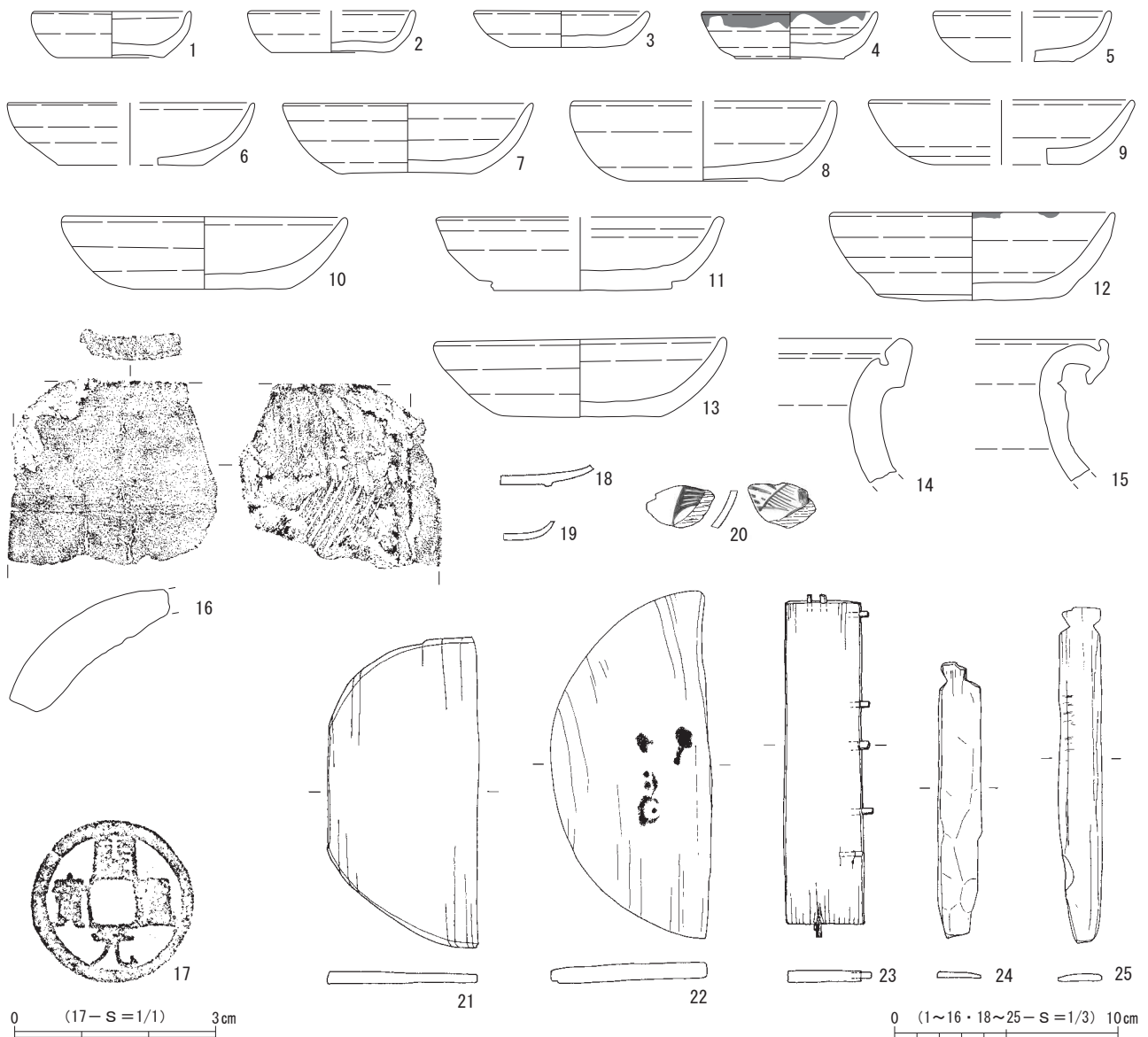


図 31 第 4 面 道路側溝 1 b 出土遺物 (1)

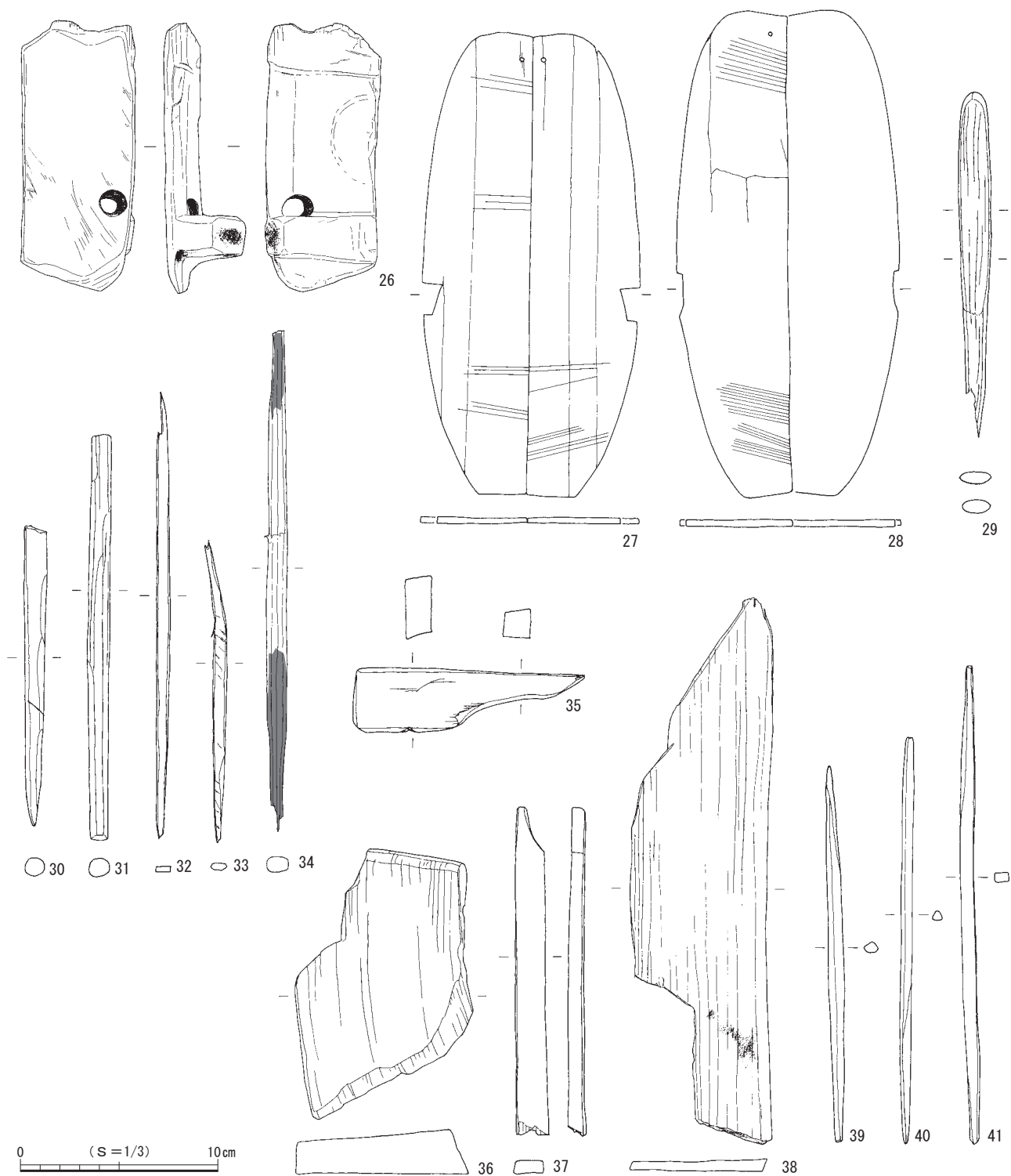


図32 第4面 道路側溝1b出土遺物(2)

(2) 遺構外出土遺物(図33・34)

第4面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち51点を図示した。

1～9はロクロ成形によるかわらけである。10～12は常滑窯の製品で、10が壺、11が片口鉢Ⅰ類、12が片口鉢Ⅱ類である。13は平瓦である。14は鉄製の釘である。15～51は木製品である。15は漆器椀、16は漆器皿、17は器種不明の漆器である。18は折敷、19は曲物、20は檜扇、21は下駄、22～25は草履芯、26～29は籠状、30は栓、31～34は串状、35は棒状、36～41は用途不明の木製品、42～51は箸状である。



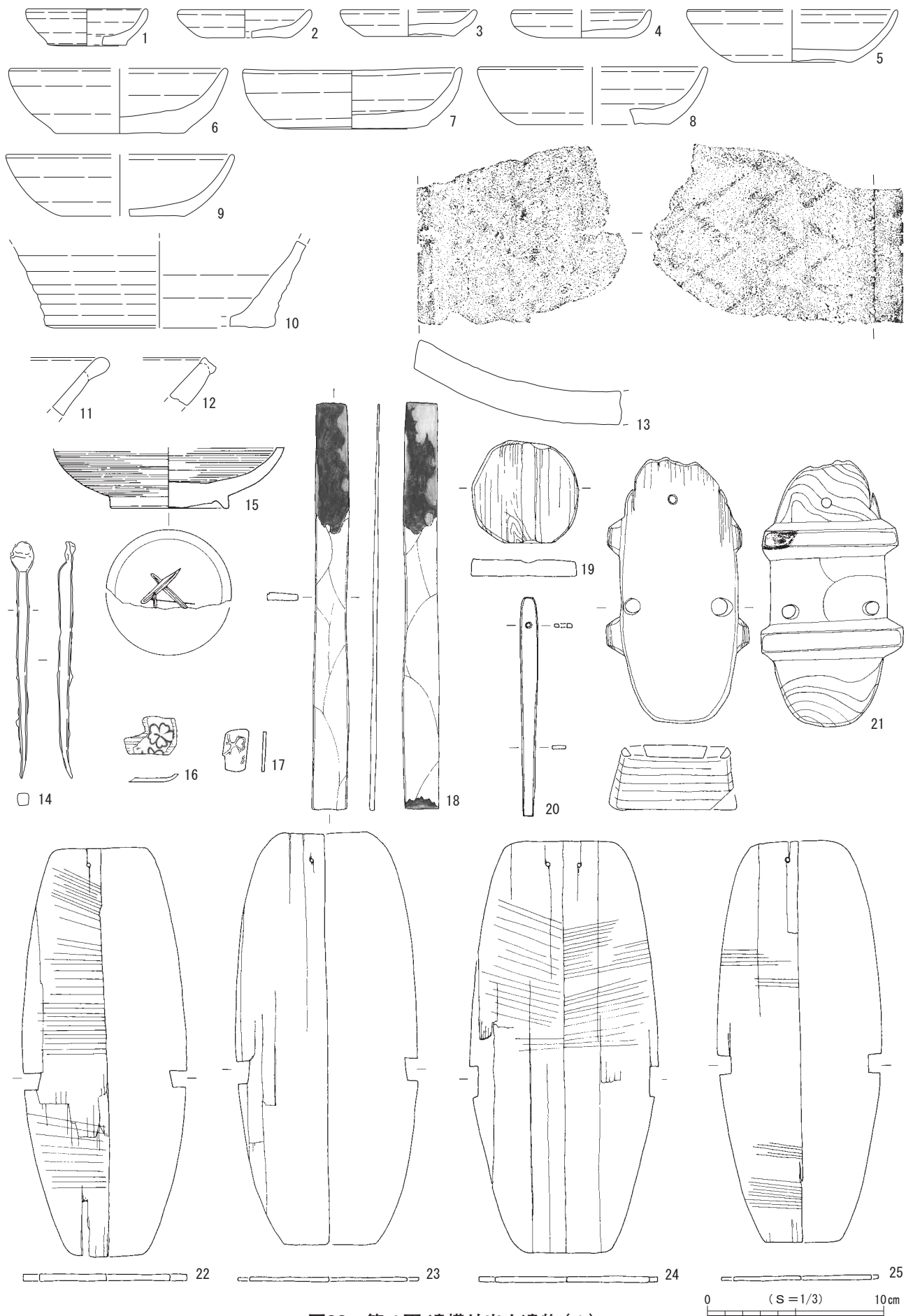


图33 第4面 遺構外出土遺物(1)

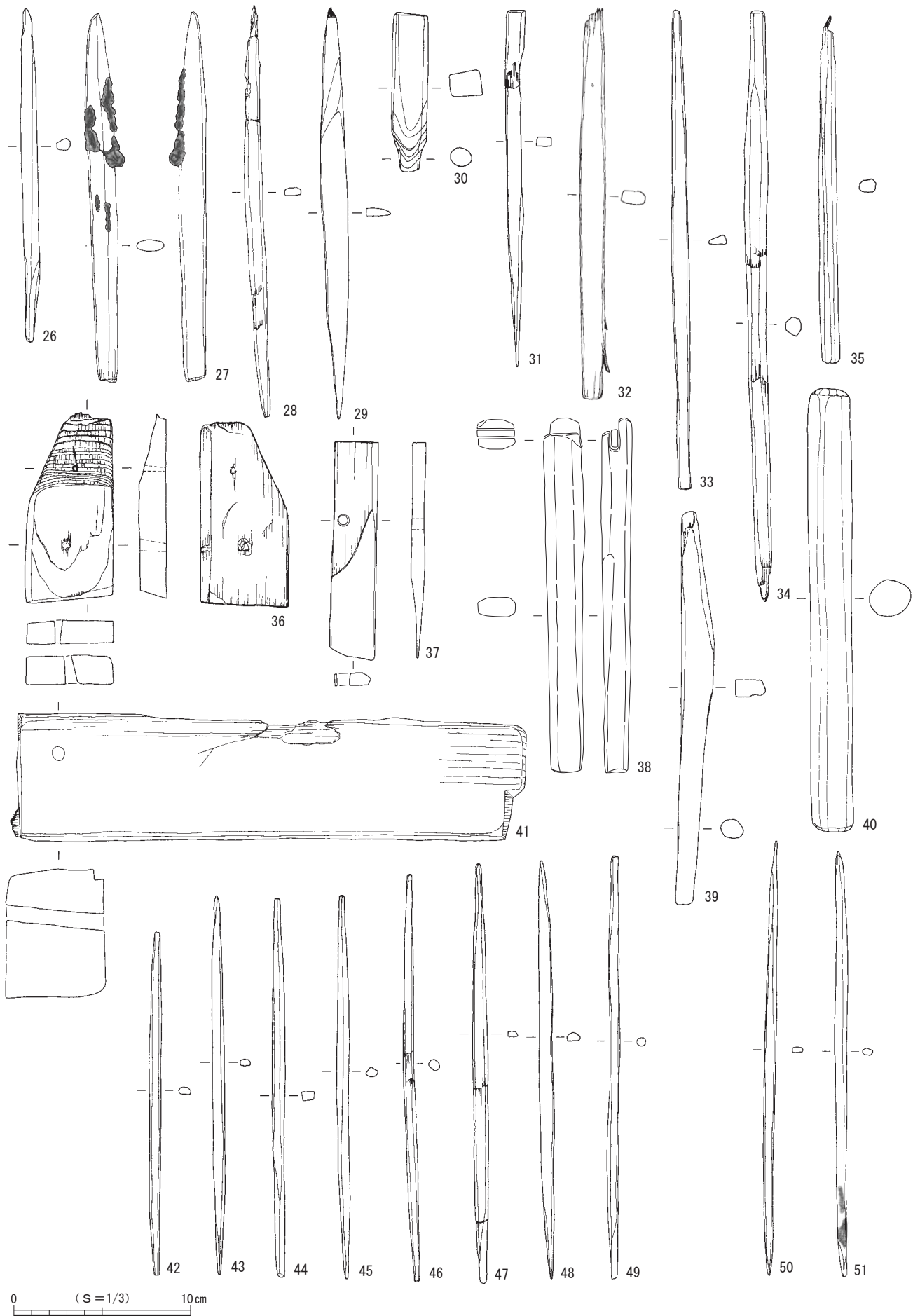


图34 第4面 遺構外出土遺物(2)

## 第5節 第5面の遺構と遺物

第5面は、第3面の竪穴状遺構1の掘り込み直下から検出された土坑とピット、さらにその同一レベルで検出された土坑について、本面に帰属する遺構とした。確認面の標高は約8.4～8.5mを測る。また、第4面で検出した道路状遺構1b(新)の前段階の道路状遺構が検出されたため、これを道路状遺構1b(古)として第5面の遺構とした。検出した遺構は、道路状遺構1条、道路側溝1条、土坑2基、ピット8基である(図35)。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

### (1) 道路状遺構

第5面では、第4面で検出された道路状遺構1b(新)の直下に古い段階の道路状遺構が検出されたため、これを道路状遺構1b(古)として説明する。

### 道路状遺構1b(古)(図36)

調査区中央から西側に位置する。第4面で検出された道路側溝1bの直下から溝状遺構が検出され、

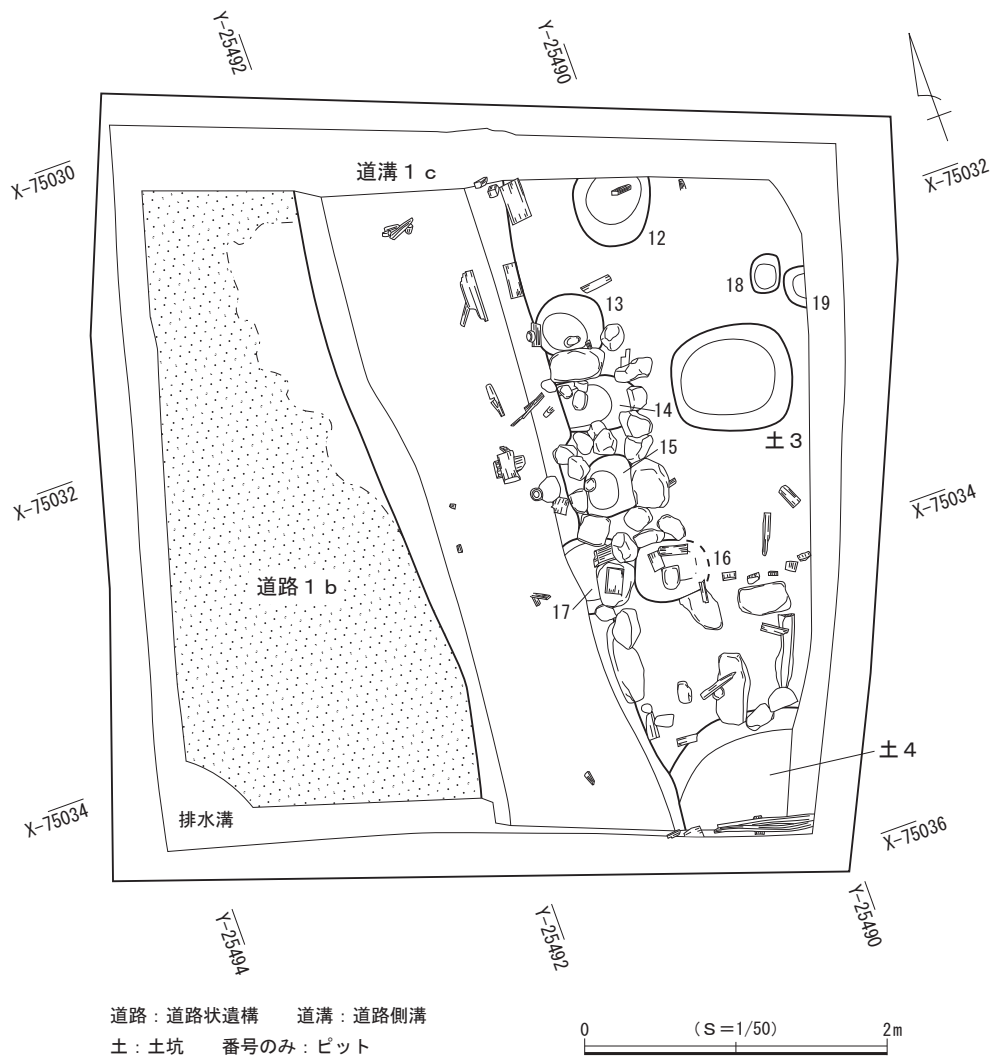


図35 第5面 遺構分布図

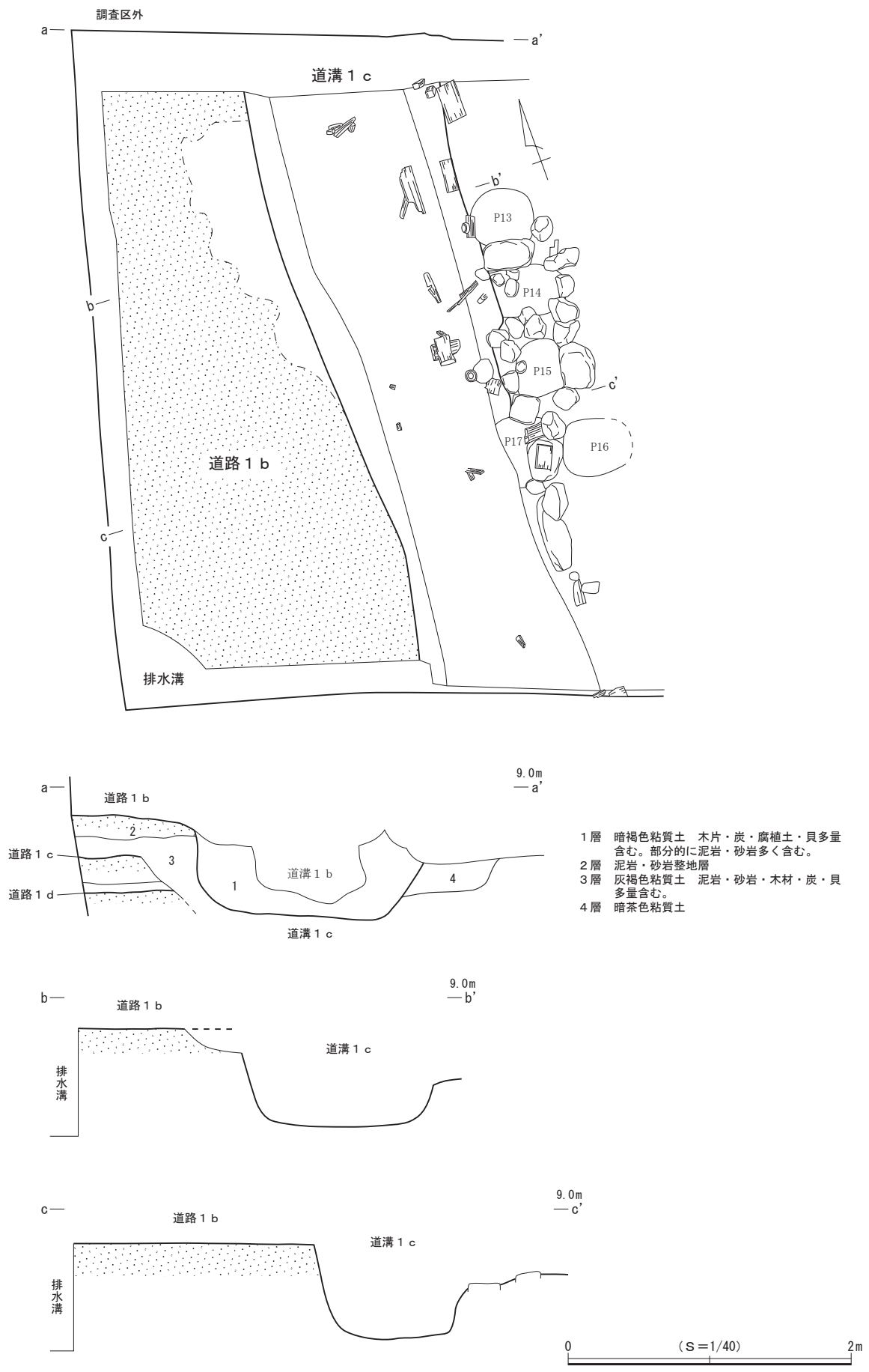


図36 第5面 道路状遺構 1 b (古)



道路状遺構 1 b に伴う古い段階の道路側溝であると判断したため、道路状遺構 1 b と道路側溝 1 c を道路状遺構 1 b (古) とした。なお、道路状遺構 1 b (新) との関係と、道路状遺構 1 b の詳細については第 4 面にて記述しているので参照されたい。ここでは主に道路側溝 1 c について説明する。

道路側溝 1 c は、調査区中央を直線的に縦断する。東壁の中ほどに裏込め土と思われる泥岩および砂岩が露出しており、ピット 13~17 が穿たれていることから本址が古い。規模は、現存長 4.40m、幅 1.09~1.37m、深さは道路状遺構 1 b の路面から計測すると 69cm である。今回検出された道路状遺構に伴う側溝としては、最も幅が広い。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面の標高は北側と南側でともに 8.08m を測り、高低差がない。道路状遺構 1 b の路面と側溝を挟んで東側の高低差は 30cm 前後である。覆土は多量の木片・炭・腐植土・貝を含む暗褐色粘質土である。図 36 に示した 3・4 層が裏込め土と考えられ、4 層は道路状遺構 1 b の掘り方と一体であることから、道路状遺構 1 b と道路側溝 1 c は同時期に作られたものと考えられる。

### 出土遺物 (図 37~39)

遺物は道路状遺構 1 b (古) に付属する道路側溝 1 c からのみ、かわらけ 35 点、磁器 3 点、陶器 15 点、瓦 1 点、石製品 2 点、木製品 21 点、金属製品 3 点が出土し、このうち 35 点を図示した。

1~7 はロクロ成形によるかわらけである。6 には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。8~10 は龍泉窯系青磁で、8・9 が椀 II 類、10 が碗の底部である。11 は常滑窯産の甕である。12 は平瓦である。13 は硯である。14 は銭貨で、皇宋通寶 (北宋・1038) である。15~35 は木製品である。15・16 は漆器椀、17・18 は漆器皿、19・20 は曲物、21 は枕ではないかと思われる製品である。22 は下駄、23 は草履芯、24 は籠状、25~28 は用途不明の製品、29~35 は箸状である。

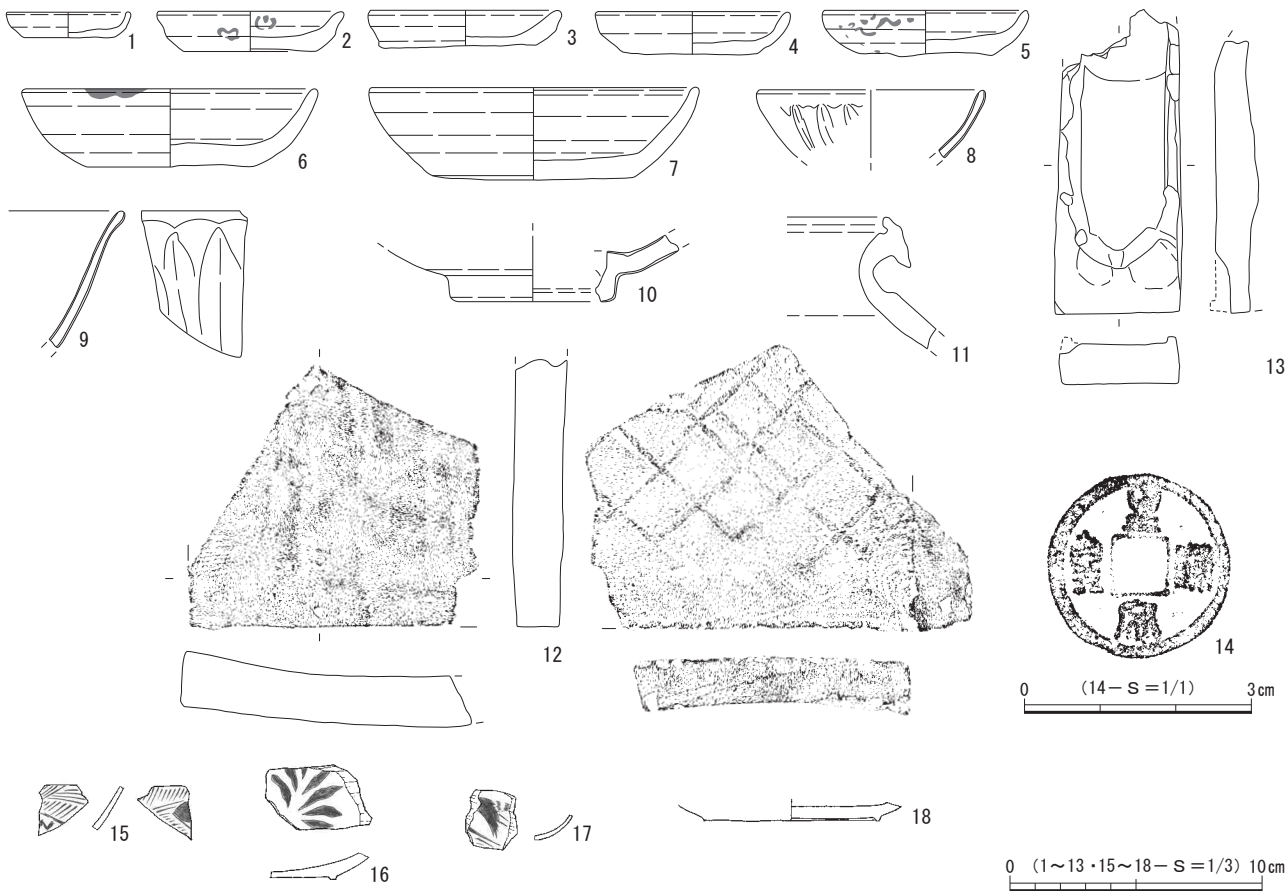


図 37 第 5 面 道路側溝 1 c 出土遺物 (1)

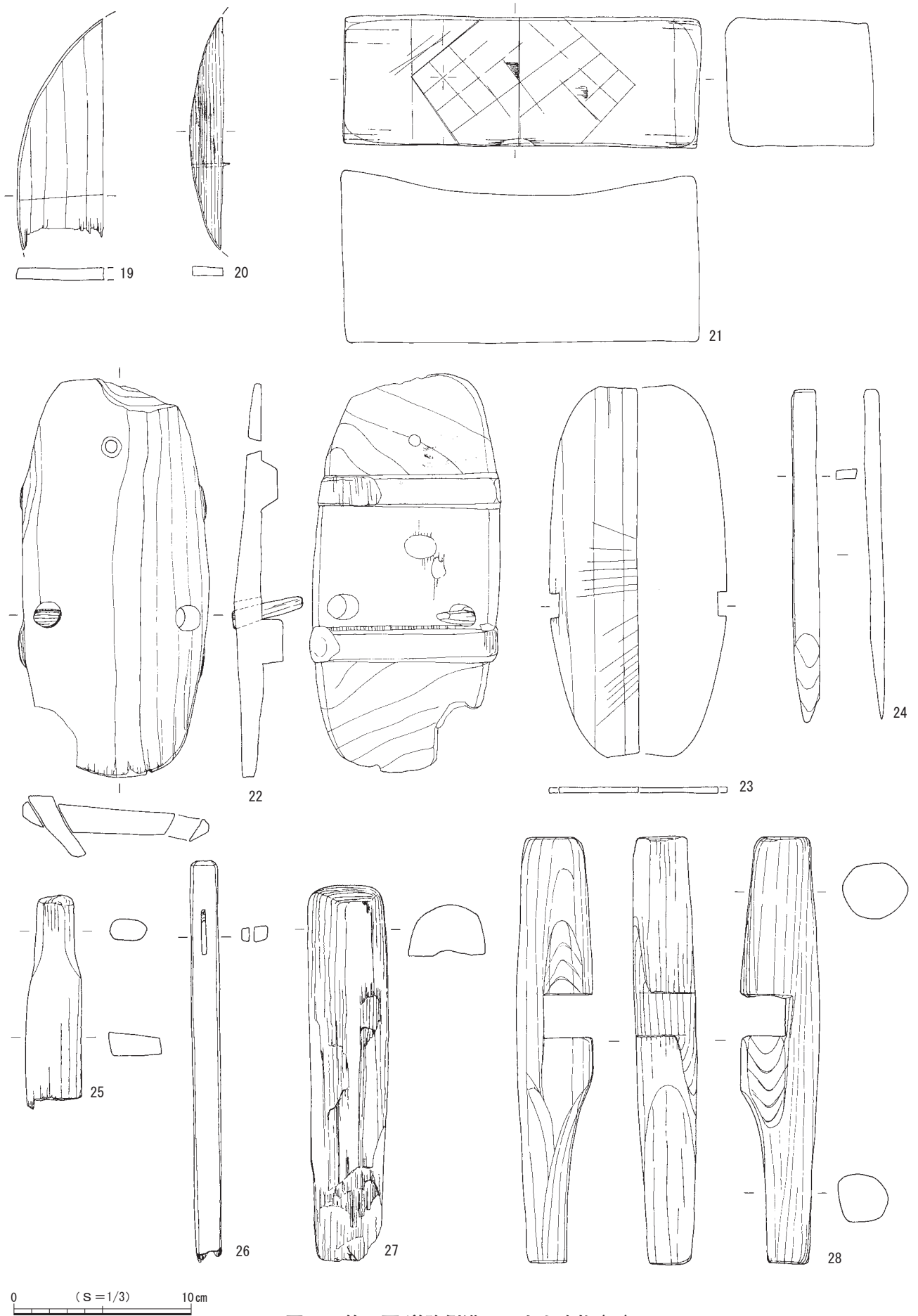


图38 第5面 道路側溝 1 c 出土遺物 (2)

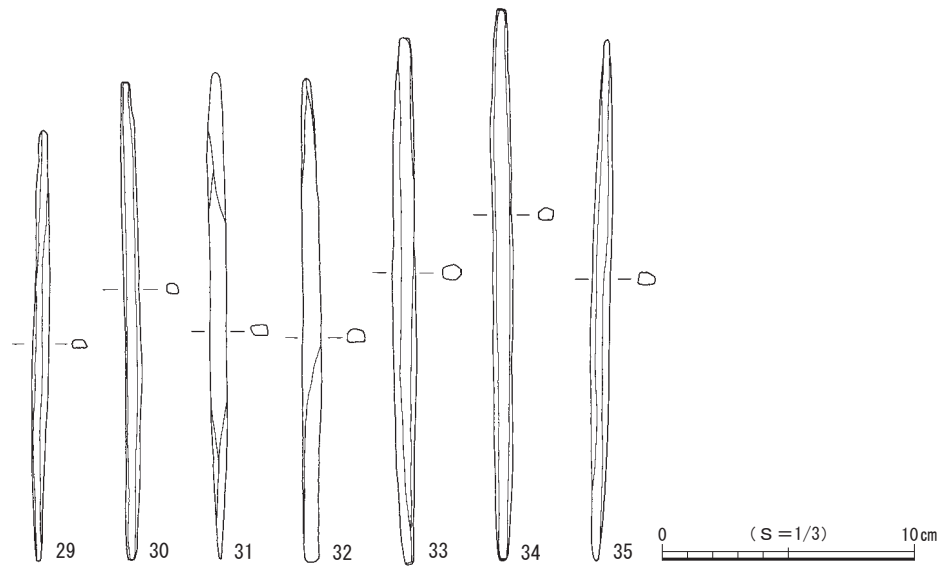


図39 第5面 道路側溝1c出土遺物(3)

(2) 土 坑

第5面では、2基を検出した。いずれも調査区東端付近に分布する。平面形は隅丸方形ないし楕円形で、規模は現状で長軸80cmと81cm、深さはともに45cmである。1基は調査区外に及んでおり、全容が把握できたものは1基である。

土坑3 (図40)

調査区北東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈する。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸80cm、短軸70cm、深さ45cmで、坑底面の標高は8.01mを測る。主軸方位はN-79°-Wを指す。覆土は2層に分けられ、上層は泥岩と木片を含み締まりのない暗灰色粘質土、下層は木片を含み締まりのない茶灰色粘質土である。

出土遺物 (図41)

遺物はかわらけ27点、陶器2点、木製品9点が出土し、このうち11点を図示した。

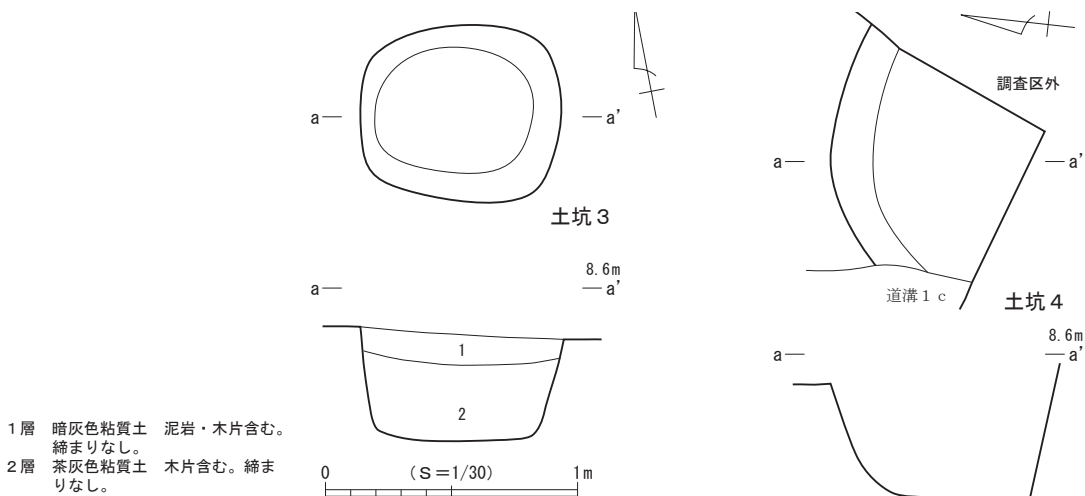


図40 第5面 土坑3・4

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3～11は木製品である。3は杓子、4は籠状、5～11は箸状である。

#### 土坑4 (図40)

調査区南東隅に位置する。西側が道路側溝1cと重複しており、新旧関係は不明である。東側と南側は調査区外に及んでおり、遺構の全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は円形を基調とするものと推定される。壁は開いて立ち上がる。規模は北東-南西方向の現存長81cm、北西-南東方向の現存長79cm、深さ45cmで、坑底面の標高は8.03mを測る。

#### 出土遺物 (図42)

遺物はかわらけ21点、陶器1点、木製品5点が出土し、このうち11点を図示した。

1～5はロクロ成形によるかわらけである。6は常滑窯産の片口鉢I類である。7～11は木製品である。7は草履芯、8は用途不明、9～11は箸状である。

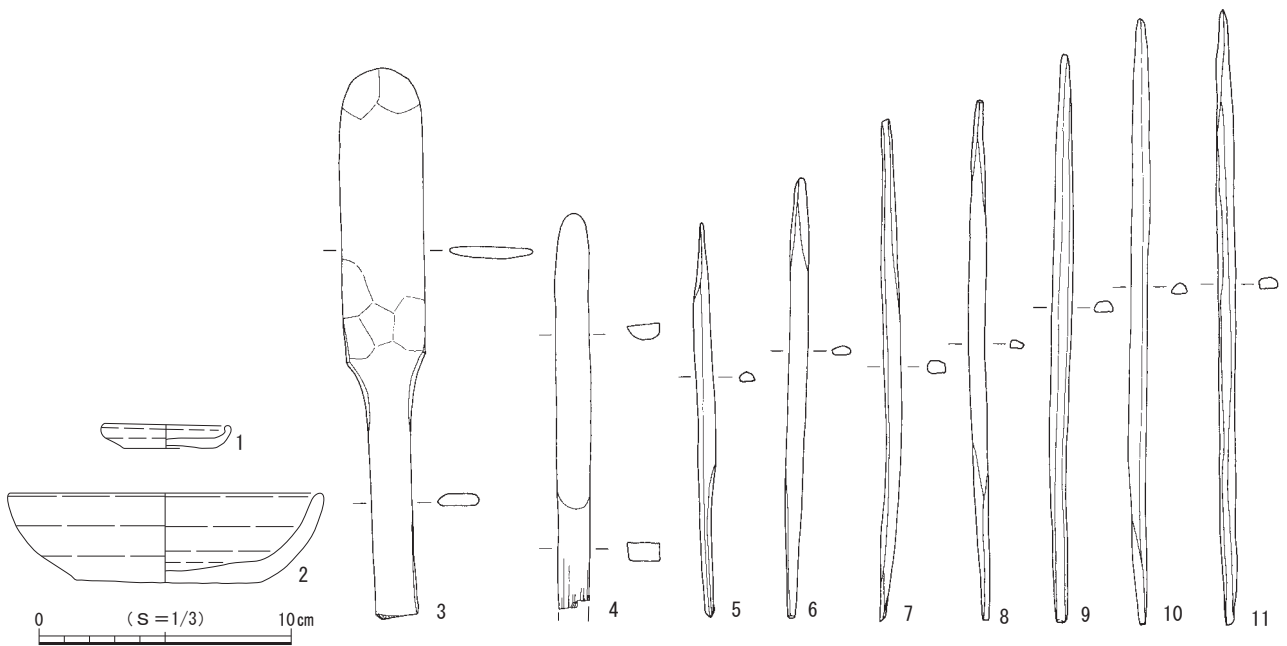


図41 第5面 土坑3出土遺物

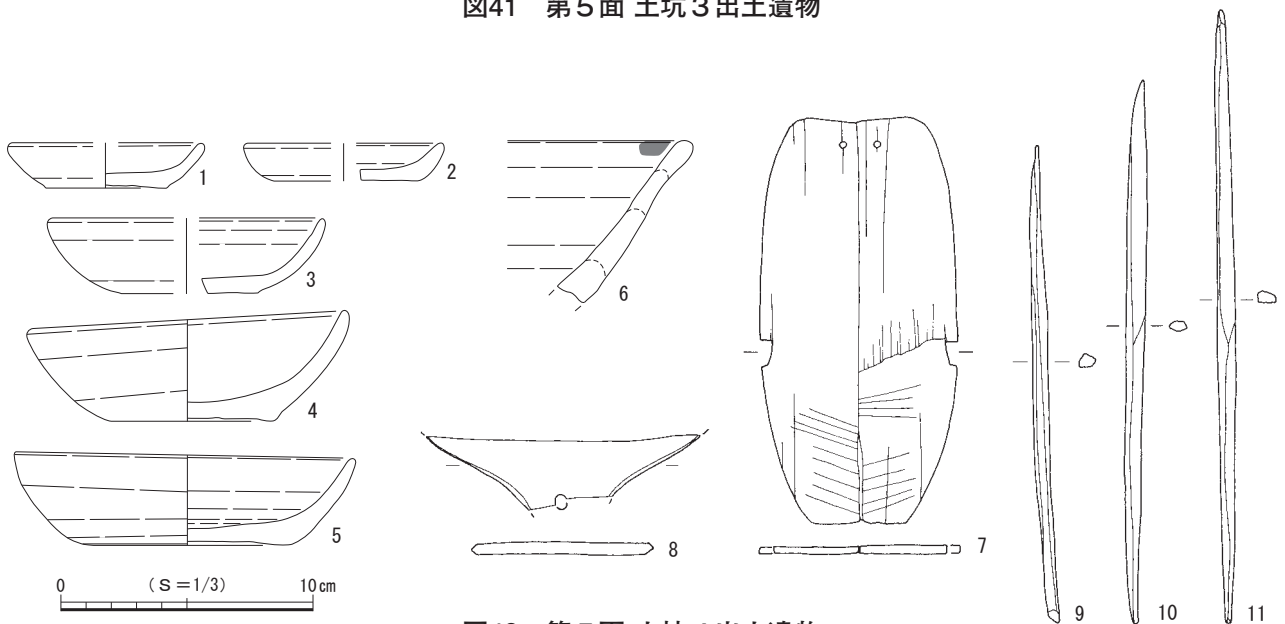


図42 第5面 土坑4出土遺物



### (3) ピット (図35)

第5面では、8基を検出した。いずれも調査区東側に分布する。このうちピット13~16はほぼ直線的に並ぶが、ピット間の関係は明らかでない。平面形は略円形ないし楕円形を呈し、規模は現状で25~53cm、深さ14~37cmを測る。ピット13~17は道路側溝1cの東壁の裏込め土に掘り込まれており、いずれもピットが新しい。このうちピット16から礎板が、ピット17から角柱が出土した。また、掘り込みは確認できなかったが、ピット17の東側にある石の上から礎板が出土している。

#### 出土遺物 (図43)

各ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表9)を参照されたいが、このうち4点を図示した。

1はピット12から出土した青白磁の梅瓶である。2・3はピット13から出土した。2は常滑窯産の壺、3は木製品の草履芯である。4はピット16から出土した、常滑窯産の片口鉢I類である。

### (4) 遺構外出土遺物 (図44)

第5面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち3点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3は銭貨で、天聖元寶(北宋・1023)である。

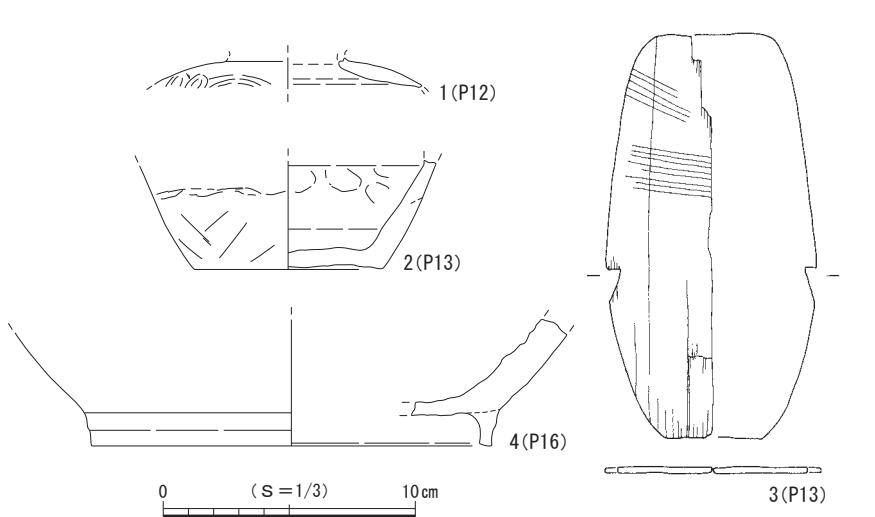


図43 第5面 ピット12・13・16出土遺物

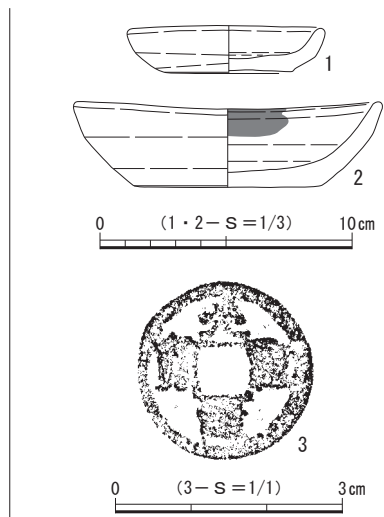


図44 第5面 遺構外出土遺物

## 第6節 第6面の遺構と遺物

第6面は、第5面の調査を終了した後、下層の様相を把握するために行ったトレンチ調査で確認した。トレンチは調査区北壁際から東壁際にかけて幅70cmで設定し、底面は標高約7.7mまで掘り下げた。便宜上、北壁際を東西トレンチ、東壁際を南北トレンチとする。東西トレンチで1ヵ所、南北トレンチで1ヵ所の合計2ヵ所で横板と杭が組まれた状態で検出され、全容が把握できなかったため仮に木組遺構1・2として説明する(図45)。また、これ以外にも何らかの部材と思われる木材、あるいは木製品が出土しており、それぞれ出土した標高は異なるが、一括して第6面に帰属するものとした。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉~後葉頃に属すると考えられる。

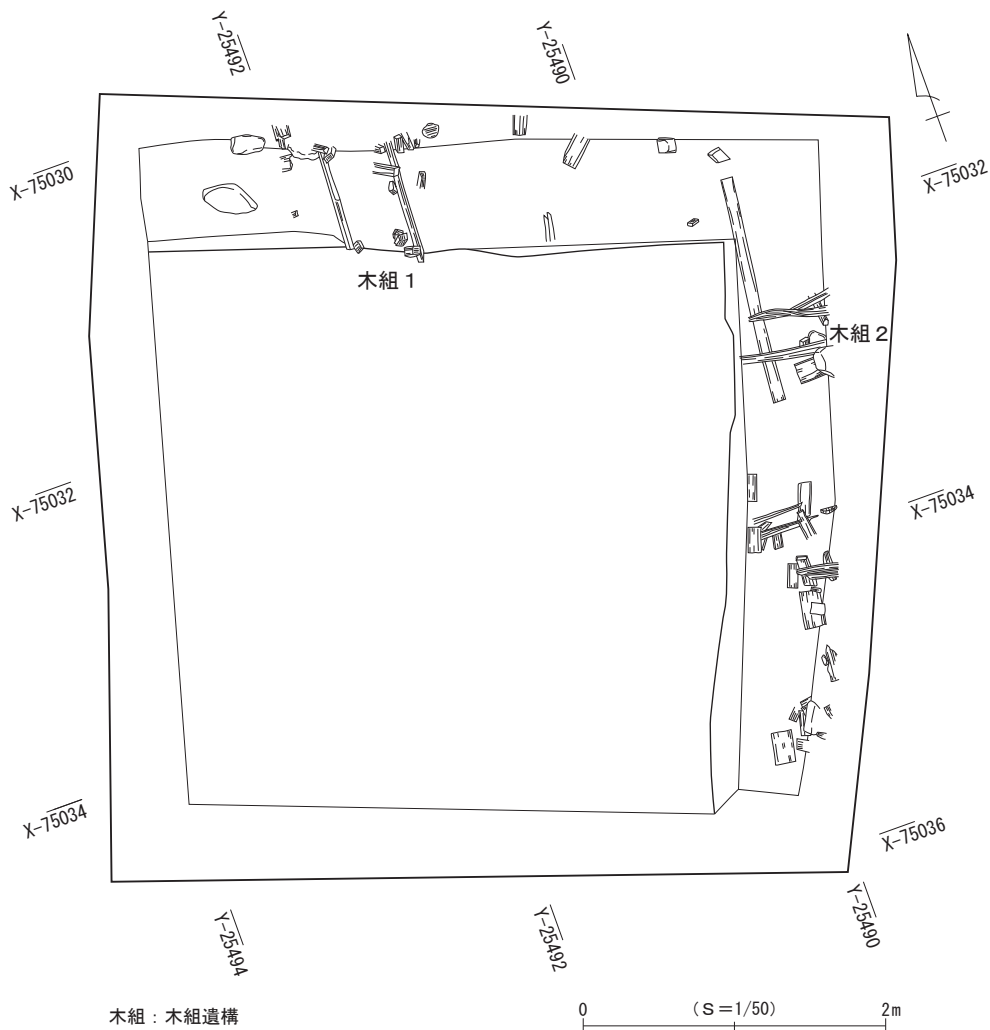


図45 第6面 遺構分布図

(1) 木組遺構

第6面では、2基を検出した。横板と杭が組み合わされたもので、トレンチ内の狭小な範囲での確認にとどまるため、遺構の全容は明らかでない。

木組遺構 1 (図45)

東西トレンチ西側に位置する。幅15cmほどの板材2枚が平行して南北方向に配置され、杭で固定されている。北側は調査区外に及ぶが、南側はトレンチの範囲を越えては検出されず、直上の道路側溝1cにより壊された可能性がある。規模は、横板の長さが最大84cm、2枚の横板の間隔が38cmである。横板上面の標高は約8.1mを測る。杭は主に横板の内側に打ち込まれていた。湧水のため掘り方や土層断面については不明瞭であったため、遺構の詳細は明らかでない。しかし、道路側溝1cの直下に位置し、軸方向が同一である点を考慮すれば、道路側溝1c構築以前の道路側溝に伴う側板であった可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

木組遺構 2 (図45)

南北トレンチ北側に位置する。幅10cm内外の板材2枚が平行して配置され、木組遺構1と類似したあ

り方を呈している。軸方向は、土圧の影響からか板材に歪みが生じているものの、おおむね東西方向である。東西両端はトレンチ外に及んでいる。検出された規模は、横板の長さが最大56cm、2枚の横板の間隔が21cmである。側板上面の標高は7.95m前後を測る。2枚の横板はそれぞれ杭を1本ずつ伴っており、いずれも横板の内側に打ち込まれていた。木組遺構2についても、湧水の影響により掘り方や土層断面が不明瞭であったため、遺構の詳細は明らかでない。木組構造をもつ溝状遺構の側板や柵状の木組の一部といった可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

## (2) 遺構外出土遺物(図46)

第6面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち8点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけである。2には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。4は青白磁の梅瓶である。5は常滑窯産の甕である。6・7は瓦で、6が軒平瓦、7が平瓦である。8は木製品の曲物である。

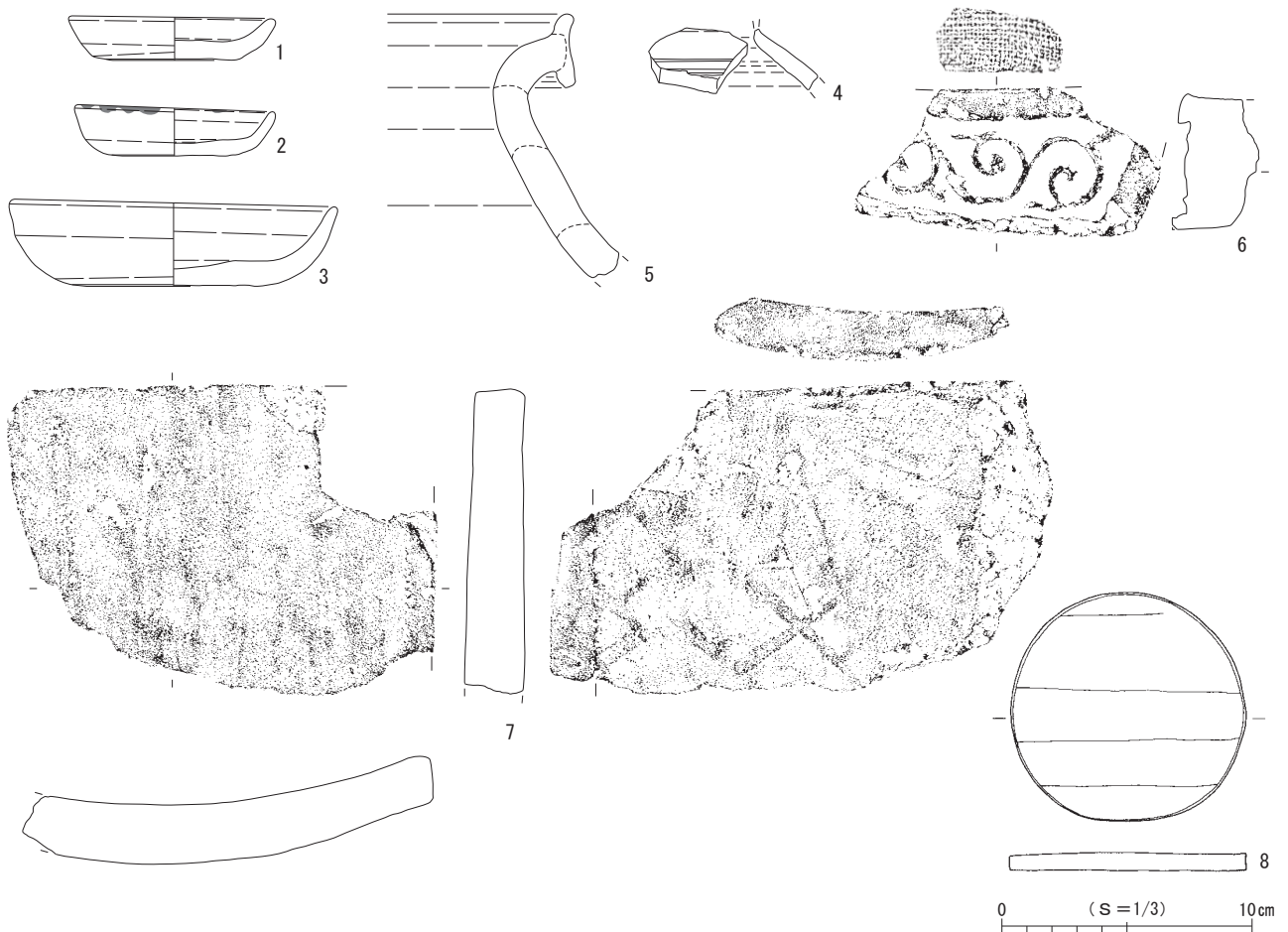


図46 第6面 遺構外出土遺物

# 第四章 若宮大路周辺遺跡群出土の動物遺体

東京国立博物館客員研究員

金子 浩昌

付表1 検出された動物遺体の種名表

軟体動物門	脊椎動物門
<b>腹足綱</b> <hr/> <b>古腹足目</b> ミミガイ科 メカイアワビ アワビ類 ニシキウズガイ科 ダンベイキサゴ イボキサゴ リュウテンガイ科 スガイ サザエ科 サザエ ウミニナ科 ウミニナ キバウミニナ科 カワアイ タマガイ科 ツメタガイ エゾバイ科 バイガイ <b>新腹足目</b> アッキガイ科 アカニシ <hr/> <b>二枚貝綱</b> マルスダレガイ目 フネガイ科 サルボウ イガイ科 イガイ イタヤガイ科 イタヤガイ マルスダレガイ科 ハマグリ	<b>硬骨魚綱</b> スズキ目 スズキ科 スズキ ハタ科 ハタ類 サバ亜目 サバ科 カツオ <hr/> <b>鳥綱</b> キジ目 キジ科 キジ ガンガモ目 ガンガモ科 ガン類 <hr/> <b>哺乳綱</b> クジラ目 マイルカ科 イルカ類 ネコ目 イヌ科 イヌ ウマ目 ウマ科 ウマ ウシ目 イノシシ科 イノシシ ウシ科 ウシ

## 貝類

アワビ類はあったが、すべてメカイアワビで、マダカなどはなかった。マダカはここまで廻ってこなかったようである。

ダンベイキサゴ、スガイ、イボキサゴ各2、ウミニナ・カワアイ各1点である。意図的に採られたのではないだろう。

バイガイが3点あり意図的に採取されたものであろうが、一般に少ない。

アカニシが好まれ、大小の殻が出土している。大型の殻は入手しがたかったことがよく分かる。

ハマグリはアカニシとともによく食べられた貝であり、大型殻を利用しようとしている。味が良いからであろう。イガイは元々数が少なく、一般的ではなかった。

## 魚類・鳥類・哺乳類

魚は少なかった。種類も限られていた。これに対して鳥がよく食べられている。キジは入手しやすかったのであろう。

イルカは稀に入手されたのだと思われる。日常的ではなかったであろう。イルカ類は群れて岸近くにまで寄せるのでまとめて捕る機会もあったろう。しかし、どの程度こうしたイルカ猟が一般的であったかは不明である。今回の資料中ではごく少ない。出土資料はカマイルカ程度のサイズである。

イヌは中型の飼犬である。

イノシシは猟で得たものであろう。1才未満の幼体が出土した。幼体の四肢骨もあったと思われるが残されていない。

## 道路側溝 1 b・1 c 出土貝類

道路側溝 1 b・1 c に共通する貝のあり方がみられた。アワビ類は僅かに1点があったのみであり、アカニシも1点があったのみである。主体の貝種はイボキサゴとハマグリであった。ハマグリは殻長50～60mmという食べやすいサイズの殻が多く、食用にあてられている。採りやすくて肉量の多いサイズである。当時のハマグリの利用の仕方をよく示している。イボキサゴは大量に採ることができるが、肉量が少なくかつ殻が小さいので料理には不向きである。殻をこわして肉を食べたような跡もみえないので、汁を飲んだのであろうか。それで十分貝の味を楽しむことができると思う。これを除くと他は1～2点である。意図的に採ったようには思えず、あれこれ集めたものであった。しかし、鎌倉の海は入り江から外海、砂浜、岩礁が広がっていたので、貝種は豊富であった。江戸湾内とは大きな違いであった。

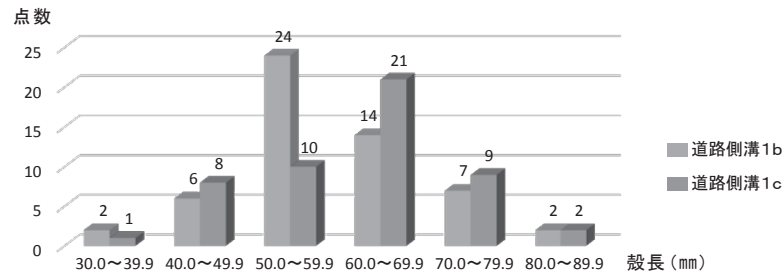


付表2 出土動物遺体一覧

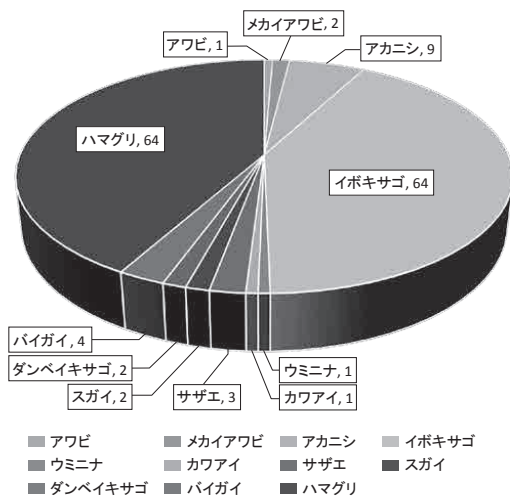
出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
遺構外	第1面	ウシ・ウマ					骨片
遺構外	第1面	イルカ類	肋骨				切断痕
道路側溝1 a	第3面	イルカ類	下顎骨	右		19	
道路側溝1 a	第3面	イルカ類	下顎骨片				
道路側溝1 a	第3面	イヌ	下顎骨	左	長：92.26	21	
堅穴状遺構1	第3面	ハマグリ		右			
堅穴状遺構1	第3面	カツオ	前鰓蓋骨	右	上下長：77.0		
堅穴状遺構1	第3面	カツオ	主鰓蓋骨	左		13	
堅穴状遺構1	第3面	イノシシ	頭骨		遠位端幅：33.40	24	遠位部、被熱あり。
遺構外	第3面	イボキサゴ					4個
遺構外	第3面	ダンベイキサゴ				2-1、2	2個
遺構外	第3面	バイガイ				8-1	横割り
遺構外	第3面	アワビ類					1個
遺構外	第3面	ハマグリ		右			3個
遺構外	第3面	ハマグリ		左	殻長：71.4		2個
遺構外	第3面	ハマグリ		左	殻長：56.2		2個
遺構外	第3面	ハマグリ		左	殻長：不明		
遺構外	第3面	イルカ類	骨片				
道路側溝1 b	第4面	アワビ					破片、3個
道路側溝1 b	第4面	メカイアワビ			殻長：140 ±	1-4~8	2~3個体はあったと思われる。貴重な貝であったので大切に運ばれた。
道路側溝1 b	第4面	メカイアワビ			殻長：121.90		
道路側溝1 b	第4面	アカニシ					破片、2個
道路側溝1 b	第4面	アカニシ			殻高：110.0		穿孔あり
道路側溝1 b	第4面	アカニシ			殻高：90.0 ±	9-2	
道路側溝1 b	第4面	アカニシ			殻高：87.0 ±	9-3	
道路側溝1 b	第4面	アカニシ			殻高：85.0 ±	9-5	
道路側溝1 b	第4面	アカニシ			殻高：84.0 ±	9-4	
道路側溝1 b	第4面	アカニシ			殻高：90.8		破片、殻を丁寧に割る
道路側溝1 b	第4面	アカニシ					
道路側溝1 b	第4面	イボキサゴ					8個
道路側溝1 b	第4面	イボキサゴ			径：18.7	3-2	
道路側溝1 b	第4面	イボキサゴ			径：15.2	3-3	
道路側溝1 b	第4面	イボキサゴ			大型 径：18.8 小型 径：14.2	3-1	51個
道路側溝1 b	第4面	イボキサゴ			径：16.5		3個
道路側溝1 b	第4面	ウミニナ			殻高：37.4	6	
道路側溝1 b	第4面	カワアイ			殻高：21.7	7	
道路側溝1 b	第4面	サザエ			殻高：42.37		
道路側溝1 b	第4面	サザエ	蓋		径：34.99		
道路側溝1 b	第4面	サザエ			殻高：116.4	5	棘の発達する大型殻
道路側溝1 b	第4面	スガイ			径：15.6	4-2	
道路側溝1 b	第4面	スガイ			径：12.6	4-1	
道路側溝1 b	第4面	ダンベイキサゴ			径：18.7	2-4	
道路側溝1 b	第4面	ダンベイキサゴ			径：15.2	2-3	
道路側溝1 b	第4面	バイガイ			殻高：29.37		
道路側溝1 b	第4面	バイガイ			殻高：50.2	8-4	
道路側溝1 b	第4面	バイガイ			殻高：50.0	8-5	
道路側溝1 b	第4面	バイガイ			殻高：50.0 ±		
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：87.20	11-1	
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：78.28 ±	11-2	2個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：75.78 ±	11-3	3個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：66.88 ±	11-4	3個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：64.63 ±	11-5	3個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：63.35 ±	11-6	2個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：55.51 ±	11-7	5個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：51.41 ±	11-8	11個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左	殻長：不明		1個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		右			60個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		右			破片、1個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左			破片、2個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ					破片
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		左			41個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		右	殻長：75.4		
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		右	殻長：66.5		3個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		右	殻長：54.1		2個
道路側溝1 b	第4面	ハマグリ		右	殻長：45.6		3個
道路側溝1 b	第4面	イルカ類	棘突起片			20	切断痕あり。
道路側溝1 b	第4面	イノシシ	下顎骨	左		22	m <sub>1</sub> m <sub>4</sub> M <sub>1</sub> (わずかに萌出)咬み痕あり。幼体。
道路側溝1 b	第4面	ウシ・ウマ	肢骨片			26	割ったもの。
道路側溝1 b	第4面	獣骨				27	被熱片
道路側溝1 c	第5面	アカニシ			殻高：79.1	9-8	
道路側溝1 c	第5面	アカニシ			殻高：75.0 ±	9-11	

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
道路側溝 1 c	第5面	アカニシ			殻高：64.0	9-10	
道路側溝 1 c	第5面	アカニシ			殻高：55.0	9-12	殻を壊していない。
道路側溝 1 c	第5面	アカニシ			殻高：不明	9-9	
道路側溝 1 c	第5面	アカニシ			殻高：112.9		
道路側溝 1 c	第5面	アカニシ			殻高：76.8	9-6	
道路側溝 1 c	第5面	アカニシ			殻高：71.0	9-7	
道路側溝 1 c	第5面	サザエ	蓋				
道路側溝 1 c	第5面	アワビ		左			破片、小型
道路側溝 1 c	第5面	メカイアワビ			殻長：150.0	1-1	
道路側溝 1 c	第5面	イガイ		右		10	2個
道路側溝 1 c	第5面	イボキサゴ					35個
道路側溝 1 c	第5面	イボキサゴ			殻高：16.3	3-1	
道路側溝 1 c	第5面	イボキサゴ					
道路側溝 1 c	第5面	サルボウ			殻長：64.7		
道路側溝 1 c	第5面	ダンバイキサゴ					
道路側溝 1 c	第5面	ツメタガイ			径：50.6		
道路側溝 1 c	第5面	バイガイ			殻高：57.5	8-2	
道路側溝 1 c	第5面	バイガイ			殻高：51.8	8-3	
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		右			48個
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：85.68 ±		40個
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：86.85 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：74.42		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：74.99		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：72.6		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：70.74 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：72.58 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：65.92 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：59.66 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：68.49		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：74.0		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：68.72		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：67.91		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：68.13 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：68.48		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：63.0 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：74.03		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：67.99 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：56.87 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：60.74 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：68.26 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：57.85 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：62.36 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：68.25 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：56.31		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：48.62		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：49.38 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：50.32		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：66.39		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：63.03		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：48.16 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：51.13 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：48.0		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：46.36		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：47.74 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：47.34 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：37.36 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：不明		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：不明		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：73.0		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：75.2		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：68.9		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：67.8		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：66.7		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：63.9		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：64.9		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：63.7		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：64.8		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：59.4		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：54.0 ±		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：56.9		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：50.6		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左	殻長：47.0		
道路側溝 1 c	第5面	ハマグリ		左			
道路側溝 1 c	第5面	スズキ	尾椎		長さ：11.17		

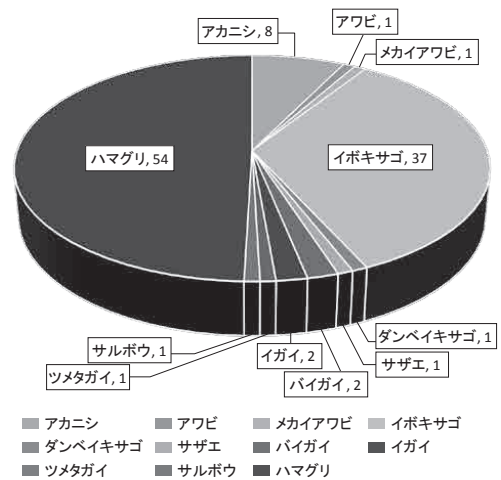
出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
道路側溝1c	第5面	スズキ目	主上顎骨	左	全長：61.74		
道路側溝1c	第5面	魚骨片					
道路側溝1c	第5面	ガン類	橈骨	右		17	
道路側溝1c	第5面	イノシシ	肋骨	右		23	
土坑3	第5面	イタヤガイ					破片
土坑3	第5面	キジ	尺骨	左	全長：75.51	14	
土坑3	第5面	キジ	骨盤			16	
土坑3	第5面	キジ	胫骨	右	全長：121.70	15	
土坑3	第5面	イノシシ	第3中指骨	右	長：61.31	25	遠位端が外れる。
土坑4	第5面	メカイアワビ		左	殻長：145.0	1-2	
土坑4	第5面	メカイアワビ		左	殻長：145.0	1-3	
土坑4	第5面	アカニシ			殻高：120.0	9-1	殻を丁寧に割る。殻柱部が焦げる。
土坑4	第5面	イボキサゴ				13個	
土坑4	第5面	ハマグリ		左		7個	
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：71.86		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：63.80		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：51.0		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：66.08		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：52.31		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：51.69		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：45.56		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：52.10		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：52.89 ±		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：53.96		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：61.36		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：40.71		
土坑4	第5面	ハマグリ		右	殻長：不明		2個
ビット12	第5面	アワビ類					破片、大型になる。
ビット18	第5面	ハマグリ		右			
遺構外	第5面	イボキサゴ					1個
遺構外	第5面	ハマグリ		左	殻長：79.4		
遺構外	第5面	ハマグリ		左	殻長：55.2 ±		
遺構外	第5面	ハマグリ		右	殻長：58.4		
遺構外	第5面	ハマグリ		右	殻長：30.4		
遺構外	第5面	ハタ類	主鰓蓋骨	左		12	
遺構外	第5面	イルカ類					骨片
遺構外	第5面	イルカ類	頭蓋骨片右上顎骨部分			18	吻端を切断。



付表3 道路側溝1b・1c出土ハマグリ殻長分布



付表4 道路側溝1b出土軟体動物門出土数



付表5 道路側溝1c出土軟体動物門出土数

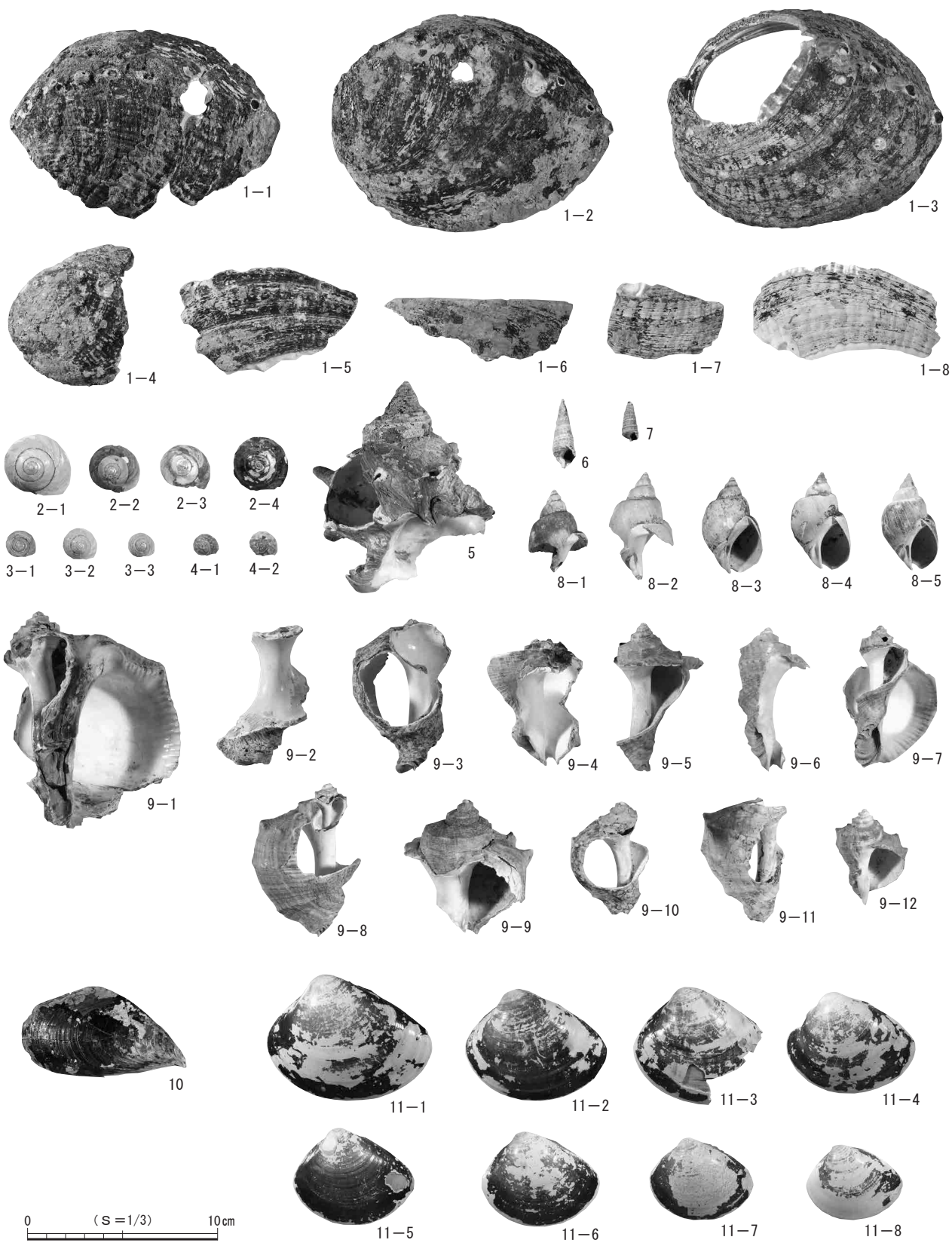


写真1 出土動物遺体(1)

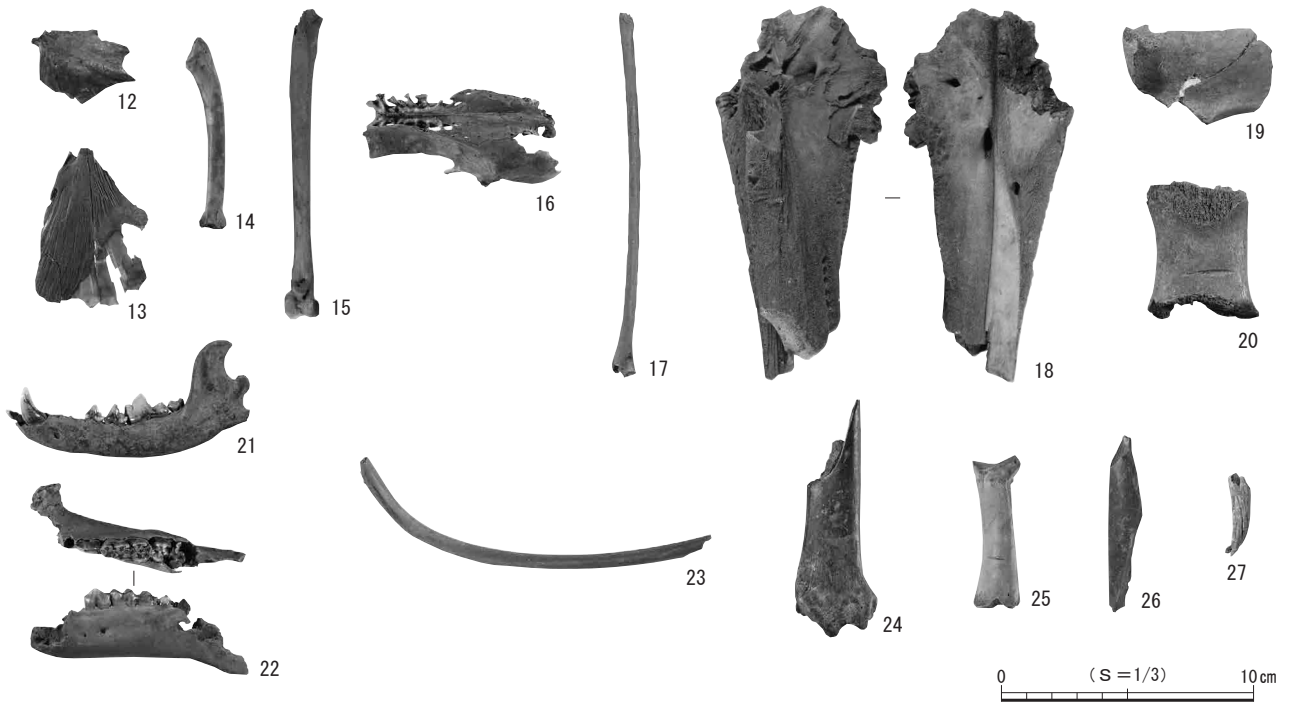


写真2 出土動物遺体(2)

付表6 出土動物遺体写真図版対応表(写真1・2)

写真	出土遺構	種別	部位	左右
1-1	道路側溝 1 c	メカイアワビ		
1-2・3	土坑 4	メカイアワビ		左
1-4~8	道路側溝 1 b	メカイアワビ		
2-1・2	第3面	ダンベイキサゴ		
2-3・4	道路側溝 1 b	ダンベイキサゴ		
3-1	道路側溝 1 c	イボキサゴ		
3-2・3	道路側溝 1 b	イボキサゴ		
4-1・2	道路側溝 1 b	スガイ		
5	道路側溝 1 b	サザエ		
6	道路側溝 1 b	ウミニナ		
7	道路側溝 1 b	カワアイ		
8-1	第3面	バイガイ		
8-2・3	道路側溝 1 c	バイガイ		
8-4・5	道路側溝 1 b	バイガイ		
9-1	土坑 4	アカニシ		
9-2~5	道路側溝 1 b	アカニシ		
9-6~12	道路側溝 1 c	アカニシ		
10	道路側溝 1 c	イガイ		右
11-1~8	道路側溝 1 b	ハマグリ		左
12	第5面	ハタ類	主鰓蓋骨	左
13	竪穴状遺構 1	カツオ	主鰓蓋骨	左
14	土坑 3	キジ	尺骨	左
15	土坑 3	キジ	脛骨	右
16	土坑 3	キジ	骨盤	
17	道路側溝 1 c	ガン類	橈骨	右
18	第5面	イルカ類	頭蓋骨片右上顎骨部分	
19	道路側溝 1 a	イルカ類	下顎骨	右
20	道路側溝 1 b	イルカ類	棘突起片	
21	道路側溝 1 a	イヌ	下顎骨	左
22	道路側溝 1 b	イノシシ	下顎骨	左
23	道路側溝 1 c	イノシシ	肋骨	右
24	竪穴状遺構 1	イノシシ	顎骨	
25	土坑 3	イノシシ	第3中指骨	右
26	道路側溝 1 b	ウシ・ウマ	肢骨片	
27	道路側溝 1 b	獣骨	被熱骨片	



## 第五章 まとめ

今回報告する雪ノ下一丁目187番4地点は、若宮大路周辺遺跡群の北西側に所在する。若宮大路周辺遺跡群の北限に近く、北条時房・顕時邸跡(No.278)を挟んで若宮大路から西へ約150m、鉄ノ井からは南西へ約140mの位置である。若宮大路周辺遺跡群は面積が広く、また商業地を含むため調査地点が多い。本地点の周辺における調査事例として、北条時房・顕時邸跡の南限である現行道路の以北(現在の雪ノ下一丁目地区)に限ってみると6地点、この道路のすぐ南側の地点を含めて7地点が知られている(図3①～⑦)。

今回の調査では、第1～5面で遺構を確認した。さらに、第5面の調査が終了した段階で調査区北壁から東壁際でトレンチ調査を行い、内部で発見された遺構と遺物を第6面に帰属するものとした。検出した遺構は、道路状遺構4条、道路側溝3条、竪穴状遺構1基、溝状遺構1条、木組遺構2基、土坑4基、ピット19基である。遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、木製品類が出土しており、遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して26箱を数える。主要かつ重要な遺構は、調査面積の約1/2を占め南北正方位に近い主軸方位を示す、東側側溝を伴う道路状遺構1であり、第3面から第6面を通じて継続利用されていた様相が明らかとなった。したがって、第3面から第6面までの変遷を考える際には、道路状遺構1を基軸として概観する必要がある。

以下、面ごとに遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

### 〈第1面〉

第1面は標高約9.05mで遺構を確認した。炭が混入する灰褐色弱砂質土とともに、泥岩と砂岩を用いて整地された層である。広く後世の削平を受けているため、調査区の南東隅で1.2㎡ほどが残存するものの、大半は失われていた。わずかに残されたこの整地層を掘り込んで構築された遺構について、第1面に帰属するものとした。検出した遺構は、土坑1基、ピット2基である。削平により大幅に壊されているため検出された遺構はわずかであり、遺跡としての様相はほとんど明らかにできなかった。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀前葉頃に属すると考えられる。

### 〈第2面〉

第2面の遺構は堆積土層の7層上面で確認され、確認面の標高は約8.9～9.0mを測る。木材と炭を含む暗褐色粘質土と、粒状から拳大までの泥岩あるいは砂岩を用いた整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。しかし、この整地層は後世の削平により大幅に失われており、北壁際に約2.5㎡が帯状に残るのみであった。検出した遺構は、溝状遺構1条、ピット7基である。このうち溝状遺構1の主軸方位はN-63°-Wを指し、西北西-東南東に軸方位をもつ。これは第3面以下の面において検出された道路状遺構1の主軸方位(N-3°-E)と明らかに異なり、若宮大路に直交するものである。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉～後葉に属すると考えられる。

### 〈第3面〉

第3面は標高約8.8m前後で遺構を確認した。第2面の整地層(堆積土層7層)を掘り下げたところ、そ

の直下で遺構が検出されたため、これを第3面の遺構とした。また、調査区南東側で破碎泥岩による整地層が確認され、これも第3面の確認面とした。本面にも後世の削平が広く及んでおり、調査区西側では遺構の破壊が著しい。検出した遺構は、道路状遺構1条、道路側溝1条、竪穴状遺構1基、土坑1基、ピット2基で、調査区のほぼ全域が遺構ないし遺構覆土である。

本面では、道路状遺構1の最新段階に相当する道路状遺構1aを検出した。第2面において、道路状遺構1aを横切る形で溝状遺構1が掘り込まれていることから、本面が道路状遺構1の存続期間の上限と考えられる。また、道路側溝1aを挟んで東側に竪穴状遺構1が位置し、かわらけと木製品を中心に多量の遺物が出土した。竪穴状遺構1について、本面では道路状遺構1aとの重複関係あるいは先後関係の有無を捉えることはできなかった。しかし、第5面に属する道路側溝1cの幅を縮小した上に構築されていることから、両者の位置関係を考慮すると、第4面の道路状遺構1b(新)ないし本面の道路状遺構1aと併存していた可能性が想定される。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉頃に属すると考えられる。

#### 〈第4面〉

第4面は調査区東側において検出された第3面の整地層直下の標高約8.5mで遺構を確認したが、第3面の竪穴状遺構1の掘り込みが本面まで及んでいることから残存面積は狭小であり、この面で遺構は検出されなかった。また、第3面で検出された道路状遺構1aの直下に古い段階の道路状遺構・道路側溝が発見され、これを道路状遺構1b(新)として第4面に帰属する遺構とした。検出した遺構は、この道路状遺構1条、道路側溝1条のみである。

道路状遺構1bと道路側溝1bは一連の施設として機能したもののだが、道路側溝1bは第5面の道路側溝1cを改修し幅を狭めたものであることが明らかとなった。また、道路状遺構1bは第5面において形成されたもので、その際に道路側溝1cが作られたものと捉えられた。したがって、第5面で道路状遺構1b・道路側溝1cが形成され、道路状遺構1bの存続期間中に道路側溝1cを改修し、道路側溝1bに作り直したという経過が想定されよう。

遺物は主にかわらけ、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀中葉頃に属すると考えられる。

#### 〈第5面〉

第5面は、第3面の竪穴状遺構1の掘り込み直下から検出された土坑とピット、さらにその同一レベルで検出された土坑について、本面に帰属する遺構とした。確認面の標高は約8.4～8.5mを測る。また、第4面で検出した道路状遺構1b(新)の路面を共有するかたちで古い道路側溝が発見されたため、これを道路側溝1b(古)として第5面の遺構とした。検出した遺構は、道路状遺構1条、道路側溝1条、土坑2基、ピット8基である。

第4面で検出された道路状遺構1bは、掘り方が道路側溝1cの裏込め土と一体であることから、両遺構は本面においてに同時期に敷設されたと判断される。また、道路状遺構1bの下層には、少なくとも2面の道路状遺構(道路状遺構1c・1d)が存在することがトレンチ調査で確認されたため、さらに時期を遡り、改修を繰り返しながら継続して利用されていた状況が明らかとなった。ピットについては、道路側溝1cの裏込めに掘り込まれるものがあり、本面において遺構に新旧が認められた。また、これ

以外にも礎板が多く発見されたが、規則的な配置や関連性は見出しにくい状況であった。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

#### 〈第6面〉

第6面は、第5面の調査を終了した後、下層の様相を把握するために行ったトレンチ調査で確認した。トレンチは調査区北壁際から東壁際に設定し、底面は標高約7.7mまで掘り下げた。検出した遺構は、木組遺構2基である。部分的な調査であるため遺構の詳細は把握できなかったが、木組遺構1は第5面の道路側溝1cの直下に位置し、軸が揃うことから、道路側溝1c以前の道路側溝に伴う側板であった可能性が考えられる。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

最後に、本地点で検出された道路状遺構1の調査成果を踏まえて、周辺の調査事例を俯瞰してみたい。道路状遺構1は、東側側溝を伴う南北道路である。最古段階は確認できなかったが、第4面の道路側溝1cの時期を参考にすると、それ以前から道路状遺構と道路側溝の存在が推定されることから、構築年代は13世紀中葉～後葉より以前に遡るものと考えられる。路面および側溝の改修を繰り返し、若干の規模の拡大・縮小を経て、第3面に相当する14世紀後葉頃まで継続して利用されていた状況が確認された。第2面において、14世紀代と推定される溝状遺構1が道路状遺構1を横断するかたちで形成されていることから、この時点で道路状遺構1は廃絶されていることが明らかである。また、道路状遺構の主軸方位はほぼ南北正方位、溝状遺構1の主軸方位は若宮大路に直交する方位を向くことから、地割の変更が行われた可能性が読み取れる。

本地点周辺の調査事例については、雪ノ下一丁目161番33の一部地点の報告(馬淵・鍛冶屋ほか 2006)に詳しく、当該地点(図3②)および雪ノ下一丁目200番3地点(③)、雪ノ下一丁目210番他地点(④)などの調査成果をもとに詳細な考察が行われている。それによれば、②地点での調査成果については、軸の変更が認められる14世紀中葉に画期を求めている。また、②・③・④地点で検出された道路状遺構・溝状遺構は「窟小路」(本地点から80m北の東西道)に平行ないし直交することからその規制を受けているとされ、規制は少なくとも14世紀中葉頃までは継続していたとされる。

本地点で検出された道路状遺構1の主軸方位は窟小路の規制を受けたものと考えられ、14世紀中葉頃まで継続したとみられる。さらに、第2面の14世紀中葉～後葉と第1面の14世紀後葉～15世紀前葉に軸方位の変更が認められることから、上記文献によって指摘された町割の規制原理、さらにその変更時期におおむね合致する成果であったといえる。

引用・参考文献(著者50音順)

- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 沖元 道 2016「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町二丁目24番14地点」『平成27年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書32 鎌倉市教育委員会
- 菊川英政 1992「3. 若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町二丁目12番15地点」『平成3年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 鎌倉市教育委員会
- 菊川英政・兼行悦枝 1998『神奈川県・鎌倉市 若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書(小町二丁目12番15地点)』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 小林重子・菊川英政ほか 2000「若宮大路周辺遺跡群(No.242)雪ノ下一丁目198番6」『平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 鎌倉市教育委員会
- 宗基秀明・宗基富貴子 2003「若宮大路周辺遺跡群(No.242)雪ノ下一丁目200番3地点」『平成14年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 鎌倉市教育委員会
- 滝澤晶子 2010『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』株式会社 博通
- 田代郁夫・佐藤 泉 1989「5. 若宮大路周辺遺跡群 小町二丁目39番6他地点」『昭和63年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 鎌倉市教育委員会
- 田代郁夫・原 廣志 1991「2. 若宮大路周辺遺跡群(No.242)鎌倉市小町二丁目69番6外」『平成2年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 鎌倉市教育委員会
- 原 廣志・秋山哲雄ほか 1998「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町二丁目28番3・5地点」『平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1990「10. 若宮大路周辺遺跡群 雪ノ下一丁目210番他地点」『平成元年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄・鍛冶屋勝二ほか 2006「若宮大路周辺遺跡群(No.242)雪ノ下一丁目161番33の一部地点」『平成17年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 鎌倉市教育委員会
- 三ツ橋正夫 2014「若宮大路周辺遺跡群(小町二丁目5番27外)の調査」『第24回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
- 宮田 眞 2014「若宮大路周辺遺跡群(雪ノ下一丁目148番4外)の調査」『第24回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
- 森 孝子・赤堀祐子 2012「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町二丁目11番2」『平成23年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980



表2 第1面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第1面 遺構外出土遺物 (図10)							
1	土器	白かわらけ	-	(4.8)	現1.5	底面-回転糸切 胎土: 微砂、良土 色調: 白色 焼成: 良好	底部小破片
2	土器	ロクロかわらけ・小	(6.8)	(3.8)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
3	土器	ロクロかわらけ・小	(6.8)	(3.8)	2.1	薄手の器壁 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/2
4	土器	ロクロかわらけ・小	(7.3)	(4.7)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
5	土器	ロクロかわらけ・小	(7.4)	(4.8)	1.8	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
6	土器	ロクロかわらけ・小	(7.6)	(4.8)	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/4
7	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(5.8)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/2
8	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(5.8)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	2/3
9	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(3.4)	1.8	内外面が黒色化 底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
10	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(4.4)	1.9	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
11	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(4.8)	1.9	内外面が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2
12	土器	ロクロかわらけ・小	8.1	5.1	2.1	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	4/5
13	土器	ロクロかわらけ・小	(8.8)	(5.8)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
14	土器	ロクロかわらけ・中	(10.6)	(6.2)	2.9	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/4
15	土器	ロクロかわらけ・中	(10.8)	(6.0)	2.9	薄手の器壁 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 灰白色 焼成: 良好	1/3
16	土器	ロクロかわらけ・中	(11.6)	(7.6)	3.1	内外面が黒色化 底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/4
17	土器	ロクロかわらけ・中	(12.3)	(8.8)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	2/3
18	土器	ロクロかわらけ・中	(12.6)	(8.0)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
19	土器	ロクロかわらけ・中	(12.8)	(8.0)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
20	土器	ロクロかわらけ・中	(12.8)	(8.4)	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
21	磁器	青磁碗	-	-	現3.7	外面-片彫による横位の文様 色調: 胎土-灰白色、釉-青灰色 備考: 龍泉窯系青磁	口縁部小破片
22	磁器	青磁盤?	-	-	現3.5	見込-龍文 壺付-無釉 色調: 胎土-乳白色、釉-淡緑色 備考: 龍泉窯系青磁	底部小破片
23	陶器	瀬戸卸皿	-	-	現2.6	胎土: 微砂 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰緑色	口縁部小破片
24	陶器	常滑堯	-	-	現6.6	胎土: 微砂、白色粒 色調: 灰褐色 備考: 5型式	口縁部小破片
25	陶器	常滑堯	-	-	現5.7	胎土: 微砂、白色粒 色調: 暗褐色 備考: 6 b型式	口縁部小破片
26	陶器	常滑堯	-	-	現10.2	胎土: 微砂、白色粒 色調: 暗褐色 備考: 8型式?	口縁部小破片
27	陶器	常滑堯	-	-	現6.2	胎土: 微砂、白色粒、小石粒 色調: 灰褐色 備考: 9型式	口縁部小破片
28	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現5.4	胎土: 微砂、白色粒、小石粒 色調: 赤褐色 備考: 8型式	口縁部小破片
29	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現5.0	胎土: 微砂、白色粒 色調: 暗赤褐色 備考: 9型式	口縁部小破片
30	瓦質土器	香炉	-	-	現7.2	黒色処理 外面-横位の磨き痕 胎土: 微砂、白色粒、小石粒 色調: 灰色	1/6
31	土製品	土鍾	長4.7	幅0.7~1.2	孔径0.4	丁寧な成形 胎土: 微砂 色調: 灰色	略完形
32	瓦	丸瓦	現長9.7	現幅7.8	厚2.1	凸面-粗い縄目敲き 凹面-布目 胎土: 硬質、白色粒 色調: 赤褐色	小片
33	石製品	温石	現長8.6	幅8.1	幅1.7	滑石製石鍋の転用品 端部に2カ所の穿孔(径0.6cm)	1/3
34	石製品	硯	現長8.1	幅5.9	厚1.3	海部欠損 横縁・前縁丁寧な整形 石材-粘板岩	3/4
35	銅製品	銭貨	直径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭名-元豊通寶(北宋・1078)	完形



表3 第2面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構1 出土遺物 (図13)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	(8.0)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/2
2	石製品	スタンプ	現長 4.3	幅 2.2	厚 1.3	表面-菱文 裏面-孔の痕跡あり、製作途中で破損? 石材-滑石	
3	漆器	器種不明	-	-	-	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	胴部小破片

ピット出土遺物 (図15)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.6)	2.0	口唇部一部煤痕 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好 出土遺構: ピット4	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.9)	(8.8)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 赤橙色 焼成: 良好 出土遺構: ピット4	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.3)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好 出土遺構: ピット5	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(8.0)	3.6	薄手の器壁、見込中央に孔1ヵ所 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰色 焼成: 良好 出土遺構: ピット7	2/3

第2面 遺構外出土遺物 (図16)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.9)	(4.4)	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.9	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.7)	(7.2)	3.1	薄手の器壁 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(5.6)	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	3/4
5	陶器	瀬戸 入子	4.3	2.6	1.4	底面-回転糸切 胎土: 緻密 色調: 灰白色 備考: 古瀬戸前期様式IV期?	完形
6	木製品	自在鉤	現長 28.5	現幅 14.0	厚 2.3	自然木を利用	

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
道路側溝1a 出土遺物 (図19)							
1	土器	白かわらけ	-	-	現 2.6	底面-指頭痕 胎土: 微砂、良土 色調: 乳白色 焼成: 良好	口縁部 小破片
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.3	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.9	2.3	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.6)	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/2
5	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(5.8)	3.5	内外面口縁部黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/3
6	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(7.2)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.4	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
8	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.9	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
9	磁器	青磁 酒会壺?	-	-	現 5.5	外面-細編蓮弁文 色調: 胎土-灰白色、釉-緑青色 備考: 龍泉窯系青磁	胴部 小破片
10	陶器	東播系 鉢	-	-	現 2.5	胎土: 微砂、白色粒 色調: 灰褐色	口縁部 小破片
11	土器	火鉢	現長 6.9	現幅 7.1	厚 4.0	胎土: 緻密 色調: 赤褐色 焼成: 良好	脚部 小破片
12	石製品	砥石	現長 6.2	幅 5.0	厚 3.7	3面に使用痕跡 中砥 石材-粘板岩 備考: 伊予産?	

堅穴状遺構1 出土遺物 (図21~25)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(3.8)	(2.8)	0.8	コースター形 底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(4.7)	(3.3)	0.9	コースター形 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、白色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/4
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.5	1.9	薄手の器壁 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.0)	2.0	内外面に煤付着、薄手の器壁 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.3	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	2/3
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.0	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰色 焼成: 良好	4/5
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	5.2	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	4/5
8	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.0)	1.7	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/2

9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.0)	2.0	薄手の器壁 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	1.8	内面が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	4/5
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.8	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.0	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.3	1.9	外面に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	4/5
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.6	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.3	2.0	内外面が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.4	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	略完形
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(4.4)	2.1	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/2
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(4.4)	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
19	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	2/3
20	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.6	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
21	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.6)	1.7	内外面が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/3
22	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.1	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
23	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
24	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.0)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:灰色 焼成:良好	2/3
25	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.6	1.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	完形
26	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.5	内面に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	2/3
27	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.4)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	2/3
28	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	4.6	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
29	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.4)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	2/3
30	土器	ロクロ かわらけ・中	10.4	8.0	2.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	略完形
31	土器	ロクロ かわらけ・中	10.4	6.4	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	4/5
32	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.8)	3.3	薄手の器壁 底面-回転糸切 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/3
33	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.4	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	4/5
34	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(7.0)	3.0	見込中央が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/3
35	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(7.0)	3.2	見込中央が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/3
36	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(7.4)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/3
37	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.7)	(7.2)	2.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/3
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.7)	8.2	3.3	内底が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2
39	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(6.8)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、小石粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:赤橙色 焼成:良好	2/3
40	土器	ロクロ かわらけ・中	11.9	8.2	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	略完形
41	土器	ロクロ かわらけ・中	11.9	7.6	3.7	内外面が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	完形
42	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.9)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/4
43	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.9	3.5	口唇部・内底に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
44	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.5	3.6	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
45	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.2	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	略完形
46	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	8.0	3.7	内面に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	4/5
47	土器	ロクロ かわらけ・中	12.1	8.0	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
48	土器	ロクロ かわらけ・中	12.1	7.6	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	略完形
49	土器	ロクロ かわらけ・中	12.1	7.8	3.4	口唇部の一部が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	完形

50	土器	ロクロ かわらけ・中	12.1	8.2	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	略完形
51	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.7	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
52	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.4)	3.1	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	3/4
53	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.1	3.2	口唇部に煤付着 底面一回転糸切 胎土:微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
54	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.9	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	4/5
55	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.2	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
56	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	(8.0)	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/4
57	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(8.5)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/2
58	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.7	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	4/5
59	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.6	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、黒色粒、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
60	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	6.8	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
61	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.4	3.6	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:赤橙色 焼成:良好	4/5
62	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	8.4	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
63	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.5)	(7.2)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/3
64	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(8.2)	3.0	内外面が黒色化 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/3
65	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	8.2	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
66	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.5	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
67	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	8.8	3.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
68	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.4	3.8	内面に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
69	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(8.2)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/2
70	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.2	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
71	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(8.0)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:灰色 焼成:良好	2/3
72	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.0	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
73	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.7	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	3/4
74	土器	ロクロ かわらけ・中	12.9	8.0	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	完形
75	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.9)	(7.4)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/2
76	土器	ロクロ かわらけ・中	12.9	7.8	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
77	土器	ロクロ かわらけ・中	12.9	8.0	3.3	口唇部~内面に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	4/5
78	土器	ロクロ かわらけ・中	12.9	8.8	3.5	焼成後穿孔(0.2mm) 内外面が黒色化 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
79	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.6	3.4	内面に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	2/3
80	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.4)	3.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/3
81	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.9	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	5/6
82	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	7.6	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや良土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2
83	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.0	3.6	底面一回転糸切 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、泥岩粒 やや良土 色調:灰色 焼成:良好	4/5
84	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(9.0)	3.6	内面が黒色化 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	1/3
85	土器	ロクロ かわらけ・大	13.4	7.5	3.7	口唇部内面が黒色化 底面一回転糸切 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
86	土器	ロクロ かわらけ・大	13.4	7.3	3.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、良土 色調:黄灰色 焼成:良好	4/5
87	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	(9.4)	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/3
88	土器	ロクロ かわらけ・大	13.8	8.3	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:赤橙色 焼成:良好	2/3
89	土器	ロクロ かわらけ・大	13.8	8.0	3.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、泥岩粒 やや良土 色調:灰色 焼成:良好	4/5
90	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(8.0)	3.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/3



91	磁器	青白磁皿	-	-	現1.2	輪花形 口唇部-露胎 内面-型打成形による葉文 胎土:精緻 色調:胎土-灰白色、釉-薄青色	口縁部小破片
92	陶器	瀬戸御皿	-	(7.2)	現1.3	卸目摩耗 底面-回転糸切 胎土:緻密 色調:胎土-灰黄色、釉-淡灰緑色	底部小破片
93	陶器	常滑広口壺	(16.6)	-	現5.7	胎土:粗、微砂、白色粒 色調:暗褐色 備考:6a型式	口縁部小破片
94	陶器	常滑甕	-	-	現6.5	胎土:微砂、白色粒 色調:胎土-暗褐色、自然釉-暗緑色 備考:7~8型式	口縁部小破片
95	陶器	常滑片口鉢Ⅰ類	-	(16.0)	現9.0	胎土:微砂、白色粒、小石粒 色調:胎土-灰色、自然釉-灰色	底部小破片
96	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現3.9	内面-ヘラ描き波状文 胎土:微砂、白色粒 色調:胎土-暗黒色、自然釉-暗黒色 備考:8型式	口縁部小破片
97	陶器	常滑片口鉢Ⅲ類	-	-	現6.2	胎土:粗、白色粒 色調:赤褐色 備考:8~9型式	口縁部小破片
98	陶器	常滑片口鉢Ⅳ類	(29.0)	(14.8)	10.4	胎土:微砂、白色粒 色調:胎土-暗褐色、自然釉-暗褐色 備考:8型式	1/3
99	石製品	用途不明	現長5.8	幅3.9	厚2.8	滑石製石鍋を転用、部分的に欠いて使用	
100	銅製品	銭貨	直径2.4	孔径0.7	厚0.1	銭名-祥符通寶(北宋・1008)	完形
101	漆器	椀	-	-	現2.3	内外面-黒色漆髹漆、無文	底部~体部小破片
102	漆器	椀	-	-	現1.8	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、水文・鳥文・意匠不明文様	胴部小破片
103	漆器	椀	-	-	現2.4	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	胴部小破片
104	漆器	椀	-	-	現2.7	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、籠目文・意匠不明文様	胴部小破片
105	漆器	椀	-	-	現2.9	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、鶴文	胴部小破片
106	漆器	椀	-	-	現2.8	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	胴部小破片
107	漆器	椀	-	-	現3.3	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、松文	胴部小破片
108	漆器	椀	-	-	現1.2	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、土坡文・松文 輪高台	底部小破片
109	漆器	椀	-	-	現1.7	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、薄木文・笹文 高台部破損	底部~体部小破片
110	漆器	椀	-	現2.5	現2.6	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、水文・草文 輪高台	底部~体部小破片
111	漆器	椀	-	6.7	現5.7	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、柏文 輪高台	7/8
112	漆器	皿	-	-	-	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、花文?	底部小破片
113	漆器	皿	-	-	-	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	底部小破片
114	漆器	皿	-	6.6	現0.6	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、土坡文・秋草文	底部小破片
115	漆器	皿	-	(6.0)	現1.0	内外面-黒色漆髹漆、無文 無高台	底部小破片
116	漆器	皿	8.2	6.8	0.8	外面-黒漆髹漆 内面-赤色系漆髹漆、無文 無高台	完形
117	漆器	皿	8.5	7.3	0.5	外面-黒漆髹漆 内面-赤色系漆髹漆、無文 無高台	完形
118	漆器	皿	8.7	6.8	1.1	内外面-黒色漆髹漆、無文 無高台	完形
119	漆器	皿	(9.4)	7.8	1.1	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、菊花文・菊葉文(外面菊葉のみ)	4/5
120	漆製品	盆?	現長7.3	現幅6.0	現0.8	外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆髹漆	底部小破片
121	漆製品	櫛	長4.0	現幅3.6	厚1.0	黒色漆髹漆	1/3
122	漆製品	櫛	現長4.5	現幅4.4	厚0.8	黒色漆髹漆	1/3
123	木製品	曲物	現径23.6	-	厚0.8	底板	1/3
124	木製品	曲物	直径36.0	-	厚1.1	底板	1/3
125	木製品	杓子	長20.0	幅5.8	厚0.5	一部黒色に変色	完形
126	木製品	杓子	長23.9	幅5.2	厚0.5		完形
127	木製品	杓子	長24.3	幅5.9	厚0.5		完形
128	木製品	杓子	長25.0	幅7.2	厚0.5		完形
129	木製品	杓子	長25.9	幅7.8	厚0.5		完形
130	木製品	草履芯	現長15.3	現幅9.2	厚0.2	後端部はやや切り込まれる	1/2
131	木製品	草履芯	現長17.5	現幅10.0	厚0.2	側縁部曲線的 後端部は切り込まれる 合わせ部小孔	1/2
132	木製品	草履芯	現長21.0	現幅4.2	厚0.3	合わせ部分が最先端となり直線的 側縁部曲線的 切込み部台形	1/2

133	木製品	草履芯	現長 22.2	現幅 4.6	厚 0.3	端部小孔	1/6
134	木製品	草履芯	長 24.5	現幅 5.0	厚 0.2	端部合わせ部が最先端となり直線的 側縁部曲線的 後端部は切り込まれる	1/2
135	木製品	草履芯	長 24.5	幅 10.1	厚 0.2	端部合わせ部が最先端となり切り込まれる 側縁部曲線的 後端部がやや直線的 合わせ部小孔	略完形
136	木製品	草履芯	長 24.5	幅 10.2	厚 0.2	端部合わせ部が最先端となり切り込まれる 側縁部曲線的 後端部は切り込まれる 端部小孔	略完形
137	木製品	筒状	長 19.7	幅 1.0	厚 0.6	端部斜めに切断 筒として使用?	完形
138	木製品	串状	長 14.3	幅 0.8	厚 0.2	端部雑な削り出し	完形
139	木製品	串状	長 20.6	幅 0.8	厚 0.5	端部尖る	略完形
140	木製品	串状	長 37.7	幅 1.3	厚 0.9	端部に焼痕 火鑽棒?	完形
141	木製品	棒状	長 18.3	幅 10.7	厚 1.2	端部に焼痕 火鑽棒?	完形
142	木製品	棒状	長 22.5	幅 0.9	厚 0.5	端部に焼痕 火鑽棒?	完形
143	木製品	用途不明	長 7.0	現幅 5.8	厚 2.2	円盤状	略完形
144	木製品	用途不明	長 17.8	幅 1.9	厚 0.6	陽物?	略完形
145	木製品	箸状	長 19.3	幅 0.6	厚 0.5		完形
146	木製品	箸状	長 20.5	幅 0.6	厚 0.4		2/3
147	木製品	箸状	長 21.8	幅 0.7	厚 0.5		完形
148	木製品	棒状	長 24.9	幅 0.8	厚 0.4	端部斜めに加工	完形
149	木製品	箸状	長 25.5	幅 0.7	厚 0.6		略完形

土坑2出土遺物(図27)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	10.6	6.0	3.6	薄手丸深 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(6.7)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/3

第3面 遺構外出土遺物(図28)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.1	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.8	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.6)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 赤橙色 焼成: 良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.2)	2.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
5	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.4	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.2	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、白色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好 外面黒色に変色	2/3
7	磁器	青白磁 梅瓶	-	-	現 2.0	上面-ヘラ彫りによる唐草文 色調: 胎土-乳白色、釉-淡青色	胴部 小破片
8	陶器	瀬戸 卸皿	-	(7.0)	現 1.2	底面-糸切り 胎土: 微砂 色調: 胎土-灰色 釉-淡灰緑色 備考: 古瀬戸前期様式	底部 小破片
9	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.8	胎土: 微砂、白色粒 色調: 胎土-暗褐色、自然釉-暗褐色 備考: 6b型式	口縁部 小破片
10	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.6	胎土: 微砂、白色粒 色調: 胎土-黒褐色、自然釉-黒褐色 備考: 6b型式	口縁部 小破片
11	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.1	外面-櫛状工具による縦位の調整 内面-摩耗、花卉状の沈線 胎土: 微砂、白色粒 色調: 胎土-暗褐色、自然釉-暗褐色 備考: 8型式	口縁部 小破片
12	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.7	胎土: 微砂、白色粒、小石粒 色調: 胎土-暗褐色、自然釉-暗褐色 備考: 9型式	口縁部 小破片
13	陶器	東播系 鉢	-	-	現 5.6	外面指頭痕 胎土: 微砂、長石粒、小石粒 色調: 灰色	口縁部 小破片
14	瓦質 土器	スタンプ	-	-	現 3.7	瓦質土器を転用、片面に花文を線刻	
15	漆器	椀	-	7.5	現 3.8	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、桜文 輪高台	3/4
16	漆器	皿	9.4	6.6	1.3	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、竜胆文 輪高台	4/5
17	漆製品	調度具	長 9.6	幅 3.1	幅 2.5	脚部 外面-黒色漆髹漆	脚部完形
18	木製品	串状	長 30.4	幅 1.2	厚 0.7		略完形
19	木製品	箸状	長 15.8	幅 0.5	厚 0.5		完形



表5 第4面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
道路側溝 1 b 出土遺物 (図31・32)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	4.7	2.1	器壁が内湾する 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.4)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.8)	2.1	口唇部に煤附着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 赤橙色 焼成: 良好	1/2
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.6)	2.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/3
6	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.4)	2.8	薄手の器壁で内湾する 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
7	土器	ロクロ かわらけ・中	11.1	6.4	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.7)	(7.0)	3.6	内外面が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
9	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.2)	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.6	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/2
11	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.8)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
12	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.6	3.9	全体に煤附着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
13	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.2)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
14	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.5	胎土: 微砂、白色粒 色調: 胎土-暗褐色、自然釉-暗褐色 備考: 5型式	口縁部 小破片
15	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.3	胎土: 微砂、白色粒、小石粒 色調: 胎土-暗褐色、自然釉-暗褐色 備考: 6 a型式	口縁部 小破片
16	瓦	丸瓦	現長 8.3	現幅 9.2	厚 2.1	黒色処理 凸面-ヘラナデ 凹面-ヘラによる調整 並行状の刻み 胎土: 粗、微砂、雲母 色調: 灰黒色	
17	銅製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
18	漆器	椀	-	現 2.2	現 0.8	内外面-黒色漆髹漆、無文 輪高台	底部 小破片
19	漆器	椀	-	現 1.5	現 0.7	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	体部 小破片
20	漆器	椀	-	現 1.5	現 0.8	外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆髹漆 無高台	底部 小破片
21	木製品	曲物	現長 14	現幅 6.7	現厚 0.6	底板	1/2
22	木製品	曲物	15.8	現幅 7.1	現厚 0.7	底板	1/2
23	木製品	調度具	長 15.4	幅 3.7	厚 0.5	箱の側板? 木釘8本遺存	1/4?
24	木製品	荷札	現長 12.5	幅 1.9	厚 0.2		完形
25	木製品	荷札	長 15.1	幅 1.9	厚 0.3		完形
26	木製品	下駄	現長 13.8	現幅 5.7	厚 4.0		破片
27	木製品	草履芯	長 23.5	幅 11.1	厚 0.3	端部合わせ部が最先端となり切り込まれる 側縁部曲線的 切込み部平行四辺形 端部小孔 藁痕	完形
28	木製品	草履芯	長 24.6	幅 11.2	厚 0.3	端部合わせ部が最先端となり切り込まれる 側縁部曲線的 切込み部緩い切り取り 端部小孔 藁痕	1/2
29	木製品	篋状	現長 17.5	幅 1.6	厚 0.7	端部斜めに切断	1/3
30	木製品	串状	現長 15.3	幅 1.2	厚 0.9	断面円形 丁寧な整形	
31	木製品	串状	長 20.6	幅 1.1	厚 1.0	断面円形 丁寧な整形	
32	木製品	串状	長 22.7	幅 0.7	厚 0.3		
33	木製品	棒状	現長 15.3	幅 0.7	厚 0.3		
34	木製品	棒状	現長 25.4	幅 1.0	厚 0.8	両端部に焼痕 火鑽棒?	
35	木製品	用途不明	長 11.6	幅 3.3	厚 1.4	調度具?	完形
36	木製品	用途不明	現長 13.8	現幅 8.8	厚 2.2		
37	木製品	用途不明	長 15.7	幅 1.5	厚 0.7	端材?	
38	木製品	用途不明	現長 27.8	現幅 7	厚 0.6	端部加工痕 塔婆?	

39	木製品	箸状	長 19.0	幅 0.7	厚 0.5		略完形
40	木製品	箸状	現長 20.6	幅 0.5	厚 0.4		略完形
41	木製品	箸状	長 24.2	幅 0.7	厚 0.4		完形

第4面 遺構外出土遺物 (図33・34)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.4)	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:暗灰色 焼成:良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.0)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.2)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.5)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰色 焼成:良好	2/3
5	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(6.6)	3.0	薄手の器壁 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、やや良土 色調:灰色 焼成:良好	1/2
6	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.6)	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	3/4
7	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	8.4	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:赤橙色 焼成:良好	1/2
8	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(8.6)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/4
9	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.2)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/4
10	陶器	常滑 壺	-	(13.0)	現 5.0	胎土:微砂、白色粒、小石粒 色調:灰色	底部 小破片
11	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	-	現 3.3	胎土:微砂、白色粒、小石粒 色調:胎土-灰褐色、自然釉-赤褐色	口縁部 小破片
12	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 2.7	胎土:微砂、白色粒、小石粒 色調:胎土-灰褐色、自然釉-赤褐色 備考:8型式	口縁部 小破片
13	瓦	平瓦	現長 9.2	現幅 12.3	厚 1.6~1.9	凹面-割がれ砂 凸面-斜格子文、割がれ砂 胎土:微砂、白色粒、小石粒、良土 色調:灰色	
14	鉄製品	釘	13.5	0.7	0.7	鍛造 断面方形	略完形
15	漆器	椀	-	(6.7)	現 3.4	内外面-黒色漆髹漆、無文、ロクロ目顕著に遺存 底面-線刻	1/4
16	漆器	皿	-	-	現 0.4	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、酢漿草文か	底部 小破片
17	漆器	器種不明	-	-	現 2.3	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	胴部 小破片
18	木製品	折敷	長 23	幅 1.7	厚 0.4	板折敷 部分的に漆付着 漆盤として使用?	
19	木製品	曲物	長 6.0	幅 5.8	厚 1.0	曲物底板? 円盤中央に直線状に窪みが入る	完形
20	木製品	檜扇	現長 7.4	幅 1.0	厚 0.2	扇骨 要穴が開く	
21	木製品	下駄	長 15.1	幅 6.7	厚 3.7	連歯下駄 子供用	略完形
22	木製品	草履芯	長 23.2	幅 9.4	厚 0.4	端部合わせ部が最先端となり直線的 側縁部曲線的 切込み部平行四辺形 端部小孔 薬痕	1/2
23	木製品	草履芯	長 23.4	幅 10.3	厚 0.2	端部合わせ部が最先端となり直線的 側縁部曲線的 切込み部平行四辺形 端部小孔 薬痕	1/2
24	木製品	草履芯	長 23.5	幅 10.1	厚 0.3	端部合わせ部が最先端となり直線的 側縁部曲線的 切込み部長方形 端部小孔 薬痕	完形
25	木製品	草履芯	長 28.0	幅 9.4	厚 0.2	端部合わせ部が最先端となり直線的 側縁部曲線的 切込み部長方形 端部小孔 薬痕	1/2
26	木製品	篋状	長 18.9	幅 0.9	厚 0.6	雑な整形	略完形
27	木製品	篋状	長 20.8	幅 1.6	厚 0.6	漆付着 漆篋として使用?	完形
28	木製品	篋状	現長 23.3	幅 0.9	厚 0.4	断面扁平	略完形
29	木製品	篋状	長 23.7	幅 1.4	厚 0.5	断面扁平	完形
30	木製品	栓	長 8.9	幅 2.1	厚 1.4		完形
31	木製品	串状	長 20.2	幅 0.9	厚 0.5		完形
32	木製品	串状	現長 22.2	幅 1.4	厚 0.8	丁寧な整形	
33	木製品	串状	長 27.1	幅 1.0	厚 0.5		略完形
34	木製品	串状	現長 33.4	幅 1.0	厚 0.9	丁寧な整形	略完形
35	木製品	棒状	現長 19.8	幅 0.9	厚 0.7	丁寧な整形	1/2
36	木製品	用途不明	長 10.6	幅 10.0	厚 1.6	端材? 端部に焼痕 釘痕2ヵ所遺存	
37	木製品	用途不明	現長 12.2	幅 2.1	厚 0.7	遊具未製品?	

38	木製品	用途不明	現長 20.2	幅 2.2	厚 1.6	丁寧な整形 端部仕口	
39	木製品	用途不明	長 22.3	幅 1.7	厚 1.0	雑な整形	
40	木製品	用途不明	長 25.2	幅 2.4	厚 2.0	棒状 丁寧な整形	完形
41	木製品	用途不明	長 28.7	幅 7.2	厚 5.6	穿孔あり 端部に焼痕	
42	木製品	箸状	長 19.5	幅 0.7	厚 0.4		完形
43	木製品	箸状	長 21.4	幅 0.7	厚 0.4		完形
44	木製品	箸状	長 21.5	幅 0.7	厚 0.5		完形
45	木製品	箸状	長 21.8	幅 0.7	厚 0.6		略完形
46	木製品	箸状	現長 23.0	幅 0.6	厚 0.5		完形
47	木製品	箸状	長 23.6	幅 0.6	厚 0.3		略完形
48	木製品	箸状	長 23.7	幅 0.7	厚 0.5		完形
49	木製品	箸状	長 24.0	幅 0.5	厚 0.5		完形
50	木製品	箸状	長 24.8	幅 0.6	厚 0.3		完形
51	木製品	箸状	長 29.2	幅 0.6	厚 0.4	端部に漆付着	完形

表6 第5面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

道路側溝 1 c 出土遺物 (図37~39)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	4.6	3.6	1.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.4)	1.6	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、白色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	6.2	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 赤橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.3	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、白色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.8	内外面に黒色の付着物 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	6.8	3.1	内外面に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 赤橙色 焼成: 良好	2/3
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.1	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	4/5
8	磁器	青磁碗	(8.8)	-	現 3.7	外面-蓮弁文 色調: 胎土-灰色、釉-緑青色 備考: 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	口縁部 小破片
9	磁器	青磁碗	-	-	現 5.4	外面-鎊蓮弁文 色調: 胎土-灰白色、釉-緑青色 備考: 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	口縁部 小破片
10	磁器	青磁碗	-	(6.6)	現 2.6	高台端部周辺-桶掻き取り 色調: 胎土-灰白色、釉-緑青色 備考: 龍泉窯系青磁碗	底部 小破片
11	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.2	胎土: 微砂、白色粒 色調: 胎土-暗褐色、自然釉-暗赤褐色 備考: 6 a 型式	口縁部 小破片
12	瓦	平瓦	現長 (10.6)	現幅 (11.5)	厚 2.0~2.2	凹面-剥がれ砂 凸面-斜格子文、剥がれ砂 胎土: 微砂、白色粒、小石粒、良土 色調: 灰色	
13	石製品	硯	現長 (12.1)	幅 4.9	厚 1.7~1.9	裏面・海部破損	略完形
14	銅製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
15	漆器	椀	-	-	-	内外面-黒色漆髹漆、赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	胴部 小破片
16	漆器	椀	-	-	現 1.0	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、笹文	底部 小破片
17	漆器	皿	-	-	現 1.1	内外面-黒色漆髹漆 内面-赤色系漆による漆絵(手描き)、意匠不明文様	底部 小破片
18	漆器	皿	-	(7.0)	現 0.6	内外面-黒色漆髹漆、無文 椀?	底部 小破片
19	木製品	曲物	現長 12.2	現幅 4.9	厚 0.7	曲物底板?	
20	木製品	曲物	現長 13.2	現幅 1.8	厚 0.5	曲物底板?	1/6
21	木製品	枕?	長 20.1	幅 7.3	厚 9.7	上面-格子文を線刻	完形
22	木製品	下駄	長 22.5	幅 10.5	厚 1.5	連歯下駄 鼻緒の後ろ穴に木端を挟み鼻緒を固定	略完形
23	木製品	草履芯	長 21.0	幅 10.1	厚 0.3	端部合わせ部が最先端となり切り込まれる 側縁部曲線的 切込み部長方形 薬痕	1/2

24	木製品	篋状	長 18.7	幅 1.5	厚 0.8		完形
25	木製品	用途不明	現長 11.5	幅 3.1	厚 1.3		
26	木製品	用途不明	現長 22.7	幅 1.5	厚 0.9	柄が開く 部材？	
27	木製品	用途不明	現長 21.3	幅 4.3	厚 2.9		
28	木製品	用途不明	長 24.2	幅 3.5	厚 4.5		完形
29	木製品	箸状	長 17.2	幅 0.6	厚 0.3		完形
30	木製品	箸状	長 19.0	幅 0.5	厚 0.4		略完形
31	木製品	箸状	長 19.2	幅 0.6	厚 0.4		完形
32	木製品	箸状	長 19.3	幅 0.7	厚 0.5	端部鋭利に削り出している	完形
33	木製品	箸状	長 21.0	幅 0.7	厚 0.6		完形
34	木製品	箸状	長 21.9	幅 0.6	厚 0.5		略完形
35	木製品	箸状	長 27.0	幅 0.7	厚 0.5		完形

土坑3出土遺物(図41)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	5.0	3.6	1.0	コースター形 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、 やや良土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.3	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、小石粒、泥岩 粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
3	木製品	杓子	長 21.9	幅 3.3	厚 0.5	丁寧な整形	完形
4	木製品	篋状	現長 15.7	幅 1.3	厚 0.8		1/2
5	木製品	箸状	長 15.8	幅 0.6	厚 0.4		略完形
6	木製品	箸状	長 17.5	幅 0.7	厚 0.3		略完形
7	木製品	箸状	長 19	幅 0.7	厚 0.5		略完形
8	木製品	箸状	長 20.7	幅 0.6	厚 0.3		完形
9	木製品	箸状	長 22.6	幅 0.8	厚 0.4		完形
10	木製品	箸状	長 24.0	幅 0.6	厚 0.4		完形
11	木製品	箸状	長 24.5	幅 0.8	厚 0.4		完形

土坑4出土遺物(図42)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.8	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、や や粗土 色調:灰色 焼成:良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.5	底面-回転糸切 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成:良好	1/4
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(5.2)	3.0	底面-回転糸切 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	6.6	4.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、や や粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	4/5
5	土器	ロクロ かわらけ・大	13.4	8.2	3.7	内底黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、白色粒、海綿骨針、や や粗土 色調:灰色 焼成:良好	2/3
6	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 6.4	口唇部に煤付着 胎土:粗、白色粒 色調:灰色 備考:6a型式	口縁部 小破片
7	木製品	草履芯	長 16.1	幅 7.9	厚 0.3	端部合わせ部が最先端となりやや切り込まれる 側縁部曲線的 切込み部平行四辺形 端部小孔 薬痕 子供用?	完形
8	木製品	用途不明	現長 10.8	現幅 2.7	厚 5.0	丁寧な整形 端部に小孔が開く	
9	木製品	箸状	長 19.0	幅 0.6	厚 0.5		完形
10	木製品	箸状	長 21.8	幅 0.7	厚 0.5		略完形
11	木製品	箸状	長 24.3	幅 0.7	厚 0.5		完形

ピット12・13・16出土遺物(図43)

1	磁器	青白磁 梅瓶	-	-	現 1.1	上面-ヘラ彫りによる唐草文? 色調:胎土-灰白色、釉-淡青色 出土遺構:ピット 12	肩部 小破片
2	陶器	常滑 壺	-	(7.6)	現 4.3	胎土:微砂、白色粒 色調:胎土-暗褐色、自然釉-暗褐色 出土遺構:ピット13	底部 小破片
3	木製品	草履芯	長 16.0	幅 (8.4)	厚 0.2	側縁部曲線的 切込み部後方から斜めに切り込む 薬痕 子供用? 出土遺構:ピット 13	1/2
4	陶器	常滑 片口鉢I類	-	(16.0)	現 5.0	胎土:微砂、白色粒、小石粒 色調:胎土-灰色、自然釉-灰色 出土遺構:ピット 16	底部 小破片

第5面 遺構外出土遺物 (図44)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.9	内面が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.5	3.4	口唇部が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
3	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-天聖元寶(北宋・1023)	完形

表7 第6面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第6面 遺構外出土遺物 (図46)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.2	1.8	全体が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.1	2.1	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.2	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰色 焼成: 良好	略完形
4	磁器	青白磁 梅瓶	-	-	現 2.4	上面-ヘラ彫りによる唐草文 色調: 胎土-乳白色、釉-淡青色	肩部 小破片
5	陶器	常滑 甕	-	-	現 10.5	胎土: 白色粒、粗 色調: 暗赤褐色 備考: 6a型式	口縁部 小破片
6	瓦	軒平瓦	現長 3.3	現幅 11.9	厚 2.9	黒色処理 瓦当-唐草文 凹面-布目痕 胎土: 微砂、雲母、やや粗土 色調: 灰黒色 備考: 唐草I期	小片
7	瓦	平瓦	現長 13.2	現幅 17.7	厚 2.4	凹面-剥がれ砂 凸面-斜格子文・ナデ 凹面-剥がれ砂 胎土: 微砂、雲母、やや粗土 色調: 灰黒色	1/5
8	木製品	曲物	長 9.5	幅 9.2	厚 0.7	底板	完形

表8 遺構計測表

< > = 現存値、( ) = 推定値

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	67	<45>	14
ピット1	第1面	43	<23>	15
ピット2	第1面	38	-	23
溝状遺構1	第2面	<437>	15~117	4~20
ピット3	第2面	43	-	6
ピット4	第2面	41	-	10
ピット5	第2面	45	27	17
ピット6	第2面	33	22	12
ピット7	第2面	36	26	25
ピット8	第2面	43	33	16
ピット9	第2面	<47>	37	26
道路状遺構1a	第3面	<497>	<180>	-
道路側溝1a	第3面	<477>	27~56	38
竪穴状遺構1	第3面	<328>	<260>	26
土坑2	第3面	<68>	50	27
ピット10	第3面	<39>	<32>	11
ピット11	第3面	38	-	20

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
道路状遺構1b	第4・5面	<415>	<193>	-
道路側溝1b	第4面	<430>	60~75	(60)
道路側溝1c	第5面	<440>	109~137	(69)
土坑3	第5面	80	70	45
土坑4	第5面	<81>	<79>	45
ピット12	第5面	51	<45>	26
ピット13	第5面	45	-	27
ピット14	第5面	<48>	36	16
ピット15	第5面	39	32	23
ピット16	第5面	<53>	40	14
ピット17	第5面	<50>	<32>	37
ピット18	第5面	25	19	20
ピット19	第5面	<27>	<14>	17
木組遺構1	第6面	<84>	<38>	-
木組遺構2	第6面	<56>	<21>	-
道路状遺構1c	-	-	-	-
道路状遺構1d	-	-	-	-

表9 出土遺物一覧表

第1面

土坑1			白かわらけ			丸瓦		
産地	器種	破片数	かわらけ	ロクロ成形	221	平瓦		1
【かわらけ】			かわらけ	手づくね成形	2	【石製品】		
合計			12			温石		
合計			12			硯		
合計			1			【金属製品】		
ピット1			【青磁】			銭貨		
産地	器種	破片数	龍泉窯系			釘		
【かわらけ】			碗			合計		
合計			1			268		
合計			1			第2面		
合計			1			溝状遺構1		
合計			1			産地		
合計			1			器種		
合計			1			破片数		
合計			1			【かわらけ】		
合計			1			かわらけ		
合計			1			ロクロ成形		
合計			1			52		
合計			1			【青磁】		
合計			1			龍泉窯系		
合計			1			碗		
合計			1			【陶器】		
合計			1			瀬戸		
合計			1			瓶子		
合計			1			常滑		
合計			1			甕		
合計			1			【瓦質土器】		
合計			1			火鉢		
合計			1			【石製品】		
合計			1			スタンプ		

第1面 遺構外			土鍾		
産地	器種	破片数	【瓦質土器】		
【かわらけ】			香炉		
合計			1		
合計			【瓦】		



【木製品】		
漆器・器種不明		1
【金属製品】		
釘		3
合計		75

ビット4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
合計		2

ビット5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
合計		2

ビット6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
合計		3

ビット7		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
かわらけ	手づくね成形	1
合計		4

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	63
かわらけ	手づくね成形	4
【白磁】		
	皿	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗	2
【陶器】		
瀬戸	瓶子	2
	入子	1
	折縁深皿	1
	卸皿	1
常滑	甕	32
山茶碗窯	片口鉢	2
【瓦質土器】		
	火鉢	2
【石製品】		
	砥石	2
【金属製品】		
	釘	4
【木製品】		
	自在鉤	1
合計		118

第3面			
道路側溝1a			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	白かわらけ	1	
	かわらけ	ロクロ成形	23
	かわらけ	手づくね成形	2
【青磁】			
龍泉窯系	酒会壺?	1	
【陶器】			
瀬戸	平碗	1	
常滑	甕	13	
東播	鉢	1	
【土器】			
	火鉢	1	
【石製品】			
	砥石	1	
合計		44	

堅穴状遺構1			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ	ロクロ成形	429
	かわらけ	手づくね成形	22
【白磁】			
	皿	3	
【青磁】			
龍泉窯系	椀I類	1	
	椀II類	2	
【青白磁】			
	皿	1	

【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	入子	1
	平碗	2
	折縁深皿	1
	卸皿	1
常滑	甕	32
	広口壺	1
	片口鉢I類	1
	片口鉢II類	3
山茶碗窯	片口鉢	2
山茶碗		1

【青白磁】		
	皿	1
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	入子	1
	平碗	2
	折縁深皿	1
	卸皿	1
常滑	甕	32
	広口壺	1
	片口鉢I類	1
	片口鉢II類	3
山茶碗窯	片口鉢	2
山茶碗		1

【瓦質土器】		
	器種不明小破片	3
【石製品】		
	砥石	1
	用途不明	1

【木製品】		
	漆器椀	11
	漆器皿	8
	盆?	1
	櫛	2
	曲物	2
	杓子	5
	草履芯	7
	篋状	1
	串状	3
	棒状	2
	箸状	5
	板材	51
	用途不明	2

【金属製品】		
	銭貨	1
	釘	5
合計		615

土坑2			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ	ロクロ成形	18
合計		18	

ビット11			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ	ロクロ成形	4
【陶器】			
常滑	甕	1	
合計		5	

第3面 遺構外			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ	ロクロ成形	235
	かわらけ	手づくね成形	21
【白磁】			
	皿	3	
	口元皿	1	
【青磁】			
龍泉窯系	椀I類	1	
	椀II類	4	
	碗小破片	3	

【青白磁】		
	梅瓶	1

【陶器】		
瀬戸	瓶子	2
	平碗	2
	折縁深皿	1
	卸皿	1
常滑	甕	34
	壺	2
	片口鉢I類	1
	片口鉢II類	3
山茶碗窯	片口鉢	2
山茶碗		2
東播	鉢	1

【瓦質土器】		
	火鉢	2
	スタンプ	1
【石製品】		
	砥石	2
【木製品】		
	漆器椀	1
	漆器皿	1
	漆製品調度具	1
	串状	1
	箸状	1

【金属製品】		
	釘	2
合計		332

第4面			
道路側溝1b			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ	ロクロ成形	36
	かわらけ	手づくね成形	2
【青磁】			
龍泉窯系	碗	2	

【陶器】		
瀬戸	瓶子	2
常滑	甕	14
山茶碗窯	片口鉢	2
山茶碗		1
【瓦質土器】		
	器種不明小破片	4
【瓦】		
	丸瓦	1

【石製品】		
	砥石	3
【木製品】		
	漆器椀	3
	漆器皿	1
	曲物	2
	調度具	1
	荷札	2
	下駄	1
	草履芯	2
	篋状	1
	串状	3
	棒状	2
	箸状	4
	用途不明	4

【金属製品】		
	銭貨	1
合計		94

第4面 遺構外			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ	ロクロ成形	45
【陶器】			
常滑	甕	4	
	壺	1	
	片口鉢I類	1	
	片口鉢II類	1	
山茶碗窯	片口鉢	3	

【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	2

硯	1
【木製品】	
漆器椀	1
漆器皿	1
漆器・器種不明	1
折敷	1
曲物	1
檜扇	1
下駄	1
草履芯	4
籠状	4
栓	1
串状	4
棒状	1
箸状	10
用途不明	6
【金属製品】	
釘	1
合計	97

第5面

道路側溝 1 c		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	35
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
	碗	1
【陶器】		
瀬戸	器種不明小破片	2
常滑	甕	12
	片口鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	1
	硯	1
【木製品】		
	漆器椀	2
	漆器皿	2
	曲物	2
	枕?	1
	下駄	1
	草履芯	1
	籠状	1
	箸状	7
	用途不明	4
【金属製品】		
	銭貨	1
	釘	2
合計		80

土坑 3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	27

【陶器】		
常滑	甕	2
【木製品】		
	杓子	1
	籠状	1
	箸状	7
合計		38

土坑 4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	21
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
【木製品】		
	草履芯	1
	箸状	3
	用途不明	1
合計		27

ピット12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【青白磁】		
	梅瓶	1
合計		9

ピット13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	壺	1
【木製品】		
	草履芯	1
合計		6

ピット14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計		3

ピット15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
合計		5

ピット16		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
合計		1

ピット18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
合計		3

ピット19		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	43
	かわらけ 手づくね成形	3
【青磁】		
龍泉窯系	碗	2
【陶器】		
常滑	甕	5
山茶碗窯	片口鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
【金属製品】		
	銭貨	2
合計		57

第6面

第6面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	32
	かわらけ 手づくね成形	2
【青白磁】		
	梅瓶	1
【陶器】		
渥美	甕	1
常滑	甕	3
【瓦】		
	軒平瓦	1
	平瓦	1
【木製品】		
	曲物	1
合計		42





1. 調査区近景 (小町通りから調査区を望む)



2. 調査区北壁土層断面 (南西から)





1. 第1・2面全景(南西から)



2. 第3面全景(南西から)





1. 第3面 竪穴状遺構 1 (南東から)



2. 第3面 竪穴状遺構 1 上層遺物出土状態 (南東から)





1. 第4面全景(南西から)



2. 第5面全景(南西から)





1. 第6面 東西トレンチ(北西から)



2. 第6面 南北トレンチ(北東から)



3. 第6面 道路状遺構1 a~1 b土層断面(北東から)



4. 第6面 木組遺構1(南西から)



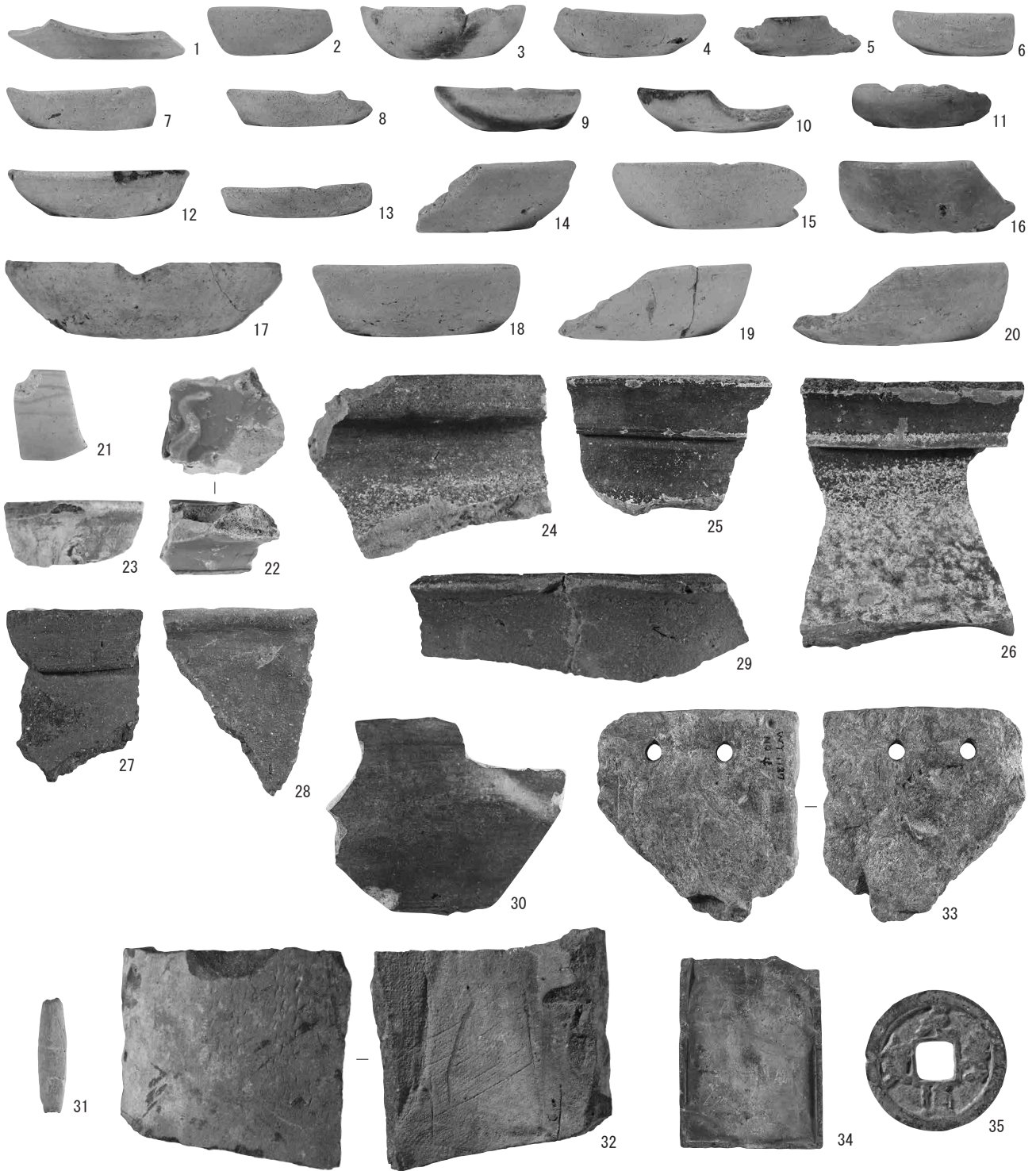
5. 第6面 木組遺構2(南東から)



6. 第6面 東西トレンチ土層堆積状態(南西から)



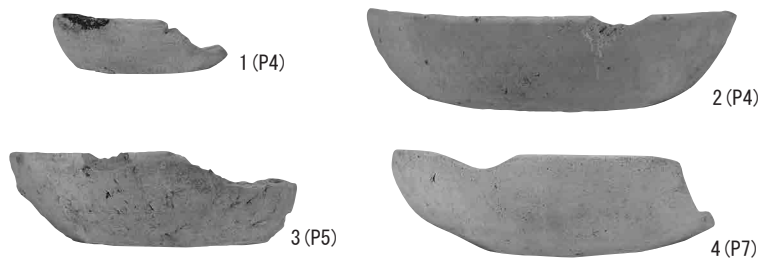
図版 6



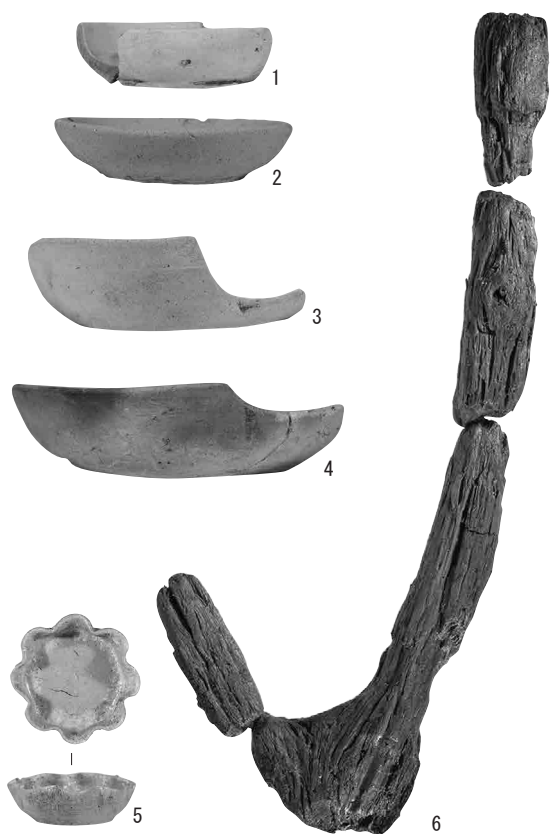
1. 第1面 遺構外出土遺物



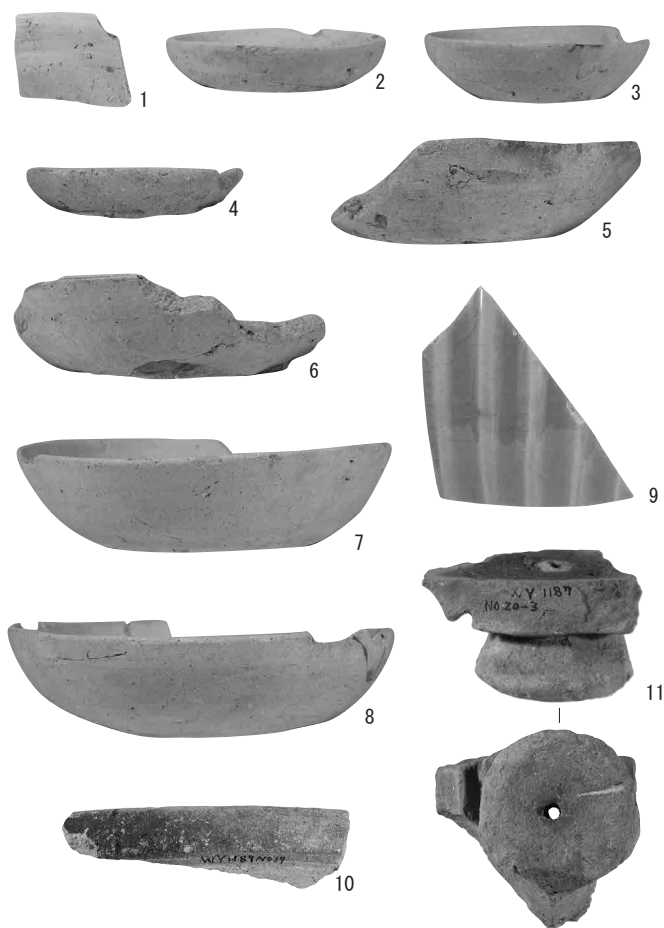
2. 第2面 溝状遺構1 出土遺物



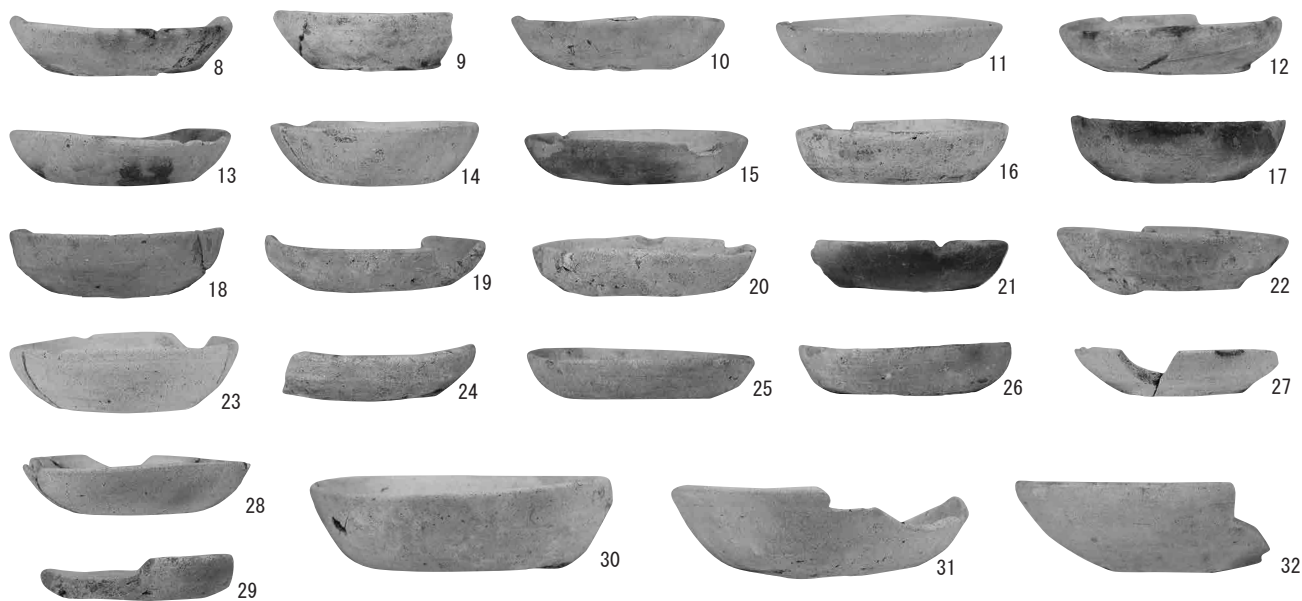
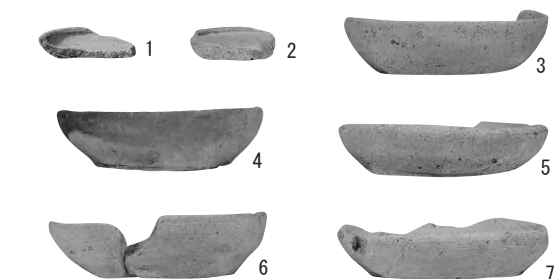
3. 第2面 ピット出土遺物



1. 第2面 遺構外出土遺物

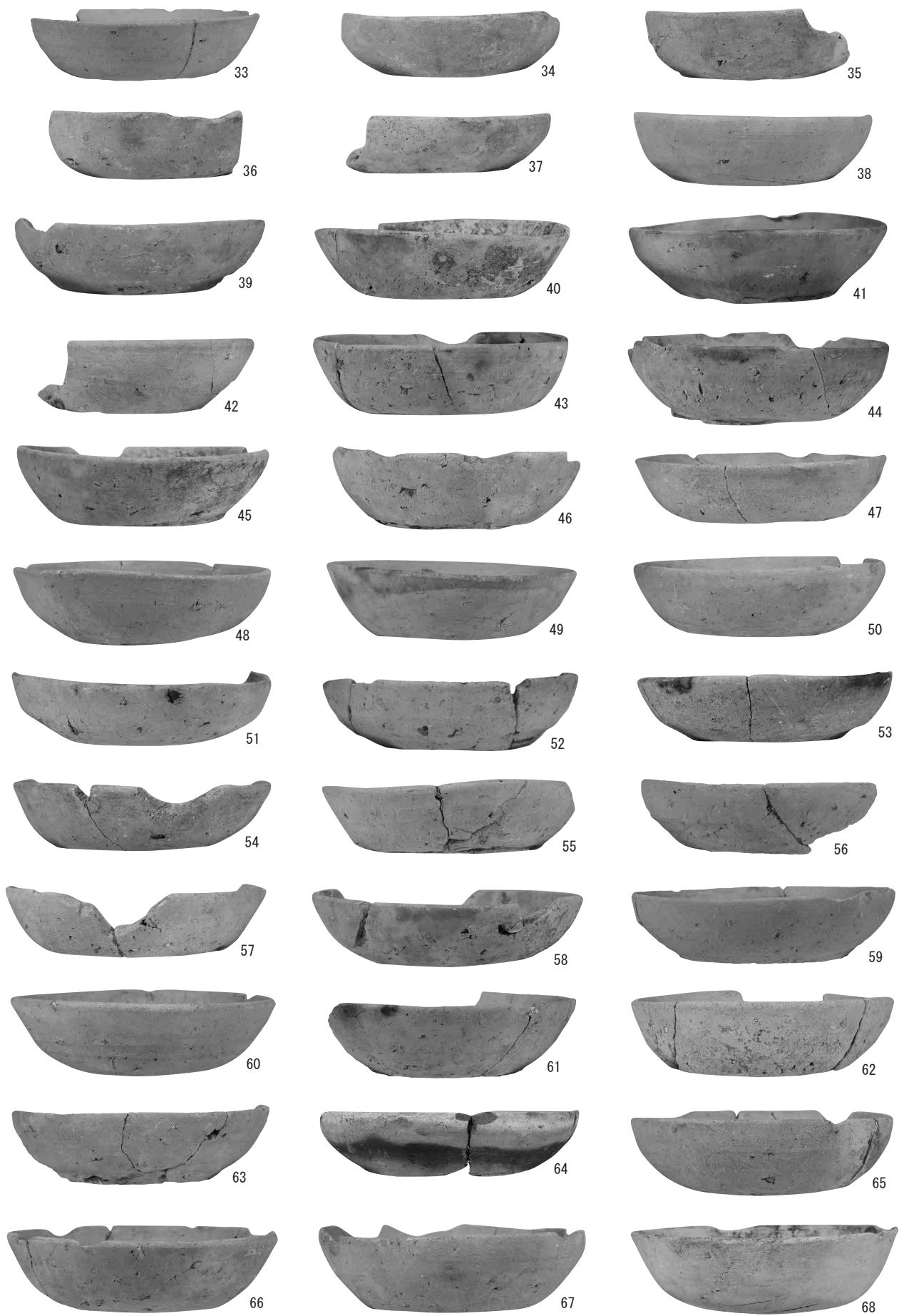


2. 第3面 道路側溝1 a 出土遺物



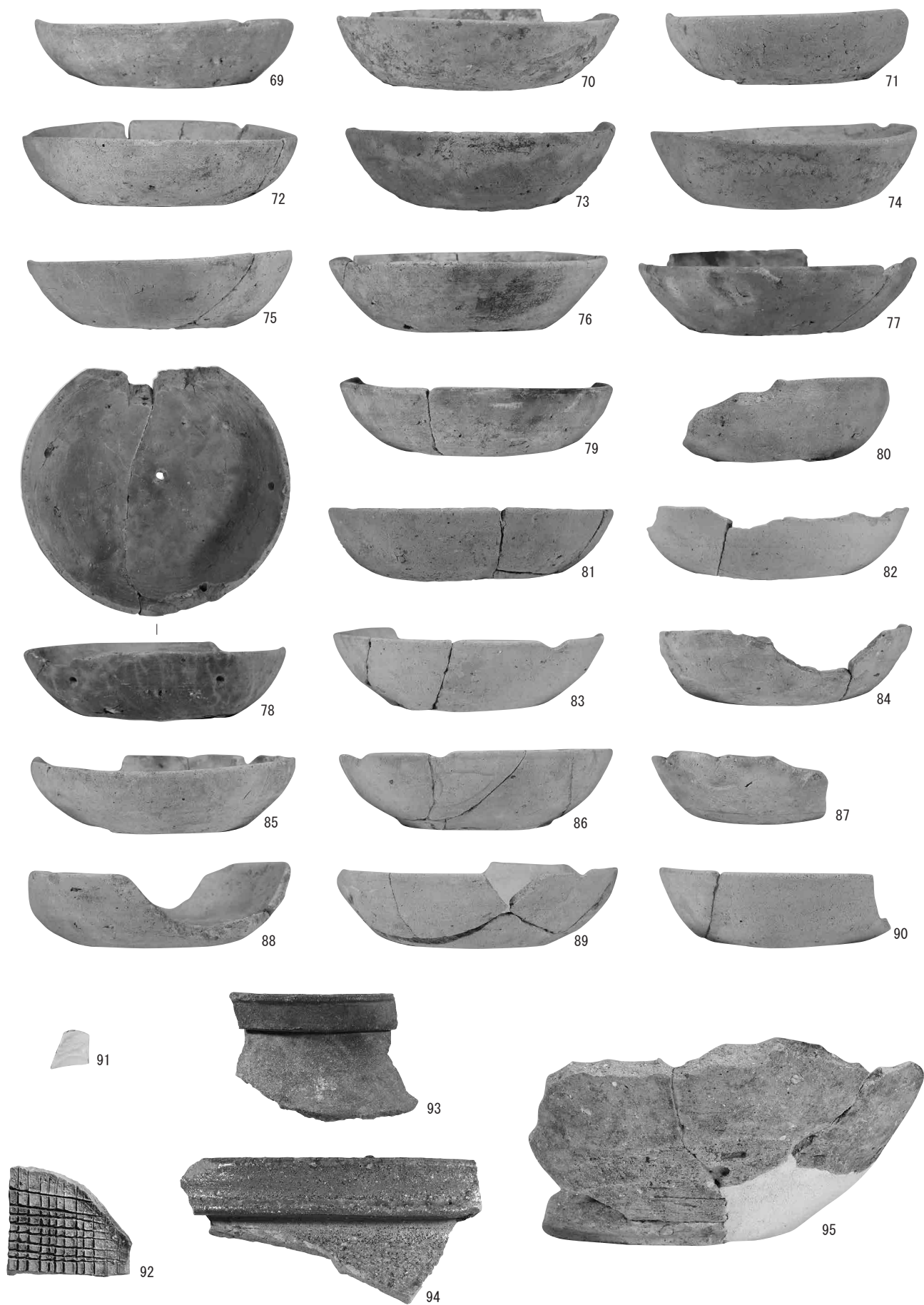
3. 第3面 竪穴状遺構1 出土遺物(1)

图版 8



1. 第3面 竖穴状遺構1出土遺物(2)





1. 第3面 竖穴状遺構1出土遺物(3)



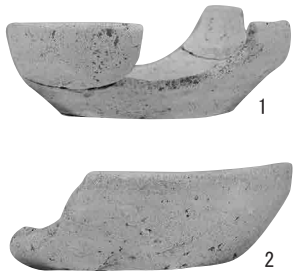
1. 第3面 竖穴状遺構1出土遺物(4)



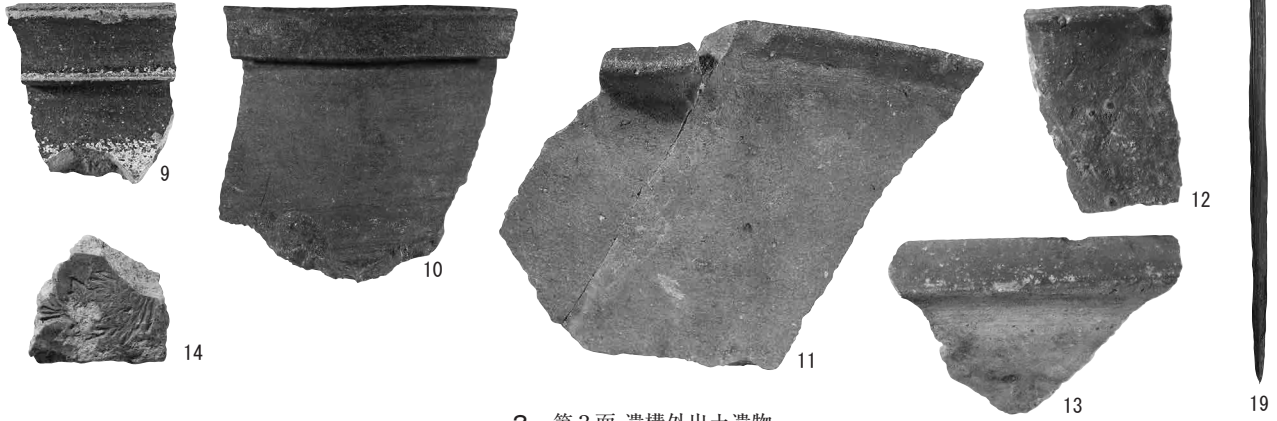
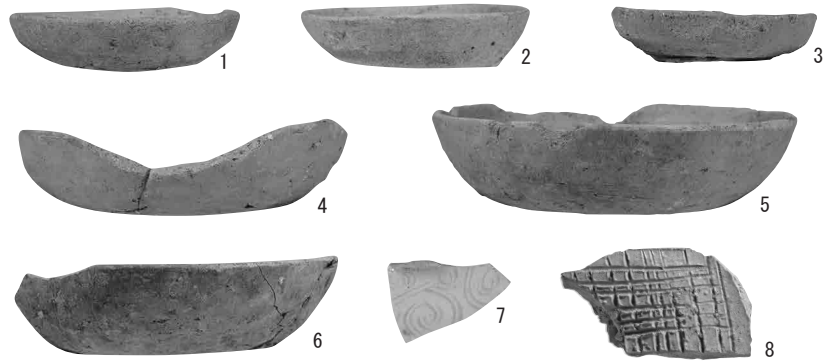
1. 第3面 竖穴状遺構1出土遺物(5)



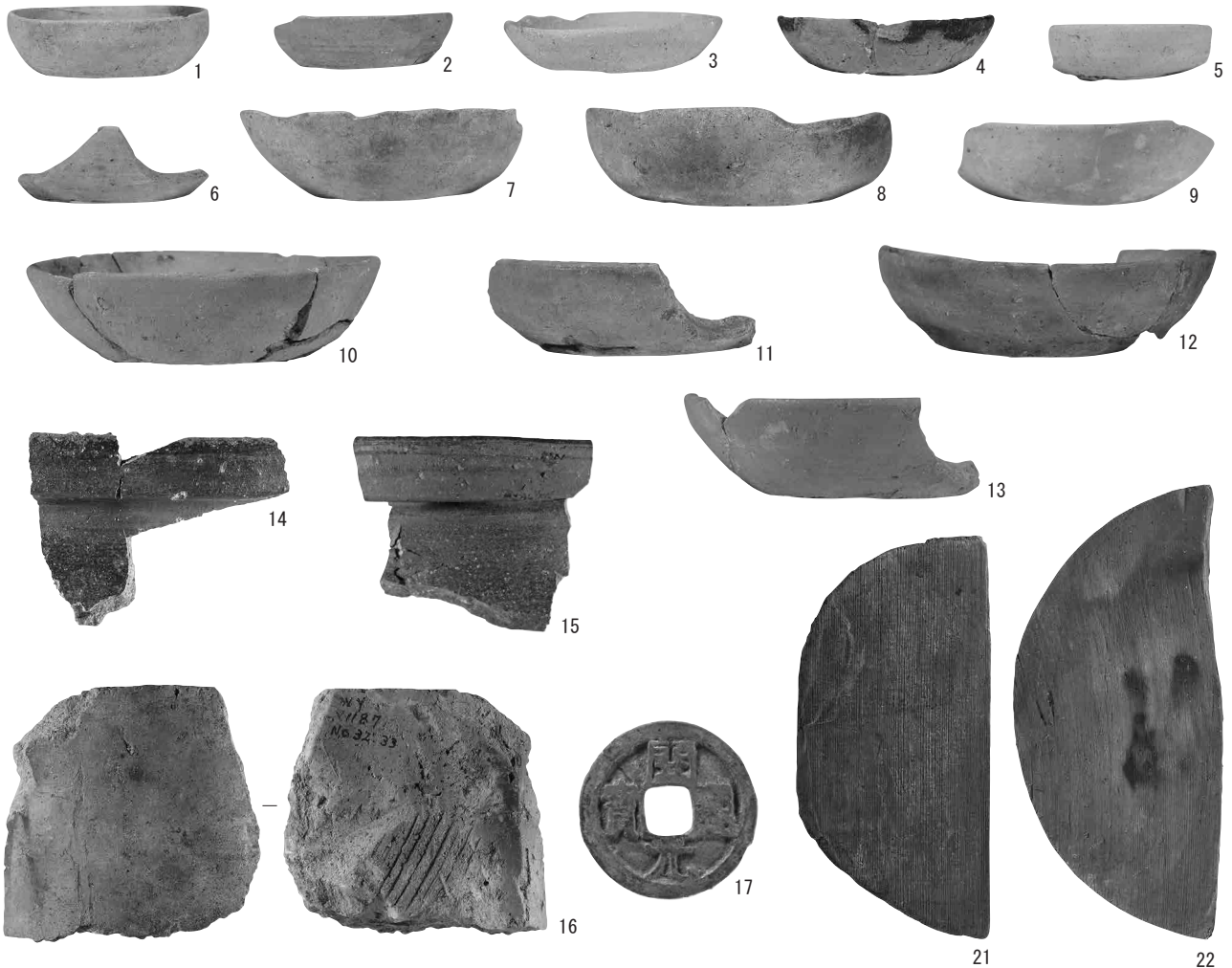
图版 12



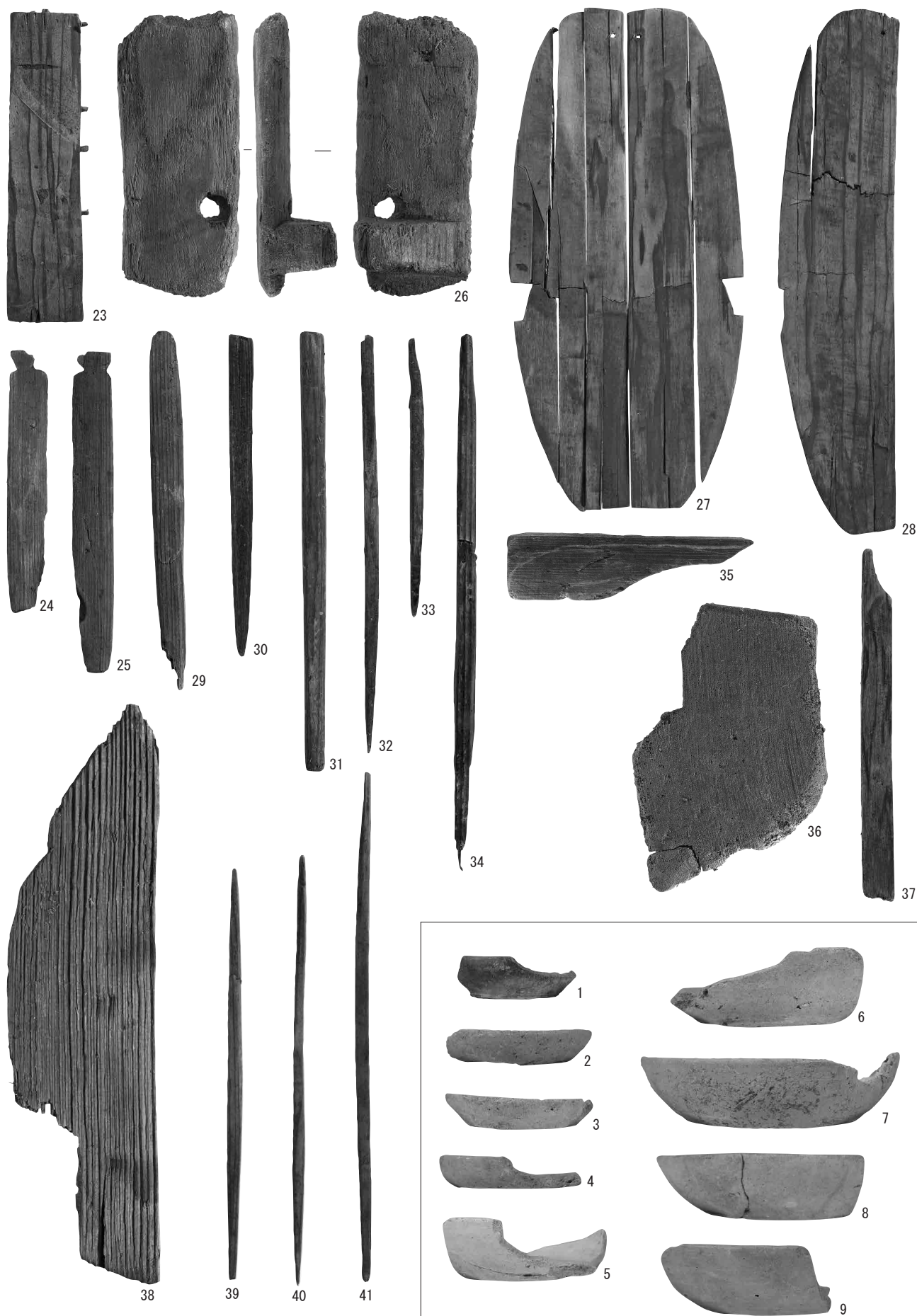
1. 第3面 土坑2出土遺物



2. 第3面 遺構外出土遺物



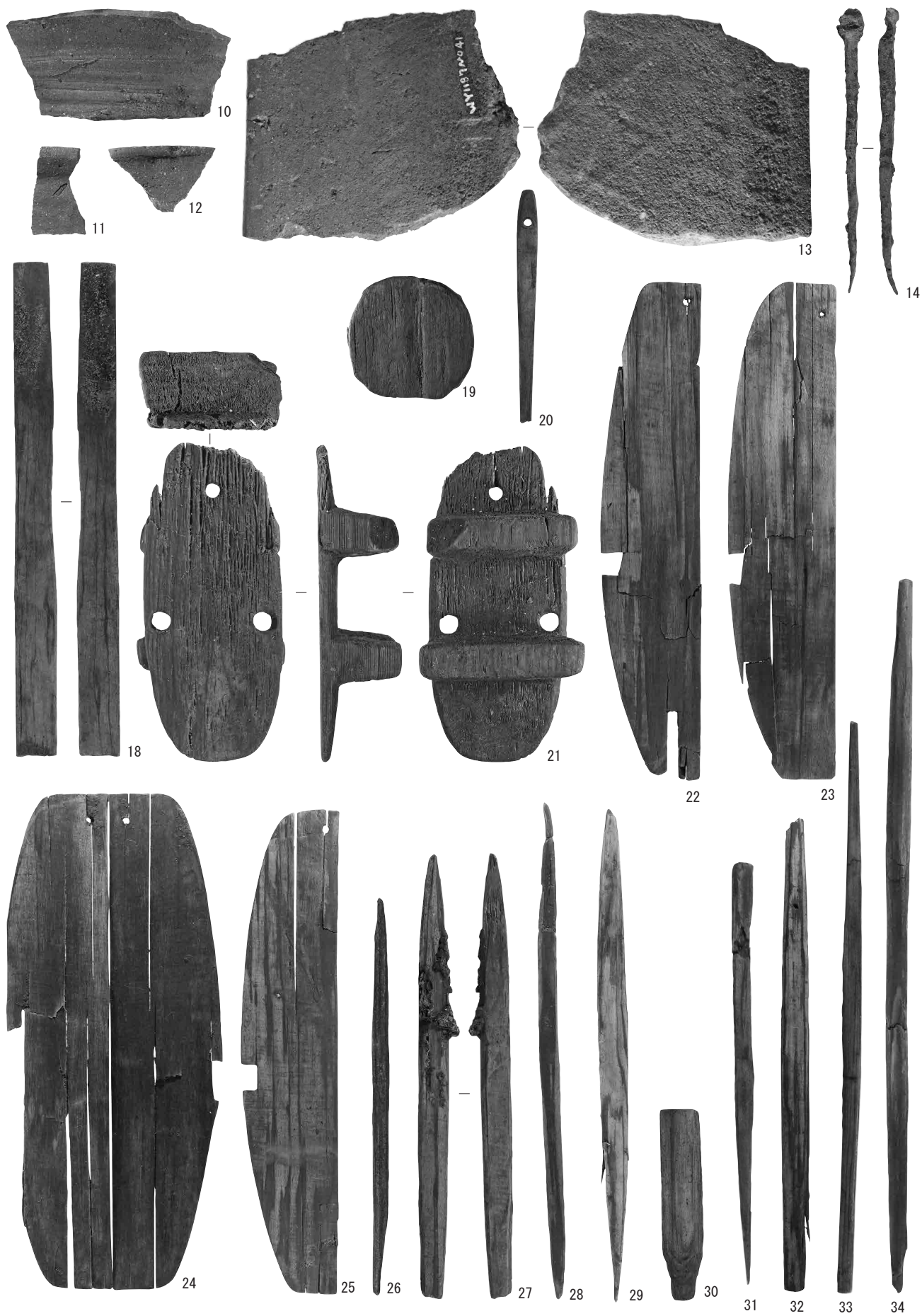
3. 第4面 道路側溝1b出土遺物(1)



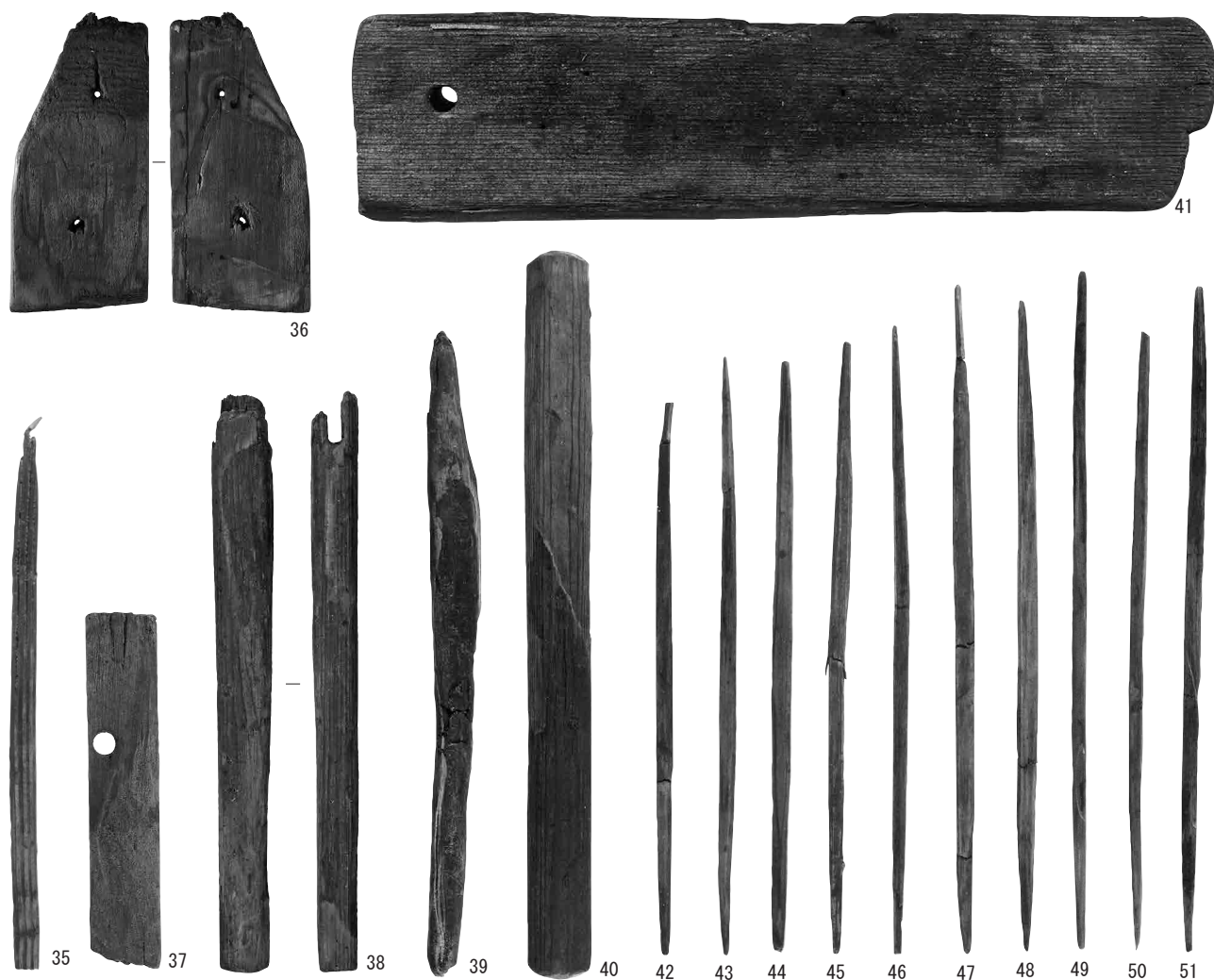
1. 第4面 道路側溝1 b出土遺物(2)

2. 第4面 遺構外出土遺物(1)

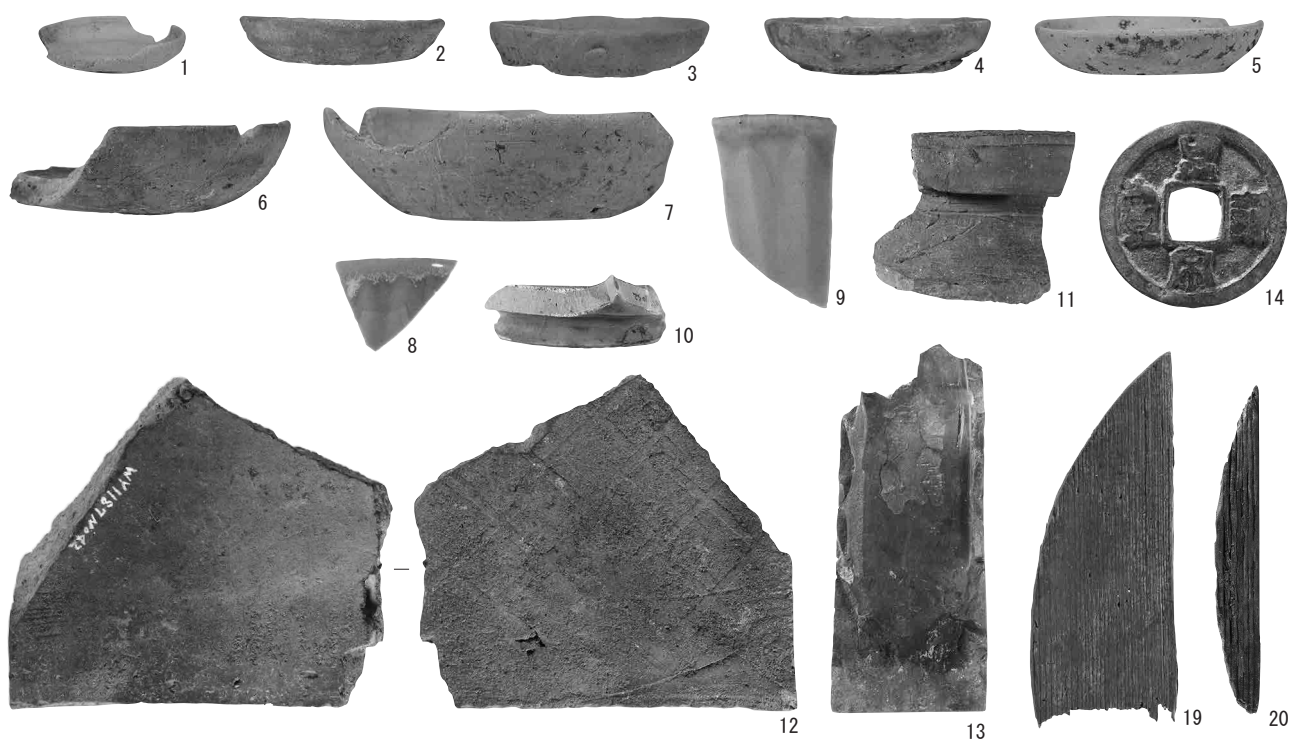




1. 第4面 遺構外出土遺物(2)



1. 第4面 遺構外出土遺物(3)

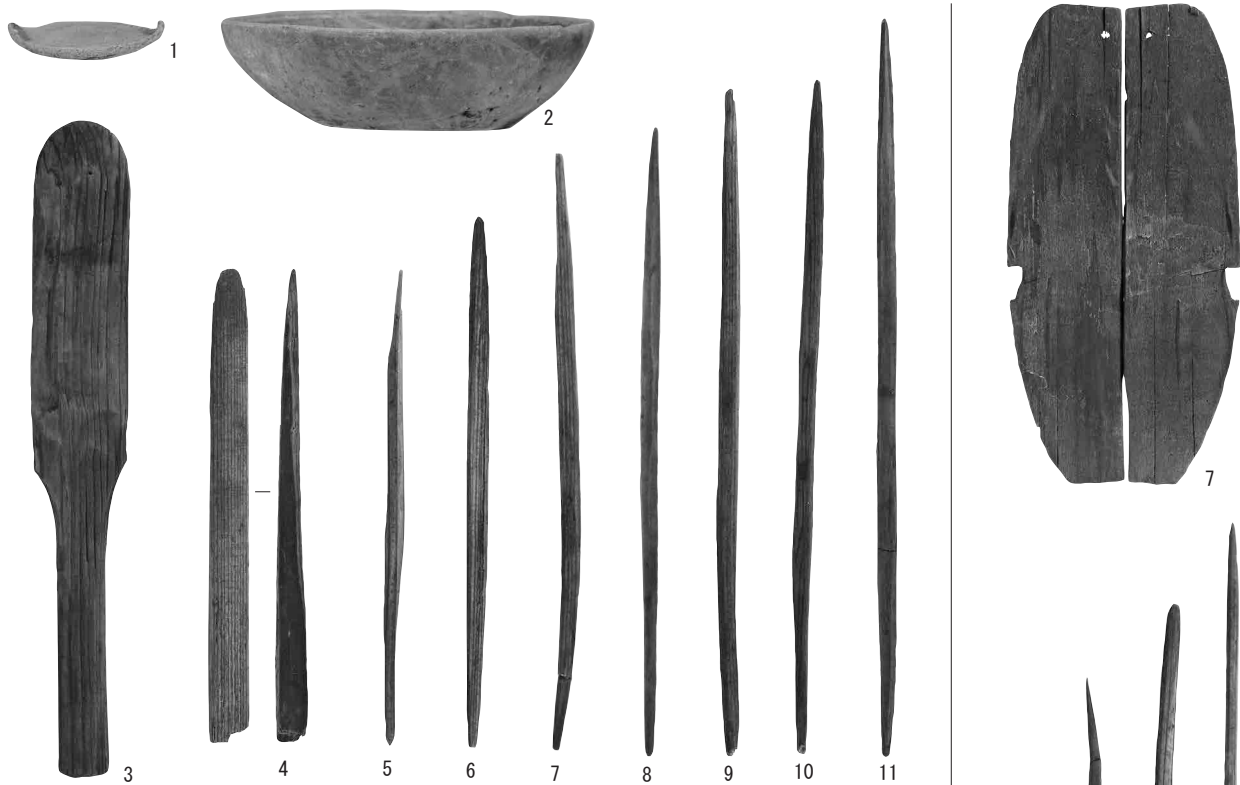


2. 第5面 道路側溝 1c 出土遺物(1)

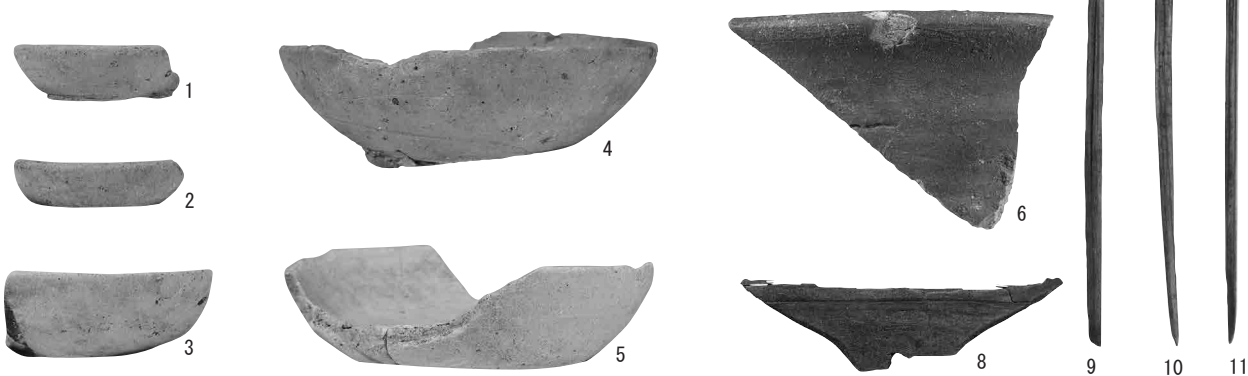




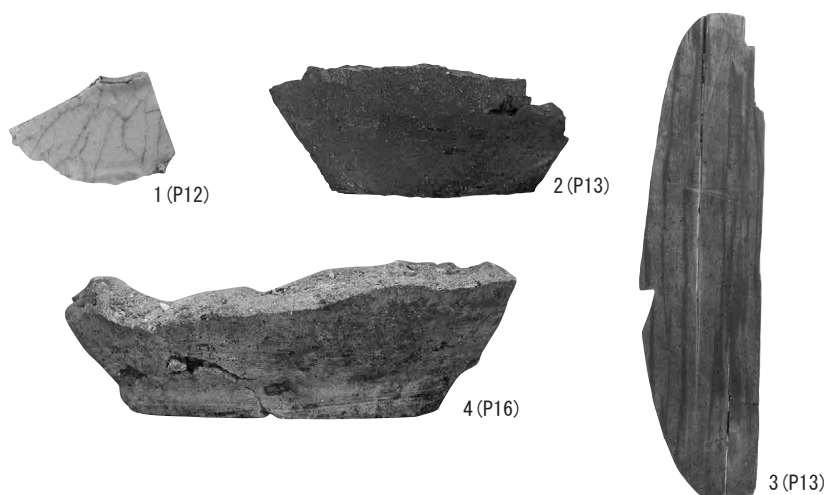
1. 第5面 道路側溝1c出土遺物(2)



1. 第5面 土坑3 出土遺物



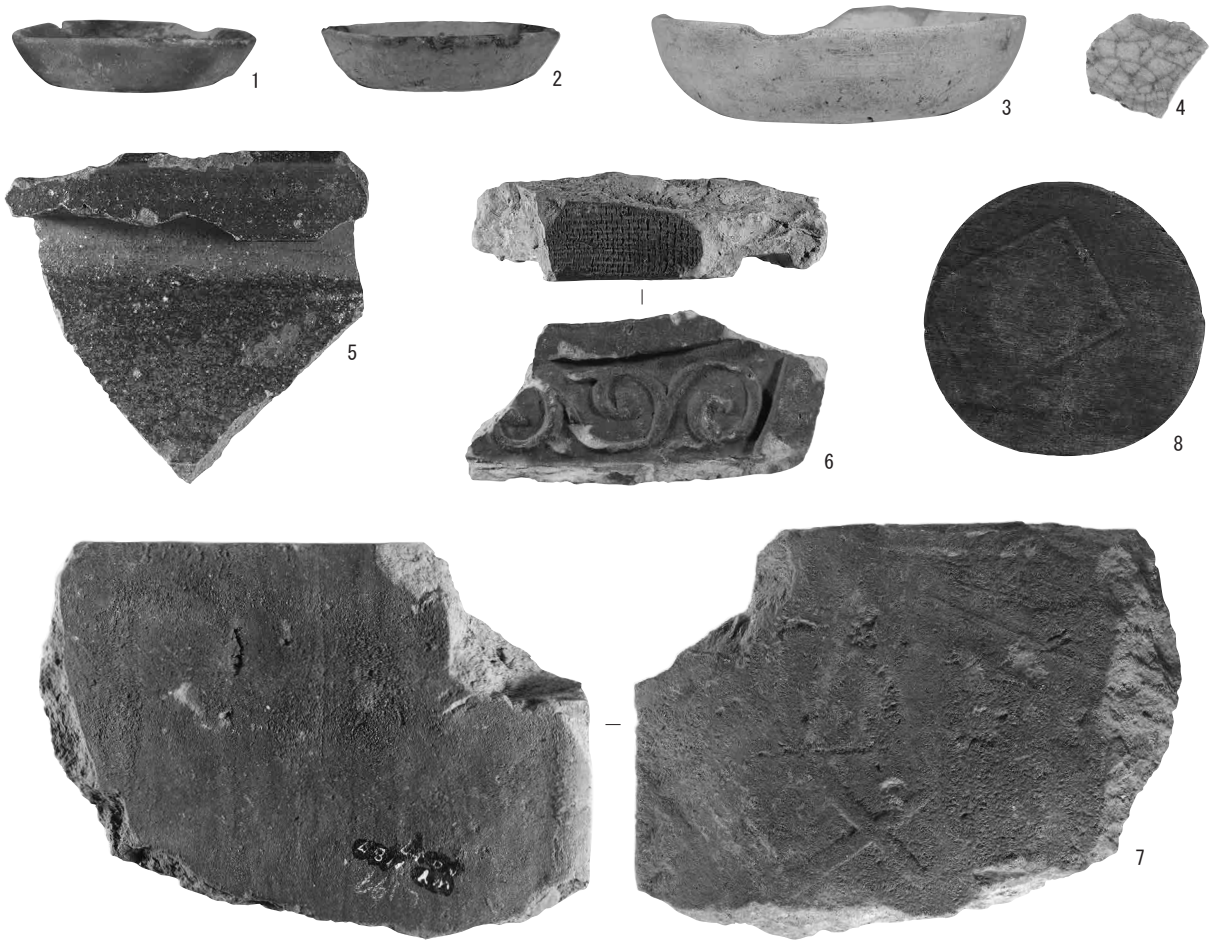
2. 第5面 土坑4 出土遺物



3. 第5面 ピット12・13・16出土遺物



4. 第5面 遺構外出土遺物



1. 第6面 遺構外出土遺物



## 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町二丁目349番1の一部地点

## 例 言

1. 本報は「若宮大路周辺遺跡群」（神奈川県遺跡台帳No.242）内、鎌倉市小町二丁目349番1の一部地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年8月26日～同年9月12日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約14㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者	三ツ橋正夫
調査員	岡田慶子
作業員	浅香文保・伴一明・鈴木啓之・大塚尚城

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を三ツ橋正夫、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系AREA 9）を用い、図5に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「WOK 2」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会	2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬戸：愛知県史編さん委員会	2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会	2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会	2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
11. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介（玉川文化財研究所）
--
12. 報告書作成にあたっては、宇都洋平氏・伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。

## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	141
第1節 調査に至る経緯と経過	141
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	141
第3節 周辺の考古学的調査	144
第二章 堆積土層	148
第三章 発見された遺構と遺物	148
第1節 溝状遺構	148
第2節 ピット	151
第3節 遺構外出土遺物	151
第四章 まとめ	152

## 挿図目次

図1 遺跡位置図	143	図7 溝状遺構1	150
図2 若宮大路周辺遺跡群の周辺遺跡	144	図8 溝状遺構2	150
図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡	145	図9 溝状遺構3・4	150
図4 調査区位置図	147	図10 溝状遺構5、ピット1～3	151
図5 調査区配置図	147	図11 溝状遺構5出土遺物	151
図6 遺構分布図	149	図12 遺構外出土遺物	151

## 表目次

表1 若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧	146	表3 遺構計測表	154
表2 出土遺物観察表	154	表4 出土遺物一覧表	154

## 図 版 目 次

図版 1	1. 調査区近景 (南西から)…………… 155	2. 溝状遺構 5 (北から) …………… 157	
	2. 調査区南側土層断面 (北東から)・ 155	図版 4	1. 溝状遺構 5 (西から) …………… 158
図版 2	1. 調査区全景 (東から)…………… 156	2. 溝状遺構 5 土層断面 (北から) …… 158	
	2. 溝状遺構 2～4・ピット 1～3 (西から)…………… 156	3. 溝状遺構 5 出土遺物…………… 158	
図版 3	1. 溝状遺構 3～5・ピット 1～3 (西から)…………… 157	4. 遺構外出土遺物…………… 158	



# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市小町二丁目349番1の一部地点で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳No.242）の範囲内にあたり、当該地周辺の調査状況から、地下に中世の遺構が存在することは確実であった。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約14㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、三ツ橋正夫が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年8月26日～同年9月12日までの約半月ほどで、調査面積は約14㎡である。現地表の標高は約4.5～5mを測る。調査はまず重機により約40～60cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、中世に属する溝状遺構が検出され、遺構を調査した後に測量と写真撮影などの記録作業を行った。当初、本地点には大路の側溝があると想定されていたが、検出した溝状遺構は浅いものであったため、セットバックした西側1.5m分を拡張して調査を行った。その結果、砂層を掘り込んだ断面逆台形状の溝状遺構の東側肩部と底面を検出し、調査および記録作業を行った。そして9月12日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA9）に準じた、鎌倉市四級基準点2点（ $X = -75822.907$ 、 $Y = -25185.296$ ）、（ $X = -75790.526$ 、 $Y = -25169.923$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53210（標高9.951m）を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群（No.242）は、鎌倉市街地のほぼ中心地区に位置し、国指定史跡「若宮大路」を挟んでおおむね東西に展開している。遺跡の南限は、県道鎌倉葉山線の六地蔵から大町四つ角までの範囲、西は現在の「今小路通り」の寿福寺前から六地蔵までの範囲、東は宝戒寺裏の滑川に架かる宝戒寺橋から夷堂橋を経て小町大路を南に下った大町四つ角までの範囲、北は鶴岡八幡宮前の三ノ鳥居の南を東西に走る横大路から窟堂前を通過して西の今小路通りに至るまでの範囲に相当し、南北約1,000m、東西500～700mの広がりをもつ。

この遺跡範囲内には、その中心に国指定史跡の「若宮大路」が南北に通じ、若宮大路北端の東側には北条小町邸跡（泰時・時頼邸）（No.282）、その隣接地には宇津宮辻子幕府跡（No.239）の包蔵地範囲が、また西側には北条時房・顕時邸跡（No.278）の包蔵地範囲が所在している。

本調査地点は若宮大路周辺遺跡群の中央にあたり、「若宮大路」二ノ鳥居が建つ東面に位置している。また、若宮大路はこの付近から、中央の一段高い段葛と両脇の車道、歩道の三つに分かれており、調査地点は東側の歩道に面している。鎌倉駅東口からは徒歩で数分の距離にある。現住所表記は鎌倉市小町二丁目に属し、本調査地点の南側には鎌倉雪ノ下教会が所在している。

若宮大路を挟んだ本調査地点およびその周辺は、鎌倉の中心市街地を占めることから、特に近年では開発行為に伴う発掘調査が多発している地域である。若宮大路は、源頼朝が妻政子の安産祈願に際し、

頼朝自らが発願・監督し、造営したと伝えられている。また、鎌倉の都市計画の造営に際して、平安京の朱雀大路になぞらえて南北の基軸に据えて街割りを進めたともいわれ、中世都市鎌倉の基準線ともなっている。

本調査地点に隣接する地区には「宇津宮辻子幕府」と「若宮大路幕府」の推定地が所在し、その並びには「北条泰時・時頼邸」、向かい側には「北条時房・顕時邸」の推定地が所在している。

近年の若宮大路沿いの「二ノ鳥居」以北の発掘調査では、大路の両側溝と推定される大溝がそれぞれ数ヵ所で検出されるなど、若宮大路の幅員やその構造などを知る上で大きな手がかりをもたらしている。特に鶴岡八幡宮寄りの「北条泰時・時頼邸」や「宇津宮辻子幕府」、「若宮大路幕府」、「北条時房・顕時邸」などの推定地からは、いずれもしっかりとした木組みの溝枿をもった大溝が発見されており、若宮大路の幅員や構造などを推定する根拠ともなっている。その成果によれば、「二ノ鳥居」以北の幅員は現在の大路と比較してみると、段葛と両脇の車道・歩道を合わせた距離が当時の幅員に相当するとみられている。これらから推定される若宮大路の規模は、側溝幅が約3m(1丈)、側溝の深さが1.5m(5尺)、路面幅が33.6mとされている。また、側溝の屋敷地側には、直径50~60cm台の柱穴列が側溝に並行しているのが確認されている。柵列か、場所によっては二列の並びもみられることから築地塀などの存在も推定されるという。最近の調査事例からは、大路に対して直交方向の道路や溝なども検出されており、基幹道路との関係や町割り、屋敷地の区割りなどの問題とも深く関係しているものとみられる。

一方、二ノ鳥居の南東側では、若宮大路沿いの調査地点でも発見される遺構の多くが方形竪穴遺構や小規模な掘立柱建物や井戸・土坑・柱穴・小穴・小溝などで、これらが確認される地点では武家屋敷とは異なる庶民居住区、いわゆる「町屋」に相当する地域と推定されている。同じ大路沿いでも二ノ鳥居を境に北と南側ではまったく様相が異なっていたことが知られるのである。

本調査地点は、そのほぼ中間に位置しており、溝状遺構を検出した。詳細は次章で述べるが、検出した溝幅は不明であるが、木組みの溝枿は認められず、深さも比較的浅いものであった。近年、二ノ鳥居以南でも電線の埋設工事に関連して、小規模なトレンチ調査が行われている。この調査の結果では、東西いずれも歩道部分で路面や側溝などの遺構は検出されていない。同じ大路でも「二ノ鳥居」以北と以南では様相が異なっていたことがわかる。また若宮大路には、「上ノ下馬」、「中ノ下馬」、「下ノ下馬」の三つの駒留があったとされ、源平池に架かる橋を「上ノ下馬橋」、二ノ鳥居付近の扇川に架けられた橋を「中ノ下馬橋」、下馬四ツ角の橋が「下ノ下馬橋」と呼ばれていたという。

最後に本調査地点周辺の地形について若干述べておきたい。本地点は鶴岡八幡宮を背にして東と西の三方が山に囲まれ、相模湾に向かって南に開けた鎌倉市街地の沖積平野部においてはやや山寄りに位置している。また、本遺跡群の東側には市街地を貫く滑川が北東から南西方向に流下し、西側には扇川が北から南に流路をとり、大町橋付近で滑川に合流している。周囲の標高は、本調査地点では4.5~5.0m、北側の三ノ鳥居付近では約9.7m、東側の「小町大路」付近では約7.4m、扇川が滑川に合流する大町橋付近では4.3~4.5mとなる。本遺跡群が位置する鎌倉市街地は、南の由比ヶ浜から北の鶴岡八幡宮まで約1.8kmという狭い沖積平野の中にあるが、本調査地点は周囲に比べてやや低かったように思われる。





図1 遺跡位置図



### 第3節 周辺の考古学的調査

本地点を含む若宮大路周辺遺跡群の発掘調査事例は、市街地に起因する開発件数の多さもあり、大小様々なものまでを含めて数えると、これまでに150地点以上が知られている。多くは小規模な調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、前節でみてきたようにおおむね「二ノ鳥居」以北と以南では様相が大きく異なっていることが知られている。

図2のほぼ中央に位置する本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群が所在する沖積平野部のやや奥まった場所に位置している。その北側には若宮大路を挟んで大規模な屋敷地が居並ぶ幕府の最重要地点である。本調査地点の北側に隣接する「宇津宮辻子幕府／若宮大路幕府」推定地は、西面を若宮大路に面した、東西140～195m、南北220～230mにも及ぶ広大な地区であり、すでに10カ所の発掘調査が行われている。

また、本調査地点の周辺域でも同様に、若宮大路の両側を中心に今までに数10カ所以上の発掘調査が



※矢印は本調査地点、数字は神奈川県遺跡台帳による遺跡Noを示す。

図2 若宮大路周辺遺跡群の周辺遺跡





※矢印は本調査地点、●印・丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡

行われており、本地点を含めて大路の側溝が部分的に検出されている。東西の両側溝とも開削当初は素掘りであったものが、木組み溝枠をもつ構造へと変化したことが確認されている。本調査地点より北へ250mほどの大路の西側に位置する「北条時房・顕時邸」雪ノ下一丁目273番口地点では、幅約3m(約1丈)、深さ1.5m(5尺)と推定される木組み構造の側溝が確認されている。同様の遺構は、本地点東側の「小町大路」沿いでも4カ所の地点(⑤小町一丁目325番イ外地点、⑬小町一丁目329番1・10地点、⑮小町一丁目331番1地点、⑰小町一丁目333番15地点)で中世の道路面やそれに伴う側溝が発見されている。これらの遺構は、現在の「小町大路」の西側に隣接している。また、西面の溝は、初め素掘りであったものが、木組み溝枠に変わり、凝灰岩切石積みないし泥岩塊積みへと変化したことが知られている。これらの調査事例は小町大路沿いの一例であるが、大路からやや奥まった地区では基幹道路との関係や町割り、屋敷地の区割りなど、区画に合わない主軸方向をもつ道路や溝、各種建物なども多く発見されている。鎌倉独特の地形的制約による影響も考えられるが、表通りから奥まった地区では必ずしも若宮大路などの主要道路に沿った町割ではなかったようである。これらの問題についても階層に起因するものなのか、それとも時間軸による変化であったのか、整理されなければならない課題であろう。

最後に本調査地点に隣接する遺跡についてに示すと、すぐ北側には宇津宮辻子幕府跡(No.239)、さらにその並びには北条小町邸跡(泰時・時頼邸)(No.282)、その向かいに北条時房・顕時邸跡(No.278)の推定地があり、東側には滑川を挟んで小町大路東遺跡(No.233)が広がっている。

表1 若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町二丁目349番1の一部地点	
①	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目66番他地点	松尾 1983 c
②	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町二丁目345番2地点	馬淵 1985
③	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目321番1地点	宮田 1996
④	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目322番2地点	
⑤	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目325番イ外地点	佐藤・小林 1994
⑥	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目319番2地点	松尾 1983 d
⑦	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目309番5地点	齋木 1983
⑧	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目309番4地点	松尾 1983 b
⑨	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目309番2地点	齋木 1985
⑩	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目305番口、308番地点	松尾 1983 a
⑪	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目287番13地点	齋木 1992
⑫	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目322番地点	宮田・高野ほか 1997
⑬	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目329番1・10地点	宮田・滝澤ほか 2014
⑭	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目329番7地点	
⑮	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目331番1地点	
⑯	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目333番2地点	原・山口 2008
⑰	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目333番15地点	押木 2015
⑱	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目302番地点本覚寺旧境内	
⑲	若宮大路周辺遺跡群(No.242)	小町一丁目302番地点本覚寺夷堂	

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

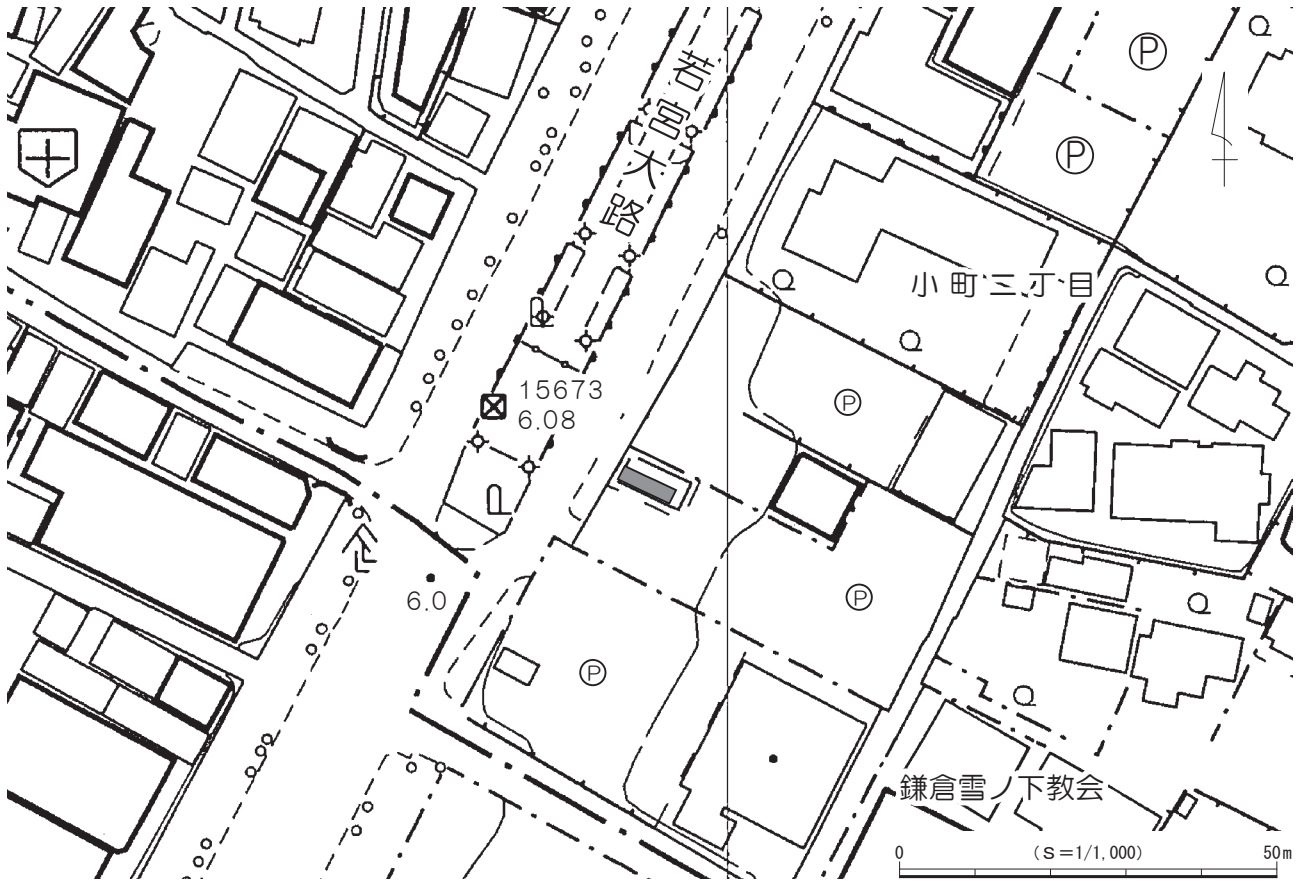
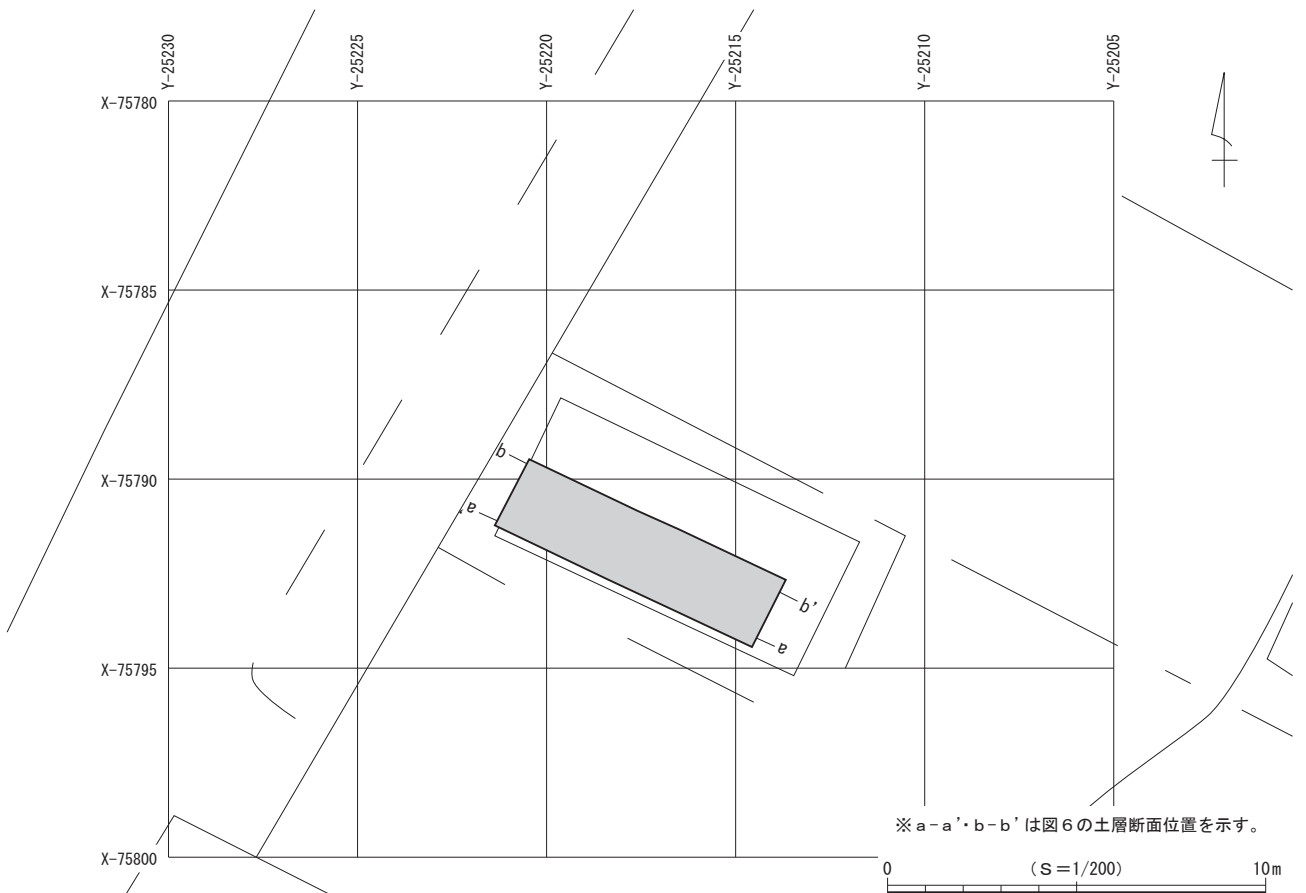


図4 調査区位置図



※ a-a'・b-b' は図6の土層断面位置を示す。

図5 調査区配置図



## 第二章 堆積土層

本調査地点は沖積低地上に位置しており、現代の盛り土および攪乱層を含めてⅠ～Ⅴ層の合計5層の堆積土を確認した。現在の地表面は標高約4.5～5mを測り、東から西へ向かって傾斜する。

Ⅰ層は近代の瓦や泥岩ブロックを含む盛土および攪乱層で、その下にⅡ層とした黒色弱砂質土を斑紋状に含む近代の茶褐色弱砂質土が堆積する。そしてⅢ層は炭化物粒を微量に含む締まりのややある茶褐色弱砂質土で、18世紀代の染付磁器を含むことから近世に相当する土層と考えられる。この近世段階に中世の地山が削平されており、下面は砂層にまで達していた。Ⅲ層の下位にはⅣ層とした中世地山と砂層の漸移層である暗褐色弱粘質土が堆積するが、削平による影響で調査区南壁の一部のみで確認された。最下層のⅤ層は砂層で、層内には複数枚の粘質土層と砂層がラミナ状に堆積する様相が認められた。遺構はⅤ層の上面で確認され、確認面の標高は約5.2～5.9mを測る。

なお、土層断面図中に示した1～18層は遺構の覆土と考えられるが、平面的には不明瞭であった遺構、また、平面で確認されたが土層断面では不明瞭であった遺構がいくつか認められた。

## 第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、中世に属すると考えられる溝状遺構5条を検出した。遺構は近世に相当するⅢ層直下にあたる堆積土層のⅤ層上面で検出され、確認面の標高は約5.2～5.9mを測り東から西へ傾斜する。調査区全域が近世段階においてⅤ層(砂層)まで削平されており、遺構の遺存状態は良好ではない。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱を数える。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、国産磁器類、陶器類が出土している。遺構外からは中世後半～近世といった時期幅の広い遺物が含まれているが、遺構出土の遺物は中世前期の遺物で占められている。それらの遺物を基準とすると、検出された遺構群は13世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

以下、溝状遺構とその出土遺物、遺構外出土遺物について説明する。

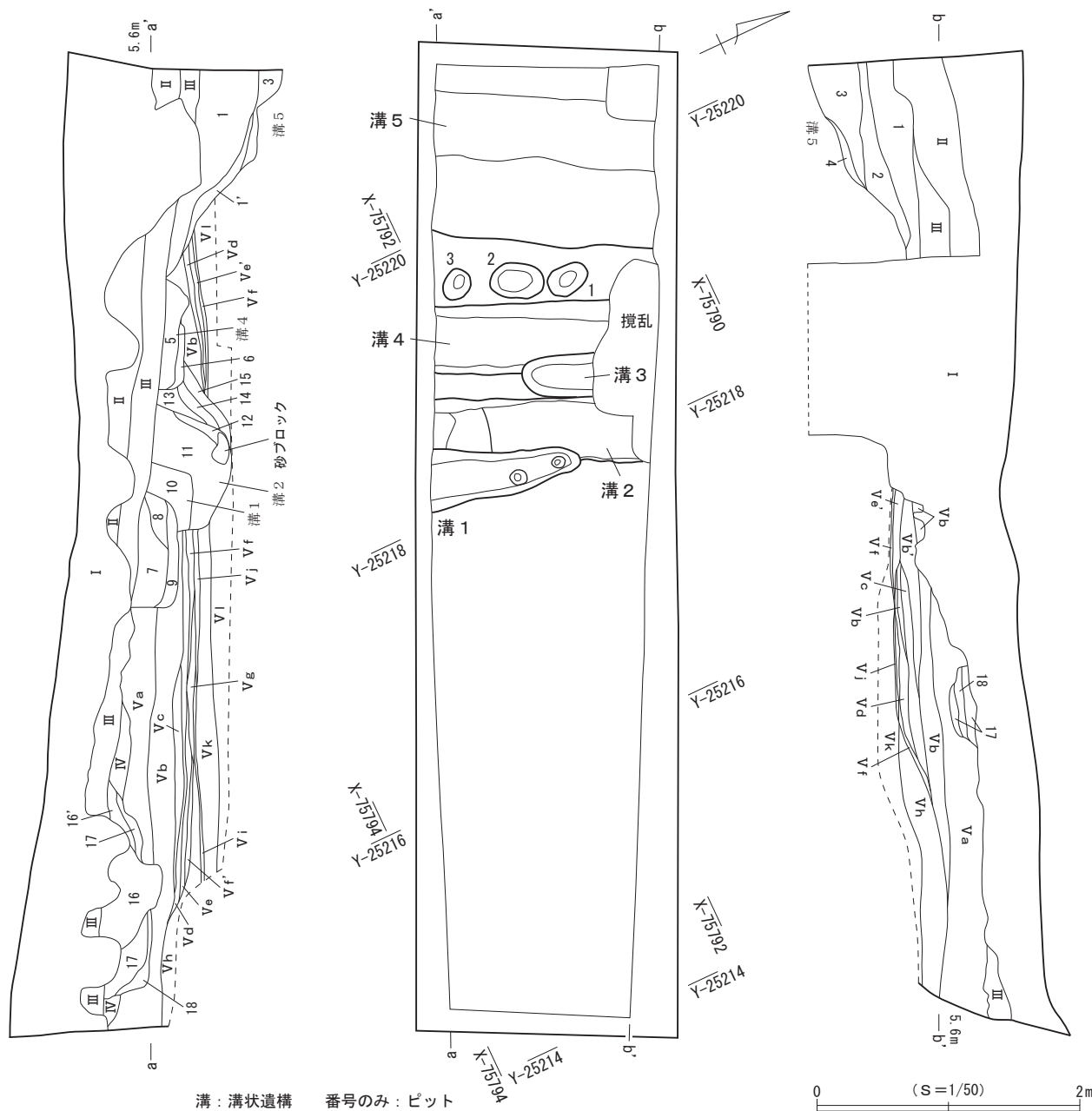
### 第1節 溝状遺構

中世の溝状遺構5条を検出した。すべて若宮大路と並行する方向に延びており、東西に長いトレンチ状を呈する調査区の西半に重複して検出され、新旧関係をもつ。近世段階において上部を削平され、遺構の底面近くが検出される結果となった。溝状遺構1～4は幅が25～85cm、確認面からの深さは5～60cmの規模であるが、若宮大路の最も近くから検出された溝状遺構5は、それらと比較して突出した規模をもつ。今回の調査では東側の肩部と底面のみを把握したにとどまるが、規模や走行方向を鑑みると溝状遺構5は若宮大路の側溝の可能性が考えられ、現状では木組みは確認されず素掘り構造のものと考えられる。

#### 溝状遺構1(図7)

調査区中央やや西寄りに位置する。南北方向に延びて調査区外の南側へと続き、調査区中央やや北寄りでは北端部を捉えた。溝状遺構のうちで最も調査区東寄りに位置し、溝状遺構2と重複して東壁を壊している。検出した規模は現存長1.13m、幅20～46cm、調査区壁で確認された深さは34cmを測り、主軸方位はN-25°-Eを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形に近い形状を呈する。底面の標高は5.28





溝：溝状遺構 番号のみ：ピット

- I層 盛土・攪乱 近代瓦・泥岩ブロック含む。
- II層 茶褐色弱砂質土 黒色弱砂質土を斑紋状に含む。(近代土)
- III層 茶褐色弱砂質土 炭化粒微量含む。染付け17世紀含む。締まりややあり。
- IV層 暗褐色弱粘質土 砂粒を混在する。
- V層 砂層
- a：暗灰褐色砂質土 細砂主体。締まり強い。
- b：黄灰色砂 キメ細かく締まりあり。上位に小泥岩ブロック認める。
- b'：黄灰色砂 泥岩粒少量含む。
- c：灰色砂 泥岩粒少量含む。締まりあり。
- d：乳灰色砂質土 下位に帯状に強く堆積。
- e：暗黄灰色砂 泥岩粒少量含む。
- e'：暗黄灰色砂 細砂多い。
- f：灰茶褐色粘質土 粘性強い。
- f'：灰茶褐色砂 灰茶褐色粘質土を混入する。
- g：灰褐色砂 粘質土を混入する。
- h：黄灰色砂 泥岩粒少量含む。
- i：暗茶褐色粘質土 粘質土を多く含む。
- j 暗黄灰色砂 粗粒砂。泥岩ブロック少量含む。
- k：暗黄灰色砂
- l：暗黄灰色砂 kより暗い。

溝状遺構 5 覆土

- 1層 暗茶褐色土 泥岩粒・かわらけ片・炭化粒少量含む。やや砂質土混入。
- 1'層 灰茶褐色土 黄褐色砂主体
- 2層 暗褐色土 泥岩粒・泥岩ブロック・かわらけ片・炭化粒やや多く含む。粘性あり、締まり強い。
- 3層 黒褐色土 泥岩粒微量含む。粘性強く、締まり強い。
- 4層 黒褐色土 V層を混入する。

溝状遺構 4 覆土

- 5層 暗茶褐色弱粘質土 泥岩粒・パミス少量含む。締まりあり。
- 6層 灰茶褐色弱粘質土 砂を混入する。

断面遺構覆土 (平面では不明瞭であった遺構)

- 7層 灰褐色土 泥岩粒、パミスやや多く含む。
- 8層 暗灰褐色土 泥岩粒、パミス微量含む。
- 9層 暗褐色弱粘質土 砂を少量含む。

溝状遺構 1

- 10層 灰褐色土 パミスやや多く、泥岩粒微量含む。

溝状遺構 2 覆土

- 11層 黒褐色粘質土 きめ細かく締まりあり。
- 12層 暗黄灰色砂質土 細砂をやや多く含む。

断面遺構覆土 (平面では不明瞭であった遺構)

- 13層 暗黄灰色砂 細砂主体。
- 14層 暗黄灰色強砂質土 黒褐色土粒子微量、泥岩粒含む。
- 15層 暗黄灰色強砂質土 黒褐色土混入する。

断面遺構覆土 (平面では不明瞭であった遺構)

- 16層 暗茶褐色砂質土 径1~2mmの砂を主体とする。締まりあり。
- 16'層 暗黄褐色砂質土 径1~2mmの砂を主体とする。締まり強い。
- 17層 黒褐色粘質土 きめ細かく締まりあり。
- 18層 黒褐色粘質土 黄灰色砂を多く含む。

図6 遺構分布図

mである。北側の底面に平面形が略円形を呈するピット2基が穿たれており、規模は径10cmと12cm、深さ20cmと18cmを測る。覆土はパミスをやや多く含む泥岩粒を微量に含む灰褐色土である。

遺物は出土しなかった。

### 溝状遺構 2 (図8)

調査区中央やや西寄りに位置する。南北方向に延び、北端部は攪乱によって壊されるが南側は調査区外へと続いている。東側で溝状遺構1と重複し、東壁を壊されている。西側の上端は直線的であるが、東側は緩やかに湾曲している。検出した規模は現存長1.59m、幅48~85cm、調査区壁で確認された深さは60cmを測り、主軸方位はN-25°-Eを指す。壁は南側ではやや開いて断面形が逆台形を呈し、中央から北側は壁が真っすぐに立ち上がり断面形が箱形を呈する。底面は南側が深く掘り込まれて段をもち、底面の標高は中央部で5.20m、南端部で5.10mを測る。覆土は2層に区分され、主体はきめが細かく締まりのある黒褐色粘質土で、壁際に細砂をやや多く含む暗黄灰色砂質土が堆積する。

遺物は出土しなかった。

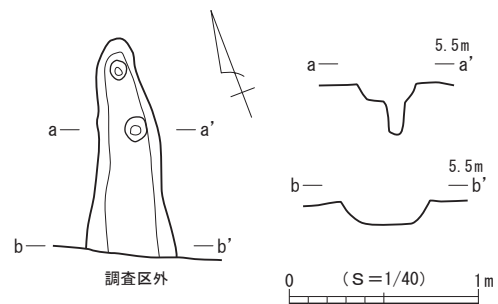


図7 溝状遺構 1

### 溝状遺構 3 (図9)

調査区西側に位置する。南北方向に延びて北側を攪乱によって壊され、調査区中央付近で南端部を捉えた。東側で溝状遺構2と接し、西側で溝状遺構4と重複して東壁を壊している。検出した規模は現存長53cm、幅34cm、深さ5cmを測り、主軸方位はN-25°-Eを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面の標高は5.30mを測る。近世以降の削平により上部はすでに失われ、底面近くのみを調査したものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

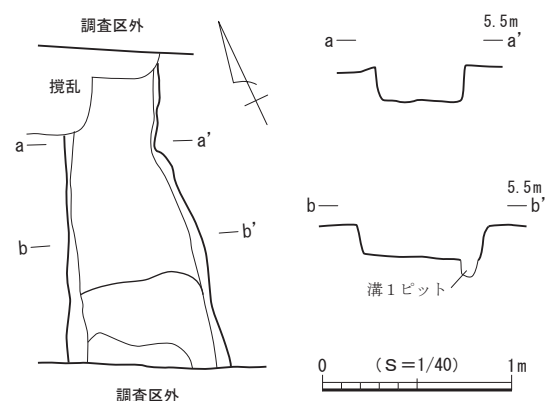


図8 溝状遺構 2

### 溝状遺構 4 (図9)

調査区西側に位置する。直線的に南北方向に延びて北側を攪乱によって壊され、南側は調査区外へと続いている。検出した規模は現存長1.30m、幅52cm、調査区壁で確認された深さは17cmを測り、主軸方位はN-25°-Eを指す。壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は調査区壁面では箱形ないし逆台形状を呈する。底面の標高は北端部で5.34mを測る。覆土は2層に区分され、上層は泥岩粒とパミスを少量含む締まりのある暗茶褐色弱粘質土で、下層は砂が混入した灰茶褐色弱粘質土である。

遺物はかわらけ3点が出土した。

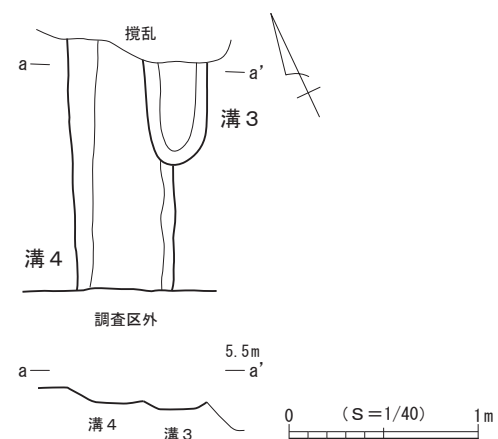


図9 溝状遺構 3・4

## 溝状遺構5 (図10)

調査区西端に位置する。南北方向に延びて調査区外へと続いており、東側の肩部と底面のみを確認し得た。他の遺構と重複することなく単独で検出された。検出した規模は現存長1.65m、現存幅1.35cm、深さ60cmを測り、主軸方位はN-30°-Eを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形はおおむね逆台形を呈し、中位から下位にかけて段を有する。底面の標高は4.64mを測る。覆土は4層に区分され、大きくは暗褐色土(1・2層)と黒褐色土(3・4層)に分けられる。最上層の1層は泥岩粒とかかわらけ片、炭化物粒を少量含み砂質土の混入した暗茶褐色土で、2層は泥岩ブロックと泥岩粒、かわらけ片、炭化物粒をやや多く含む。3層は泥岩粒を微量に含んだ粘性と締まりのある土層で、4層はV層を混入する。本址の東側にピット3基(ピット1~3)が上端に沿うように並んでおり、付帯施設に関連するものの可能性も考えられる。

### 出土遺物 (図11)

遺物はかわらけ132点、磁器8点、陶器14点、金属製品1点が出土し、このうち4点を図示した。

1・2は手づくね成形によるかわらけである。3は青白磁碗である。4は鉄釘である。

## 第2節 ピット

中世のピット3基を検出した(図10)。溝状遺構4と溝状遺構5との間に3基が配列しており、礎石や礎板を伴うものは認められなかった。平面形は楕円形で、規模は長軸24~40cm、深さ8cmと12cmを測る。溝状遺構5の上端に沿って並列していることから、同遺構に付随する施設の一部である可能性も考えられる。

遺物は出土しなかった。

## 第3節 遺構外出土遺物

本地点では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち4点を図示した(図12)。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3は白磁碗である。4は瀬戸・美濃窯産の大窯期の丸皿である。

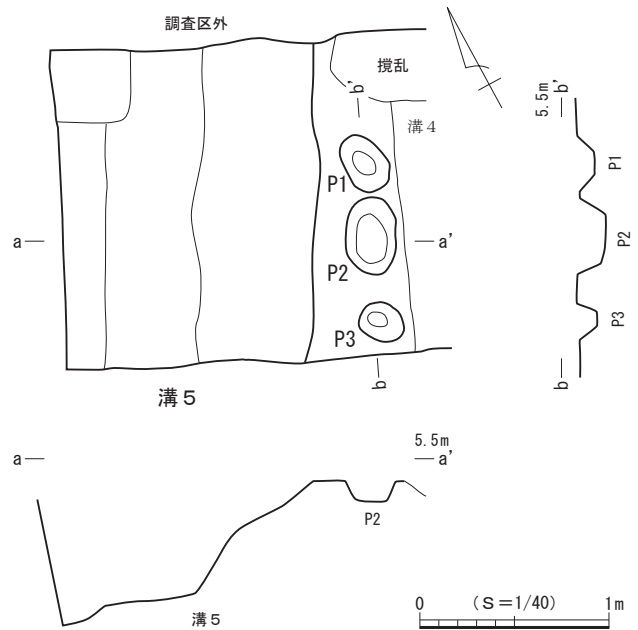


図10 溝状遺構5、ピット1~3

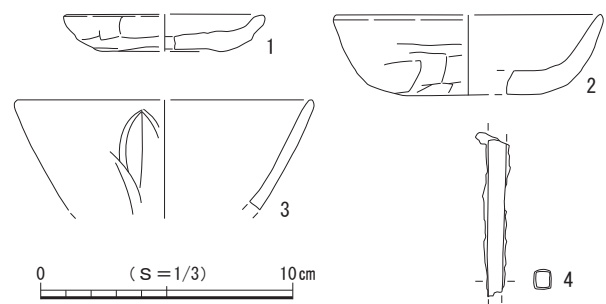


図11 溝状遺構5出土遺物

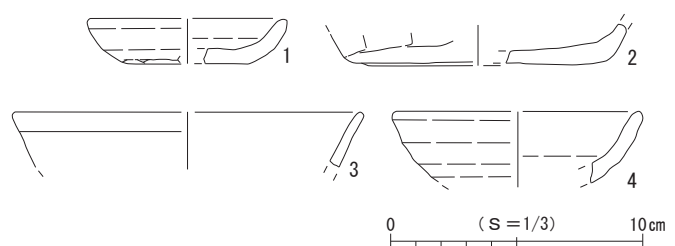


図12 遺構外出土遺物

## 第四章 まとめ

本地点は若宮大路の二ノ鳥居東側に隣接し、若宮大路の道筋にあたることから、東側側溝の検出が調査前より想定されていた。調査の結果としては、若宮大路と並行する方向に延びる中世の溝状遺構5条が調査区西部に重複して検出されたが、近世段階において削平により遺構の遺存状態は悪く、遺構の底面近くのみが確認される結果となった。

調査区中央西寄りに重複している溝状遺構1～4は、幅が25～85cm、確認面からの深さは5～60cmの規模をもつが、若宮大路に最も近い調査区西端部から検出された溝状遺構5は、これらと比較して突出した規模をもつ。溝状遺構5は東側の肩部と底面の一部を確認したにとどまるが、現存幅1.35m、深さ60cmを測り、走行方向は若宮大路と同じでN-30°-Eを指すことから、若宮大路の側溝となる可能性が考えられる。なお、現状では付随する木組みは確認されておらず、構造的には素掘りで断面形は段をもつ逆台形を呈する。

若宮大路の側溝について検討を加えた宇都洋平によると、発掘調査で検出された若宮大路の側溝は西側で7地点、東側で8地点を数え、この15地点はいずれも二ノ鳥居と三ノ鳥居との中間地点以北に位置し、鶴ヶ岡八幡宮の近くに集中する(宇都 2009)。側溝の構造は素掘りのものと木組みのものがあり、素掘りで断面形が逆台形を呈する側溝は大路の東側でしか確認されていないことも指摘されている。今回調査された溝状遺構5は、構造・断面形状ともに現在までに確認された大路の東側側溝のあり方と合致する。

ここで本地点に隣接する若宮大路沿いの調査事例について触れると、若宮大路を挟んだ西側に位置する二ノ鳥居西遺跡(現：若宮大路周辺遺跡群小町一丁目66番他地点)では、溝状遺構が検出されている。走行方向や時期などの詳細は本報告がなされていないことから現状では不明である(松尾 1983c)。また、本地点と同じく若宮大路東側の二ノ鳥居以南に立地する調査地点としては、本地点の南80mに位置する藤内定員邸跡(現：若宮大路周辺遺跡群小町一丁目319番2地点)がある。13世紀半ば頃の溝状遺構が検出されており、規模は幅約2m、深さ約1mに及び「若宮大路に対して直交せずに、南30度程斜行して交っている」とされる(松尾 1983d)。この溝状遺構には南側に沿って帯状の整地層が検出され、両遺構が一体となり区割りや道路として機能していたと考えられる。さらにその南側の小町一丁目309番2地点(図3⑨)では、比較的広範囲にわたる調査が行われ、13世紀後半から14世紀末頃にかけての井戸・堅穴状遺構が高い密度で検出されたほか、若宮大路と直交方向の溝状遺構5条、並行方向の溝状遺構6条が検出されている(齋木 1985)。

このように、若宮大路東側の二ノ鳥居以南においては区割りや町屋的な様相は徐々に明らかとなりつつあるが、若宮大路そのものを示す直接的な考古学的証左は得られていないのが現状である。こうした中で、本地点の調査成果は二ノ鳥居以南における若宮大路のあり方を推察する上で貴重な資料を提示したといえよう。



引用・参考文献(著者五十音順)

- 石井 進・大三輪龍彦 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 宇都洋平 2009「若宮大路側溝の再検討」『考古論叢神奈河』第17集 神奈川県考古学会
- 押木弘己 2015「若宮大路周辺遺跡群No.242小町一丁目333番15地点」『平成26年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書31 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄 1983『小町一丁目309番5地点発掘調査報告』(推定)藤内定員邸跡発掘調査団
- 齋木秀雄 1985『(推定)藤内定員邸跡遺跡』鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄 1992「若宮大路周辺遺跡群(本覚寺ビル)の調査」『鎌倉考古No.22』鎌倉考古学研究所
- 佐藤仁彦・小林重子 1994「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町一丁目325番イ外地点」『平成5年度発掘調査報告(第3分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 鎌倉市教育委員会
- 原 廣志・山口正紀 2008「若宮大路周辺遺跡群の調査 鎌倉市小町一丁目333番2地点」『第18回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 松尾宣方 1983 a 「22. 小町一丁目305番口、308番所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I 昭和46年度～52年度』鎌倉市教育委員会
- 松尾宣方 1983 b 「33. 藤内定員邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I 昭和46年度～52年度』鎌倉市教育委員会
- 松尾宣方 1983 c 「34. 二ノ鳥居西遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I 昭和46年度～52年度』鎌倉市教育委員会
- 松尾宣方 1983 d 「44. 藤内定員邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I 昭和46年度～52年度』鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1985『小町2-345番2地点遺跡発掘調査報告書』小町2-345番2地点遺跡発掘調査団
- 宮田 眞 1996『神奈川県・鎌倉市 若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 小町一丁目321番1 鎌倉警察署構内』若宮大路周辺遺跡群(鎌倉警察署構内)発掘調査団
- 宮田 眞・高野昌巳ほか 1997『神奈川県・鎌倉市 若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 鎌倉市小町1丁目322番地点鎌倉スポーツクラブ用地』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 宮田 眞・滝澤晶子ほか 2014『神奈川県鎌倉市 若宮大路周辺遺跡群(No.242)発掘調査報告書-鎌倉市小町一丁目329番1・10地点』株式会社博通 発掘調査報告書第61集 株式会社 博通
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構 5 出土遺物 (図11)							
1	土器	手づくね かわらけ・小	(7.7)	-	1.5	底面-指頭ナデ消し 内底-ナデ 胎土: 微砂、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
2	土器	手づくね かわらけ・中	(10.5)	-	3.2	底面-ヘラケズリ 内底-ナデ 胎土: 微砂、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
3	磁器	青白磁 碗	-	-	現 4.6	外面-鑄蓮弁文 色調: 胎土-灰白色、釉-淡青色	口縁部 小破片
4	鉄製品	釘	現長 6.5	幅 0.8	厚 0.8~0.9	鍛造 断面方形	

遺構外出土遺物 (図12)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	4.8	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、海面骨針、粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/6
2	土器	ロクロ かわらけ・大	-	(8.7)	現 1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、海面骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
3	磁器	白磁 碗	(13.8)	-	現 2.2	内外面-無文 色調: 胎土-白灰色、釉-淡緑灰色	口縁部 小破片
4	陶器	瀬戸・美濃 丸皿	(9.7)	-	現 2.8	胎土: 緻密 色調: 胎土-黄灰色、釉-淡黄緑色 備考: 瀬戸大窯期	口縁部 小破片

表3 遺構計測表

〈 〉 = 現存値

遺構名	規模 (cm)		
	長軸	短軸	深さ
溝状遺構 1	〈113〉	20~46	34
溝状遺構 2	〈159〉	48~85	60
溝状遺構 3	〈53〉	34	5
溝状遺構 4	〈130〉	52	17

遺構名	規模 (cm)		
	長軸	短軸	深さ
溝状遺構 5	〈165〉	〈135〉	60
ピット 1	31	20	8
ピット 2	40	25	12
ピット 3	24	19	8

表4 出土遺物一覧表

溝状遺構 4			常滑	甕	12	平瓦	1
産地	器種	破片数	山茶碗		1	【金属製品】	
【かわらけ】			【金属製品】			用途不明	1
	かわらけ ロクロ成形	3	釘		1	【古代以前】	
	合計	3	合計		155	土師器・甕	1
						合計	61

溝状遺構 5			遺構外			攪乱		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	86		かわらけ ロクロ成形	33		かわらけ ロクロ成形	19
	かわらけ 手づくね成形	46		かわらけ 手づくね成形	14		【青磁】	
【白磁】			【白磁】			龍泉窯系 椀Ⅰ類		
	口元皿	1		碗	1		【染付磁器】	
【青磁】				器種不明小破片	1	肥前 碗	2	
	椀Ⅰ類	1	【染付磁器】			瀬戸・美濃 端反碗	3	
	椀Ⅱ類	2		小杯	1	【陶器】		
	器種不明小破片	3	肥前 蓋物		1	常滑 甕	11	
【青白磁】			【陶器】			山茶碗	1	
	碗	1	瀬戸・美濃 丸皿		1	合計	37	
【陶器】			常滑 甕		6			
渥美	甕	1	【瓦】					



1. 調査区近景(南西から)



2. 調査区南側土層断面(北東から)





1. 調査区全景(東から)



2. 溝状遺構2~4・ピット1~3(西から)





1. 溝状遺構 3～5・ピット 1～3 (西から)



2. 溝状遺構 5 (北から)



図版 4



1. 溝状遺構 5 (西から)



2. 溝状遺構 5 土層断面 (北から)



3. 溝状遺構 5 出土遺物



4. 遺構外出土遺物




# 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町三丁目418番4 地点

## 例 言

1. 本報は「若宮大路周辺遺跡群」(神奈川県遺跡台帳No.242)内、鎌倉市小町三丁目418番4地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成22年1月21日～同年3月24日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約58㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 馬淵和雄  
作業員 杉浦永章・倉澤六郎・中須洋二・赤坂 進・永井隆三郎  
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を馬淵和雄、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、世界測地系第Ⅸ系(JGD2000)を用い、図5に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「WK3418」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構： 整地範囲  
 砂利敷面  
遺物： 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲  
・石製品の矢印は磨面範囲を示す。
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』  
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』  
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』  
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介(玉川文化財研究所)
13. 報告書作成にあたっては、伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。



## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	163
第1節 調査に至る経緯と経過	163
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	163
第3節 周辺の考古学的調査	166
第二章 堆積土層	170
第三章 発見された遺構と遺物	170
第1節 第1面の遺構と遺物	173
第2節 第2面の遺構と遺物	192
第3節 第3面の遺構と遺物	194
第四章 まとめ	199

## 挿図目次

図1 遺跡位置図	164	図19 第1面 土坑1～10	184
図2 若宮大路周辺遺跡群の周辺遺跡	165	図20 第1面 土坑11出土遺物	185
図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡	167	図21 第1面 土坑12出土遺物	186
図4 調査区位置図	168	図22 第1面 土坑11～17	187
図5 調査区配置図	168	図23 第1面 土坑18出土遺物	187
図6 調査区土層断面図	171	図24 第1面 土坑19出土遺物	188
図7 第1面 遺構分布図	172	図25 第1面 土坑20出土遺物	188
図8 第1面 井戸1	174	図26 第1面 土坑21出土遺物	188
図9 第1面 井戸1出土遺物	175	図27 第1面 土坑18～23	189
図10 第1面 井戸2	176	図28 第1面 ピット分布図	190
図11 第1面 井戸2出土遺物	176	図29 第1面 ピット出土遺物	191
図12 第1面 井戸2	177	図30 第1面 遺構外出土遺物	191
図13 第1面 溝状遺構1 a～c	178	図31 第2面 土坑24	192
図14 第1面 溝状遺構1 a出土遺物(1)	179	図32 第2面 遺構外出土遺物	192
図15 第1面 溝状遺構1 a出土遺物(2)	180	図33 第2面 遺構分布図	193
図16 第1面 溝状遺構1 b出土遺物	181	図34 第3面 遺構分布図	195
図17 第1面 溝状遺構1 c出土遺物(1)	181	図35 第3面 溝状遺構2～4	196
図18 第1面 溝状遺構1 c出土遺物(2)	182	図36 第3面 土坑25～28	197

## 表 目 次

表 1	若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧	169	表 4	遺構計測表	206
表 2	第 1 面 出土遺物観察表	201	表 5	出土遺物一覧表	208
表 3	第 2 面 出土遺物観察表	206			

## 図 版 目 次

図版 1	1. 調査区西壁北側土層断面 (南東から)	211	図版 5	1. 第 1 面 溝状遺構 1 b・1 c 遺物 出土状態(南東から)	215
	2. 調査区西壁南側土層断面 (南東から)	211		2. I 区 第 2 面全景(北東から)	215
図版 2	1. I 区 第 1 面全景(南西から)	212	図版 6	1. 第 1 面 井戸 1 出土遺物	216
	2. I 区 第 1 面全景(北東から)	212		2. 第 1 面 井戸 2 出土遺物	216
	3. II 区 第 1 面全景(北西から)	212		3. 第 1 面 溝状遺構 1 a 出土遺物 (1)	216
図版 3	1. 第 1 面 井戸 1 石組出土状態・ 砂利敷遺構 1 (南西から)	213	図版 7	1. 第 1 面 溝状遺構 1 a 出土遺物 (2)	217
	2. 第 1 面 井戸 1 石組出土状態 (南東から)	213	図版 8	1. 第 1 面 溝状遺構 1 a 出土遺物 (3)	218
	3. 第 1 面 井戸 1 石組出土状態 (東から)	213		2. 第 1 面 溝状遺構 1 b 出土遺物 (1)	218
	4. 第 1 面 井戸 1 石組出土状態 (南から)	213	図版 9	1. 第 1 面 溝状遺構 1 b 出土遺物 (2)	219
	5. 第 1 面 井戸 1 掘り方 (北西から)	213		2. 第 1 面 溝状遺構 1 c 出土遺物	219
図版 4	1. 第 1 面 井戸 2 (南東から)	214	図版 10	1. 第 1 面 土坑出土遺物	220
	2. 第 1 面 井戸 2 組箱出土状態 (南西から)	214		2. 第 1 面 ピット出土遺物	220
	3. 第 1 面 井戸 3 (南東から)	214		3. 第 1 面 遺構外出土遺物	220
				4. 第 2 面 遺構外出土遺物	220

# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市小町三丁目418番4地点で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳No.242）の範囲内にあたり、建築主から柱状改良工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成21年8月18日～同年8月19日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が開発予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約58㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、馬淵和雄が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成22年1月21日～同年3月24日までの約2ヵ月で、調査面積は約58㎡である。現地表の標高は約9.5～9.65mを測る。調査は掘削に伴う残土を場内処理する都合からL字状の調査区を二分し、便宜上前半の調査範囲をⅠ区、後半の調査範囲をⅡ区と呼称した。調査はⅠ区から実施することし、まず重機により20～30cmほどの表土を除去することから始め、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する第1・2面、中世以前に属する第3面の合計3面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。Ⅰ区の調査終了後に、Ⅰ区の北側約1/2の範囲について重機による埋め戻しを行い、その後Ⅱ区の調査に着手した。Ⅰ区と同様に重機による表土の除去から始め、Ⅱ区では第1面のみを確認し、調査を実施した。Ⅱ区の記録作業を終え、3月24日に現地調査に関わるすべての作業を終了した。

なお、測量に際しては世界測地系第Ⅸ系（JGD2000）に準じた、鎌倉市四級基準点2点（ $X = -75523.847$ 、 $Y = -24911.268$ ）、（ $X = -75534.580$ 、 $Y = -24893.684$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53210（標高9.951m）を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群（No.242）は、鎌倉市街地のほぼ中心地区に位置し、国指定史跡「若宮大路」を挟んでおおむね東西に展開している。遺跡の南限は、県道鎌倉葉山線の六地藏から大町四つ角までの範囲、西は現在の「今小路通り」の寿福寺前から六地藏までの範囲、東は宝戒寺裏の滑川に架かる宝戒寺橋から夷堂橋を経て小町大路を南に下った大町四つ角までの範囲、北は鶴岡八幡宮前の三ノ鳥居の南を東西に走る横大路から窟堂前を通過して西の今小路通りに至るまでの範囲に相当し、南北約1,000m、東西500～700mの広がりをもつ。

この遺跡範囲内には、その中心に国指定史跡の若宮大路が南北に通り、若宮大路北端の東側には北条小町邸跡（泰時・時頼邸）（No.282）、その隣接地には宇津宮辻子幕府跡（No.239）の包蔵地範囲が、また西側には北条時房・顕時邸跡（No.278）の包蔵地範囲が所在している。

本調査地点は、若宮大路周辺遺跡群の東北域にあたり、若宮大路とほぼ並行して走る「小町大路」の



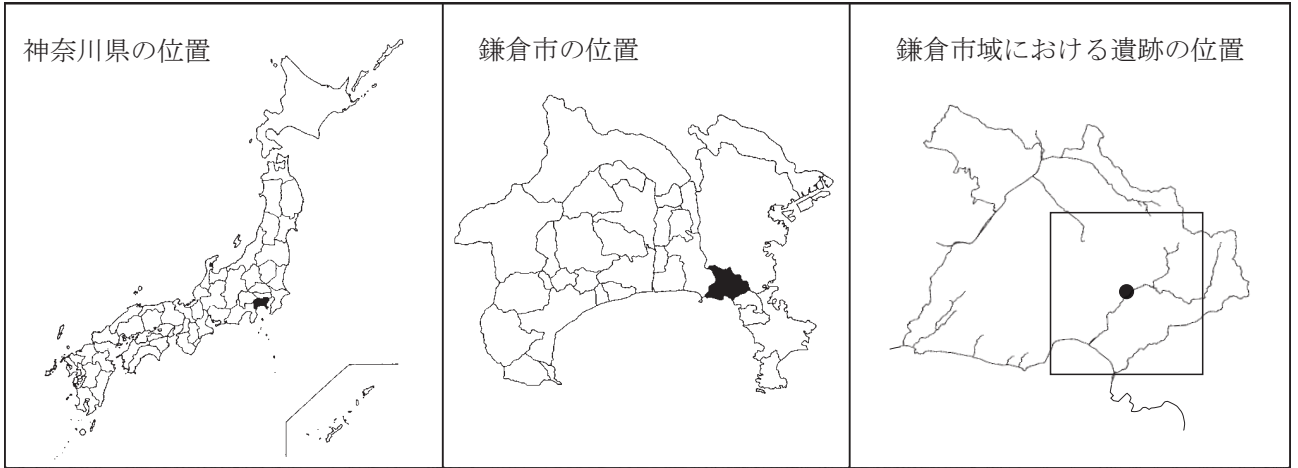


図1 遺跡位置図





本遺跡群内における若宮大路沿いは、鎌倉の中心市街地の中でも特に開発行為に伴う調査事例の多い地域であるが、図3の範囲内では本調査地点を含めても9地点に留まっている。

本調査地点とも関係の深い若宮大路沿いの二ノ鳥居以北の発掘調査では、若宮大路の両側溝と推定される大溝がそれぞれ数カ所で検出され、若宮大路の幅員やその構造などを知る上の手がかりとなっている。特に鶴岡八幡宮寄りの北条泰時・時頼邸跡や宇津宮辻子幕府跡、若宮大路幕府跡、北条時房・顕時邸跡などの推定地といわれる場所からは、いずれもしっかりとした木組みの溝枘をもった大溝が発見されている。その調査成果によれば、溝幅が約3m(1丈)、深さが1.5m(5尺)、路面幅が33.6mと推定され、これが若宮大路の幅員と推定されている。また、側溝の屋敷地側には直径50～60cm台の柱穴列が側溝に並行しているのが確認されている。最近の調査事例からは、若宮大路に対して直交方向の道路や溝なども検出されており、基幹道路との関係や町割り、屋敷地の区割りなどの問題とも深く関係しているものとみられる。

一方、二ノ鳥居の南東側では、若宮大路沿いの調査地点においても、発見される遺構の多くが方形竪穴遺構や小規模な掘立柱建物や井戸・土坑・柱穴・溝などで、これらが確認される地点では武家屋敷とは異なる庶民居住区、いわゆる「町屋」に相当する地域と推定されている。同じ若宮大路沿いでも、二ノ鳥居を境に北と南側ではまったく様相が異なっていたことが知られるのである。また、二ノ鳥居以北でも若宮大路からやや離れると、大路に対して遺構の軸方向が異なるものも見受けられる。

本調査地点は、小町大路を挟み北条泰時・時頼邸跡のすぐ東に位置している。詳細は次章で述べるが、中世を中心とする遺構群の中で、第1面で検出した溝は小町大路に対して直交するもので、この他に井戸や土坑、多数のピットなどが発見された。溝は小町大路との関連が推定される。また中世以前に属する第3面でも溝を検出しているが、これは小規模なもので第1面の遺構群とは明らかに様相を異にしているものであった。

### 第3節 周辺の考古学的調査

本地点を含む若宮大路周辺遺跡群の発掘調査事例は、市街地に起因する開発件数の多さもあり、大小様々なものまでを含めて数えると、これまでに150地点以上が知られている。多くは小規模な調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、前節でみてきたように二ノ鳥居以北と以南では様相が大きく異なっていることが知られている。

図2に示した本調査地点一帯は、前節でも述べたように鎌倉時代は幕府の政治的中心であった。本調査地点の西側には、北条小町邸跡(泰時・時頼邸)、またその並びには宇津宮辻子幕府と、若宮大路幕府跡の推定地、北側の宝戒寺境内は北条高時邸の推定地とされている。その奥には政所跡、鶴岡八幡宮などが居並ぶ最重要地点であった。

しかし、本調査地点およびその周辺の調査例になると意外に少なく、本節では図3の範囲内に示した9地点(←、①～⑧)の範囲を中心に、若宮大路周辺遺跡群の北東側地域における「小町大路」沿いの様相を主に概観しておきたい。

近隣の調査事例としては、本調査地点の南へ60mほどの小町大路に面した⑤小町二丁目402番9ほか地点(馬淵・伊丹ほか2007)がある。この調査地点では中世の遺構群を中心に4面の生活面が確認され、第3面から第1面にかけて小町大路の東側側溝とみられる大溝の存在が明らかにされている。側溝は逆台形状の掘り方をもつが、木枘や根太木などの施設は伴っていない。注目される遺構として、大路の側溝





※矢印は本調査地点、丸数字は表1の番号に対応する。

図3 調査区の位置と周辺の関連遺跡

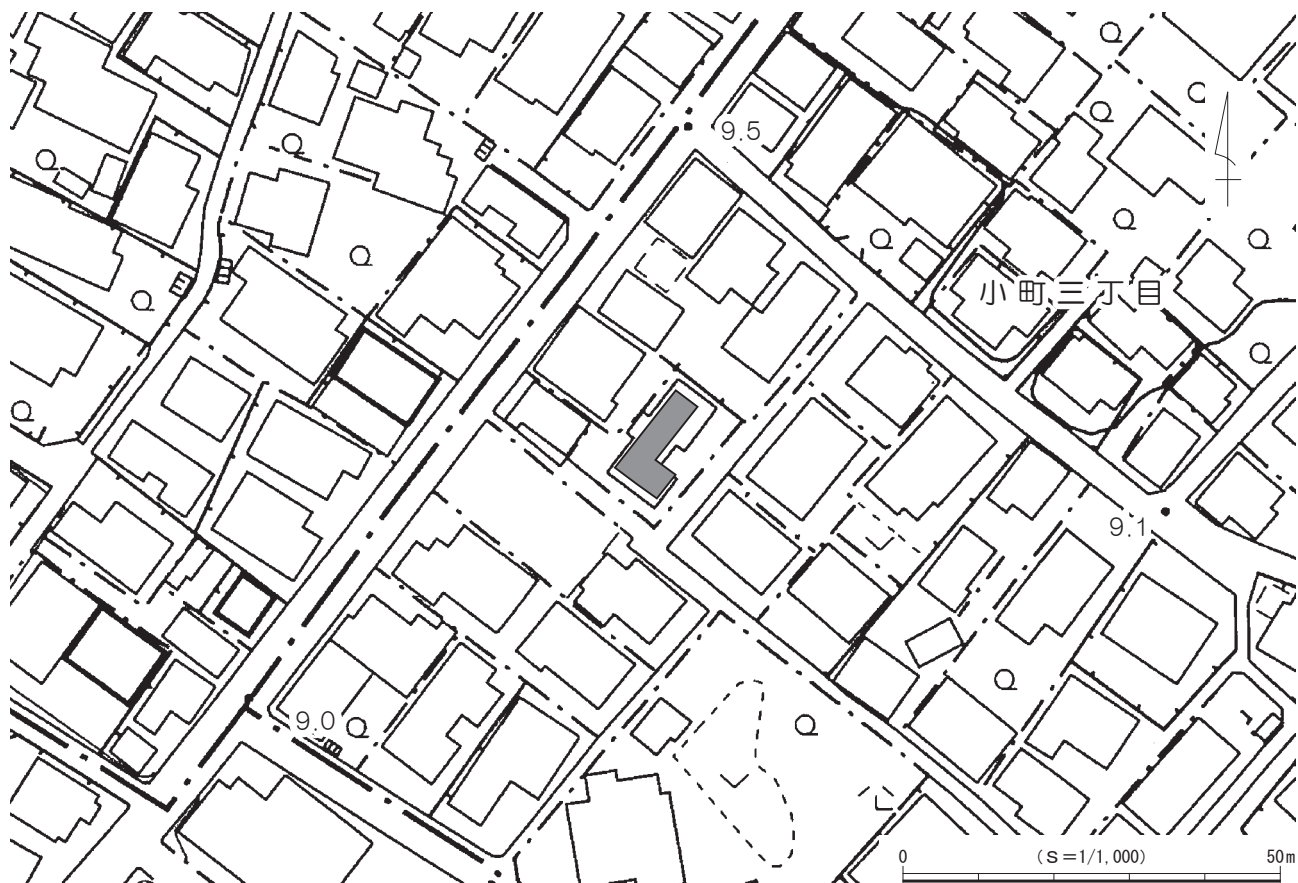


図4 調査区位置図

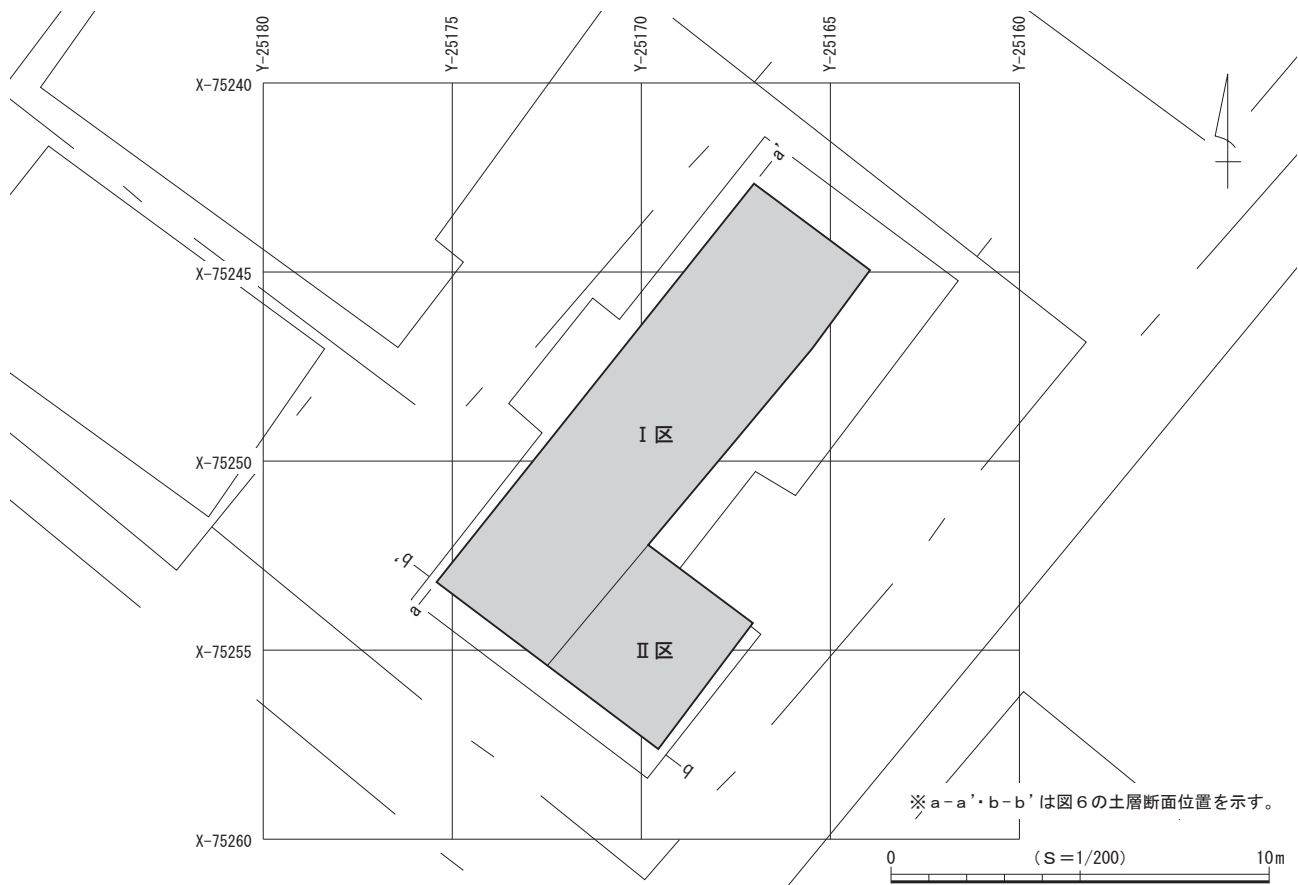


図5 調査区配置図



に対して直交するような溝や柱穴列などの遺構も検出されている。調査者は屋敷地の区画を意図した遺構と推定しており、本地点の様相とも類似している点は注意されよう。

同様の側溝は、⑤の並びの⑥小町二丁目402番5地点(手塚・野本ほか 2001)でも確認されており、本地点では側溝の他に小町大路の道路面と推定される硬化面や、側溝の東側で井戸、掘立柱建物、塀、溝、土坑なども検出されている。また、溝の中には東西溝も含まれており、この溝も屋敷地などの区画を意図した遺構と推定されている。また、小町大路の延長として、横大路と交差する宝戒寺門前の北条高時邸跡小町三丁目426番3地点(原・小林ほか 1996)でも道路面と東側側溝が確認されている。

一方、小町大路の西側側溝の解明も大路の向かいの北条小町邸跡(泰時・時頼邸)やその並びの宇津宮辻子幕府跡、若宮大路幕府跡推定地の東辺で進められている。先に示した⑤小町二丁目402番9ほか地点の文中においてその事例が示されており、これまでの成果から東西両側溝を伴う大路であることが推定され、16m前後の幅員と推定されている。側溝の掘り方は両側溝とも逆台形状の共通した構造であるが、西側側溝では木組みや根太木などを用いた構造になっており、両者間の相違が認められている。この相違について、報文では小町大路を挟んで西側と東側での居住者の階層や場の使われ方の違いを指摘している。それぞれの地点に伴う遺構群についても同様な視点での検討や、時間軸による変化なども視野に入れた検討も必要と考えられる。

表1 若宮大路周辺遺跡群 主な調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町三丁目418番4地点	
①	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町三丁目455番4地点	
②	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町三丁目425番3地点	宇都・原 2013
③	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町三丁目425番1の一部外地点	原・宇都 2012
④	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町三丁目422番2外地点	伊丹・松吉ほか 2013
⑤	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町二丁目402番9ほか地点	馬淵・伊丹ほか 2007
⑥	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町二丁目402番5地点	手塚・野本ほか 2001
⑦	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町二丁目364番17地点	
⑧	若宮大路周辺遺跡群 (No.259)	小町二丁目408番4外2筆地点	

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

## 第二章 堆積土層

今回の調査では、第1～3面の合計3面にわたる遺構確認面が認められた。ここでは調査区の西壁面と南壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する土層を中心に詳述する。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭であった遺構がいくつか認められた。

現地表面の標高は9.50～9.65mを測る。表土層の厚さは20～40cmを測り、部分的に攪乱が深く及ぶが、おおよそ平坦である。

表土層(1層)を除去すると、灰褐色砂質土(2層)および黒褐色砂質土(3層)の堆積が認められたが、部分的なものであり、調査区南端付近でわずかに確認されたのみである。

表土および2・3層以下は、I区のほぼ中央を境として、南北で土層の堆積に大きな相違が認められた。北側には泥岩による整地層(7層)が広がり、人頭大の泥岩が50～60cmほどの厚さで敷き詰められていた。南側には整地層はみられず、変色した赤褐色砂質土(8層)が露出した。いずれの層も直上に表土層が堆積しており、上面は削平されたものと考えられる。7層と8層は検出された標高がほぼ同一レベルであることから、それぞれの上面を第1面とした。確認面の標高は約9.2～9.4mを測る。なお、調査区南側の8層上面で確認した遺構の時期は、出土遺物、重複関係、覆土の特徴などから、中世およびそれ以前の2時期あることが明らかとなった。本報告では便宜上、中世以前の遺構を第3面に帰属するものとして取り扱うこととする。

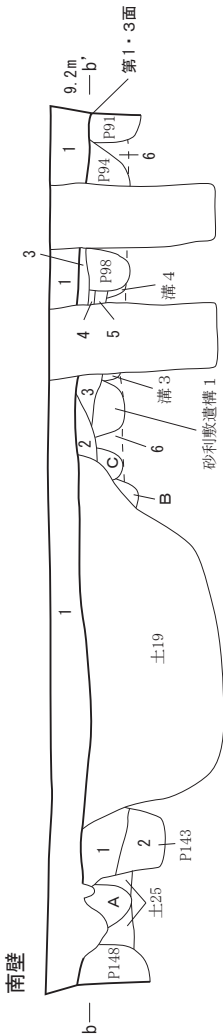
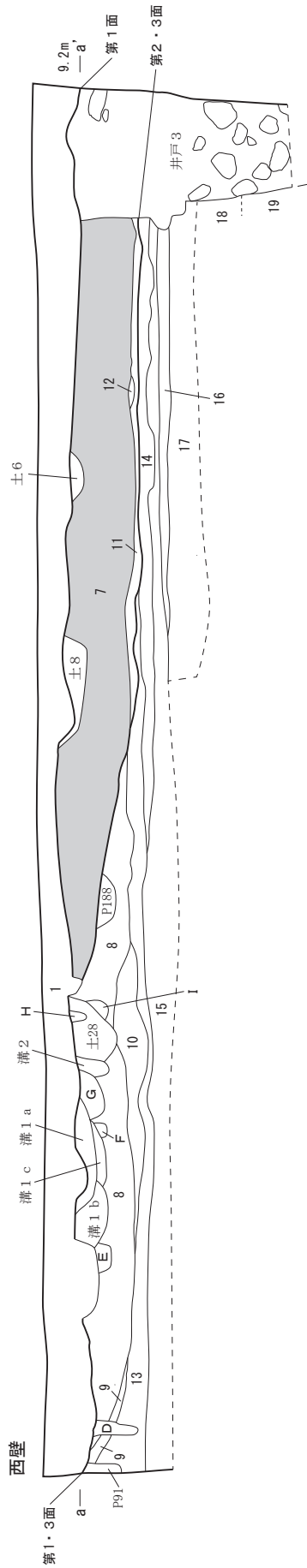
調査区北側で第1面とした7層を除去すると、整地の影響によるものと思われる暗黄褐色砂質土(11・12層)が5～10cmほどの厚さで堆積していた。その直下に暗灰色粘質土(14層)が堆積しており、この上面で遺構が検出された。層上面の標高は約8.6～8.7mを測る。遺構の時期は、出土遺物、重複関係、覆土の特徴などから、中世およびそれ以前の2時期あることが明らかとなった。そのため、遺構確認は同一面で行ったが、便宜上中世に属する遺構を第2面、それ以前に属する遺構を第3面の遺構とした。

以下の土層は、調査区西壁際で暗黄灰色粘質土(15層)、暗灰黄褐色粘質土(16層)、黒色粘質土(17層)が確認された。また、調査区北端に位置する井戸3の壁面で、黄灰色砂礫層(18層)、黄灰白色砂層(19層)が確認された。

## 第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～3面までの合計3面である。調査は調査区内での残土処理の都合から、L字状の調査区を2分割して行い、それぞれI区、II区とした。検出した遺構は、井戸3基、砂利敷遺構1基、溝状遺構4条、土坑28基、ピット192基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して14箱を数える。なお、本調査地点は遺構密度が極めて高いことから、図上での煩雑さを避けるため、第2面以下の面に残存する上面の遺構については可能な限り割愛した。

以下、発見した遺構と出土遺物について、面ごと(第1～3面)に説明する。



- 【遺構】
- ピット 91 暗茶褐色砂質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
  - ピット 94 1層 暗茶褐色砂質土 泥岩粒少量含む。
  - 2層 暗黒褐色砂質土 炭化物少量含む。
  - ピット 98 1層 暗黄褐色砂質土 泥岩粒少量含む。
  - 2層 暗黒褐色砂質土 泥岩粒少量含む。
  - ピット 143 1層 暗灰褐色弱粘質土 小泥岩ブロック含む。
  - 2層 暗黒褐色弱粘質土 混入物少ない。
  - ピット 148 1層 黒褐色砂質土 混入物少ない。
  - ピット 188 1層 暗赤褐色砂質土 泥岩微量含む。
  - A層 暗黒褐色砂質土 泥岩粒少量含む。
  - B層 暗黄褐色砂質土 炭化物少量含む。
  - C層 暗黒褐色砂質土 泥岩粒少量含む。
  - D層 暗黄褐色砂質土 地山の黄色土と黒色土の混合土。
  - E層 暗茶褐色砂質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
  - F層 暗赤褐色砂質土 泥岩微量含む。
  - G層 灰褐色砂質土 泥岩粒・炭化物含む。
  - H層 灰褐色砂質土 拳穴の泥岩ブロック含む。
  - I層 暗茶褐色砂質土 赤褐色土と黒色土の混合土。

- 表土
- 1層 灰褐色砂質土 微少な泥岩粒多量含む。きめ細かい。
  - 2層 黒褐色砂質土 混入物少ない。
  - 3層 暗黒褐色砂質土 泥岩粒・炭化物少量含む。
  - 4層 暗黄褐色砂質土 炭化物少量含む。
  - 5層 暗黒褐色粘質土 スコリア含む。きめ細かい。
  - 6層 暗黄褐色粘質土 スコリア含む。きめ細かい。
  - 7層 泥岩整地層 人頭大の泥岩による整地層。掘り込み地業か。(第1面)
  - 8層 赤褐色砂質土 変色した層。(第1・3面)
  - 9層 淡黄褐色粘質土 黒色土ブロック微量含む。
  - 10層 暗黄褐色砂質土 黒色土ブロック含む。
  - 11層 暗黄褐色砂質土 黒色土ブロック含む。
  - 12層 暗黄褐色砂質土 スコリア含む。
  - 13層 黄灰色粘質土 黒色土(第2・3面)
  - 14層 暗灰褐色粘質土 スコリア微量含む。
  - 15層 暗灰褐色粘質土 火山灰層か?
  - 16層 黒色粘質土
  - 17層 黄灰色砂礫層
  - 18層 黄灰色砂礫層
  - 19層 黄灰色砂礫層

図6 調査区土層断面図

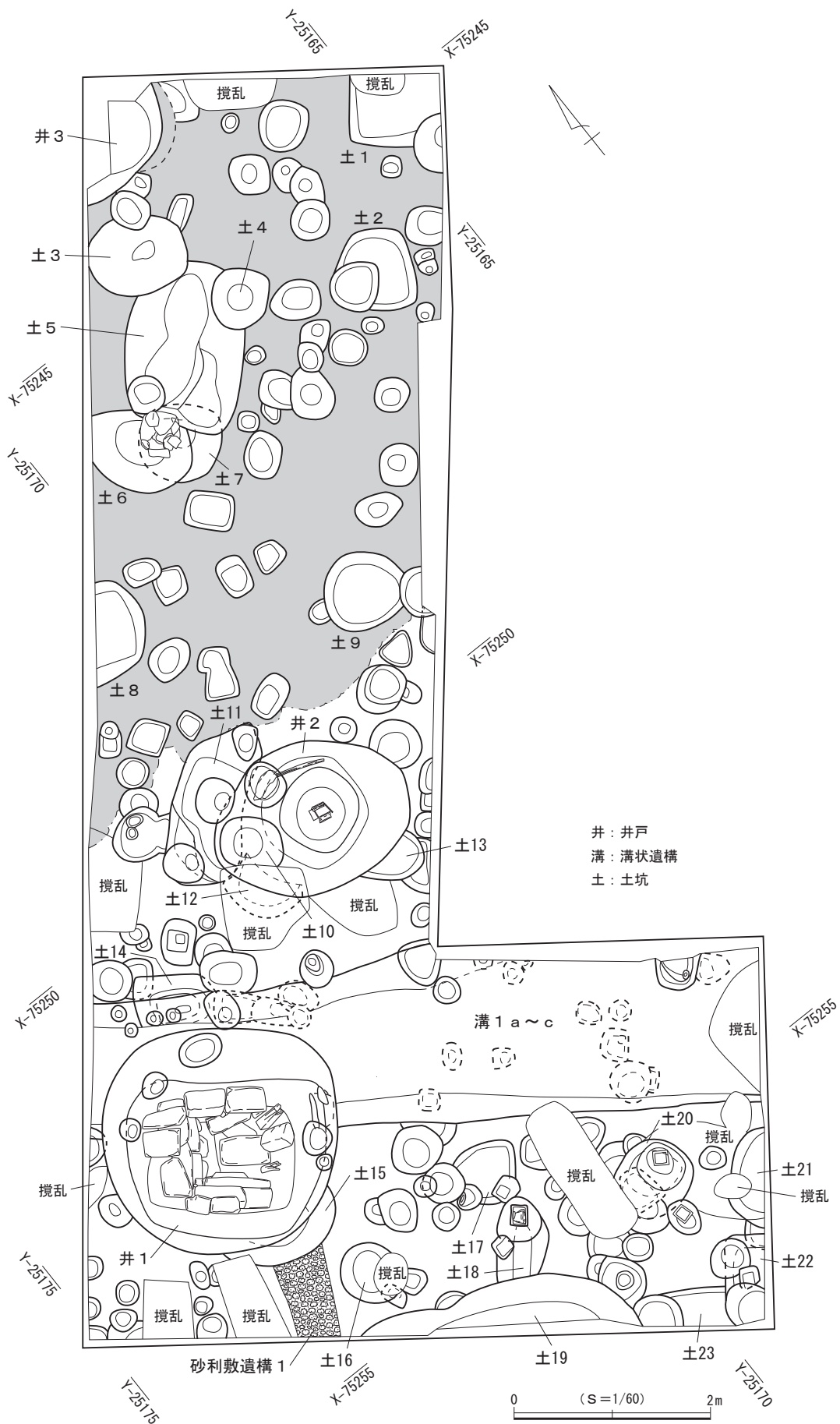


图7 第1面 遺構分布图



## 第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は、堆積土層の7・8層上面で検出され、確認面の標高は約9.2～9.4mを測る。調査区のほぼ中央で堆積土層の様相が異なっており、調査区北側では人頭大の泥岩による整地層(7層)が形成され、南側では変色した赤褐色砂質土(8層)が堆積していた。各層は表土直下に堆積し、検出された標高はほぼ同一であることから、いずれも上面は削平された可能性が高い。土層の様相は異なるものの、これらの層を掘り込んで構築された遺構を第1面の遺構とした。そのため、遺構の時期にはある程度の幅があると考えられる。なお、地山層が露出した調査区南側では、中世以前に属する遺構も同一面で確認された。これらは出土遺物あるいは覆土の特徴などを参考に分離し、便宜上第3面の遺構とした。検出した遺構は、井戸3基、砂利敷遺構1基、溝状遺構1条、土坑23基、ピット148基である(図7)。特に土坑とピットが調査区の全域に分布しており、重複し合うものも多く、遺構密度は極めて高いといえる。そのため、第1面の全体図は煩雑さを避けるため、主要な遺構(井戸・砂利敷遺構・溝状遺構・土坑)とピットの2図に分離して遺構名称を示した(図7・28)。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられるが、井戸1については16世紀代まで使用されていた可能性が推測される。

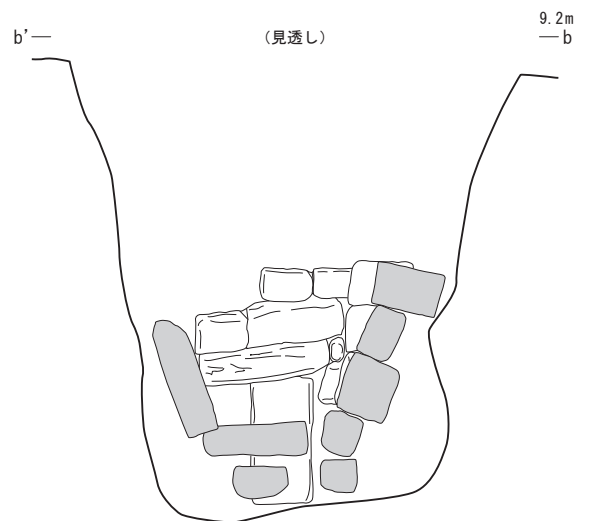
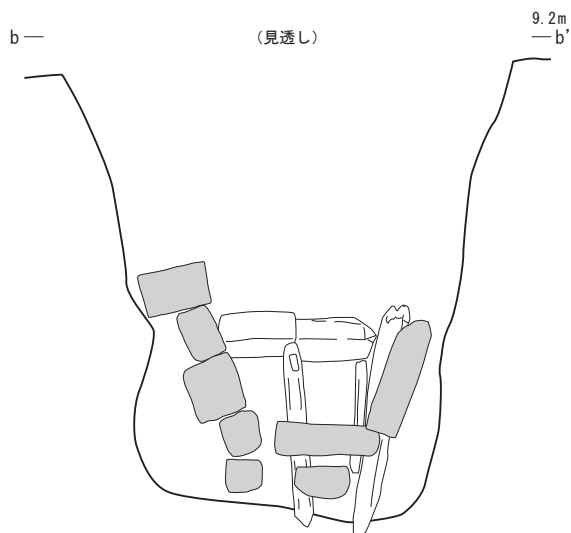
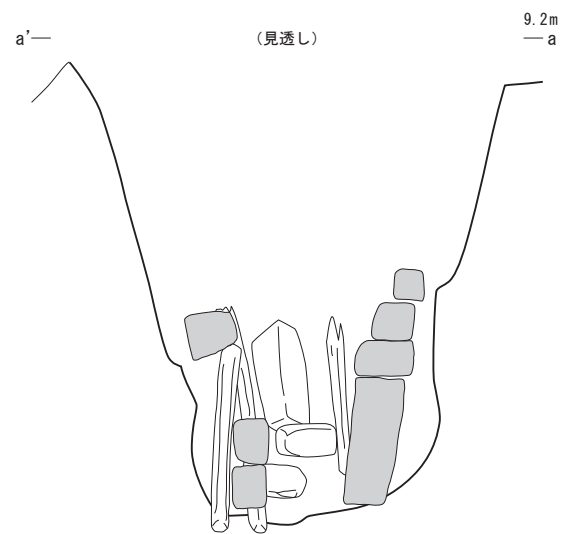
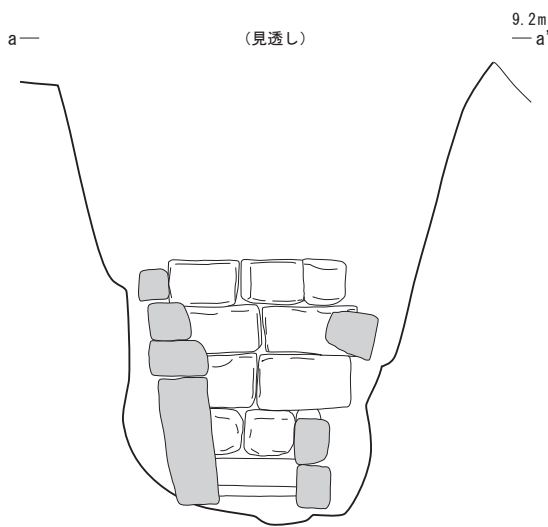
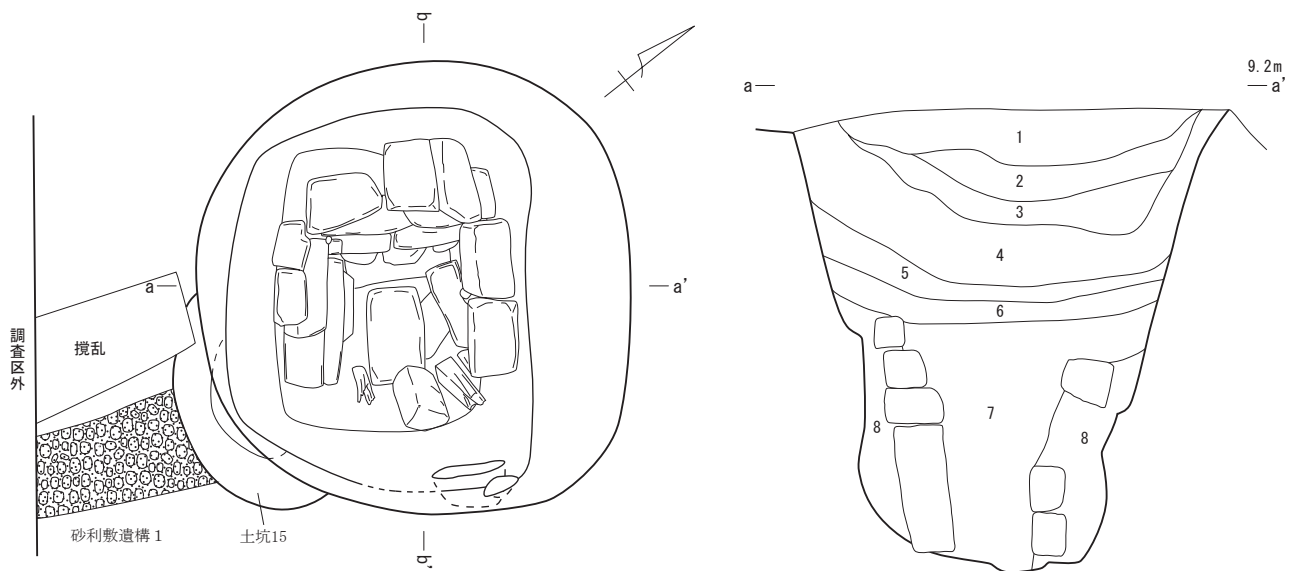
### (1) 井戸

第1面では、3基を検出した。井戸1・2が調査区の中央から南側、井戸3が調査区北西隅に位置し、井戸1・2について全容が把握できた。形態的特徴として、素掘り構造と石組構造の2種が認められる。

### 井戸1(図8)

調査区南西側に位置する。本址覆土にピット84・86・99・100が掘り込まれており本址が古く、西側に重複するピット87・88より新しい。また、南側に土坑15、さらに砂利敷遺構1が隣接しており、新旧関係は明らかでないが、位置関係からみて本址と関連する遺構の可能性がある。重複する遺構や攪乱により一部を壊されるが、ほぼ全容を把握できた。本址は石組構造をもつ井戸である。

開口部の平面形は隅丸方形を呈し、上面から約1.0m以下では、凝灰質砂岩の切石を用いて方形の井戸枠が組まれている。各面で石の組み方や状態は異なり、北東および南東面の井戸枠の石組は崩落していた。石組は北西面で最大5段が確認されており、最下段が1個、2段目が3個、3段目から5段目は2個(最上段北側の切石は割れている)の石を横位に配して組み上げている。最上段の石は、真上からみると内側が緩くえぐれており、使用による摩滅の可能性が指摘される。南西面では4段が確認され、最下段は石組全体の中でも長さのある切石が縦位に配され柱状となり、その上に長さ69cm、84cmの切石が横位に据えられていた。縦位の切石は複数あったものと考えられるが、現状では1個が残存しているにすぎない。崩落している南東面では、切石1個と2本の杭が確認された。北東面も2本の杭が打ち込まれており、横位の切石が内側に倒れ込んで、杭上で留まっている状態であった。石組の規模は、北東-南西方向を基準にすると、内法が75cm、外法が1.25m、高さは北西面・南西面とともに1.25mを測る。北東側の切石が原位置からややずれているため、現状の計測値は本来の規模より小さいと考えられる。石組に使用された切石の大きさは、長さ19～84cm、幅16～36cm、厚さ18～33cmを測り、規格性に乏しい。杭は合計4本が確認され、いずれも全体的に焼けていた。また、北東面の中央に打ち込まれた杭には、ほぞ穴が認められた。井戸底は素掘りのままであり、集水施設が設置されている状況ではなかった。



- 1層 暗褐色砂質土 小泥岩ブロック・炭化物含む。
- 2層 暗褐色砂質土 小泥岩ブロック・炭化物含む。上層に円礫含む。
- 3層 暗茶褐色粘質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
- 4層 暗褐色粘質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
- 5層 暗褐色粘質土 泥岩が減少し、炭化物含む。

- 6層 灰黒色弱粘質土 泥岩少量含む。
- 7層 暗灰黒色粘質土 上層と比較して混入物が減少する。
- 8層 暗灰黒色弱粘質土 木質含む。

0 (S=1/40) 2m

図8 第1面 井戸1

掘り方の平面形は隅丸方形を基調として、下端は膨らみが少ない。規模は開口部で北西－南東方向2.40m、北東－南西方向2.29m、底面で北西－南東方向1.48m、北東－南西方向1.10mを測り、深さは2.47mである。主軸方位は、南西面の下端を基準にするとN-50°-Wを指す。南東側の掘り方壁面上方に、足かけ穴とみられる幅20cmと39cmの窪みが穿たれていた。

覆土は上層から中層にかけて8層に分けられた。石組を検出した段階から湧水が著しく、下層の土層断面は記録できなかつた。最上層にあたる1・2層は泥岩・炭化物・円礫を含む暗褐色砂質土が堆積し、中層以下の3～7層は泥岩などを含む粘質土であった。8層は裏込めに相当し、暗灰黒色弱粘質土が充填されていた。

#### 出土遺物(図9)

遺物はかわらけ245点、磁器7点、陶器30点、石製品1点、木製品3点、須恵器1点が出土し、このうち14点を図示した。

1～9はロクロ成形によるかわらけである。2・9には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。10～14は常滑窯産の製品で、10・11が甕、12～14が片口鉢Ⅱ類である。

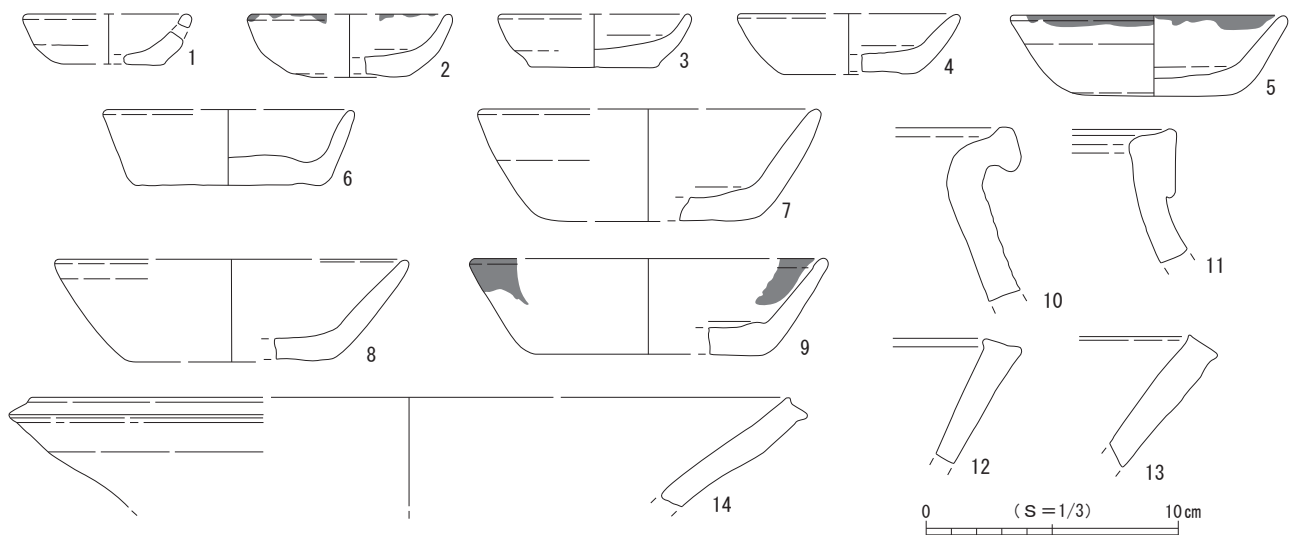


図9 第1面 井戸1出土遺物

#### 井戸2(図10)

調査区のほぼ中央に位置する。重複する遺構との新旧関係は、土坑10・ピット51より古く、土坑11～13・ピット59より新しい。また、南側の壁の一部を攪乱により壊されるが、遺構のほぼ全容を把握できた。本址は素掘り構造の井戸である。

平面形は、開口部が東西方向に長い楕円形を呈し、中ほどは隅丸方形、底面は略円形を呈する。規模は開口部で長軸2.08m、短軸1.53m、中央付近で一辺82cm、底面で径54cmを測り、深さは2.05mである。主軸方位は、開口部を基準にするとN-76°-Wを指す。底面から10cmほどの位置で、組箱が出土した。

覆土は8層に分けられた。上位から中位は粘質土、中位以下は砂質土が堆積しており、3層および5層は薄い炭化物層である。水溜施設は平面的には確認できなかつたが、底面の壁際に堆積する9層は堆積状況から裏込めの痕跡とも捉えられ、底面に何らかの施設があった可能性が考えられる。

#### 出土遺物(図11)

遺物はかわらけ126点、磁器1点、陶器7点、木製品6点、金属製品2点が出土し、このうち2点を図





平面形は、検出された範囲からは円形を基調とするものと推定される。東壁の開口部から約1.1m下がった付近が15cmほどオーバーハングしている。規模は開口部で北東-南西方向の現存長1.23m、北西-南東方向の現存長76cm、底面で北東-南西方向の現存長74cm、北西-南東方向の現存長43cmを測り、深さは1.94mである。

覆土は5層に分けられた。掘削深度の制限があるため、確認できた土層で最下層にあたる5層は、人頭大の泥岩と凝灰質砂岩を多く含む灰褐色砂質土で、井戸廃棄時に投棄された土層であると考えられる。また、1～4層は砂質土と粘質土が水平に堆積していることから、人為的な埋土として捉えられる。

遺物はかわらけ7点が出土した。

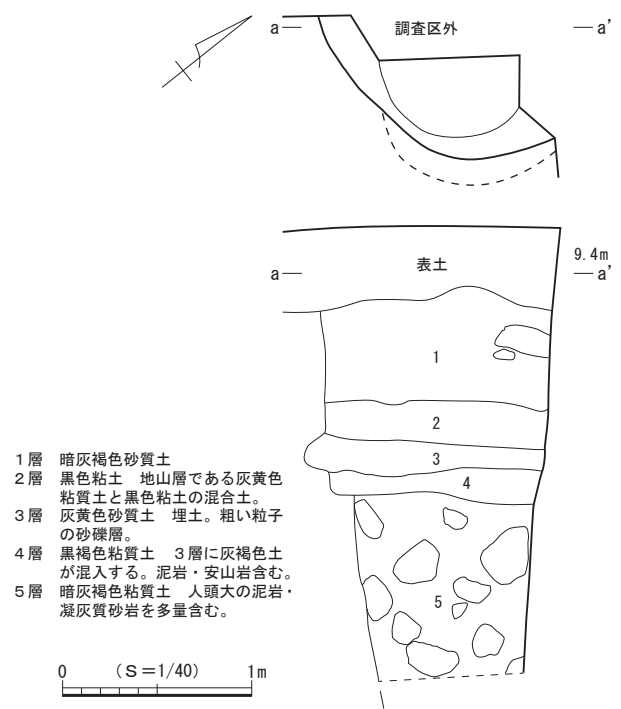


図12 第1面 井戸2

## (2) 砂利敷遺構

第1面では、1基を検出した。部分的な検出に留まるが、井戸1に隣接しており、位置関係および遺構の性格から両遺構は関連する可能性が考えられる。

### 砂利敷遺構1 (図7・8)

調査区南端に位置する。帯状に砂利が敷き詰められており、南側は調査区外に及んでいる。北側で土坑15および井戸1と隣接しており、新旧関係は不明である。規模は長軸現存長96cm、幅43～53cmを測り、砂利敷の厚さは7～8cmで泥岩粒も含む。主軸方位はN-25°-Eを指す。掘り方は断面形がU字状の溝状を呈し、深さは25cmほどである。周囲の遺構との関係を整理すると、北側に土坑15が隣接し、その延長上に井戸1が続いている。本址は砂利敷という構造から水場との関連をうかがわせる遺構であり、土坑15も井戸1と関連した遺構であると推測されることから、本址は井戸1を中心とした一連の施設の一部である可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

## (3) 溝状遺構

第1面では、1条を検出した。調査区南側を横断し、両端は調査区外に及ぶことから遺構の全容は把握できなかった。3段階の時期に分けられることが明らかとなり、特徴的な遺物の出土状態であった。

### 溝状遺構1 (図13)

調査区南側に位置する。同じ位置で溝を改修しながら継続して使われていた様相が明らかになったため、最新の段階から順にa、b、cと番号を付した。a～cのいずれも遺構の西側では平面的に捉えることが困難であったが、調査区西壁の土層断面で確認できたため、推定される走行方向を破線で示した。

調査区をおおむね直線的に横断し、走行方位は55°前後の角度で西へ振れている。両端は調査区外に及



出土遺物 (図14・15)

遺物はかわらけ1,815点、磁器2点、陶器51点、瓦2点、石製品1点、金属製品2点が出土し、このうち95点を図示した。

1～93はロクロ成形によるかわらけである。36には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。94は常滑窯産の片口鉢I類である。95は銭貨で、元祐通寶(北宋・1086)である。

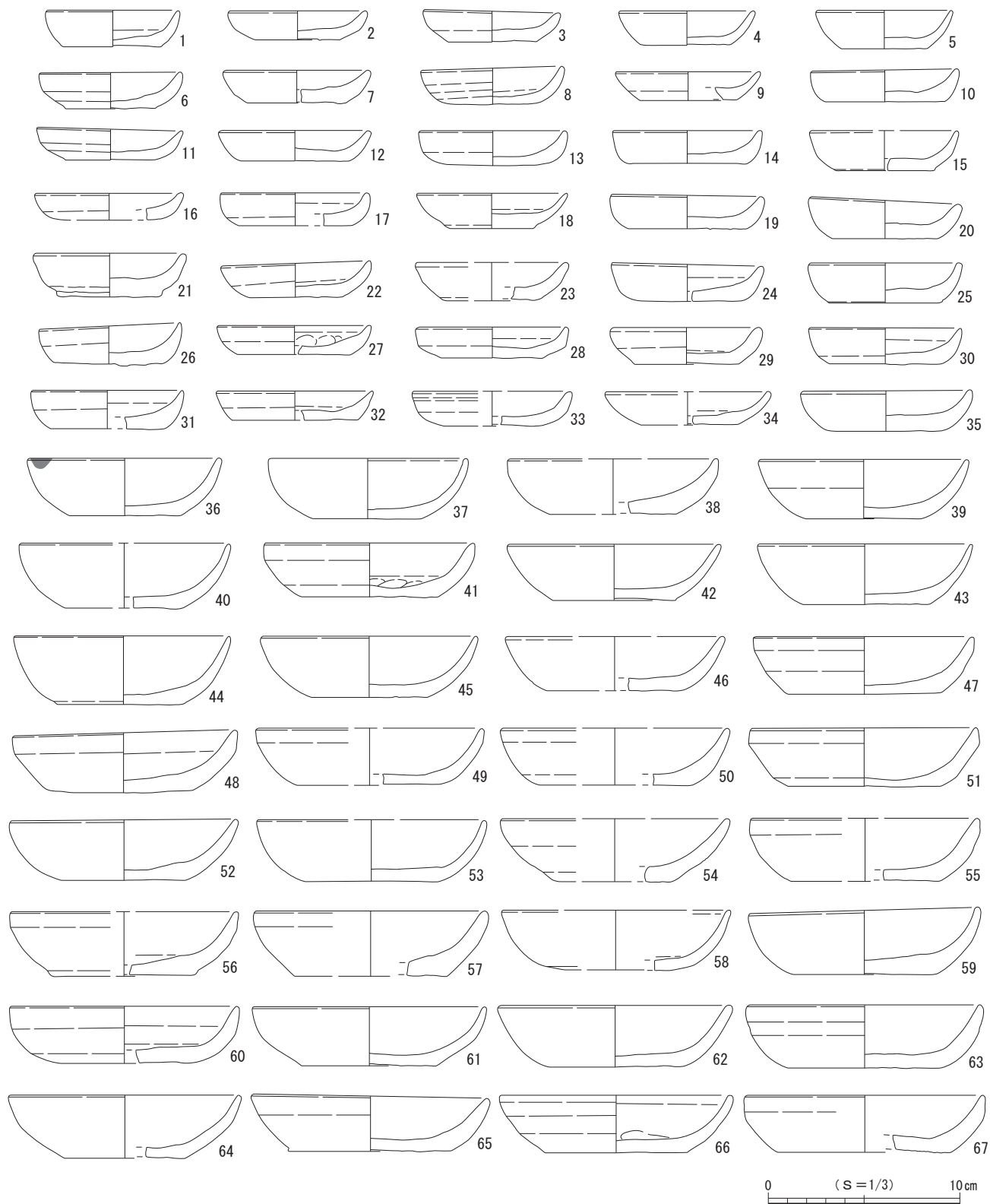


図14 第1面 溝状遺構1 a 出土遺物(1)

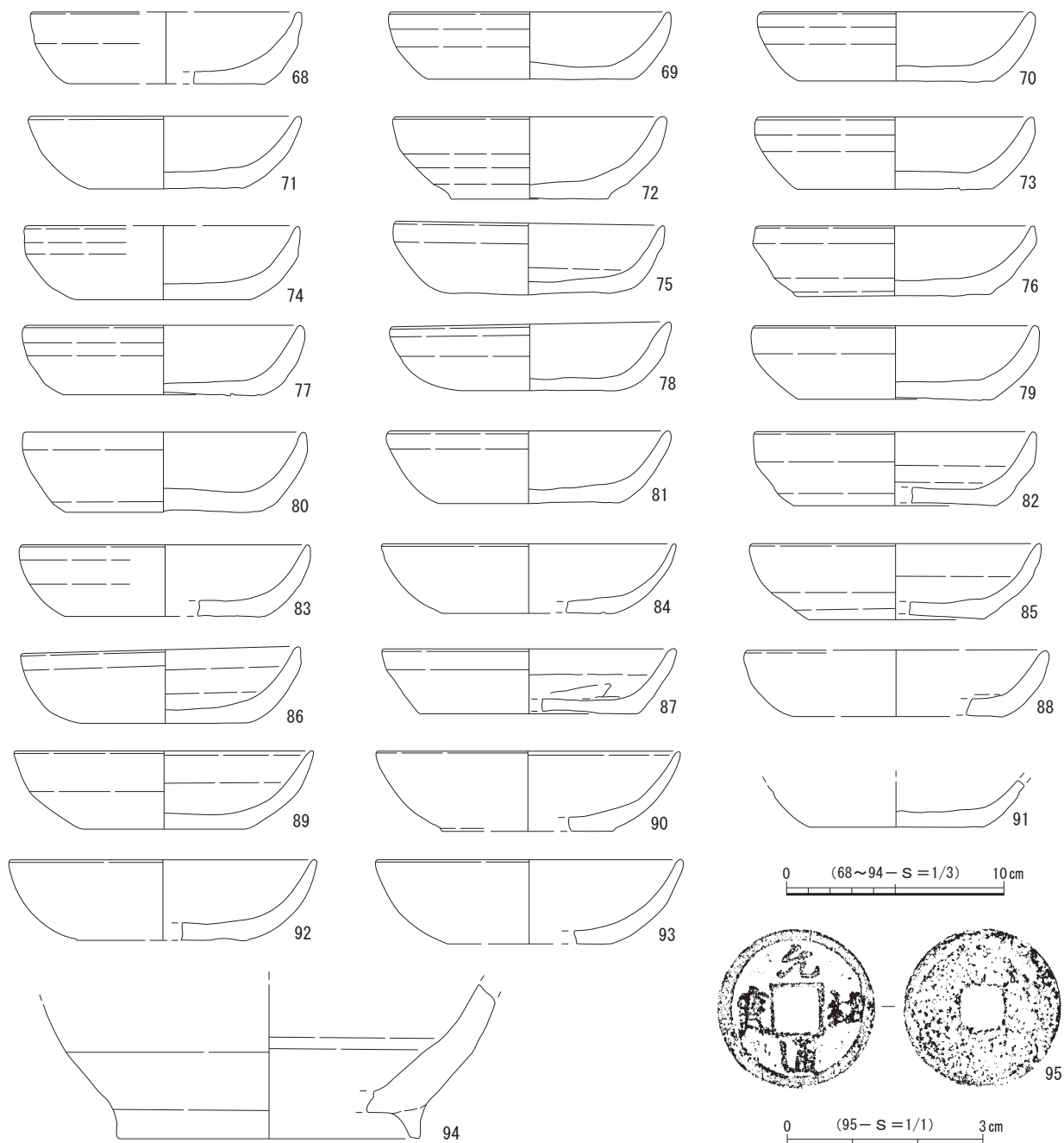


図15 第1面 溝状遺構1 a出土遺物(2)

### 溝状遺構1 b

1 bは北側に1 aが重複しているため、東側で南壁のみが確認された。規模は現存長6.83m、幅は調査区西壁の土層断面で計測すると63cm、深さ20~30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形はU字状を呈する。底面の標高は西端で8.94m、中央で8.90m、東端で9.00mを測る。中央より東側でかわらけの破片がややまとまって出土しており、下層の溝状遺構1 cの覆土に本址を掘り込んだ際に混入したものと考えられる。

### 出土遺物(図16)

遺物はかわらけ860点、磁器4点、陶器9点、金属製品2点が出土し、このうち34点を図示した。

1~33はロクロ成形によるかわらけである。21・24には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。34は常滑窯産の片口鉢I類である。



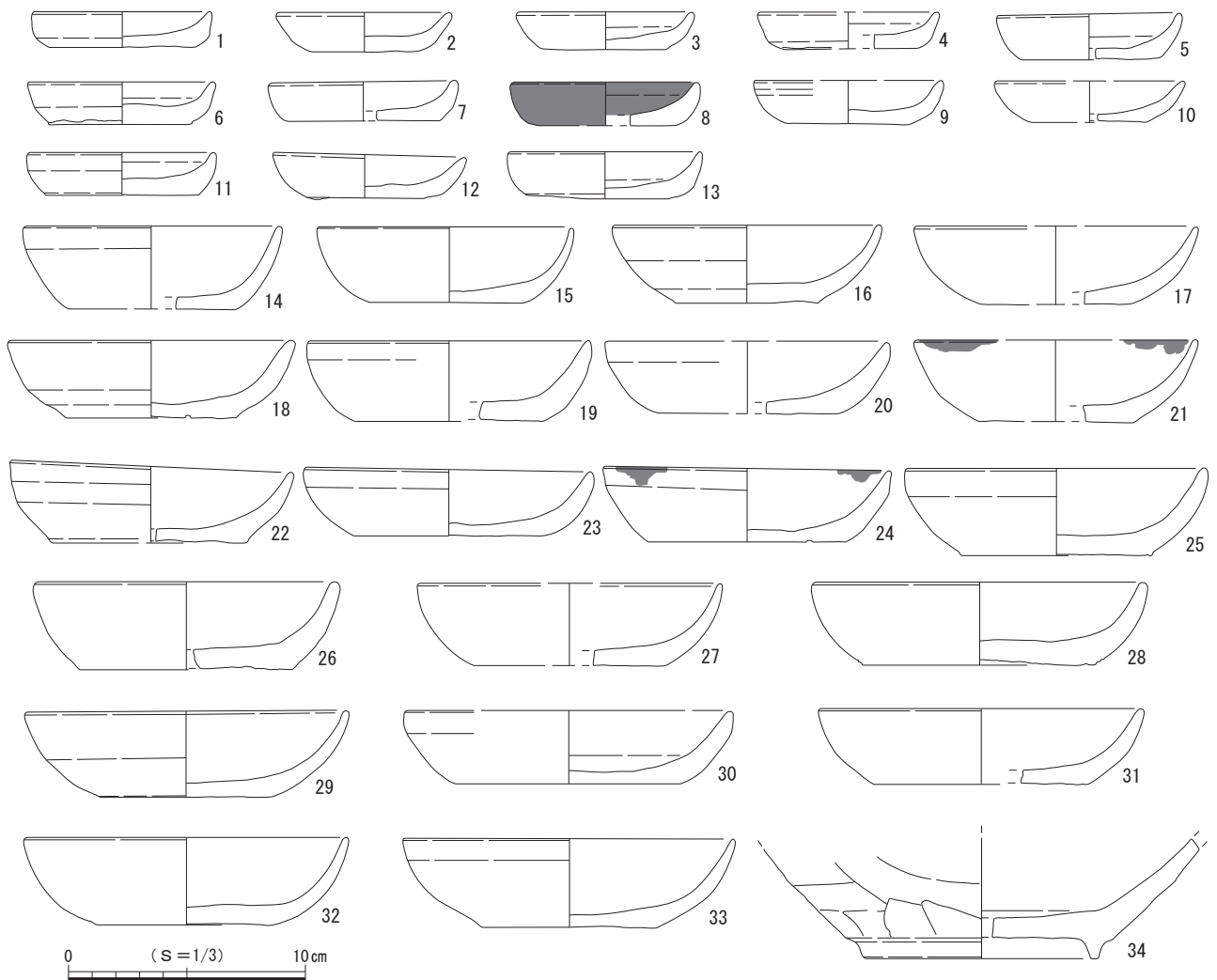


図16 第1面 溝状遺構1 b出土遺物

### 溝状遺構1 c

1 cは西側では南北壁のいずれも確認できなかったが、東側では南壁が確認され、北壁は調査区外に及んでいる。規模は現存長6.83m、幅は調査区西壁の土層断面で計測すると62cm、深さ8~10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形はU字状を呈する。底面の標高は西端で8.96m、中央で8.86m、東端で8.93mを測る。中央から東側にかけて、完形品を含む多量のかかわらがまとまって出土した。

### 出土遺物(図17・18)

遺物のかかわり317点、陶器1点が出土し、このうち32点を図示した。

1~32はロクロ成形によるかわらけである。12には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。

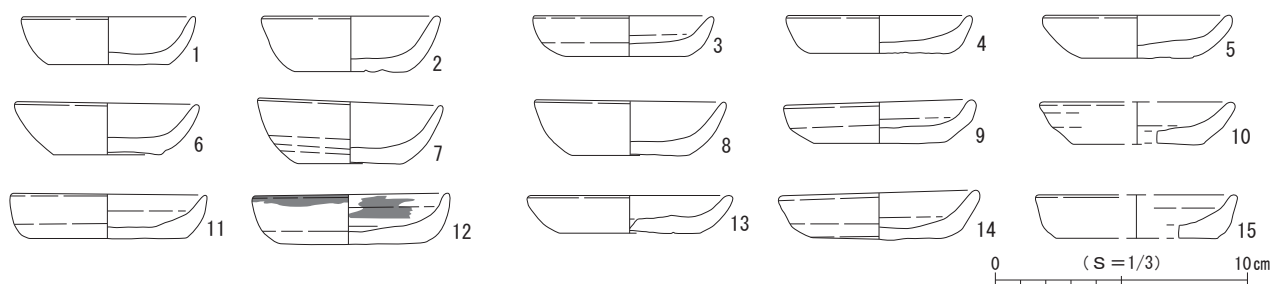


図17 第1面 溝状遺構1 c出土遺物(1)

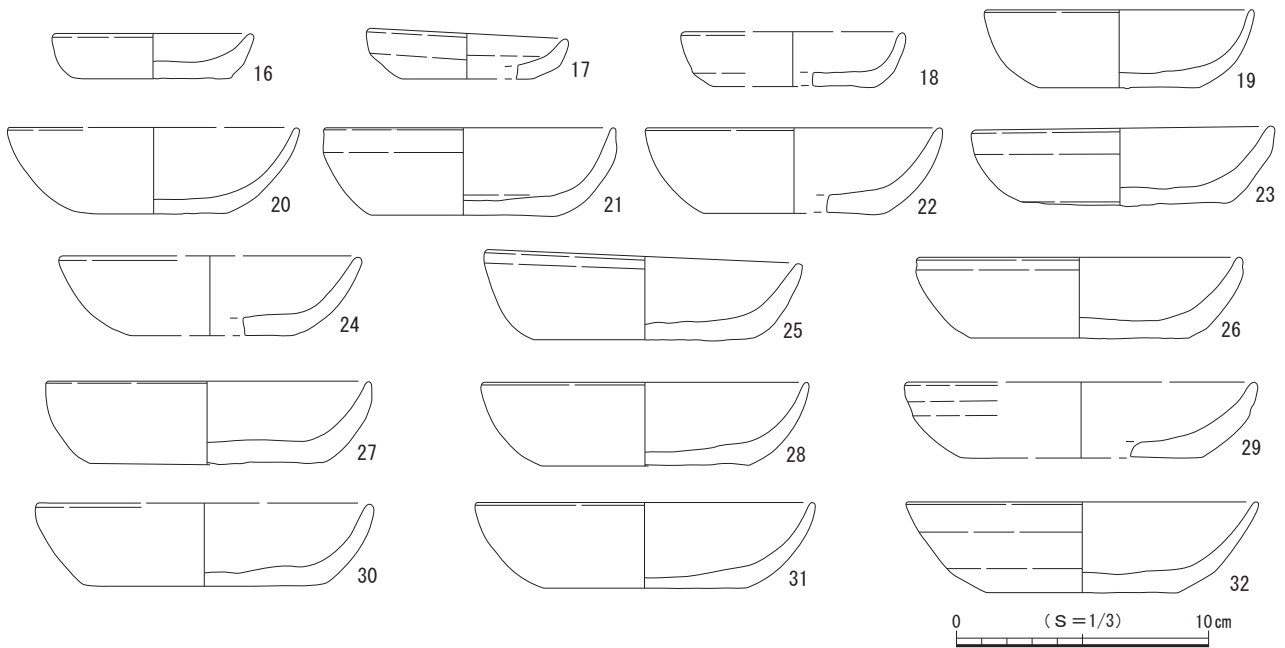


図18 第1面 溝状遺構1c出土遺物(2)

#### (4) 土 坑

第1面では、23基を検出した。調査区の全面に分布しており、一部が調査区外に及ぶものも多い。他の遺構との重複もみられるため、おおよそ全容が把握できたものは半数ほどである。平面形は略円形が主体的だが、相対的に規模の大きいものは不整形である。規模は現状で長軸0.62~2.87m、深さ0.07cm~1.10mで、大小様々である。

#### 土坑1 (図19)

調査区北東隅に位置する。南側がピット12と重複しており、本址が古い。また、北側から東側が調査区外に及んでいることから、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は方形ないし長方形を呈するものと推定される。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長93cm、北東-南西方向の現存長74cm、深さ20cmで、坑底面の標高は9.10mを測る。主軸方位は南西壁を基準にするとN-53°-Wを指す。覆土は灰色砂質土である。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑2 (図19)

調査区北側に位置する。東側がピット17と重複しており、新旧関係は不明である。平面形は略台形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向84cm、北西-南東方向の現存長82cm、深さ22cmで、坑底面の標高は9.12mを測る。南東壁を基準にすると、主軸方位はN-25°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑3 (図19)

調査区北側に位置する。北側でピット3・4、南側で土坑5と重複しており、新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.00m、

短軸84cm、深さ56cmで、坑底面の標高は8.73mを測る。主軸方位はN-70°-Wを指す。覆土上層から30cm大の泥岩ブロックがまとまって出土した。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑4 (図19)

調査区北側に位置する。西側が土坑5と重複しており、新旧関係は不明である。平面形は略円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径62cm、深さ27cmで、坑底面の標高は9.01mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑5 (図19)

調査区北側に位置する。西側でピット29と重複しており本址が古く、南西側で重複する土坑6・7より新しい。東側で重複する土坑4との新旧関係は不明である。平面形は、開口部が丸みを帯びた隅丸長方形を呈する。南側に低い段を有し、底面は「8」字形を呈する。壁は緩やかに開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.75m、短軸1.21m、深さ25cmで、坑底面の標高は9.00mを測る。主軸方位はN-50°-Eを指す。覆土は2層に分けられ、中央は混入物の少ない灰褐色砂質土、壁際は泥岩ブロックを含む灰褐色粘質土である。

遺物はかわらけ6点、陶器4点が出土した。

#### 土坑6 (図19)

調査区北側に位置する。東側で重複する土坑5より古く、土坑7より新しい。また、北西側は調査区外に及んでいるが、ほぼ全容を把握できた。平面形は楕円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長1.12m、短軸現存長78cm、深さ24cmで、坑底面の標高は9.02mを測る。主軸方位はN-28°-Wを指す。覆土は泥岩ブロックを含む灰褐色砂質土である。

遺物はかわらけ3点、磁器1点が出土した。

#### 土坑7 (図19)

調査区北側に位置する。北東側で土坑5、北西側で土坑6と重複しており、本址が古い。上端を他の遺構に壊されるが、おおよそ全容を把握できた。平面形は略円形を呈する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径84cm、深さ70cmで、坑底面の標高は8.58mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑8 (図19)

調査区中央に位置する。西側が調査区外に及んでおり、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は方形を基調とするものと推定される。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は南北1.00m、東西現存長75cm、深さ28cmで、坑底面の標高は8.97mを測る。南北壁の下端をもとに計測すると、主軸方位はN-70°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

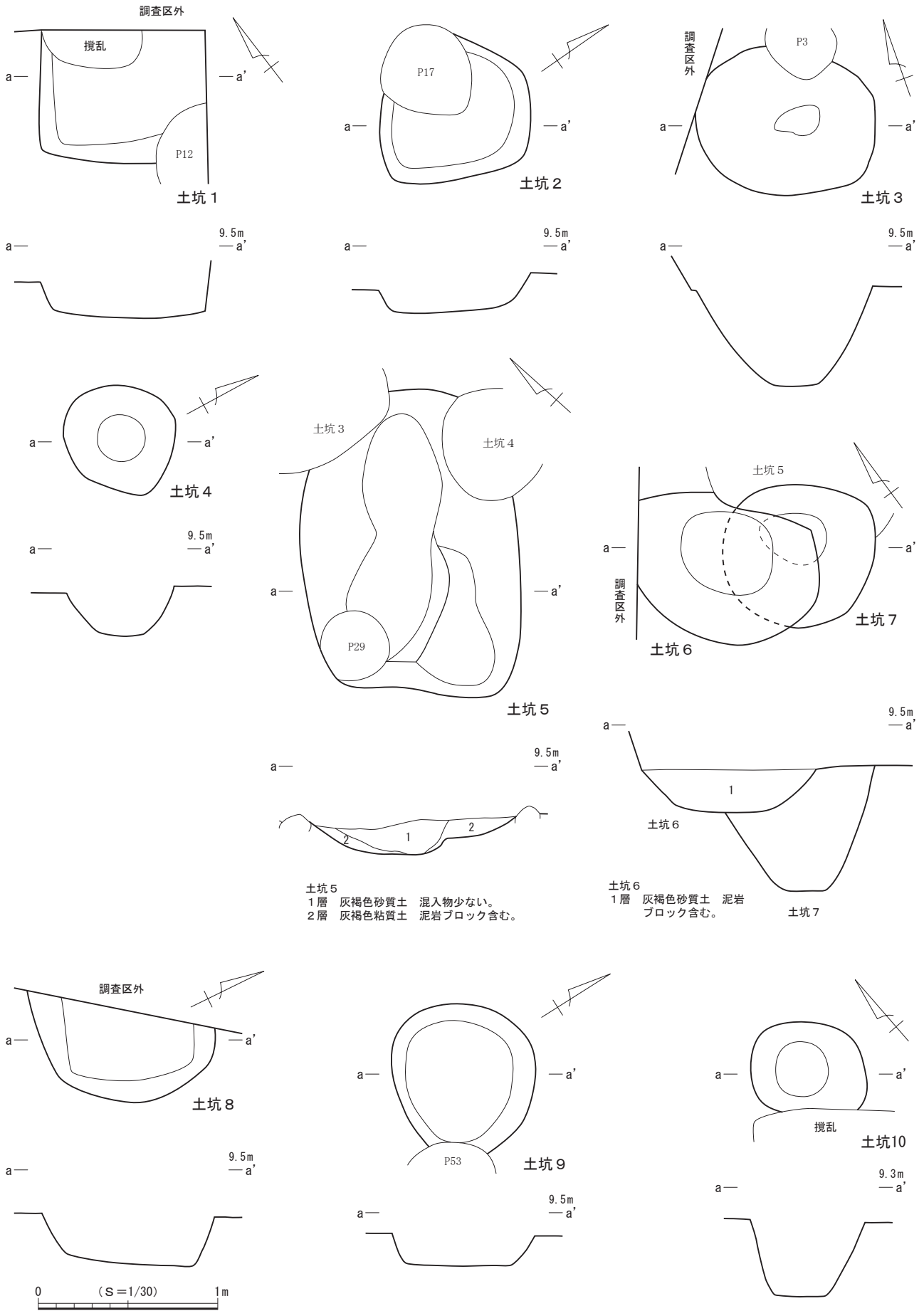


図19 第1面 土坑1~10



### 土坑9 (図19)

調査区中央に位置する。東側でピット53、西側でピット52と重複しており、新旧関係は不明である。平面形は略円形を呈する。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径87cm、深さ18cmで、坑底面の標高は8.20mを測る。

遺物は出土しなかった。

### 土坑10 (図19)

調査区中央に位置する。井戸1、土坑11と重複しており、本址が新しい。南西側の一部を攪乱により壊されている。平面形は楕円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸65cm、短軸現存長49cm、深さ40cmで、坑底面の標高は8.70mを測る。主軸方位はN-48°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

### 土坑11 (図22)

調査区中央に位置する。井戸1、土坑10、ピット47~49より古く、南西側で重複する土坑12との新旧関係は不明である。検出された範囲からは、平面形は不整楕円形を呈するものと推定される。西側に低い段を有し、底面はL字形を呈する。壁は開いて立ち上がり、北東側は開口部付近で大きく開く。断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.77m、短軸現存長85cm、深さ68cmで、坑底面の標高は8.56mを測る。主軸方位はN-60°-Eを指す。土層断面の観察により、1~3層と4~7層に不整合な面が認められたことから、掘り直しが行われた可能性が推測され、北東側の開口部が大きく開く形状は、この掘り直しに伴うものと考えられる。

#### 出土遺物 (図20)

遺物はかわらけ85点、金属製品2点が出土し、このうち6点を図示した。

1~4はロクロ成形によるかわらけ、5は手づくね成形によるかわらけである。6は錢貨で、聖宋元寶(北宋・1101)である。

### 土坑12 (図22)

調査区中央に位置する。東側で重複する井戸2より古く、北西側で重複する土坑11との新旧関係は不明である。東側を大きく壊されており、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は円形を基調とするものと推定される。壁は緩やかに開いて立ち上がる。規模は南北現存長72cm、東西現存長43cm、深さ43cmで、坑底面の標高は8.55mを測る。

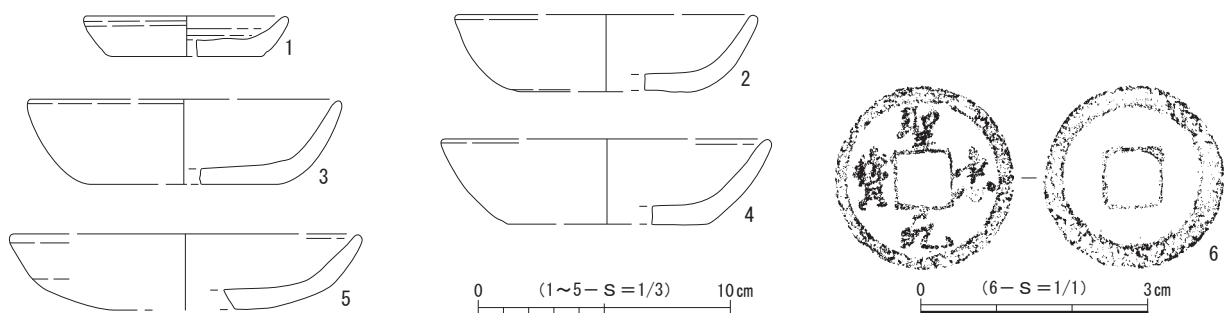


図20 第1面 土坑11出土遺物

### 出土遺物 (図21)

遺物はかわらけ 8 点、陶器 1 点、土師器 1 点、須恵器 1 点が出  
土し、このうち 1 点を図示した。

1 はロクロ成形によるかわらけである。

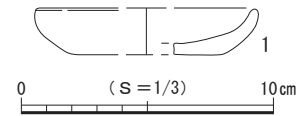


図21 第 1 面 土坑12出土遺物

### 土坑13 (図22)

調査区中央に位置する。北側で重複する井戸 2 より古く、南側で重複するピット63との新旧関係は不明である。平面形は北側を大きく壊されており、全容は明らかでない。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は東西現存長67cm、南北現存長50cm、深さ29cmで、坑底面の標高は8.82mを測る。

遺物はかわらけ11点が出土した。

### 土坑14 (図22)

調査区南側に位置する。溝状遺構 1、ピット72・73・77・78より古く、ピット69との新旧関係は不明である。検出された範囲からは、平面形は長方形を呈するものと推定される。中央が低くなっており、柱穴の可能性も考えられる。壁は開いて立ち上がり、断面形は階段状の逆台形を呈する。規模は長軸現存長83cm、短軸現存長50cm、深さ40cmで、坑底面の標高は8.76mを測る。主軸方位はN - 60° - Wを指す。

遺物はかわらけ 3 点、陶器 1 点が出土した。

### 土坑15 (図22)

調査区南側に位置する。北側で井戸 1、南側で砂利敷遺構 1 と重複しており、新旧関係は不明である。しかし、井戸 1 と砂利敷遺構 1 の水場としての関連性、さらに両遺構に挟まれた本址の位置関係から、井戸 1 に伴う施設の一部であった可能性が考えられる。現状で平面形は半円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長1.26m、短軸現存長38cm、深さ24cmで、坑底面の標高は8.90mを測る。

遺物はかわらけ 3 点が出土した。

### 土坑16 (図22)

調査区南側に位置する。東側が攪乱により失われている。また、東側で重複するピット120との新旧関係は不明である。平面形は略円形を呈するものと推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径67cm、深さ29cmで、坑底面の標高は8.85mを測る。

遺物はかわらけ 4 点が出土した。

### 土坑17 (図22)

調査区南側に位置する。西側でピット124・125、南側でピット126が重複しており、新旧関係は不明である。平面形は丸みを帯びた三角形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北東 - 南西方向66cm、北西 - 南東方向の現存長64cm、深さ 7 cmで、坑底面の標高は9.08mを測る。

遺物は出土しなかった。

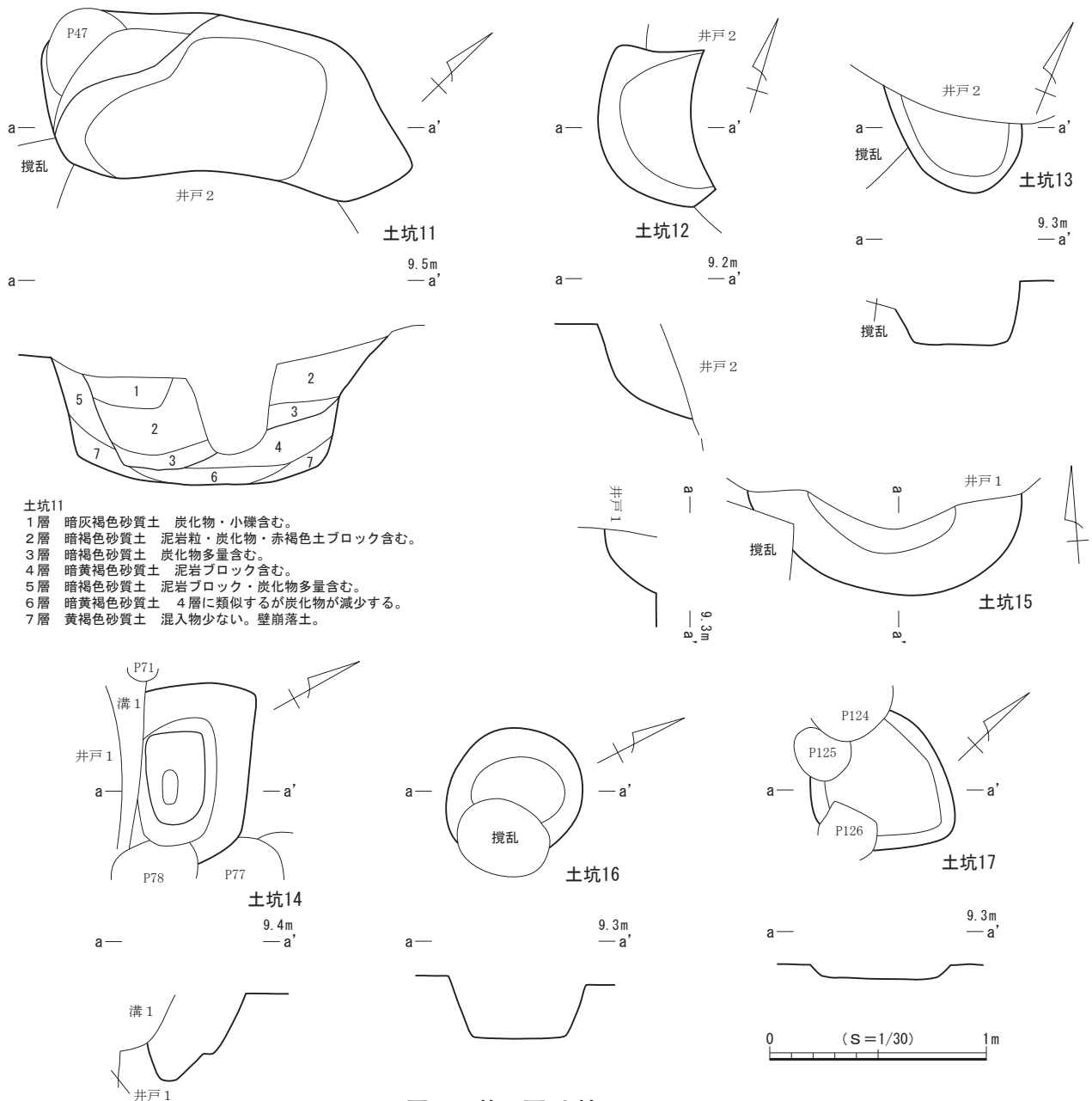


図22 第1面 土坑11~17

### 土坑18 (図27)

調査区南側に位置する。南側で重複する土坑19より古く、北東側で重複するピット127より新しい。ピット128との新旧関係は不明である。南西側は調査区外に及んでおり、遺構の全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は楕円形を呈するものと推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長60cm、短軸52cm、深さ15cmで、坑底面の標高は9.00mを測る。主軸方位はN-40°-Eを指す。

### 出土遺物 (図23)

遺物はかわらけ4点が出土し、このうち1点を図示した。

1は手づくね成形によるかわらけである。

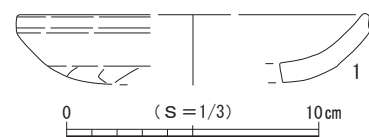


図23 第1面 土坑18出土遺物

### 土坑19 (図22)

調査区南端に位置する。土坑18、ピット121・141～143と重複しており、本址が新しい。南西側が調査区外に及んでおり、確認できた範囲は全体のごく一部であると考えられ、全容は明らかでない。平面形は不明だが、丸みを帯びた北壁の一部が確認された。壁は緩やかに開いて立ち上がり、北西側は開口部付近で大きく開く。断面形は逆台形を呈する。規模は北西－南東方向の現存長2.87m、北東－南西方向の現存長60cm、深さ1.10mで、坑底面の標高は8.14mを測る。覆土は5層に分けられ、上層にあたる2・3層は泥岩ブロックを含む暗灰褐色砂質土、下層は4層が拳大の泥岩と炭化物を含む暗褐色弱粘質土、5層は灰黄色強粘質土で構成され、5層中で2枚の炭化物層が確認された。

#### 出土遺物 (図24)

遺物はかわらけ25点、瓦1点、金属製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

### 土坑20 (図27)

調査区南側に位置する。ピット136より新しく、ピット135・137より古い。ピット136・138との新旧関係は不明である。西側の一部が攪乱で失われるが、おおよそ全容を把握できた。平面形は略円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径80cm、深さ18cmで、坑底面の標高は9.00mを測る。

#### 出土遺物 (図25)

遺物はかわらけ12点、石製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

### 土坑21 (図27)

調査区南東端に位置する。南西側がピット145と重複しており、本址が新しい。また、西側の一部が攪乱により失われ、東側は調査区外に及ぶことから、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は円形を基調とするものと推定される。壁は北側が垂直ぎみに、南側が開いて立ち上がり、断面形は歪な逆台形を呈する。規模は北東－南西方向の現存長1.02m、北西－南東方向の現存長36cm、深さ32cmで、坑底面の標高は8.90mを測る。

#### 出土遺物 (図26)

遺物はかわらけ5点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は瀬戸窯産の花瓶である。

### 土坑22 (図27)

調査区南東端に位置する。重複する土坑23、ピット145～147より新しく、ピット148より古い。また、東側から南側にかけてが調査区外に及んでおり、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形

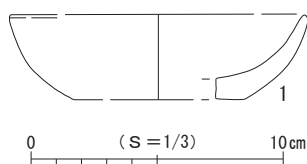


図24 第1面 土坑19出土遺物

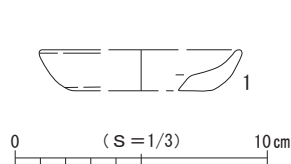


図25 第1面 土坑20出土遺物

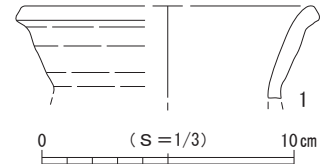


図26 第1面 土坑21出土遺物



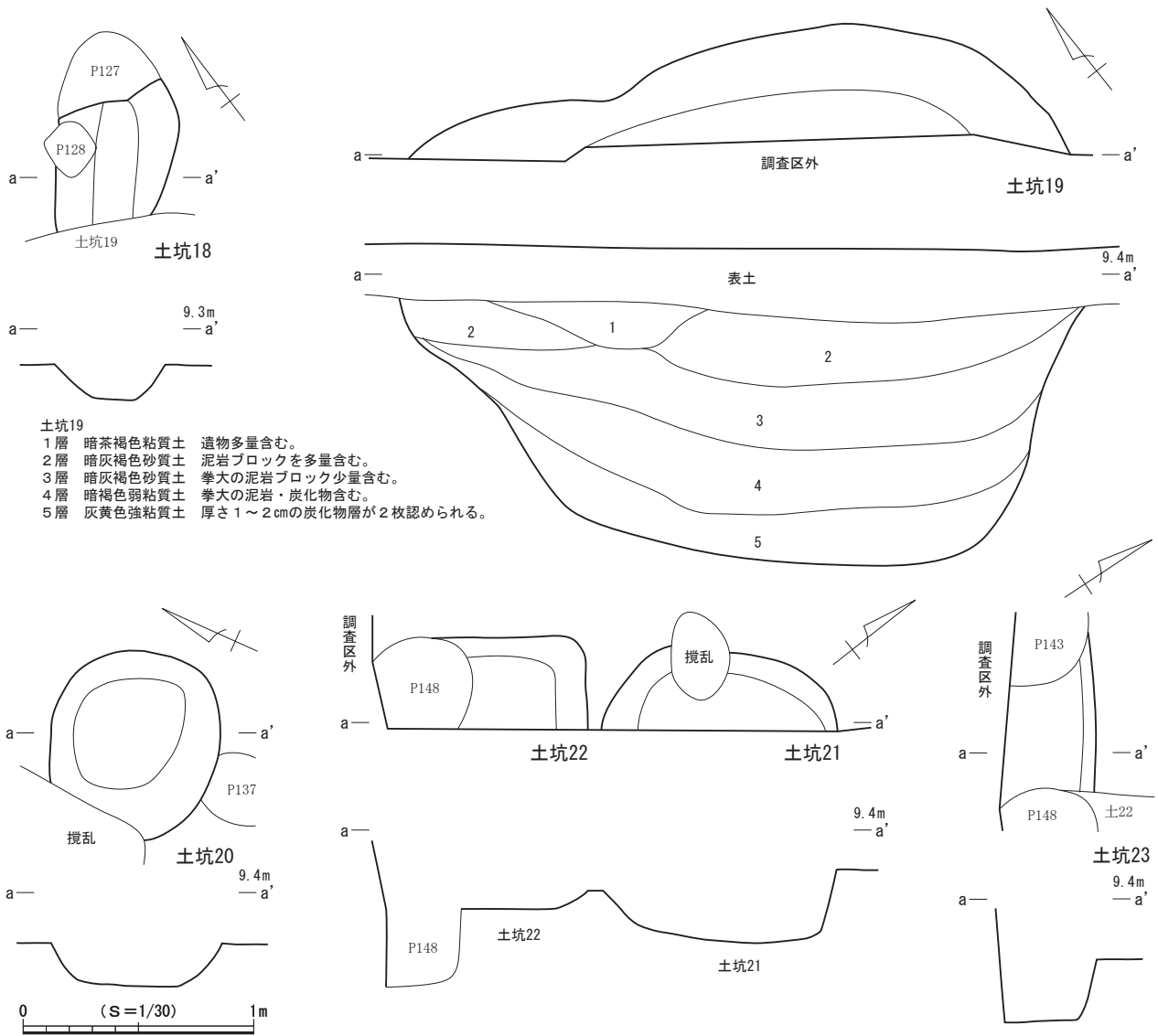


図27 第1面 土坑18～23

は隅丸方形を基調とするものと推定される。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北東－南西方向の現存長67cm、北西－南東方向の現存長40cm、深さ8cmで、坑底面の標高は9.06mを測る。西壁を基準にすると、主軸方位はN-26°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

### 土坑23 (図27)

調査区南東端に位置する。土坑22、ピット143・148と重複しており、本址が古い。また、南側の大半が調査区外に及んでいると考えられ、全容は明らかでない。平面形は不明だが、直線的な北壁の一部が確認された。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈するものと推定される。規模は北西－南東方向の現存長78cm、北東－南西方向の現存長40cm、深さ28cmで、坑底面の標高は8.86mを測る。

遺物はかわらけ1点、磁器1点が出土した。

### (5) ピット (図28)

第1面では、148基を検出した。調査区の全面に濃密に分布し、他の遺構あるいはピットと重複するも

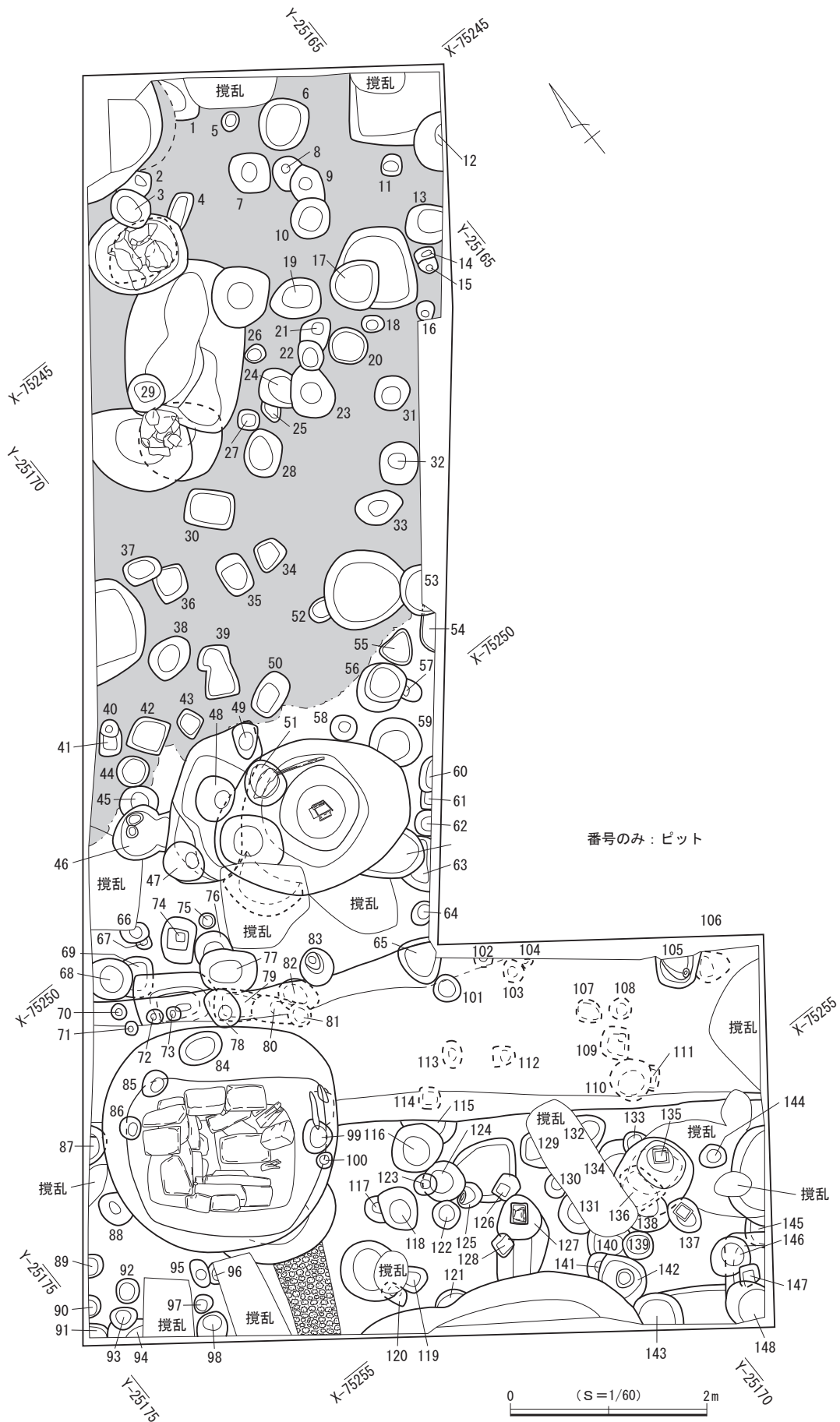


図28 第1面 ピット分布図

のも多い。第1面は上面が削平された状態での遺構確認面と考えられることから、これらのピットも時間幅をもつことが想定される。遺構密度は高いが、建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は略円形、楕円形、方形を主体としており、規模は現状で径11～58cm、深さ4～66cmを測る。礎石や礎板を伴うピットは確認されなかったが、柱の寸法を示していると思われる方形のピット、あるいはそのような掘り込みがピット底面に残るものも認められた(ピット74・127・128・135・137・147など)。

### 出土遺物(図29)

各ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表5)を参照されたいが、このうち14点を図示した。

1はピット14、2はピット45、3はピット46、4はピット47から出土したロクロ成形によるかわらけである。5はピット55から出土した手づくね成形によるかわらけである。6・7はピット63、8・9はピット70、10はピット78、11はピット85、12・13はピット88から出土したロクロ成形によるかわらけである。14はピット126から出土した瀬戸窯産の四耳壺である。

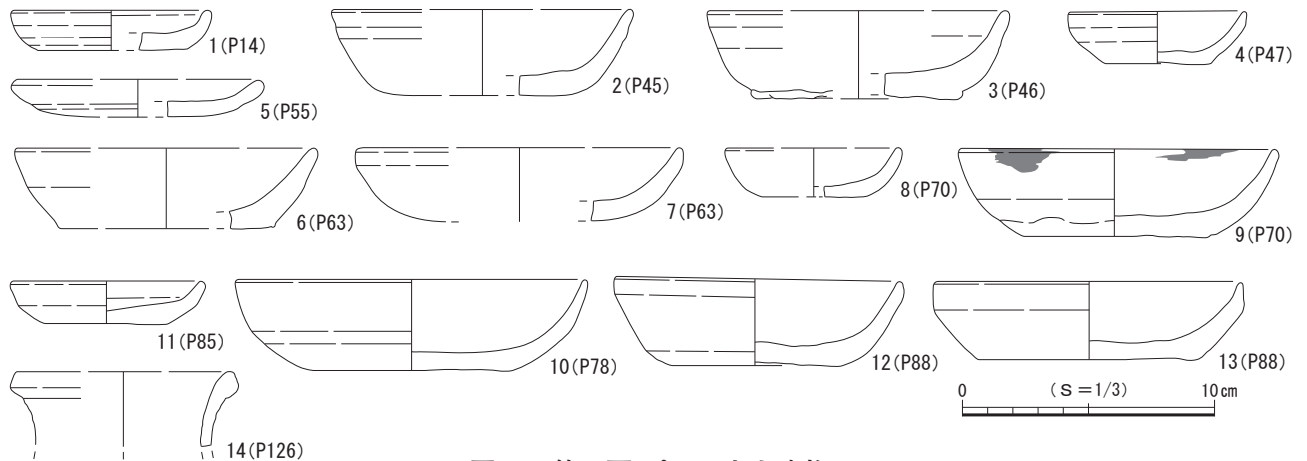


図29 第1面 ピット出土遺物

### (6) 遺構外出土遺物(図30)

第1面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち13点を図示した。

1～9はロクロ成形によるかわらけである。10は手づくね成形によるかわらけである。11・12は瀬戸窯産の製品で、11が柄付片口、12が平碗である。13は近世の遺物で、堺・明石系の挿鉢である。

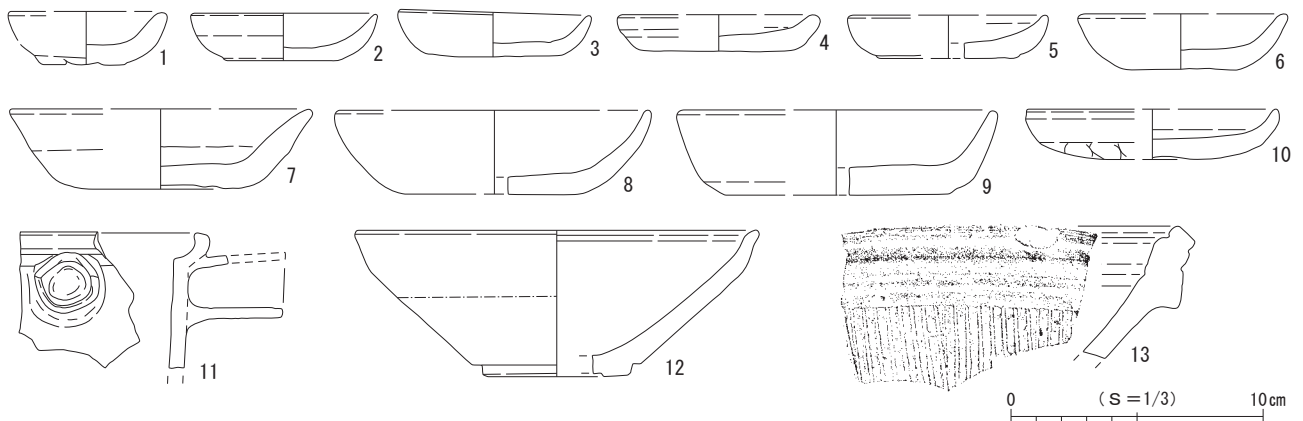


図30 第1面 遺構外出土遺物

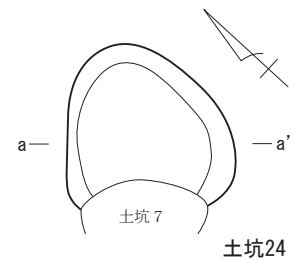
## 第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は、調査区の中央から北側に形成された泥岩整地層(7層)およびその整地時に堆積したと思われる暗黄褐色砂質土(11・12層)を除去して検出した暗灰色粘質土(14層)の上面で確認した。調査区南側では7層が形成されておらず、第1面ですべての遺構が確認されていることから、本面の遺構は調査区中央から北側にのみ分布することになる。確認面の標高は約8.6~8.7mを測る。14層を掘り込んで遺構が構築されていた。遺構の時期として、出土遺物、重複関係、覆土の特徴などから、中世およびそれ以前の大きく2時期にわたることが確認された。これらは便宜上、中世に属する遺構を第2面、それ以前の遺構を第3面に分離して報告する。検出した遺構は、土坑1基、ピット40基である(図33)。遺構種別は少ないものの、密度は比較的高く、重複するものもある。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉~14世紀代に属すると考えられる。

### (1) 土坑

第2面では、1基を検出した。第1面の遺構に壊されており、全容は把握できなかった。



### 土坑24(図31)

調査区北側に位置する。南側が第1面の土坑7と重複しており、一部を壊されている。平面形は略円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長74cm、北東-南西67cm、深さ12cmで、坑底面の標高は8.60mを測る。

遺物はかわらけ3点が出土した。

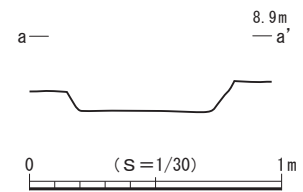


図31 第2面 土坑24

### (2) ピット(図33)

第2面では、40基を検出した。調査区北側に分布し、遺構密度は比較的高い。建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は略円形ないし楕円形を中心としており、規模は現状で径12~58cm、深さ4~48cmを測る。小さいもの、浅いものが比較的多いが、個々のピットにより差が大きい。礎石や礎板を伴うピットは確認されなかった。

各ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表5)を参照されたい。

### (3) 遺構外出土遺物(図32)

第2面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち6点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけ、3~6は手づくね成形によるかわらけである。

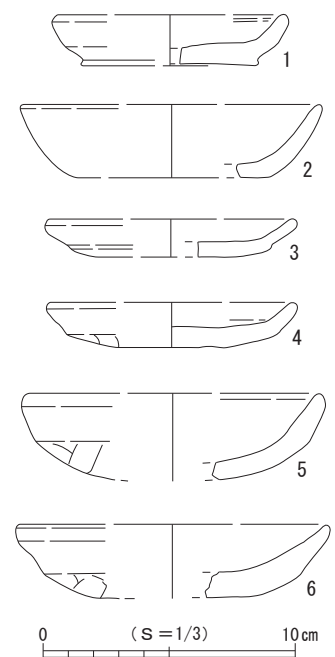


図32 第2面 遺構外出土遺物



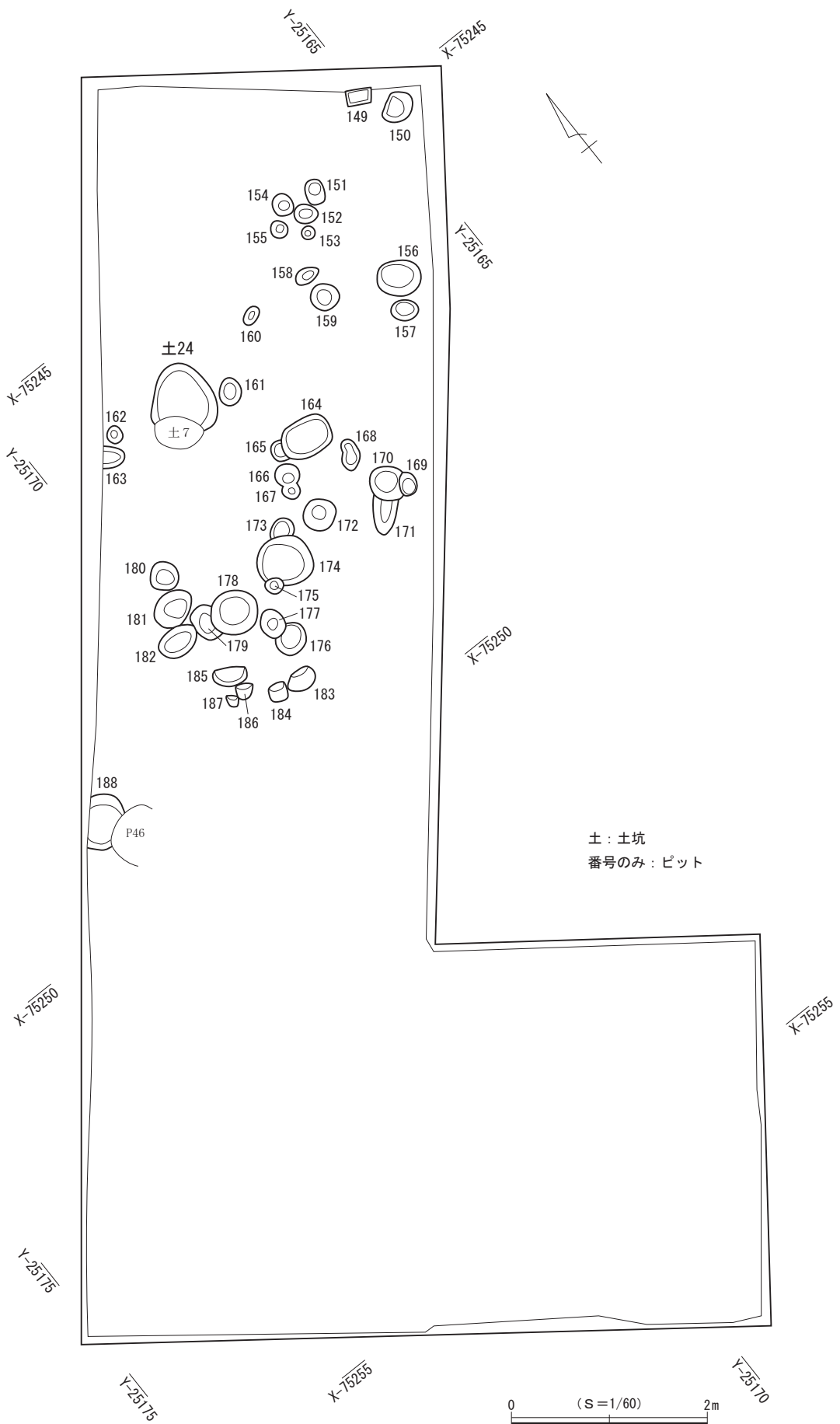


図33 第2面 遺構分布図

### 第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は、調査区南側で第1面、調査区北側で第2面において確認された遺構群のうち、中世以前に属する遺構を出土遺物や覆土の特徴などから分離したものである。そのため、確認面の標高は調査区南側で約9.2～9.4m、調査区北側で約8.6～8.7mである。検出した遺構は、溝状遺構3条、土坑4基、ピット4基である(図34)。調査区の中央から南側にかけて分布している。すべての遺構が上面の遺構に壊される、あるいは調査区外に及んでいることから、全容を把握できた遺構はなかった。

遺物は土師器の甕あるいは壺、高坏などが少量出土しているにすぎないが、これらの遺物の年代観から本面は大枠として古墳時代以前に属すると考えられる。

#### (1) 溝状遺構

第3面では、3条を検出した。調査区中央から南側にかけて分布しており、上層の遺構に大きく壊されていることから断片的な検出状態である。主軸方位はいずれも北東-南西方向を指し、溝状遺構2はL字状に屈曲する。

#### 溝状遺構2(図35)

調査区中央に位置する。北東-南西方向の溝状遺構が南側でL字状に屈曲しており、西端は調査区外に及んでいる。他の遺構により大きく壊されることから、部分的な検出に留まった。特に中央を第1面の井戸2に壊され分断されるが、主軸方位が揃うため同一の溝状遺構と判断した。他の遺構との新旧関係は、北側で土坑25と重複しており本址が古い。西側で重複する土坑28とは、本址が新しいことを土層断面で確認した。南側の屈曲部で重複するとみられる溝状遺構3との関係は明らかでない。屈曲部から北側については、主軸方位はN-47°-Eを指し、規模は現存長4.38m、幅19～29cm、深さ25～36cmを測る。屈曲部から西側については、主軸方位はN-43°-Wを指し、規模は長さ2.00m、幅は35cmほどと推定され、深さは調査区西壁の土層断面をもとに計測すると30cmを測る。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。底面の標高は北側で8.88m、屈曲部で8.88m、西側で8.93mを測る。底面に3カ所の小ピットが穿たれており、規模は径15～16cm、深さ5～9cmを測る。覆土は小泥岩ブロックと炭化物を含む暗茶褐色砂質土である。

遺物は土師器の甕あるいは壺が4点、高坏が1点出土した。

#### 溝状遺構3(図35)

調査区南側に位置する。第1面の井戸1の南北で断片的な溝状遺構が検出され、規模や主軸方位がおおむね揃うことから同一の溝状遺構と判断した。北東側は溝状遺構2および第1面のピット81～83によって壊されており、遺存状態は不良である。北側で検出された部分は、主軸方位はN-60°-Eを指し、規模は現存長31cm、幅21cm、深さ8cmを測る。南側で検出された部分は、主軸方位はN-37°-Eを指し、規模は現存長1.03m、幅23cm、深さ17cmを測る。検出された範囲で総長を復元すると、3.18mである。壁はやや開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。覆土は1～2mm大のスコリアを含むきめの細かい暗黒褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

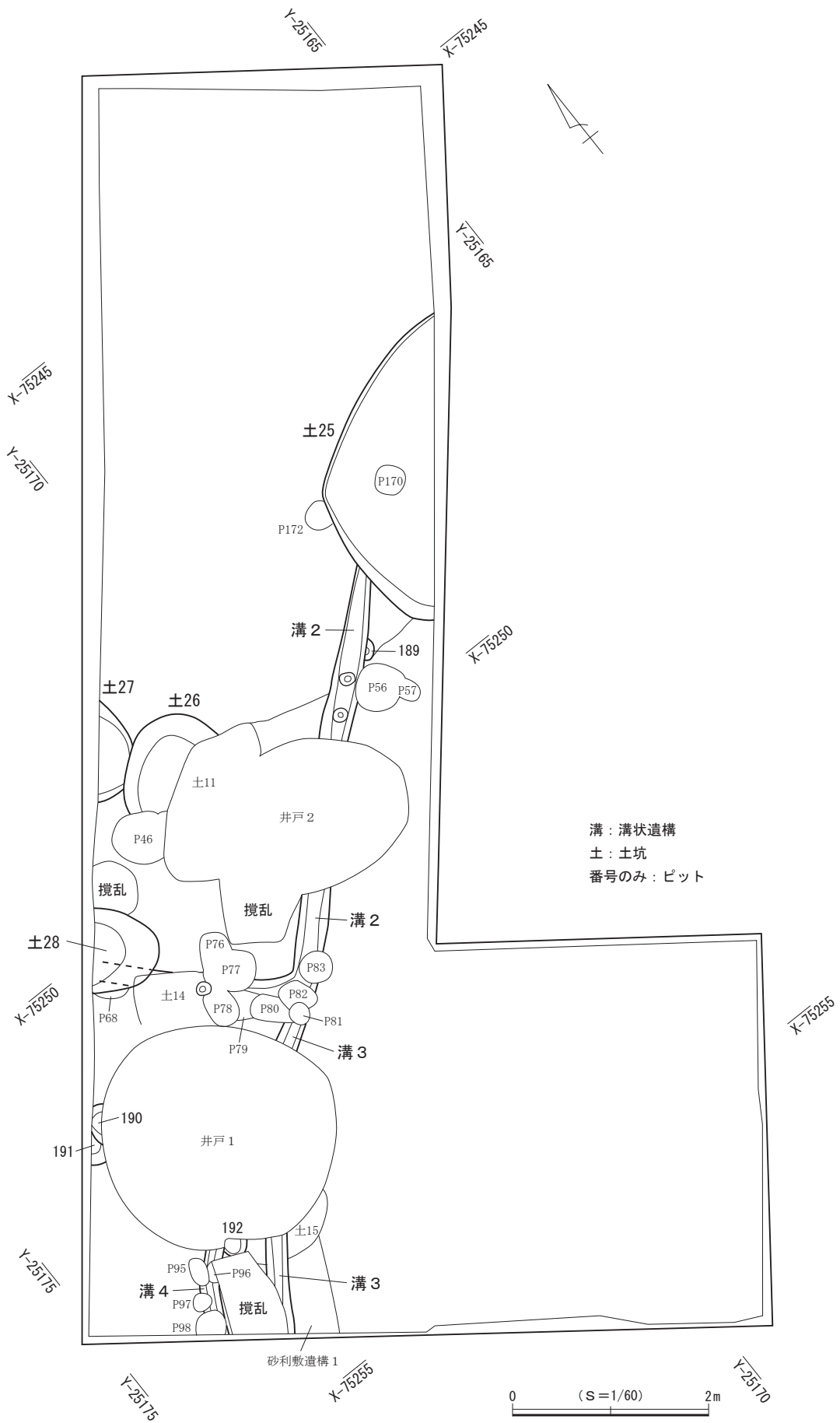


図34 第3面 遺構分布図

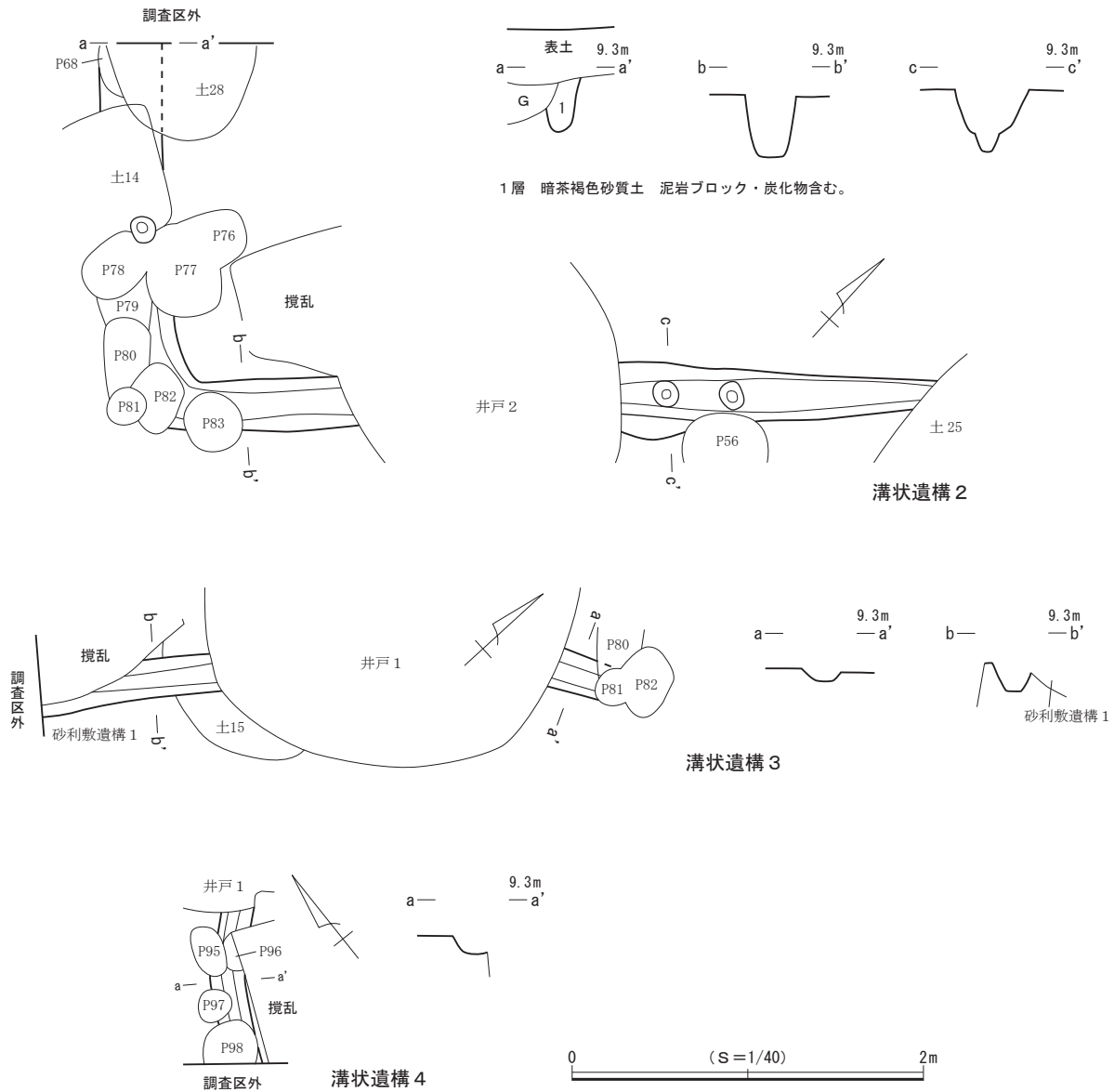


図35 第3面 溝状遺構2～4

#### 溝状遺構4 (図35)

調査区南端に位置する。北側が第1面の井戸1に壊され、南側は調査区外に及んでいる。また、第1面のピット95～98と攪乱によって中央を壊されるため遺存状態は不良であり、全容は明らかでない。中央でやや屈曲しているが、仮に両端を結んだ軸で計測すると、主軸方位はN-33°-Eを指す。規模は現存長89cm、幅18cm、深さ11cmを測る。壁はやや開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈すると考えられる。底面の標高は中央で9.00mを測る。覆土は1～2mm大のスコリアを含むきめの細かい暗黒褐色粘質土である。

遺物は出土しなかった。

#### (2) 土坑

第3面では、4基を検出した。調査区北側に1基、中央から南側に3基が分布する。全容を把握できたものではなく、検出された範囲での規模は現存長86cm～3.13m、深さ16～66cmを測り、ばらつきがある。



### 土坑25 (図36)

調査区北側に位置する。南東側が調査区外に及んでおり、遺構の全容は明らかでない。検出された範囲の平面形は、北壁と西壁がやや丸みを帯びており、南西隅は鈍角で接する。壁はやや開いて立ち上がり、底面は凹凸があり、断面形は歪な逆台形を呈する。規模は長軸現存長3.13m、短軸現存長1.14m、深さ33cmで、坑底面の標高は8.68~8.78mを測る。本址は全容が不明であることから土坑としたが、規模からみて堅穴状遺構の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

### 土坑26 (図36)

調査区中央に位置する。北西側で重複する土坑27との新旧関係は不明である。また、南側を第1面の土坑11およびピット46に壊されており、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は円形を基調とするものと推定される。底面は南西側がやや低く、壁は丸みを帯びて緩やかに立ち上がり、断面

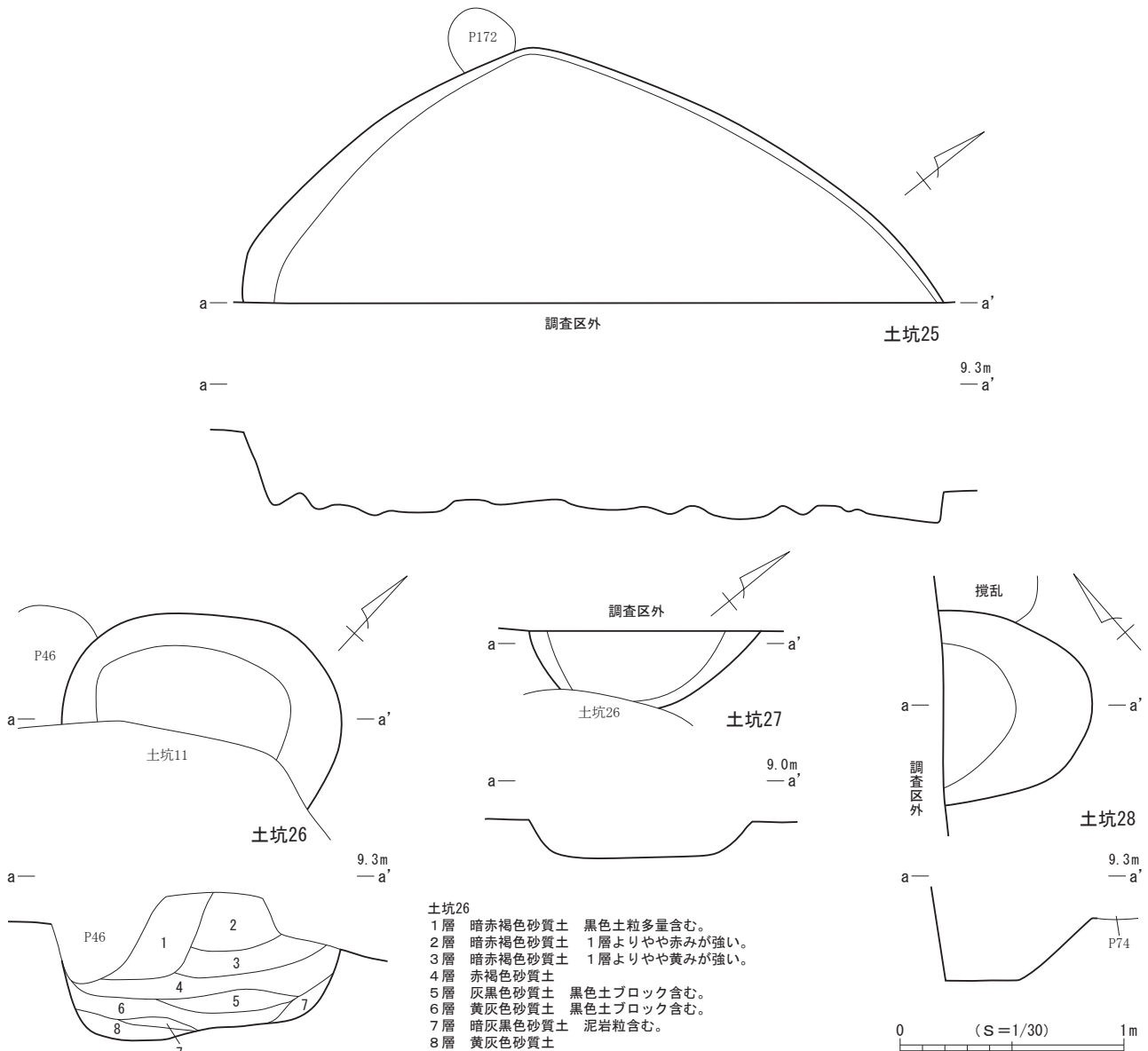


図36 第3面 土坑25~28

形は歪な逆台形を呈する。規模は長軸1.23m、短軸72cm、深さ66cmで、坑底面の標高は8.56mを測る。覆土は8層に分けられ、上層は暗赤褐色砂質土、下層は黒色土ブロックを含む灰黒色砂質土と黄灰色砂質土を主体とする。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑27 (図36)

調査区中央に位置する。南東側で重複する土坑26との新旧関係は不明である。また、北西側が調査区外に及んでおり、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は円形を基調とするものと推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長1.04m、短軸現存長34cm、深さ16cmで、坑底面の標高は8.66mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑28 (図36)

調査区南側に位置する。南東側が溝状遺構2と重複しており、本址が古い。また、北西側が調査区外に及んでおり、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は楕円形を基調とするものと推定される。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長86cm、短軸現存長66cm、深さ28cmで、坑底面の標高は8.83mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### (3) ピット (図34)

第3面では、4基を検出した。調査区中央から南側にかけて分布する。いずれも他の遺構に壊されており、全容を把握できたものはない。遺構密度は低く、建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形を基調とするものと推定されるが判然とせず、現状で確認できた規模は長軸21～43cm、深さ14～25cmを測る。

遺物は出土しなかった。

## 第四章 まとめ

今回報告する小町三丁目418番4地点は、若宮大路周辺遺跡群の北東側に所在する。若宮大路周辺遺跡群の北東端に近く、北条小町邸跡(泰時・時頼邸)(No.282)を挟んで若宮大路から東へ約260m、すぐ西を走る小町大路から東へ25mに位置する。若宮大路周辺遺跡群は面積が広く、また商業地を含むため遺跡全体では調査地点が多いが、本地点周辺での調査事例は多くない。図3に示した範囲内では本地点を含め9地点で調査が行われている。

今回の調査では、第1～3面で遺構を確認した。検出した遺構は、井戸3基、砂利敷遺構1基、溝状遺構4条、土坑28基、ピット192基である。遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類、古代以前の土師器・須恵器が出土しており、遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して14箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

### 〈第1面〉

第1面の遺構は、堆積土層の7・8層上面で検出され、確認面の標高は約9.2～9.4mを測る。調査区の北側では人頭大の泥岩による整地層が形成され、南側では変色した赤褐色砂質土が堆積していた。各層は表土直下に堆積し、検出面の標高はほぼ同一であったことから、いずれも上面は削平された可能性が高い。土層の様相は異なるものの、これらの層を掘り込んで構築された遺構のうち、中世に属する遺構を第1面の遺構とした。検出した遺構は、井戸3基、砂利敷遺構1基、溝状遺構1条、土坑23基、ピット148基である。遺構間で重複し合うものが多く、遺構密度は極めて高いといえる。

井戸は石組構造の井戸1、素掘り構造の井戸2・3と、2種の形態が認められた。その中から本遺跡の特徴的な遺構である石組構造の井戸1について、その構造と類例についてふれておきたい。

井戸1は方形に組まれた石組をもつ。ほぼ原状を保つのは2面(北西面・南西面)とみられ、最大5段の石組が確認された。用いられた切石は規格性に乏しいことから転用材とみられ、積み方にもばらつきがある。詳細な構築年代は明らかでないが、出土遺物から14世紀～16世紀代までの使用年代が推定される。鎌倉市街地には石組井戸の類例は少ないが、2例ほど挙げてみたい。まず、材木座町屋遺跡材木座6丁目653-1外地点(香川 2009)で、土丹切石組井戸が1基調査されている。石組の平面形は方形を呈し、最大7段が遺存していた。構築時期は15世紀前半頃、廃絶時期は15世紀後半と推定されている。もう1例として、田楽辻子周辺遺跡569番10地点(根本 2014)で、凝灰質砂岩を用いた方形の石組井戸が検出されている。14世紀後半～15世紀という年代が与えられており、切石とその積み方は整然とした印象を受け、報文では「武家屋敷を連想する」とされている。この2例と本地点の例は構造が類似しており、さらに15世紀代もしくはその前後の年代に比定される点が共通している。木製の井戸枠をもつ井戸より総じて新しいといえ、井戸の工法に変化が現れたものと捉えられよう。

この他の遺構について述べると、溝状遺構1は小町大路に直交する主軸方位を指し、二度の掘り直しが認められ、多量のかわらけが出土した。また、ピットとともに土坑も多く検出されている。井戸、かわらけが廃棄された溝状遺構、多数の土坑などが検出されていることから、本面の様相は生活に密接する空間であったと捉えられる。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられるが、井戸1については16世紀代まで使用されていた可能性が推測される。

## 〈第2面〉

第2面の遺構は、調査区の中央から北側に形成された泥岩整地層を除去して検出した暗灰色粘質土の上面で確認した。確認面の標高は約8.6～8.7mを測る。中世およびそれ以前の大きく2時期にわたる遺構が確認され、中世に属する遺構を第2面の遺構とした。検出した遺構は、土坑1基、ピット40基である。第1面と比較して格段に遺構数と種別が減少するが、泥岩による整地の際に削平された可能性が推測される。

遺物は主にかわけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀中葉～14世紀代に属すると考えられる。

## 〈第3面〉

第3面の遺構は、調査区南側で第1面、調査区北側で第2面において確認された遺構群のうち、中世以前に属する遺構を出土遺物や覆土の特徴などから分離したものである。そのため、確認面の標高は調査区南側で約9.2～9.4m、調査区北側で約8.6～8.7mである。検出した遺構は、溝状遺構3条、土坑4基、ピット4基である。本地点周辺における図3①～⑧の調査事例では、本面と同時期と推定される遺構が検出された調査地点はなく、古代以前の遺構が検出された数少ない事例となった。

遺物は土師器の甕あるいは壺、高坏などが少量出土しているにすぎないが、これらの遺物の年代観から本面は大枠として古墳時代以前に属すると考えられる。

## 引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

伊丹まどか・松吉大樹ほか 2013「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町三丁目422番2外地点」『平成24年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29 鎌倉市教育委員会

宇都洋平・原 廣志 2013「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町三丁目425番3地点」『平成24年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29 鎌倉市教育委員会

香川達郎 2009『材木座町屋遺跡-材木座6丁目653-1外-発掘調査報告書』玉川文化財研究所

鐘方正樹 2003『井戸の考古学』ものが語る歴史8 同成社

手塚直樹・野本賢二ほか 2001「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町二丁目402番5地点」『平成12年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 鎌倉市教育委員会

根本志保 2014「田楽辻子周辺遺跡(No.33)浄明寺二丁目569番10」『平成25年度調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30 鎌倉市教育委員会

原 廣志・小林重子ほか 1996「北条高時邸跡(No.281)小町三丁目426番3地点」『平成7年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 鎌倉市教育委員会

原 廣志・宇都洋平 2012「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町三丁目425番1の一部外」『平成23年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄・伊丹まどか・鍛冶屋勝二・宇都洋平 2007「若宮大路周辺遺跡群(No.242)小町二丁目402番9ほか地点」『平成18年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980



表2 第1面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
井戸1 出土遺物 (図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.3)	(4.2)	2.0	器壁上部に穿孔あり 底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/5
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(4.5)	2.5	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	5.0	2.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	4/5
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.7)	(5.4)	2.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
5	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.6	3.2	口唇部の一部が黒色化 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.7)	(7.5)	3.0	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：褐色 焼成：良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(8.5)	4.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
8	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.9)	(7.9)	4.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/5
9	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(9.1)	3.8	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/5
10	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.5	胎土：微砂、白色粒 色調：胎土-灰色、自然釉-暗灰緑色 備考：5型式	口縁部 小破片
11	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.7	胎土：微砂、白色粒 色調：胎土-灰褐色、自然釉-灰緑色 備考：11型式?	口縁部 小破片
12	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.1	胎土：微砂、白色粒 色調：暗褐色 備考：8型式	口縁部 小破片
13	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.2	胎土：微砂、白色粒 色調：灰褐色 備考：8型式	口縁部 小破片
14	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(31.6)	-	現 4.4	胎土：微砂、白色粒 色調：赤褐色 備考：8型式	口縁部 小破片
井戸2 出土遺物 (図11)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(6.4)	3.3	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：明褐灰色 焼成：良好	1/3
2	木製品	組箱	長辺 13.0	短辺 10.3	9.5	木釘を使った組箱	略完形
溝状遺構1a 出土遺物 (図14・15)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	5.1	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.4	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.6	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.8)	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.5	2.0	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	4/5
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.6	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.2)	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.7	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.0)	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.2	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.6	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	4/5
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.6	1.6	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：明褐灰色 焼成：良好	1/2
13	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.6	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/2
14	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(6.2)	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
15	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.2)	2.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
16	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.0)	1.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/5
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.0)	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
18	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	4.4	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	4/5
19	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.2	1.8	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：明褐灰色 焼成：良好	完形
20	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	2.2	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	略完形
21	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.5)	2.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3

22	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	4.9	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	略完形
23	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(4.7)	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
24	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.9)	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/2
25	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(6.0)	2.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
26	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	5.8	2.3	口唇部2カ所を打ち欠く 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
27	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.0)	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
28	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.4)	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
29	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.5	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	完形
30	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.0)	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	2/3
31	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.0)	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
32	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.6)	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
33	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(4.9)	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
34	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.5)	(5.0)	1.7	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/4
35	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(5.8)	2.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
36	土器	ロクロ かわらけ・小	10.0	5.8	3.0	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	2/3
37	土器	ロクロ かわらけ・中	10.3	5.6	2.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	2/3
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.7)	2.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/3
39	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.0	3.1	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	4/5
40	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.0)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
41	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(7.2)	2.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
42	土器	ロクロ かわらけ・中	11.0	6.4	2.9	器壁摩耗 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3
43	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.6)	3.1	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/2
44	土器	ロクロ かわらけ・中	11.1	6.6	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	5/6
45	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.0	3.2	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：明褐色 焼成：良好	1/2
46	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.3)	(7.0)	2.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/3
47	土器	ロクロ かわらけ・中	11.3	(7.8)	3.0	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	2/3
48	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	7.6	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	略完形
49	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.6)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
50	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.8)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/5
51	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	8.0	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
52	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	6.6	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3
53	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.0)	3.3	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/4
54	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(6.0)	3.3	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
55	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.9)	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
56	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.5)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
57	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(8.0)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/3
58	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(7.7)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、泥岩粒、やや良土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
59	土器	ロクロ かわらけ・中	11.9	7.4	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	略完形
60	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(6.4)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
61	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.0)	3.1	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/4

62	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.0	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
63	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	8.0	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 明褐色 焼成: 良好	1/2
64	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(6.4)	3.3	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
65	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.4	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
66	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.4)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、泥岩粒、やや良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
67	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(9.0)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: にぶい橙色 焼成: 良好	1/4
68	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(9.0)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
69	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	9.4	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	4/5
70	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	9.0	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: にぶい橙色 焼成: 良好	1/2
71	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	7.1	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
72	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.2	3.8	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
73	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.5)	8.2	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
74	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.5)	8.0	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/2
75	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.9	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	略完形
76	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(9.0)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
77	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(9.2)	3.2	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2
78	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.5	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
79	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(8.8)	3.4	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: にぶい橙色 焼成: 良好	1/3
80	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	9.0	4.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: にぶい橙色 焼成: 良好	略完形
81	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	8.4	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/2
82	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(9.4)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
83	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(9.2)	3.3	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 明褐色 焼成: 良好	1/2
84	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(8.0)	3.2	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/4
85	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(8.0)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/4
86	土器	ロクロ かわらけ・大	13.4	7.6	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
87	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(10.2)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
88	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(9.7)	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
89	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(7.5)	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
90	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.9)	(7.9)	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや良土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2
91	土器	ロクロ かわらけ・大	-	8.0	現 2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	底部 小破片
92	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(8.0)	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/2
93	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(7.6)	3.9	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
94	陶器	常滑 片口鉢I類	-	(14.0)	現 7.1	胎土: 微砂、白色粒、小石粒 色調: 灰色 備考: 6 a 形式	底部 小破片
95	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-元祐通寶(北宋・1086)	完形

溝状遺構 1 b 出土遺物 (図16)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	6.0	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	(4.4)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.4	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	3/4
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.5)	1.5	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: にぶい橙色 焼成: 良好	1/3
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	6.0	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: にぶい橙色 焼成: 良好	1/2
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	6.0	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2



7	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.4)	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.0)	1.9	内外面黒色化 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：明褐色 焼成：良好	1/3
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.1)	1.8	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶ い橙色 焼成：良好	1/4
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.1)	1.8	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：明赤 褐色 焼成：良好	1/4
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(6.5)	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(4.9)	2.0	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶ い橙色 焼成：良好	1/4
13	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	略完形
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.7)	(7.0)	3.5	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調： にぶい橙色 焼成：良好	1/2
15	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.5	2.2	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4
16	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.0	3.3	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
17	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(6.4)	3.3	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/4
18	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	7.2	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石 粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	1/2
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(8.0)	3.4	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶ い橙色 焼成：良好	1/4
20	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(7.5)	3.1	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶ い橙色 焼成：良好	1/3
21	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(6.5)	3.5	口唇部に煤附着 底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、 粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/4
22	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(8.2)	3.5	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや 粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	1/2
23	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	8.0	2.9	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗 土 色調：橙色 焼成：良好	2/3
24	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	6.4	3.1	口唇部に煤附着 底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、小石粒、海 綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
25	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(8.0)	3.7	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色 調：にぶい橙色 焼成：良好	1/4
26	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(9.0)	3.8	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶ い橙色 焼成：良好	1/3
27	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(8.0)	3.5	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調： 橙色 焼成：良好	1/3
28	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(9.8)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨 針、粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	1/3
29	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.5)	(7.2)	3.6	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調： 橙色 焼成：良好	1/3
30	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	9.4	2.1	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調： にぶい橙色 焼成：良好	1/2
31	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(9.0)	3.2	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：にぶ い橙色 焼成：良好	1/4
32	土器	ロクロ かわらけ・大	13.6	7.6	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石 粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	4/5
33	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.9)	7.3	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗 土 色調：浅黄褐色 焼成：良好	4/5
34	陶器	常滑 片口鉢I類	-	(9.9)	現 5.1	胎土：粗、白色粒 色調：灰色	底部 小破片

溝状遺構 1 c 出土遺物 (図17・18)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.8)	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩 粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.4)	2.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩 粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	5.0	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨 針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	1/2
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.6)	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨 針、やや粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	1/3
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.4	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩 粒、海綿骨針、やや粗土 色調：浅黄褐色 焼成：良好	7/8
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.4	2.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨 針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	完形
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.2	2.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨 針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	4/5
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.6	2.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨 針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.3	1.8	底面一回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい橙 色 焼成：良好	略完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.2)	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色 調：にぶい橙色 焼成：良好	1/4
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.3	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや 粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	6.0	2.0	口唇部に煤附着 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色 粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形



13	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.6)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	1/4
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(6.4)	1.7	底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	1/4
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.3	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	完形
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.2)	2.0	底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	1/4
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.7)	(6.6)	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/3
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.6)	6.2	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	2/3
20	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	6.0	3.5	底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	4/5
21	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	7.5	3.5	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい黄橙色 焼成：良好	略完形
22	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(7.2)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/3
23	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	8.3	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	2/3
24	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(6.4)	3.2	底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/4
25	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.8	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	4/5
26	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.6	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：明褐色 焼成：良好	1/2
27	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	9.3	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
28	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	8.2	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	2/3
29	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.1)	(9.6)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
30	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.1)	(9.7)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/3
31	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.0	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4
32	土器	ロクロ かわらけ・大	13.8	7.6	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：にぶい橙色 焼成：良好	3/4

土坑11出土遺物(図20)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.0)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.3)	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	(8.0)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/3
5	土器	手づくね かわらけ・大	(13.8)	-	(3.0)	底面-指頭ナデ消し 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
6	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-聖宋元寶(北宋・1101)	完形

土坑12出土遺物(図21)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	(6.0)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
---	----	---------------	-------	-------	-----	--	-----

土坑18出土遺物(図23)

1	土器	手づくね かわらけ・大	(13.7)	-	(2.7)	底面-指頭痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/5
---	----	----------------	--------	---	-------	--	-----

土坑19出土遺物(図24)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(7.0)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/5
---	----	---------------	--------	-------	-----	--	-----

土坑20出土遺物(図25)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.6)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/6
---	----	---------------	-------	-------	-----	--	-----

土坑21出土遺物(図26)

1	陶器	瀬戸 花瓶	(11.5)	-	現 3.7	二次焼成のために釉剝離 胎土：微砂 色調：胎土-灰色、釉-淡灰緑色	口縁部 小破片
---	----	----------	--------	---	----------	-----------------------------------	------------

ピット出土遺物(図29)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	6.0	1.6	底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好 出土遺構：ピット14	1/4
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(7.8)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好 出土遺構：ピット45	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(8.0)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好 出土遺構：ピット46	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.3	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好 出土遺構：ピット47	略完形
5	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	-	1.5	底面-指頭ナデ消し 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好 出土遺構：ピット55	1/4

6	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(8.5)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 出土遺構: ビット63	1/6
7	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	-	(2.9)	底面-指頭ナゲ消し 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 出土遺構: ビット63	1/6
8	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.0)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好 出土遺構: ビット70	1/5
9	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.4	3.5	口唇部が黒色化 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナゲ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 出土遺構: ビット70	略完形
10	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	(8.0)	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ビット78	2/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.0)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好 出土遺構: ビット85	1/2
12	土器	ロクロ かわらけ・中	11.3	6.5	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 出土遺構: ビット88	4/5
13	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.1)	8.8	3.1	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好 出土遺構: ビット88	4/5
14	陶器	瀬戸 四耳壺	(8.6)	-	現 3.0	胎土: 微砂 色調: 胎土-灰色、釉-暗灰緑色 出土遺構: ビット126	口縁部 小破片

第1面 遺構外出土遺物 (図30)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.1)	3.4	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.4	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.4	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	6.0	1.5	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/4
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	4.4	2.2	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
7	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(6.6)	3.2	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	(7.0)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
9	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	(8.7)	3.4	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
10	土器	手づくね かわらけ・小	(10.0)	-	2.0	底面-指頭ナゲ消し 内底-ナゲ 胎土: 微砂、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
11	陶器	瀬戸 柄付片口	-	-	現 5.4	胎土: 緻密 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰緑色	柄部 小破片
12	陶器	瀬戸 平碗	(15.9)	(5.5)	5.8	高台部露胎 胎土: 微砂、小石粒 色調: 胎土-黄灰色、釉-黄灰色	1/3
13	陶器	堺・明石 播鉢	-	-	現 5.3	播目条単位不明 胎土: 微砂、小石粒 色調: 明赤褐色	口縁部 小破片

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第2面 遺構外出土遺物 (図32)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	(7.0)	2.0	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/5
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.7)	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
3	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	-	1.5	底面-指頭ナゲ消し、判読不明の墨書 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/5
4	土器	手づくね かわらけ・小	(9.7)	-	1.8	底面-指頭ナゲ消し 胎土: 微砂、黒色粒、やや良土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
5	土器	手づくね かわらけ・中	(11.5)	-	-	底面-指頭ナゲ消し 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/4
6	土器	手づくね かわらけ・中	(12.2)	-	-	底面-指頭痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/4

表4 遺構計測表

( ) = 推定値、( ) = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
井戸1	第1面	240	229	247	土坑6	第1面	(112)	(78)	24	土坑18	第1面	(60)	52	15
井戸2	第1面	208	153	205	土坑7	第1面	84	-	70	土坑19	第1面	(287)	(60)	110
井戸3	第1面	(123)	(76)	(194)	土坑8	第1面	100	(75)	28	土坑20	第1面	80	-	18
砂利敷遺構1	第1面	(96)	43~53	25	土坑9	第1面	87	-	18	土坑21	第1面	(102)	(36)	32
溝状遺構1a	第1面	(683)	90~108	12~20	土坑10	第1面	65	(49)	40	土坑22	第1面	(67)	(40)	8
溝状遺構1b	第1面	(683)	(63~90)	20~30	土坑11	第1面	177	(85)	68	土坑23	第1面	(78)	(40)	28
溝状遺構1c	第1面	(683)	(62~78)	8~10	土坑12	第1面	(72)	(43)	43	ビット1	第1面	(43)	(25)	20
土坑1	第1面	(93)	(74)	20	土坑13	第1面	(67)	(50)	29	ビット2	第1面	38	(27)	31
土坑2	第1面	84	(82)	22	土坑14	第1面	(83)	(50)	40	ビット3	第1面	43	35	20
土坑3	第1面	100	84	56	土坑15	第1面	(126)	(38)	24	ビット4	第1面	(39)	22	16
土坑4	第1面	62	-	27	土坑16	第1面	67	-	29	ビット5	第1面	20	-	18
土坑5	第1面	175	121	25	土坑17	第1面	66	(64)	7	ビット6	第1面	53	-	18

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ピット7	第1面	41	-	23	ピット72	第1面	17	-	20	ピット137	第1面	40	29	22
ピット8	第1面	35	<30>	33	ピット73	第1面	14	-	19	ピット138	第1面	43	<26>	23
ピット9	第1面	<44>	33	26	ピット74	第1面	46	34	35	ピット139	第1面	31	-	15
ピット10	第1面	41	-	31	ピット75	第1面	17	-	10	ピット140	第1面	46	<45>	12
ピット11	第1面	23	-	23	ピット76	第1面	48	<36>	18	ピット141	第1面	<27>	<13>	18
ピット12	第1面	58	28	18	ピット77	第1面	58	43	24	ピット142	第1面	53	<37>	27
ピット13	第1面	40	<37>	20	ピット78	第1面	41	31	21	ピット143	第1面	54	<36>	65
ピット14	第1面	21	12	19	ピット79	第1面	<47>	32	10	ピット144	第1面	27	-	10
ピット15	第1面	19	15	20	ピット80	第1面	<43>	26	18	ピット145	第1面	<30>	<19>	17
ピット16	第1面	<20>	18	33	ピット81	第1面	24	-	34	ピット146	第1面	43	-	23
ピット17	第1面	52	50	35	ピット82	第1面	43	32	16	ピット147	第1面	22	-	13
ピット18	第1面	23	17	26	ピット83	第1面	48	34	35	ピット148	第1面	<43>	<40>	54
ピット19	第1面	52	41	15	ピット84	第1面	45	31	30	土坑24	第2面	<74>	67	12
ピット20	第1面	39	-	9	ピット85	第1面	30	23	12	ピット149	第2面	26	16	10
ピット21	第1面	<33>	29	15	ピット86	第1面	23	-	13	ピット150	第2面	33	27	6
ピット22	第1面	30	26	18	ピット87	第1面	<40>	<16>	7	ピット151	第2面	26	19	20
ピット23	第1面	56	46	23	ピット88	第1面	36	<26>	30	ピット152	第2面	24	-	16
ピット24	第1面	38	<35>	14	ピット89	第1面	23	<15>	27	ピット153	第2面	14	-	7
ピット25	第1面	20	<17>	10	ピット90	第1面	23	<12>	23	ピット154	第2面	23	20	12
ピット26	第1面	21	17	-	ピット91	第1面	<22>	<14>	19	ピット155	第2面	18	-	8
ピット27	第1面	22	-	10	ピット92	第1面	25	-	26	ピット156	第2面	45	36	15
ピット28	第1面	50	38	11	ピット93	第1面	28	-	27	ピット157	第2面	28	21	14
ピット29	第1面	39	37	51	ピット94	第1面	<35>	<19>	21	ピット158	第2面	25	15	12
ピット30	第1面	50	38	10	ピット95	第1面	30	17	39	ピット159	第2面	30	-	20
ピット31	第1面	38	35	11	ピット96	第1面	22	<8>	18	ピット160	第2面	21	13	8
ピット32	第1面	44	39	34	ピット97	第1面	20	18	19	ピット161	第2面	29	22	13
ピット33	第1面	50	33	14	ピット98	第1面	31	24	27	ピット162	第2面	18	-	14
ピット34	第1面	31	-	13	ピット99	第1面	35	30	9	ピット163	第2面	<23>	22	12
ピット35	第1面	43	30	12	ピット100	第1面	17	-	11	ピット164	第2面	53	48	8
ピット36	第1面	46	-	10	ピット101	第1面	28	-	7	ピット165	第2面	22	<12>	10
ピット37	第1面	38	26	18	ピット102	第1面	19	<9>	7	ピット166	第2面	25	-	5
ピット38	第1面	47	36	9	ピット103	第1面	25	21	12	ピット167	第2面	18	-	-
ピット39	第1面	54	46	6	ピット104	第1面	11	9	6	ピット168	第2面	33	19	5
ピット40	第1面	18	-	14	ピット105	第1面	<45>	<31>	39	ピット169	第2面	23	17	10
ピット41	第1面	<29>	22	20	ピット106	第1面	36	32	30	ピット170	第2面	40	35	48
ピット42	第1面	36	-	13	ピット107	第1面	26	23	8	ピット171	第2面	<37>	26	10
ピット43	第1面	25	-	16	ピット108	第1面	22	-	21	ピット172	第2面	32	-	13
ピット44	第1面	33	-	30	ピット109	第1面	33	29	11	ピット173	第2面	<26>	23	6
ピット45	第1面	39	26	18	ピット110	第1面	43	-	44	ピット174	第2面	57	-	10
ピット46	第1面	56	-	35	ピット111	第1面	26	<11>	6	ピット175	第2面	19	-	5
ピット47	第1面	43	-	27	ピット112	第1面	22	-	13	ピット176	第2面	34	<24>	4
ピット48	第1面	45	37	40	ピット113	第1面	28	19	4	ピット177	第2面	30	24	14
ピット49	第1面	36	26	10	ピット114	第1面	22	-	7	ピット178	第2面	47	-	17
ピット50	第1面	47	31	13	ピット115	第1面	56	<22>	13	ピット179	第2面	37	<25>	18
ピット51	第1面	55	41	28	ピット116	第1面	54	-	60	ピット180	第2面	28	-	15
ピット52	第1面	23	<19>	12	ピット117	第1面	28	<15>	15	ピット181	第2面	44	33	8
ピット53	第1面	52	<37>	19	ピット118	第1面	48	38	23	ピット182	第2面	43	29	8
ピット54	第1面	<50>	<15>	37	ピット119	第1面	26	<20>	7	ピット183	第2面	31	21	22
ピット55	第1面	36	30	10	ピット120	第1面	28	17	32	ピット184	第2面	19	-	17
ピット56	第1面	52	-	66	ピット121	第1面	<34>	<15>	47	ピット185	第2面	35	20	12
ピット57	第1面	20	<18>	47	ピット122	第1面	29	-	23	ピット186	第2面	17	-	19
ピット58	第1面	27	-	10	ピット123	第1面	23	-	-	ピット187	第2面	12	-	8
ピット59	第1面	53	-	19	ピット124	第1面	43	-	13	ピット188	第2面	58	<33>	47
ピット60	第1面	36	<14>	62	ピット125	第1面	27	<20>	18	溝状遺構2	第3面	<438><200>	19~29	25~36
ピット61	第1面	<18>	<11>	6	ピット126	第1面	36	23	34	溝状遺構3	第3面	(318)	21~23	8~17
ピット62	第1面	26	<16>	-	ピット127	第1面	45	-	20	溝状遺構4	第3面	<89>	18	11
ピット63	第1面	56	<29>	31	ピット128	第1面	20	<19>	17	土坑25	第3面	<313>	<114>	33
ピット64	第1面	<26>	20	25	ピット129	第1面	40	<18>	18	土坑26	第3面	123	<72>	66
ピット65	第1面	48	<39>	27	ピット130	第1面	24	<15>	10	土坑27	第3面	<104>	<34>	16
ピット66	第1面	29	20	22	ピット131	第1面	43	<20>	10	土坑28	第3面	<86>	<66>	28
ピット67	第1面	15	<10>	7	ピット132	第1面	<37>	<21>	20	ピット189	第3面	<21>	<9>	17
ピット68	第1面	41	<40>	24	ピット133	第1面	<25>	<13>	23	ピット190	第3面	<43>	<12>	14
ピット69	第1面	41	<30>	31	ピット134	第1面	<47>	<26>	16	ピット191	第3面	<32>	<12>	25
ピット70	第1面	16	-	31	ピット135	第1面	47	43	61	ピット192	第3面	<22>	<19>	19
ピット71	第1面	14	-	16	ピット136	第1面	44	<33>	46					

表5 出土遺物一覧表

第1面

井戸1			溝状遺構1b			土坑14			
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】			
	白かわらけ	6		かわらけ ロクロ成形	860		かわらけ ロクロ成形	3	
	かわらけ ロクロ成形	239	【白磁】			【陶器】			
【白磁】				注口	1	常滑	甕	1	
	器種不明小破片	2		皿	1	合計		4	
【青磁】				口兀皿	1	土坑15			
龍泉窯系	器種不明小破片	4	【青白磁】			産地	器種	破片数	
【青白磁】				梅瓶	1	【かわらけ】			
	器種不明小破片	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
【陶器】			常滑	甕	7		かわらけ 手づくね成形	2	
	壺	1		片口鉢Ⅰ類	1	合計			
	碗	1	山茶碗窯	片口鉢	1	土坑16			
	皿	1	【金属製品】			産地	器種	破片数	
常滑	甕	24		釘	2	【かわらけ】			
	片口鉢Ⅱ類	3	合計			875		かわらけ ロクロ成形	2
【石製品】			溝状遺構1c				かわらけ 手づくね成形	2	
	硯	1	産地	器種	破片数	合計			
【木製品】				かわらけ ロクロ成形	317	土坑18			
	板材	3	【かわらけ】			産地	器種	破片数	
【須恵器】				かわらけ ロクロ成形	317	【かわらけ】			
	甕	2	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	3	
合計			瀬戸	瓶子	1		かわらけ 手づくね成形	1	
288			合計			318	合計		
井戸2			土坑5			土坑19			
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	121		かわらけ ロクロ成形	6		白かわらけ	1	
	かわらけ 手づくね成形	5	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	24	
【青磁】			常滑	甕	2	【瓦】			
龍泉窯系	碗Ⅲ類	1		山茶碗窯	2		平瓦	1	
【陶器】			合計			10	【金属製品】		
常滑	甕	2	土坑6			産地	器種	破片数	
	片口鉢Ⅱ類	5	【かわらけ】				釘	1	
【木製品】				白かわらけ	1	合計			
	組箱	1		かわらけ ロクロ成形	1	土坑20			
	板材	5		かわらけ 手づくね成形	1	産地	器種	破片数	
【金属製品】			【青磁】				かわらけ ロクロ成形	10	
	釘	2	龍泉窯系	碗Ⅱ類	1		かわらけ 手づくね成形	2	
合計			合計			4	【石製品】		
142			土坑11			産地	器種	破片数	
井戸3			【かわらけ】				白かわらけ	1	
産地	器種	破片数		かわらけ ロクロ成形	64		かわらけ 手づくね成形	20	
【かわらけ】			【金属製品】				銭貨	1	
	かわらけ ロクロ成形	6		釘	1	合計			
	かわらけ 手づくね成形	1	土坑12			産地	器種	破片数	
合計			【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	8	
7			【陶器】			常滑	甕	1	
溝状遺構1a			【古代以前】			土坑13			
産地	器種	破片数		土師器・甕	1	産地	器種	破片数	
【かわらけ】				須恵器・器種不明小破片	1	【かわらけ】			
	白かわらけ	2	合計			11		かわらけ ロクロ成形	2
	かわらけ ロクロ成形	1,805	土坑12			産地	器種	破片数	
	かわらけ 手づくね成形	8		かわらけ ロクロ成形	8	【かわらけ】			
【白磁】			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	碗	1	【古代以前】			【青磁】			
【青磁】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
龍泉窯系	器種不明小破片	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【陶器】			合計			11	ピット7		
常滑	甕	50	土坑13			産地	器種	破片数	
	片口鉢Ⅰ類	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
【瓦】			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	丸瓦	1	【古代以前】			【青磁】			
	平瓦	1		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
【石製品】				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	砥石	1	合計			11	土坑23		
【金属製品】			土坑13			産地	器種	破片数	
	銭貨	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	1	
	釘	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
合計			【古代以前】			【青磁】			
1,873				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
溝状遺構1a				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【かわらけ】			合計			11	ピット7		
【陶器】			土坑13			産地	器種	破片数	
	碗	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
龍泉窯系	器種不明小破片	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
【陶器】			【古代以前】			【青磁】			
常滑	甕	50		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	片口鉢Ⅰ類	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【瓦】			合計			11	ピット7		
	丸瓦	1	土坑13			産地	器種	破片数	
	平瓦	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
【石製品】			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	砥石	1	【古代以前】			【青磁】			
【金属製品】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	銭貨	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	釘	1	合計			11	ピット7		
合計			土坑13			産地	器種	破片数	
1,873			【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
溝状遺構1a			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
【かわらけ】			【古代以前】			【青磁】			
	白かわらけ	2		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	かわらけ ロクロ成形	1,805		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	かわらけ 手づくね成形	8	合計			11	ピット7		
【白磁】			土坑13			産地	器種	破片数	
	碗	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
【青磁】			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
龍泉窯系	器種不明小破片	1	【古代以前】			【青磁】			
【陶器】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
常滑	甕	50		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	片口鉢Ⅰ類	1	合計			11	ピット7		
【瓦】			土坑13			産地	器種	破片数	
	丸瓦	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	平瓦	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
【石製品】			【古代以前】			【青磁】			
	砥石	1		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
【金属製品】				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	銭貨	1	合計			11	ピット7		
	釘	1	土坑13			産地	器種	破片数	
合計			【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
1,873			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
溝状遺構1a			【古代以前】			【青磁】			
【かわらけ】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	白かわらけ	2		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	かわらけ ロクロ成形	1,805	合計			11	ピット7		
	かわらけ 手づくね成形	8	土坑13			産地	器種	破片数	
【白磁】			【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	碗	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
【青磁】			【古代以前】			【青磁】			
龍泉窯系	器種不明小破片	1		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
【陶器】				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
常滑	甕	50	合計			11	ピット7		
	片口鉢Ⅰ類	1	土坑13			産地	器種	破片数	
【瓦】			【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	丸瓦	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	平瓦	1	【古代以前】			【青磁】			
【石製品】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	砥石	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【金属製品】			合計			11	ピット7		
	銭貨	1	土坑13			産地	器種	破片数	
	釘	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
合計			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
1,873			【古代以前】			【青磁】			
溝状遺構1a				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
【かわらけ】				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	白かわらけ	2	合計			11	ピット7		
	かわらけ ロクロ成形	1,805	土坑13			産地	器種	破片数	
	かわらけ 手づくね成形	8	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
【白磁】			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	碗	1	【古代以前】			【青磁】			
【青磁】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
龍泉窯系	器種不明小破片	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【陶器】			合計			11	ピット7		
常滑	甕	50	土坑13			産地	器種	破片数	
	片口鉢Ⅰ類	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
【瓦】			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	丸瓦	1	【古代以前】			【青磁】			
	平瓦	1		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
【石製品】				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	砥石	1	合計			11	ピット7		
【金属製品】			土坑13			産地	器種	破片数	
	銭貨	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	釘	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
合計			【古代以前】			【青磁】			
1,873				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
溝状遺構1a				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【かわらけ】			合計			11	ピット7		
	白かわらけ	2	土坑13			産地	器種	破片数	
	かわらけ ロクロ成形	1,805	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	かわらけ 手づくね成形	8	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
【白磁】			【古代以前】			【青磁】			
	碗	1		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
【青磁】				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
龍泉窯系	器種不明小破片	1	合計			11	ピット7		
【陶器】			土坑13			産地	器種	破片数	
常滑	甕	50	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	片口鉢Ⅰ類	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
【瓦】			【古代以前】			【青磁】			
	丸瓦	1		土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	平瓦	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【石製品】			合計			11	ピット7		
	砥石	1	土坑13			産地	器種	破片数	
【金属製品】			【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	銭貨	1	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	釘	1	【古代以前】			【青磁】			
合計				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
1,873				須恵器・器種不明小破片	1	合計			
溝状遺構1a			合計			11	ピット7		
【かわらけ】			土坑13			産地	器種	破片数	
	白かわらけ	2	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
	かわらけ ロクロ成形	1,805	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	かわらけ 手づくね成形	8	【古代以前】			【青磁】			
【白磁】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	碗	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
【青磁】			合計			11	ピット7		
龍泉窯系	器種不明小破片	1	土坑13			産地	器種	破片数	
【陶器】			【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
常滑	甕	50	【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	片口鉢Ⅰ類	1	【古代以前】			【青磁】			
【瓦】				土師器・甕	1	龍泉窯系	坏Ⅱ類	1	
	丸瓦	1		須恵器・器種不明小破片	1	合計			
	平瓦	1	合計			11	ピット7		
【石製品】			土坑13			産地	器種	破片数	
	砥石	1	【かわらけ】				かわらけ ロクロ成形	2	
【金属製品】			【陶器】				かわらけ ロクロ成形	1	
	銭貨	1	【古代以前】						



ビット14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
		合計
		1

ビット22		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
かわらけ	手づくね成形	1
		合計
		3

ビット23		
産地	器種	破片数
【陶器】		
山茶碗窯	片口鉢	2
【鉄製品】		
	釘	1
		合計
		3

ビット26		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
		合計
		4

ビット27		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	6
		合計
		6

ビット35		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
		合計
		3

ビット41		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
		合計
		1

ビット42		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	4
かわらけ	手づくね成形	1
		合計
		5

ビット45		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
		合計
		3

ビット46		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
かわらけ	手づくね成形	1
		合計
		4

ビット47		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	9
かわらけ	手づくね成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計
		15

ビット48		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	16
かわらけ	手づくね成形	1
		合計
		17

ビット51		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	10
かわらけ	手づくね成形	1
		合計
		11

ビット54		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計
		3

ビット55		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
		合計
		1

ビット56		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	7
かわらけ	手づくね成形	8
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計
		16

ビット58		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
		合計
		2

ビット59		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
		合計
		2

ビット60		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
		合計
		1

ビット63		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ		1
かわらけ	ロクロ成形	20
かわらけ	手づくね成形	4
【金属製品】		
	釘	1
【古代以前】		
	須恵器・器種不明小破片	1
		合計
		27

ビット68		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	6
		合計
		6

ビット69		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		

かわらけ	ロクロ成形	1
		合計
		1

ビット70		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	4
		合計
		4

ビット72		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	4
		合計
		4

ビット78		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	4
		合計
		4

ビット80		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【石製品】		
	砥石	1
		合計
		2

ビット84		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
		合計
		8

ビット85		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
		合計
		1

ビット88		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
		合計
		2

ビット92		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
		合計
		3

ビット106		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
		合計
		1

ビット116		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
		合計
		3

ビット126		
産地	器種	破片数
【陶器】		
瀬戸	四耳壺	1
		合計
		1

第1面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ		3
かわらけ	ロクロ成形	736
かわらけ	手づくね成形	27

【白磁】		
器種不明小破片		1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅲ類	1
	皿Ⅱ類	2
	坏	2
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
瀬戸	瓶子	1
	平碗	2
	碗	1
	柄付片口	1
常滑	甕	20
	片口鉢Ⅱ類	4
山茶碗窯	皿	1
	器種不明小破片	2
堺・明石	播鉢	1
京・信楽	丸碗	2
【金属製品】		
	釘	8
【古代以前】		
	土師器・器種不明小破片	1
	須恵器・器種不明小破片	1
【その他】		
	漆喰	1
	合計	819

第2面

土坑24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
	合計	3
ピット182		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
	合計	4
ピット188		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
	合計	3

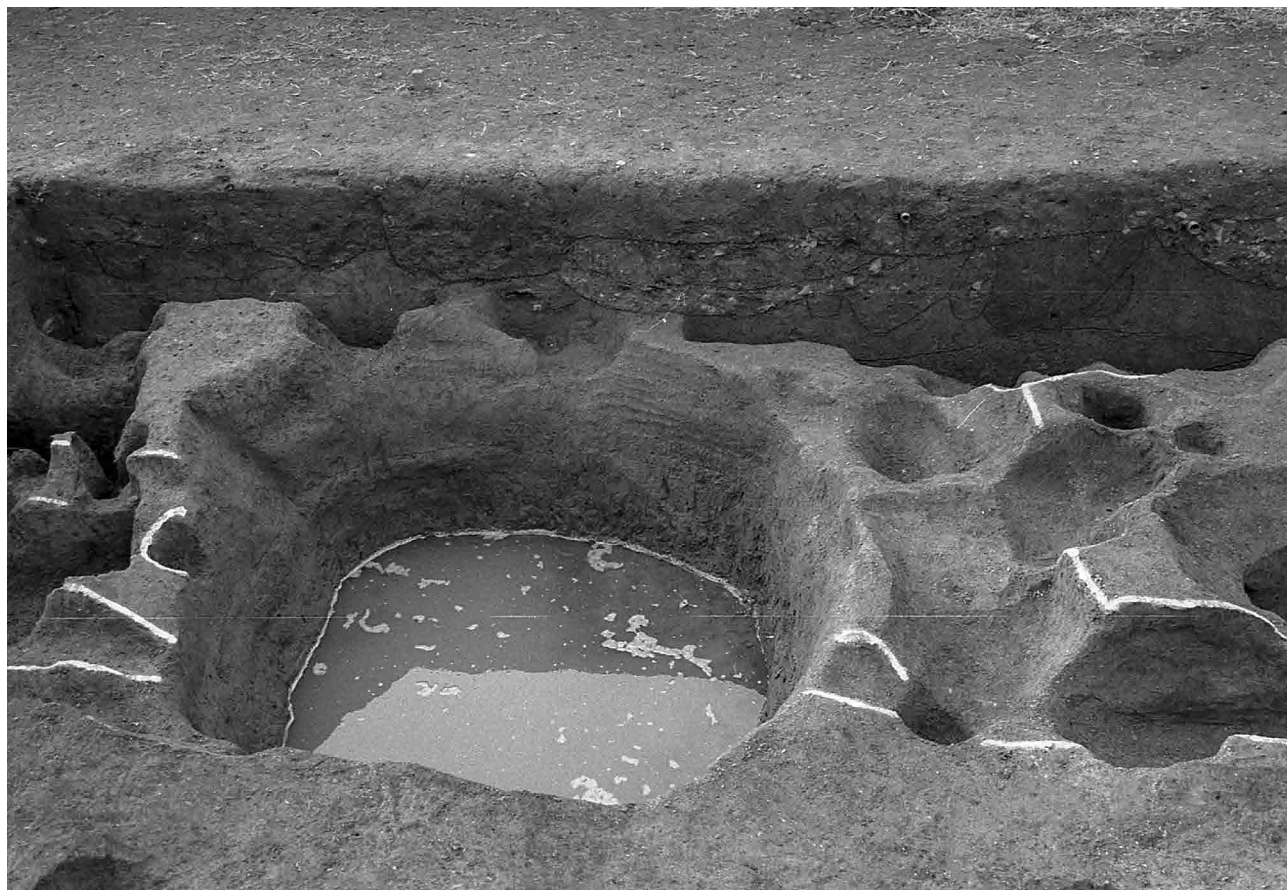
第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ	1
	かわらけ ロクロ成形	96
	かわらけ 手づくね成形	56
【陶器】		
常滑	甕	2
【瓦】		
	平瓦	1
	合計	156

第3面

溝状遺構2		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	甕か壺	4
	高坏	1
	合計	5



1. 調査区西壁北側土層断面(南東から)



2. 調査区西壁南側土層断面(南東から)



図版 2



1. I区 第1面全景(南西から)



2. I区 第1面全景(北東から)

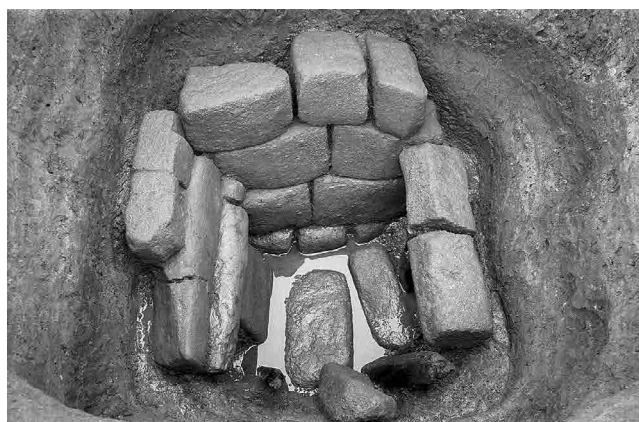


3. II区 第1面全景(北西から)





1. 第1面 井戸1石組出土状態・砂利敷遺構1 (南西から)



2. 第1面 井戸1石組出土状態 (南東から)



3. 第1面 井戸1石組出土状態 (東から)



4. 第1面 井戸1石組出土状態 (南から)



5. 第1面 井戸1掘り方 (北西から)



図版 4



1. 第1面 井戸2 (南東から)

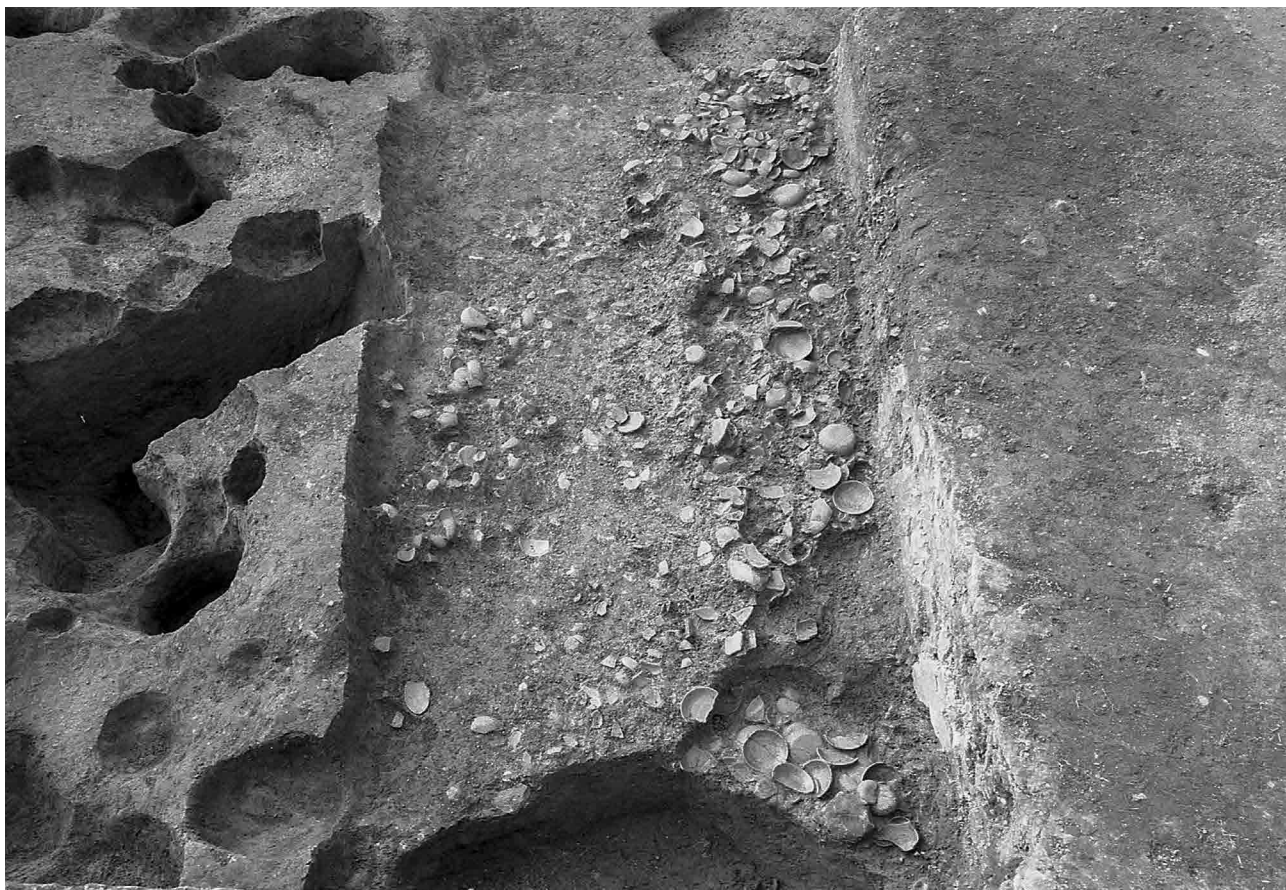


2. 第1面 井戸2組箱出土状態 (南西から)



3. 第1面 井戸3 (南東から)

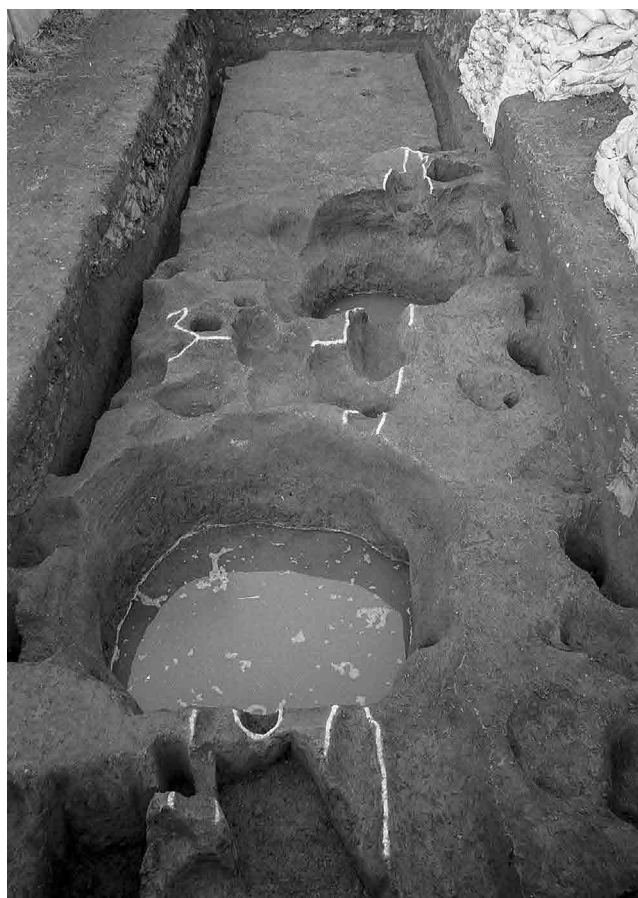




1. 第1面 溝状遺構 1 b・1 c 遺物出土状態(南東から)



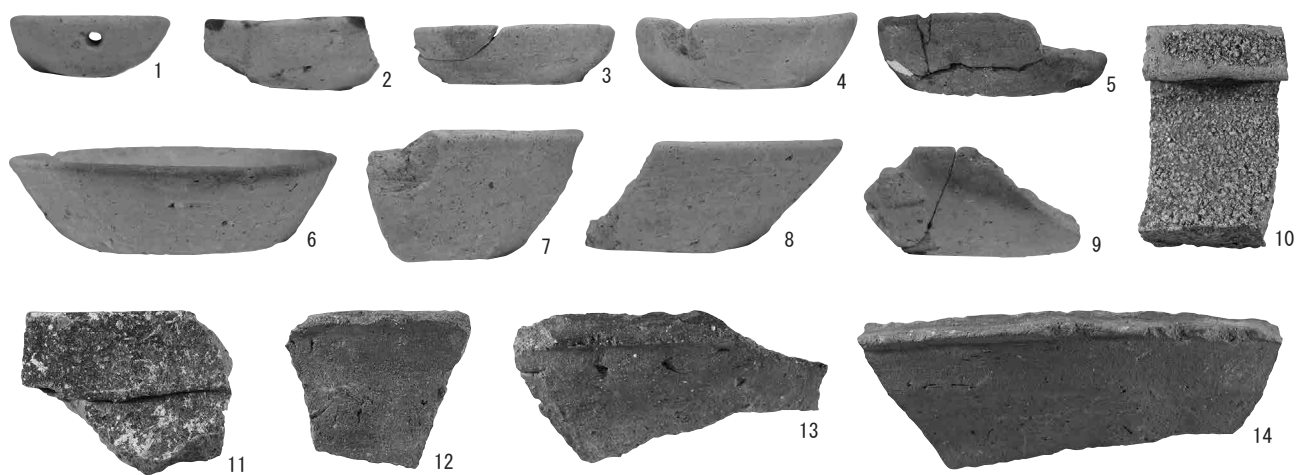
2. I区 第2面全景(北東から)



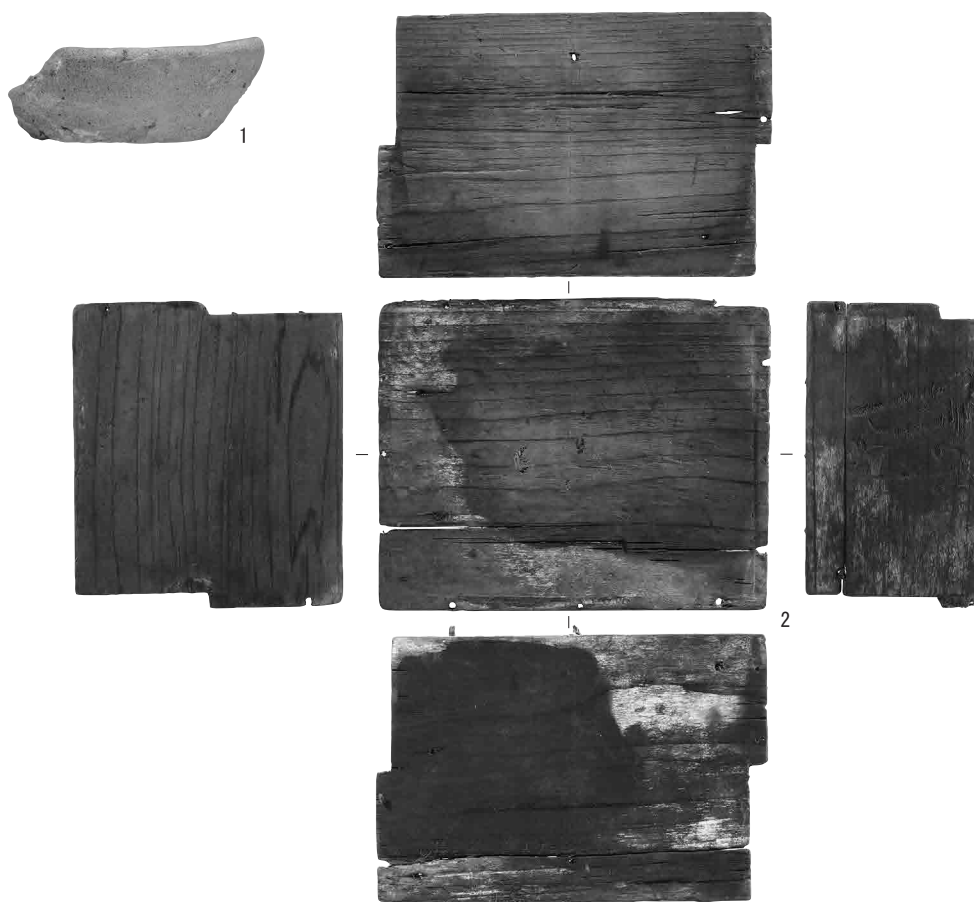
3. I区 第3面全景(南西から)



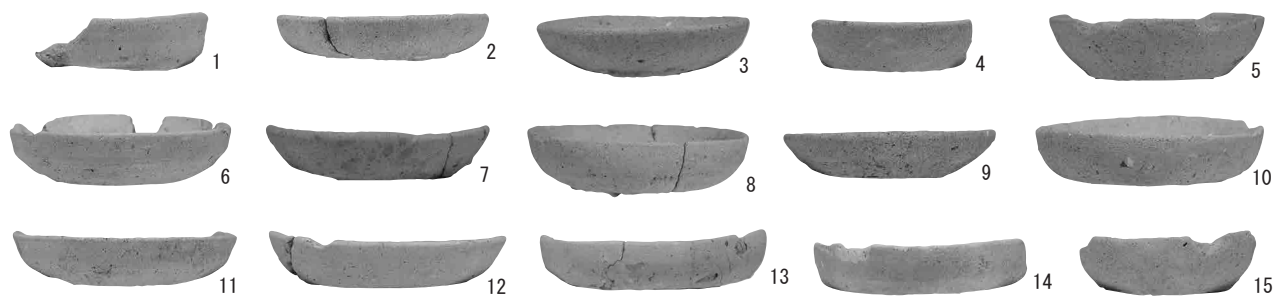
図版 6



1. 第1面 井戸1出土遺物

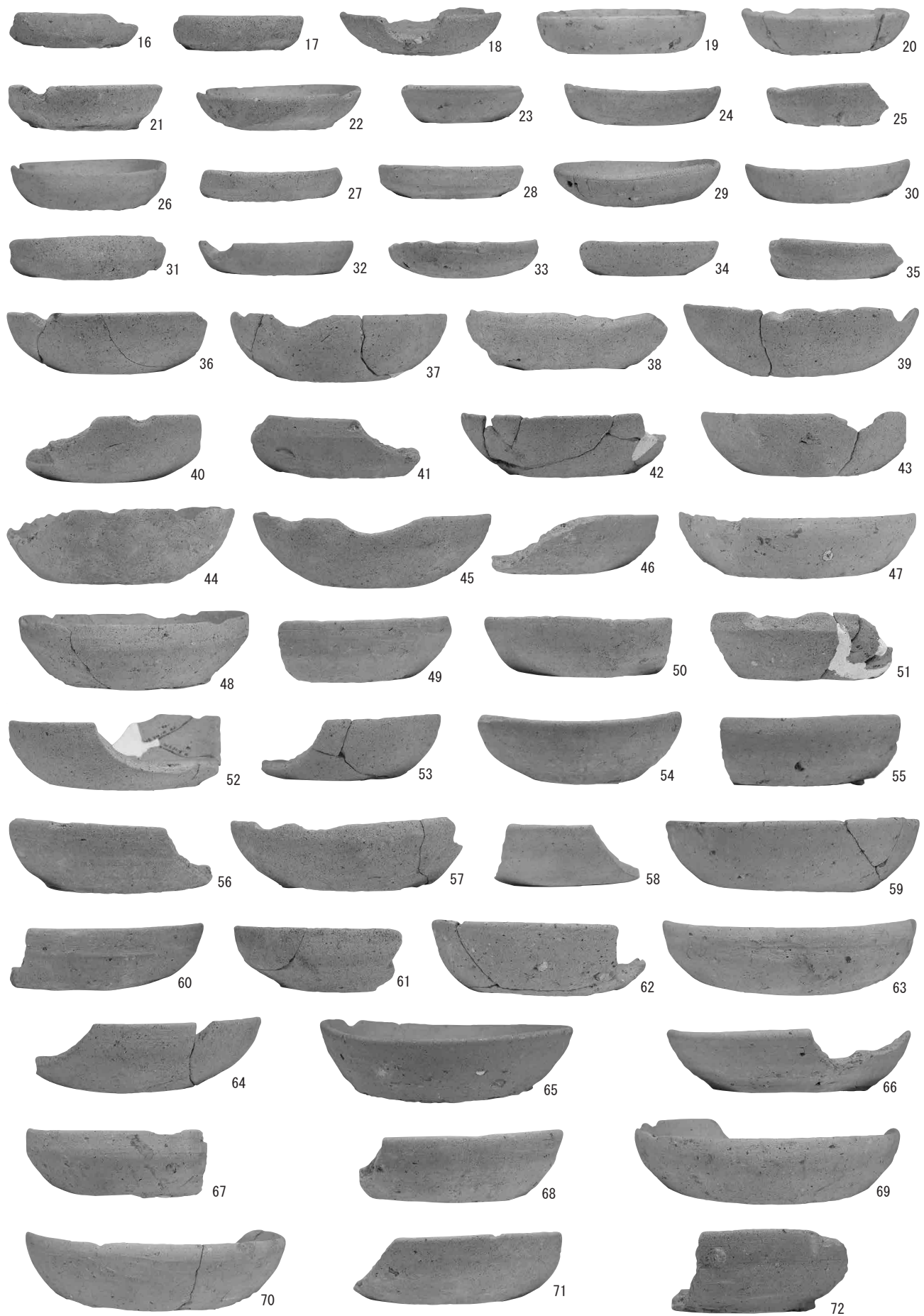


2. 第1面 井戸2出土遺物



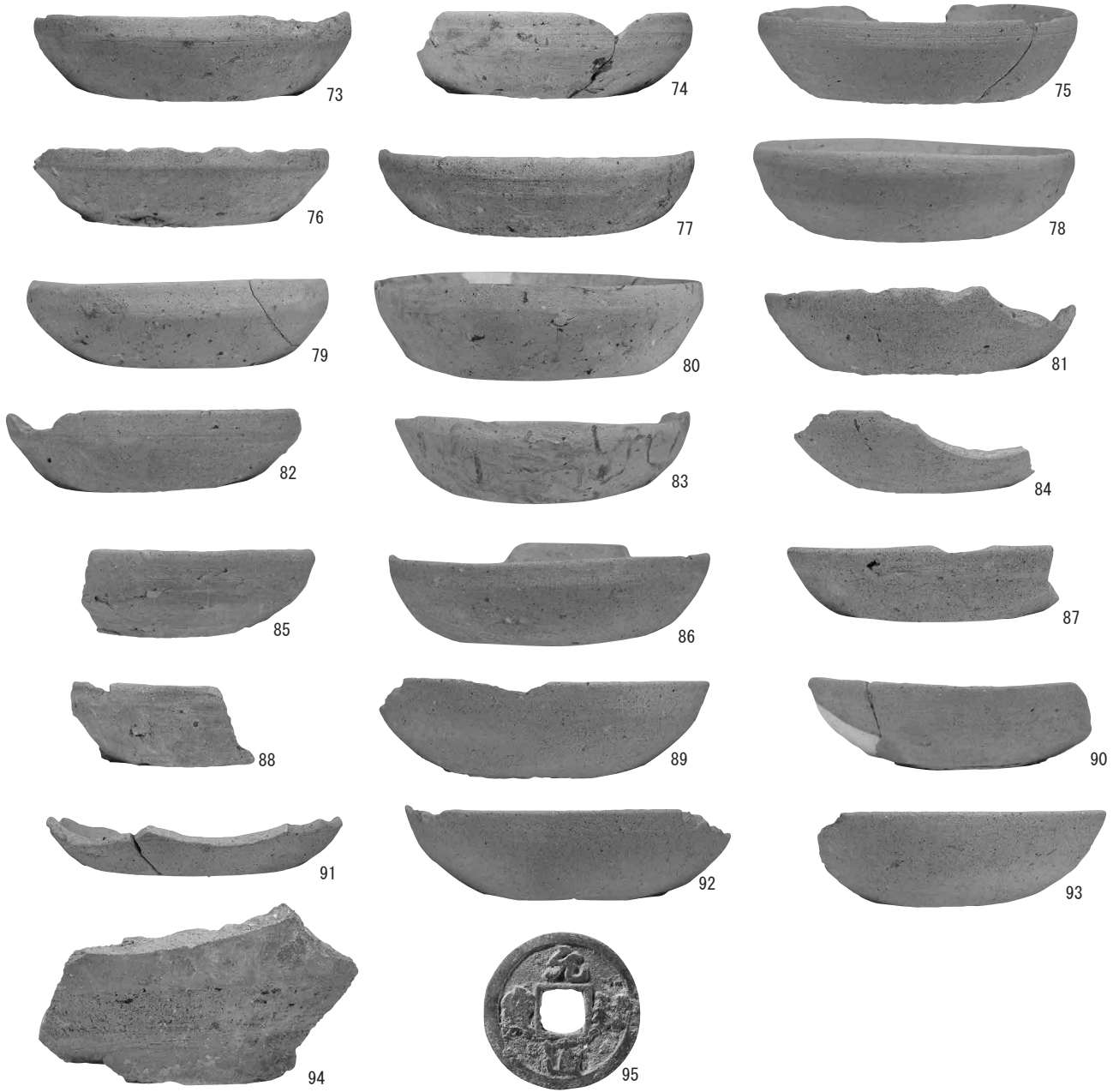
3. 第1面 溝状遺構1a出土遺物(1)



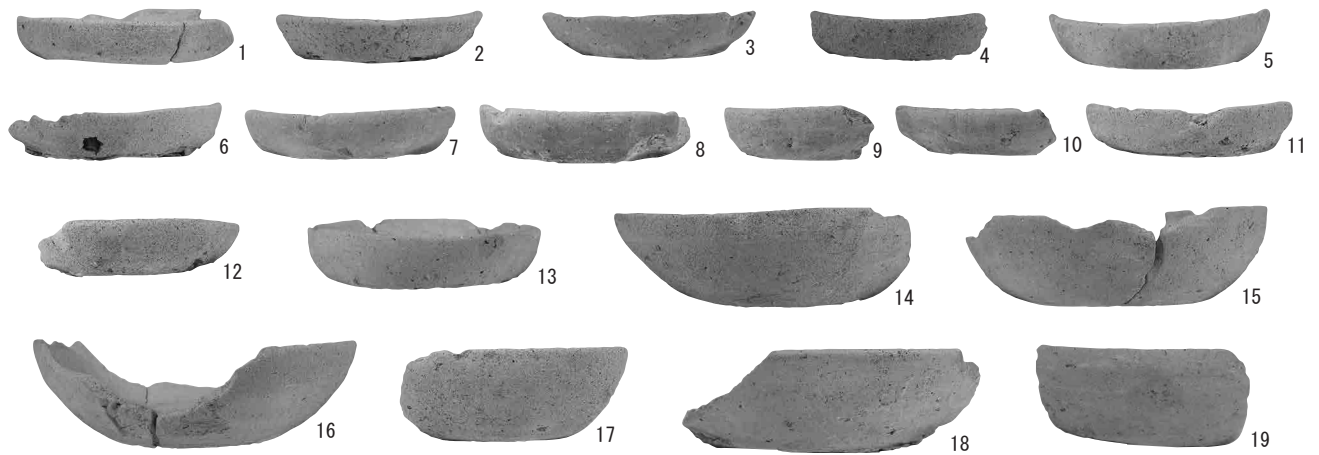


1. 第1面 溝状遺構 1 a 出土遺物 (2)

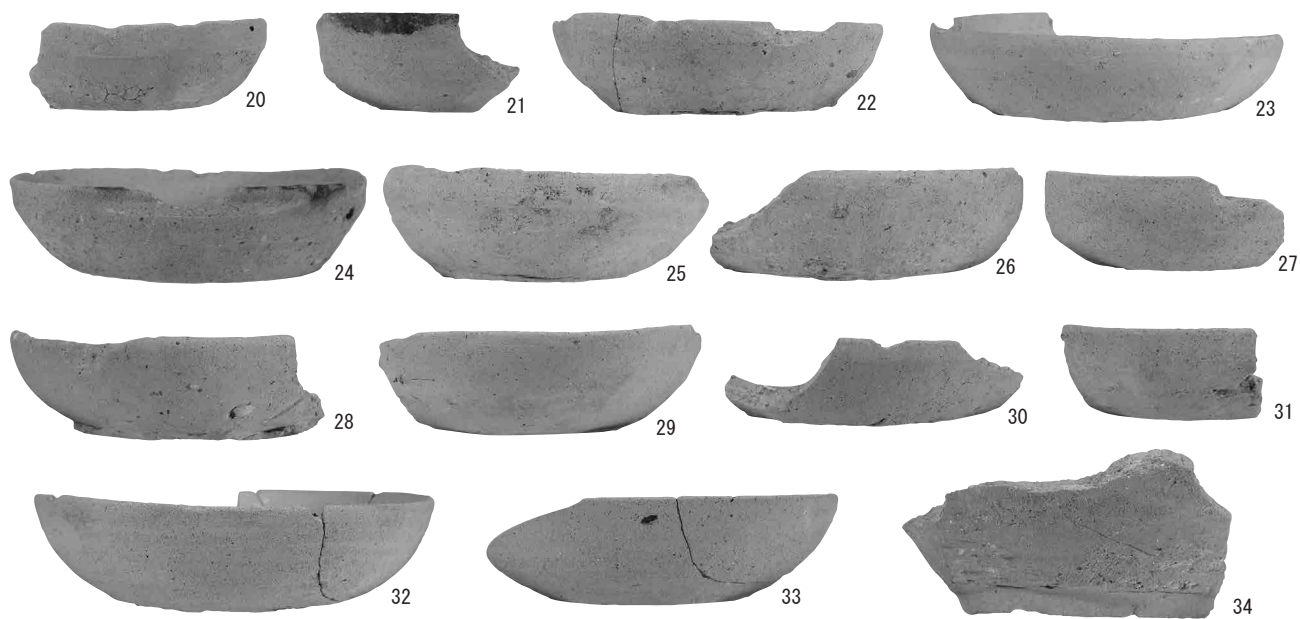
图版 8



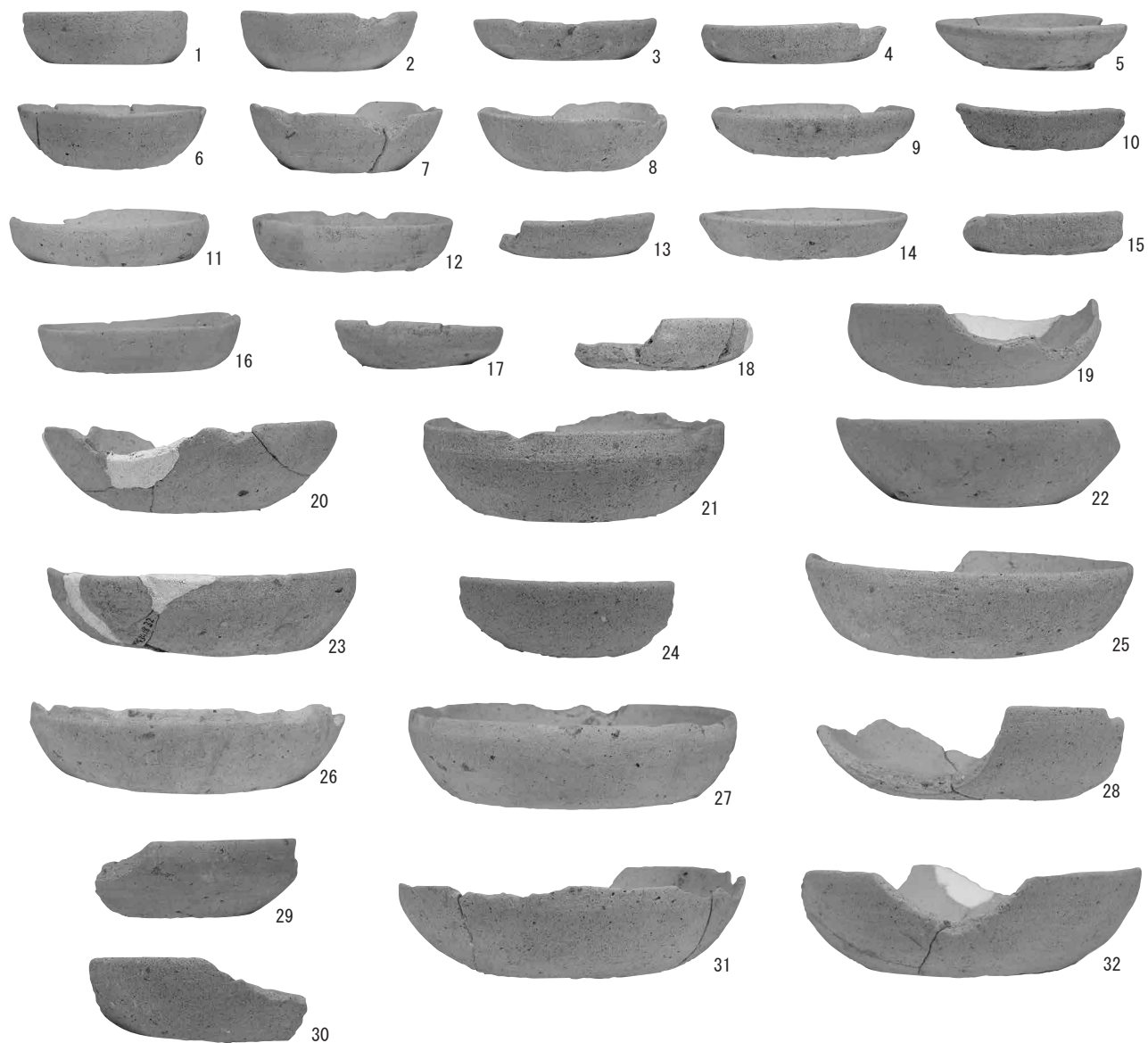
1. 第1面 溝状遺構 1 a 出土遺物 (3)



2. 第1面 溝状遺構 1 b 出土遺物 (1)



1. 第1面 溝状遺構1 b 出土遺物 (2)



2. 第1面 溝状遺構1 c 出土遺物



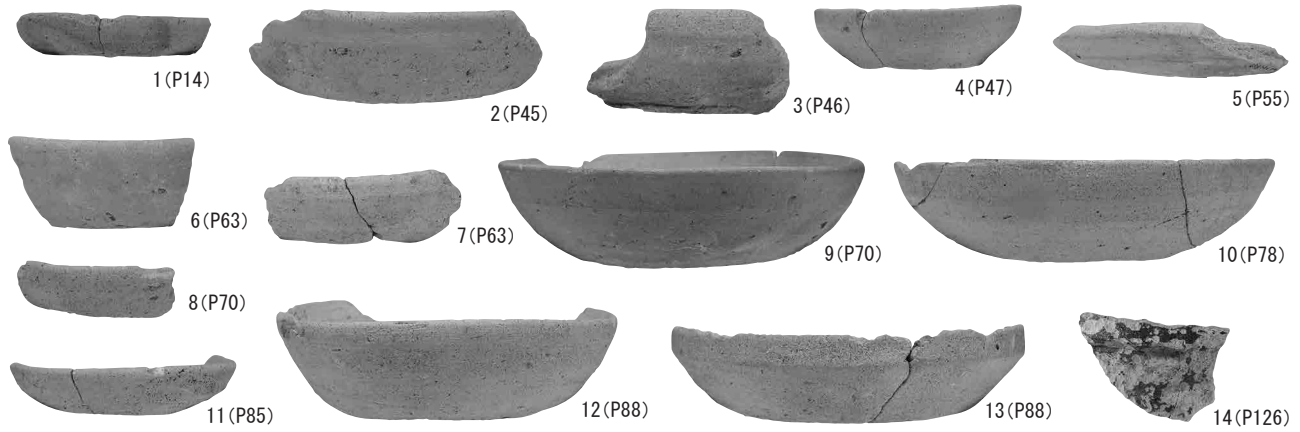
図版 10



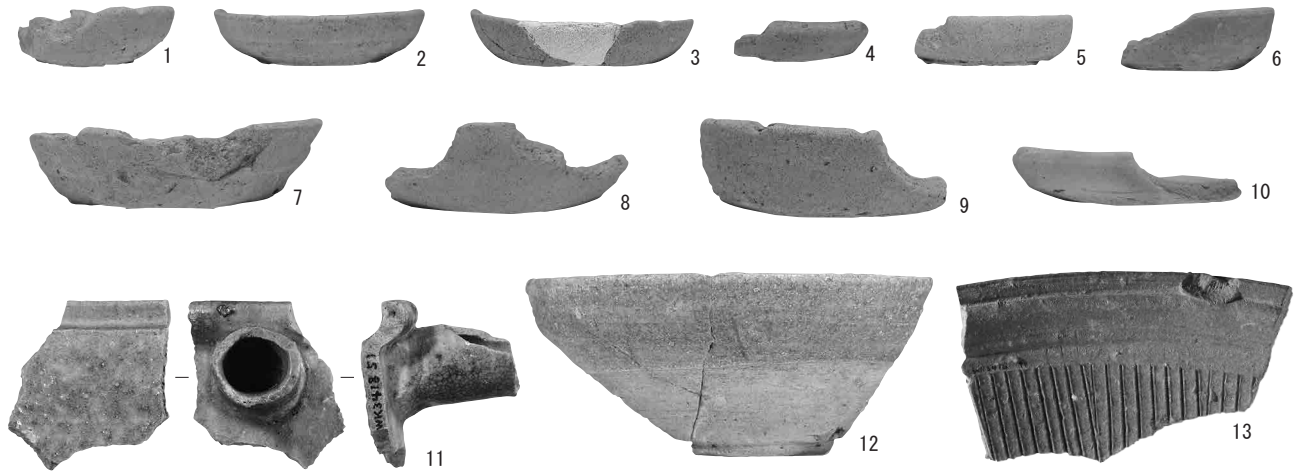
土坑11



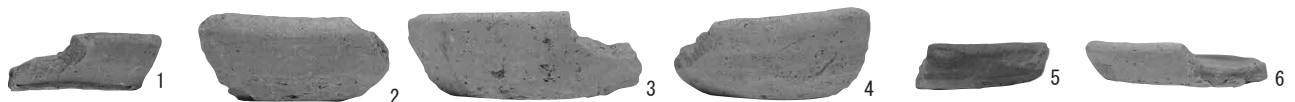
1. 第1面 土坑出土遺物



2. 第1面 ビット出土遺物



3. 第1面 遺構外出土遺物



4. 第2面 遺構外出土遺物




积迦堂遺跡 (No.257)

浄明寺一丁目598番21地点

## 例 言

1. 本報は「釈迦堂遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.257）内、鎌倉市浄明寺一丁目598番21地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成21年1月9日～同年2月6日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約17㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者	長澤保崇
調査員	田畑衣理
作業員	清水政利・宝珠山秀雄・鯉沼 稔・鈴木啓之・平尾 幹

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を長澤保崇、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系AREA 9）を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「SHM」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。
  - ・  煤およびタール状の黒色物が付着している部分
  - ・ 石製品の矢印は磨面範囲を示す。
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介（玉川文化財研究所）
13. 報告書作成にあたっては、伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。

## 目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	225
第1節 調査に至る経緯と経過	225
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	225
第3節 周辺の考古学的調査	226
第二章 堆積土層	231
第三章 発見された遺構と遺物	232
第1節 第1面の遺構と遺物	232
第2節 第2面の遺構と遺物	233
第3節 第3面の遺構と遺物	237
第四章 まとめ	238

## 挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	227	図7 第1面 遺構外出土遺物	233
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	228	図8 第2・3面 遺構分布図	234
図3 調査区位置図	230	図9 第2面 土坑1 出土遺物	235
図4 調査区配置図	230	図10 第2面 不明遺構1 出土遺物	236
図5 調査区土層断面図	231	図11 第2面 遺構外出土遺物(1)	236
図6 第1面 遺構分布図	233	図12 第2面 遺構外出土遺物(2)	237

## 表 目 次

表1 釈迦堂遺跡 調査地点および周辺の遺跡 一覽	229	表3 第2面 出土遺物観察表	240
表2 第1面 出土遺物観察表	240	表4 遺構計測表	241
		表5 出土遺物一覽表	242

## 図版目次

図版 1	1. 調査区北壁土層断面 (南西から)…………… 243	2. 第 3 面 溝状遺構 1 (西から)…………… 245
	2. 調査区南壁土層断面 (北から) …… 243	図版 4
図版 2	1. 第 1 面全景 (北西から) …… 244	1. 第 1 面 遺構外出土遺物 …… 246
	2. 第 1 面 石列 1 (東から)…………… 244	2. 第 2 面 土坑 1 出土遺物 …… 246
図版 3	1. 第 2 面全景 (南東から) …… 245	3. 第 2 面 不明遺構 1 出土遺物 (1) …… 246
		図版 5
		1. 第 2 面 不明遺構 1 出土遺物 (2) …… 247
		2. 第 2 面 遺構外出土遺物 …… 247



# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市浄明寺一丁目598番21地点で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である釈迦堂遺跡（神奈川県遺跡台帳No.257）の範囲内にあたる。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成20年9月5日に4㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が開発予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約17㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、長澤保崇が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成21年1月9日～同年2月6日までの1ヵ月ほどで、調査面積は約17㎡である。現地表の標高は約20mを測る。調査はまず重機により約50cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げた。標高約19.3mのところでは中世に属する第1面の遺構を検出し、調査および図面・写真等の記録作業を行ったのちにさらに掘り下げると、調査区全体に広がる大形の性格不明遺構を検出した。遺構の深度を確認するために、遺構の東寄りの位置に幅25cmほどのサブトレンチを南北方向に設定して約40cm掘り下げたが、遺構の底面を確認することができなかった。安全対策上、この不明遺構を全面的に掘り下げて調査することが困難であると判断されたため、調査区の中央に再度サブトレンチを設定し、土層の堆積状態や遺構深度の確認を行うこととした。その結果、遺構深度は約2.7mにも及び、底面からは中世と考えられる遺構が検出された。そして2月6日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては、日本測地系（座標系AREA 9）に準じた、鎌倉市四級基準点（X = -75812.665、Y = -24166.168）、（X = -75847.689、Y = -24188.461）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53209（標高12.109m）を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

釈迦堂遺跡（No.257）は、鎌倉市街地中心部の南東側丘陵地内に所在している。本遺跡の北側には、鎌倉市十二所の朝比奈峠付近を源流とする滑川が蛇行を繰り返しながら西流し、鎌倉の市街地を抜けて相模湾に注ぐ。この本流に合流するのが本遺跡内の谷戸部を南から北に向けて貫流する釈迦堂川である。この流域に沿って形成された谷戸部が「釈迦堂ヶ谷」と呼ばれる開析谷である。「釈迦堂遺跡」は、この谷戸を中心に両側の丘陵稜線までを含む範囲が遺跡の包蔵地範囲とされている。

釈迦堂ヶ谷の規模は、開口部から谷戸の最奥部までは約350m、幅は開口部付近で約60mと狭いが、谷あい150mほど進むと谷幅は幾分広くなり、谷戸の中央で二股に分かれている。谷戸の標高は、開口部付近で16m前後、開口部から60mほど進んだ本調査地点周辺で約20m、谷幅がやや広がった中程で約23m、谷戸が二股に分かれる付近で26m前後、谷戸の両奥部で30～35mを測る。開口部付近と両奥部付近とではおおよそ20mほどの標高差があるが、谷戸の中程まではあまり感じられない。

本調査地点は、釈迦堂川の右岸域にあたり、川までの距離は15mほどである。調査地点はほぼ平坦であるが、東岸の丘陵斜面は急激に立ち上がっている。東岸の丘陵稜線との比高は22~23mを有する。

本遺跡は鎌倉市浄明寺一丁目地内に所在し、本調査地点の地番は浄明寺一丁目598番21である。なお、本書所収の浄明寺一丁目598番35地点は、本地点の北東側12mほどに所在している。

本遺跡の周辺を取りまく滑川左岸域の丘陵部には、大小の谷戸が樹枝状に開析されており、遺跡の東側には犬懸ヶ谷や宅間ヶ谷などの谷戸が続く。本遺跡は第三代執権北条泰時が、父義時の菩提を弔うために釈迦堂を建てたことに由来し、東隣の犬懸ヶ谷は犬懸上杉管領屋敷(上杉朝宗・氏憲邸)があった谷戸の推定地とされている。また、宅間ヶ谷は谷戸全域が現報国寺の寺域となっていた時代もあり、寛政3(1791)年に作成された報国寺境内絵図には、境内の伽藍配置に塔頭などが詳細に描かれている。鎌倉・室町期を通じて歴史上の表舞台に関わった地域でもあった。

一方、西側には大御堂ヶ谷や葛西ヶ谷と呼ばれる谷戸が並んでいる。大御堂ヶ谷は源頼朝が父義朝の菩提を弔うために勝長寿院を建てたことに由来し、別名大御堂、南御堂とも呼ばれ、後世いつしかこの谷戸は大御堂ヶ谷と呼ばれるようになったという。『鎌倉廃寺事典』(貫・川副 1980)や『鎌倉事典』(白井編 1976)などでは、廊の御堂、南山小御堂、南御堂、新造の東御所、弥勒堂、五仏堂、三重塔などの建物名が記され、極めて壮大な伽藍であったことがうかがえる。葛西ヶ谷は北西に開口した扇形の谷戸で、旧鎌倉市街地を望み、谷戸は大きく3つに分かれ、それぞれ階段状に平場が形成されている。葛西ヶ谷という地名の由来は、源頼朝の御家人であった葛西清重の居館があったことに起因しているが、第三代執権北条泰時が創建した東勝寺の方が広く知られ、北条得宗家の氏寺、鎌倉幕府滅亡の地としても知られている。

また、大御堂橋以東の滑川に挟まれた地域は、田楽辻子周辺遺跡(No.33)の包蔵地範囲となっている。田楽辻子の由来は、第三代執権北条泰時が父義時の菩提を弔うために建立した「釈迦堂」前に田楽師が住んでいたことからこの名がつけられたという。筋替橋を起点に宝戒寺裏から滑川を渡り、大御堂ヶ谷、釈迦堂ヶ谷の入口を経て、宅間ヶ谷に出て六浦道に合流する小路と考えられている。この滑川沿いには『吾妻鏡』にいう「田楽辻子」の碑があり、釈迦堂ヶ谷のほぼ北側にあたる。田楽辻子から釈迦堂ヶ谷には谷奥へ向かって道が通じており、谷奥には隧道(釈迦堂トンネル)があり大町・名越へと抜けることができる。義時の菩提を弔った釈迦堂は谷のどこにあったのか、その場所としては、谷戸中央の二股に分かれた南西側、北条時政邸へ抜ける隧道の西側付近の谷戸内にあてられているが、未だ特定できていない。

### 第3節 周辺の考古学的調査

本遺跡の所在する釈迦堂ヶ谷は、滑川南岸の北に向かって開口する谷戸であり、この谷戸の並びには東側に犬懸ヶ谷や宅間ヶ谷、西側には大御堂ヶ谷や葛西ヶ谷などの谷戸が知られており、谷戸の由来や伝承などについて前節で触れたとおりである。また、谷戸の入口付近には滑川の南側に沿って各谷戸を結ぶように東西に延びる小路があるが、これは中世から続いていた「田楽辻子」ともいわれている。さらに滑川を隔てた北側には東西に走る大町大路/旧六浦路(県道金沢鎌倉線)が通り、この道路に面して釈迦堂ヶ谷のほぼ対岸辺りには鎌倉以前から存在していたといわれる杉本寺や、そこから広がる裏山一帯は杉本城跡(No.62)といわれ、山頂付近には古井戸や曲輪、堀切などの遺構が知られている。

本遺跡については「釈迦堂」がいつごろ廃絶したかもわかってないが、『新編相模国風土記稿』には釈迦堂の本尊について「此本尊ハ今杉本観音堂ニ置ケリ」と記されており、江戸時代には釈迦堂の本尊と





図1 遺跡位置図





※矢印は本調査地点、丸数字は表1の番号に対応する。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



伝えられた像が杉本寺に安置されていたことが知られる。この像が釈迦堂の本尊であったかどうかは知る由もないが、本遺跡を考える一つの手がかりともいえる。

谷戸内における発掘調査事例は、本調査地点を含めて6例(◀、①～⑤)である。以下では谷戸内の遺跡を中心に紹介し、近隣の遺跡についても若干示しておきたい。

釈迦堂ヶ谷の内部は、谷戸の中央を流れる釈迦堂川を挟んで東西に小支谷がいくつかあるが、西側の開口部に近い小支谷の上段部分で最初の発掘調査が行われている。④の浄明寺字釈迦堂642番地点(松尾1983)の調査である。概要のみで詳細は不明であるが、2回の調査によって岩盤上に建てられた掘立柱建物とそれに伴う据甕施設やピットなどが検出され、谷戸内の武家屋敷の一部と考えられている。④地点の南側に隣接した⑤の浄明寺字釈迦堂621番外地点の調査では、支谷内の平場全域を対象とした、当時としては珍しく、また平地でしか検出できなかった方形竪穴状遺構の発見が注目された。この他に礎石列や柱穴列、井戸、溝、土坑、道路などの遺構も検出された。また、平場から尾根に続く調査では火葬骨を納めた常滑壺が道路遺構の脇から検出され、尾根に続く通路や、やぐらの調査も行われている。かわらけや陶磁器などから、これら遺構の年代を14世紀中葉から15世紀初頭と推定し、この年代観は北条泰時が「釈迦堂」を建てた年代とは隔たりがあるため、報文では釈迦堂との関係はないとしている。また、遺跡の造営者については経済力をもった有力者の存在を示唆している。

釈迦堂ヶ谷を囲む丘陵の尾根を中心にやぐら群が点在している。図2内では⑥釈迦堂東やぐら群(No.157)や釈迦堂奥やぐら群(No.80)、衣張山やぐら群(No.81)などがみられるが、この他にも谷戸の最奥部には釈迦堂口やぐら群(No.82)や釈迦堂トンネル上尾根やぐら群(No.83)などがある。昭和40年の宅地造成時にこのやぐら群の一部が壊され、その中から「元弘三年五月廿八日」紀年名の地輪が出土している。元弘3(1333)年は、新田義貞によって鎌倉が陥落した年であり、5月28日は東勝寺において北条高時以下北条一門が自決して果てた5月22日から数えて初七日に当たるといふ。さらにこの丘陵尾根の東側には北条時政邸の裏門跡や、その南側の谷戸一帯が北条氏の名越邸跡といわれており、釈迦堂ヶ谷を含めてこの一帯は北条氏との関係が深い地域であったといえよう。

表1 釈迦堂遺跡 調査地点および周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番21地点	
①	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目597番1地点	
②	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番35地点	
③	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目602番1外地点	
④	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺字釈迦堂 642番地点	松尾 1983
⑤	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺字釈迦堂 621番外地点	大三輪・手塚ほか 1989
⑥	釈迦堂東やぐら群(No.157)		
⑦	上杉氏憲邸跡(No.258)	浄明寺一丁目699番外地点	馬淵・岡 1995
⑧	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目652番8地点	森 2009
⑨	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺字釈迦堂 658番地点	手塚 1990
⑩	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目661番外地点	森 2000
⑪	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目676番1地点	
⑫	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目691番4地点	
⑬	杉本寺周辺遺跡群(No.158)	二階堂字杉本 912番1外地点	馬淵 2002
⑭	杉本寺周辺遺跡群(No.158)	二階堂字杉本 932番1外地点	宮田・滝澤 2007
⑮	杉本寺やぐら群(No.90)	二階堂字杉本 903番地点	田代ほか 1996
⑯	杉本寺やぐら群(No.90)	二階堂字杉本 896番地点	田代ほか 1996
⑰	杉本寺南やぐら群(No.318)	二階堂字杉本 903番地点	田代ほか 1988

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

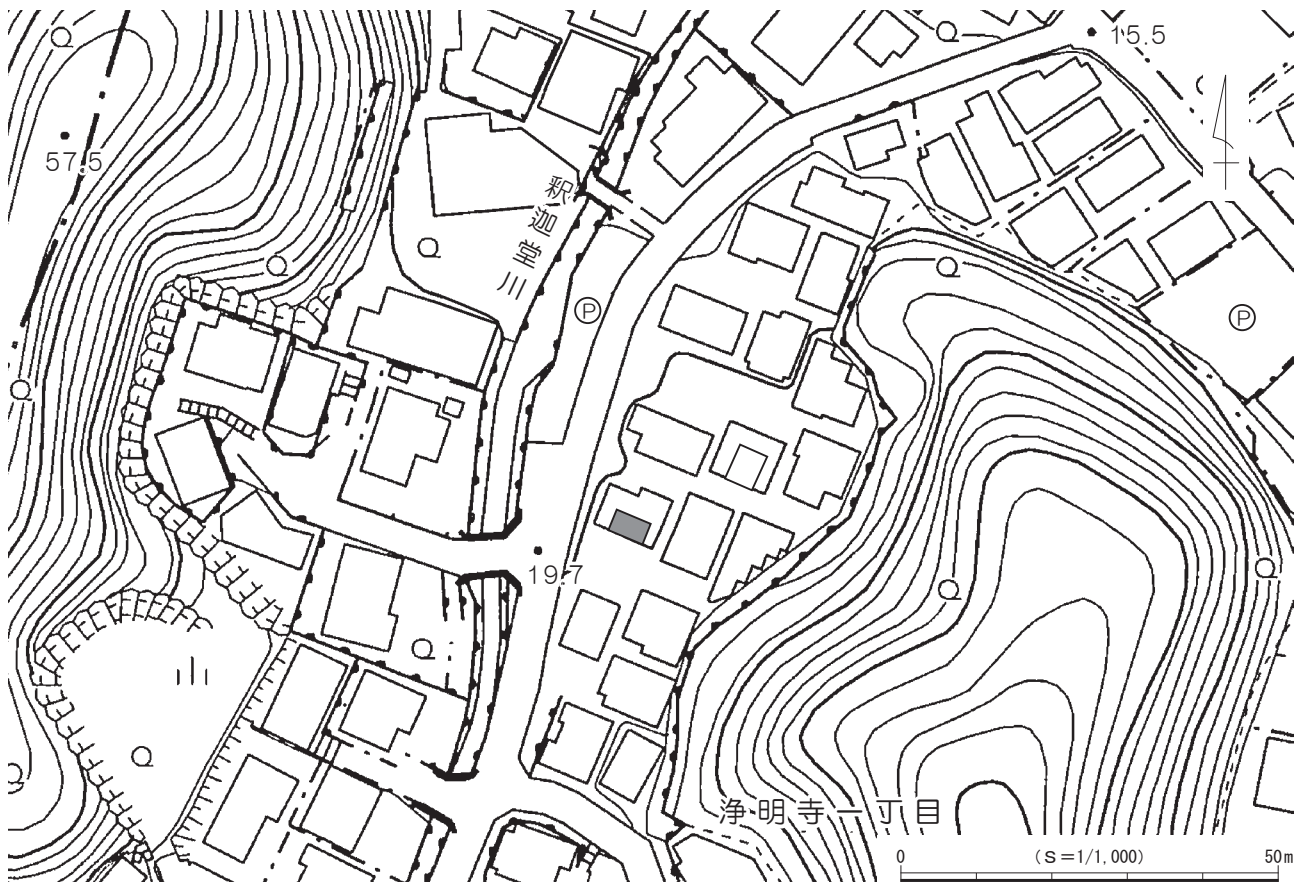


図3 調査区位置図

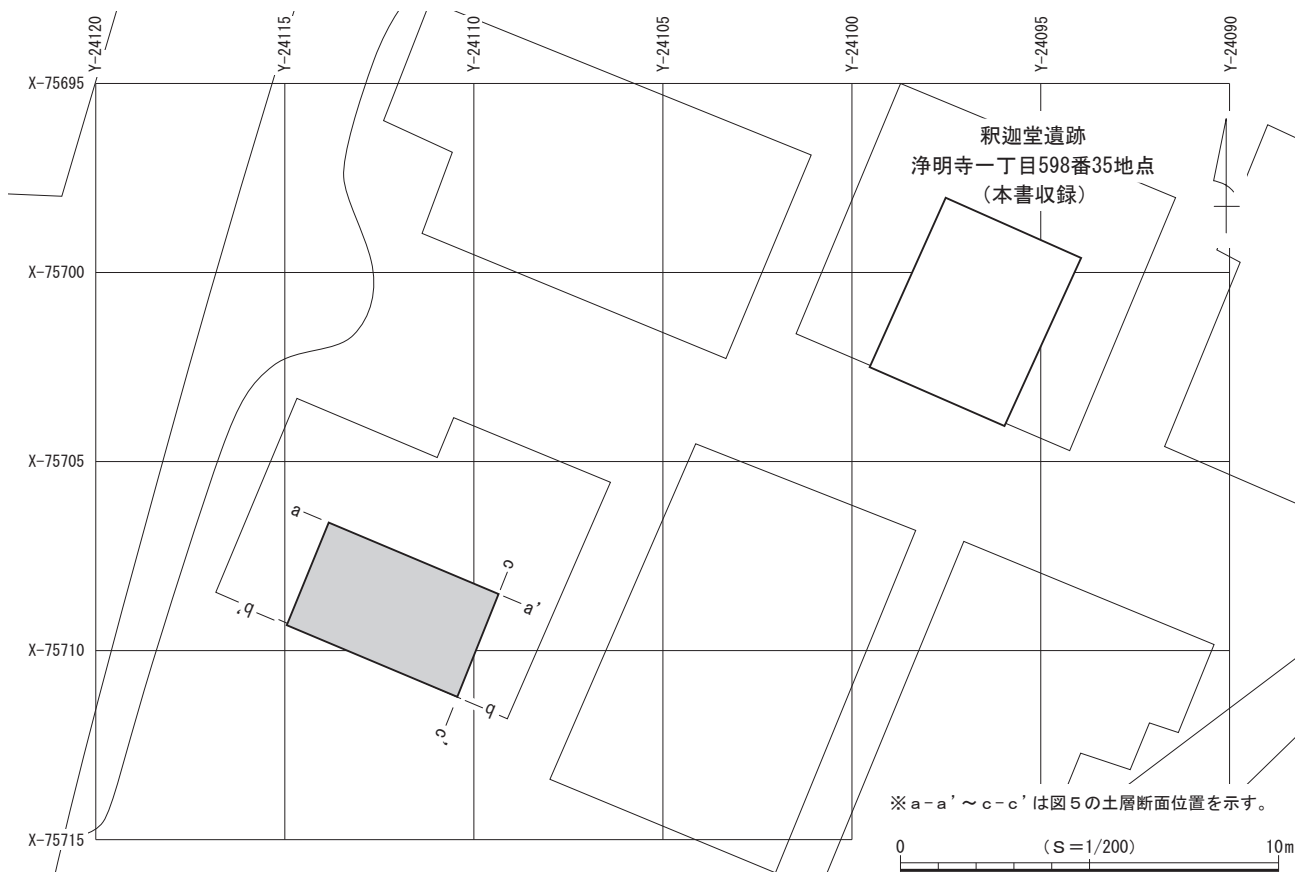


図4 調査区配置図

## 第二章 堆積土層

今回の調査では、部分的な堆積土も含めると13層に及ぶ堆積土を確認することができ、現地表面からの層厚は最大で3.3mを測る。また、遺構確認面は第1～3面までの合計3面が認められた。ここでは調査区北壁と南壁、東壁にサブトレンチの東壁を投影した土層断面を図示し、遺構確認面に相当する土層を中心に詳述していきたい。

現在の地表面は標高約20.0mで、最上部に層厚25～100cmほどの1層とした盛土が認められ、その下位には2・3層とした泥岩粒と炭化物粒を微量に含む土層が15～30cmほど堆積していた。第1面の遺構は

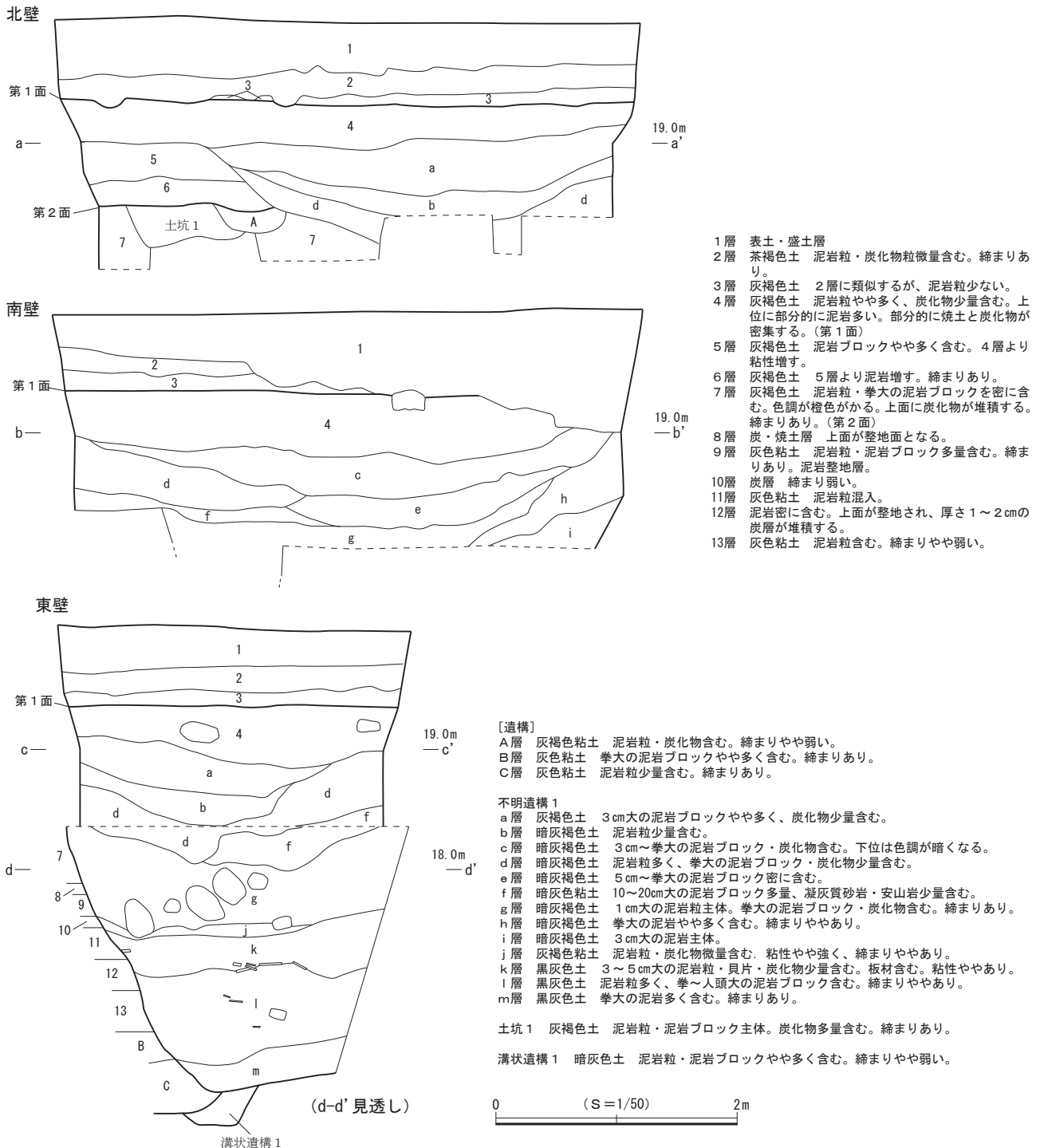


図5 調査区土層断面図

4層上面で検出し、確認面の標高は約19.3mを測る。4層は泥岩粒をやや多く、炭化物を少量含む灰褐色土で、焼土と炭化物が密集するところが部分的に認められた。4層の下層には泥岩ブロックを多量に含んだ灰褐色土である5・6層が堆積し、7層の上面で第2面の遺構を検出した。確認面の標高は約18.5mを測る。7層は泥岩粒と拳大の泥岩ブロックを密に含み、締まりのある灰褐色土で上面には炭化物が堆積していた。8～13層は、第2面で設定したサブトレンチの壁面で確認した堆積土層である。炭や焼土を主体とする土層(8・10層)と整地層(9・12層)とが交互に堆積する様相が認められた。最下部に堆積する13層は灰色粘土と泥岩粒を含む締まりのやや弱い土層で、上面の標高は約17mを測る。

第2面で確認した不明遺構は底面が青灰色を呈する岩盤に達しており、この底面上でさらに古い時期の第3面の遺構を確認した。

### 第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～3面までの合計3面である。狭小な調査区から検出した遺構は、溝状遺構1条、石列1列、土坑1基、不明遺構1基である。このうち、不明遺構は第2面で検出し、その覆土は調査区全域に広がり調査区外へと及んでいた。そこで遺構深度を確認するためにサブトレンチを入れたところ、約2.7mに達することが明らかとなった。安全対策上、この遺構の調査を行うことは不可能であると判断されたため覆土の掘り下げは行わず、調査区中央付近にサブトレンチを設定し、その最下部にあたる岩盤面で溝状遺構を確認し、部分的な調査を行った。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱を数える。

以下、発見した遺構と出土遺物について、面ごと(第1～3面)に説明する。

#### 第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出し、確認面の標高は約19.3mを測る。4層は泥岩粒をやや多く、炭化物を少量含む灰褐色土であり、この層で遺構が確認された。検出した遺構は石列1列のみであるが、焼土と炭化物が密集するところが部分的に認められた。

遺物は主にかわらけや舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀前葉頃に属すると考えられる。

##### (1) 石列

第1面では、1列を検出した。調査区中央南寄りに位置しており、おそらく調査区外の南側へ延びていると考えられ、全容を把握できなかった。

#### 石列1(図6)

調査区中央南寄りに位置し、調査区外の南側へ続いている。南側に位置する切石の西側に攪乱が及んでおり、破壊されている可能性も考えられる。石列は泥岩の切石2個を西面をほぼ揃えて配列し、礫の上面の高さは北側の方がやや低く、標高19.25mを測る。規模は長軸現存長1.04m、短軸35cmで、主軸方位はN-24°-Eを指す。切石の大きさは長さ42cmと39cm以上、幅24cmと30cm、厚さはともに14cmである。

遺物は出土しなかった。



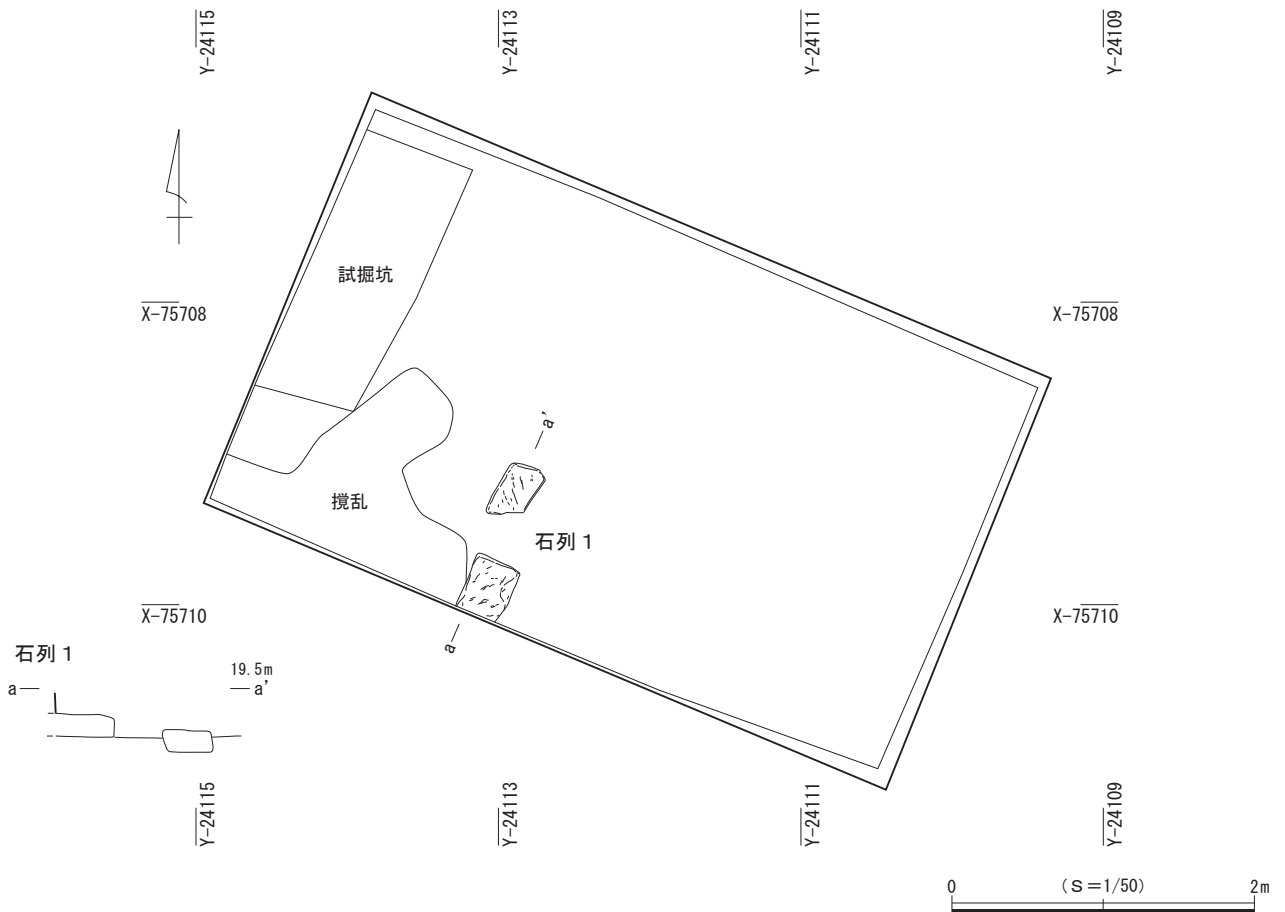


図6 第1面 遺構分布図

(2) 遺構外出土遺物(図7)

第1面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち7点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけである。2には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。4は白磁碗、5は瀬戸窯産の平碗、6・7は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類である。

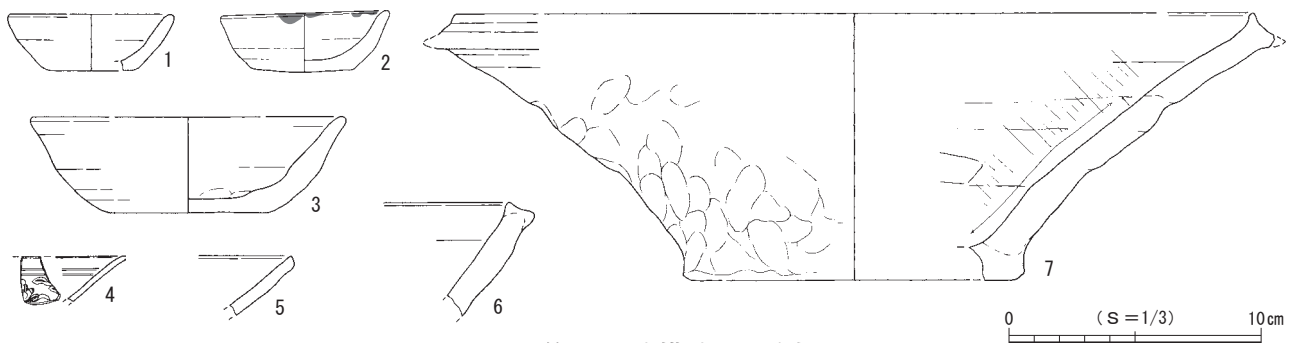


図7 第1面 遺構外出土遺物

## 第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土層7層の上面で検出され、確認面の標高は約18.5mを測る。7層は泥岩粒と拳大の泥岩ブロックを密に含んだ締まりのある灰褐色土で、上面には炭化物が堆積していた。第2面の遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は土坑1基と不明遺構1基で、不明遺構については前述のとおり遺構深度が深く、安全対策上調査を行うことは不可能であると判断されたため覆土の掘り下げは行わなかった。なお、不明遺構は調査区壁面の観察により5層上面が掘り込み面であることが判明し、土坑1よりも時期的に新しいが、ここで合わせて報告する。

遺物は主にかわけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末～14世紀代に属すると考えられる。

### (1) 土坑

第2面では、1基を検出した。調査区北西端で確認し、調査区外の北側へ延びるため全容を把握できなかった。

### 土坑1 (図8)

調査区北西端に位置する。調査区外の北側へ延び、加えて南側を不明遺構によって壊されるため全容を把握できず、規模や平面形などは判然としない。調査区北壁で確認した壁と断面形状は、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は凹凸がみられる。調査範囲での規模は東西1.0m、南北

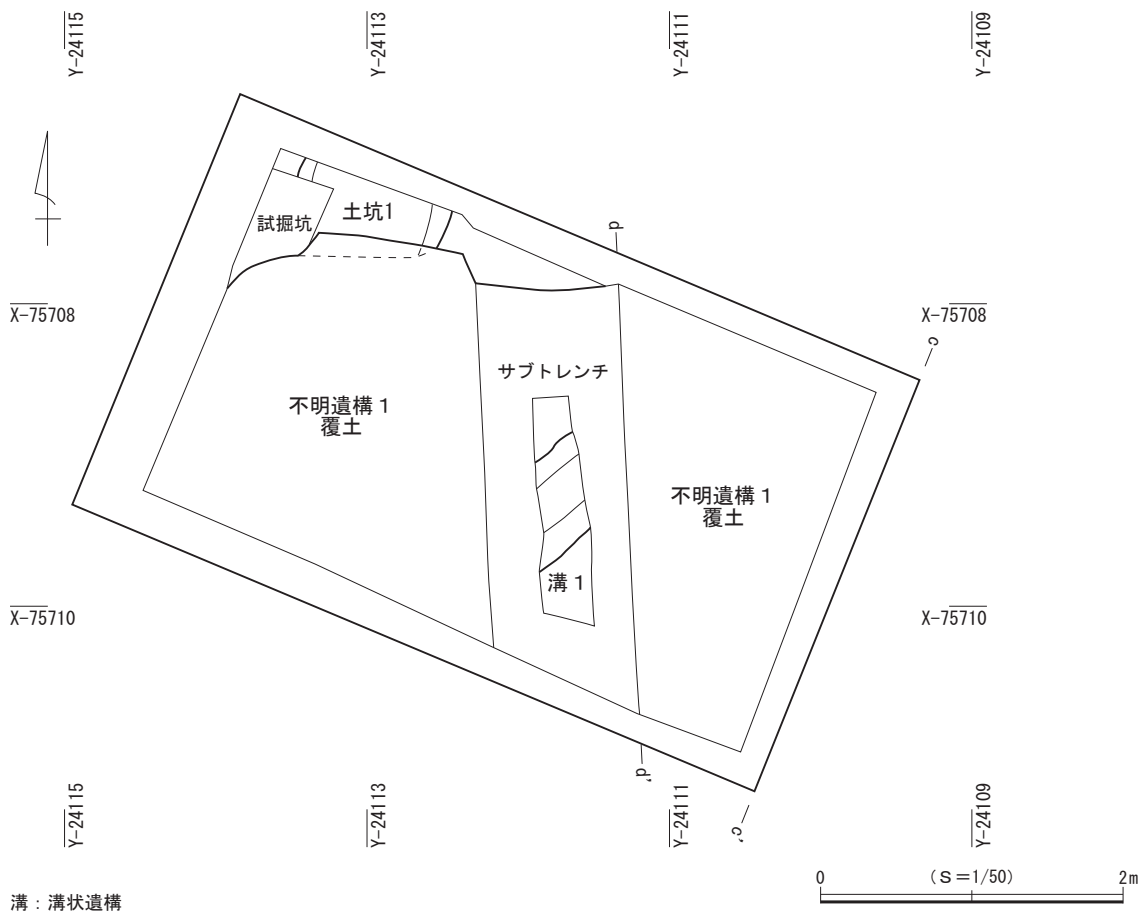


図8 第2・3面 遺構分布図

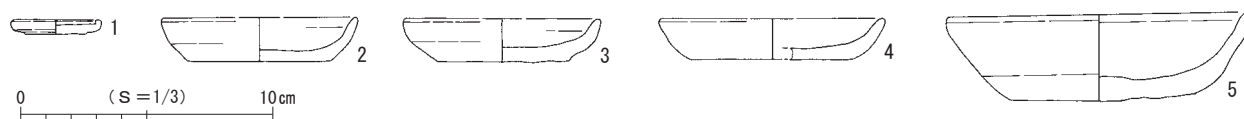


図9 第2面 土坑1 出土遺物

現存長45cm、深さ33cmで、底面の標高は18.15mを測る。覆土は泥岩粒と泥岩ブロックを主体とし、炭化物を多量に含み締まりのある灰褐色土である。

#### 出土遺物(図9)

遺物はかわらけ10点、磁器1点、陶器4点が出土し、このうち5点を図示した。

1～5はロクロ成形によるかわらけである。

#### (2) 不明遺構

第2面では、1基を検出した。遺構覆土が調査区全域に及んでいたことからサブトレンチを設定し、遺構深度を確認したところ、遺構深度が深く安全対策上調査が不可能と判断されたため、掘り下げ調査は行わなかった。

#### 不明遺構1(図5・8)

調査区の北西端を除く全面で遺構覆土が確認され、調査区外の東西および南側へ及んでいる。調査区壁面の観察により5層上面が掘り込み面であることが判明し、第2面で検出された土坑1よりも時期的に新しい。規模は東西現存長約4.9m、南北現存長約2.7m、深さが最大で約2.7mに及ぶ非常に大形の遺構である。遺構深度が深く安全対策上調査が不可能と判断されたため、掘り下げ調査は行わず、遺構検出範囲のほぼ中央に幅約90cmのサブトレンチを設定し、遺構の北壁と底面の形状および覆土の様相を確認した。北壁はやや開いて立ち上がり、中位にわずかな段をもつ。南壁は底面からのわずかな立ち上がりを確認し得たのみであり、様相は判然としない。底面はほぼ平坦で、標高は16.15mを測る。覆土は図5に示したようにd・f・g・j～mまでの7層に分層され、調査区壁面で確認し得た本遺構覆土のa～c・e・h・i層と合わせると13層に及ぶ。土層は最上層(a層)の灰褐色土、中層にあたる暗灰褐色土(b～j層)、下層の黒灰色土(k～m層)の大きく3層に分けられる。含有物は拳大から人頭大の泥岩ブロックや泥岩粒、炭化物などで、k層には貝片と板材が包含されていた。なお、本遺構は複数枚の整地層を掘り込んで構築されていた。

#### 出土遺物(図10)

遺物はかわらけ554点、磁器28点、陶器214点、土器2点、石製品4点が出土し、このうち24点を図示した。

1～5はロクロ成形によるかわらけ、6は手づくね成形によるかわらけである。1・4には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。7・8は龍泉窯系青磁で、7が梅瓶蓋、8が椀Ⅱ類である。9～11は瀬戸窯産の製品で、9が四耳壺、10が直縁大皿か折縁深皿と思われる破片、11が卸目付大皿である。12～19は常滑窯産の製品で、12～14が甕、15～19が片口鉢Ⅱ類である。20は備前窯産の播鉢である。21は伊勢系の土鍋である。22・23は砥石、24は磨石である。

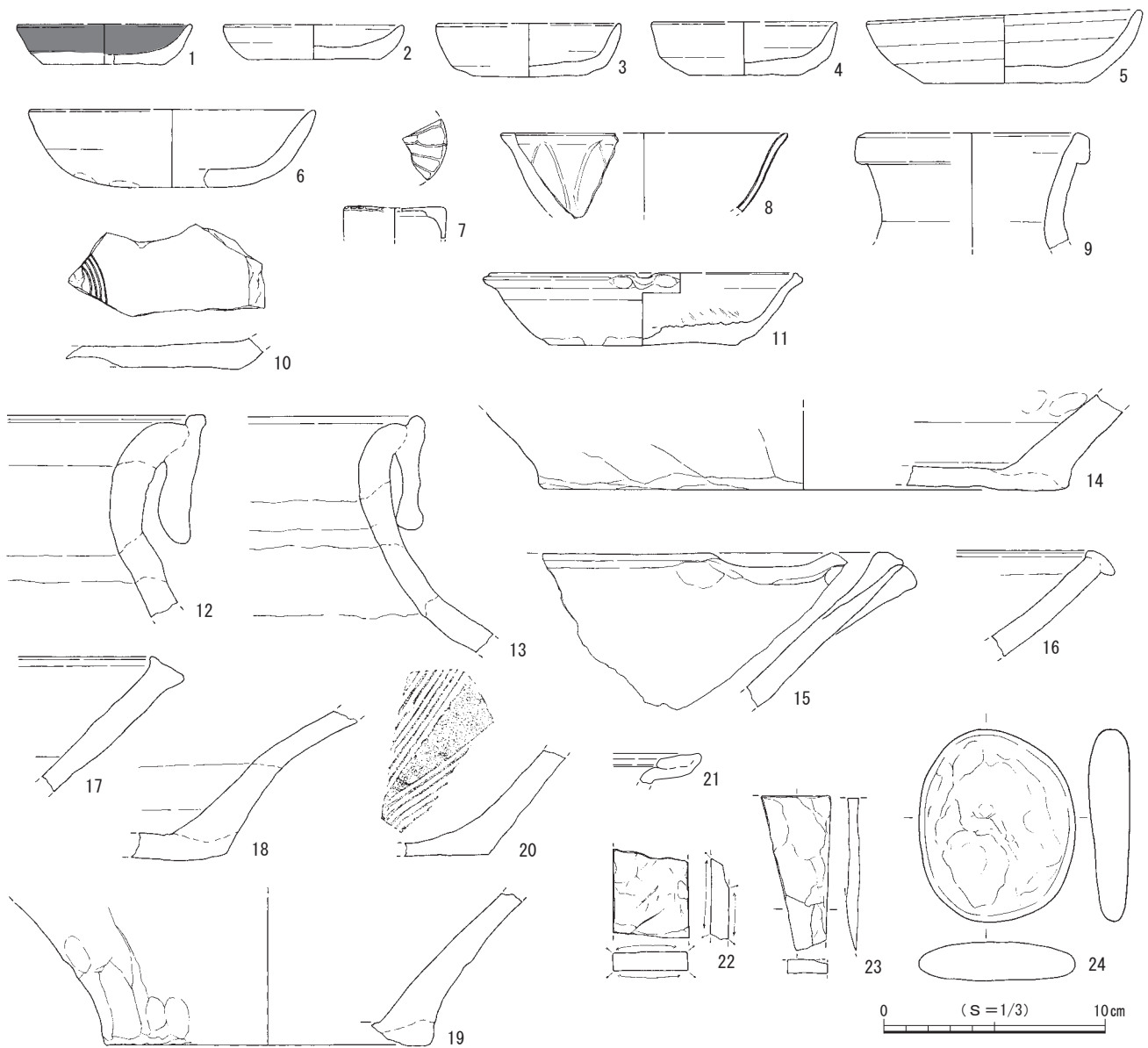


図10 第2面 不明遺構1 出土遺物

(2) 遺構外出土遺物 (図11・12)

第2面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち24点を図示した。

1～4はロクロ成形によるかわらけである。5は白磁皿である。6～17は瀬戸窯の製品で、6が瓶子Ⅱ類、7が瓶子、8が水注Ⅰ類、9が盤、10・11が折縁深皿、12が卸目付大皿、13が播鉢型小鉢、14～17が卸皿である。18～22は常滑窯産の製品で、18が甕、19が片口鉢Ⅰ類、20・21が片口鉢Ⅱ類、22が甕の破片を転用した摩耗陶片である。23は北部系の山茶碗である。24は土器の火鉢である。

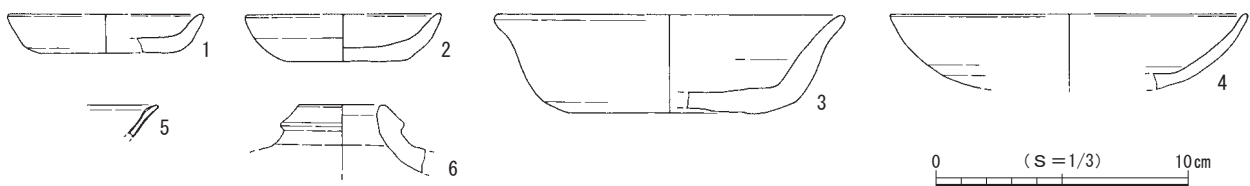


図11 第2面 遺構外出土遺物(1)



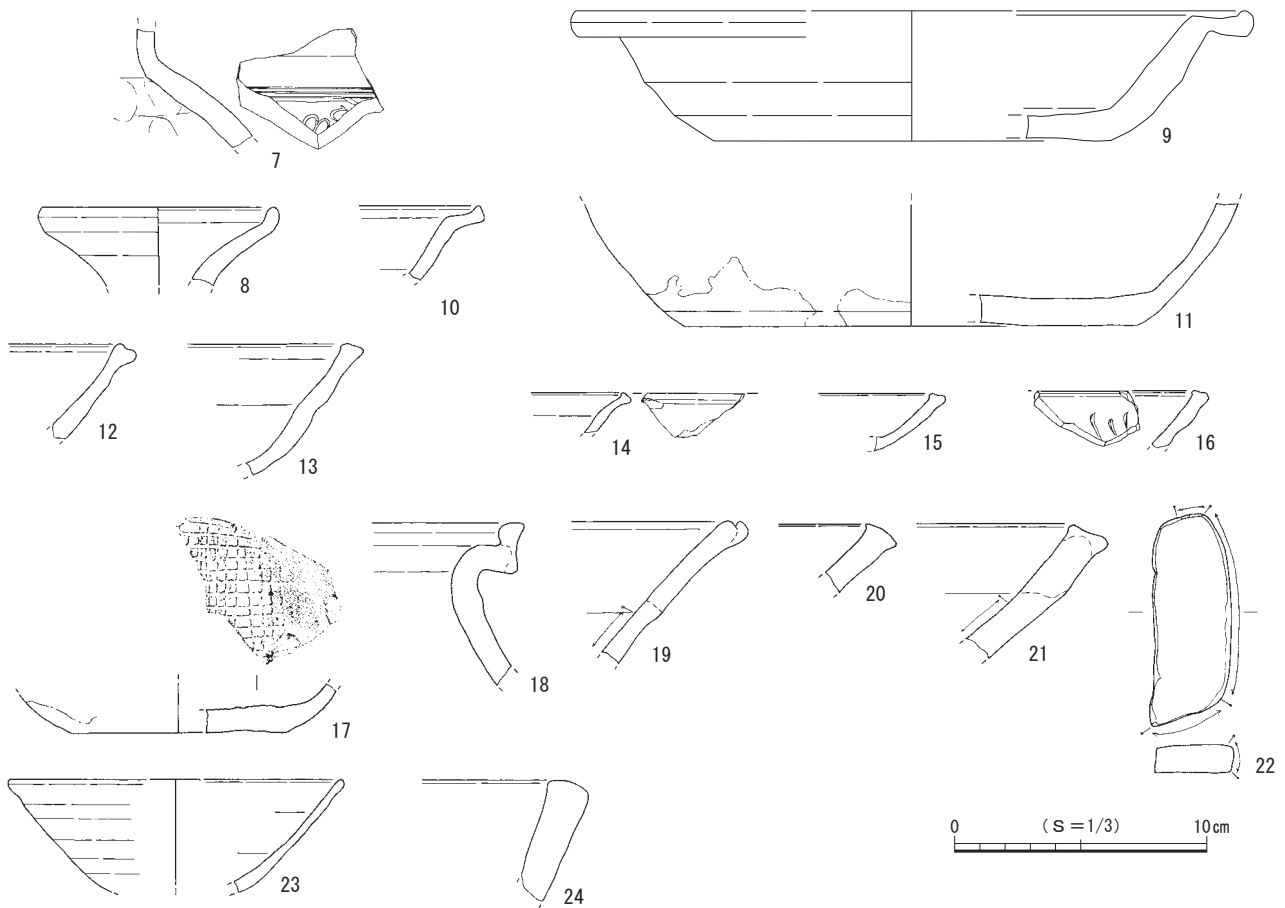


図12 第2面 遺構外出土遺物(2)

### 第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は不明遺構に設定したサブトレンチ内の底面で検出された。検出した遺構は溝状遺構1条で、ごく一部の調査にとどまる。

遺物が出土しなかったため、詳細な時期を特定することは困難であるが、第2面(13世紀末～14世紀代)以前と考えたい。

#### (1) 溝状遺構

第3面では、1条を検出した。調査区中央付近のサブトレンチ底面の岩盤上で確認し、サブトレンチ外の北東および南西方向へ延びるため全容を把握できなかった。

#### 溝状遺構1(図5・8)

調査区中央付近に設定したサブトレンチ内に位置する。サブトレンチ東壁の土層断面の観察から、不明遺構1と性格不明の掘り込みによって南北の壁を部分的に壊されていることが明らかとなった。岩盤を掘り込んで構築されており、北東-南西方向へ直線的に延び調査範囲の外側へと及んでいる。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は現存長約70cm、幅55cm、深さ30cmを測り、底面の標高は15.90mを測る。覆土は泥岩粒と泥岩ブロックをやや多く含み、締まりのやや弱い暗灰色土である。

遺物は出土しなかった。

## 第四章 まとめ

釈迦堂遺跡は、鎌倉市街地中心部の南東側丘陵地内に位置し、釈迦堂川によって形成された「釈迦堂ヶ谷」と呼ばれる開析谷の谷戸部から丘陵部にかけて包蔵地が周知されている。谷戸部を南から北へ流れる釈迦堂川は滑川の支流で、本調査地点は谷戸の入り口から約60m南側の谷奥へ入った、流路からは12mほど東側の右岸に位置する。本書所収の釈迦堂遺跡浄明寺一丁目598番35地点は、直線距離で12m離れた北東側にあたる。

釈迦堂ヶ谷の名称は、第三代執権北条泰時が父義時の追福のため、この地に釈迦堂を建立したことに由来する。釈迦堂遺跡の谷戸部での発掘調査は、本調査地点を含めて6例を数えるが、釈迦堂の場所は今なお特定されるに至っていない。釈迦堂川を挟んだ対岸のやや谷奥へ入った場所にある浄明寺字釈迦堂621番外地点(図2⑤)は、中世段階で尾根中腹の斜面部を削って広い平場を造成しており、そこから竪穴状遺構、井戸、道路状遺構、溝、柵や塀と考えられる柱列、石列、大型土坑、やぐらなど多様な遺構群が検出されている(大三輪・手塚ほか 1989)。これらの遺構は14世紀中頃から15世紀初頭にかけて位置づけられることから、本地点と同時期に営まれていた遺跡といえる。

今回の調査では、遺構確認面は第1～3面までの合計3面である。検出した遺構は、溝状遺構1条、石列1列、土坑1基、不明遺構1基で、このうち不明遺構は第2面で検出したが、覆土が調査区全域に広がりさらに調査区外へと及んでいた。そこで中央部にサブトレンチを設定して遺構深度を確認したところ、約2.7mに達することが明らかとなった。安全対策の観点からこの遺構覆土の掘り下げは行わず、下層の遺構についてはサブトレンチの最下部で確認した溝状遺構の部分的な調査を行った。その結果、確認された遺構はいずれも断片的な資料が得られたにとどまり、その性格の解明は今後の周辺地域における調査成果に期するところである。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱とわずかであった。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

### 〈第1面〉

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は約19.3mを測る。4層は泥岩粒をやや多く、炭化物を少量含む灰褐色土であり、この層で遺構が確認された。検出した遺構は石列1列のみで、焼土と炭化物が密集するところが部分的に認められた。本書所収の浄明寺一丁目598番35地点でも第2面において薄い炭層の堆積が部分的に確認されており、火災の痕跡と捉えられよう。また、先に触れた浄明寺字釈迦堂621番外地点でも炭層が確認され、調査者は大きな火災があったことを推定している。

石列は泥岩の切石2個を西面をほぼ揃えて配列したもので、調査区外へと延びるため遺構の性格は明らかでない。遺物は主にかわらけや舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀前葉頃に属すると考えられる。

### 〈第2面〉

第2面の遺構は堆積土層の7層上面で検出され、確認面の標高は約18.5mを測る。7層は泥岩粒と拳大の泥岩ブロックを密に含んだ締まりのある灰褐色土で、上面には炭化物が堆積していた。検出した遺構は土坑1基と不明遺構1基で、不明遺構1については前述のとおり遺構深度が深く安全対策上調査が不可能と判断されたため、覆土の掘り下げは行わなかった。なお、土坑1は7層を掘り込んで構築されて

いたが、不明遺構1は調査区壁面の観察により5層上面が掘り込み面であることが判明し、土坑1よりも時期的に新しいといえる。また、サブトレンチ壁面の土層断面から明らかのように、不明遺構1は複数枚の整地層を掘り込んで構築されており、加えて非常に規模の大きい遺構であることから、段切りなどの性格が推定されよう。遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類が出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末～14世紀代に属すると考えられる。

### 〈第3面〉

第3面の遺構は不明遺構1に設定したサブトレンチ底面の岩盤上で検出され、確認面の標高は16.22mを測る。検出した遺構は溝状遺構1条で、ごく一部の調査にとどまるため遺構の性格は判然としない。また、不明遺構の底面にあたる岩盤を掘り込んでいるが、同遺構との新旧関係も明らかでない。遺物が出土しなかったため、詳細な時期を特定することは困難であるが、第2面(13世紀末～14世紀代)以前と考えたい。

#### 引用・参考文献(著者五十音順)

- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 大三輪龍彦・手塚直樹ほか 1989『神奈川県鎌倉市 浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡』浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団
- 齋木秀雄 2012『田楽辻子周辺遺跡』鎌倉遺跡調査会第80集 有限会社 鎌倉遺跡調査会
- 田代郁夫ほか 1988『報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書-昭和62年度鎌倉市浄明寺地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査-』報国寺境内やぐら発掘調査団
- 田代郁夫ほか 1996「鎌倉所在の『やぐら』群」『鎌倉市中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所報告第7集 東国歴史考古学研究所
- 手塚直樹 1990『釈迦堂田楽辻子遺跡 浄明寺字釈迦堂658番地点』浄明寺田楽辻子遺跡発掘調査団
- 松尾宣方 1983「6. 釈迦堂跡」「10. 釈迦堂跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I(昭和46年度～52年度)』鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄・岡 陽一郎 1995「上杉氏憲邸跡(No.258)浄明寺一丁目699番外地点」『平成6年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2002『杉本寺周辺遺跡群 二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告書』杉本寺周辺遺跡発掘調査団
- 宮田 眞・滝澤晶子 2007『神奈川県・鎌倉市 杉本寺周辺遺跡群発掘調査報告書』株式会社 博通
- 森 孝子 2000「田楽辻子周辺遺跡(No.33)鎌倉市浄明寺一丁目661番外」『平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 鎌倉市教育委員会
- 森 孝子 2009「田楽辻子周辺遺跡」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第1面 遺構外出土遺物(図7)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.4)	(3.8)	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.1	2.2~2.4	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(6.8)	3.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
4	磁器	白磁 碗	-	-	現 2.0	外面-印花文 色調: 胎土-白色、釉-白色 備考: 白磁椀X類	口縁部 小破片
5	陶器	瀬戸 灰釉平碗	-	-	現 2.3	胎土: 緻密 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考: 古瀬戸中様式II期	口縁部 小破片
6	陶器	常滑 片口鉢II	-	-	現 4.5	胎土: 粗、白色粒 色調: 赤茶褐色 備考: 8型式	口縁部 小破片
7	陶器	常滑 片口鉢II	(31.8)	(13.4)	10.6	胎土: 粗、白色粒 色調: 赤茶褐色 備考: 9~10型式	1/4

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑1 出土遺物(図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・極小	3.6	1.4	0.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.6)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.2	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	3/4
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.4)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
5	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.2	3.1~3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
不明遺構1 出土遺物(図10)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.6)	1.8	全体に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 暗褐色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.8)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 浅橙色 焼成: 良好	1/4
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.3)	5.0	2.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 浅橙色 焼成: 良好	1/2
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.4)	1.7	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2
5	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.5	2.8~3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 浅橙色 焼成: 良好	完形
6	土器	手づくね かわらけ・中	(12.8)	-	3.5	底面-指頭ナデ消し 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、良土 色調: 浅橙色 焼成: 良好	1/3
7	磁器	青磁 梅瓶蓋	上面径 (4.6)	下面径 (4.6)	現 1.4	上面-菊花状 色調: 胎土-灰白色、釉-淡青色	1/4
8	磁器	青磁 碗	(13.0)	-	現 3.6	外面-鎗蓮弁文 高台・畳付-露胎 色調: 胎土-灰白色、釉-緑青色 備考: 龍泉窯系青磁碗II類	1/8
9	陶器	瀬戸 四耳壺	9.5	-	現 5.7	胎土: 緻密 色調: 胎土-灰白色、釉-淡灰黄色	口縁部~ 頸部小破片
10	陶器	瀬戸 直縁大皿か 折縁深皿	-	(15.8)	現 2.8	見込み-櫛描き5条、目跡1ヶ所 胎土: 緻密 色調: 胎土-灰色、釉-淡緑色	1/6
11	陶器	瀬戸 卸目付大皿	(13.8)	(8.6)	3.2	胎土: 緻密 色調: 胎土-淡黄色、釉-黄色~淡黄緑色	1/3
12	陶器	常滑 甍	-	-	現 9.1	胎土: 粗、白色粒 色調: 暗褐色 備考: 8型式	口縁部 小破片
13	陶器	常滑 甍	-	-	現 10.6	胎土: 粗、白色粒 色調: 暗褐色 備考: 8型式	口縁部 小破片
14	陶器	常滑 甍	-	(24.0)	現 4.3	胎土: 粗、白色粒 色調: 灰茶色	底部 小破片
15	陶器	常滑 片口鉢II類	-	-	現 7.0	胎土: 粗、白色粒 色調: 暗褐色 備考: 7型式	口縁部 小破片
16	陶器	常滑 片口鉢II類	-	-	現 4.8	胎土: 粗、白色粒 色調: 暗茶褐色 備考: 9~10型式	口縁部 小破片
17	陶器	常滑 片口鉢II類	-	-	現 6.0	胎土: 粗、白色粒 色調: 暗茶褐色 備考: 9~10型式	口縁部 小破片
18	陶器	常滑 片口鉢II類	-	-	現 6.6	胎土: 粗、白色粒 色調: 赤茶褐色	底部 小破片
19	陶器	常滑 片口鉢II類	-	(15.4)	現 6.8	内面摩滅 胎土: 粗、白色粒 色調: 暗茶褐色	底部 小破片
20	陶器	備前 播鉢	-	-	現 4.6	内面摩耗、7条一単位の播目 胎土: 微砂 色調: 暗褐色~赤褐色	口縁部 小破片
21	土器	土鍋	-	-	現 1.4	口縁部-折り返し 胎土: 小石粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好 備考: 伊勢系	口縁部 小破片
22	石製品	砥石	現長 4.0	幅 3.4	厚 0.7	2面に使用痕跡 仕上砥 石材-粘板岩 備考: 鳴滝産	



23	石製品	砥石	現長 7.0	現幅 3.1	現厚 0.6	表裏剥離 仕上砥 石材-粘板岩 備考:鳴滝産	
24	石製品	磨石	長 8.7	幅 7.1	厚 1.8	側面に摩耗痕 石質-安山岩	完形

第2面 遺構外出土遺物(図11・12)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.2)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.0	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼 成:良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	(8.2)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/4
4	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	-	現 3.0	薄手丸深 胎土:雲母、黒色粒、良土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
5	磁器	白磁 皿	-	-	現 4.8	色調:胎土-灰白色、釉-乳白色	口縁部 小破片
6	陶器	瀬戸 瓶子Ⅱ類	(3.2)	-	現 2.7	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡緑色 備考:古瀬戸中期様式	口縁部 小破片
7	陶器	瀬戸 瓶子	-	-	現 4.8	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸中期様式	肩部 小破片
8	陶器	瀬戸 水注Ⅰ類	9.2	-	現 3.1	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸後期様式	口縁部 小破片
9	陶器	瀬戸 盤	26.5	15.8	5.2	内面に沈線が巡る 見込み-ヘラ描きによる草花文? 胎土:緻密 色調:胎土-灰 色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸後期様式	1/8
10	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 2.9	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡緑色	口縁部 小破片
11	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	(18.0)	現 4.9	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡緑色	1/8
12	陶器	瀬戸 卸目付大皿	-	-	現 3.7	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸中期様式	口縁部 小破片
13	陶器	瀬戸 播鉢型小鉢	-	-	現 5.1	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡緑色	口縁部~ 体部 小破片
14	陶器	瀬戸 卸皿	-	-	現 1.5	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸中期様式	口縁部 小破片
15	陶器	瀬戸 卸皿	-	-	現 2.2	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸中期様式	口縁部 小破片
16	陶器	瀬戸 卸皿	-	-	現 2.3	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考:古瀬戸中期様式	口縁部 小破片
17	陶器	瀬戸 卸皿	-	(8.5)	現 1.9	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-淡灰黄色	1/6
18	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.4	胎土:粗、白色粒 色調:暗茶褐色 備考:5型式	口縁部 小破片
19	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	-	現 5.6	胎土:粗、小石粒 色調:灰色	口縁部 小破片
20	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 2.6	胎土:粗、白色粒 色調:暗灰色~暗茶色 備考:7~8型式	口縁部 小破片
21	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.2	胎土:粗、白色粒 色調:灰黒色 備考:7~8型式	口縁部 小破片
22	陶器	摩耗陶片	長 8.5	幅 3.1	厚 1.1	常滑甕の陶片を転用、破断面摩耗 胎土:粗 色調:暗褐色	完形
23	陶器	北部系 山茶碗	(13.2)	-	現 4.4	胎土:黒色微粒 色調:黄白色 備考:東濃第7型式	1/6
24	土器	火鉢	-	-	現 4.8	胎土:緻密、白色粒 色調:黒灰色~橙色 焼成:良好	口縁部 小破片

表4 遺構計測表

( ) = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
石列1	第1面	(104)	35	-
土坑1	第2面	100	(45)	33

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
不明遺構1	第2面	(490)	(270)	270
溝状遺構1	第3面	(70)	55	30

表5 出土遺物一覧表

第1面

第1面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	73
【白磁】		
	碗	1
	印花文皿	1
【陶器】		
瀬戸	平碗	1
常滑	甕	4
	片口鉢Ⅱ類	2
		合計 82

第2面

土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	10
【青白磁】		
	器種不明小破片	1
【陶器】		
瀬戸	器種不明小破片	1
	甕	1
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	1
		合計 15

不明遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	550
	かわらけ 手づくね成形	4
【青磁】		
龍泉窯系	梅瓶蓋	1
	碗	13
【青白磁】		
	梅瓶	6
	瓶子蓋	1
	皿	1
	器種不明小破片	6

【陶器】			
瀬戸	瓶子	2	
	四耳壺	2	
	小壺	1	
	壺	3	
	入子	1	
	直縁大皿	1	
	折縁深皿	13	
	卸目付大皿	1	
	底卸目皿	2	
	卸皿	7	
	山茶碗	1	
	器種不明小破片	6	
	常滑	甕	154
		片口鉢Ⅰ類	3
片口鉢Ⅱ類		15	
摩耗陶片		1	
備前	播鉢	1	
【土器】			
	火鉢	1	
	伊勢系土鍋	1	
【石製品】			
	滑石製石鍋	1	
	砥石	2	
	硯	1	
	磨石	1	
		合計 803	

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	31
【白磁】		
	皿	1
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	瓶子Ⅱ類	1
	水注Ⅰ類	1
	盤	1

瀬戸	播鉢形小鉢	1
	卸目付大皿	1
	折縁深皿	2
	卸皿	4
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	2
	摩耗陶片	1
山茶碗(北部)		1
【土器】		
	火鉢	1
		合計 51

攪乱		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【青白磁】		
	器種不明小破片	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	1
常滑	甕	3
		合計 13



1. 調査区北壁土層断面(南西から)



2. 調査区南壁土層断面(北から)





1. 第1面全景(北西から)



2. 第1面 石列1(東から)





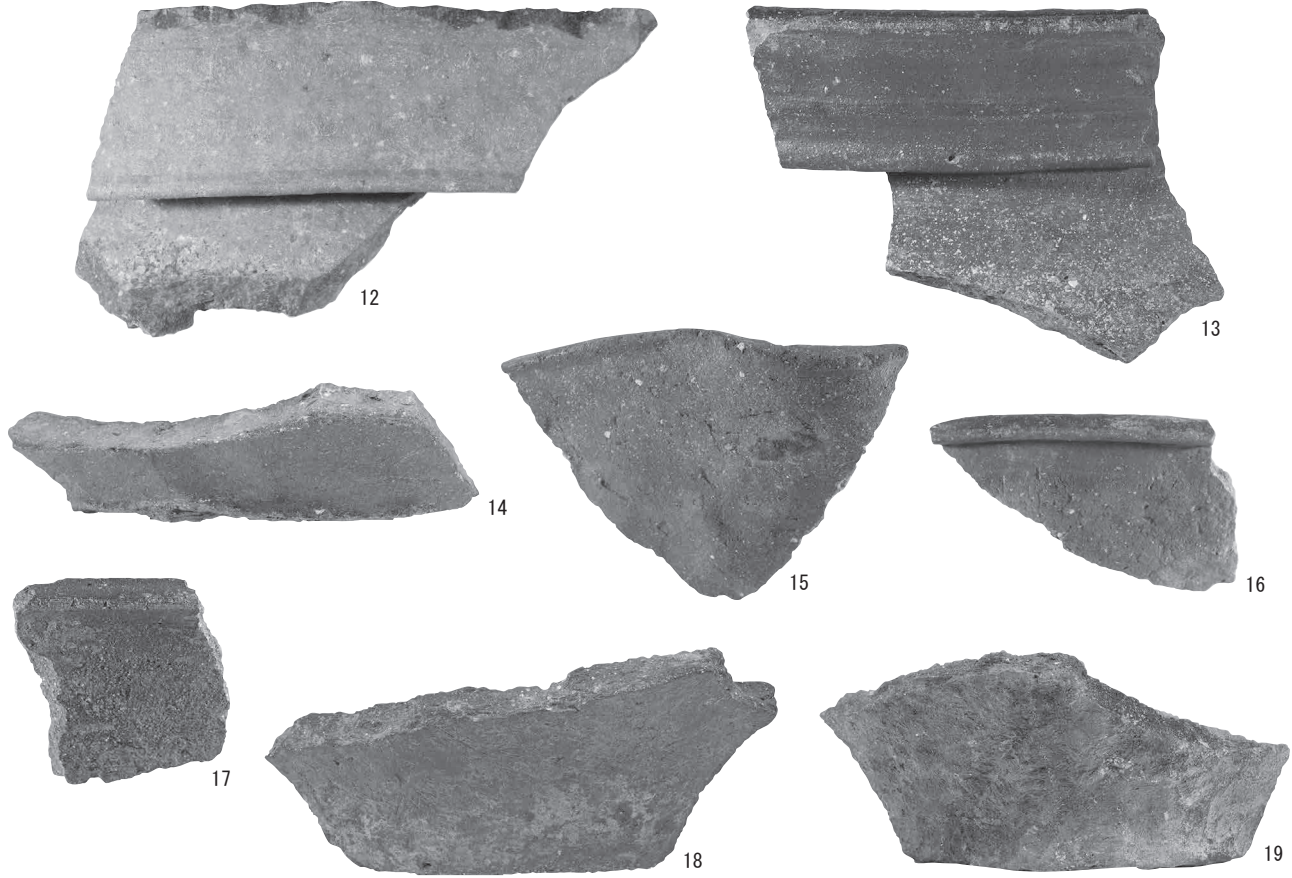
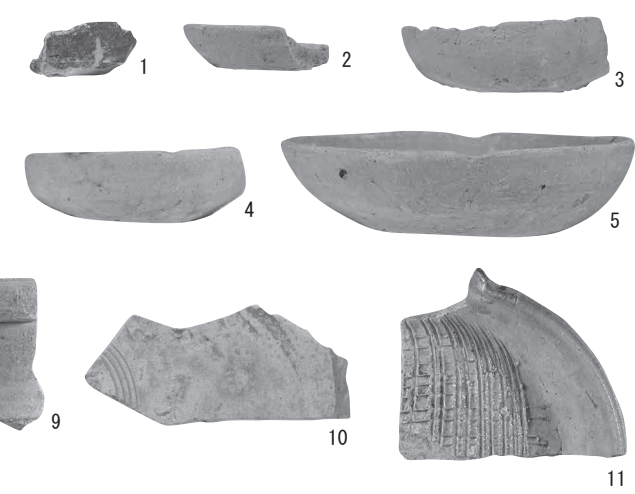
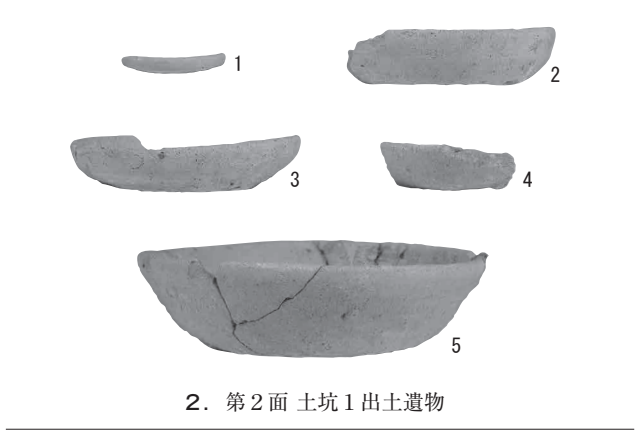
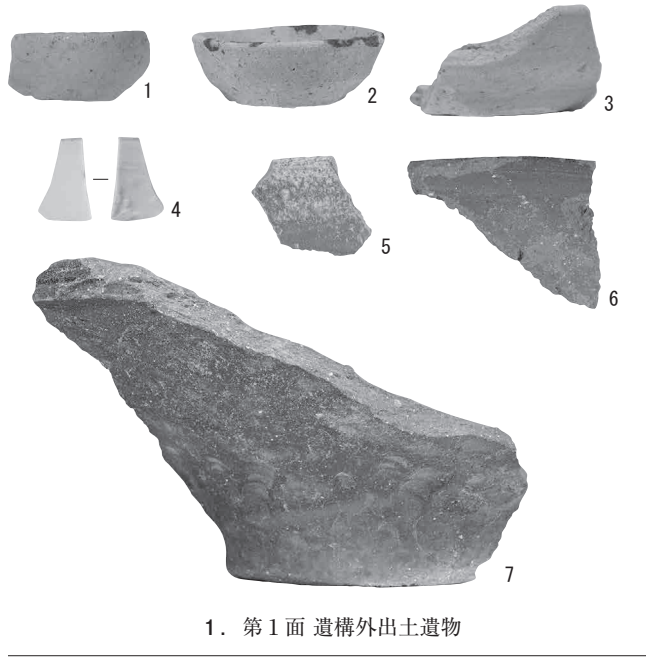
1. 第2面全景(南東から)



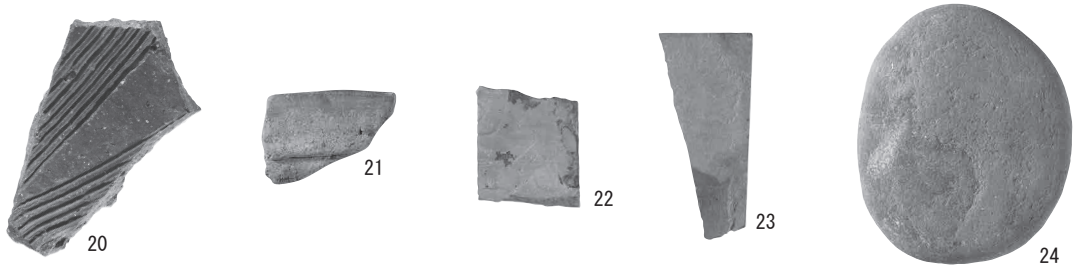
2. 第3面 溝状遺構1(西から)



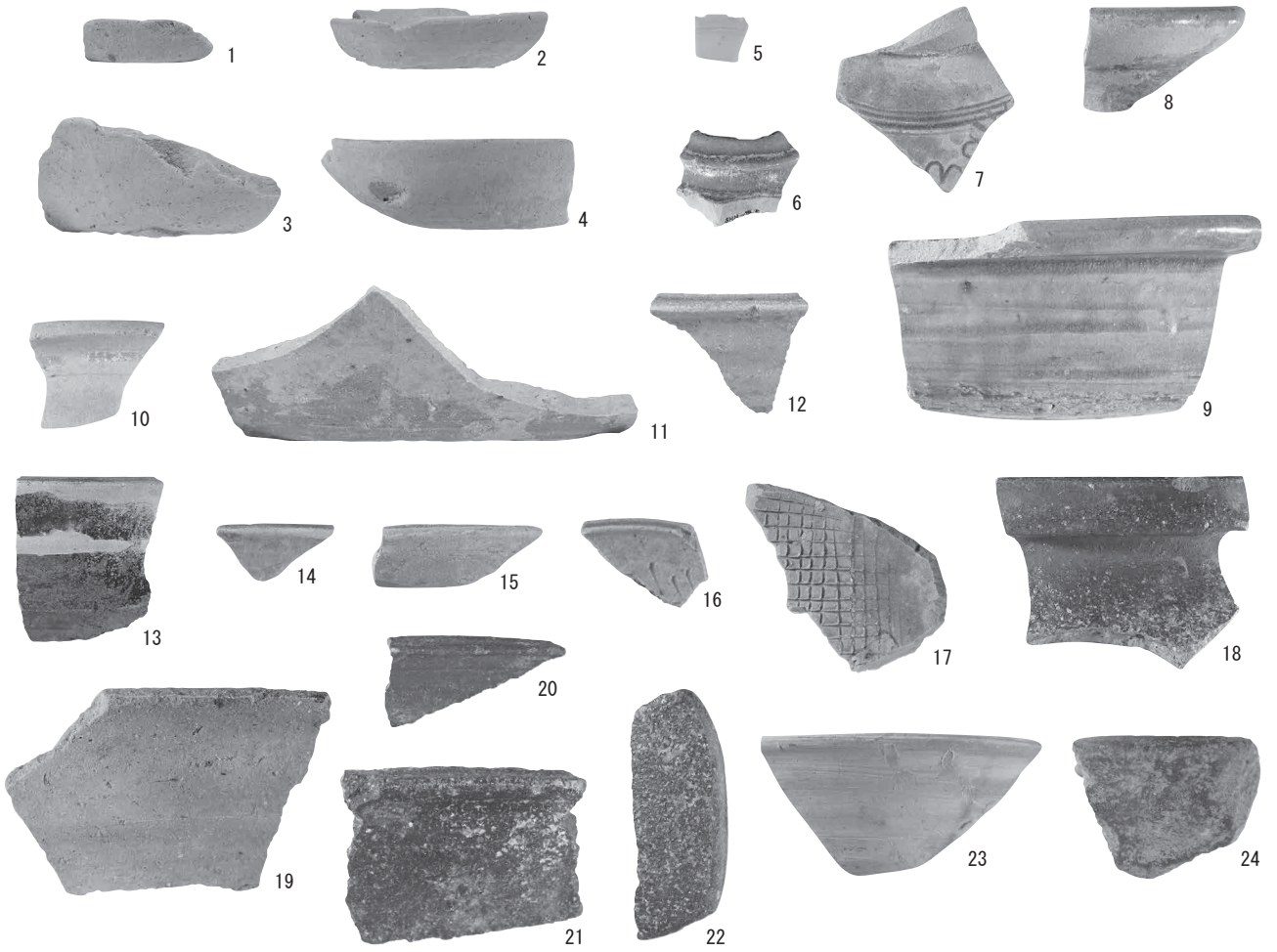
图版 4



3. 第2面 不明遺構1出土遺物(1)



1. 第2面 不明遺構1 出土遺物(2)



2. 第2面 遺構外出土遺物








积迦堂遺跡 (No.257)

浄明寺一丁目598番35地点

## 例 言

1. 本報は「釈迦堂遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.257）内、鎌倉市浄明寺一丁目598番35地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成21年2月10日～同年3月16日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約20㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 長澤保崇  
調査員 田畑衣理  
作業員 清水政利・宝珠山秀雄・鈴木啓之・平尾 幹  
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を長澤保崇、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系AREA 9）を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「SHI」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺構・遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：  整地・地業範囲  
 炭分布範囲  
遺物：  煤およびタール状の黒色物が付着している部分  
・石製品の矢印は磨面範囲を示す。
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』  
瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』  
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』  
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介（玉川文化財研究所）
13. 報告書作成にあたっては、伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。

## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	253
第1節 調査に至る経緯と経過	253
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	253
第3節 周辺の考古学的調査	254
第二章 堆積土層	259
第三章 発見された遺構と遺物	260
第1節 第1面の遺構と遺物	260
第2節 第2面の遺構と遺物	262
第3節 第3面の遺構と遺物	263
第4節 第4面の遺構と遺物	265
第5節 第5面の遺構と遺物	268
第6節 第6面の遺構と遺物	271
第四章 まとめ	275

## 挿図目次

図1 遺跡位置図	255	図17 第4面 土坑2～6	266
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	256	図18 第4面 土坑2出土遺物	267
図3 調査区位置図	258	図19 第4面 土坑3出土遺物	267
図4 調査区配置図	258	図20 第4面 遺構外出土遺物	268
図5 調査区土層断面図	259	図21 第5面 遺構分布図	269
図6 第1面 遺構分布図	260	図22 第5面 土坑7出土遺物	269
図7 第1面 土坑1	261	図23 第5面 土坑7・8	270
図8 第1面 土坑1出土遺物	261	図24 第5面 土坑8出土遺物	271
図9 第1面 ピット1出土遺物	261	図25 第5面 遺構外出土遺物	271
図10 第1面 遺構外出土遺物	262	図26 第6面 遺構分布図	272
図11 第2面 遺構分布図	262	図27 第6面 ピット6・8	273
図12 第2面 溝状遺構1	263	図28 第6面 遺構外(14～21層)出土 遺物(1)	273
図13 第2面 遺構外出土遺物	263	図29 第6面 遺構外(14～21層)出土 遺物(2)	274
図14 第3面 遺構分布図	264		
図15 第3面 遺構外出土遺物	264		
図16 第4面 遺構分布図	265		

## 表 目 次

表 1	釈迦堂遺跡 調査地点および周辺の遺跡 一覧……………	257	表 5	第 4 面 出土遺物観察表……………	278
表 2	第 1 面 出土遺物観察表……………	278	表 6	第 5 面 出土遺物観察表……………	279
表 3	第 2 面 出土遺物観察表……………	278	表 7	第 6 面 出土遺物観察表……………	280
表 4	第 3 面 出土遺物観察表……………	278	表 8	遺構計測表……………	281
			表 9	出土遺物一覧表……………	282

## 図 版 目 次

図版 1	1. 調査区北壁土層断面(南西から) ……	283	図版 6	1. 第 1 面 土坑 1 出土遺物……………	288
	2. 調査区南壁土層断面(北東から) ……	283		2. 第 1 面 ピット 1 出土遺物……………	288
図版 2	1. 第 1 面全景(北から)……………	284		3. 第 1 面 遺構外出土遺物……………	288
	2. 第 2 面全景および溝状遺構 1 (北から)……………	284		4. 第 2 面 遺構外出土遺物……………	288
図版 3	1. 第 3 面全景(南から)……………	285		5. 第 3 面 遺構外出土遺物……………	288
	2. 第 4 面全景(北から)……………	285		6. 第 4 面 土坑出土遺物……………	288
図版 4	1. 第 4 面 土坑 2 (南から)……………	286	図版 7	1. 第 5 面 土坑出土遺物……………	289
	2. 第 4 面 土坑 3 土層断面(南から) ……	286		2. 第 5 面 遺構外出土遺物……………	289
	3. 第 4 面 土坑 4～6 (南から)……………	286	図版 8	1. 第 6 面 遺構外(14～21層) 出土遺物(1)……………	290
図版 5	1. 第 5 面全景(北から)……………	287	図版 9	1. 第 6 面 遺構外(14～21層) 出土遺物(2)……………	291
	2. 第 5 面 玉石検出状態(南から) ……	287			
	3. 第 5 面 土坑 7 土層断面(東から) ……	287			
	4. 第 6 面 北側トレンチ全景 (西から)……………	287			



# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市浄明寺一丁目598番35地点で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である釈迦堂遺跡(神奈川県遺跡台帳No.257)の範囲内にあたり、周辺の調査状況から、地下に中世の遺跡が存在することが確実であった。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約20㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、長澤保崇が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成21年2月10日～同年3月16日までの1ヵ月ほどで、調査面積は約20㎡である。現地表面の標高は約19.9mを測る。調査はまず重機により約50cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げた。調査の結果、中世に属する第1～6面の合計6面にわたる遺構確認面が検出されたため、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。なお、調査は安全対策のため現地表面から2m下位の標高18.0m付近に達した段階で掘り止め、さらに下部の遺構の有無を確認するため調査区の南北両壁際を幅1mのトレンチ状に掘り下げた。その結果、標高約17.4mのところでは第6面の遺構を検出したため、掘り下げた範囲について調査を行った。そして3月16日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、調査区の座標は日本測地系(座標系AREA 9)に準じた、鎌倉市四級基準点(X = -75812.665、Y = -24166.168)、(X = -75847.689、Y = -24188.461)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53209(標高12.109m)を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

釈迦堂遺跡(No.257)は、鎌倉市街地中心部の南東側丘陵地内に所在している。本遺跡の北側には、鎌倉市十二所の朝比奈峠付近を源流とする滑川が蛇行を繰り返しながら西流し、鎌倉の市街地を抜けて相模湾に注ぐ。この本流に合流するのが本遺跡内の谷戸部を南から北に向けて貫流する釈迦堂川である。この流域に沿って形成された谷戸部が「釈迦堂ヶ谷」と呼ばれる開析谷である。「釈迦堂遺跡」は、この谷戸を中心に両側の丘陵稜線までを含む範囲が遺跡の包蔵地とされている。

釈迦堂ヶ谷の規模は、開口部から谷戸の最奥部までは約350m、幅は開口部付近で約60mと狭いが、谷あい150mほど進むと谷幅は幾分広くなり、谷戸の中央で二股に分かれている。谷戸の標高は、開口部付近で16m前後、開口部から60mほど進んだ本調査地点周辺で19m前後、谷幅がやや広がった中程で約23m、谷戸が二股に分かれる付近で26m前後、谷戸の両奥部で30～35mを測る。開口部付近と両奥部付近とはおおよそ20mほどの標高差があるが、谷戸の中程まではあまり変化がない。

本調査地点は、釈迦堂川の右岸域にあたり、川までの距離は30mほどである。調査地点はほぼ平坦であるが、東岸の丘陵斜面は急激に立ち上がっている。東岸の丘陵稜線との比高差は22～23mを有する。

本遺跡は鎌倉市浄明寺一丁目地内に所在し、本調査地点の地番は浄明寺一丁目598番35である。なお、本書所収の浄明寺一丁目598番21は、本地点の南西側12mほどに所在している。

本遺跡の周辺を取りまく滑川左岸域の丘陵部には、大小の谷戸が樹枝状に開析されている。遺跡の東側には犬懸ヶ谷、宅間ヶ谷などの谷戸が続く。本遺跡は第三代執権北条泰時が、父義時の菩提を弔うために釈迦堂を建てたことに由来し、東隣の犬懸ヶ谷は犬懸上杉管領屋敷（上杉朝宗・氏憲邸）があった推定地とされている。また、宅間ヶ谷は谷戸全域が現報国寺の寺域となっていた時代もあり、寛政3（1791）年に作成された報国寺境内絵図には、境内の伽藍配置に塔頭などが詳細に描かれている。鎌倉・室町期を通じて歴史上の表舞台に関わった地域でもあった。

一方、西側には大御堂ヶ谷、葛西ヶ谷と呼ばれる谷戸が並んでいる。大御堂ヶ谷は源頼朝が父義朝の菩提を弔うために勝長寿院を建てたことに由来し、別名大御堂、南御堂とも呼ばれ、後世いつしかこの谷戸を大御堂ヶ谷と呼ばれるようになったという。『鎌倉廢寺事典』（貫・川副 1980）や『鎌倉事典』（白井編 1976）などでは、廊の御堂、南山小御堂、南御堂、新造の東御所、弥勒堂、五仏堂、三重塔などの建物名が記され、極めて壮大な伽藍であったことがうかがえる。葛西ヶ谷は北西に開口した扇形の谷戸で、旧鎌倉市街地を望み、谷戸は大きく3つに分かれ、それぞれ階段状に平場が形成されている。葛西ヶ谷という地名の由来は、源頼朝の御家人であった葛西清重の居館があったことに起因しているが、第三代執権北条泰時が創建した東勝寺の方が広く知られ、北条得宗家の氏寺、鎌倉幕府滅亡の地としても知られている。

また、大御堂橋以東の滑川に挟まれた地域は、田楽辻子周辺遺跡（No.33）の包蔵地範囲となっている。田楽辻子の由来は、第三代執権北条泰時が父義時の菩提を弔うために建立した「釈迦堂」前に田楽師が住んでいたことからこの名がつけられたという。筋替橋を起点に宝戒寺裏から滑川を渡り、大御堂ヶ谷、釈迦堂ヶ谷の入口を経て、宅間ヶ谷に出て六浦道に合流する小路と考えられている。この滑川沿いには『吾妻鏡』にいう「田楽辻子」の碑があり、釈迦堂ヶ谷のほぼ北側にあたる。田楽辻子から釈迦堂ヶ谷には谷奥へ向かって道が通じており、谷奥には隧道（釈迦堂トンネル）があり大町・名越へと抜けることができる。義時の菩提を弔った釈迦堂は谷のどこにあったのか、その場所としては、谷戸中央の二股に分かれた南西側、北条時政邸へ抜ける隧道の西側の谷戸内にあてられているが、未だ特定できていない。

### 第3節 周辺の考古学的調査

本遺跡の所在する釈迦堂ヶ谷は、滑川南岸の北に向かって開口する谷戸であり、この谷戸の並びには東側に犬懸ヶ谷や宅間ヶ谷、西側には大御堂ヶ谷や葛西ヶ谷などの谷戸が知られており、地名の由来や伝承などについては前節で触れたとおりである。また、谷戸の入口付近には滑川の南側に沿って各谷戸を結ぶように東西に延びる小路があるが、これは中世から続いていた「田楽辻子」ともいわれている。さらに滑川を隔てた北側には東西に走る大町大路／旧六浦路（県道金沢鎌倉線）が通り、この道路に面して釈迦堂ヶ谷のほぼ対岸辺りには鎌倉以前から存在していたといわれる杉本寺や、そこから広がる裏山一帯は杉本城跡（No.62）といわれ、山頂付近には古井戸や曲輪、堀切などの遺構が知られている。

本遺跡については「釈迦堂」がいつごろ廃絶したかもわかってないが、『新編相模国風土記稿』には釈迦堂の本尊について「此本尊ハ今杉本観音堂ニ置ケリ」と記されていて、江戸時代には釈迦堂の本尊と伝えられる像が杉本寺に安置されていたことが知られる。この像が釈迦堂の本尊であったかどうかは知る由もないが、本遺跡を考える上での手がかりともいえる。

谷戸内における発掘調査事例は、本調査地点を含めて6例（◀、①～⑤）である。以下では谷戸内の遺跡を中心に紹介し、近隣の遺跡についても若干示しておきたい。





図1 遺跡位置図





※矢印は本調査地点、丸数字は表1の番号に対応する。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



釈迦堂ヶ谷の内部は、谷戸の中央を流れる釈迦堂川を挟んで東西に支谷が幾つかみられるが、西側の開口部に近い小支谷の上段部分で最初の発掘調査が行われている。④浄明寺字釈迦堂642番地点(松尾1983)の調査である。概要のみで詳細は不明であるが、2回の調査によって岩盤上に建てられた掘立柱建物とそれに伴う据甕施設やピットなどが検出され、谷戸内の武家屋敷の一部と考えられている。④地点の南側に隣接した⑤地点の調査では、支谷内の平場全域を対象とした、当時としては珍しく、また平地でしか検出できなかった方形竪穴状遺構の発見が注目された。この他に礎石列や柱穴列、井戸、溝、土坑、道路などの遺構も検出された。また、平場から尾根に続く調査では火葬骨を納めた常滑壺が道路遺構の脇から検出され、尾根に続く通路や、やぐらの調査も行われている。かわらけや陶磁器などから、これら遺構の年代を14世紀中葉から15世紀初頭と推定し、この年代観は北条泰時が「釈迦堂」を建てた年代とは隔たりがあるため、報文では釈迦堂との関係はないとしている。また、遺跡の造営者について経済力をもった有力者の存在を示唆している。

釈迦堂ヶ谷を囲む丘陵の尾根を中心にやぐら群が点在している。図2内では⑥釈迦堂東やぐら群(No.157)や釈迦堂奥やぐら群(No.80)、衣張山やぐら群(No.81)などがみられるが、この他にも谷戸の最奥部には釈迦堂口やぐら群(No.82)や釈迦堂トンネル上尾根やぐら群(No.83)などがある。昭和40年の宅地造成時にこのやぐら群の一部が壊され、その中から「元弘三年五月廿八日」紀年名の地輪が出土している。元弘3(1333)年は、新田義貞によって鎌倉が陥落した年であり、5月28日は東勝寺において北条高時以下北条一門が自決して果てた5月22日から数えて初七日に当たるといふ。さらにこの丘陵尾根の東側には北条時政邸の裏門跡や、その南側の谷戸一帯が北条氏の名越邸跡といわれており、釈迦堂ヶ谷を含めてこの一帯は北条氏との関係が深い地域であったといえよう。

表1 釈迦堂遺跡 調査地点および周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番35地点	
①	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目597番1地点	
②	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番21地点	
③	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目602番1外地点	
④	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺字釈迦堂642番地点	松尾 1983
⑤	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺字釈迦堂621番外地点	大三輪・手塚ほか 1989
⑥	釈迦堂東やぐら群(No.157)		
⑦	上杉氏憲邸跡(No.258)	浄明寺一丁目699番外地点	馬淵・岡 1995
⑧	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目652番8地点	森 2009
⑨	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺字釈迦堂658番地点	手塚 1990
⑩	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目661番外地点	森 2000
⑪	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目676番1地点	
⑫	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目691番4地点	
⑬	杉本寺周辺遺跡群(No.158)	二階堂字杉本912番1外地点	馬淵 2002
⑭	杉本寺周辺遺跡群(No.158)	二階堂字杉本932番1外地点	宮田・滝澤 2007
⑮	杉本寺やぐら群(No.90)	二階堂字杉本903番地点	田代ほか 1996
⑯	杉本寺やぐら群(No.90)	二階堂字杉本896番地点	田代ほか 1996
⑰	杉本寺南やぐら群(No.318)	二階堂字杉本903番地点	田代ほか 1988

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



図3 調査区位置図

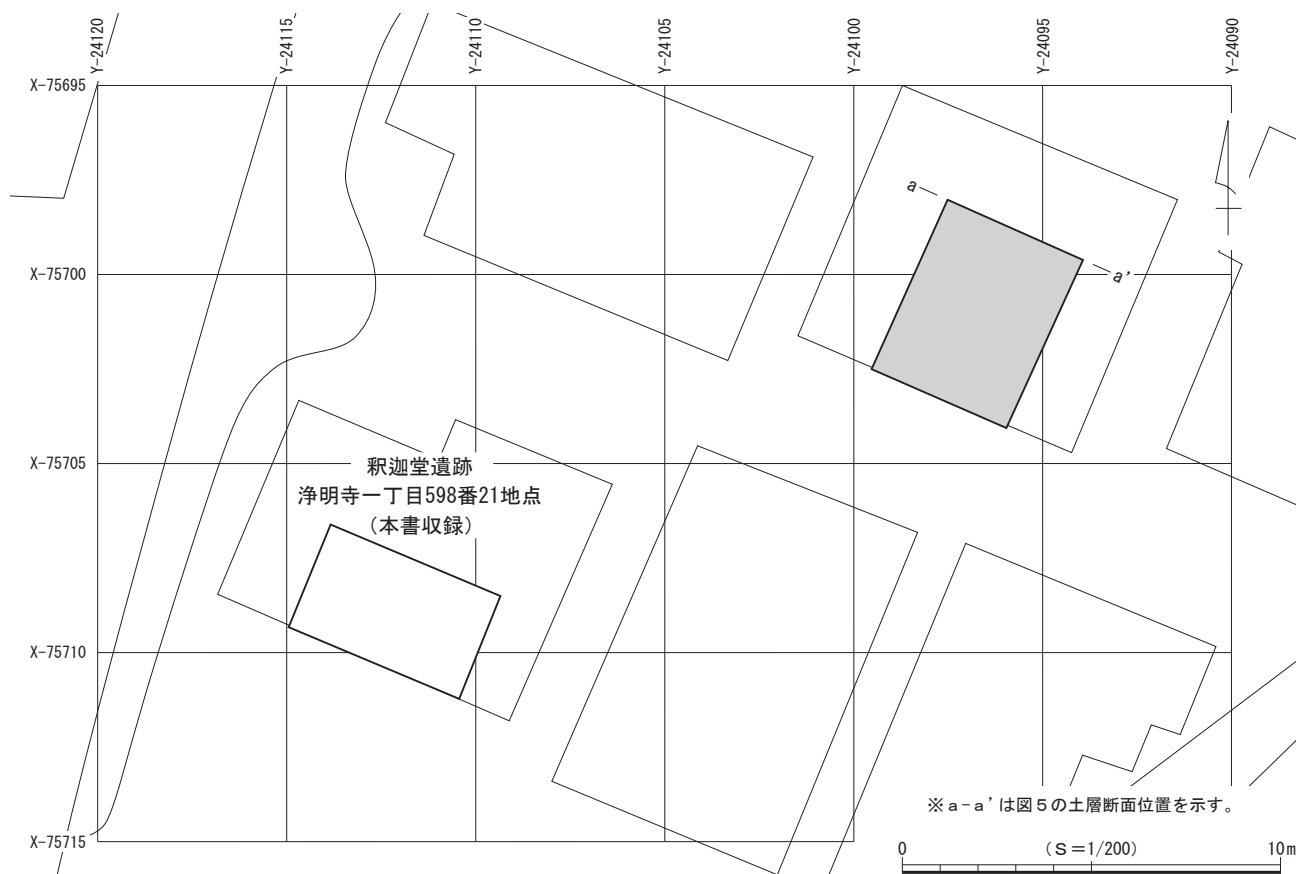


図4 調査区配置図

## 第二章 堆積土層

今回の調査では、部分的な堆積土も含めると20層に及ぶ堆積土を確認することができ、現地表面からの層厚は最大で約2.5mを測る。また、遺構確認面は第1～6面までの合計6面が認められた。ここでは遺存状態の良好な調査区北壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する土層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが平面には不明瞭であった遺構、また平面で確認されたが土層断面では不明瞭であった遺構がいくつか認められた。

現在の地表面は標高19.9mほどで、最上部に層厚50cmほどの表土(1層)が堆積している。第1面の遺構は2層上面で検出し、確認面の標高は約19.4mを測る。2層は泥岩粒を非常に多く含む灰褐色土で、層厚は15cm前後である。第2面は6層上面で検出し、確認面の標高は約19.2mを測る。6層は泥岩粒と泥岩ブロックを多量に含む締まりのある灰褐色土で、色調は2層よりも明るい。この層の直上には薄い炭層(3層)と砂質土(5層)の堆積が部分的に認められる。第3面は7～9層の上面で検出し、確認面の標高は約19mを測る。7～9層はいずれも泥岩粒や泥岩ブロックを含む灰褐色土で、7層は泥岩粒、9層は人頭大の泥岩ブロックを非常に多く含んでいる。第4面は11層上面で検出し、確認面の標高は約18.7mを測る。11層は拳大の泥岩ブロックを主体とする灰褐色土の整地層で、層上面が被熱して炭層の堆積もみられる。第5面は14層上面で検出し、確認面の標高は約18.3～18.4mで東側がやや低くなる。14層は泥岩粒と炭化物、かわらけ細片を含んだ暗灰褐色土である。最下面にあたる第6面は20層上面で検出し、確認面の標高は約17.4mである。20層は泥岩粒を微量に含み締まりのある青灰色粘土層で、層上面から15cmほどが硬化し、上面に厚さ3cmほどの硬化層が形成されている。なお、第5面から第6面の確認面までに15～19層までの5層を確認し、その層厚は1mほどであった。このうち15・17・18層は泥岩粒と泥岩ブロックを含んだ整地層であり、遺構は検出されなかったものの複数面にわたる生活面が形成されていたと考えられる。

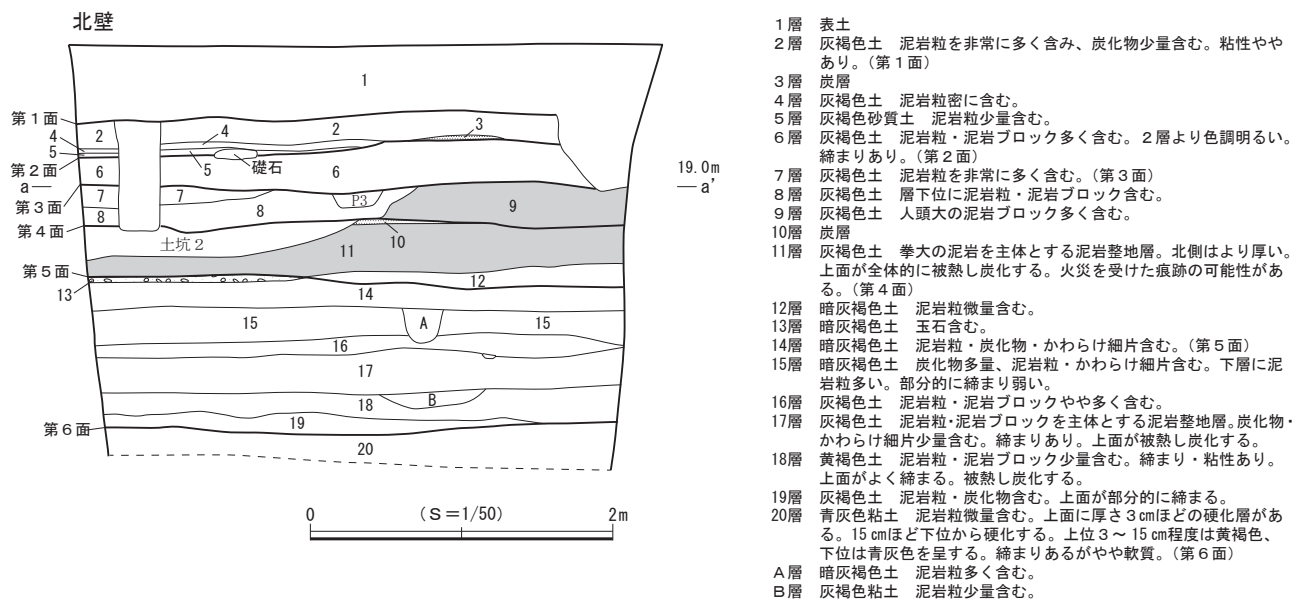


図5 調査区土層断面図



### 第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～6面までの合計6面である。第1～5面までは調査区全面の調査を行ったが、安全対策のため現地表面から2m下位に達した段階で掘り止め、調査区の南北両壁際を幅1mのトレンチ状に掘り下げて第6面の調査を行った。検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑8基、ピット8基と少なく、出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して4箱を数える。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～6面)に説明する。

#### 第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の2層上面で検出され、確認面の標高は約19.4mを測る。2層は泥岩粒を非常に多く含む灰褐色土であり、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基とピット2基で、遺構密度は非常に希薄である(図6)。

遺物は主にかわらけ、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀代に属すると考えられる。

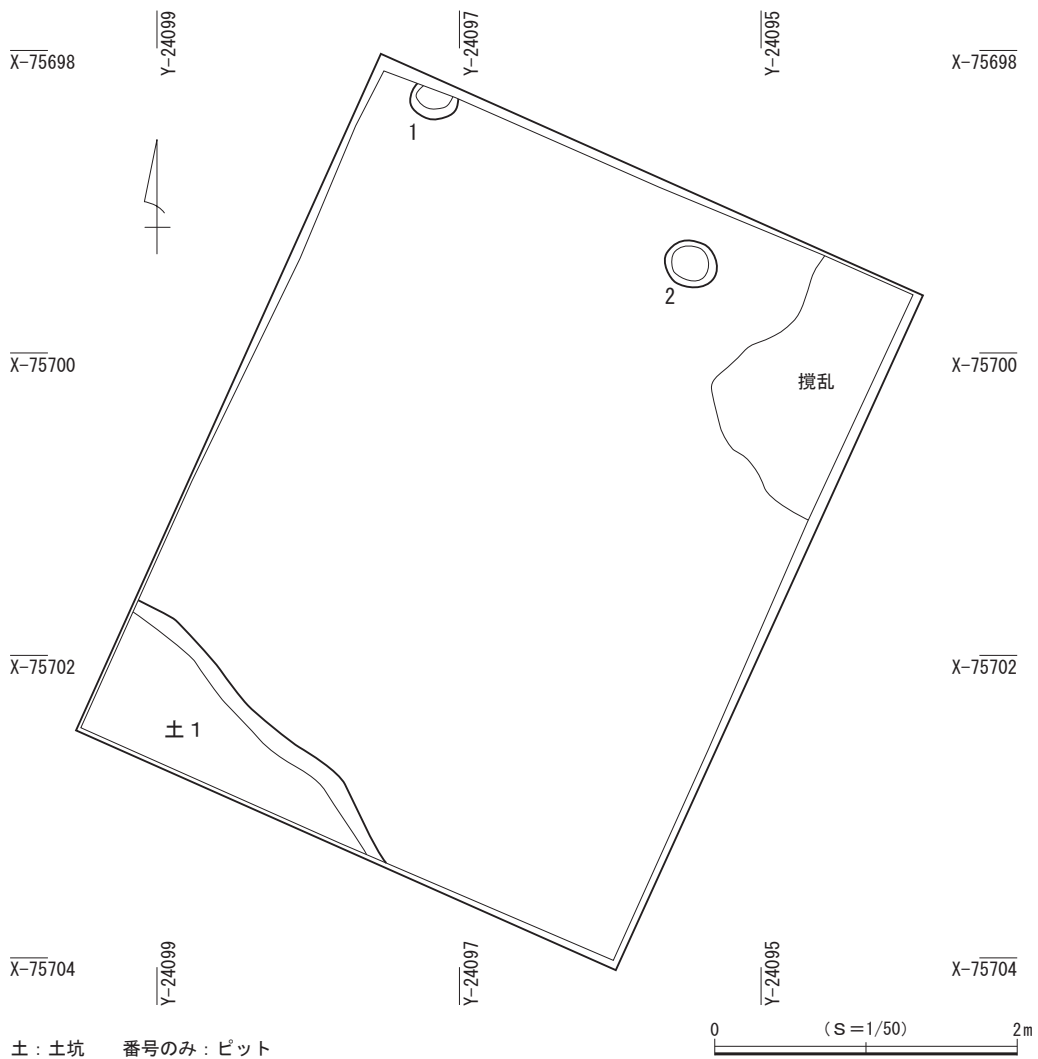


図6 第1面 遺構分布図

### (1) 土 坑

第1面では、1基を検出した。調査区南西壁際に位置しており、大半が調査区外にあるため全容を把握することができなかった。

#### 土坑1 (図7)

調査区南西壁に位置し、他の遺構と重複せず単独で検出した。本址の大半が調査区外の南側へと延びており、全容の把握には至らなかった。平面形は判然としないが、調査区内では北西から南東へ向かい緩やかに蛇行するプランが確認されている。底面はほぼ平坦で、壁は開いて立ち上がる。坑底面の標高は19.04mを測る。規模は南北現存長2.36m、東西現存長99cm、深さ52cmで、覆土は泥岩粒を非常に多く含み、炭化物をやや多く含む暗褐色土である。

#### 出土遺物 (図8)

遺物はかわらけ3点、陶器4点、金属製品1が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

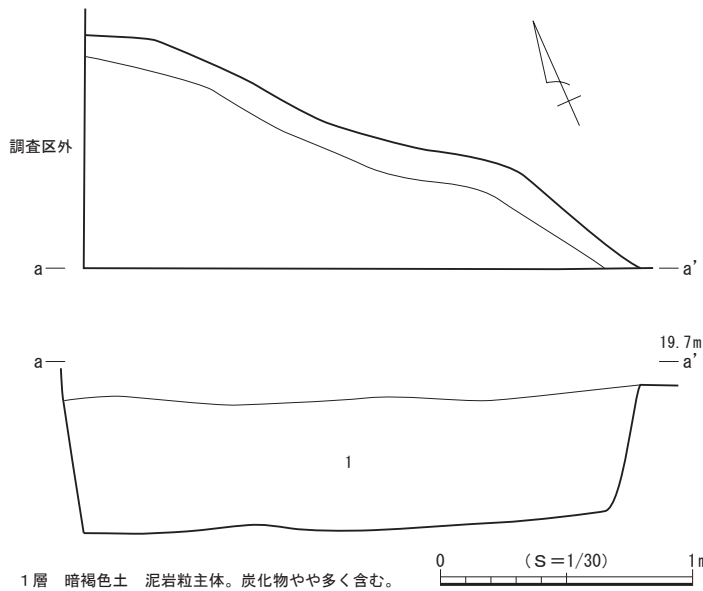


図7 第1面 土坑1

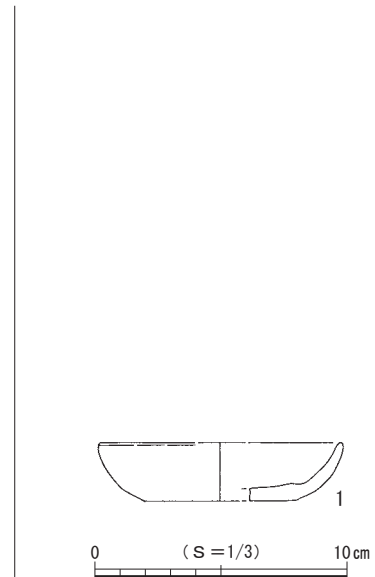


図8 第1面 土坑1 出土遺物

### (2) ピット (図6)

第1面では、2基を検出し、ともに調査区北壁近くに分布する。ピットの平面形は略円形で、規模はピット1が径30cm、深さ28cm、ピット2が径33cm、深さ18cmを測る。ピット1の覆土は径1～3cm大の泥岩ブロックと炭化物粒・かわらけ片を含む茶褐色土である。

#### 出土遺物 (図9)

ピット1からは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表9)を参照されたいが、このうち2点を図示した。

1・2はピット1から出土した、ロクロ成形によるかわらけである。2には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。

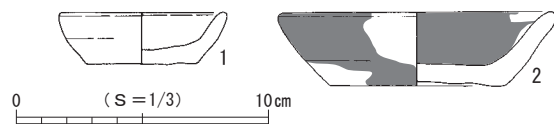


図9 第1面 ピット1 出土遺物

(3) 遺構外出土遺物 (図10)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。2には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。

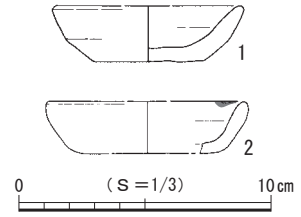


図10 第1面 遺構外出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土の6層上面で検出され、確認面の標高は約19.2mを測る。6層は泥岩粒と泥岩ブロックを多量に含む締まりのある灰褐色土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。なお、6層の直上には薄い炭層(3層)と砂質土(5層)の堆積が部分的に認められた。検出した遺構は溝状遺構1条のみで、遺構密度は希薄である(図11)。なお、調査区北壁際から安山岩の扁平な礫を検出した。調査区外の北側へ続くため明らかではないが、扁平な面を水平にして据えられていることから礎石の可能性が考えられる。

遺物は主にかわらけ、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

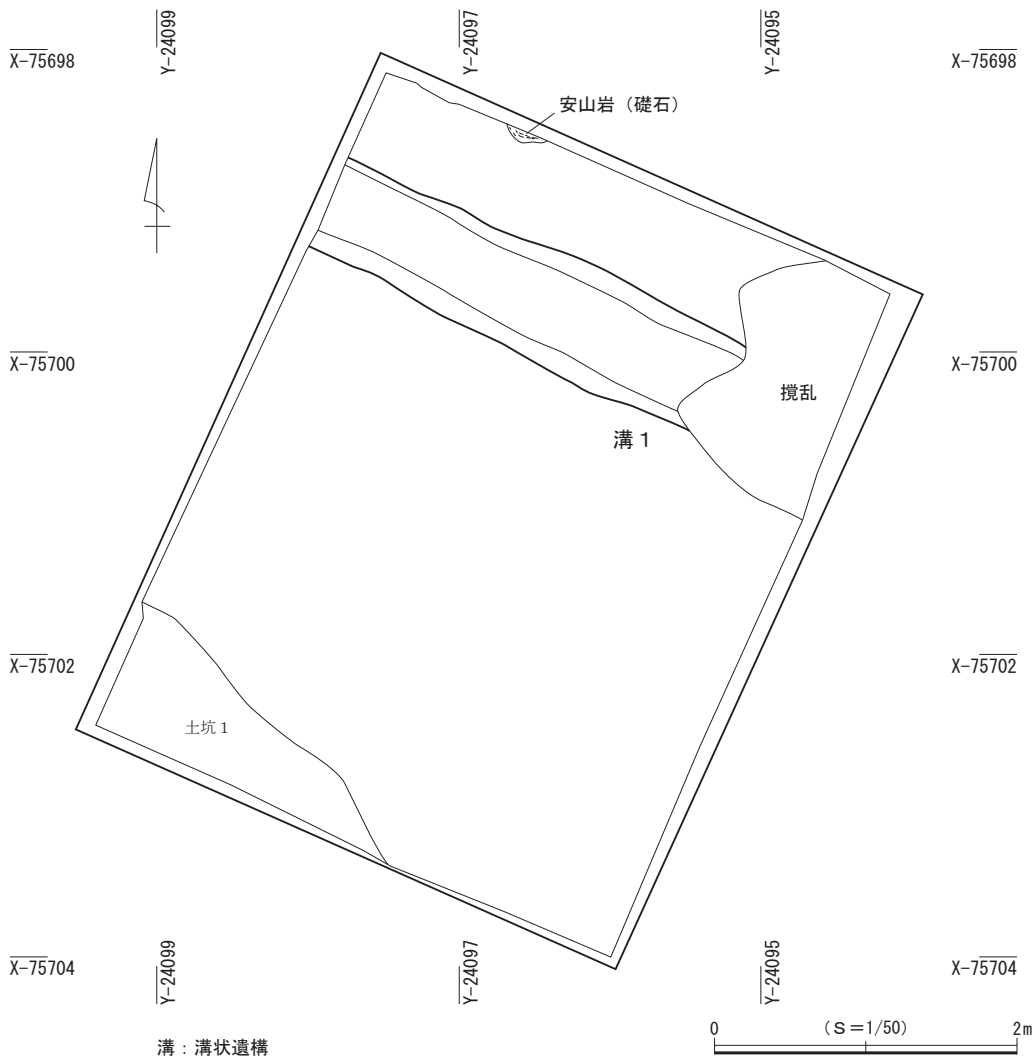


図11 第2面 遺構分布図



### (1) 溝状遺構

第2面では、1条を検出した。調査区北壁寄りに位置し、調査区外の東西両側に続くため全容を把握するには至らなかった。

#### 溝状遺構1 (図12)

調査区の北壁寄りに位置し、調査区外の東西両側に及んでいる。調査区の制約からごく一部を把握したにすぎないが、調査区壁と平行して真っすぐに延びている。検出した範囲の規模は長さ2.92m、幅は60~75cm、深さは10cmを測る。主軸方位はN-64°-Wを指す。壁は開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面形は皿状を呈する。底面の標高は東端が19.14m、西端が19.09mを測り、西側へ向かってわずかに傾斜する。

遺物はかわらけ15点、陶器2点が出土した。

### (2) 遺構外出土遺物 (図13)

第2面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち7点を図示した。

1~7はロクロ成形によるかわらけである。2には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。

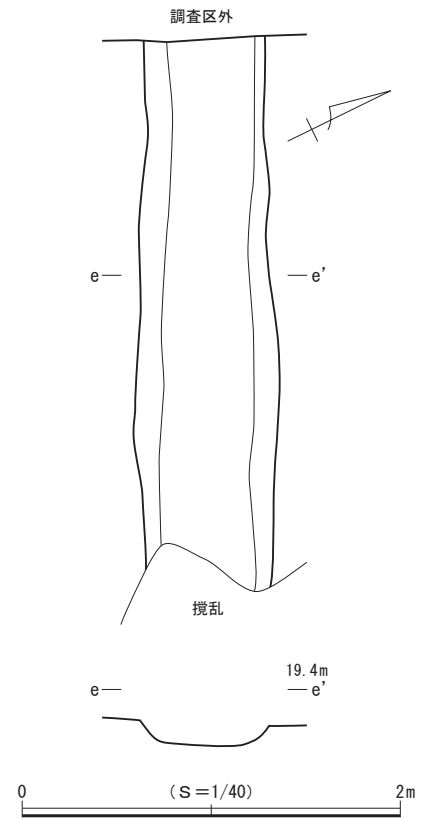


図12 第2面 溝状遺構1

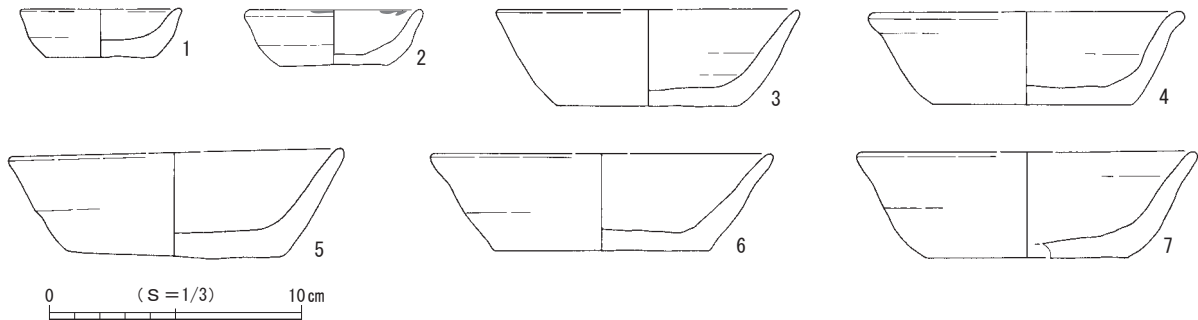


図13 第2面 遺構外出土遺物

## 第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は堆積土層の7~9層上面で検出され、確認面の標高は約12.9mを測る。7~9層はいずれも泥岩粒や泥岩ブロックを含む灰褐色土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出された遺構はピット2基と遺構密度が非常に希薄で、ともに調査区北壁際中央付近に位置している (図14)。

遺物は主にかわらけ、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀前葉~中葉頃に属すると考えられる。

### (1) ピット (図14)

第3面では、2基を検出した。ともに調査区北壁際中央付近に位置する。全容を把握できたピット4の平面形は円形を呈し、規模は48cm、深さ12cmを測る。ピット3の覆土は泥岩ブロックや泥岩粒を含ま

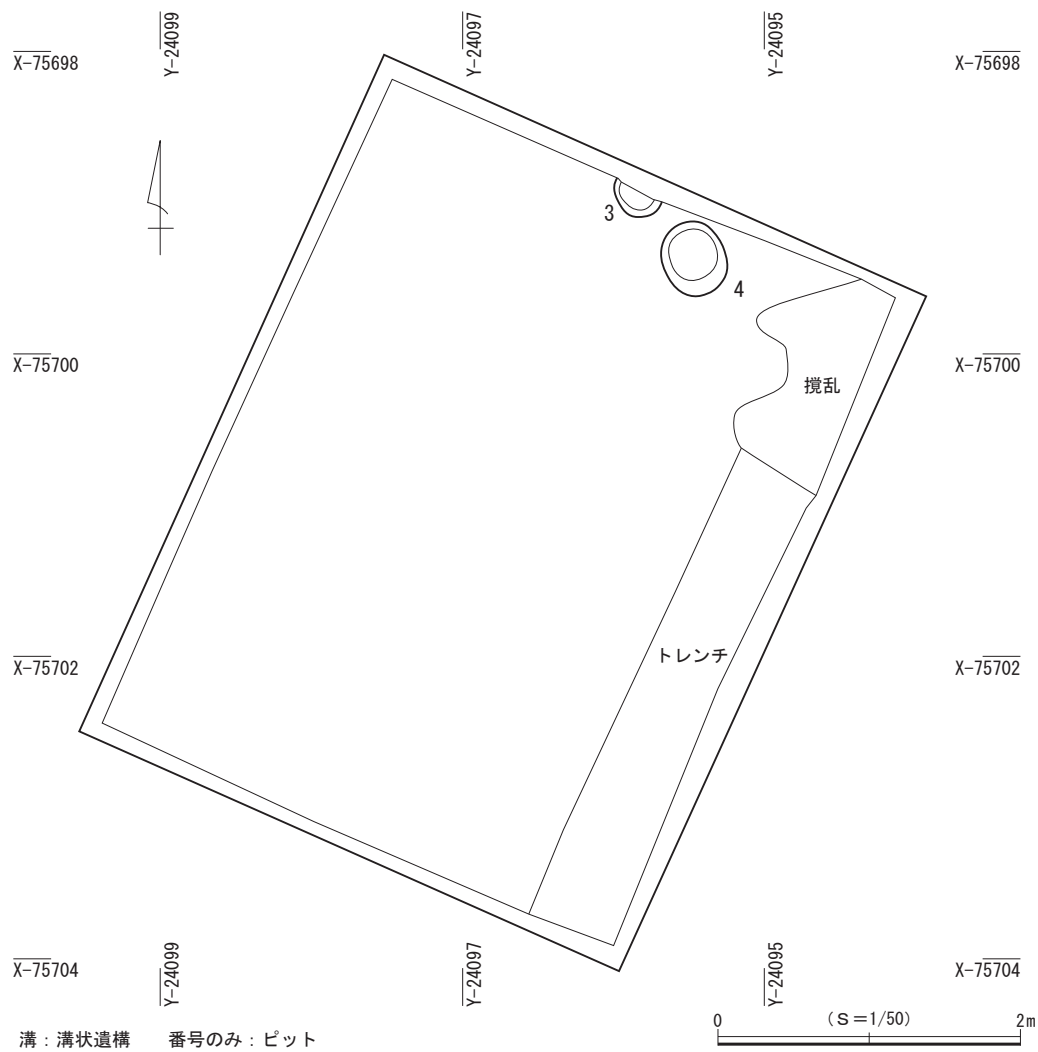


図14 第3面 遺構分布図

ない灰褐色土である。

ピット4からは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表9)を参照されたい。

(2) 遺構外出土遺物(図15)

第3面からは遺構以外からも遺物が出土し、このうち7点を図示した。

1~3はロクロ成形によるかわらけである。4・5は瀬戸窯産の製品で、4が天目茶碗、5が折縁深皿である。6は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類である。7は備前窯産の挿鉢である。

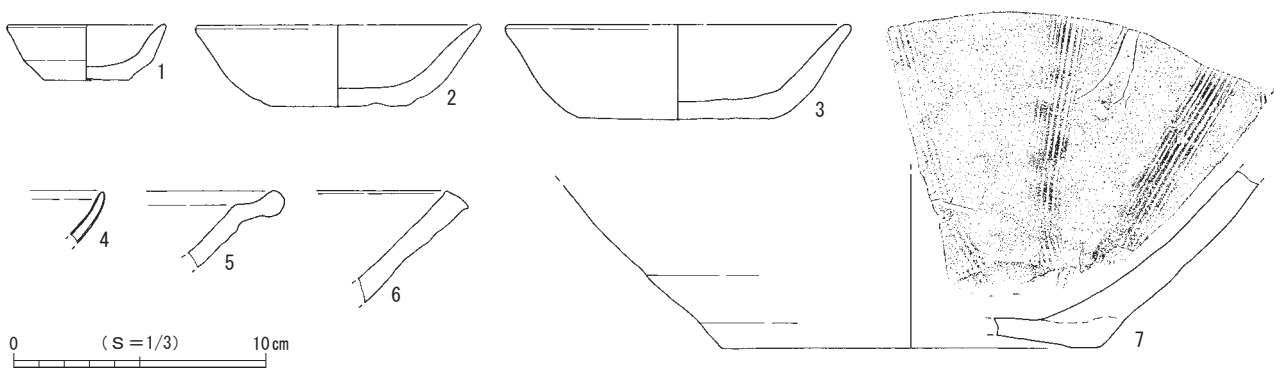


図15 第3面 遺構外出土遺物

## 第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は堆積土層の11層上面で検出され、確認面の標高は約18.7mを測る。11層は拳大の泥岩ブロックを主体とする灰褐色土の整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑5基、ピット1基で、調査区全面に遺構が分布していた(図16)。なお、第4面の遺構確認面では遺構の周囲を中心に熱を受けて炭化している様相が確認された。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

### (1) 土坑

第4面では、5基を検出した。調査区全面に分布し、大きさが長軸2mを超える大形のものとは0.6～1.0mの幅に収まるものとの2種類に区分される。大形の土坑は土坑2・3の2基で、重複して検出された。土坑4～6の3基は、調査区南壁に近接して列状に並んで確認された。

### 土坑2(図17)

調査区北部に位置し、南側で土坑3と重複して壊している。全体のおそらく半分以上が調査区外の北

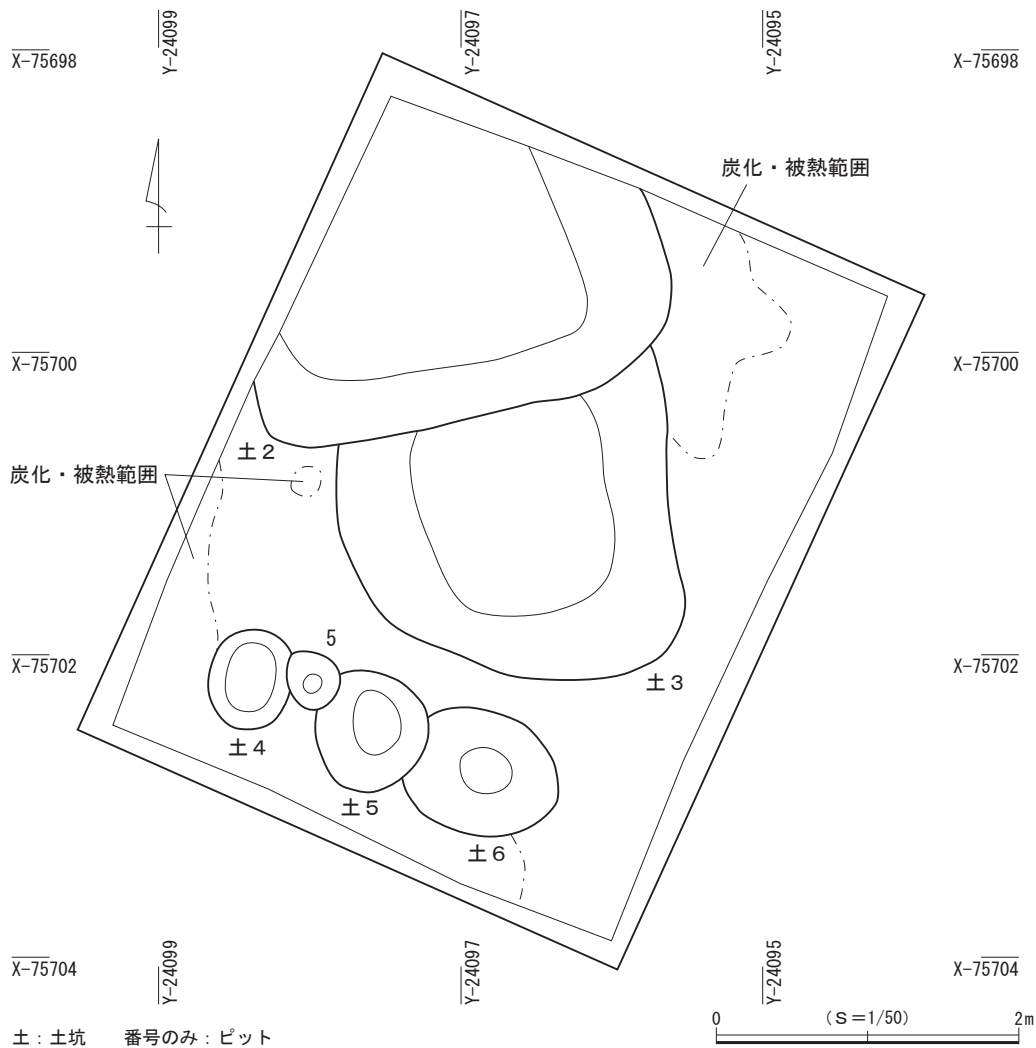


図16 第4面 遺構分布図



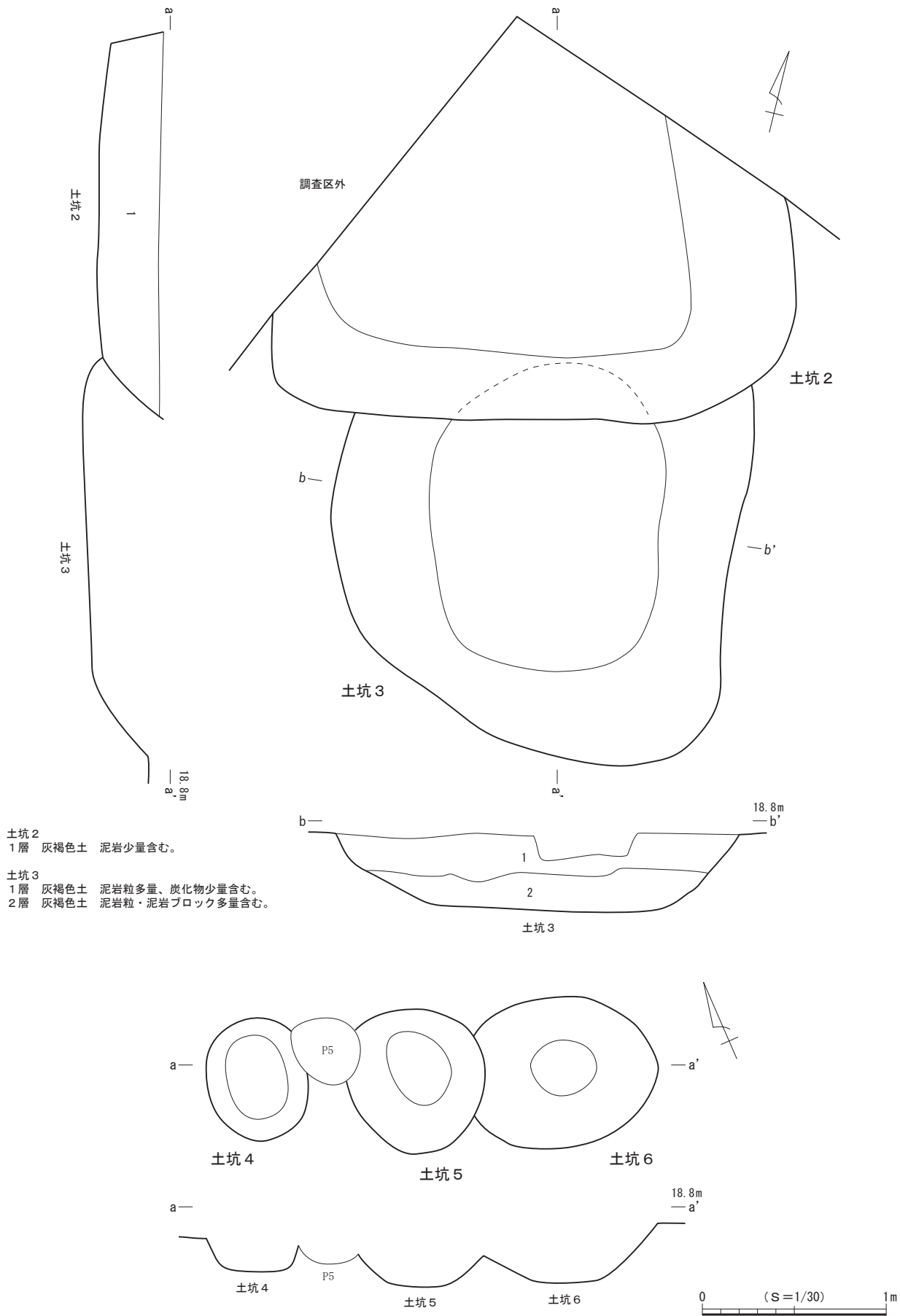


図17 第4面 土坑2～6

側にあると考えられ、全容を把握できなかった。平面形は隅の丸い方形基調の形状と推定され、底面はごく緩やかな凹凸をもつ。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は東西2.85m、南北現存長2.16m、深さ36cmと大形で、坑底面の標高は18.40mを測る。主軸方位はN-74°-Eを指す。覆土は泥岩ブロックを少量含む灰褐色土である。

#### 出土遺物 (図18)

遺物はかわらけ28点、磁器1点、陶器3点、土器1点が出土し、このうち3点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は青白磁の梅瓶である。3は土器で、火鉢あるいは香炉と思われる破片である。

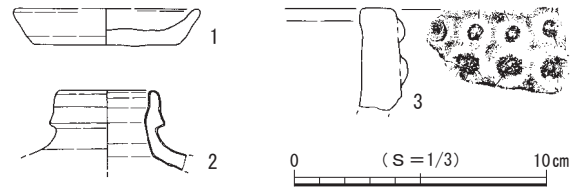


図18 第4面 土坑2出土遺物

#### 土坑3 (図17)

調査区中央に位置し、北側で土坑2と重複して全体の約1/4が壊されている。現存範囲から平面形を推定すると、東側が内側に湾曲するやや歪な不整楕円形とみられ、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸現存長2.10m、短軸2.20m、深さ40cmと大形で、坑底面の標高は18.34mを測る。主軸方位はN-5°-Wを指す。覆土は2層に分層され、1層は泥岩粒を多量、炭化物を少量含む灰褐色土で、2層は泥岩粒と泥岩ブロックを多量に含む灰褐色土である。

#### 出土遺物 (図19)

遺物はかわらけ4点、陶器8点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

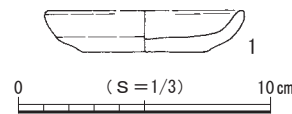


図19 第4面 土坑3出土遺物

#### 土坑4 (図17)

調査区南西部に位置し、北東側でピット5と重複し壁の一部が壊されているが、ほぼ全容を把握できた。平面形は整った楕円形で、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸64cm、短軸55cm、深さ14cmで、坑底面の標高は18.45mを測る。主軸方位はN-8°-Eを指す。

遺物はかわらけ2点が出土した。

#### 土坑5 (図17)

調査区南側中央に位置し、北側でピット5と重複して壁の一部が壊され、東側で土坑6と重複して西壁の一部を壊している。平面形は略円形で、底面は水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸78cm、短軸74cm、深さ16cmで、坑底面の標高は18.38mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑6 (図17)

調査区南側の中央東寄りに位置し、西側で土坑5と重複して壁の一部が壊されている。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長94cm、短軸80cm、深さ31cmで、坑底面の標高は18.40mを測る。主軸方位はN-72°-Wを指す。

遺物はかわらけ1点が出土した。

## (2) ピット(図16)

第4面では、1基を検出した。ピット5は調査区南西部に位置し、土坑4・5と重複してそれぞれの壁を壊している。ピットの平面形は略円形を呈し、規模は径40cm、深さ11cmを測る。

遺物は出土しなかった。

## (3) 遺構外出土遺物(図20)

第4面からは遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち7点を図示した。

1～7はロクロ成形によるかわらけである。1には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。

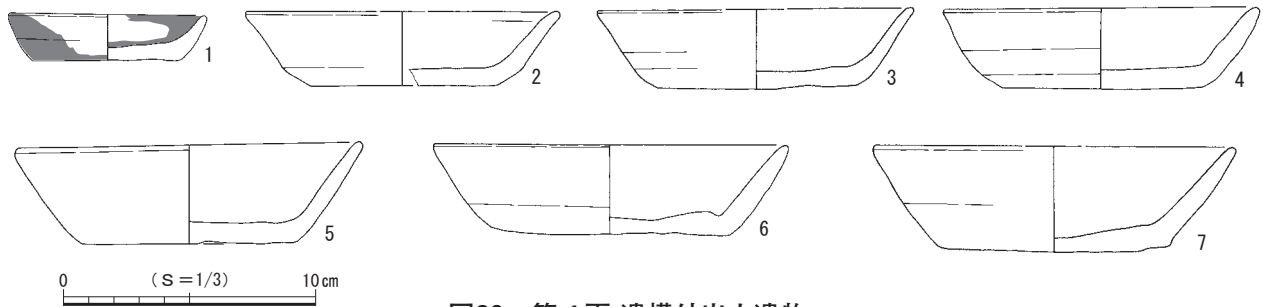


図20 第4面 遺構外出土遺物

## 第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は14層上面で検出され、確認面の標高は約18.3～18.4mで東側がやや低くなる。14層は泥岩粒と炭化物、かわらけ細片を含んだ暗灰褐色土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑2基のみで、ともに調査区南半に位置している(図21)。なお、調査区北壁際とその南側の2ヵ所で玉石の分布範囲が認められた。調査区北壁の土層断面にある13層がこの玉石を含む土層に対応し、層の厚さは5cmほどである。調査区外の北側へと続いているが、調査範囲内では遺構に伴うものが判然としなかった。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

### (1) 土 坑

第5面では、2基を検出した。ともに調査区中央以南に位置し、調査区外の南側へと延びているため、全容を把握することはできなかった。平面形は長楕円形を基調とするものと推定され、土坑8は規模が長軸現存長3mを超える大形の土坑で、土坑7も形状から考えるとおそらく大形の部類に属するであろう。

### 土坑7(図23)

調査区西隅に位置する。調査区外の南側へと延びており、全容を把握できなかった。東側で土坑8と重複し、西壁の一部を壊している。検出範囲から平面形を推定すると楕円形あるいは長楕円形と考えられ、底面は湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は長軸現存長1.28m、短軸現存長1.64m、深さ42cmで、坑底面の標高は17.97mを測る。覆土は3層に分層され、最上部と最下部

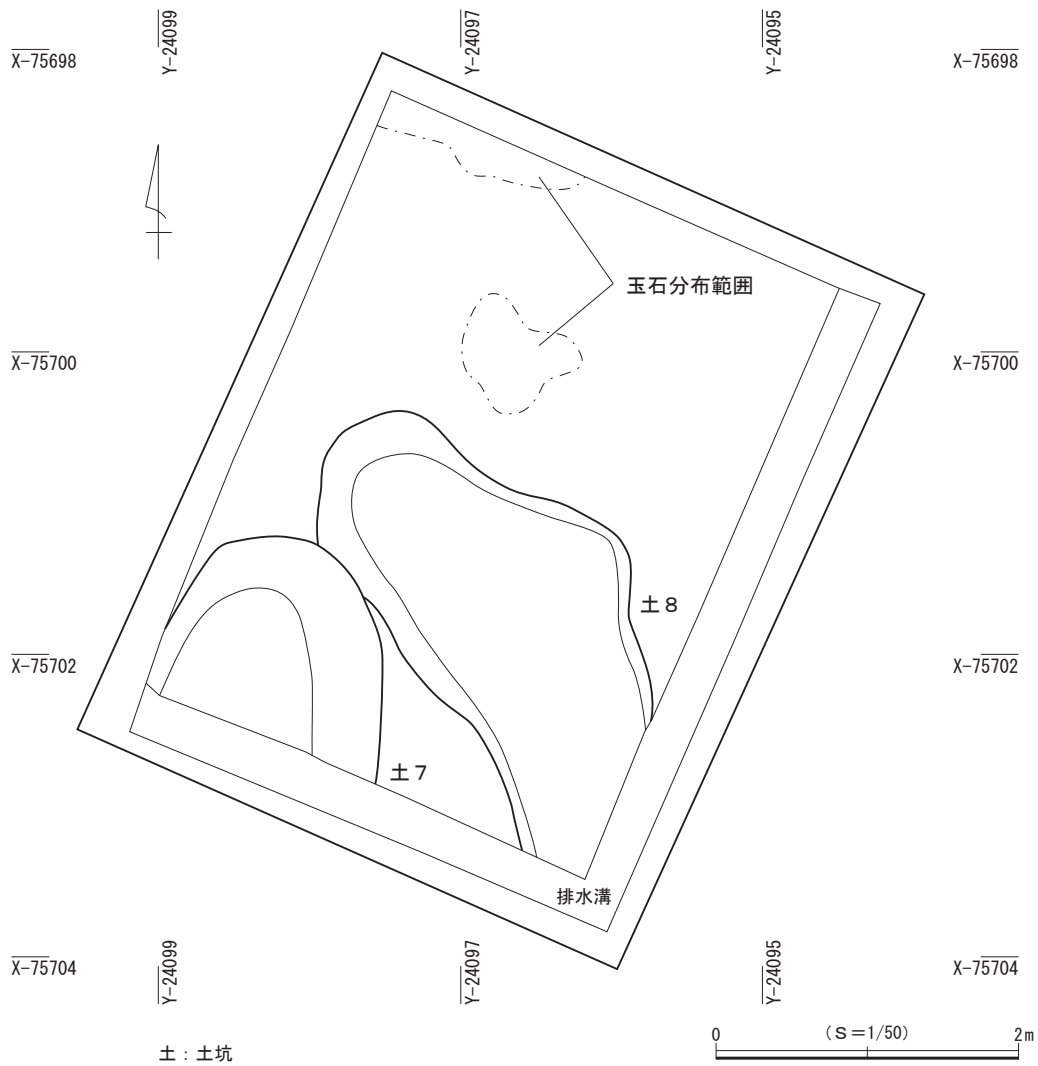


図21 第5面 遺構分布図

に堆積する1層と3層は炭層で、中位の2層は泥岩ブロックを多く含み、炭粒とかわらけ細片を含む灰褐色土である。

出土遺物 (図22)

遺物はかわらけ53点、陶器6点が出土し、このうち10点を図示した。

1～10はロクロ成形によるかわらけである。

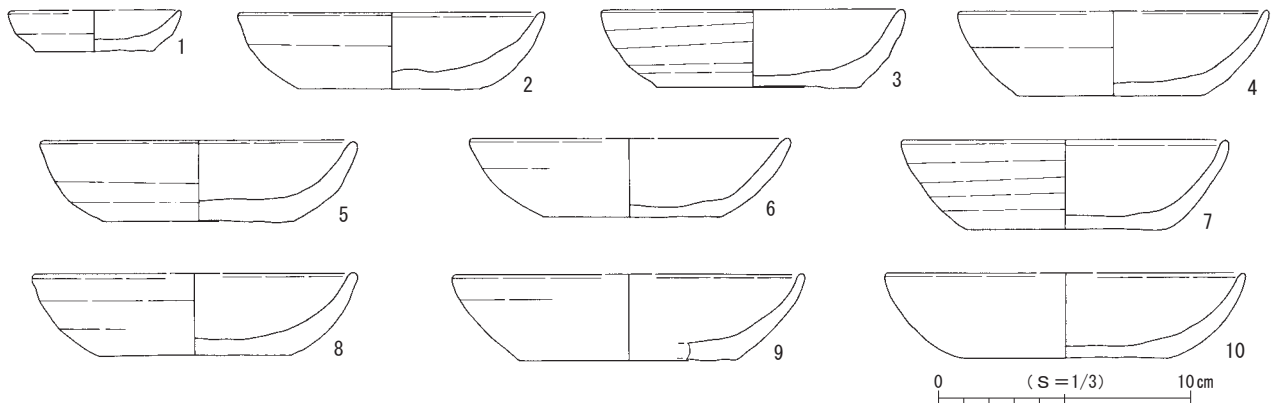


図22 第5面 土坑7 出土遺物



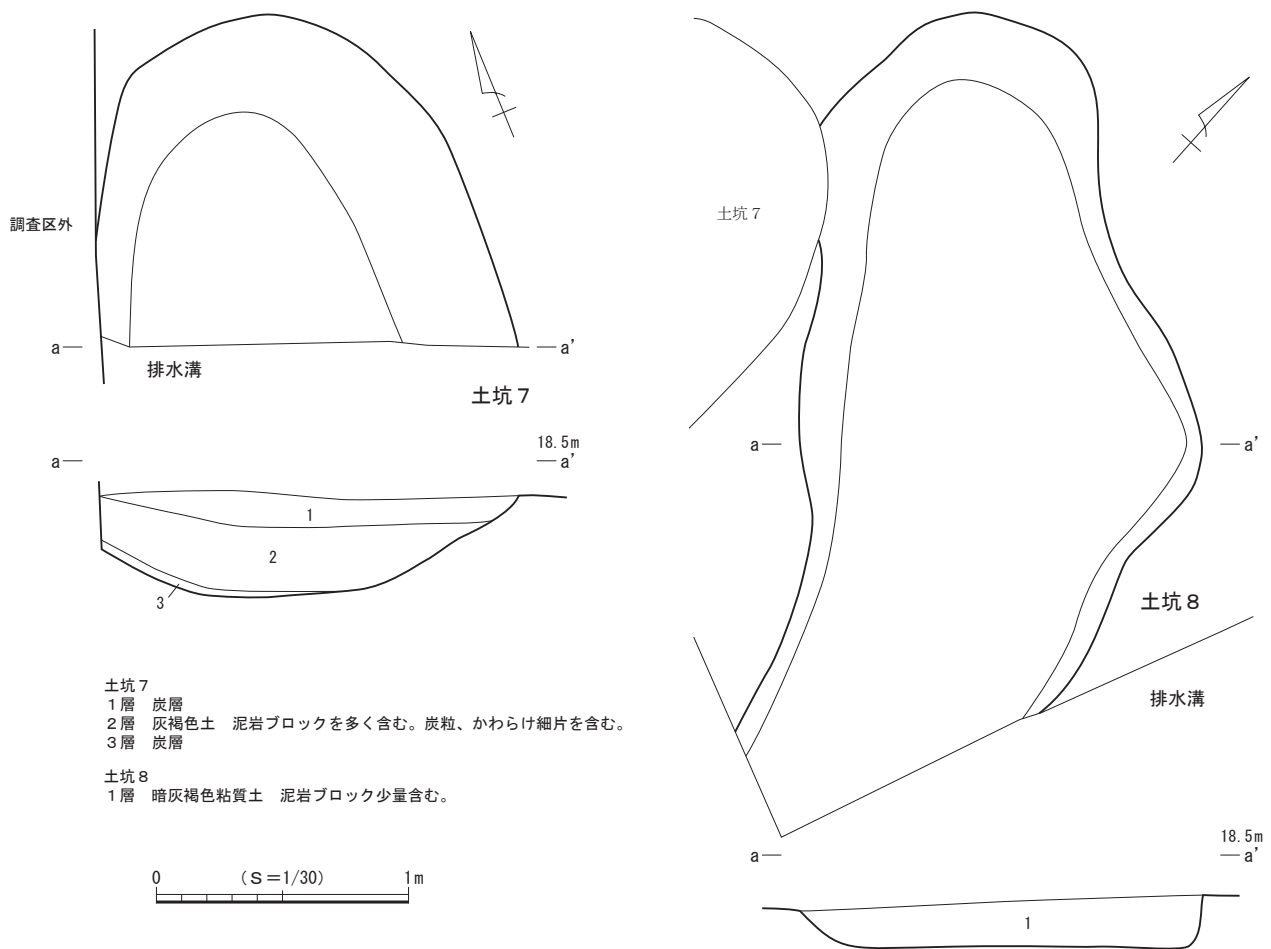


図23 第5面 土坑7・8

### 土坑8 (図23)

調査区中央から南隅にかけて位置する。調査区外の南側へと延びており、全容を把握できなかった。西側で土坑7と重複し、西壁の一部が壊されている。検出範囲から平面形を推定すると北東壁の一部が突出する不整長楕円形と考えられ、底面はほぼ水平である。壁の立ち上がりは西半と東半とで異なっており、東半はほぼ真っすぐで、西半は大きく開く。断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸現存長3.35m、短軸1.60m、深さ20cmで、坑底面の標高は18.14mを測る。覆土は泥岩ブロックを少量含む暗灰褐色粘質土である。

### 出土遺物 (図24)

遺物はかわらけ53点、磁器1点、陶器7点、土製品1点、石製品1点、金属製品1点が出土し、このうち12点を図示した。

1～9はロクロ成形によるかわらけである。3には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。10は土錘である。11は滑石製石鍋である。12は銭貨で、大観通寶(北宋・1107)である。

### (2) 遺構外出土遺物 (図25)

第5面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち16点を図示した。

1～11はロクロ成形によるかわらけである。1には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。12は瀬戸窯産の卸皿である。13・14は砥石である。15・16は鉄製の釘である。

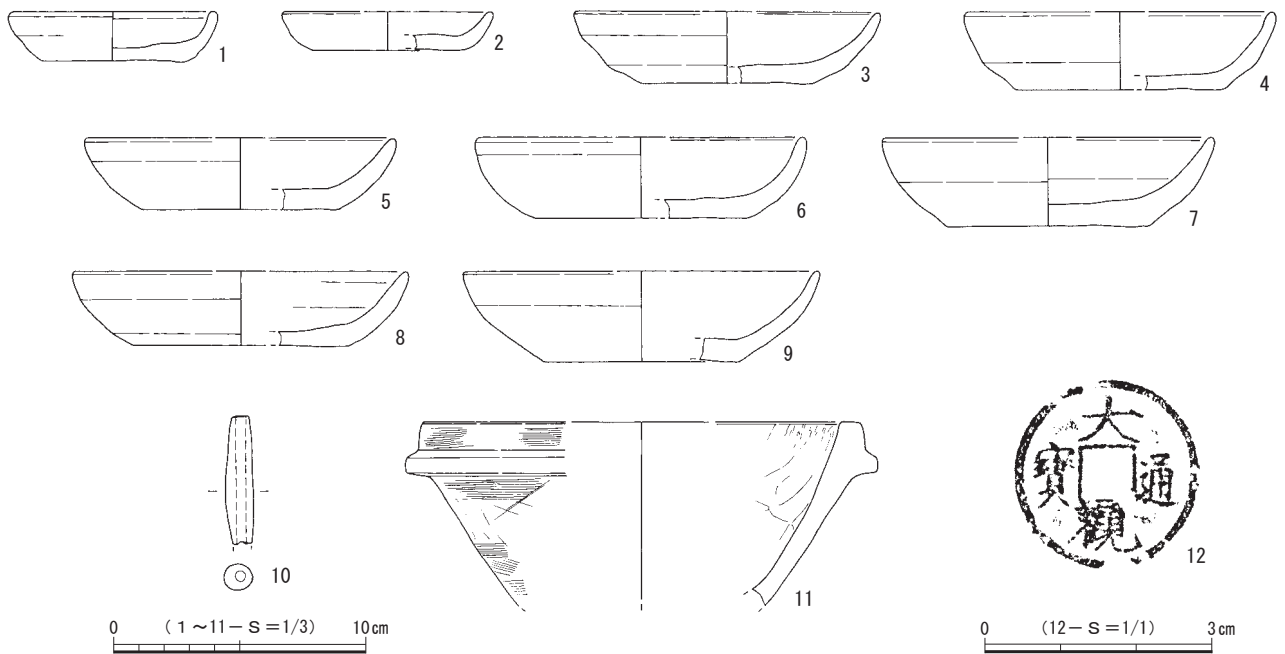


図24 第5面 土坑8出土遺物

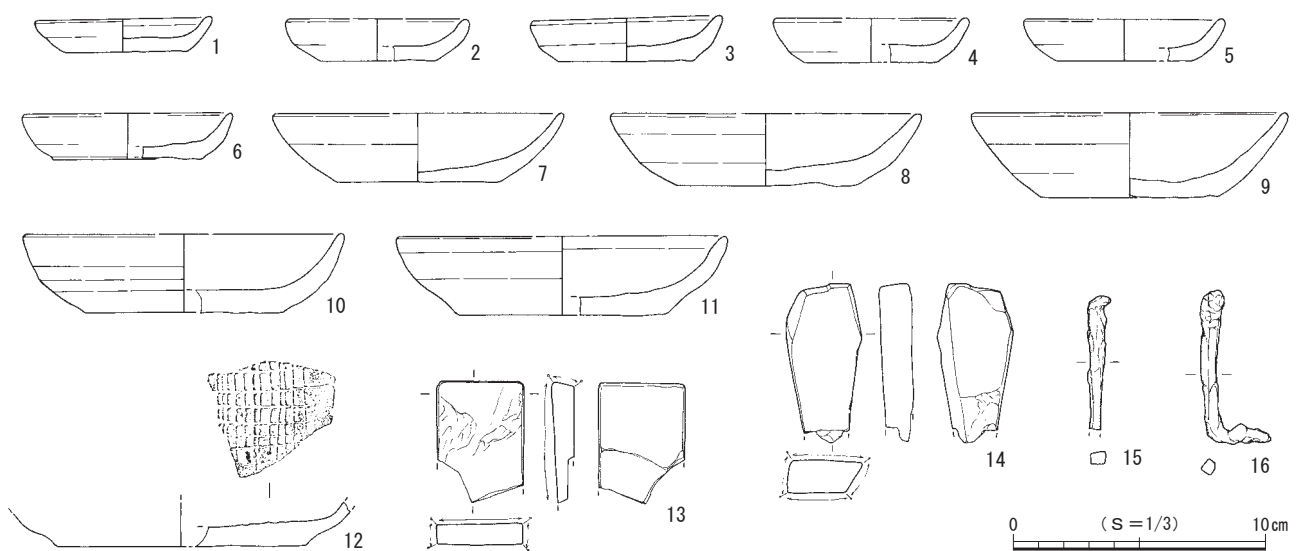


図25 第5面 遺構外出土遺物

## 第6節 第6面の遺構と遺物

第6面の遺構は堆積土層の20層上面で検出され、確認面の標高は約17.4mを測る。20層は泥岩粒を微量に含み締まりのある青灰色粘土層で、層上面から15cmほどが硬化し、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。第1～5面までは調査区全面の調査を行ったが、安全対策のため現地表面から2m下位に達した段階で掘り止め、調査区の南北両壁際を幅1mのトレンチ状に掘り下げて第6面の調査を行った。検出した遺構はピット3基のみで、いずれも北側のトレンチで確認した。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

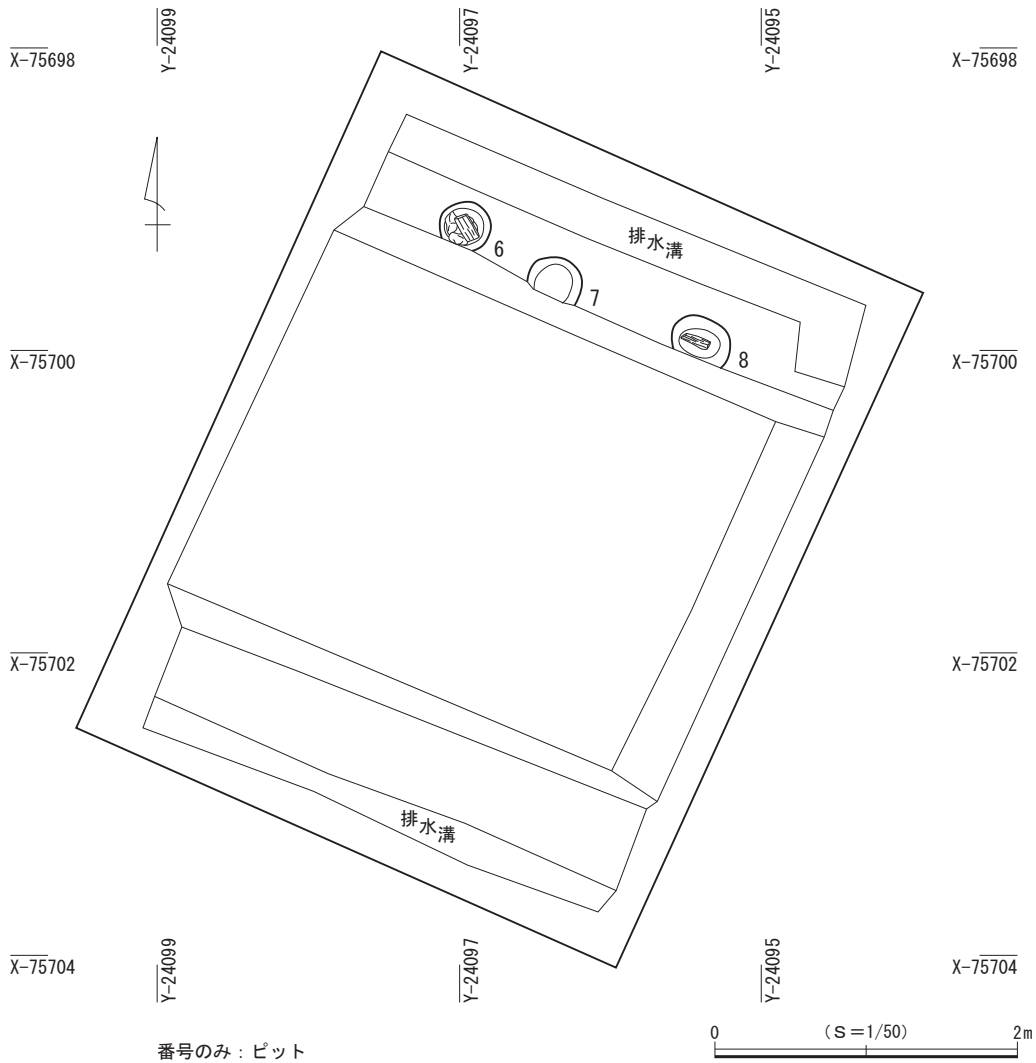


図26 第6面 遺構分布図

(1)ピット(図26)

第6面では、3基を検出した。北側のトレンチで検出され、3基が直線的に配列するが、調査面積の制約により建物などの施設を構成するものか判然としない。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は径33~40cmで深さは10~16cmと浅い。覆土は泥岩粒と泥岩ブロックを多く含む暗黄褐色土である。以下、礎板が据えられたピット6・8を図示し、説明する。また、本面のピットからは遺物は出土しなかった。

ピット6(図27)

調査区北西部に位置する。他の遺構と重複せず単独で検出した。本址の一部は調査範囲外の南側にあり全容は明らかでないが、平面形は円形を呈すると考えられる。断面形は逆台形状を呈し、規模は長軸33cm、短軸31cm、深さ14cmである。ピットの中央やや西寄りに扁平な垂円磔を3点据え、その直上に礎板を据えている。礎板の大きさは長さ18cm、幅9cm、厚さ4cmを測り、礎板上面の標高は17.36mである。

ピット8(図27)

調査区北東部に位置する。他の遺構と重複せず単独で検出した。本址の一部は調査範囲外の南側にあり全容は明らかでないが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。断面形は逆台形状を呈し、規模は長

軸40cm、短軸現存長25cm、深さ10cmである。ピットの中央やや西寄りに、礎板が底面直上から出土した。礎板の大きさは長さ18cm、幅6cm、厚さ4cmを測り、礎板上面の標高は17.36mである。

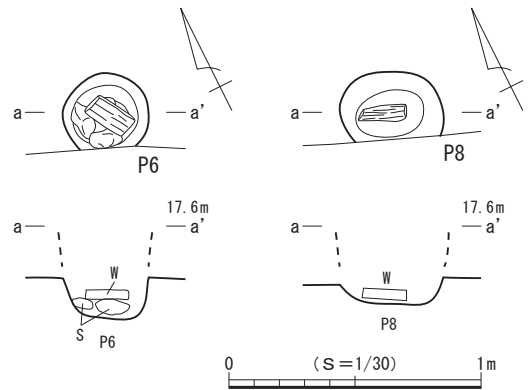


図27 第6面 ピット6・8

(2) 遺構外(14~21層)出土遺物(図28・29)

第5~6面までの間の土層(14~21層)からは多くの遺物が出土し、このうち62点を図示した。

1~44はロクロ成形によるかわらけである。34には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。45は白磁皿、46~48は白磁口元皿である。49・50は青白磁梅瓶で、特に49は全体の2/3までが復元可能であった。51~54は龍泉窯系青磁で、51~53が椀Ⅱ類、54が鉢である。55は瀬戸窯産の瓶子である。56~59は常滑窯産の製品で、56が玉縁口縁壺、57が片口碗、58・59が片口鉢Ⅰ類である。60は土器の火鉢、61・62は土錘である。

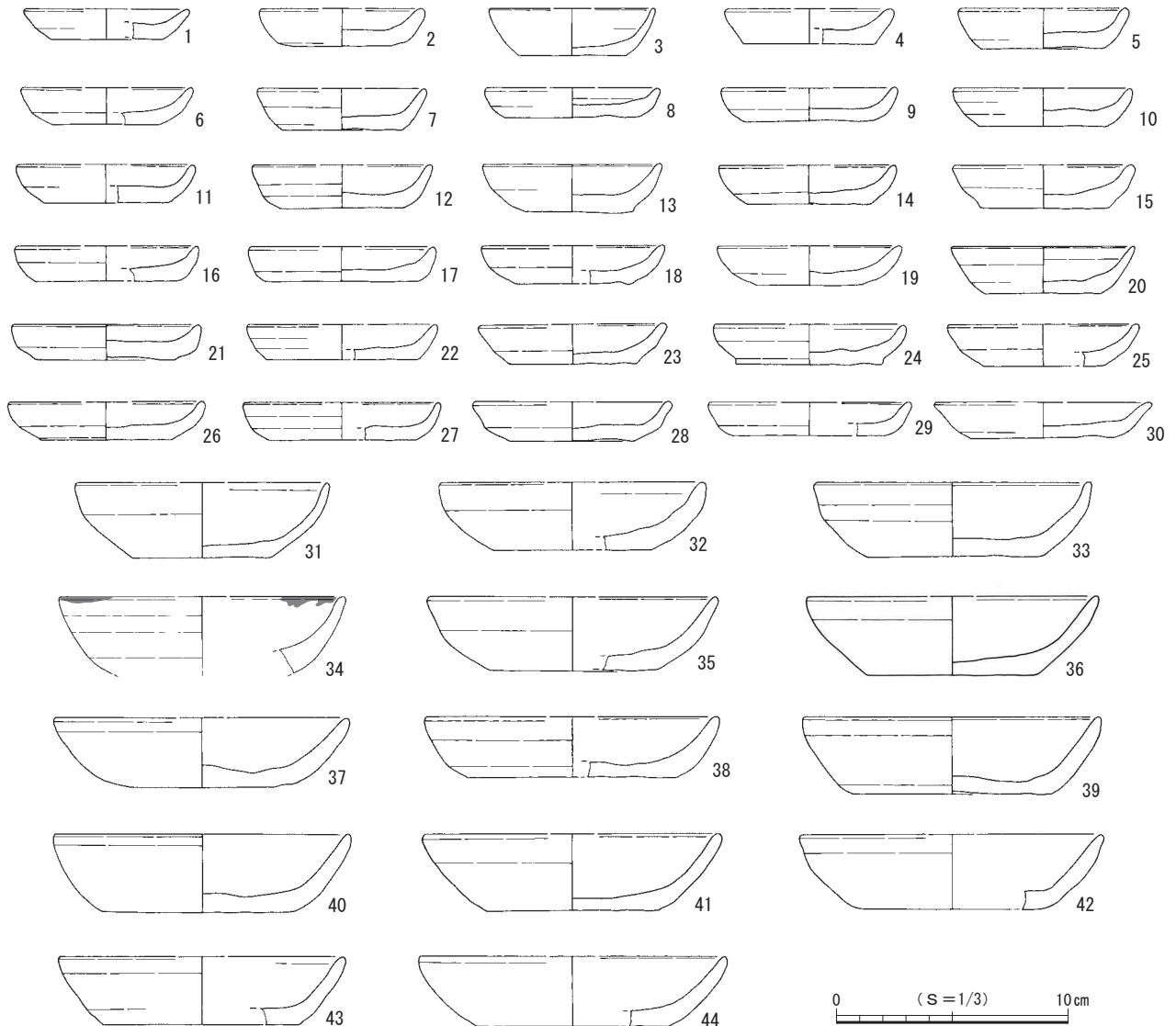


図28 第6面 遺構外(14~21層)出土遺物(1)



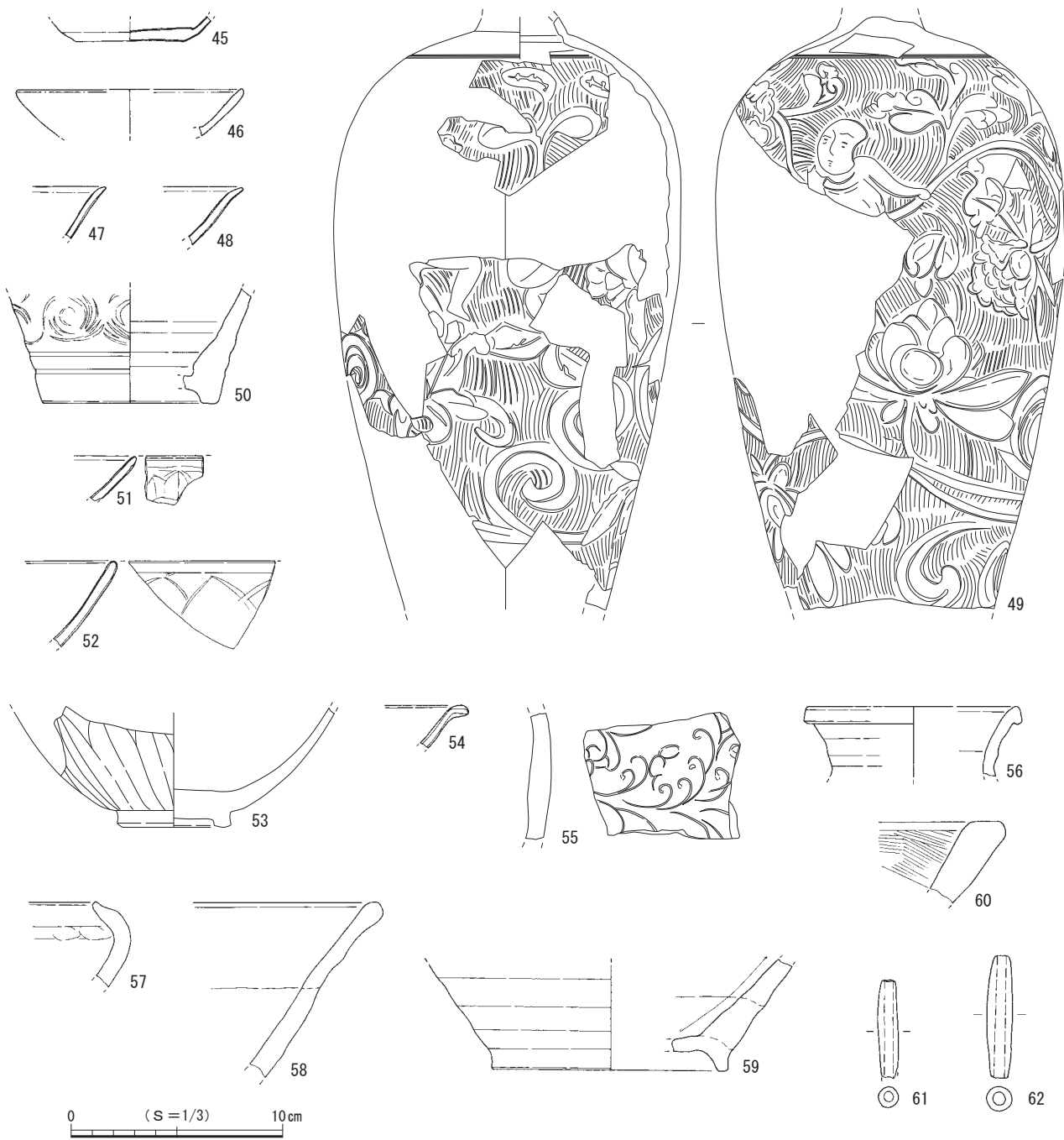


图29 第6面 遺構外(14~21層)出土遺物(2)

## 第四章 まとめ

釈迦堂遺跡は、鎌倉市街地中心部の南東側丘陵地内に位置し、釈迦堂川によって形成された「釈迦堂ヶ谷」と呼ばれる開析谷の谷戸部から丘陵部にかけての地域が包蔵地として周知されている。谷戸部を南から北へ流れる釈迦堂川は滑川の支流で、本調査地点は谷戸の入り口から約40m南側の谷奥へ入った、流路からは28mほど東側の右岸に位置する。本書所収の浄明寺一丁目598番21地点からは直線距離で12m離れた南西側にあたる。

釈迦堂ヶ谷の名称は、第三代執権北条泰時が父義時の追福のため、この地に釈迦堂を建立したことに由来する。釈迦堂遺跡の谷戸部での発掘調査は、本調査地点を含めて6例を数えるが、釈迦堂の場所は今なお特定されるに至っていない。本地点とは釈迦堂川を挟んだ対岸のやや谷奥へ入った場所という位置関係にある浄明寺字釈迦堂621番外地点(図2⑤)は、尾根中腹の斜面部を削って広い平場を造成しており、そこから竪穴状遺構、井戸、道路状遺構、溝、柵や塀と考えられる柱列、石列、大型土坑、やぐらなど多様な遺構群が検出されている(大三輪・手塚ほか 1989)。これらの遺構は14世紀中頃から15世紀初頭にかけて位置づけられることから、本地点の第1・2面とはほぼ同時期に営まれていたと考えられる。

今回の調査では、遺構確認面は第1～6面までの合計6面である。第1～5面までは調査区全面の調査を行ったが、現地表面から2m下位に達した段階で安全対策のため掘り止め、調査区の南北両壁際を幅1mのトレンチ状に掘り下げて第6面の調査を行った。検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑8基、ピット8基と少なく、出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して4箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

### 〈第1面〉

第1面の遺構は堆積土層の2層上面で検出され、確認面の標高は約19.4mを測る。2層は泥岩粒を非常に多く含む灰褐色土であり、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基とピット2基で、遺構密度は非常に希薄で遺構の性格も判然としない。

遺物は主にかわらけ、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀代に属すると考えられる。

### 〈第2面〉

2面の遺構は堆積土の6層上面で検出され、確認面の標高は約19.2mを測る。6層は泥岩粒と泥岩ブロックを多量に含む締まりのある灰褐色土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。なお、6層の直上には薄い炭層(3層)と砂質土(5層)の堆積が部分的に認められた。本書収録の浄明寺一丁目598番21地点でも第1面において焼土と炭化物が部分的に密集するところが認められ、火災の痕跡と捉えられよう。また、浄明寺字釈迦堂621番外地点でも炭層が確認され、調査者は大きな火災があったことを推定している。

検出した遺構は溝状遺構1条のみで、遺構密度は希薄である。規模は幅が70cmほどの真っすぐな溝で、調査区を東西に横断して釈迦堂川の流れる西側へ向かって傾斜していくことから、排水施設としての機能をもつ可能性がある。なお、調査区北壁際から安山岩の扁平な礫を検出した。扁平な面を水平にして据えられていることから礎石の可能性が考えられるが、調査区の制約によりその広がりや性格は把握できなかった。

遺物は主にかわらけ、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

### 〈第3面〉

第3面の遺構は堆積土層の7～9層上面で検出され、確認面の標高は約12.9mを測る。7～9層はいずれも泥岩粒や泥岩ブロックを含む灰褐色土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出された遺構はピット2基のみで、第1・2面と同様に遺構密度は非常に希薄である。

遺物は主にかわらけ、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

### 〈第4面〉

第4面の遺構は堆積土層の11層上面で検出され、確認面の標高は約18.7mを測る。11層は拳大の泥岩ブロックを主体とする灰褐色土の整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑5基、ピット1基で、調査区全面に遺構が分布していた。土坑は平面形は楕円形ないしは隅丸方形を基調とし、規模は長軸が2mを超す大形のものと、長軸0.6～1mほどの幅に収まるものとに二分できる。大形の土坑は軸をほぼ揃えて重複して検出され、標準的な規模の3基は調査区南壁に近接して列状に並んで確認された。なお、第4面の遺構確認面では遺構の周囲を中心に被熱して炭化している様相が確認され、第2面と同様に火災の痕跡として捉えられよう。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

### 〈第5面〉

第5面の遺構は14層上面で検出され、確認面の標高は約18.3～18.4mで東側がやや低くなる。14層は泥岩粒と炭化物、かわらけ細片を含んだ暗灰褐色土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑2基のみで、ともに調査区南半に位置している。調査区外へと広がるため全容は把握できなかったが、平面形は長楕円形を基調とし、規模は長軸3mを超える大形の土坑と考えられる。前述のように第4面でも大形の土坑が検出されていることから、第5面と第4面を通じて似通った土地利用がなされていた可能性が考えられる。なお、調査区北壁際とその南側の2ヵ所で玉石の分布範囲が認められ、堆積の厚さは5cmほどである。調査区外の北側へと続いていおり、調査範囲内では遺構との関わりが明瞭ではなく、その性格については判然としなかった。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

### 〈第6面〉

第6面の遺構は堆積土層の20層上面で検出され、確認面の標高は約17.4mを測る。20層は泥岩粒を量に含み締まりのある青灰色粘土層で、層上面から15cmほどが硬化し、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。第6面の調査は、安全対策のため現地表面から2m下位に達した段階で掘り止め、調査区の南北両壁際を幅1mで掘り下げてその範囲のみ行った。検出した遺構はピット3基で、調査区北側に並んで確認された。このうち2基のピットに礎板が伴っており、未調査区に礎板建物が展開する可能性を示

す調査成果が得られた。

遺物は主にかわらけ、舶載磁器類、陶器類などが出土している。これらの遺物の中で、全体の3/4ほどが残存し、器形復元可能な青白磁梅瓶の出土が特筆される。これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

大三輪龍彦・手塚直樹ほか 1989『神奈川県鎌倉市 浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡』浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団

齋木秀雄 2012『田楽辻子周辺遺跡』鎌倉遺跡遺跡調査会第80集 有限会社 鎌倉遺跡調査会

田代郁夫ほか 1988『報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書－昭和62年度鎌倉市浄明寺地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査－』報国寺境内やぐら発掘調査団

田代郁夫ほか 1996「鎌倉所在の『やぐら』群」『鎌倉市中世石窟遺構の調査』東国歴史考古学研究所報告第7集 東国歴史考古学研究所

手塚直樹 1990『釈迦堂田楽辻子遺跡 浄明寺字釈迦堂658番地点』浄明寺田楽辻子遺跡発掘調査団

松尾宣方 1983「6. 釈迦堂跡」「10. 釈迦堂跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ(昭和46年度～52年度)』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄・岡 陽一郎 1995「上杉氏憲邸跡(No.258) 浄明寺一丁目699番外地点」『平成6年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 2002『杉本寺周辺遺跡群 二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告書』杉本寺周辺遺跡発掘調査団

宮田 眞・滝澤晶子 2007『神奈川県・鎌倉市 杉本寺周辺遺跡群発掘調査報告書』株式会社 博通

森 孝子 2000「田楽辻子周辺遺跡(No.33) 鎌倉市浄明寺一丁目661番外」『平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 鎌倉市教育委員会

森 孝子 2009「田楽辻子周辺遺跡」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980



表2 第1面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑1 出土遺物 (図8)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.6)	(6.0)	2.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	1/4
ピット1 出土遺物 (図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.5	4.5	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 淡黄橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	10.7	7.0	2.9	全体に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	略完形
第1面 遺構外出土遺物 (図10)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(4.4)	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.6)	2.1	口唇部に煤付着 底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第2面 遺構外出土遺物 (図13)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.2)	(4.4)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8~6.9	4.2	2.1~2.2	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.2)	3.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.4)	3.6~3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.1)	8.6	4.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	4/5
6	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(8.6)	3.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
7	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(8.0)	4.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	1/3

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第3面 遺構外出土遺物 (図15)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	3.5	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	(6.0)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(8.0)	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	1/3
4	陶器	瀬戸 天目茶碗	-	-	現 2.0	胎土: 緻密 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰黒色	口縁部 小破片
5	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 2.9	釉が部分的に剥離 胎土: 緻密 色調: 胎土-灰色、釉-淡灰黄色 備考: 古瀬戸中期様式	口縁部 小破片
6	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.4	胎土: 粗、白色粒 色調: 明灰色	口縁部 小破片
7	陶器	備前窯 播鉢	-	(15.0)	現 7.1	内面摩耗、7条一単位の播目 胎土: 硬質 色調: 暗褐色~赤褐色	底部 小破片

表5 第4面 出土遺物観察表

法量内( ) = 推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑2 出土遺物 (図18)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.8)	1.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	1/3
2	磁器	青白磁 梅瓶	(4.0)	-	現 3.1	二次焼成 色調: 胎土-乳白色、釉-淡青色	口縁部 小破片
3	土器	火鉢か香炉	-	-	現 4.0	外面-連珠貼り付け文 胎土: 緻密 色調: 橙色 焼成: 良好	口縁部 小破片
土坑3 出土遺物 (図19)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.0)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 浅黄橙色 焼成: 良好	1/3
第4面 遺構外出土遺物 (図20)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.0	1.8	口唇部~体部下半に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: にぶい橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(7.2)	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	7.8	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2

4	土器	ロクロ かわらけ・中	124	8.0	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・大	136	3.5	3.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・大	139	9.5	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・大	(142)	9.3	4.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	3/4

表6 第5面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑7 出土遺物 (図22)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(66)	4.8	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	120	7.1	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	120	8.0	3.0~3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・中	(122)	7.5	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/2
5	土器	ロクロ かわらけ・中	124	7.6	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	125	8.0	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/2
7	土器	ロクロ かわらけ・中	129	8.0	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	略完形
8	土器	ロクロ かわらけ・大	(137)	(7.6)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：にぶい褐色 焼成：良好	1/2
9	土器	ロクロ かわらけ・大	(138)	(8.6)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・大	(142)	8.0	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/2

土坑8 出土遺物 (図24)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	80	5.6	1.9~2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	3/4
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(82)	(5.8)	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(120)	(6.7)	2.8	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
4	土器	ロクロ かわらけ・中	(121)	(8.3)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
5	土器	ロクロ かわらけ・中	(122)	(7.8)	2.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
6	土器	ロクロ かわらけ・大	(130)	(8.4)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
7	土器	ロクロ かわらけ・大	(130)	(8.0)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・大	(132)	(8.6)	2.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
9	土器	ロクロ かわらけ・大	(140)	(7.8)	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
10	土製品	土錘	長 5.1	径 0.7~1.1	孔径 0.4	手づくね成形 胎土：微砂、黒色粒、粗土 色調：暗茶褐色 焼成：良好	略完形
11	石製品	滑石製石鍋	(17.4)	-	現 7.2	羽釜形 色調：灰褐色	口縁部~ 体部小破片
12	銅製品	銭貨	直径 24	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-大観通寶 (北宋・1107)	完形

第5面 遺構外出土遺物 (図25)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	4.8	1.2~1.4	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：浅黄橙色 焼成：良好	3/4
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.2)	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：浅黄橙色 焼成：良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.5	1.6~1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：浅黄橙色 焼成：良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.2)	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：浅黄橙色 焼成：良好	1/3
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/3
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
7	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	6.5	2.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：浅黄橙色 焼成：良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.0	2.9	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：浅黄橙色 焼成：良好	2/5
9	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(7.0)	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
10	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.8)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調：浅黄橙色 焼成：良好	1/2

11	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.4)	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅黄橙色 焼成:良好	1/3
12	陶器	瀬戸 御皿	-	(10.0)	現 1.8	胎土:緻密 色調:胎土-淡黄色土、釉-淡灰緑色	底部 小破片
13	石製品	砥石	現長 3.8	幅 3.4	厚 0.85	2面に使用痕跡 仕上砥 石材-粘板岩 備考:鳴滝産	
14	石製品	砥石	現長 6.3	現幅 2.0	厚 1.3	2面に使用痕跡 仕上砥 石材-粘板岩 備考:鳴滝産	
15	鉄製品	釘	現長 5.2	-	厚 0.4~0.6	断面方形、鍛造	
16	鉄製品	釘	現長 8.5	-	厚 0.4~0.6	L字状、断面方形、鍛造	略完形

表7 第6面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第6面 遺構外(14~21層) 出土遺物 (図28・29)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.8	1.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(5.6)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.6	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、やや粗土 色調:暗橙色 焼成:良好	1/2
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.1)	(5.8)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/2
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.1)	(5.4)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/3
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.6)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/3
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	5.2	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調:明褐色 焼成:良好	1/2
8	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.8)	1.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/2
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	5.5	1.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	3/4
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.6	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	2/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.4)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.4	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	2/3
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	3/4
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.2	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	3/4
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.6	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	完形
16	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.2)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.6)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/3
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.8)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/4
19	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.6	1.5~1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:暗橙色 焼成:良好	1/2
20	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	5.1	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/2
21	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
22	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	6.6	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/2
23	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.6	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
24	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	6.4	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:明褐色 焼成:良好	1/2
25	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.2)	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
26	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(5.8)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
27	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.4)	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/3
28	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	5.4	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/2
29	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	(6.4)	1.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/3
30	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.2)	(6.2)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	完形
31	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	6.0	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3

32	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	(7.0)	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
33	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	7.6	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
34	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	-	現 3.3	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/4
35	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(7.4)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/3
36	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(7.4)	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/3
37	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.4	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	2/3
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(9.0)	2.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
39	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(8.6)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/2
40	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	8.4	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
41	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.4)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/3
42	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.6)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
43	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(8.4)	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/2
44	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(8.4)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、海綿骨針、粗土 色調:浅橙色 焼成:良好	1/3
45	磁器	白磁皿	-	(5.0)	現 1.1	底面-ヘラケズリ、施釉 色調:胎土-白色、釉-白色 備考:白磁皿Ⅸ類?	底部 小破片
46	磁器	白磁 口Ⅷ皿	(10.6)	-	現 2.2	色調:胎土-白色、釉-乳白色 備考:白磁皿Ⅸ類	口縁部 小破片
47	磁器	白磁 口Ⅷ皿	-	-	現 2.4	色調:胎土-白色、釉-白色 備考:白磁皿Ⅸ類	口縁部 小破片
48	磁器	白磁 口Ⅷ皿	-	-	現 2.8	色調:胎土-白色、釉-白色 備考:白磁皿Ⅸ類	口縁部 小破片
49	磁器	青白磁 梅瓶	最大径 (16.5)	-	現 28.0	二次焼成 外面-人物・唐草文・櫛目文 色調:胎土-灰白色、釉-水色 備考:景德鎮窯	2/3
50	磁器	青磁 梅瓶	-	(8.4)	現 5.4	二次焼成 外面-渦巻唐草文 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:龍泉窯系青磁?	底部 小破片
51	磁器	青磁 碗	-	-	現 2.1	外面-鎬蓮弁文 高台・畳付-露胎 色調:胎土-灰白色、釉-緑青色 備考:龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	口縁部 小破片
52	磁器	青磁 碗	-	-	現 4.0	外面-鎬蓮弁文 高台・畳付-露胎 色調:胎土-灰白色、釉-緑青色 備考:龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	口縁部 小破片
53	磁器	青磁 碗	-	4.9	現 5.6	外面-鎬蓮弁文 見込-印花文 高台・畳付-露胎 色調:胎土-灰白色、釉-緑青色 備考:龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	1/4
54	磁器	青磁 鉢	-	-	現 2.0	内外面-無文 色調:胎土-灰白色、釉-緑青色 備考:龍泉窯系青磁	口縁部 小破片
55	陶器	瀬戸 瓶子	-	(8.4)	現 5.9	二次焼成 外面-唐草文 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:古瀬戸中期様式	胴部 小破片
56	陶器	常滑 玉縁口縁壺	-	-	現 3.3	胎土:粗 色調:暗褐色 備考:6a~6b型式	口縁部 小破片
57	陶器	常滑 片口碗	-	-	現 4.0	胎土:粗、白色粒 色調:灰色 備考:4~5型式	口縁部~ 体部小破片
58	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	-	現 8.3	胎土:粗、白色粒 色調:灰色	口縁部~ 体部小破片
59	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	(11.2)	現 5.3	内面摩耗 胎土:粗、白色粒 色調:灰色	底部 小破片
60	土器	火鉢	-	-	現 3.8	胎土:緻密 色調:明茶色 焼成:良好	口縁部 小破片
61	土製品	土鉢	長 4.6	幅 0.8~1.0	孔径 0.4	手づくね成形 胎土:微砂、粗土 色調:明茶褐色 焼成:良好	略完形
62	土製品	土鉢	長 5.8	幅 0.6~1.2	孔径 0.4	手づくね成形 胎土:微砂、粗土 色調:明橙色 焼成:良好	略完形

表8 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	(236)	(99)	52
ピット1	第1面	30	(20)	28
ピット2	第1面	33	29	18
溝状遺構1	第2面	(292)	60~75	10
ピット3	第3面	(33)	(20)	11
ピット4	第3面	48	40	12
土坑2	第4面	285	(216)	36
土坑3	第4面	(210)	220	40
土坑4	第4面	64	55	14

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
土坑5	第4面	78	74	16
土坑6	第4面	(94)	80	31
ピット5	第4面	40	34	11
土坑7	第5面	(128)	(164)	42
土坑8	第5面	(335)	160	20
ピット6	第6面	33	31	14
ピット7	第6面	(36)	26	16
ピット8	第6面	40	(25)	10



表9 出土遺物一覧表

第1面

土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
【陶器】		
常滑	甕	4
【金属製品】		
	釘	1
		合計 8

ピット1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
		合計 3

第1面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18
【土器】		
	火鉢	1
		合計 19

第2面

溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	15
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
常滑	甕	1
		合計 17

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	86
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	折縁深皿	1
常滑	甕	7
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
		合計 97

第3面

ピット4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	36
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	1
	折縁深皿	1
	器種不明小破片	2
常滑	甕	12
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	2
備前	播鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
		合計 57

第4面

土坑2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	28
【青白磁】		
	梅瓶	1
【陶器】		
瀬戸	瓶子	2
常滑	甕	1
【土器】		
	火鉢か香炉	1
		合計 33

土坑3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	卸皿	1
常滑	甕	5
	片口鉢Ⅱ類	1
		合計 12

土坑4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
		合計 2

土坑6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

第4面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	88
【青磁】		
龍泉窯系	碗小破片	1
【陶器】		
瀬戸	入子	1
常滑	甕	9
		合計 99

第5面

土坑7		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	53
【陶器】		
常滑	甕	6
		合計 59

土坑8		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	53
【青磁】		
龍泉窯系	碗小破片	1
【陶器】		
瀬戸	卸皿	1
常滑	甕	6
【土製品】		
	土錘	1
【石製品】		
	滑石製石鍋	1

【金属製品】		
産地	器種	破片数
	銭貨	1
		合計 64

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	477
【白磁】		
	碗	2
	皿	2
	口元皿	2
【青磁】		
	碗小破片	8
	壺	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
	器種不明小破片	2
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	卸皿	1
	器種不明小破片	1
常滑	甕	59
	鶯口壺	1
	片口鉢Ⅰ類	2
【土器】		
	土錘	2
【瓦質土器】		
	火鉢	4
【石製品】		
	砥石	4
【木製品】		
	箸	2
【金属製品】		
	釘	3
		合計 575

第6面		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	128
【白磁】		
	皿	1
	口元皿	3
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
	鉢	1
【青白磁】		
	梅瓶	3
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	甕	4
常滑	玉縁口縁壺	1
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口碗	1
【土器】		
	火鉢	1
【土製品】		
	土錘	2
		合計 151

第6面 遺構外 (14~21層)		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	128
【白磁】		
	皿	1
	口元皿	3
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
	鉢	1
【青白磁】		
	梅瓶	3
【陶器】		
瀬戸	瓶子	1
	甕	4
常滑	玉縁口縁壺	1
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口碗	1
【土器】		
	火鉢	1
【土製品】		
	土錘	2
		合計 151



1. 調査区北壁土層断面(南西から)



2. 調査区南壁土層断面(北東から)



図版 2



1. 第1面全景(北から)



2. 第2面全景および溝状遺構1(北から)





1. 第3面全景(南から)



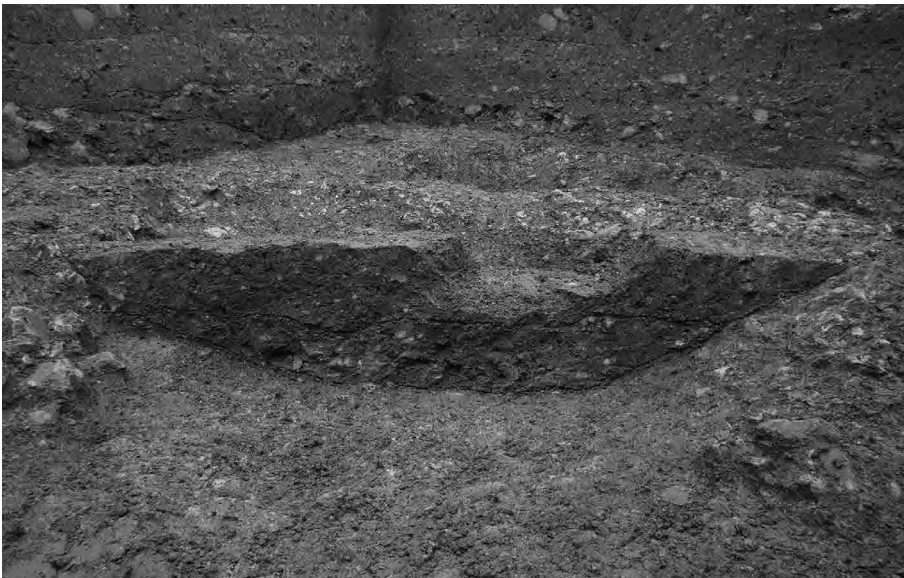
2. 第4面全景(北から)



図版 4



1. 第4面 土坑2 (南から)



2. 第4面 土坑3 土層断面 (南から)



3. 第4面 土坑4～6 (南から)





1. 第5面全景(北から)



2. 第5面 玉石検出状態(南から)



3. 第5面 土坑7土層断面(東から)



4. 第6面 北側トレンチ全景(西から)

図版6

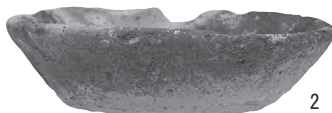


1

1. 第1面 土坑1出土遺物



1



2

2. 第1面 ピット1出土遺物



1



2

3. 第1面 遺構外出土遺物



1



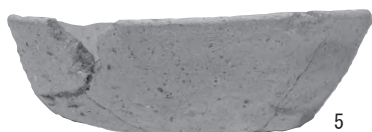
2



3



4



5



6



7

4. 第2面 遺構外出土遺物



1



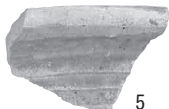
3



2



4



5



6



7

5. 第3面 遺構外出土遺物



1



2



3

土坑2

6. 第4面 土坑出土遺物

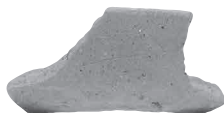


1

土坑3



1



2



3



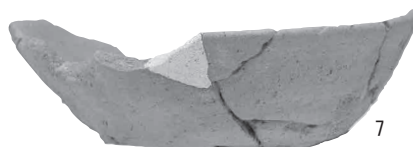
4



5



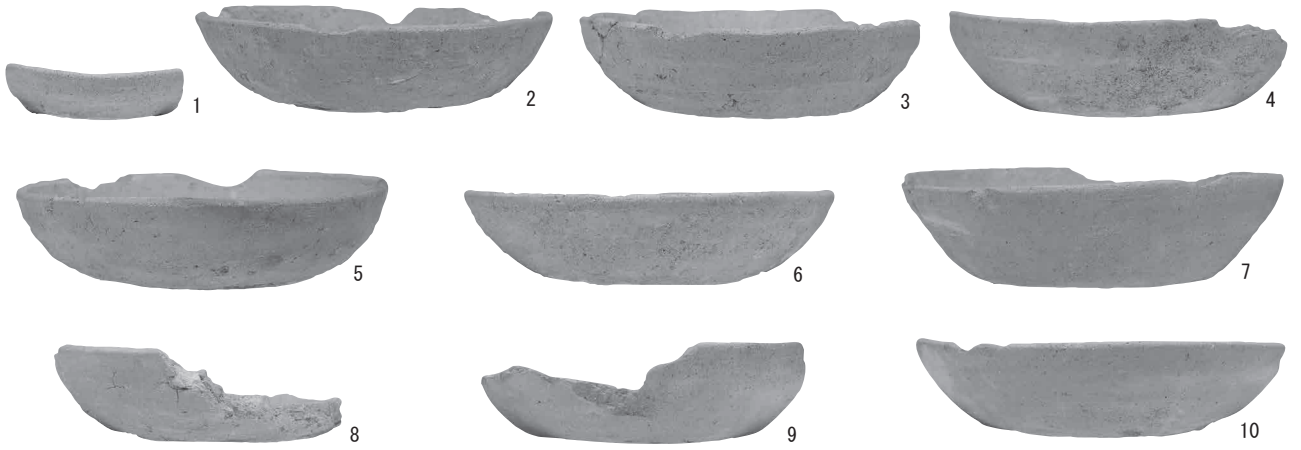
6



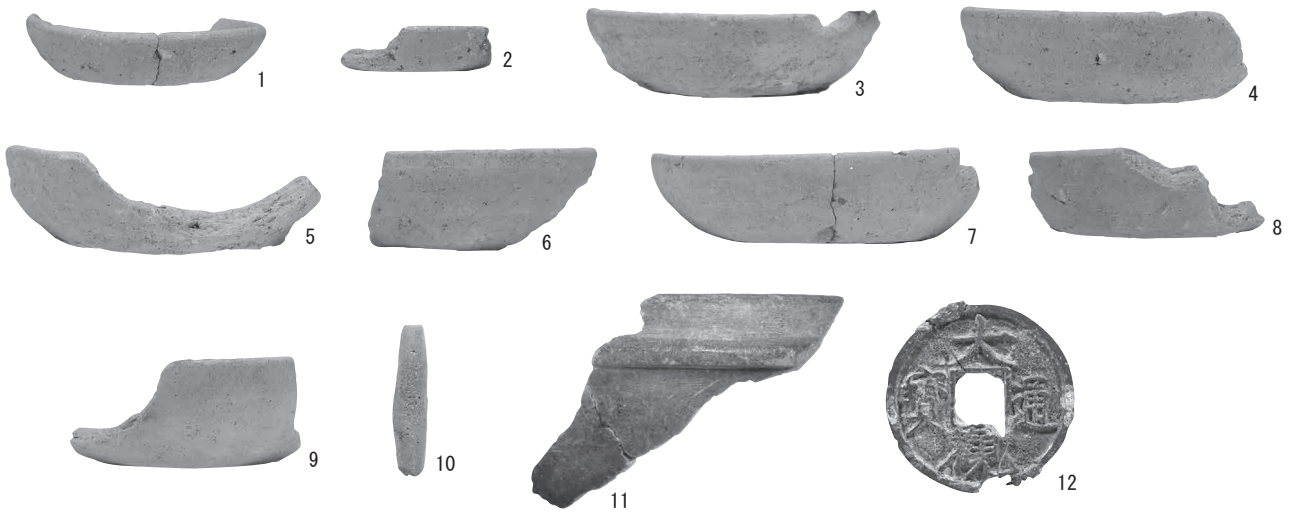
7

7. 第4面 遺構外出土遺物



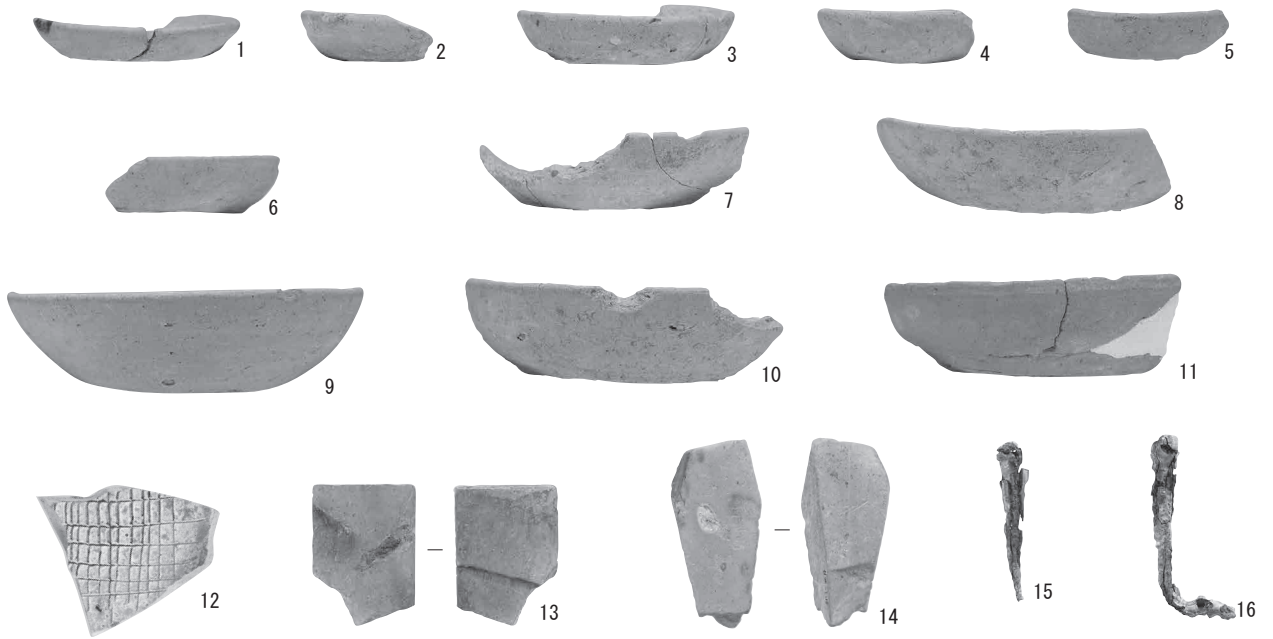


土坑 7



土坑 8

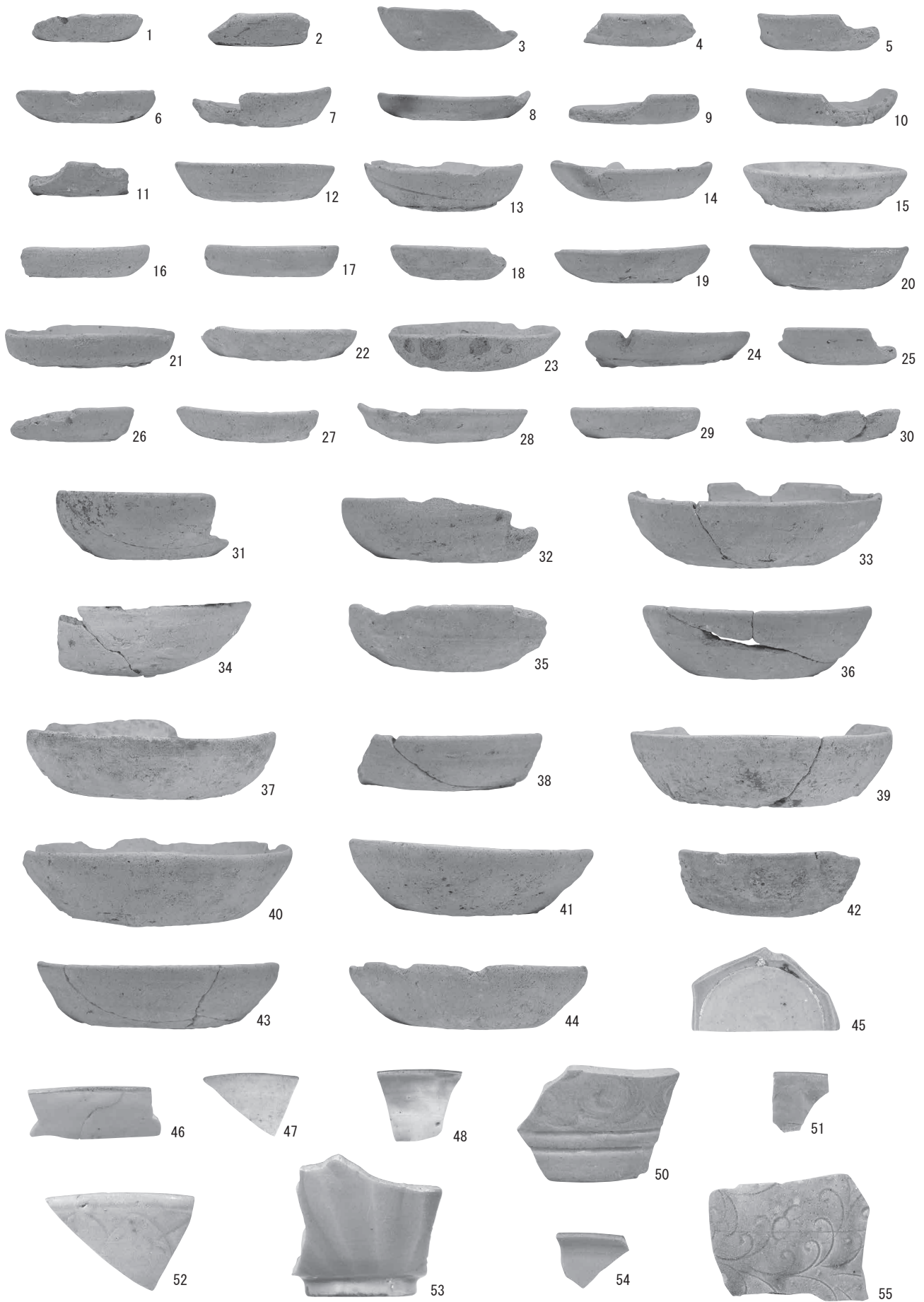
1. 第 5 面 土坑出土遺物



2. 第 5 面 遺構外出土遺物



图版 8



1. 第6面 遺構外(14~21層)出土遺物(1)



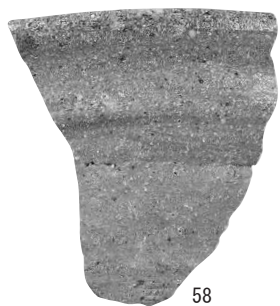
49



56



57



58



59



60



61



62

1. 第6面 遺構外(14~21層)出土遺物(2)



徳 泉 寺 跡 (No.173)



山ノ内字東管領屋敷168番4地点



## 例 言

1. 本報は「徳泉寺跡」（神奈川県遺跡台帳No.173）内、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷168番4地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年12月2日～同年12月15日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約20㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 三ツ橋正夫  
調査員 岡田慶子  
作業員 倉澤六郎・片山直文（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を三ツ橋正夫、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系AREA9）を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「YT」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：  整地・地業範囲  
遺物：  煤およびタール状の黒色物が付着している部分
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』  
瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』  
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』  
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介（玉川文化財研究所）
13. 報告書作成にあたっては、三ツ橋正夫氏・押木弘己氏・伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。

## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	296
第1節 調査に至る経緯と経過	296
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	296
第3節 周辺の考古学的調査	298
第二章 堆積土層	301
第三章 発見された遺構と遺物	302
第1節 地業	303
第2節 河川	303
第四章 まとめ	305

## 挿図目次

図1 遺跡位置図	297	図5 調査区土層断面図	301
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	299	図6 遺構分布図	302
図3 調査区位置図	300	図7 地業1出土遺物	303
図4 調査区配置図	300	図8 河川1出土遺物	304

## 表目次

表1 徳泉寺跡 調査地点および周辺の遺跡一覧	301	表2 第1面出土遺物観察表	306
		表3 出土遺物一覧表	306

## 図版目次

図版1	1. 調査区西壁土層断面(北東から)	307	2. 板杭(北から)	309	
	2. 調査区南側土層断面(北西から)	307	3. 泥岩切石	309	
図版2	1. 地業1・河川1全景(北東から)	308	図版4	1. 地業1出土遺物	310
	2. 地業1(北西から)	308		2. 河川1出土遺物	310
図版3	1. 地業1土層断面(東から)	309			

# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷168番4地点で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である徳泉寺跡（神奈川県遺跡台帳No.173）の範囲内にあたる。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成20年7月29日～同年7月30日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が開発予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約20㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、三ツ橋正夫が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年12月2日～同年12月15日までの約2週間で、調査面積は約20㎡である。現地表の標高は約27.5mを測る。調査はまず重機により約1.7mの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査区北壁側には現代旧井戸があり陥没する危険性を伴うことから、北壁付近については最終段階で遺構の確認作業を行った。調査の結果、中世から近世に属する地業と河川を検出し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして12月15日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA 9）に準じた、鎌倉市三級基準点No.43416（ $X = -74383.457$ 、 $Y = -25445.426$ ）、No.43417（ $X = -74454083$ 、 $Y = -25378.797$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.43416（標高28.922m）を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

徳泉寺跡（No.173）は鎌倉市の北部域に位置し、調査地点は鎌倉市山ノ内字東管領屋敷168番4に所在する。本調査地点は、JR北鎌倉駅の南西側を走る鎌倉街道（主要地方道横浜鎌倉線）を鎌倉方面に600mほど進んだ進行方向の東側に位置している。また、この鎌倉街道沿いには、円覚寺や東慶寺、浄智寺、明月院、長寿寺、建長寺などの鎌倉を代表する寺院が集まっており、これら以外にも明月谷には第三代執権北条時頼が建立した「最明寺」や第八代執権北条時宗が建立した「禅興寺」などの存在が伝えられている。とりわけ本調査地点一帯は、建長寺をはじめとする臨済宗の拠点であったといえよう。

この他、建長寺境内を描いた徳川光圀施入と伝えられている『建長寺伝延宝寺図』には、廃寺も含めて49院の塔頭が描かれている。本遺跡名の由来である徳泉寺跡もそのひとつで、その並びには正法寺跡や安国寺跡、保寧寺跡などの塔頭が軒を連ねていたことが知られる。さらに、この付近の住所表記にもなっている「管領屋敷」は室町期以降に関東管領上杉氏の屋敷があった場所とされており、現在は明月院の入口を起点に円覚寺側を西管領屋敷、建長寺側を東管領屋敷と呼称されている。

地形的には北西方向の大船方面に開けた開析谷の中に位置し、その谷地を鎌倉街道とJR横須賀線がほぼ並行して走っている。この開析谷に面した両側は、複雑に入り組んだ大小の谷戸が形成されており、





図1 遺跡位置図



この両側の丘陵頂部から湧出した小河川は、地形に沿って低地に流れ込み、山ノ内の中央部を貫流する小袋谷川に集まり、その流れは市域の北西部で柏尾川に合流している。鎌倉街道に向けて開けた谷戸のひとつが明月院のある明月谷で、この谷戸の並びが遺跡地の所在する東管領屋敷の地区である。

徳泉寺跡の遺跡推定地は、鎌倉街道沿いの約80mと東側丘陵稜線までの約130mが周知の範囲である。本調査地点の標高は現地表面で約27.5m、北西側の山ノ内道周辺遺跡付近で24～26m内外、南西側の長寿寺付近の道路端で30～31mとなっている。

### 第3節 周辺の考古学的調査

本調査地点を含む徳泉寺跡およびその周辺の発掘調査事例は、市街地に比べて極めて少ない。本遺跡の発掘調査は、本調査地点が初例である。また、本調査地点に隣接する遺跡について示すと、北側には正法寺跡 (No.172)、南側には安国寺跡 (No.174)、その並びには保寧寺跡 (No.175) などの寺院推定地や、本地点の向いには建長寺旧境内遺跡 (No.397) が広がっている。明月谷の両岸域には中世のやぐら群が群在している。周辺遺跡の調査事例については、図2に示した範囲内の主な事例として①円覚寺旧境内遺跡 (No.434) の山ノ内字西管領屋敷377番1地点 (宮田・滝澤 2010) と山ノ内上杉邸跡地内にある③山ノ内道周辺遺跡 (No.136) の山ノ内字東管領屋敷180番10地点 (鎌倉市教育委員会 1997)、それに⑥保寧寺跡 (No.175) 山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点 (手塚 1997) の3例がある。①地点では鎌倉時代後期から室町期にかけての4期4面にわたる生活面が検出され、礎板をもつ掘立柱建物や溝、柱穴列、道路などの遺構が確認されている。これらの遺構は円覚寺旧境内の一端を示していると考えられる。また、③地点では鎌倉時代後期から室町期にかけての生活面が2面で検出された。この調査地点は、明月谷の谷戸奥から流れ出た明月川とほぼ同じ方向を示す溝が発見されている。この溝は本調査地点検出の河川とも類似するものと考えられる。⑥地点の事例では、1・2次の調査の結果と、前述の古絵図の様相から「保寧寺」境内の範囲にあることが想定されている。

この他に②山ノ内上杉邸跡 (No.170) 山ノ内字東管領屋敷179番39地点 (馬淵 2012) と、⑤安国寺跡 (No.174) 山ノ内字管領屋敷147番9・10地点 (森 2013) で良好な資料が得られている。②地点では、主に鎌倉時代中期以降、南北朝期にかかるまでの7期8面にわたる生活面が検出された。礎石建物や掘立柱建物、土坑、溝などの他に苑池と推定される遺構も調査された。⑤地点では、鎌倉時代後期から室町期前半までの生活面8面、近世が1面の計9面の生活面が検出された。遺構の主体は15世紀中頃で、溝を中心に柱穴、土坑、木組み遺構などである。特に注目されたのが、両岸に土丹塊で石組護岸された溝である。調査者は、排水路や地境としての機能を考えている。また、瀬戸天目茶碗や風炉などの喫茶用具や香炉、手あぶり、硯など寺院色の強い遺物が出土している点も遺跡の性格を考える上で注目されている。

遺跡全体の性格を考えるには、「建長寺伝延宝寺図」や「明月院古絵図」などに描かれた徳泉寺跡周辺の地形的景観なども参考になるものと考えられる。

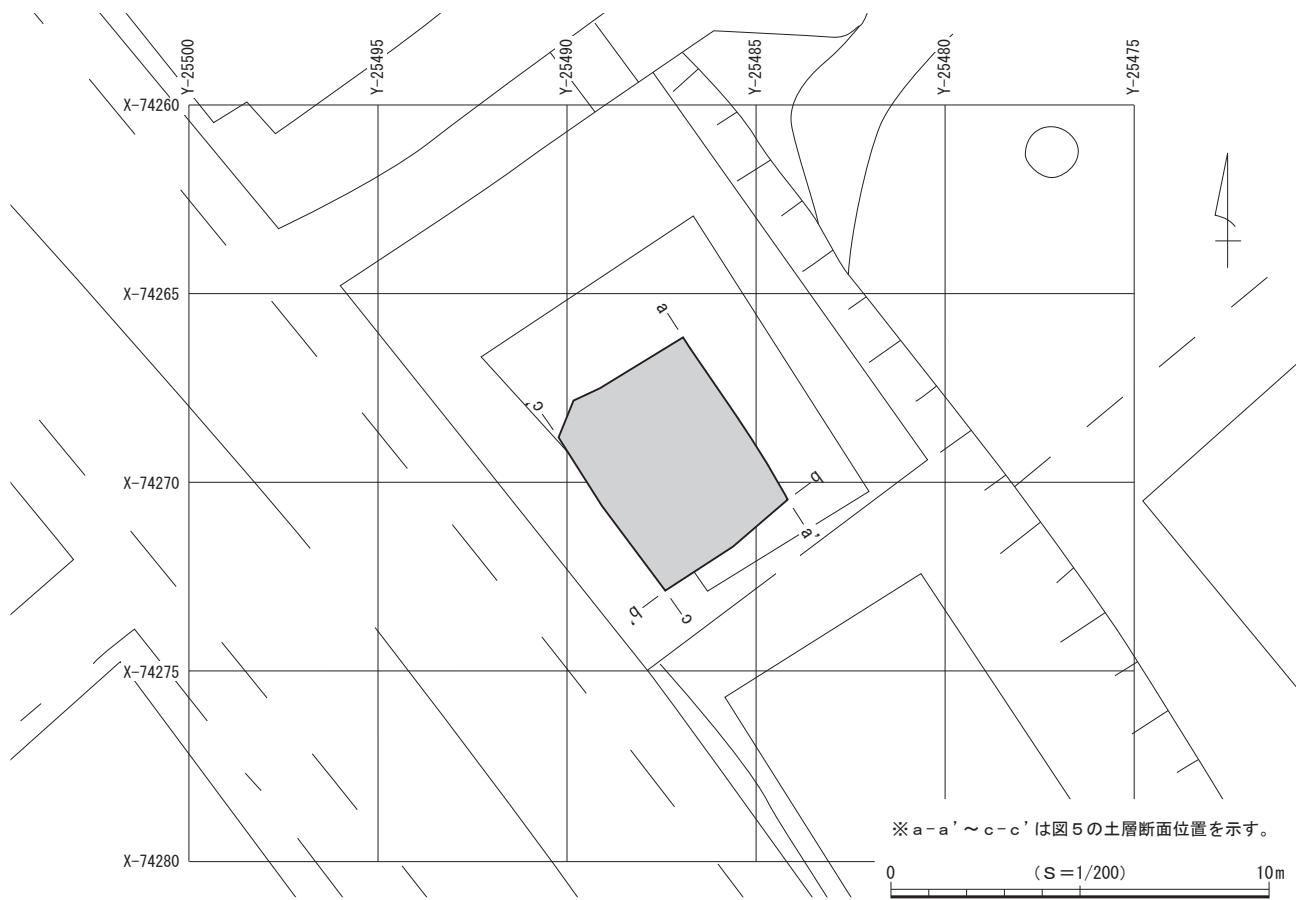


図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡





図3 調査区位置図



※ a-a' ~ c-c' は図5の土層断面位置を示す。

図4 調査区配置図

表1 徳泉寺跡 調査地点および周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	徳泉寺跡 (No173)	山ノ内字東管領屋敷168番4地点	
①	円覚寺旧境内遺跡 (No434)	山ノ内字西管領屋敷377番1地点	宮田・滝澤 2010
②	山ノ内上杉邸跡 (No170)	山ノ内字東管領屋敷179番39地点	馬淵 2012
③	山ノ内道周辺遺跡 (No136)	山ノ内字東管領屋敷180番10地点	鎌倉市教育委員会 1997
④	西管領屋敷南やぐら群 (No212)		
⑤	安国寺跡 (No174)	山ノ内字東管領屋敷147番9・10地点	森 2013
⑥	保寧寺跡 (No175)	山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点	手塚 1997

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

## 第二章 堆積土層

今回の調査では調査区全域に攪乱が深くまで及んでおり、遺構覆土を除くとプライマリーな堆積土層は9・10層の2層のみであった。

現在の地表面は標高約27.5mを測り、最上部の1層は茶褐色土で現代の盛土である。1層の層厚は1.4～2mほどで、a～dに細分され1d層の直下から遺構が検出された。遺構確認面の標高は約25.4～25.8mである。2・3層は地業1とした遺構の覆土で、4～8層は河川1の覆土である。9層は東壁と南壁のごく一部でのみ確認し得た堆積土層で、2～3mmの泥岩粒をやや多く含み締まりのある暗茶褐色土である。10層は全体にやや青みがかった色調の黒褐色粘質土で、地山に相当する。地業1はこの層を掘り込んで構築されている。

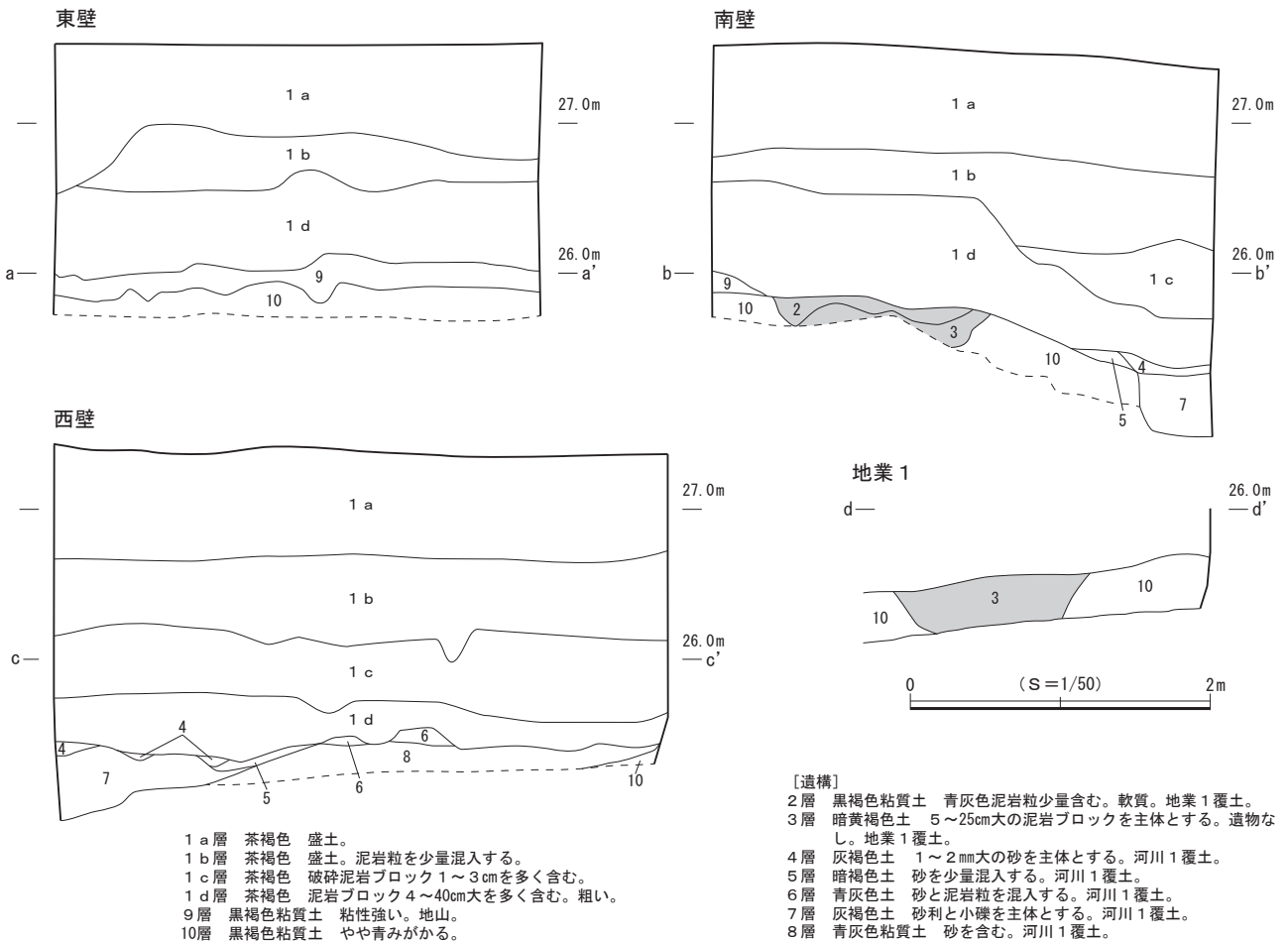


図5 調査区土層断面図





## 第1節 地業

中世に属する地業1カ所を検出した。調査区中央を北西から南東方向へと縦断し、河川1に沿うように確認された。攪乱による影響が深くまで及んでおり、本址の上部は削平されている可能性が高い。

### 地業1 (図5・6)

調査区中央に位置し、北西から南東方向へ縦断しており、両端は調査区外へと続いている。河川1の北東側に沿うように構築されている。調査区全域は攪乱が深くまで達しており、遺構の上位部分はすでに失われ、下位部分のみが遺存する状態であった。

本址は地山を溝状に掘り込み、泥岩ブロックを充填した遺構で、河川1との関連から川岸の保護と川への土砂の流入を防ぐ土留めのような役割をもつものと推定される。断面形は逆台形を呈し、規模は現存長4.1m、幅1.3~1.6m、深さ約30cmを測り、底面の標高は25.2~25.3mで南東から北西へ向かって傾斜する。主軸方位はN-40°-Wを指す。覆土は上下2層に区分され、上層(調査区南壁2層)は青灰色泥岩粒を少量含む軟質な黒褐色粘質土で、下層(調査区南壁3層)は5~25cm大の泥岩ブロックを主体とする暗黄褐色土である。

本址と河川1との間には黒褐色土の地山が残存しており、調査区南壁寄りの地山に板杭2枚が対向して打ち込まれていた。板杭の大きさは長さ44cm、幅7cm、厚さ1.5cmと、長さ18.5cm、幅7cm、厚さ1.5cmで、板杭の間にはかわらけ(図7-1)が挟まれていた。また、地業の北西端から主軸方位に長軸を揃えるように泥岩の切石が1点出土し、東面には工具による粗い弧状の加工痕が認められた。切石の大きさは長さ55cm、幅50cm、厚さ20cmを測り、地業の主軸方位に切石の長辺の向きを合わせ、立てた状態で据えられていた。河川に面する側には、切石が積まれていた可能性が考えられる。板杭と切石は検出状態から考えると本址に関連する可能性が高く、護岸の一部をなすものであったと推定される。

### 出土遺物(図7)

遺物はかわらけ19点、陶器3点、瓦1点が出土し、このうち2点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は常滑窯産の甕である。

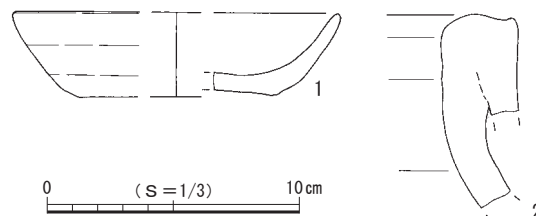


図7 地業1出土遺物

## 第2節 河川

中世~近世と考えられる河川1本を検出した。調査区西壁際を北西から南東方向へと縦断して確認された。攪乱による影響が深くまで及んでおり、本址の上部は削平されている可能性が高い。

### 河川1 (図6)

調査区西壁際に位置し、北西から南東方向へ縦断し、両端は調査区外へと続いている。河川の旧流路の東岸にあたると思われるが、西岸は調査区外のためごく一部の調査にとどまる。10層とした地山の黒褐色粘質土を切り込んでおり、規模は現存長3.85m、現存幅70cm、深さ56cmを測る。主軸方位はN-44°-Wを指す。覆土はいずれも砂粒を含んでおり、その含有率と他の含有物によって5層に区分された。

北東から) 最上部に堆積する土層4・5・6層は層厚5~10cmほどの薄い土層であり、上部を攪乱によって削平され最下部のみが残存している可能性が高い。4層は1~2mmの砂を主体とする灰褐色土で、5層は砂粒を少量含む暗褐色土、6層は砂粒と泥岩粒を混入する青灰色土である。7層は砂利と小礫を主体とする灰褐色土で、層厚は最大で40cmに及ぶ。最下部の8層は砂粒を含む青灰色粘質土である。

### 出土遺物(図8)

遺物はかわらけ22点、陶器12点、瓦質土器2点、瓦1点、石製品1点が出土し、このうち18点を図示した。

1~10はロクロ成形によるかわらけである。1・3・4には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。11~13は常滑窯産の製品で、11が甕、12が片口鉢I類、13が片口鉢II類である。14は産地不明の播鉢である。15・16は瓦質土器で、15が小壺と思われる破片、16が火鉢である。17・18は近世期の瀬戸・美濃系の製品で、17が汁次、18が鬢油徳利である。

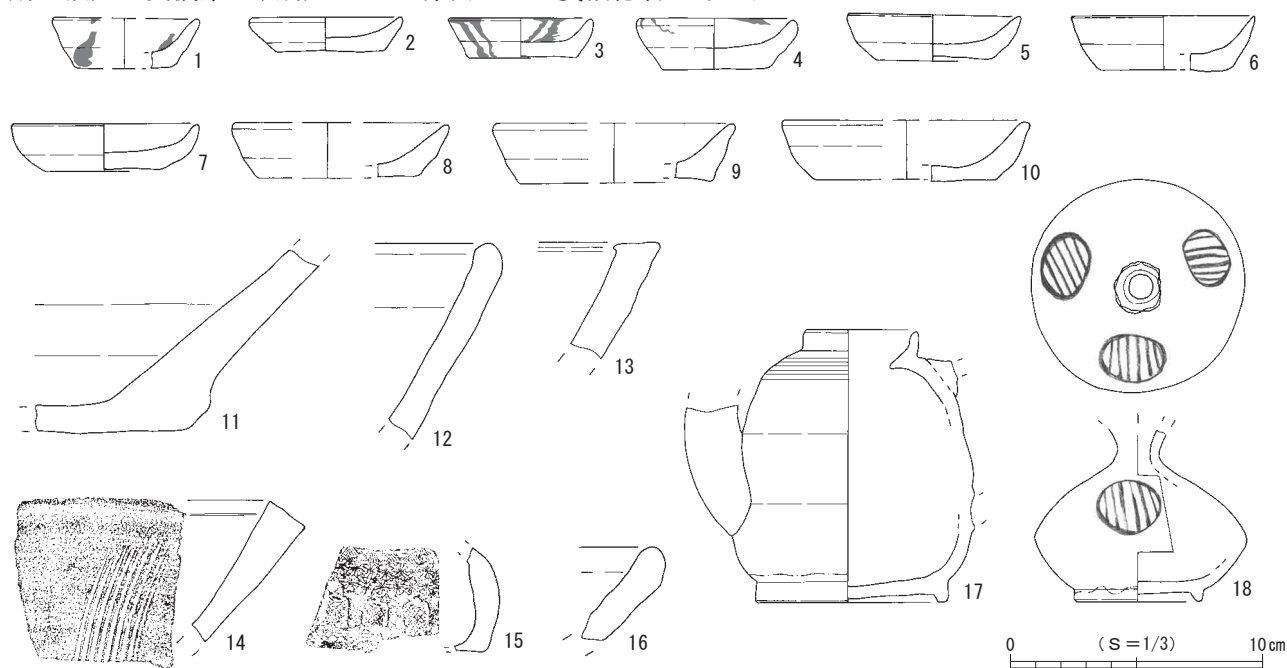


図8 河川1出土遺物



## 第四章 まとめ

徳泉寺跡は鎌倉市の北部に位置し、建長寺方面から大船方面に開けた開析谷と丘陵頂部から斜面部にかけての範囲が包蔵地として周知されている。建長寺から円覚寺に至る街道(山ノ内道)沿いの小支谷には、往事は寺院が軒を連ねていたといわれ、南から玉雲庵跡、龍興院跡、保寧寺跡、安国寺跡、徳泉寺跡、正法寺跡の包蔵地が位置している。今回の調査地点は遺跡範囲の東隅に位置し、地形的には開析谷の中にあたる。徳泉寺跡および周辺の発掘調査事例は極めて少なく、徳泉寺跡の調査事例は本地点が初めてである。

今回の調査では遺構確認面は1面のみであり、中世の地業1ヵ所と中世～近世に属すると考えられる河川1本を検出した。遺構は攪乱の直下にあたる堆積土層の10層(黒褐色粘質土)上面で検出され、確認面の標高は約25.4～25.8mを測る。調査区全域が攪乱によって深くまで壊されており、遺構の遺存状態は良好ではない。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱を数える。

河川1は調査区西壁際を北西から南東方向へと縦断して確認され、流路の東岸を検出した。調査区が狭小なため全容は把握できなかったが、出土遺物から中世～近世に属すると考えられる。地業1については、地山を溝状に深さ30cmほど掘り込んで泥岩ブロックを充填したもので、調査区中央を北西から南東方向へと縦断し、河川1に沿うように確認された。規模は現存長4.1m、幅1.3～1.6mを測り、調査区外へと延びている。河川1との関連から、川岸の保護と川への土砂の流入を防ぐ土留めのような役割をもつと考えられる。時期は出土遺物から15世紀代と推定される。

ここで本地点と同じく鎌倉街道沿いに位置する安国寺跡と保寧寺跡の調査事例について触れると、安国寺跡山ノ内字東管領屋敷147番9・10地点(森 2013)の調査では、兩岸に石組みによる護岸を伴う溝状遺構が南北方向に検出されている。時期は15世紀中頃とされ、建長寺境内から流れ出て北西方向へと流れる小河川に、斜め方向から流れ込む排水路あるいは地境であった可能性が指摘されている。また、遺跡からは硯と数珠のガラス玉1点が出土しており、寺域に属する可能性についても触れられている。

安国寺跡の南側に位置する保寧寺跡山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点(手塚 1997)では、15世紀前半の鍵の手状に屈曲する溝が検出され、寺院内の区画を兼ねた排水路の役割を推定することができる。流路方向から考えると、おそらく安国寺跡の溝と同様に建長寺境内から流れ出る小河川へ注ぎ込んでいた可能性があるだろう。

本調査地点は街道(山ノ内道)の東側に接しており、前述の小河川の東側に隣接する。先にも述べたが、検出された河川の東岸部分は調査区の西壁際に北西-南東方向に延びていることから、この旧流路にあたる可能性を指摘しておきたい。

### 引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

鎌倉市教育委員会 1997『山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書』山ノ内道周辺遺跡発掘調査団

手塚直樹 1997『神奈川県・鎌倉市 保寧寺跡-第2次調査-』保寧寺遺跡発掘調査団

馬淵和雄 2012「山ノ内上杉邸跡(No.170)の発掘調査-山ノ内字東管領屋敷179番39地点-」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

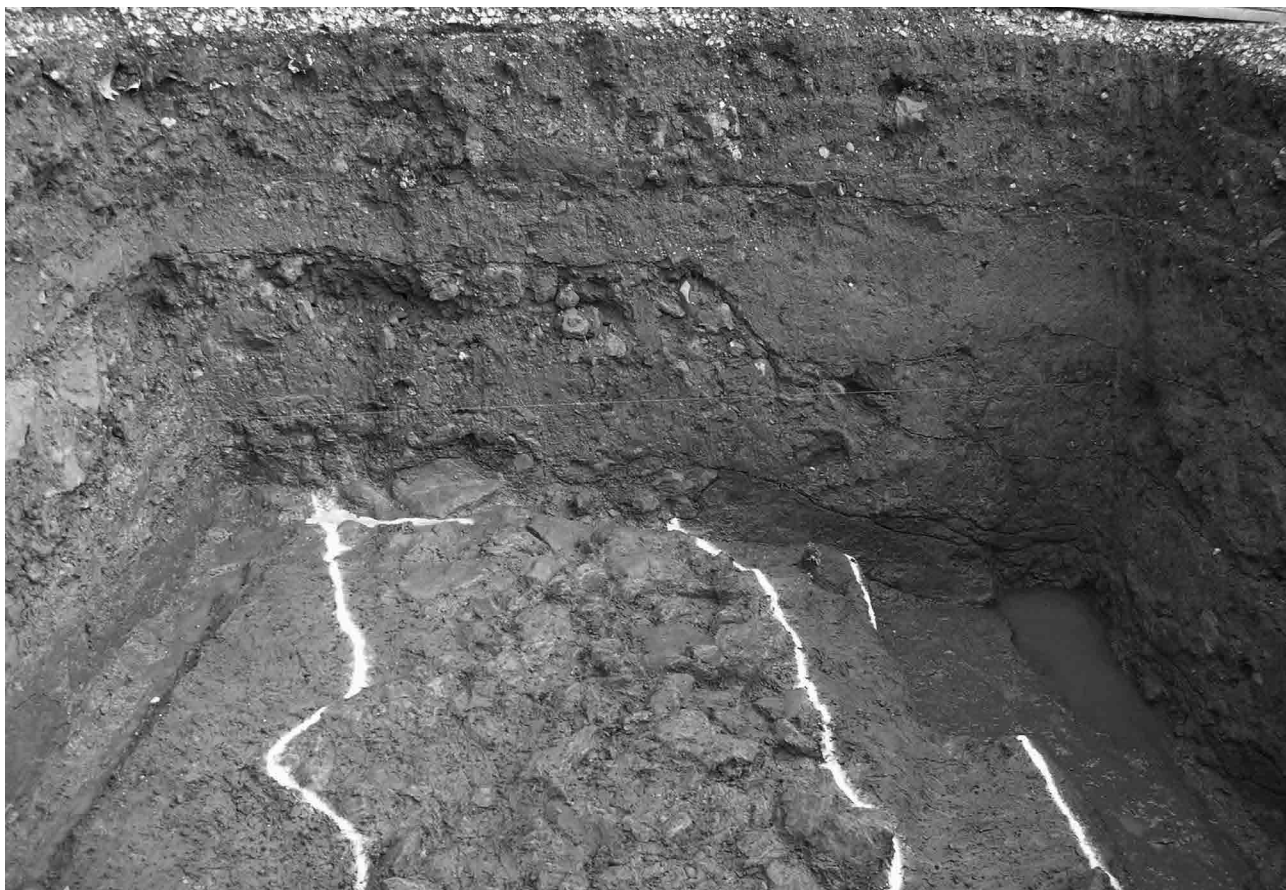
宮田 眞・滝澤晶子 2010「円覚寺旧境内遺跡(No.434)山ノ内字西管領屋敷377番1」『平成21年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26 鎌倉市教育委員会





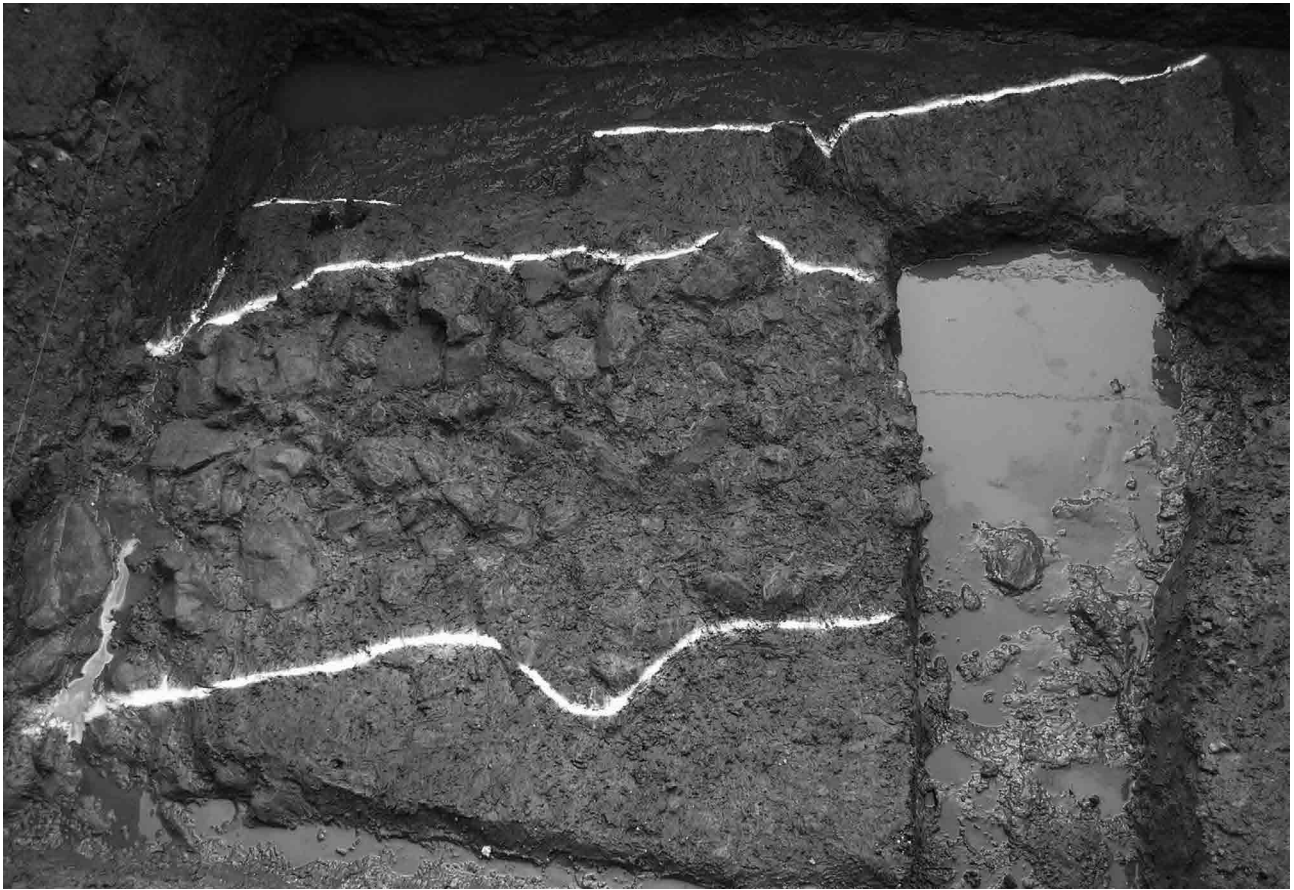


1. 調査区西壁土層断面(北東から)



2. 調査区南側土層断面(北西から)





1. 地業1・河川1全景(北東から)



2. 地業1(北西から)





1. 地業1土層断面(東から)



2. 板杭(北から)

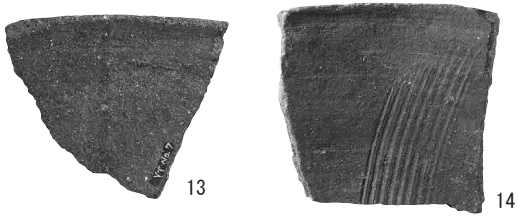
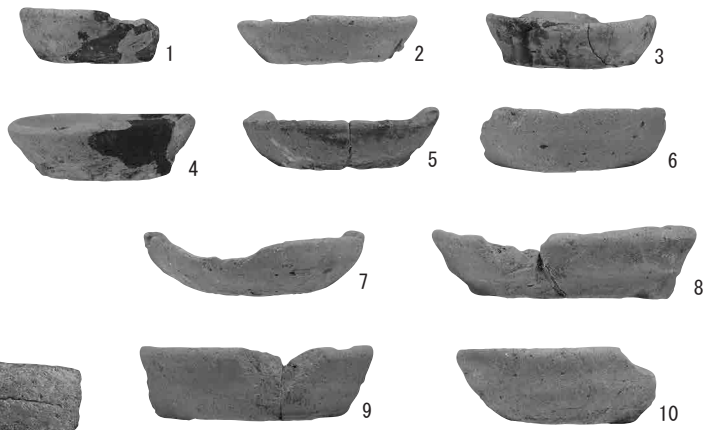


3. 泥岩切石

図版 4



1. 地業 1 出土遺物



2. 河川 1 出土遺物





能 蔵 寺 跡 (No.314)


材木座二丁目293番2 地点

## 例 言

1. 本報は「能蔵寺跡」(神奈川県遺跡台帳No.314)内、鎌倉市材木座二丁目293番2地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成18年8月10日～同年11月6日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約52㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 齋木秀雄  
調査員 鯉淵義紀・三ツ橋正夫・伊藤博邦・村松彩美・三浦 恵  
作業員 奥山利平・中須洋二・川島仁司・金丸義一・伴 一明  
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 第四章第1節の出土人骨の分析・執筆は、聖マリアンナ医科大学解剖学講座長岡朋人氏・星野敬吾氏・清家大樹氏・平田和明氏に依頼し、第2節の出土動物遺体の鑑定・執筆は、東京国立博物館客員研究員金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を齋木秀雄・鯉淵義紀・三ツ橋正夫、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA 9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ノウゾウジ04」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺構・遺物挿入中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：  整地・地業範囲  
 灰分布範囲

遺物：  煤およびタール状の黒色物が付着している部分

  - ・手描き施文が施される漆器は、文様を濃色、地を白で示した。
  - ・石製品の矢印は磨面範囲を示す。
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

齋木秀雄・降矢順子・三ツ橋正夫・村松彩美・岡田慶子・加藤千尋(鎌倉市教育委員会)

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・小森明美・西本正憲・西野吉論・齊藤武士・玉川久子・林原利明・赤間和重・御代七重・木村百合子・田村正義・唐原賢一・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・深澤繁美・山田浩介(玉川文化財研究所)
14. 報告書作成にあたっては、齋木秀雄氏・伊丹まどか氏からご協力を賜った。ここに記して感謝する次第である。

## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	317
第1節 調査に至る経緯と経過	317
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	317
第3節 周辺の考古学的調査	318
第二章 堆積土層	323
第三章 発見された遺構と遺物	324
第1節 第1面の遺構と遺物	324
第2節 第2面の遺構と遺物	373
第四章 自然科学分析	383
第1節 能蔵寺跡出土の人骨	383
第2節 能蔵寺跡出土の動物遺体	390
第五章 まとめ	399

## 挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	319	図18 第1面 土坑墓8出土遺物	335
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	320	図19 第1面 土坑墓9出土遺物	335
図3 調査区位置図	322	図20 第1面 土坑墓10出土遺物	335
図4 調査区配置図	322	図21 第1面 土坑墓14～19	337
図5 調査区土層断面図	323	図22 第1面 土坑墓16出土遺物	339
図6 第1面 遺構分布図	325	図23 第1面 土坑墓17出土遺物	339
図7 第1面 火葬墓1・2	326	図24 第1面 土坑墓18出土遺物	339
図8 第1面 火葬墓2出土遺物	326	図25 第1面 土坑墓20～23	341
図9 第1面 土坑墓1～6	328	図26 第1面 土坑墓20出土遺物	342
図10 第1面 土坑墓1出土遺物	329	図27 第1面 土坑墓21出土遺物	343
図11 第1面 土坑墓2出土遺物	329	図28 第1面 土坑墓22出土遺物	343
図12 第1面 土坑墓3出土遺物	329	図29 第1面 土坑墓24～27	345
図13 第1面 土坑墓4出土遺物	331	図30 第1面 土坑墓24出土遺物	346
図14 第1面 土坑墓5出土遺物	331	図31 第1面 土坑墓25出土遺物	346
図15 第1面 土坑墓6出土遺物	332	図32 第1面 土坑墓26出土遺物	346
図16 第1面 土坑墓7出土遺物	332	図33 第1面 土坑墓27出土遺物	346
図17 第1面 土坑墓7～13	333	図34 第1面 埋葬人骨2出土遺物	348



図35	第1面 埋葬人骨3出土遺物	348	図53	表採・表土出土遺物(7)	363
図36	第1面 埋葬人骨1~10	349	図54	表採・表土出土遺物(8)	364
図37	第1面 埋葬人骨4出土遺物	350	図55	表採・表土出土遺物(9)	365
図38	第1面 埋葬人骨5出土遺物	351	図56	表採・表土出土遺物(10)	366
図39	第1面 埋葬人骨8出土遺物	352	図57	第1面 遺構外出土遺物(1)	367
図40	第1面 埋葬人骨10出土遺物	352	図58	第1面 遺構外出土遺物(2)	368
図41	第1面 埋葬人骨12出土遺物	353	図59	第1面 遺構外出土遺物(3)	369
図42	第1面 埋葬人骨11~16	353	図60	第1面 遺構外出土遺物(4)	370
図43	第1面 埋葬人骨15出土遺物	354	図61	第1面 遺構外出土遺物(5)	371
図44	第1面 埋葬人骨16出土遺物	355	図62	第1面 遺構外出土遺物(6)	372
図45	第1面 土坑1	355	図63	第2面 土坑2出土遺物	373
図46	第1面 土坑1出土遺物	356	図64	第2面 遺構分布図	374
図47	表採・表土出土遺物(1)	357	図65	第2面 土坑2~10	376
図48	表採・表土出土遺物(2)	358	図66	第2面 土坑11・12	377
図49	表採・表土出土遺物(3)	359	図67	第2面 ピット3~8・17・23~26	379
図50	表採・表土出土遺物(4)	360	図68	第2面 ピット出土遺物	381
図51	表採・表土出土遺物(5)	361	図69	第2面 遺構外出土遺物(1)	381
図52	表採・表土出土遺物(6)	362	図70	第2面 遺構外出土遺物(2)	382

## 表 目 次

表1	能蔵寺跡 調査地点一覧	321	表4	土坑墓・埋葬人骨一覧表	414
表2	第1面 出土遺物観察表	403	表5	火葬墓・土坑・ピット計測表	415
表3	第2面 出土遺物観察表	413	表6	出土遺物一覧表	415

## 図 版 目 次

図版1	1. 調査区近景(南西から)	419	2. 第1面 土坑墓2人骨出土状態 (南から)	423	
	2. 調査区近景(北西から)	419			
図版2	1. I区南壁土層断面(北から)	420	図版6	1. 第1面 土坑墓3人骨出土状態 (東から)	424
	2. II区南壁土層断面(北から)	420			
図版3	1. I区第1面全景(北から)	421	2. 第1面 土坑墓4人骨出土状態 (東から)	424	
	2. I区第1面調査風景(北から)	421			
図版4	1. II区第1面北半(南から)	422	図版7	1. 第1面 土坑墓1銭貨出土状態1 (北西から)	425
	2. II区第1面南半(北から)	422			
図版5	1. 第1面 土坑墓1人骨出土状態 (西から)	423	2. 第1面 土坑墓1銭貨出土状態2 (西から)	425	

3. 第1面 土坑墓1完掘状態 (西から)……………	425	2. 第1面 土坑墓13・17人骨出土 状態(南西から)……………	431
4. 第1面 土坑墓2銭貨出土状態1 (北から)……………	425	図版14 1. 第1面 土坑墓15人骨出土状態 (南から)……………	432
5. 第1面 土坑墓3人骨および地輪 出土状態(東から)……………	425	2. 第1面 土坑墓16人骨出土状態 (南東から)……………	432
6. 第1面 土坑墓3掘り方および 副葬品出土状態(東から)……………	425	図版15 1. 第1面 土坑墓17人骨出土状態 (南西から)……………	433
7. 第1面 土坑墓4掘り方および 副葬品出土状態(南東から)……………	425	2. 第1面 土坑墓18人骨出土状態 (南東から)……………	433
8. 第1面 土坑墓4銭貨 (図13-4~10)出土状態……………	425	図版16 1. 第1面 土坑墓19人骨出土状態 (北東から)……………	434
図版8 1. 第1面 土坑墓5人骨出土状態 (西から)……………	426	2. 第1面 土坑墓20人骨出土状態 (南東から)……………	434
2. 第1面 土坑墓6人骨出土状態 (南東から)……………	426	図版17 1. 第1面 土坑墓15・21・22人骨 出土状態(南西から)……………	435
図版9 1. 第1面 土坑墓6かわらけ出土 状態1(西から)……………	427	2. 第1面 土坑墓22人骨A・B出土 状態(東から)……………	435
2. 第1面 土坑墓6かわらけ出土 状態2(南東から)……………	427	図版18 1. 第1面 土坑墓24人骨出土状態 (北から)……………	436
3. 第1面 土坑墓6完掘 (北西から)……………	427	2. 第1面 土坑墓24銭貨出土状態 (南西から)……………	436
図版10 1. 第1面 土坑墓7人骨出土状態 (北西から)……………	428	3. 第1面 土坑墓24かわらけ出土状態 (南から)……………	436
2. 第1面 土坑墓8人骨出土状態 (北から)……………	428	図版19 1. 第1面 土坑墓23人骨出土状態 (西から)……………	437
図版11 1. 第1面 土坑墓9人骨出土状態 (北から)……………	429	2. 第1面 土坑墓25人骨出土状態 (東から)……………	437
2. 第1面 土坑墓10人骨出土状態 (南東から)……………	429	3. 第1面 土坑墓26人骨出土状態 (北から)……………	437
図版12 1. 第1面 土坑墓10木棺底板出土 状態(西から)……………	430	図版20 1. 第1面 土坑墓27人骨出土状態 (南東から)……………	438
2. 第1面 土坑墓11人骨出土状態 (南西から)……………	430	2. 第1面 土坑墓27木棺および掘り方 検出状態(南から)……………	438
3. 第1面 土坑墓14人骨出土状態 (北から)……………	430	図版21 1. 第1面 土坑墓27木棺検出状態 (西から)……………	439
図版13 1. 第1面 土坑墓12人骨出土状態 (東から)……………	431	2. 第1面 土坑墓27木棺アップ……………	439
		3. 第1面 土坑墓27完掘状態 (東から)……………	439

	4. 第1面 土坑墓27漆器椀出土状態… 439		8. 第1面 土坑1かわらけ出土状態 近接(北西から) …… 443
	5. 第1面 埋葬人骨3出土状態 (南から) …… 439	図版26	1. I区第2面全景(北から) …… 444
図版22	1. 第1面 埋葬人骨1・5出土状態 (西から) …… 440		2. II区第2面全景(北西から) …… 444
	2. 第1面 埋葬人骨2・4出土状態 (北から) …… 440	図版27	1. 第2面 土坑2(北西から) …… 445
	3. 第1面 埋葬人骨3銭貨出土状態 (北西から) …… 440		2. 第2面 土坑6(北西から) …… 445
図版23	1. 第1面 埋葬人骨4数珠玉出土 状態 …… 441		3. 第2面 ピット3・6・8 (北東から) …… 445
	2. 第1面 埋葬人骨6出土状態 (北西から) …… 441		4. 第2面 土坑6覆土中礎板出土 状態 …… 445
	3. 第1面 埋葬人骨7出土状態 (北西から) …… 441		5. 第2面 ピット3(北東から) …… 445
	4. 第1面 埋葬人骨8・9出土状態 (北東から) …… 441	図版28	6. 第2面 ピット4・5(北から) …… 445
	5. 第1面 埋葬人骨10出土状態 (東から) …… 441		7. 第2面 ピット6(北東から) …… 445
図版24	1. 第1面 埋葬人骨11出土状態 (東から) …… 442		8. 第2面 ピット7(西から) …… 445
	2. 第1面 埋葬人骨15出土状態 (北西から) …… 442	図版28	1. 第1面 火葬墓2出土遺物 …… 446
図版25	1. 第1面 埋葬人骨12出土状態 (北西から) …… 443		2. 第1面 土坑墓出土遺物(1) …… 446
	2. 第1面 埋葬人骨13出土状態 (南東から) …… 443	図版29	1. 第1面 土坑墓出土遺物(2) …… 447
	3. 第1面 埋葬人骨14出土状態 (南から) …… 443	図版30	1. 第1面 土坑墓出土遺物(3) …… 448
	4. 第1面 埋葬人骨16出土状態 (北西から) …… 443	図版31	1. 第1面 土坑墓出土遺物(4) …… 449
	5. 第1面 火葬墓1灰層検出状態 (南から) …… 443	図版32	1. 第1面 埋葬人骨出土遺物(1) …… 450
	6. 第1面 火葬墓2火葬骨検出状態 (南から) …… 443	図版33	1. 第1面 埋葬人骨出土遺物(2) …… 451
	7. 第1面 土坑1遺物出土状態 (北西から) …… 443		2. 第1面 土坑出土遺物 …… 451
			3. 表採・表土出土遺物(1) …… 451
		図版34	1. 表採・表土出土遺物(2) …… 452
		図版35	1. 表採・表土出土遺物(3) …… 453
		図版36	1. 表採・表土出土遺物(4) …… 454
		図版37	1. 表採・表土出土遺物(5) …… 455
		図版38	1. 表採・表土出土遺物(6) …… 456
		図版39	1. 第1面 遺構外出土遺物(1) …… 457
		図版40	1. 第1面 遺構外出土遺物(2) …… 458
		図版41	1. 第1面 遺構外出土遺物(3) …… 459
		図版42	1. 第1面 遺構外出土遺物(4) …… 460
		図版43	1. 第1面 遺構外出土遺物(5) …… 461
			2. 第2面 土坑出土遺物 …… 461
			3. 第2面 ピット出土遺物 …… 461
			4. 第2面 遺構外出土遺物(1) …… 461
		図版44	1. 第2面 遺構外出土遺物(2) …… 462



# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市材木座二丁目293番2で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である能蔵寺跡（神奈川県遺跡台帳No.314）の範囲内にあたり、近隣地における過去の発掘調査成果から、地下に埋蔵文化財が存在することが確実であった。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、文化財保護法に基づく発掘調査等の措置について建築主と協議した。その結果、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約52㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、齋木秀雄が現地調査を担当した。調査期間は、平成18年8月10日～同年11月6日である。

調査は発生土の処理を考慮して対象面積をⅠ区、Ⅱ区に分割して調査し、崩落を防止するため両調査区の間幅50～60cmの未調査区を帯状に残した。まず8月7日にⅠ区の表土掘削を重機で行い、本格調査を8月10日から開始して人力による遺構確認作業を実施した。その結果、地表から約50cm下がった標高7.1m付近から、中世から近世に属する多数の土坑墓および埋葬人骨を検出し、これを第1面として遺構精査と記録作業を継続して行った。埋葬人骨の記録にはデジタルカメラを併用し、作業の円滑化を図った。なお、調査区中央で遺存状態良好な埋葬人骨を検出したが、Ⅱ区との間の未調査区へと延びていたことからその埋葬人骨を島状に残し、第2面の遺構調査を終えた9月21日に調査区を一部拡張して調査を行った。そして第1面の調査を終えて10～15cm掘り下げたところで泥岩ブロックを密に含む暗褐色土を検出したが、遺構は確認されず、さらに30cmほど掘削すると砂を含む暗褐色土層上面で土坑とピットを検出し、これを第2面として遺構精査と記録作業等を行った。第2面および拡張部分の調査を終了した後9月25日からⅠ区を埋め戻し、9月28日にはⅡ区の表土掘削に着手した。

Ⅱ区では表土下約50cmのところⅠ区と同様に土坑墓と人骨を検出し、墓域が広がっていることが明らかとなった。土坑墓と埋葬人骨等の精査と記録作業を終了した後さらに20～30cm掘り下げると、標高6.60m前後で泥岩ブロックを版築した整地面を確認した。この整地層はⅠ区の暗褐色土に対応すると考えられたが、Ⅱ区でも遺構や遺物が確認されなかったためさらに掘り下げを行った。そして標高6.40m付近でⅠ区と同じ砂を含む暗褐色土層を確認し、土坑とピットを検出した。そこで引き続き遺構の精査と図面の記録作業を行い、11月6日に調査に関わるすべての作業を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA 9）に準じた、鎌倉市四級基準点53408（X=-76736.768、Y=-25185.234）、53409（X=-76762.459、Y=-25450.333）を基にした。このため本報で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53408（標高6.420m）を基に移設した。

## 第2節 調査地点の位置と歴史的環境

能蔵寺跡（No.314）は、鎌倉市内中心部の南東側に位置し、材木座海岸に近い材木座二丁目に所在している。この調査地点一帯は、本遺跡名の由来ともなった「能蔵寺」の伝承地としても知られ、旧字名にも材木座字能蔵寺としてその名を残している。

本調査地点は、鎌倉市材木座二丁目293番2に所在し、隋我山来迎寺の北西50mほどに位置している。

調査地点の西側には、若宮大路の東側を並行するように南北方向の幹線道路が材木座海岸に延びている。この道筋はかつての小町大路で、材木座海岸から乱橋を経て大町四つ角で大町大路と交差し、小町を経て鶴岡八幡宮の東側の鳥居前に通ずる、若宮大路と並ぶ鎌倉幕府の中核をなした「六大路」の一つで、『吾妻鏡』にもその名が記されている。本調査地点は、この小町大路の東側にほぼ並行して走る、南北道路の東面に所在している。この道路は、北上すると現横須賀市水道路の手前で東西方向に分岐して現行道路に接続する。一方、南下すると、その道筋には来迎寺、五所神社、実相寺などの寺社が並び、材木座海岸に至る。

本調査地点の周辺には寺院が多く所在し、さながら寺町の様相を呈している。それらを列举すると、小町大路沿いには本興寺、啓運寺、妙長寺、向福寺、九品寺などの寺院が所在し、本遺跡が所在する道沿いには来迎寺、実相寺、補陀洛寺、光明寺などの現存する寺院の外に、廃寺も多く存在した地域でもあった。

本調査地点を含む遺跡名称ともなっている「能蔵寺」については、宗旨未詳の廃寺であるが、『鎌倉事典』（白井編 1976）や『鎌倉廃寺事典』（貫・川副 1980）などに拠れば、来迎寺はもとは源頼朝が旗揚げの際に頼朝に加勢して治承4（1180）年に衣笠城で戦死した三浦義明を弔うために建てられた、真言宗能蔵寺を改宗して来迎寺に改めたという寺伝があり、齋木秀雄氏は能蔵寺跡（No.314）材木座二丁目294番3外地点の報告の中で遺跡名称について考察を加えている（齋木・降矢 2007）。また、本調査地点の道筋に所在する実相寺は建久4（1193）年に曾我兄弟に討たれた工藤祐経の邸宅跡が寺院になったとの伝承や、養和元（1181）年に源頼朝が入府の際に礼願所として創建されたと伝えられる補陀洛寺などは、鎌倉時代初めの創建という点で共通しており、調査地点周辺の開発がこれらと前後して始まったことも推定される。

### 第3節 周辺の考古学的調査

本調査地点周辺の発掘調査例は、鎌倉市内では他地域に比べると比較的少ない。特に、能蔵寺跡の遺跡範囲内では本地点が5地点目の事例となる。最初の調査地点は、本地点から南に110mほどに位置する「五所神社」社頭で行われた①材木座二丁目274番4地点の調査（馬淵 1995）である。この調査では、12世紀末から14世紀前半の遺構および遺物が発見された。北東に80mほどの②材木座二丁目297番1地点の調査（伊丹・川又 2003）では5面の遺構面が調査され、各遺構面からは土坑や柱穴などが検出された。これらの遺構面からは13世紀中葉から14世紀初頭にかけての遺物が出土し、その年代観および遺構の構築状況から遺構構築年代を3期に分けて考察を加えている。材木座二丁目274番4地点の西に約30mの③材木座四丁目274番2の一部地点の調査（原 2007）では、中世前期に比定される4面の遺構面とそれに伴う遺物が発見された。これらの遺構面からは13世紀前葉から14世紀中葉を中心とする遺物が出土し、各遺構面から検出された方形竪穴建物や柱穴、井戸、土坑、区画溝等の配置状況とその出土遺物の年代観から3期に大別して各期の変遷と年代の概略を述べている。また、遺構は検出されなかったが、地業層や遺構覆土に混じって奈良時代から平安時代の土師器や須恵器などの破片が出土しており、砂丘上に形成された古代集落の存在も想起されている。同じく④材木座二丁目294番3外地点の調査（齋木・降矢 2007）では、遺構とその出土遺物の年代観から4期に大別して各期の変遷と年代の概略をまとめている。

近隣遺跡としては、本遺跡の西側を中心に材木座町屋遺跡（No.261）が広がっている。包蔵地の範囲は、市街地の南西部側を中心に、西側は滑川の左岸域まで及び、南側は材木座海岸まで及んでいる。また、J



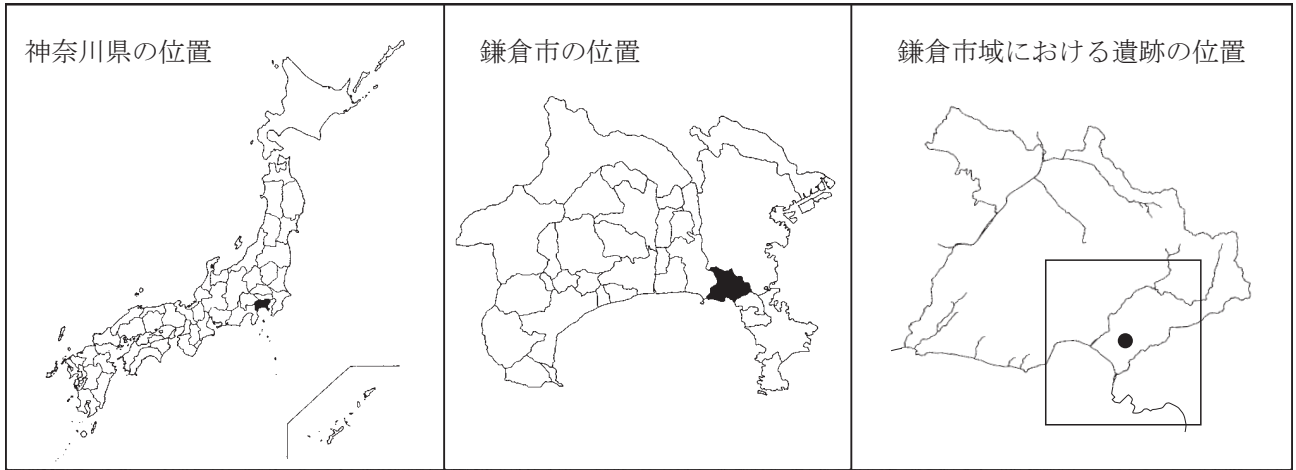


図1 遺跡位置図





図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

R横須賀線を挟んだ北側には『吾妻鏡』の建長3(1251)年および文永2(1265)年に商業地として定められた「大町」「米町(殻町)」「魚町」を内包する米町遺跡(No.245)、滑川を境に西側一帯は方形竪穴建物と人骨が多数出土した由比ガ浜中世集団墓地(No.372)、東側の丘陵地や谷戸には長勝寺遺跡(No.313)や弁ヶ谷遺跡(No.249)などの遺跡が広がっている。

これら以外にも、小町大路を大町四ツ角から向福寺方面に向かうと、その少し手前に「鎌倉十橋」の一つに数えられる乱橋がある。現在は石碑だけであるが、元弘3(1333)年、新田義貞の鎌倉攻めの際に防戦する幕府軍がこの橋の付近で乱れ始めたため、この名がついたという伝承がある。また、光明寺脇の海岸には貞永2(1233)年に完成した、日本最古の築造遺跡である和賀江島がある。

図中外となるが、長勝寺前の横須賀市水道路を東に進むと「名越切通」に至る。鎌倉と三浦半島を結ぶ要路の一つで、周辺には切通しの防衛にも関係したと考えられる平場や切岸、やぐらや火葬跡などの葬送に関する遺構も多く分布しており、中世都市周縁の歴史的景観をよく残している。昭和42年に国史跡に指定された(鈴木ほか 2001)。また、名越坂一帯は、北条政子の御産所や北条一門が居を構えた地として伝えられている。また、長勝寺から切通しに至る名越坂の南北に広がる谷戸では南北朝期から室町期を中心とした墓域が広がる。

表1 能蔵寺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	能蔵寺跡(No.314)	材木座二丁目293番2地点	齋木・鯉淵 2007
①	能蔵寺跡(No.314)	材木座二丁目274番4地点	馬淵 1995
②	能蔵寺跡(No.314)	材木座二丁目297番1地点	伊丹・川又 2003
③	能蔵寺跡(No.314)	材木座四丁目274番2の一部地点	原 2007
④	能蔵寺跡(No.314)	材木座二丁目294番3外地点	齋木・降矢 2007

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

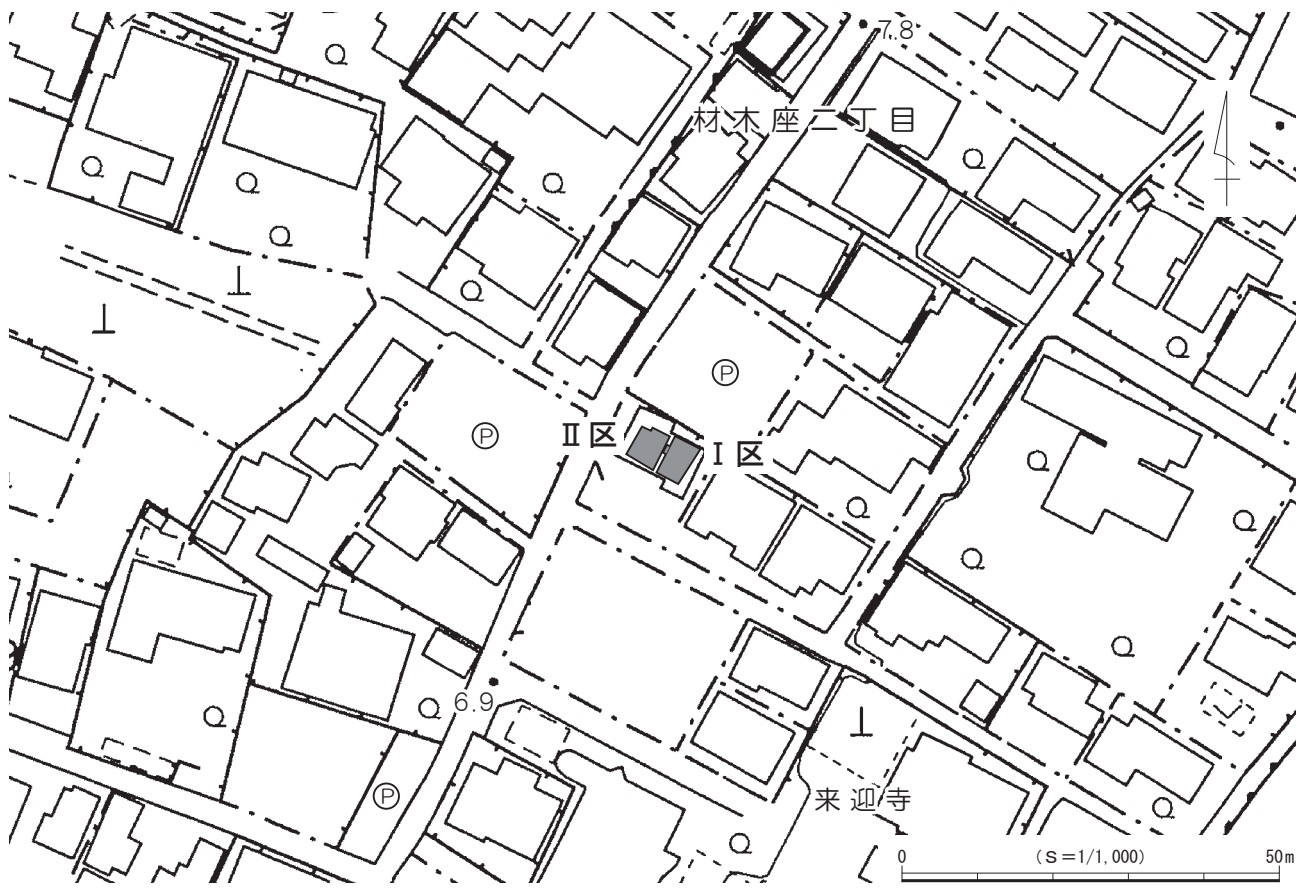


図3 調査区位置図

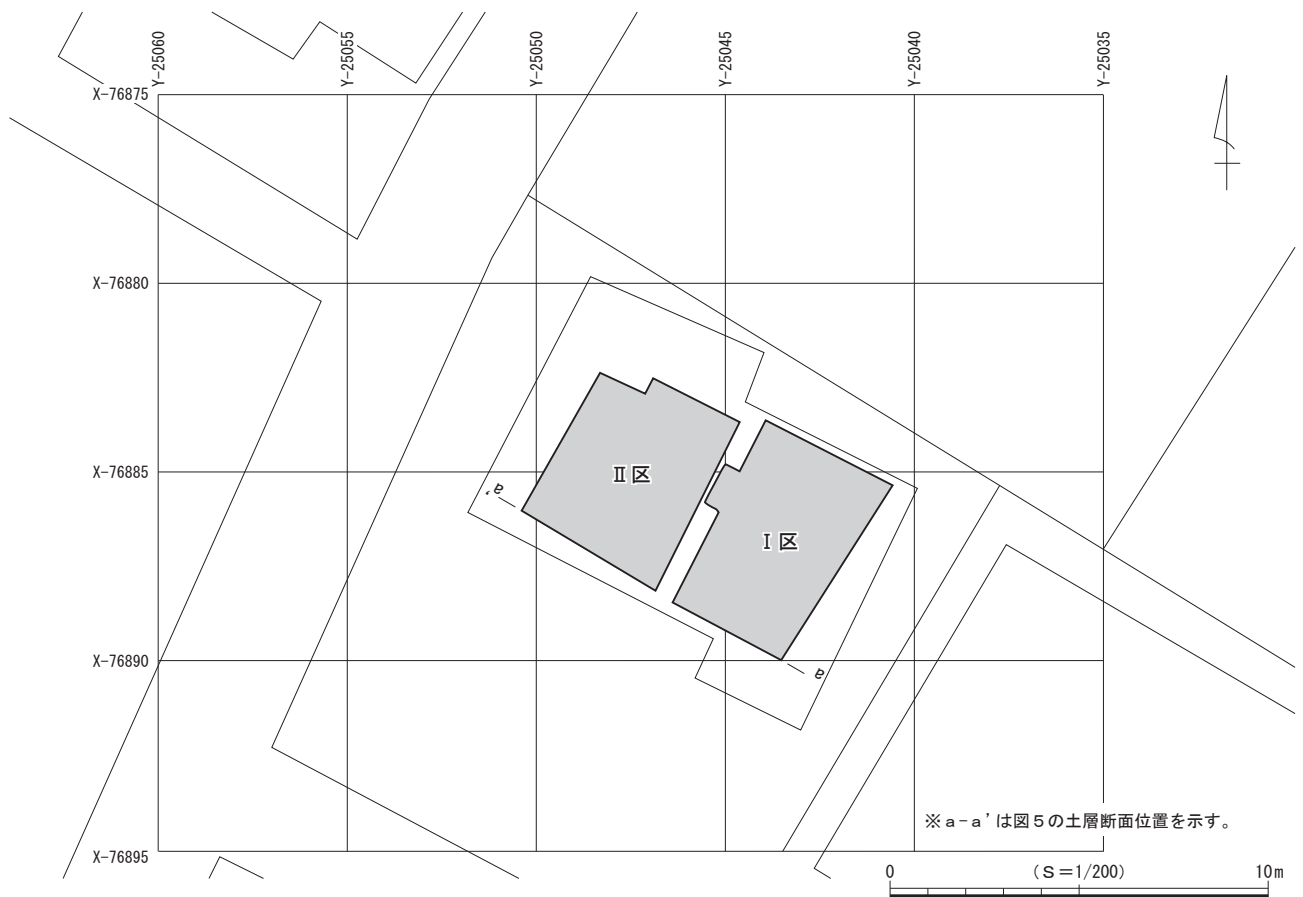


図4 調査区配置図



## 第二章 堆積土層

本地点の調査では、部分的な堆積を含めると、多くの堆積土層が確認されている。これらの土層は、大別すると9層にまとめることが可能である。

現地表は標高7.6mほどで、約20cmの厚さに表土および現代造成土(1層)が堆積し、その下に20~25cmの厚さに茶褐色砂質土(近世耕作土・2層)が堆積している。この近世耕作土直下には小泥岩ブロックを多く含む、硬く締まった暗褐色土(3層)が10~30cmの厚さに堆積している。3層の下が小泥岩ブロック、中世遺物を含む暗褐色土の包含層(4層)である。4層上面の標高は、北で6.90m、南で7.06mを測り、北側では3層が深くまで達している。4層上面で土坑墓が確認されたため、この面を第1面とした。したがって、第1面は近世の耕作によって削平された結果として残った確認面であり、いわゆる土坑墓の構築面ではない。

4層の下は小泥岩ブロックを密に含む暗褐色土(5層)が30~35cmの厚さに堆積している。この土層は整地層と思われる。初期の土坑墓はこの整地層から掘り込まれたと考えられる。5層上面の標高は北で6.64m、南で6.80mを測る。5層の下は少量の小泥岩ブロックを含む砂質の暗褐色土(6層)で、土坑や柱穴が確認されている。この面を第2面とした。第2面のレベルは北で6.40m、南で6.40mを測る。第2面の下は、植物が腐食した痕跡を含む暗褐色土(7層)、きめ細かな茶褐色の砂層(8層)が、それぞれ部分的に堆積し、締まりのある黄白色砂層(9層)になる。7層下面の標高は6.22mを測る。9層は標高5.75mまで確認したが、さらに堆積は続いている。

9層が本地点の中世基盤層と考えたが、8層や7層からの出土遺物が極めて少ないため、検討の余地がある。この面からの掘り込みと考えられる土層からは土器細片と木片が出土している。

本地点から北東に約30m離れた地点の調査では、標高6.50m前後で確認された暗黄褐色砂層の下に黒褐色粘土と青灰色砂層が10~20cmの厚さで交互に堆積していることが確認されている(齋木・降矢 2007)。青灰色砂層は飛砂、黒褐色粘土には細かな植物の茎が多く混じり、植物が群生する湿地と考えられている。海拔レベルは異なるが、本地点周辺では黄褐色から黄白色の締まりのある砂層が中世以前あるいは中世の基盤層と考えられる。

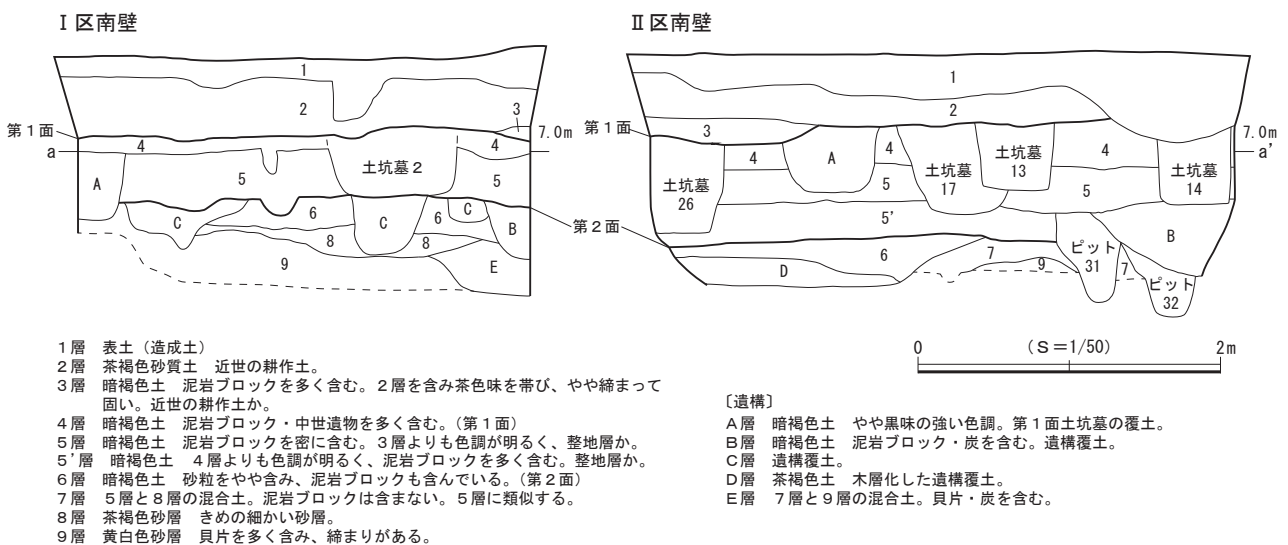


図5 調査区土層断面図

### 第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、発生土の処理を考慮して対象地区をⅠ区とⅡ区に分割し、崩落を防止するため両調査区の間幅50～60cmの未調査区を残した。そのため、最初に調査したⅠ区と次いで調査したⅡ区では遺構の遺存状況が異なっていたこともあり、やや不明瞭な部分が残ってしまった。

両調査区の遺構確認面は2面であるが、それぞれの面で検出した遺構には新旧関係がみられ、比較的長い時間幅が考えられる。検出した遺構は火葬墓2基、土坑墓27基、埋葬人骨16体、土坑12基、ピット34基である。出土遺物は、遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して83箱を数え、このうち人骨が54箱を占める。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1・2面)に説明する。

#### 第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出し、確認面の標高は北で6.90m、南で7.06mを測る。検出した遺構は、火葬墓2基、土坑墓27基、掘り込みを確認し得なかった単独の埋葬人骨16体、土坑1基で、遺構の空白地がⅡ区の南側に若干あるものの、Ⅰ・Ⅱ区のほぼ全面にわたって遺構が重複して分布していた。また、遺構は東西南北四方向の調査区外へと続いている様相が捉えられた。

遺物は主に土坑墓の副葬品として銭貨やかわらけが出土しており、時期は15～17世紀代に属すると考えられる。

##### (1) 火葬墓

火葬墓はⅡ区の北端から2基を検出した。土坑状の掘り込み覆土にワラ状植物の炭化物層と火葬骨を含む灰層が堆積しており、火葬墓と判断した。時期は覆土中にみられる宝永火山灰の堆積や出土遺物から推定すると、17世紀代に属すると考えられる。

##### 火葬墓1(図7)

Ⅱ区北西隅に位置し、全体の約半分が調査区外北に延びる。東側に火葬墓2が隣接する。平面形は円形ないし楕円形と推定され、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は東西現存長1.05m、南北現存長72cm、深さ20cmで、坑底面の標高は7.0mを測る。ワラ状の植物を燃やした痕跡が坑底面に認められ、その上面に堆積する灰層中に火葬骨が確認された。過去に鎌倉市内で検出された火葬跡は坑底面に泥岩がみられるが、本址では出土しなかった。覆土は4層に分けられ、最下層にワラ状植物の炭化物が5～6cmの厚さで堆積し、その上に灰層(3層)が7cmほど堆積している。灰層に含まれる火葬骨はすべて細片で、主要部分を取り去ったものと考えられる。灰層の上面には宝永火山灰(1・2層)が10cmほどの厚さで堆積し、火山灰上面の標高は7.18m前後である。

遺物は出土しなかったが、宝永火山灰直下ということ踏まえると、17世紀代の火葬墓と考えられる。

##### 火葬墓2(図7)

Ⅱ区の北壁際に位置し、全体の約半分が調査区外北に延びる。平面形は円形ないし楕円形と推定され、壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は東西現存長1.78m、南北現存長85

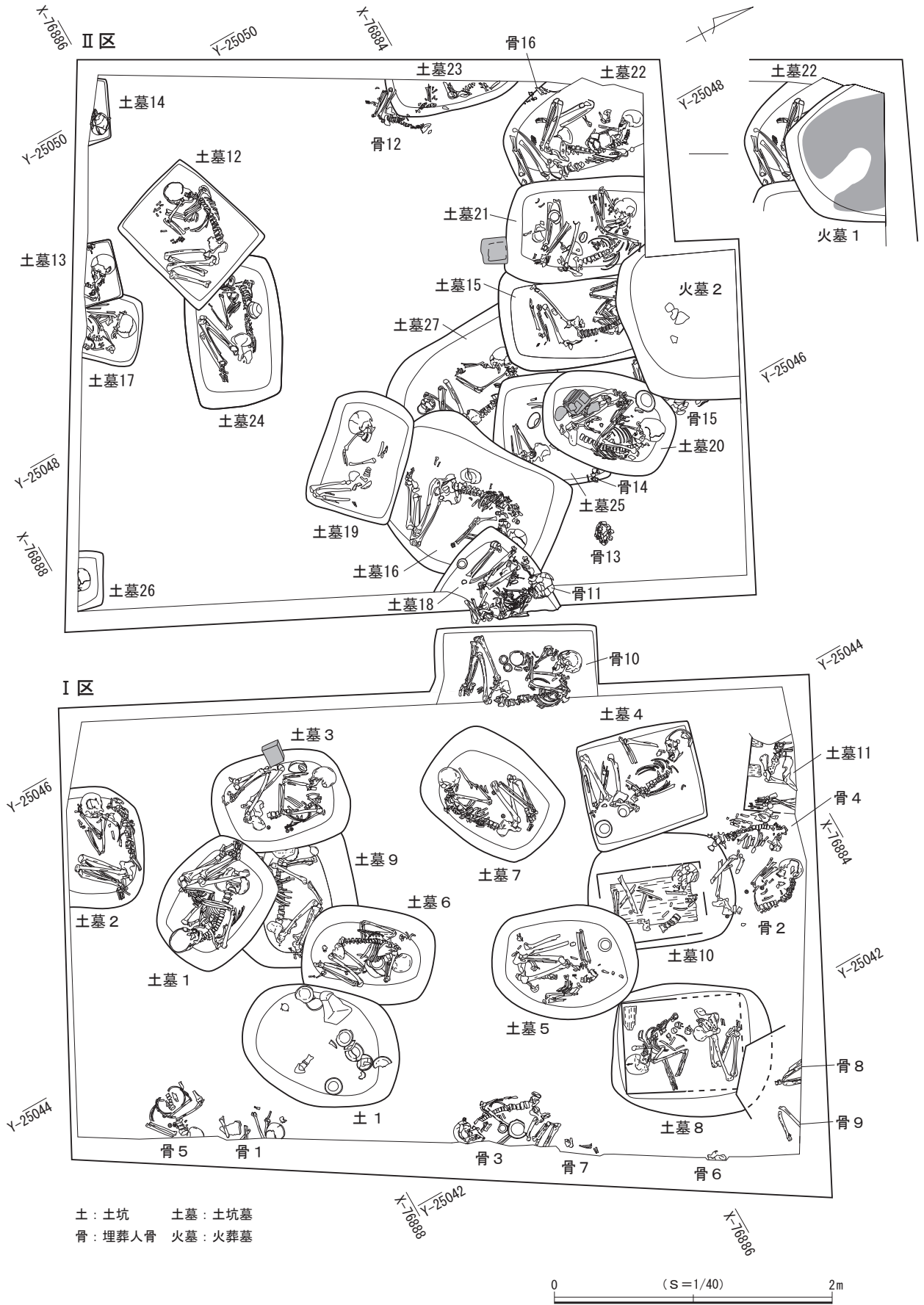


图6 第1面 遺構分布图



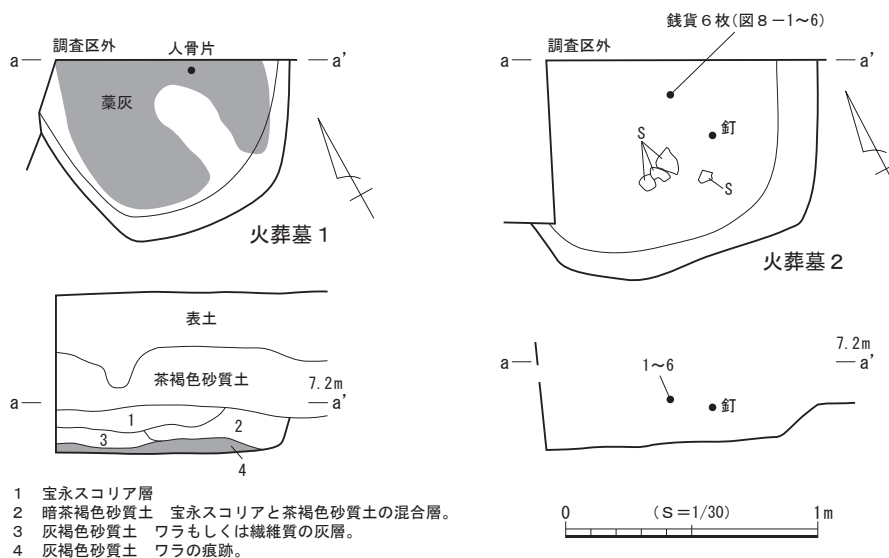
cm、深さ30cmで、坑底面の標高は6.80mを測る。坑底面に層厚8cmの灰層があり、その上に層厚9cmのワラ状植物の炭化層と層厚10cmの灰層が堆積している。灰層には火葬骨が混在し、覆土上部に宝永火山灰は確認できなかった。土坑内南側で上面が焼けて赤化した拳大の泥岩4点が確認され、遺体を火葬する際に坑底面に置いたと考えられる。

遺物は中央部付近から銭貨6枚(聖宋元寶1、古寛永通寶3、銭名不明2)が出土しており、火葬に付した後にそのまま墓とした可能性もあるが、骨の主要部分は確認できなかった。他に、銭貨の南側から釘1点が出土している。

### 出土遺物(図8)

遺物はかわらけ2点、磁器1点、陶器5点、金属製品7点が出土し、このうち6点を図示した。

1~6は銭貨であり、1は聖宋元寶(北宋・1101)、2・5・6は古寛永通寶(1636~1659)である。3・4は銭名が不明である。寛永通寶が古寛永通寶で占められている事から、17世紀代の火葬墓と考えられる。



- 1 宝永スコリア層
- 2 暗茶褐色砂質土 宝永スコリアと茶褐色砂質土の混合層。
- 3 灰褐色砂質土 ワラもしくは繊維質の灰層。
- 4 灰褐色砂質土 ワラの痕跡。

図7 第1面 火葬墓1・2

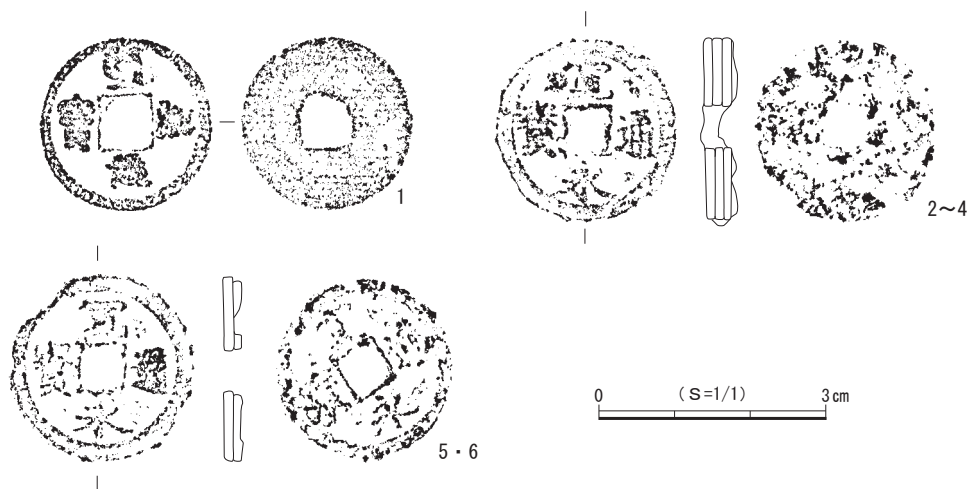


図8 第1面 火葬墓2出土遺物

## (2) 土坑墓

土坑墓はⅠ区から11基、Ⅱ区からは16基の合計27基を検出した。出土遺物から時期を推定すると大半が15～16世紀代に属するが、土坑墓Ⅰのみ古寛永通寶が副葬されているため17世紀代と考えられる。分布はⅠ・Ⅱ区の全域に及ぶが、Ⅱ区の北東部に濃密な分布が認められ、Ⅱ区の南西部はややまばらで土坑墓の空白地がある。土坑墓の平面形は隅丸長方形を主体とし、楕円形、方形のものが認められた。規模は長軸0.76～1.26mで、掘り方の中に木棺が設置された例も確認できた。埋葬された人骨の姿勢は側臥屈葬が主体をなし、一部に仰臥屈葬が確認された。これらの多くは副葬品を伴っており、種別ではかわらけと銭貨が主流で、ガラス製の数珠玉、刀子、釘、漆椀がごくまれに認められた。

以下に各土坑墓の様相について詳述するが、頭骨が確認されなかったものの頭位方向は、脊椎の上端と下端を結ぶ軸で計測を行った。また、土坑墓から出土している完形ないし略完形のかわらけや銭貨、数珠玉については、平断面図上に図示できなかったものについても遺構の性格から副葬品と考え、各遺構のところで記述した。なお、土坑墓の属性については表4にまとめ、出土人骨の自然科学分析は第四章第1節に掲載した。

### 土坑墓1 (図9)

Ⅰ区南側中央付近に位置し、北側で土坑墓3・9と重複し本址が時期的に最も新しい。頭骨の一部は表土掘削時に失われたが、ほぼ完全な状況で確認できた。平面形は西壁が外側へやや張り出す隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸93cm、短軸74cm、深さ17cmを測る。掘り方の主軸方位はN-24°-Wを指す。出土した人骨は35～54歳の男性で、土坑の中央に頭位を南東方向に向け、膝を左手側に折り曲げた仰臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.87m、寛骨6.81mで、がっしりとした骨格である。

遺物は首辺りから数珠玉1個、右上腕骨下の胸部から銭貨6枚が出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図10)

遺物はかわらけ2点、陶器6点、瓦質土器1点、ガラス製品1点、金属製品8点が出土し、このうち7点を図示した。

1はガラス製の数珠玉と思われる製品である。2～7は銭貨で、いずれも古寛永通寶(1636～1659)である。副葬された古寛永通寶から、17世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓2 (図9)

Ⅰ区の南壁際に単独で位置する。一部は調査区外南に延びており、全体の2/3ほどを調査し得たと考えられる。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形と推定され、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸86cm、短軸現存長54cm、深さ11cmを測る。掘り方の主軸方位はN-62°-Wを指す。出土した人骨は55歳以上の女性で、土坑内北寄りに頭位を西に向け、顔面を南に向けた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.96m、寛骨6.84mである。

遺物は胸椎北側の坑底直上より銭貨1枚が出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図11)

遺物はかわらけ3点、陶器7点、石製品3点、金属製品2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は銭貨で、熙寧元寶(北宋・1068)である。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

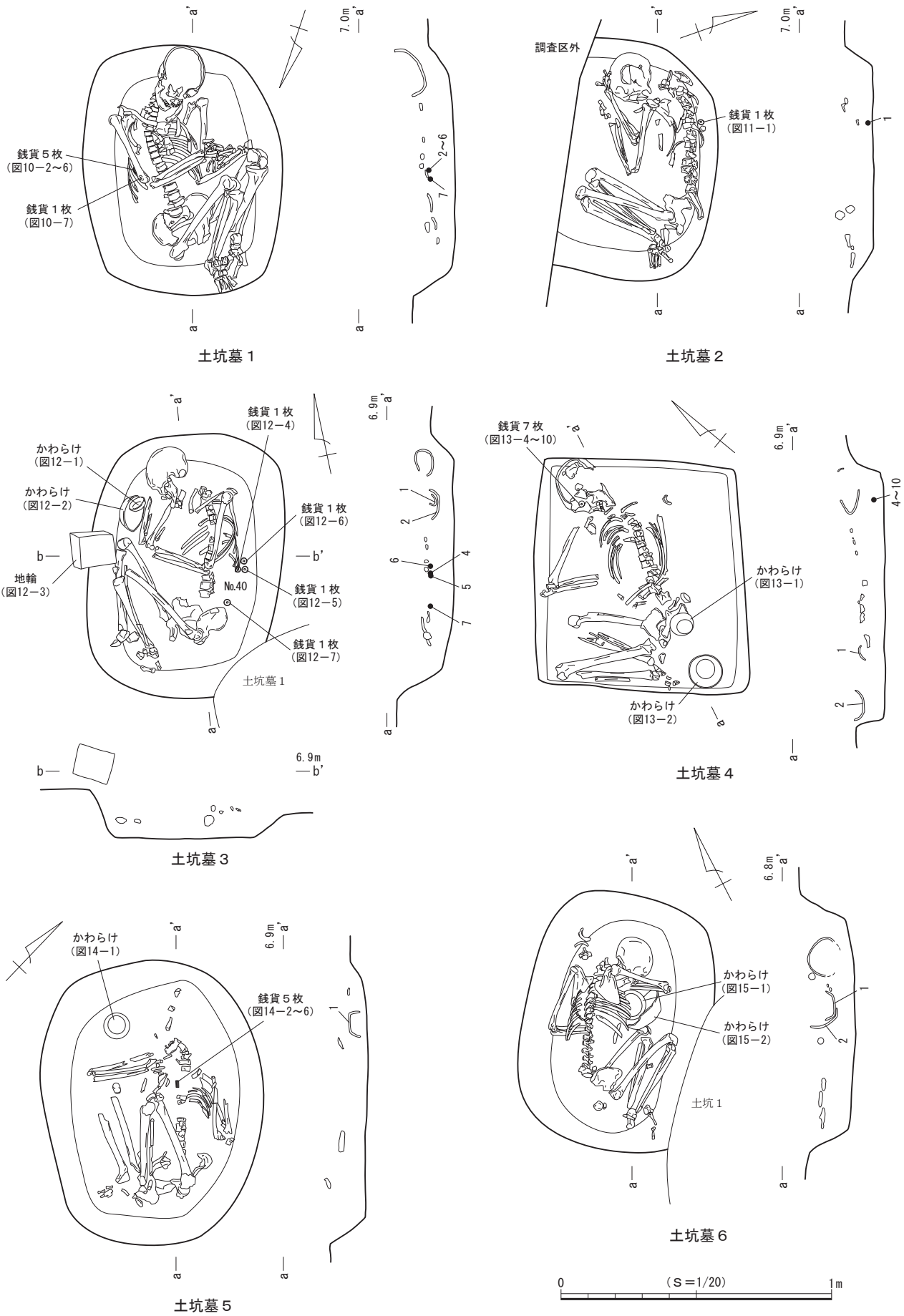


図9 第1面 土坑墓1~6



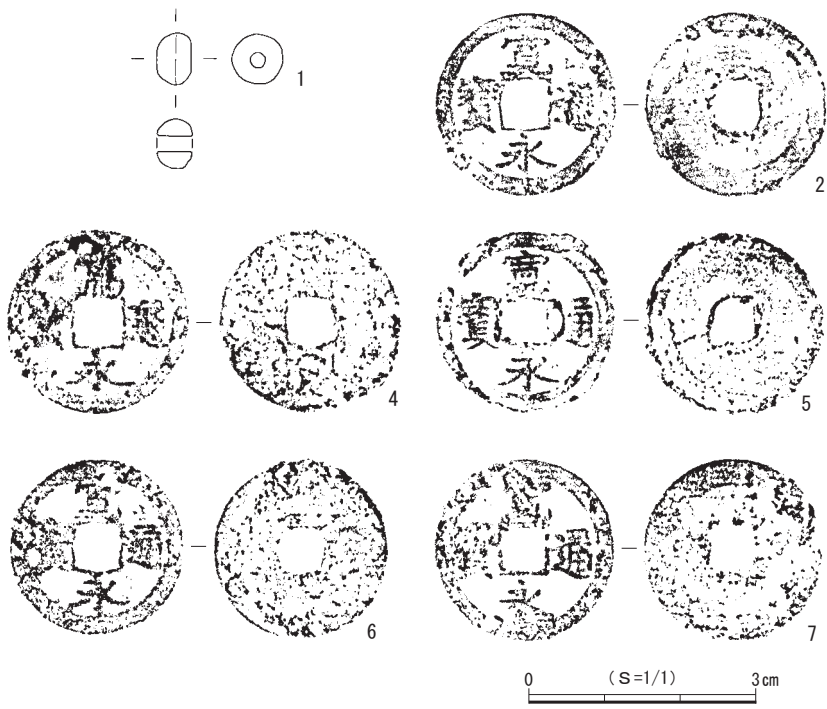


图10 第1面 土坑墓1 出土遺物

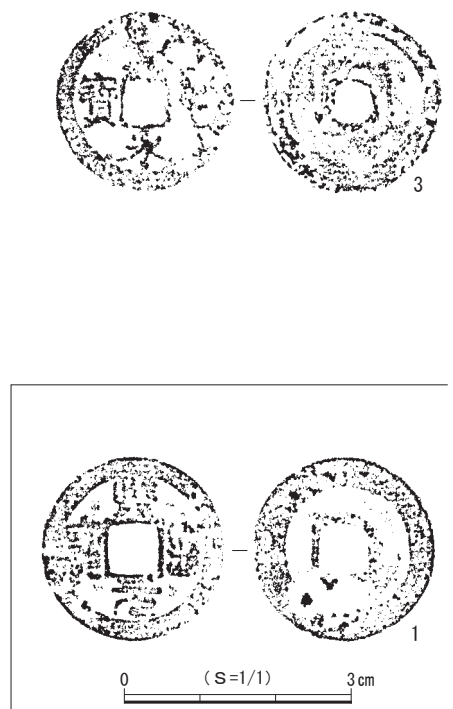


图11 第1面 土坑墓2 出土遺物

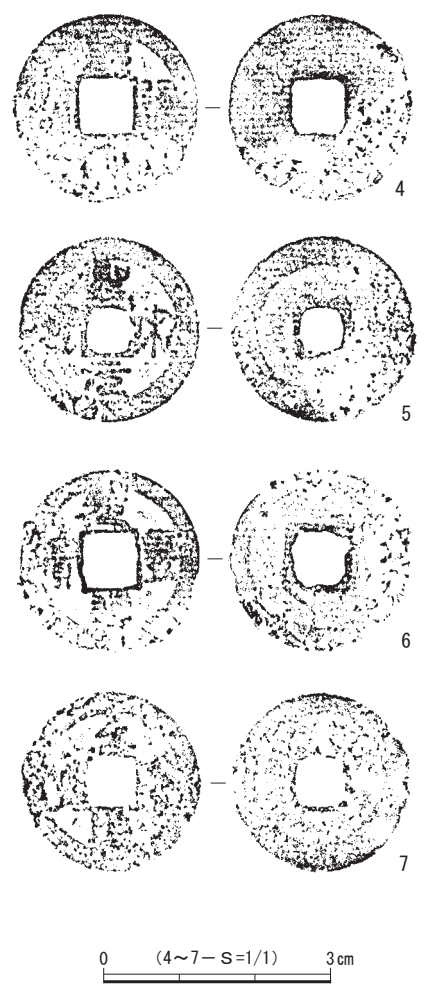
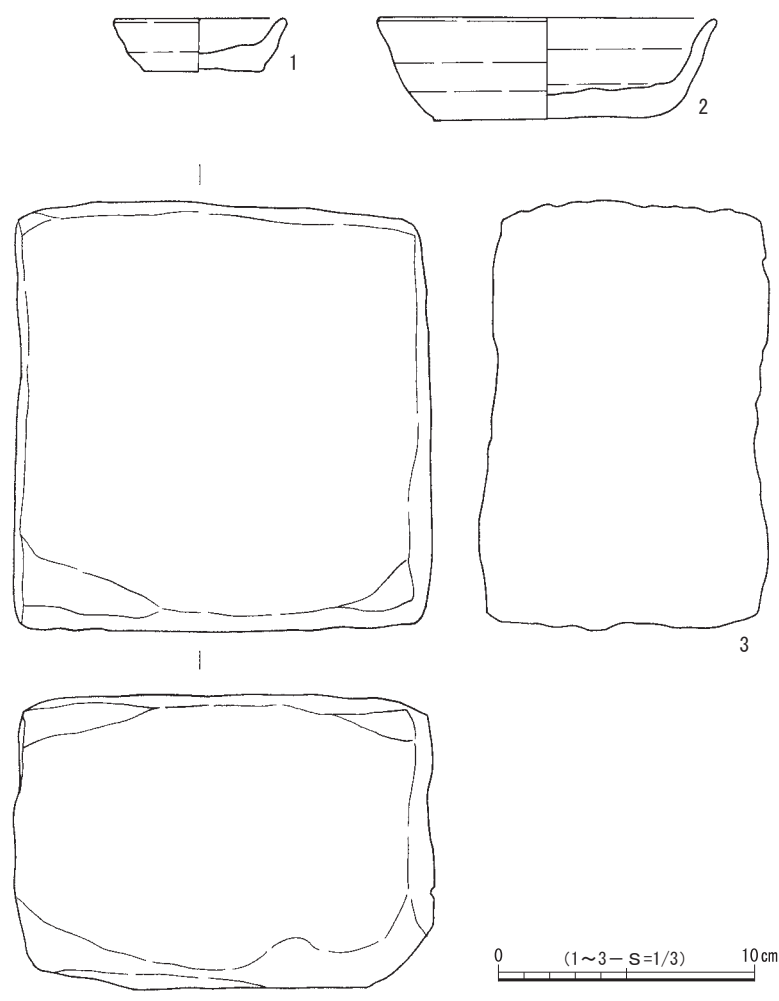


图12 第1面 土坑墓3 出土遺物

### 土坑墓3 (図9)

I 区の南西壁近くに位置し、南側で土坑墓1と重複しているが新旧関係は明らかではない。平面形は隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸98cm、短軸71cm、深さ26cmを測る。掘り方の主軸方位はN-14°-Eを指す。出土した人骨は55歳以上の女性で、土坑のほぼ中央に頭位を北に向け、顔面を西に向けた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.81m、寛骨6.80mである。

遺物は安山岩製五輪塔の地輪が覆土最上部の西壁近くで確認され、墓標として用いられた可能性が考えられよう。また、肋骨東側の胸部から腰にかけて銭貨4枚が出土したほか、右腕の前面から大小各1点のかわらけが入れ子の状態で出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図12)

遺物はかわらけ2点、陶器4点、土器9点、石製品1点、ガラス製品1点、金属製品4点が出土し、このうち7点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3は五輪塔の地輪、4～7は銭貨で、4は皇宋通寶(北宋・1038)と思われる。5は元豊通寶(北宋・1078)、6は聖宋元寶(北宋・1101)、7は「元」のみ判読可能である。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓4 (図9)

I 区の北西部に位置し、東側は土坑墓10と重複しているが新旧関係は明らかではない。平面形は方形で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は長軸85cm、短軸78cm、深さ14cmを測る。掘り方の主軸方位はN-52°-Eを指す。出土した人骨は55歳以上の女性で、土坑内西寄りの位置に頭位を北に向け、顔面を西側に向けて顎を強く引いた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.77m、寛骨6.64mである。

遺物は顔面の辺りから7枚の銭貨が連なって出土し、出土レベルは坑底から4cmほど浮いた位置にあたる。また、腰部上面と土坑墓南隅から中小各1点のかわらけが出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図13)

遺物はかわらけ2点、磁器1点、陶器25点、金属製品7点が出土し、このうち10点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけ、3は魚住窯産の片口鉢、4～10は銭貨で、4・5は開元通寶(南唐・960)、6は治平元寶(北宋・1064)、7は熙寧元寶(北宋・1068)、8・9は「元寶」「嘉○通寶」と部分的に判読可能、10は洪武通寶(明・1368)である。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓5 (図9)

I 区中央東側に位置し、北側は土坑墓10と、東側は土坑墓8と重複し、両土坑墓の一部を壊して構築されている。平面形は楕円形に近い隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.05m、短軸82cm、深さ15cmを測る。掘り方の主軸方位はN-47°-Wを指す。出土した人骨は55歳以上の女性で、土坑内西寄りの位置に埋葬されている。上顎・下顎を部分的に残して頭部は失われているが、おそらく頭位を北西方向に向け、脚部を強く折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは下顎骨6.70m、寛骨6.75mである。

遺物は上腕骨の北西側から逆位の小形かわらけが1点、胸部から銭貨5枚が出土しており、副葬品と

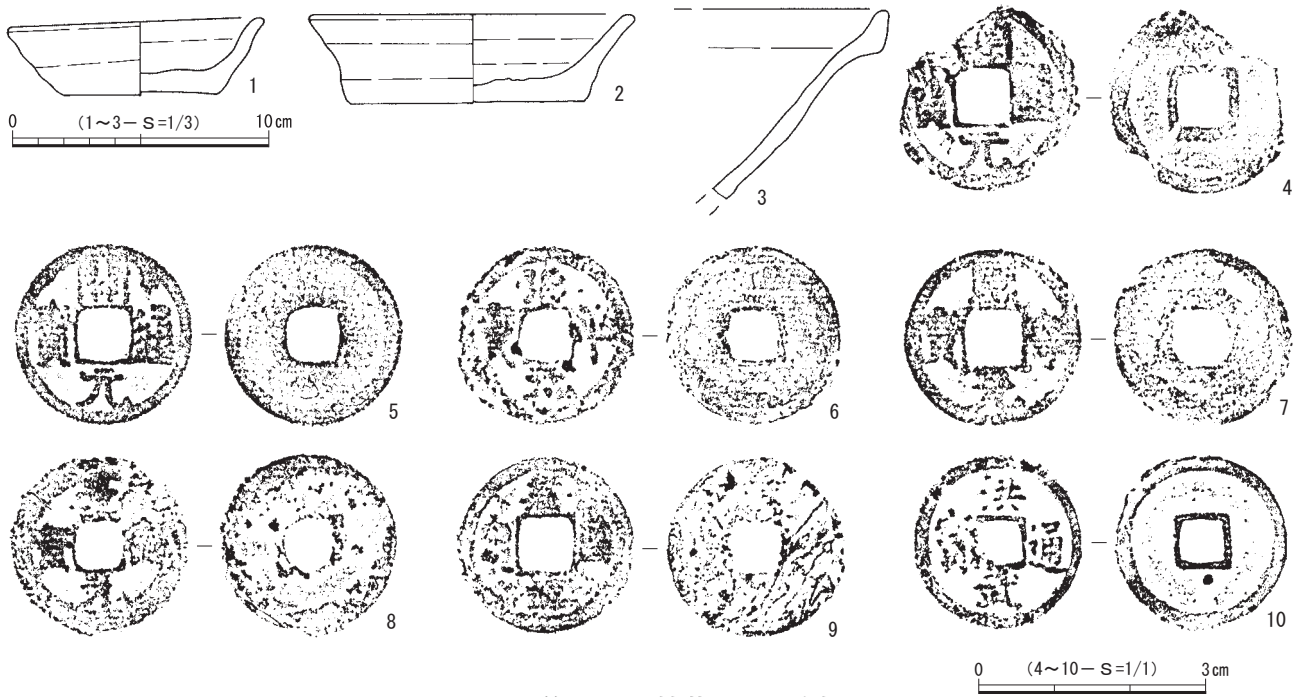


図13 第1面 土坑墓4出土遺物

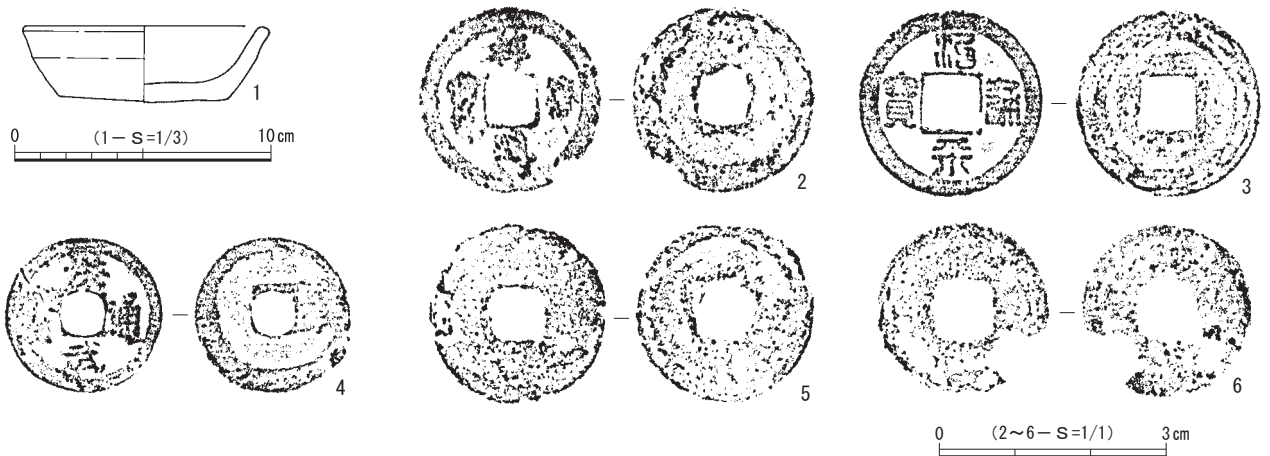


図14 第1面 土坑墓5出土遺物

考えられる。

#### 出土遺物 (図14)

遺物はかわらけ3点、陶器6点、金属製品5点が出土し、このうち6点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2～6は銭貨である。2は祥符元寶(北宋・1008)、3は治平通寶(北宋・1064)、4は洪武通寶(明・1368)、5・6の銭名は判読不明である。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓6 (図9)

I区中央近くに位置し、東壁の一部が土坑1に壊されている。平面形は隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸95cm、短軸68cm、深さ17cmを測る。掘り方の主軸方位はN-39°-Eを指す。出土した人骨は15～19歳の女性で、土坑中央に頭位を北に向け、膝を左手側に強く折り曲げた側臥屈葬であるが、上半身はよじれて左右の肩甲骨がみられる。したがって顔面は下方を向いている。人骨の確認レベルは頭骨6.71m、寛骨6.72mである。



遺物は右肘と左膝の間の胸部からかわらけが大中各1点ずつ出土しており、副葬品と考えられる。

**出土遺物 (図15)**

遺物はかわらけ2点が出土し、すべてを図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

**土坑墓7 (図17)**

I区中央西寄りに位置し、北側に土坑墓4が隣接する。平面形は隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.00m、短軸78cm、深さ20cmを測る。掘り方の主軸方位はN-68°-Eを指す。出土した人骨は15～34歳の女性で、土坑のやや東寄りに頭位を南西に向ける。顔面を北に向けるが首がねじれて下向きとなり、下肢を強く折り曲げて側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.69m、寛骨6.70mである。

遺物は右膝付近から銭貨が6枚、腰部付近から1枚が出土している。出土レベルは坑底直上であり、副葬品と考えられる。

**出土遺物 (図16)**

遺物はかわらけ3点、金属製品8点が出土し、このうち9点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけ、3～9は銭貨である。3～5は開元通寶(南唐・960)、6・7は政和通寶(北宋・1111)、8は宣和通寶(北宋・1119)、9は「平元寶」のみ判読可能である。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

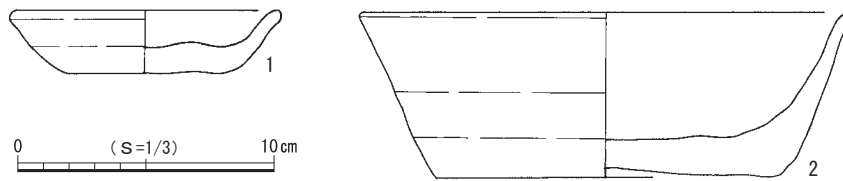


図15 第1面 土坑墓6出土遺物

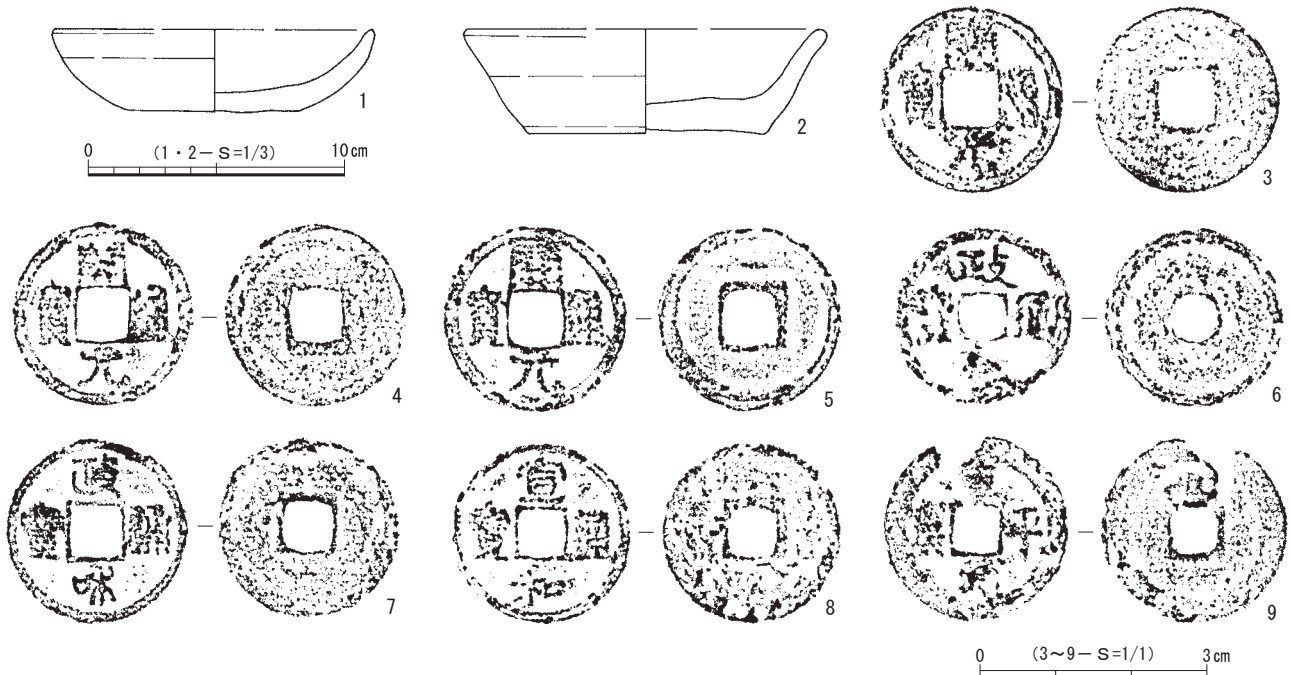


図16 第1面 土坑墓7出土遺物

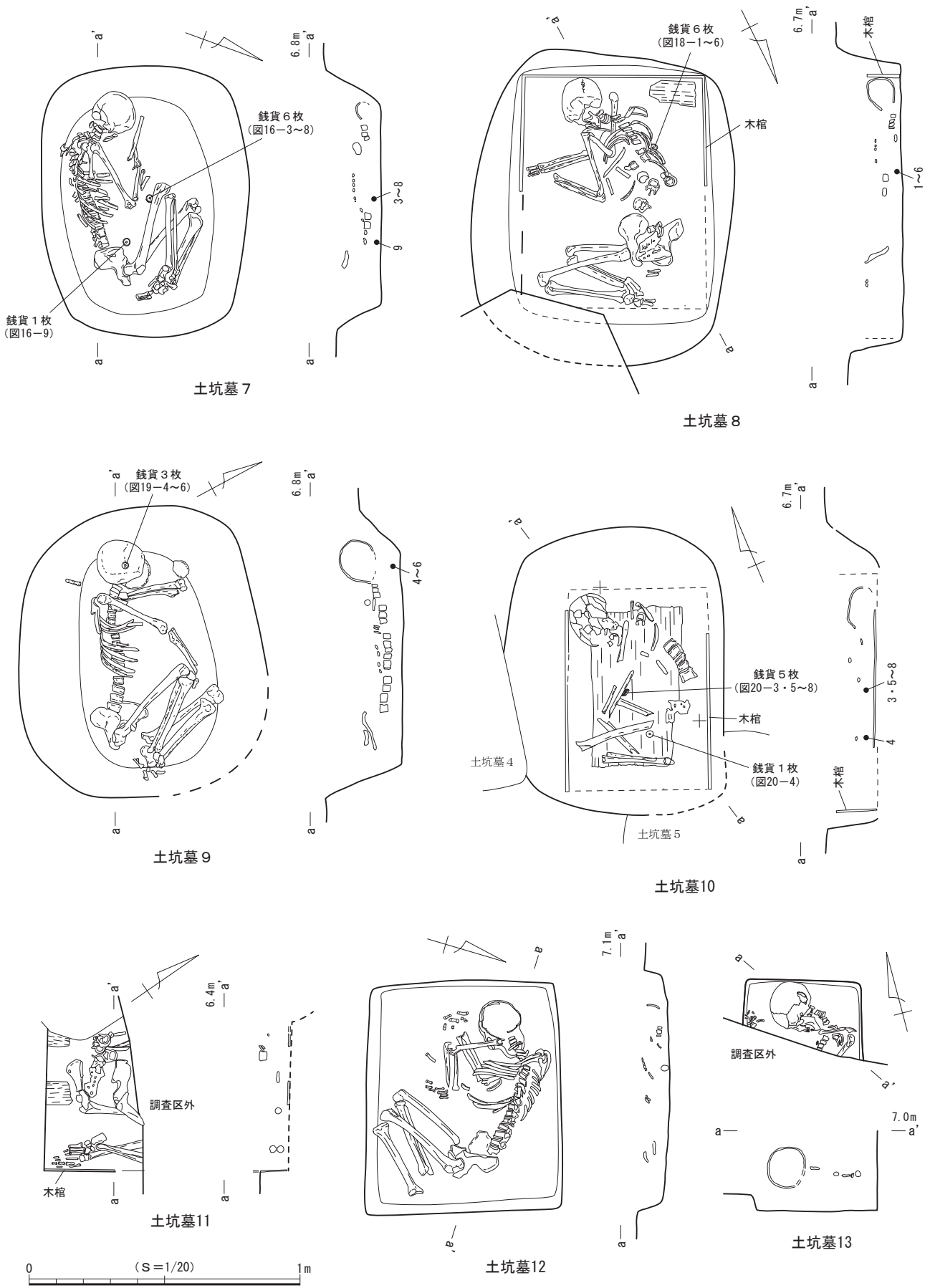


図17 第1面 土坑墓7~13

### 土坑墓8 (図17)

I区北東隅近くに位置し、南西側に土坑墓5が隣接する。平面形は隅丸長方形で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸95cm、深さ24cmを測る。掘り方の主軸方位はN-25°-Eを指す。掘り方内部の北寄りに木棺を設置しており、木棺は紙のように薄い横板の痕跡と、西隅で底板の痕跡がわずかに確認されている。この痕跡をたどると、棺箱は長軸現存長43cm、短軸67cmで、上部は削平されているが深さ20cm以上と復元することができる。出土した人骨は15~34歳の女性で、木棺の中央に頭位を南に向け、手足を東に折り曲げた側臥屈葬であるが、上半身はねじれて顔面は下方を向いている。人骨の確認レベルは頭骨6.52m、寛骨6.53mである。

遺物は肋骨下方の坑底上から銭貨6枚が連なって出土し、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図18)

遺物はかわらけ1点、板碑1点、金属製品6点が出土し、このうち6点を図示した。

1~6は銭貨である。1~4は開元通寶(南唐・960)、5は景祐元寶(北宋・1034)、6は永樂通寶(明・1408)である。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15~16世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓9 (図17)

I区中央南側に位置し、土坑墓1・3・6の下位で検出した。平面形は楕円形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.07m、短軸90cm、深さ29cmを測る。掘り方の主軸方位はN-65°-Wを指す。出土した人骨は55歳以上の女性で、土坑中央に頭部を西に向け、顔面を北に向け手足を北に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.69m、寛骨6.61mである。

遺物は頭骨中央の下方にあたる坑底近くから銭貨3枚が出土したほか、刀子2点も出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図19)

遺物はかわらけ5点、陶器7点、金属製品5点が出土し、このうち6点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2・3は鉄製の刀子、4~6は銭貨である。4は熙寧元寶(北宋・1068)、5は永樂通寶(明・1408)、6は銭名不明である。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15~16世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓10 (図17)

I区北側に位置し、南側で土坑墓5と重複して南壁の一部を壊されている。平面形は北壁が張り出した隅丸長方形で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形に近い形状を呈する。規模は長軸1.06m、短軸80cm、深さ18cmを測る。掘り方の主軸方位はN-22°-Eを指す。掘り方内部のやや東寄りに木棺を設置しており、厚さ2~4mmの腐食した横板の痕跡と、厚さ2mmの底板を部分的に確認することができた。木棺の規模は長軸現存長67cm、推定短軸54cmで、高さは15cmほどが残存する。底板の標高は6.44mである。出土した人骨は55歳以上の女性で、頭位を北東に向け、手足を西側に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で木棺の中に納められている。人骨の確認レベルは頭骨6.56m、寛骨6.51mである。

遺物は銭貨6枚が出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図20)

遺物は陶器1点、瓦質土器1点、金属製品6点が出土し、すべてを図示した。

1は瀬戸窯産の折縁深皿、2は瓦質土器の火鉢である。3~8は銭貨である。3は開元通寶(南唐・



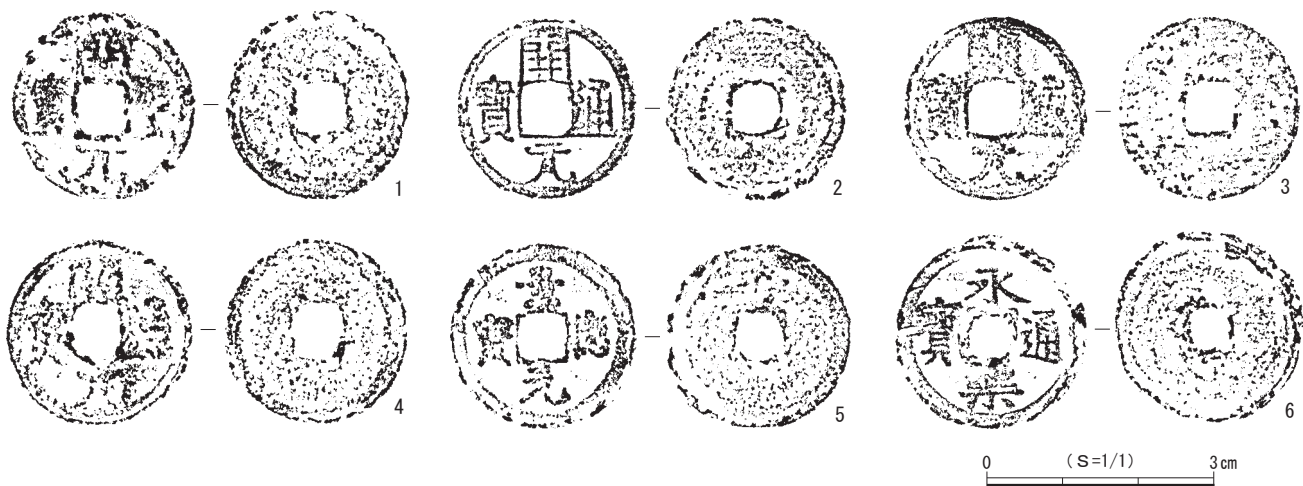


图18 第1面 土坑墓8出土遺物

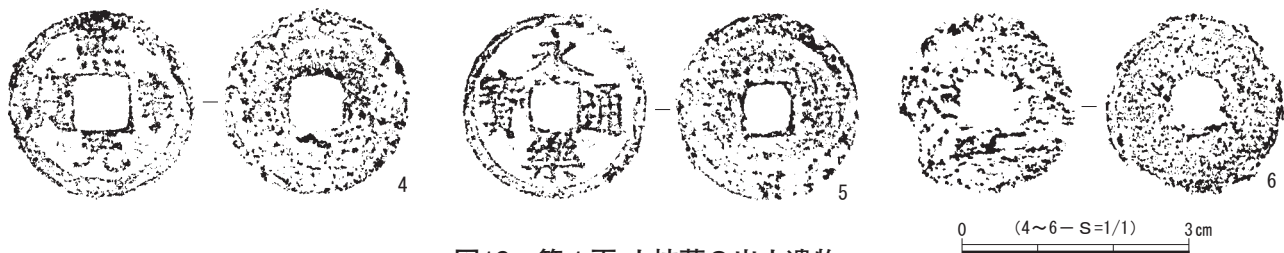
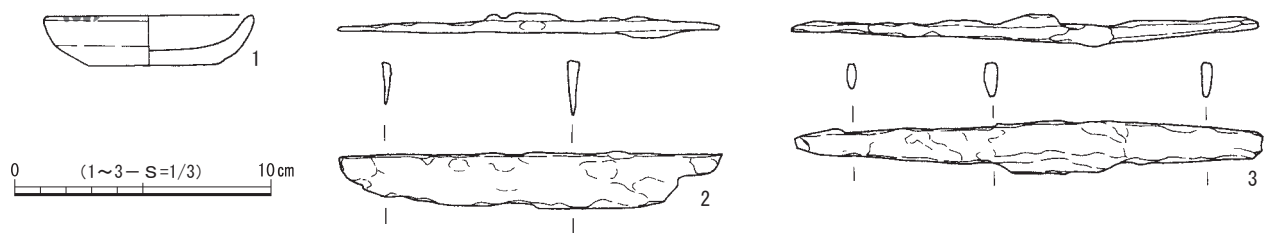


图19 第1面 土坑墓9出土遺物

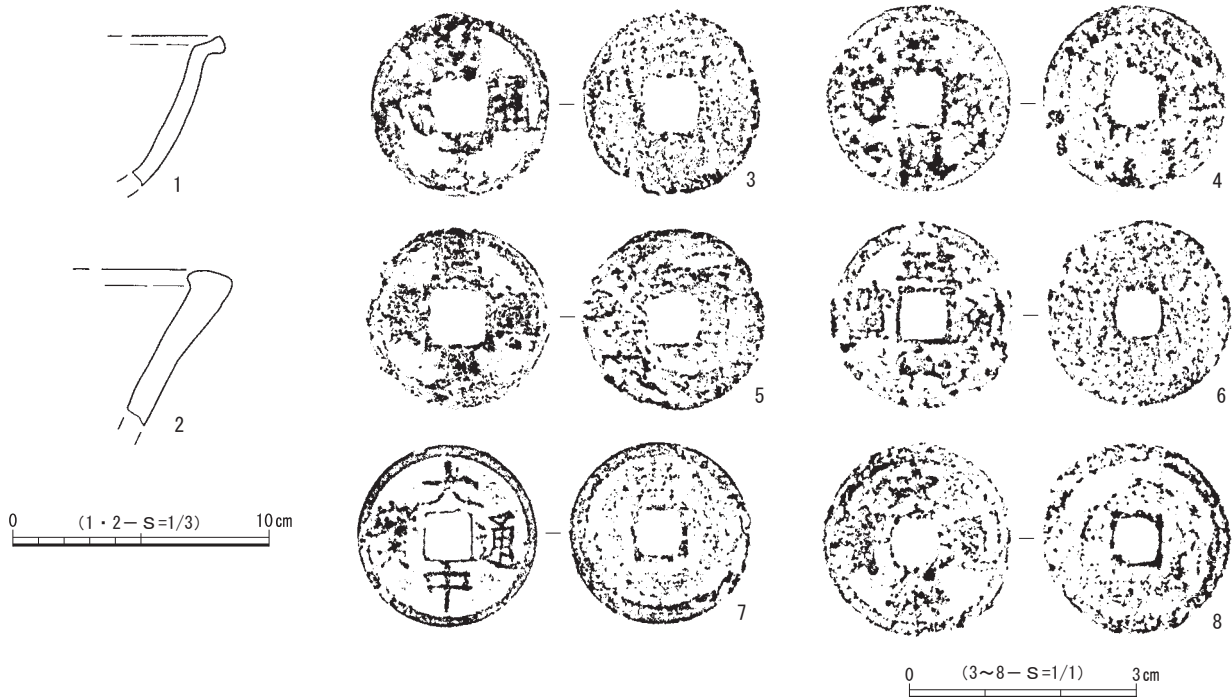


图20 第1面 土坑墓10出土遺物

960)、4・5は熙寧元寶(北宋・1068)、6は政和通寶(北宋・1111)、7は大中通寶(明・1361)、8は永樂通寶(明・1408)である。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓11(図17)

I区北隅に位置し、本址の大部分は調査区外北にある。南側に土坑墓4が隣接する。湧水が多く掘り方は確認できなかったが、木棺を検出することができた。木棺は厚さ1mm程度の横板と底板が残存し、その規模は長軸現存長52cm、短軸現存長26cm、高さ10cmほどを測る。底面の標高は6.41mで、主軸方位はN-53°-Wを指す。出土した人骨は15～34歳の女性で、頭位はおそらく北西で顔を北に向け、手足を北に折り曲げた側臥屈葬と考えられる。人骨の確認レベルは寛骨6.47mである。なお、本址には別個体と考えられる性別不明の成人人骨が混入していた。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑墓12(図17)

II区の南西部に位置し、南側に土坑墓13・17が隣接する。平面形は略正方形で、壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸76cm、短軸72cm、深さ19cm、底面の標高は6.87mを測る。掘り方の主軸方位はN-72°-Eを指す。出土した人骨は35～54歳の女性で、土坑の中央に頭位を西に向け、手足を南側に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。上半身はねじれて左右の肩甲骨がみられ、顔面は下方を向く。人骨の確認レベルは頭骨7.0m、寛骨7.04mである。

遺物は磁器2点、陶器17点、瓦1点が出土した。

#### 土坑墓13(図17)

II区南壁際に位置し、全体の半分以上は調査区外南に延びている。北側に土坑墓12が隣接する。掘り方は明確にできなかったが、木棺の横板と思われる痕跡がわずかに確認できた。木棺は長軸現存長29cm、短軸43cm、高さ5cmと推定される。出土した人骨は15～34歳の女性で、頭位は北で、顔面を西に向けて埋葬される。人骨の標高は頭部6.94mである。

遺物はかわらけ1点、陶器1点が出土した。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓14(図21)

II区西隅に位置し、大半が調査区外南に延びている。土坑は明確にできなかったが、土坑墓13と同様に、木棺の横板と思われる痕跡がわずかに確認できた。木棺は長軸現存長15cm、短軸45cm、現存高10cmと推定される。出土した人骨は成人の女性で、頭骨と脊椎の一部が確認されたため埋葬姿勢は判断できないが、頭位は北で、顔面は南側の下方を向いて埋葬される。人骨の標高は頭部6.84mである。

遺構の検出部分が少ないためか、遺物は出土しなかった。

#### 土坑墓15(図21)

II区の北側中央部に位置する。北側の上部に火葬墓2があり、西側を土坑墓21に部分的に壊されている。平面形は隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.12m、短軸現存長70cm、深さ19cmを測り、坑底面の標高は6.63mである。掘り方の主軸方位はN-23°-Eを指す。出

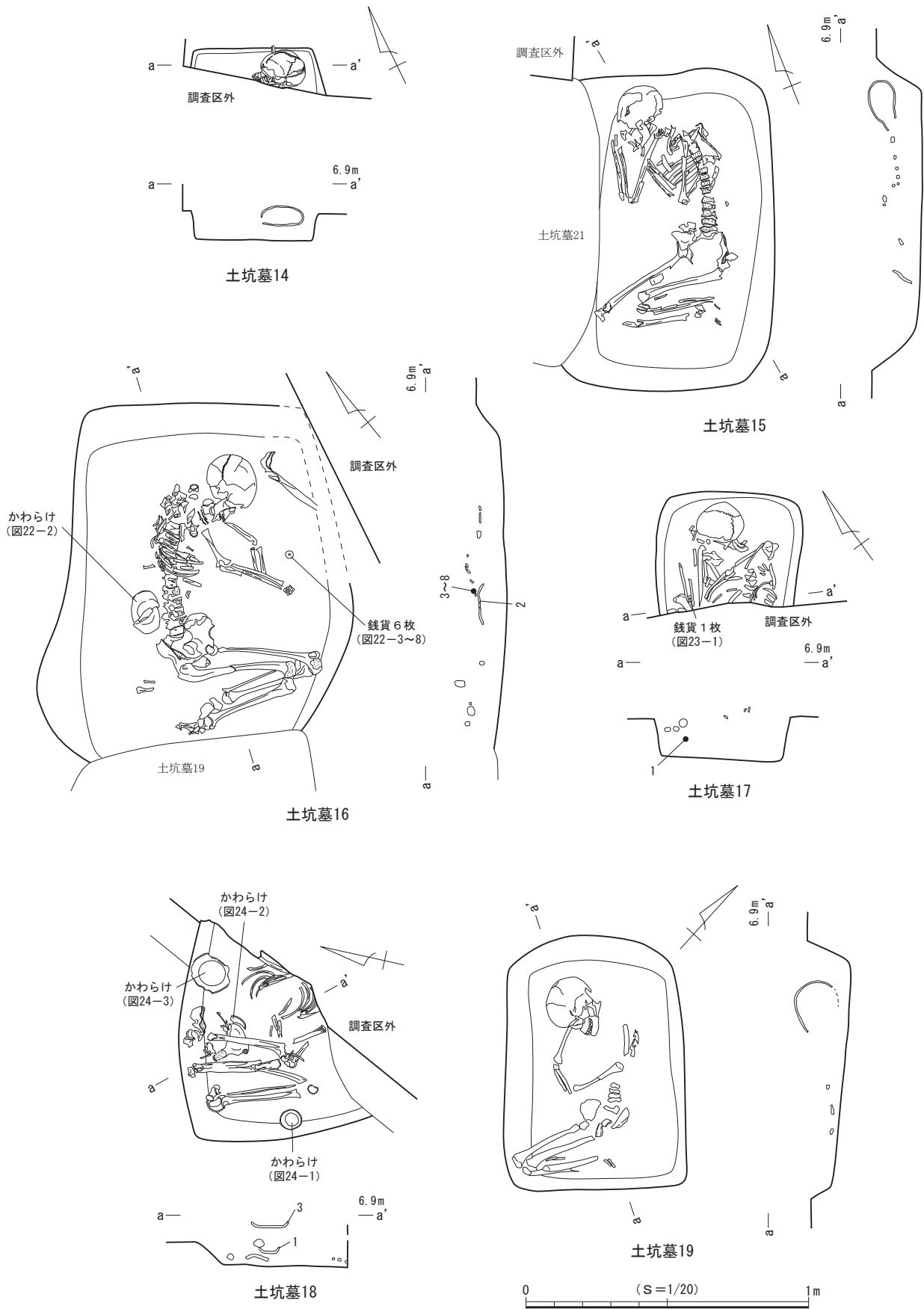


図21 第1面 土坑墓14~19



土した人骨は55歳以上の女性で、土坑の北寄りの位置に頭位を北に向け、手足を西に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。顔面は西を向き、上半身はねじれて左右の肩甲骨がみられる。人骨の標高は頭骨6.88m、腰骨6.72mである。

遺物はかわらけ8点、陶器5点が出土した。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓16 (図21)

Ⅱ区東壁中央近くに位置し、東側の上位に土坑墓18があり、南側で土坑墓19に一部を壊されている。平面形はやや形の崩れた隅丸長方形で、壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長1.22m、短軸1.00m、深さ16cmを測り、坑底面の標高は6.61mを測る。掘り方の主軸方位はN-40°-Eを指す。出土した人骨は35～54歳の女性で、土坑のやや東寄りに頭位を北東、顔面を南東に向け、手足を東に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.83m、寛骨6.79mである。なお、本址には別個体と考えられる性別不明の成人(?)人骨が混入していた。

遺物は中形かわらけ2点が出土し、このうち1点は腰部の西側に接するように逆位で出土した。また、折り曲げた腕の東側から銭貨6枚が連なって出土し、いずれも副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図22)

遺物はかわらけ3点、金属製品6が出土し、このうち8点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3～8は銭貨で、3が開元通寶(南唐・960)、4・5が咸平元寶(北宋・998)、6が景祐元寶(北宋・1034)、7が皇宋通寶(北宋・1038)、8が永樂通寶(明・1408)である。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓17 (図21)

Ⅱ区南壁際中央に位置し、大半が調査区外南に延びている。上位に土坑墓13が構築されている。調査範囲から推定すると平面形は隅丸長方形と考えられ、壁面はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形に近い形状を呈する。規模は長軸現存長42cm、短軸51cm、深さ19cmを測り、坑底面の標高は6.57mである。掘り方の主軸方位はN-39°-Eを指すと考えられる。出土した人骨は成人の男性で、土坑中央に頭位を北東、顔面を南西へ向け、手を西に折り曲げて埋葬されており、おそらく側臥屈葬と推定される。人骨の確認レベルは頭骨6.81mである。

遺物は腕の直下から銭貨1枚が出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図23)

遺物はかわらけ3点、磁器1点、陶器2点、金属製品2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は銭貨で、聖宋元寶(北宋・1101)である。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓18 (図21)

Ⅱ区東壁際中央に位置し、全体の半分近くが調査区外東に延びる。西側に位置する土坑墓16の一部を壊し、上位に埋葬人骨11が確認された。平面形は長方形と考えられ、壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長78cm、短軸現存長63cm、深さ15cmを測り、坑底面の標高は6.72mである。掘り方の主軸方位は、N-80°-Eを指すと考えられる。出土した人骨は35～54歳の女性で、肩部から頭部が調査区外にあると推定されるが、おそらく頭部を東に向け、足を南に折り曲げた屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは腰骨6.61mである。

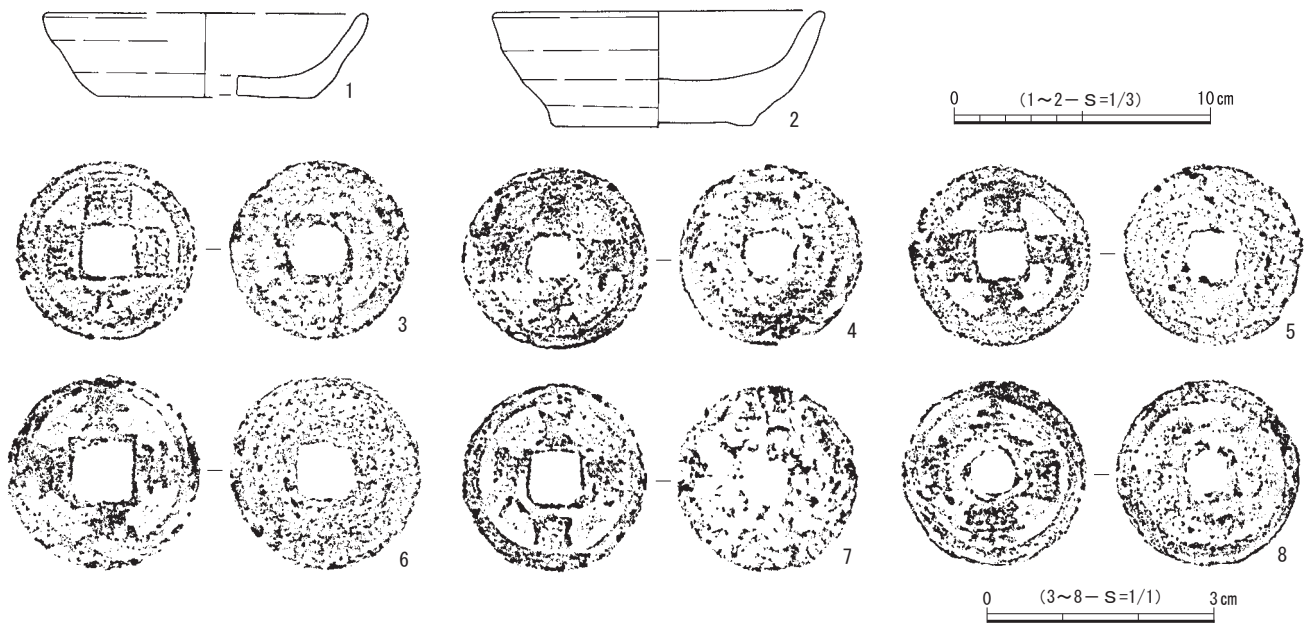


図22 第1面 土坑墓16出土遺物

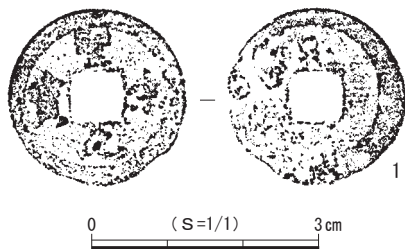


図23 第1面 土坑墓17出土遺物

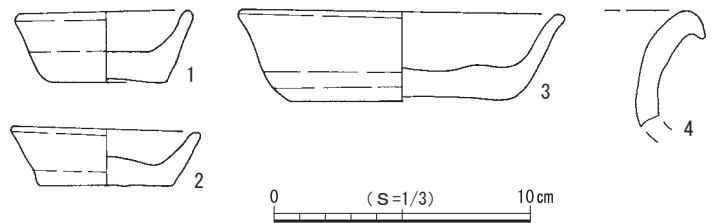


図24 第1面 土坑墓18出土遺物

遺物は腰部の北側から中形かわらけ1点が出土したほか、寛骨の下位と膝の前面から小形かわらけ各1点が出土した。寛骨下から出土したかわらけ破片は本址の伴うものかやや疑問が残るが、これらは副葬品と考えられる。

#### 出土遺物(図24)

遺物はかわらけ3点、陶器2点が出土し、このうち4点を図示した。

1~3はロクロ成形によるかわらけである。4は瀬戸窯産の瓶類である。かわらけの器形から、15~16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓19(図21)

Ⅱ区中央の南東寄りに位置し、北東側で土坑墓16を部分的に壊している。平面形は北西側がやや膨らむ隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸91cm、短軸64cm、深さ16cmを測り、坑底面の標高は6.61mである。掘り方の主軸方位はN-43°-Wを指す。出土した人骨は12~14歳の性別不明で、土坑中央に頭位を北西、顔面を南に向け、手足を南に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.90m、寛骨6.75mである。

遺物はかわらけ2点、陶器1点が出土した。かわらけの器形から、15~16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓20(図25)

Ⅱ区の北東部に位置し、北西壁の一部を火葬墓2によって壊されている。平面形は北東側が直線的な

楕円形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸97cm、短軸70cm、深さ20cmを測り、坑底面の標高は6.58mである。掘り方の主軸方位はN-50°-Eを指す。出土した人骨は55歳以上の女性で、土坑中央に頭位を北東、顔面を南西に向け、手足を北西に強く折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.78m、腰骨6.72mである。なお、本址の中央南寄りから別個体の遊離した下顎骨と乳歯が出土し、下顎骨の確認レベルは6.89mを測る。

遺物は顔の前面から連なった銭貨7枚、腕と足の間から連なった銭貨6枚、頭部西側からかわらけが大小各1点ずつ出土しており、副葬品と考えられる。また、下肢骨上面に宝篋印塔の基礎1点とその両側から10cm大の泥岩が出土している。

#### 出土遺物(図26)

遺物はかわらけ2点、磁器1点、陶器4点、石製品1点、ガラス製品1点、金属製品12点が出土し、このうち16点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3はガラス製と思われる数珠玉、4は宝篋印塔の基礎である。5～16は銭貨である。5は天聖元寶(北宋・1023)、6は皇宋通寶(北宋・1038)、7は元祐通寶(北宋・1086)、8は紹聖元寶(北宋・1094)、9は正隆元寶(金・1157)、10～12は永樂通寶(明・1408)、13～16は銭名不明である。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓21(図25)

Ⅱ区北側に位置し、一部が調査区外北に延びる。北西側を火葬墓1、北東側を火葬墓2に壊され、東側で土坑墓15の西壁を壊している。平面形は隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長1.05m、短軸74cm、深さ15cmを測り、坑底面の標高は6.64mである。掘り方の主軸方位はN-28°-Eで、東側に位置する土坑墓15とほぼ同じ方位を指す。本址の調査終了後、下部の遺構を確認するために掘り下げた結果、標高6.65m前後で玉石が敷き詰められた面が部分的に確認できた。これは遺体を埋葬する際に敷いた玉石と判断される。

出土した人骨は15～34歳の女性である。土坑中央に頭位を北、顔面を西に向け、手足を西に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬されているが、上半身はねじれて仰臥に近い姿勢となっている。人骨の確認レベルは頭骨6.79m、寛骨6.70mである。なお本址には別個体の右腸骨が混入していた。

遺物は腹部から小形かわらけ1点が出土したほか、脚部上とその南側からかわらけが大小各1点ずつ出土しており、いずれも正位に置かれていた。また、前頭部の直下から連なった銭貨5枚が出土し、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物(図27)

遺物はかわらけ3点、磁器1点、陶器6点、石製品1点、金属製品5点が出土し、このうち8点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけである。4～8は銭貨である。4は皇宋通寶(北宋・1038)、5は至和元寶(北宋・1054)、6は元祐通寶(北宋・1086)、7は永樂通寶(明・1408)、8は「元」のみ銭名が判読できる。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### 土坑墓22(図25)

Ⅱ区の北西隅に位置し、一部が調査区外北に延びる。東側の一部を土坑墓21に壊されている。平面形



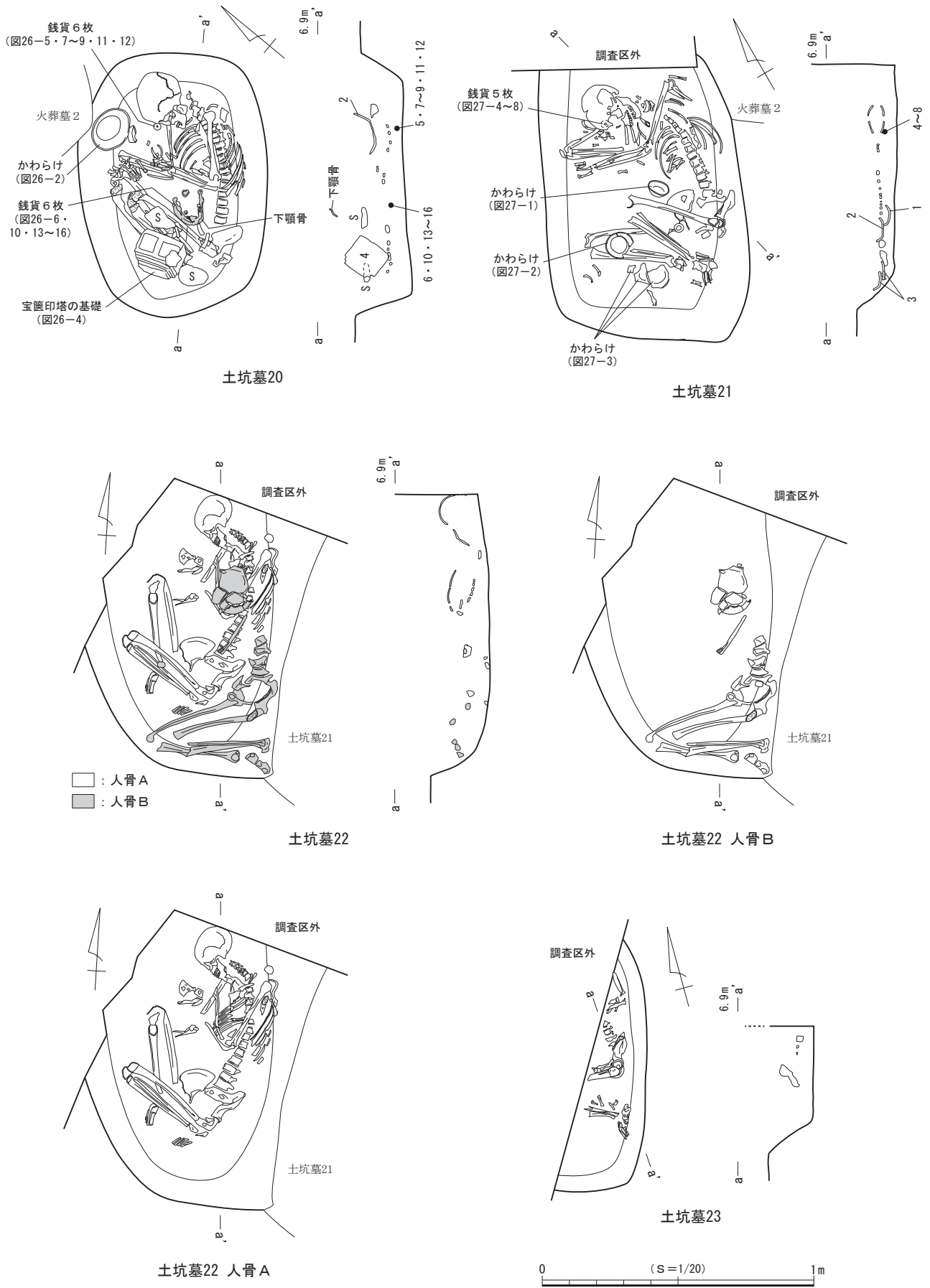


図25 第1面 土坑墓20~23

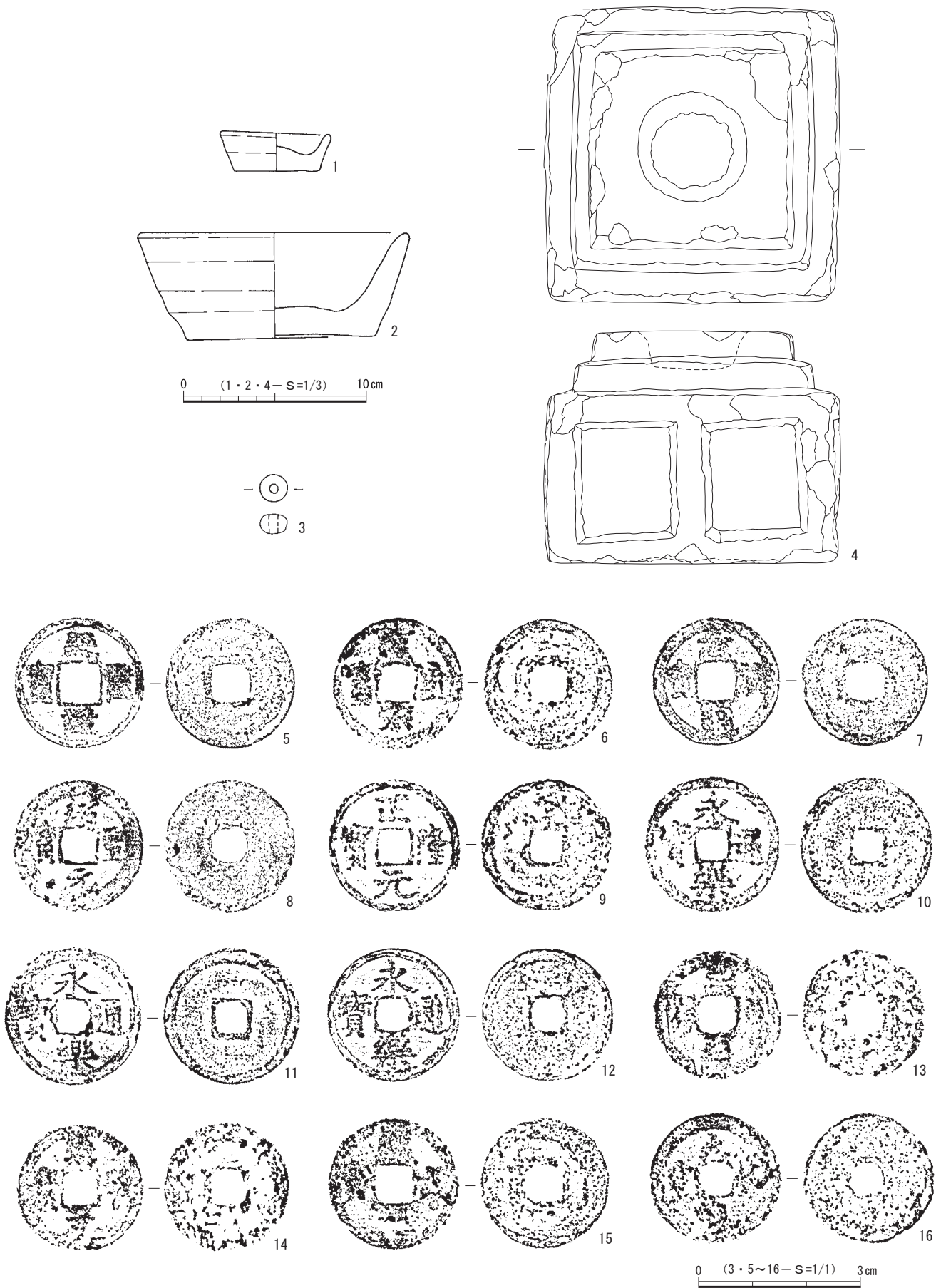


图26 第1面 土坑墓20出土遗物

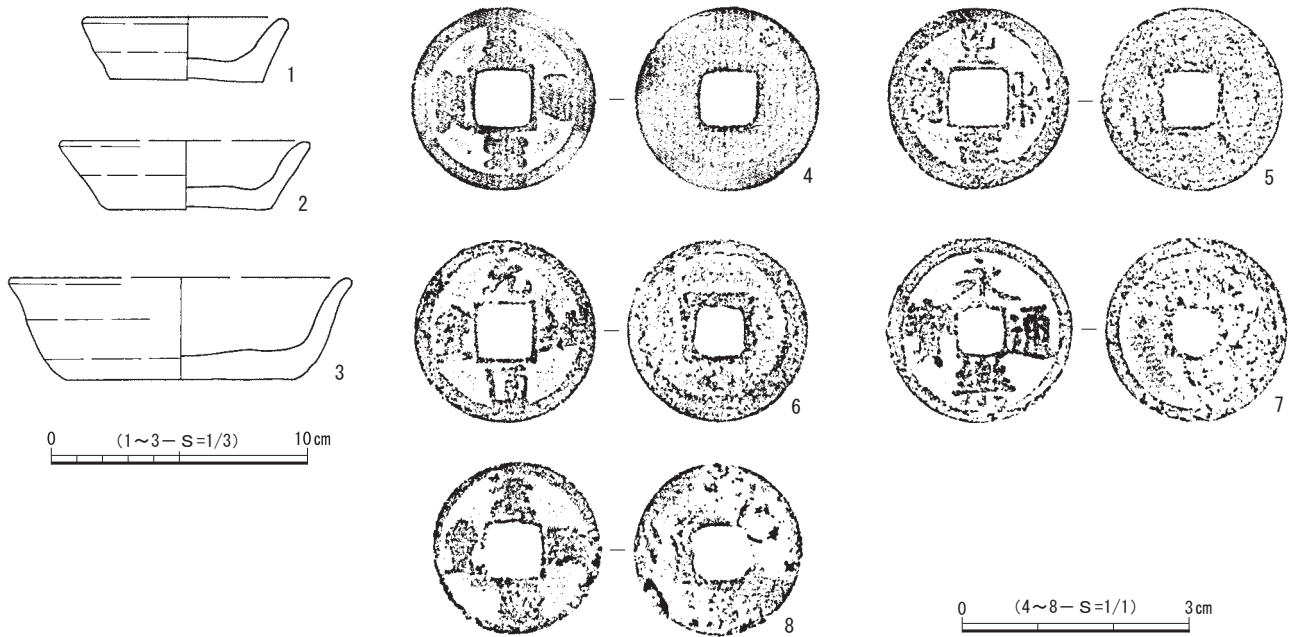


図27 第1面 土坑墓21出土遺物

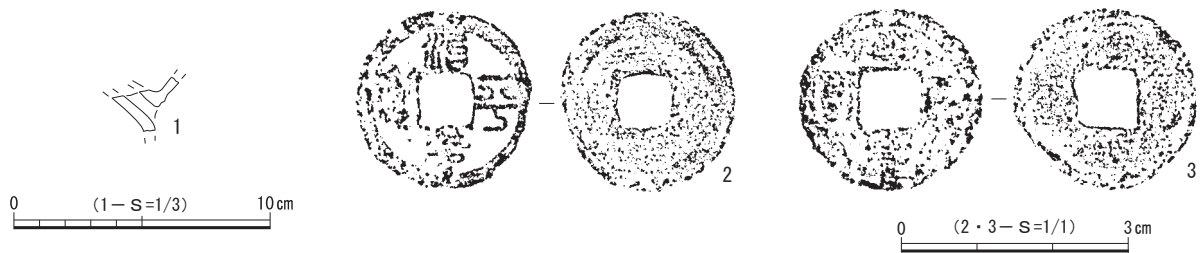


図28 第1面 土坑墓22出土遺物

は楕円形と推定され、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸現存長1.07m、短軸現存長80cm、深さ24cmを測り、坑底面の標高は6.55mである。掘り方の主軸方位はN-9°-Wを指すと考えられる。

出土した人骨は、35~54歳の女性2体である。まず全身骨格を確認できた人骨Aをみていくと、土坑中央に頭位を北、顔面を西に向け、手足を西に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭部6.74m、腰骨6.75mである。人骨Bは頭骨と肋骨の一部、椎骨下部、寛骨、左右の下肢骨を検出した。下半身の状況から、土坑の南寄りに頭部を北、顔面を西に向け、手足を西に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬されたと考えられる。人骨の確認レベルは頭部6.79m、腰骨6.76mである。

この2体の人骨は、人骨Aの左肩辺りに人骨Bの頭骨があり、両者の確認レベルは頭骨で5cm、寛骨で1cmだけ人骨Bの方が高く、人骨Aの上に人骨Bを追葬した可能性が考えられる。しかし、人骨Aの上に重なった人骨Bの椎骨、肋骨、肩甲骨が部分的に確認できなかったため、人骨Aは人骨Bを壊して埋葬し、何らかの理由で人骨Bの頭骨片などが紛れ込んだとも考えられる。

遺物は人骨Aの胸部西側から連なった銭貨2枚が出土しており、人骨Aの副葬品と考えられる。

#### 出土遺物(図28)

遺物は磁器1点、金属製品が2点出土し、すべてを図示した。

1は龍泉窯系青磁の水注である。2・3は銭貨で、2は治平元寶(北宋・1064)、3は銭名不明である。



### 土坑墓23 (図25)

Ⅱ区の西壁際に位置し、大半が調査区外西に延びている。北側に土坑墓22と埋葬人骨16が隣接する。部分的な調査で全体形は不明だが、平面形は隅丸長方形であったと考えられる。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長90cm、短軸現存長27cm、深さ16cmを測り、坑底面の標高は6.62mである。掘り方の主軸方位は西壁を基準にすると、N-14°-Eを指す。出土した人骨は35~54歳の女性で、椎骨、寛骨、下肢骨が確認された。それらの位置から埋葬姿勢を推定すると、頭部を北、顔面を西に向けて、手足を西に折り曲げた側臥屈葬と考えられる。人骨の確認レベルは肩の辺り6.74m、腰骨6.77mである。

遺物はかわらけ2点、陶器1点が出土した。かわらけの器形から、15~16世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓24 (図29)

Ⅱ区南側の中央付近に位置し、西側の上位に土坑墓12が構築されている。平面形は北辺が短い長方形で、壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.13m、短軸68cm、深さ10cm、坑底面の標高は6.48mを測る。掘り方の主軸方位はN-66°-Wを指す。出土した人骨は15~34歳の女性で、土坑中央に頭部を西に向け、手足を南に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。上半身はねじれて左右の肩甲骨がみられ、顔面は下方を向く。また、右腕は大きくねじれている。人骨の確認レベルは頭骨6.70m、寛骨6.61mである。

遺物は頸部から胸部の辺りに連なった銭貨2枚と、背面部中位から中小各1点のかわらけが合わせ口の状態で出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図30)

遺物はかわらけ2点、金属製品2点、骨製品1点が出土し、すべてを図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3は用途不明の骨製品である。4・5は銭貨で、4が熙寧元寶(北宋・1068)、5は銭名不明である。かわらけの器形から、15~16世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓25 (図29)

Ⅱ区の北東部に位置し、北側の上位に土坑墓20が構築されている。平面形は西辺がやや短い方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸82cm、短軸79cm、深さ12cmを測り、坑底面の標高は6.45mである。掘り方の主軸方位はN-23°-Eを指す。出土した人骨は35歳~54歳の男性で、確認できたのは腰椎、寛骨、左右の下肢骨のみで上半身が失われている。出土した骨格から埋葬姿勢を推定すると、頭位を北に向け、手足を西に折り曲げた側臥屈葬と考えられる。人骨の確認レベルは寛骨6.69m、踵骨6.61mである。

遺物は腕と足との間から大形かわらけ1点横位に出土しており、副葬品と考えられる。

#### 出土遺物 (図31)

遺物はかわらけ1点、磁器1点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。かわらけの器形から、15~16世紀代の土坑墓と考えられる。

### 土坑墓26 (図29)

Ⅱ区南東隅に位置し、大半が調査区外南に延びている。平面形を調査部分から推定すると長方形と考えられ、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長26cm、短軸44cm、調査区

南壁面で確認した深さは62cmを測り、坑底面の標高は6.46mである。掘り方の主軸方位はN-31°-Eを指すと考えられる。出土した人骨は成人の女性で、頭骨の上半分のみの検出である。埋葬姿勢は明らかでないが、頭位は北、顔面は西を向く。頭骨の確認レベルは6.64mである。

遺物は大小かわらけ各1点と銭貨5枚が出土しており、副葬品と考えられる。

**出土遺物 (図32)**

遺物はかわらけ2点、金属製品5点が出土し、すべてを図示した。

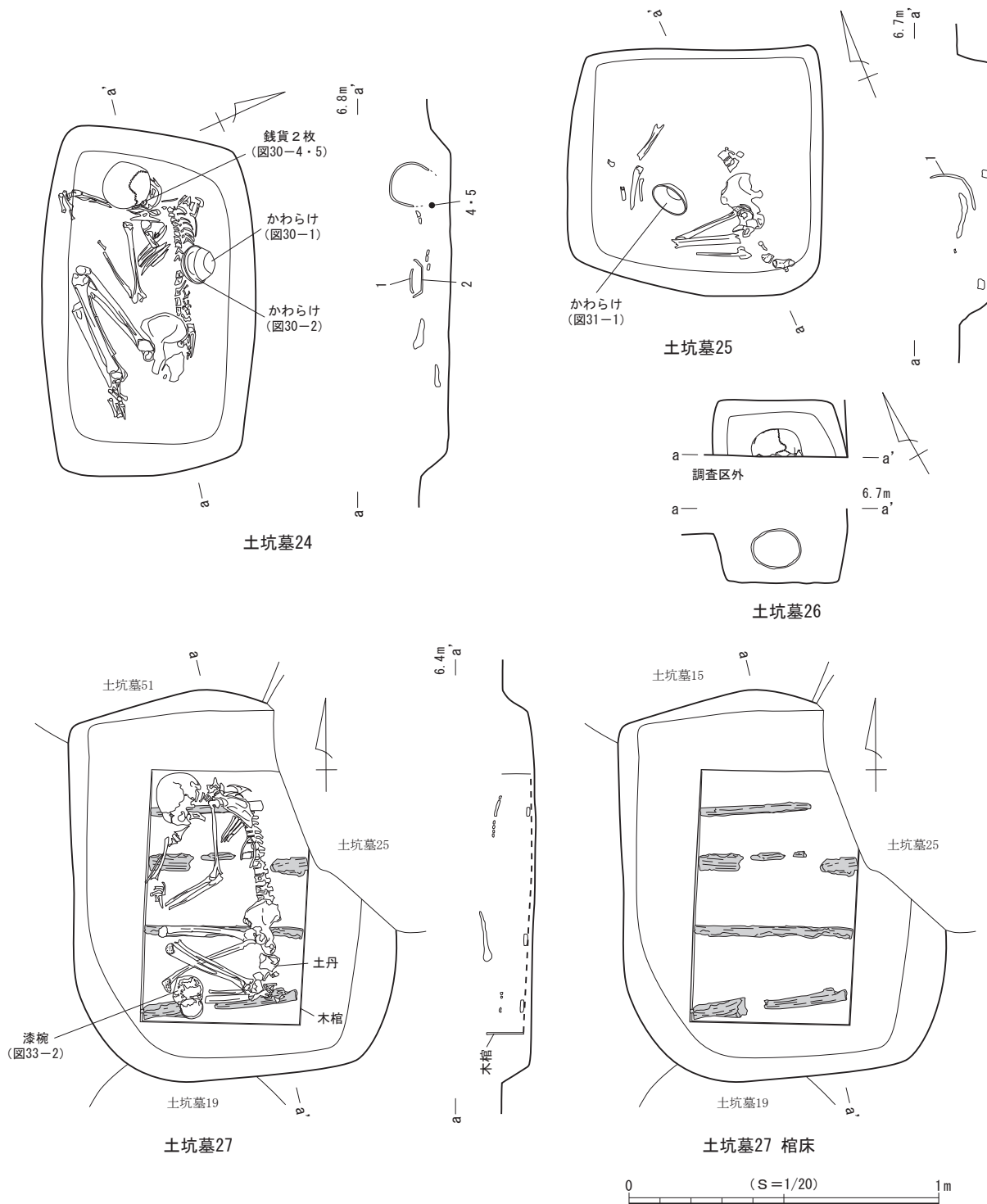


図29 第1面 土坑墓24~27

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3～7は銭貨である。3は開元通寶(南唐・960)、4～6は永樂通寶(明・1408)、7は銭名不明である。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

土坑墓27(図29)

Ⅱ区の中央やや東寄りに位置し、上位に土坑墓15・16・19・25が構築され、北東側の一部を土坑墓25によって壊されている。平面形は隅丸長方形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規

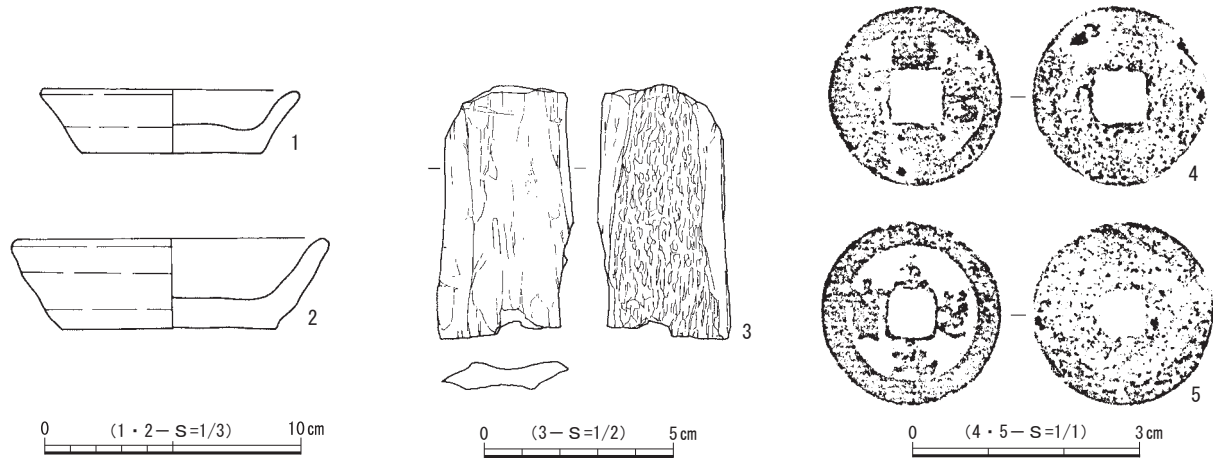


図30 第1面 土坑墓24出土遺物

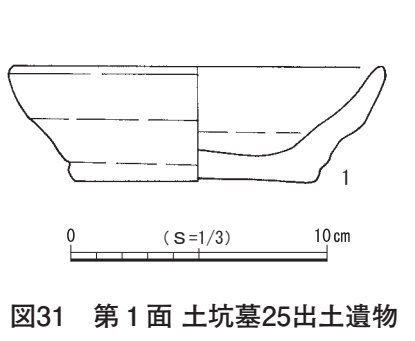


図31 第1面 土坑墓25出土遺物

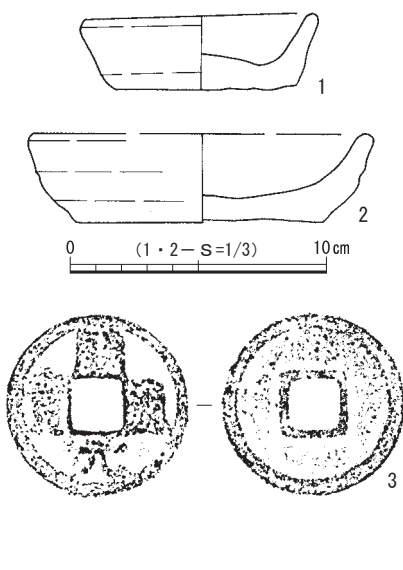


図32 第1面 土坑墓26出土遺物

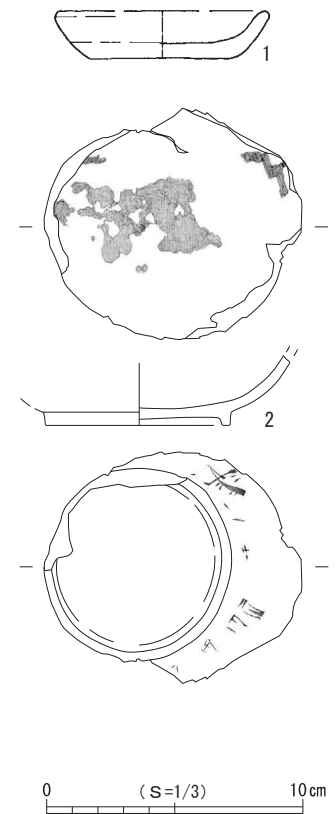


図33 第1面 土坑墓27出土遺物



模は長軸1.26m、短軸1.04m、深さ11cmを測り、坑底面の標高は6.15mである。主軸方位はほぼ真北を指す。土坑内の南寄りに、比較良好な状態で木棺を検出できた。木棺の主軸方位は掘り方とほぼ同じで、長軸81cm、短軸52cm、現存高12cmの長方形を呈する。側面は4枚の横板からなり、底面は長軸方向に対して直交方向に4本の角材を渡している。底面の角材間の距離は北の横板から12cm、12cm、18cm、23cm、2cmで、等間隔ではない。

出土した人骨は15～34歳の女性で、木棺の中央に頭骨を北、顔を南西に向け、手足を西に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.32m、寛骨6.33m、踵骨6.26mである。

遺物は人骨の右膝辺りから遺存状況の悪い漆器椀が1点出土している。出土時点の確認では、高台径7.5cm、高台高5cm前後の寸法で、外面は黒色系漆の上に赤色系漆で文様が手描きで描かれ、内面は赤色系漆が塗られている。文様は不明である。また、木棺外側の南西、掘り方埋土から漆器椀2点が出土している。このうち1点は高台径7.5cm、高台高5cmの椀で内面は赤色系漆、外面には黒色系漆の上に赤色系漆で手描き文様が描かれている。文様は不明である。他に小形かわらけ1点が出土しており、いずれも副葬品と考えられる。

#### 出土遺物(図33)

遺物はかわらけ3点、陶器3点、木製品1点が出土し、このうち2点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は漆器椀で、黒漆の下地に朱漆による意匠不明の文様が描かれている。かわらけの器形から、15～16世紀代の土坑墓と考えられる。

#### (3) 埋葬人骨

墓坑が不明瞭で単独で出土した埋葬人骨をここでまとめて報告する。I区から10体、II区から6体の合計16体を検出し、調査区壁際に位置するものが多い。全身骨格が検出されたのは埋葬人骨2・3・10・11の4体のみで、他の人骨は部分的な検出にとどまる。また、埋葬人骨2～5・8・10・15・16は副葬品を伴っており、掘り込みは確認されなかったが、本来は土坑中に埋葬された人骨であったと考えられる。埋葬姿勢が明らかな人骨は、すべて顔面が横向きで手足を折り曲げた側臥屈葬である。時期を伴出遺物から推定すると大半が15～16世紀代に属するが、埋葬人骨5のみ17世紀代に位置づけられる。

なお、埋葬人骨の属性については表4にまとめて掲載し、出土人骨の自然科学分析は第四章第1節に詳細を記した。

#### 埋葬人骨1(図36)

I区南東隅近くの調査区壁際に位置し、南西側に埋葬人骨5が隣接する。出土した人骨は成人の女性で、頭骨、下肢骨、上腕骨を確認できたが、大部分が調査区外の東側にあるため葬位は不明である。頭位方向はおおよそN-2°-Eを指すと考えられる。人骨の確認レベルは頭骨6.95m、下肢骨7.03m、上腕骨6.90mを測る。

遺物はかわらけ2点、磁器2点、陶器5点が出土した。かわらけの器形から、15～16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

#### 埋葬人骨2(図36)

I区の北壁際に位置し、西側に埋葬人骨4が隣接する。15～34歳の女性で、頭位方向はN-13°-Wを指し、顔面を西側に向けた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。胸部から腰部、下肢骨は攪乱を受けて多くの

骨が失われている。人骨の確認レベルは頭骨6.72m、寛骨近くで6.65mである。

遺物は銭貨4枚と釘2本が出土し、出土位置は銭貨が胸部に3枚と腰部に1枚、釘が頭部西側1点と腕の前面に1点である。出土レベルはいずれも人骨最下部で、銭貨は副葬品と考えられる。

**出土遺物 (図34)**

遺物は金属製品が6点出土し、このうち4点を図示した。

1～4は銭貨である。1は天聖元寶(北宋・1023)、2・3は永樂通寶(明・1408)、4の銭名は判読不明である。永樂通寶が含まれていることから、15～16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

**埋葬人骨 3 (図36)**

I区南東壁際に位置し、北東側に埋葬人骨7が隣接する。35～54歳の女性で、頭位方向はN-132°-Wを指し、顔面を東側に向けた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の標高は頭骨6.83m、下肢骨6.79mを測る。

遺物は後頭部に接する位置から銭貨6枚が連なって出土したほか、折り曲げた肘の上面からかわらけが大小各1点ずつ出土しており、副葬品と考えられる。

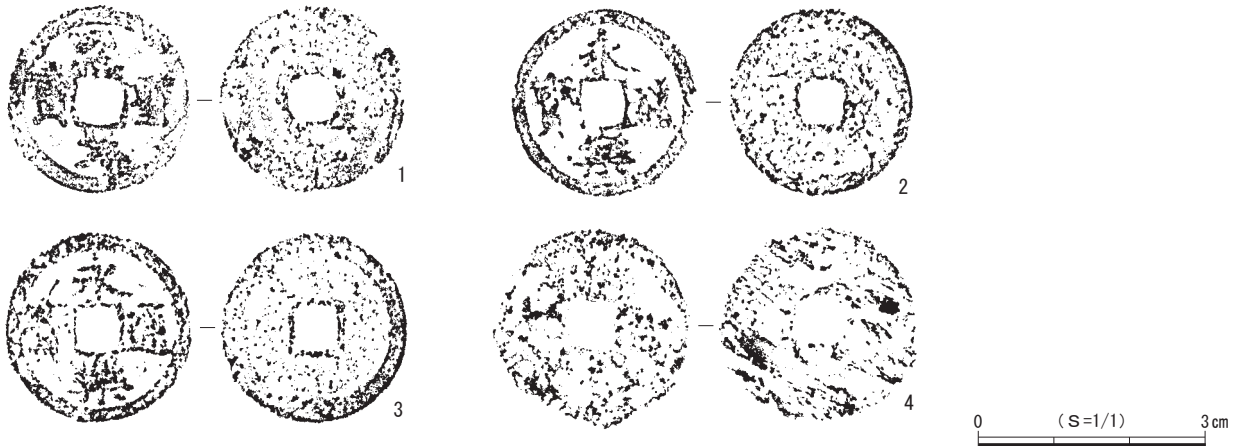


図34 第1面 埋葬人骨2出土遺物

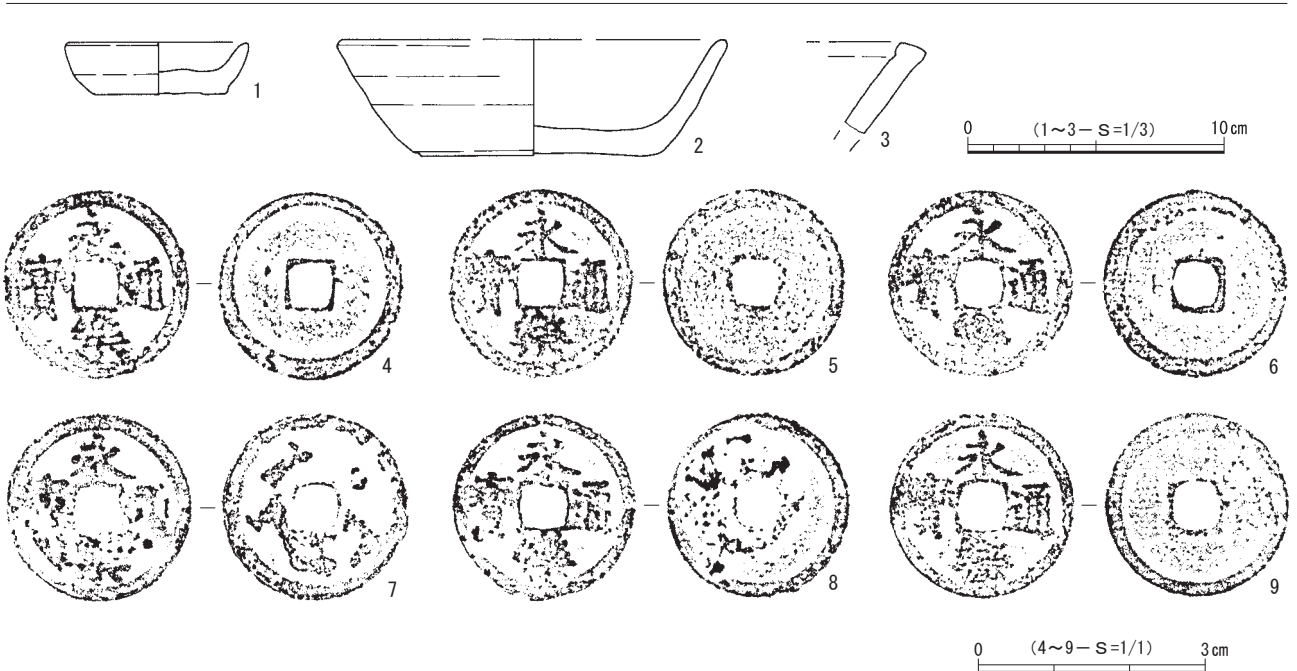


図35 第1面 埋葬人骨3出土遺物

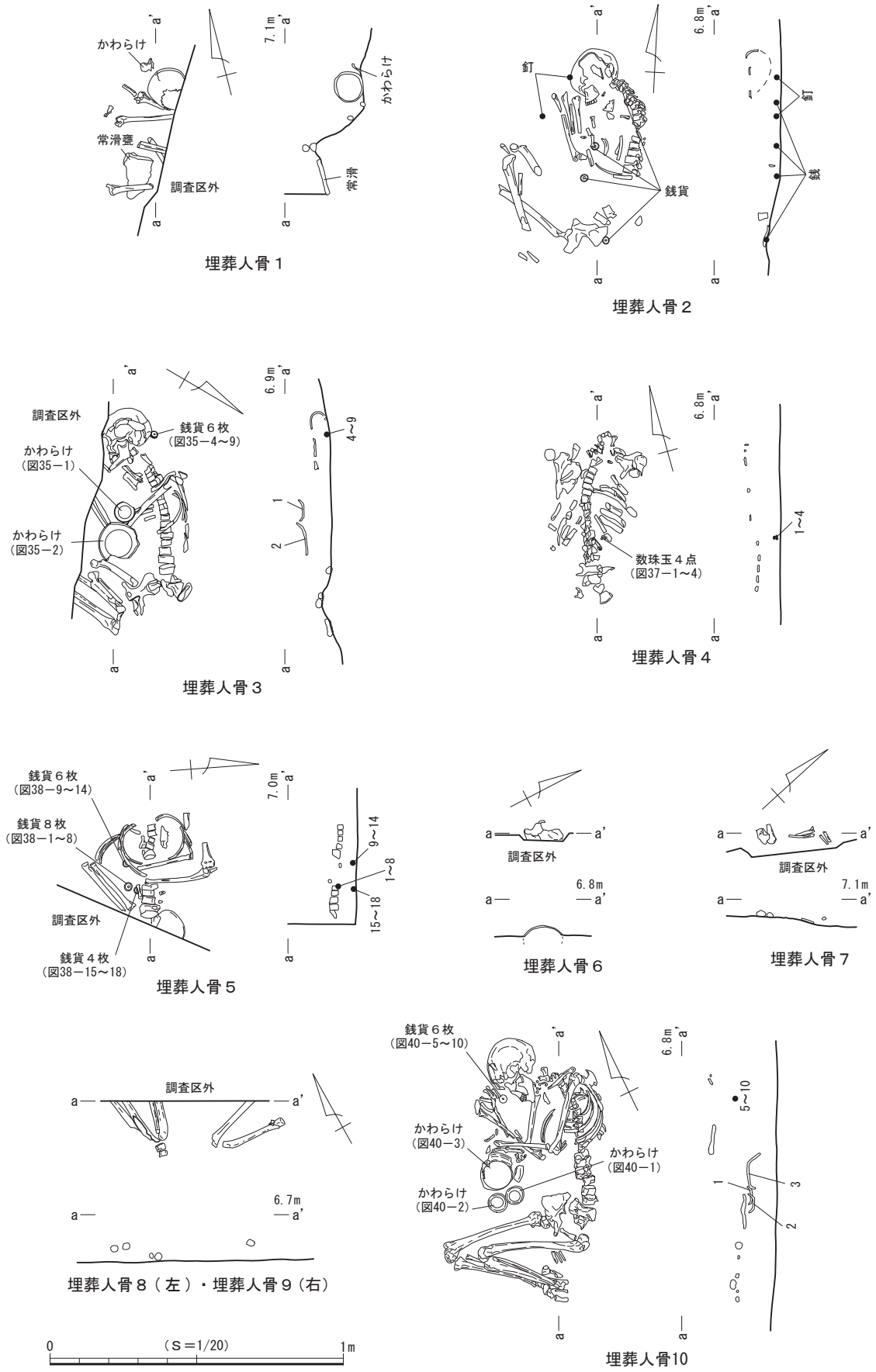


図36 第1面 埋葬人骨 1~10



### 出土遺物 (図35)

遺物はかわらけ 2 点、陶器 3 点、金属製品 6 点が出土し、このうち 9 点を図示した。

1・2 はロクロ成形によるかわらけ、3 は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類である。4～9 は銭貨で、すべて永樂通寶(明・1408)である。人骨に伴う銭貨がすべて永樂通寶であることから、15～16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

### 埋葬人骨 4 (図36)

I 区の北東壁際に位置し、西側に埋葬人骨 2 が隣接する。性別不明の成人で、頭位方向はN-17°-Eを指すと推定される。椎骨と左右の肋骨を確認したが、頭骨と寛骨以下は失われていた。肋骨の湾曲から、頭部を北側に向けた仰臥姿勢で埋葬されたと考えられる。人骨の確認レベルは顎骨近くで6.69m、寛骨近くで6.68mを測る。

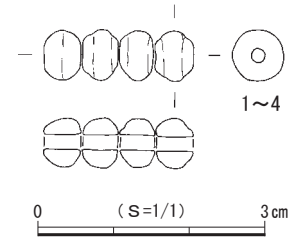


図37 第1面 埋葬人骨4出土遺物を測る。

遺物は肋骨の下方7～8 cmから数珠玉 4 点が出土しており、副葬品と考えられる。

### 出土遺物 (図37)

遺物はガラス製と思われる数珠玉 4 点が出土し、すべてを図示した。

### 埋葬人骨 5 (図36)

I 区の南隅付近に位置し、北東側に埋葬人骨 1 が隣接する。35～54歳の女性で、頭位方向はおよそN-80°-Wを指すと推定され、頭骨を失い寛骨以下は調査区外の東側に延びている。椎骨や肋骨の状況から、仰臥屈葬の姿勢で埋葬されたと考えられる。人骨の確認レベルは東壁際で6.86m、西端で6.83mを測る。掘り込みは平面では確認できなかったが、調査区東壁面で南北80cm、深さ56cmの掘り込みを確認できた。

遺物は胸部の周辺から銭貨18枚が出土しており、出土レベルは肋骨と同レベルのものとその下方5 cmのものが認められる。他にかわらけが大小各1点ずつ出土しているが、本人骨周辺からは部分的な埋葬人骨が複数検出されていることから、すべてが本人骨に副葬されたと断定することはできない。

### 出土遺物 (図38)

遺物はかわらけ 2 点、陶器 1 点、金属製品18点が出土し、このうち18点を図示した。

1～18は銭貨で、すべて古寛永通寶(1636～1659)である。古寛永通寶が含まれていることから、17世紀代の埋葬人骨と考えられる。

### 埋葬人骨 6 (図36)

I 区北東隅に位置し、西側に土坑墓 8 が隣接する。性別不明の1.5歳と推定される頭骨を確認し、他の部位は調査区外の東側にあると考えられる。埋葬姿勢や頭位方向などは明らかでない。人骨の確認レベルは7.10mである。

遺物はかわらけ 1 点が出土した。かわらけの器形から、15～16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

### 埋葬人骨 7 (図36)

I 区東壁際に位置し、南側に埋葬人骨 3 が隣接する。性別不明の0歳と推定される左橈骨と左尺骨のみを確認し、他の部位は調査区外の東側にあると考えられる。埋葬姿勢や頭位方向などは明らかでない。

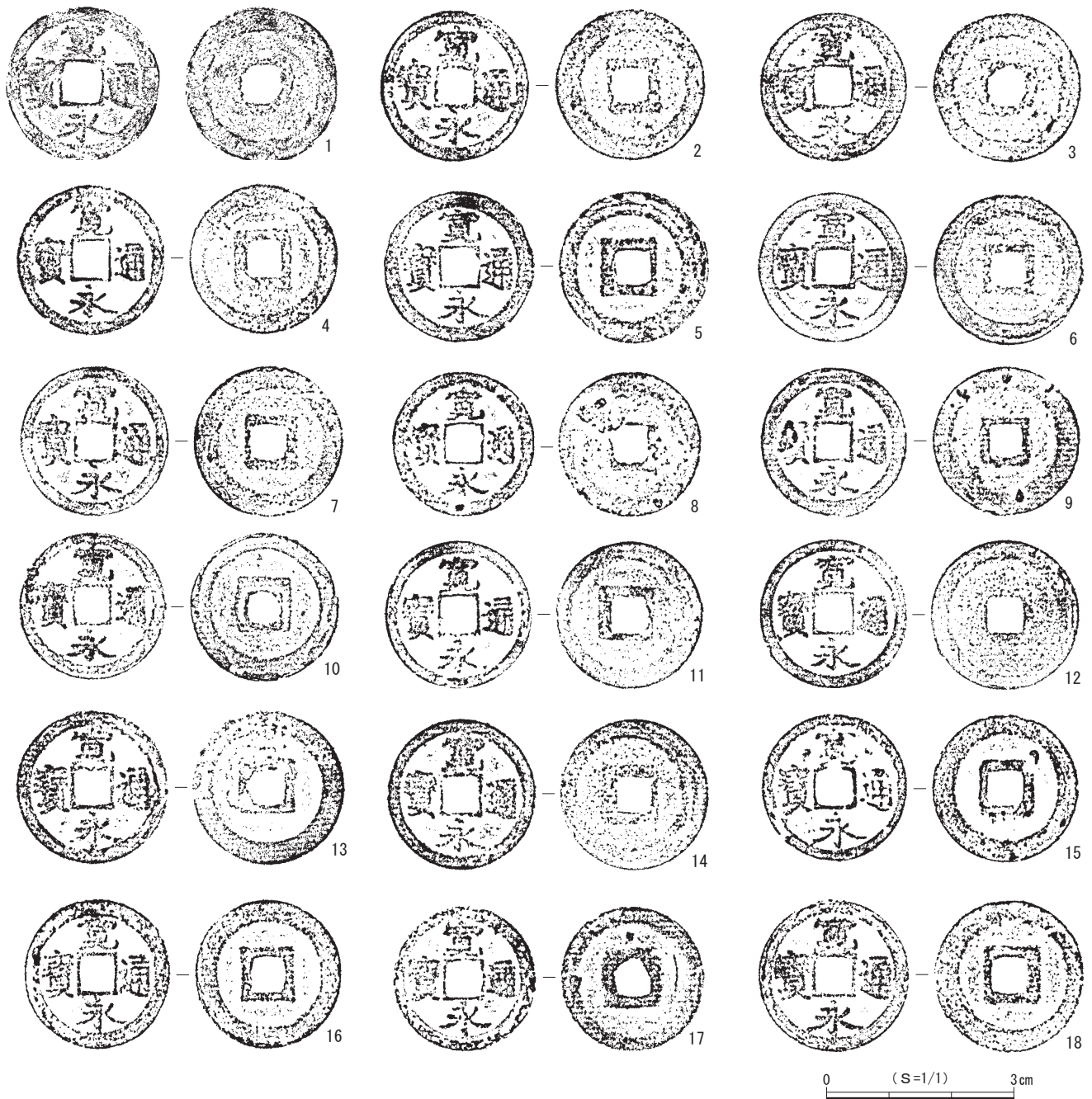


図38 第1面 埋葬人骨5出土遺物

人骨の確認レベルは7.05mである。  
遺物は出土しなかった。

**埋葬人骨8 (図36)**

I区北東壁際に位置し、東側に埋葬人骨9が隣接する。55歳以上の女性と推定される下肢骨のみを確認し、他の部位は調査区外の北側にあると考えられる。膝を強く折り曲げた状態で検出したが、埋葬姿勢の詳細や頭位方向などは明らかでない。人骨の確認レベルは6.60mである。

遺物はかわらけが小中各1点ずつ出土した。

**出土遺物 (図39)**

遺物はかわらけ2点、陶器6点が出土し、このうち3点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけ、3は瀬戸窯産の入子である。  
かわらけの器形から、15～16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

**埋葬人骨9 (図36)**

I区東隅に位置し、西側に埋葬人骨8が隣接する。性別不明の未成人と推定される下肢骨のみを確認し、他の部位は調査区外の側にあると考えられる。膝を強く折り曲げた状態で検出したが、埋葬姿勢の詳細や頭位方向などは明らかでない。人骨の確認レベルは6.59mである。

遺物は出土しなかった。

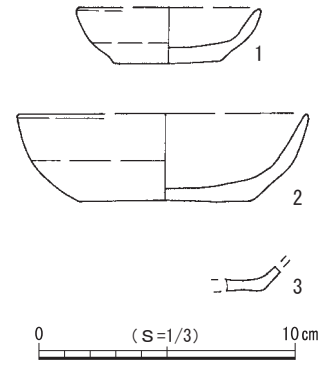


図39 第1面 埋葬人骨8出土遺物

**埋葬人骨10 (図36)**

I区の西壁際で脊椎・肋骨の一部を検出した。この場所は次いで調査を実施するII区との間に設定するベルト予定地であったが、急遽人骨周囲を掘り下げて調査を行った。

出土した人骨は15～34歳の女性で、頭位方向はおよそN-25°-Wを指す。顔面を西に向け、手足を西側に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。分析の結果、右大腿骨が2体分重複することが明らかとなった。人骨の確認レベルは頭骨6.52m、寛骨6.43mである。

遺物は顔面の前面から銭貨6枚が連なって出土したほか、上腕部と脚部の間から中形かわらけ1点と小形かわらけ2点が出土しており、副葬品と考えられる。

**出土遺物 (図40)**

遺物はかわらけ4点、陶器10点、石製品1点、金属製品7点が出土し、このうち10点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけ、4は砥石である。5～10は銭貨で、5は元豊通寶(北宋・1078)、6～10は永樂通寶(明・1408)である。かわらけの器形から、16～17世紀代の埋葬人骨と考えられる。

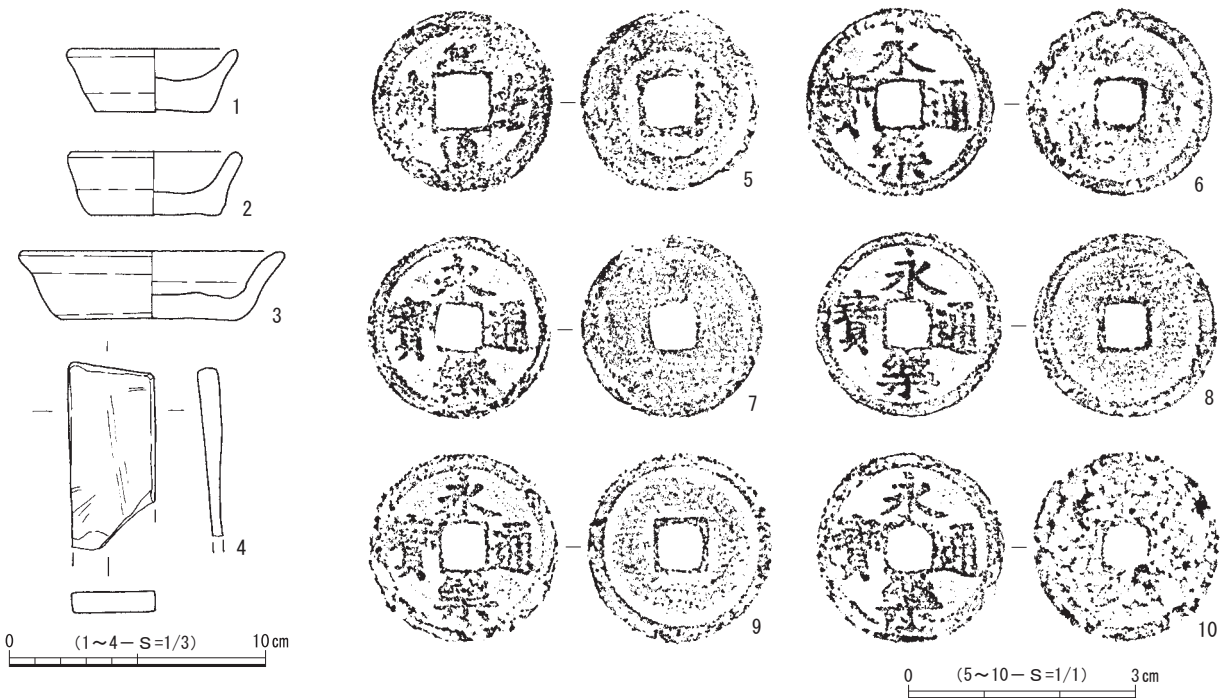


図40 第1面 埋葬人骨10出土遺物



**埋葬人骨11 (図42)**

Ⅱ区の東壁際に位置する。一部が調査区外東に延びており、調査区を部分的に拡張して調査を行った。東側にⅠ区の埋葬人骨10が隣接する。出土した人骨は性別不明の12~14歳と推定され、頭位方向はほぼ真北を指す。顔面を西に向け、手足を西に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは頭骨6.80m、寛骨6.77mである。

遺物は出土しなかった。

**埋葬人骨12 (図42)**

Ⅱ区西壁際の中央部に位置する。出土した人骨は性別不明の5歳と推定され、頭位方向はおよそN-43°-Eを指す。頭骨は確認されなかったが、西に足を折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬される。人骨の確認レベルは、椎骨の上端6.79m、寛骨6.76mを測る。

遺物はかわらけの破片が上端に位置する椎骨下に入り込むように出土している。

**出土遺物 (図41)**

遺物はかわらけ6点、木製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は漆器碗で、黒漆の下地に朱漆によって花文が描かれている。かわらけの器形から、15~16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

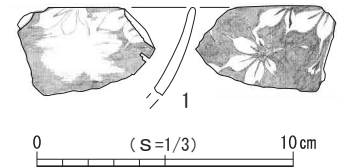


図41 第1面 埋葬人骨12出土遺物

**埋葬人骨13 (図42)**

Ⅱ区の北東部に位置し、西側に土坑墓25が隣接する。性別不明の1.5歳と推定される頭骨で、単独で確認された。掘り込みや他の部位は確認できなかったことから、埋葬後に攪乱され頭骨のみが遊離したか

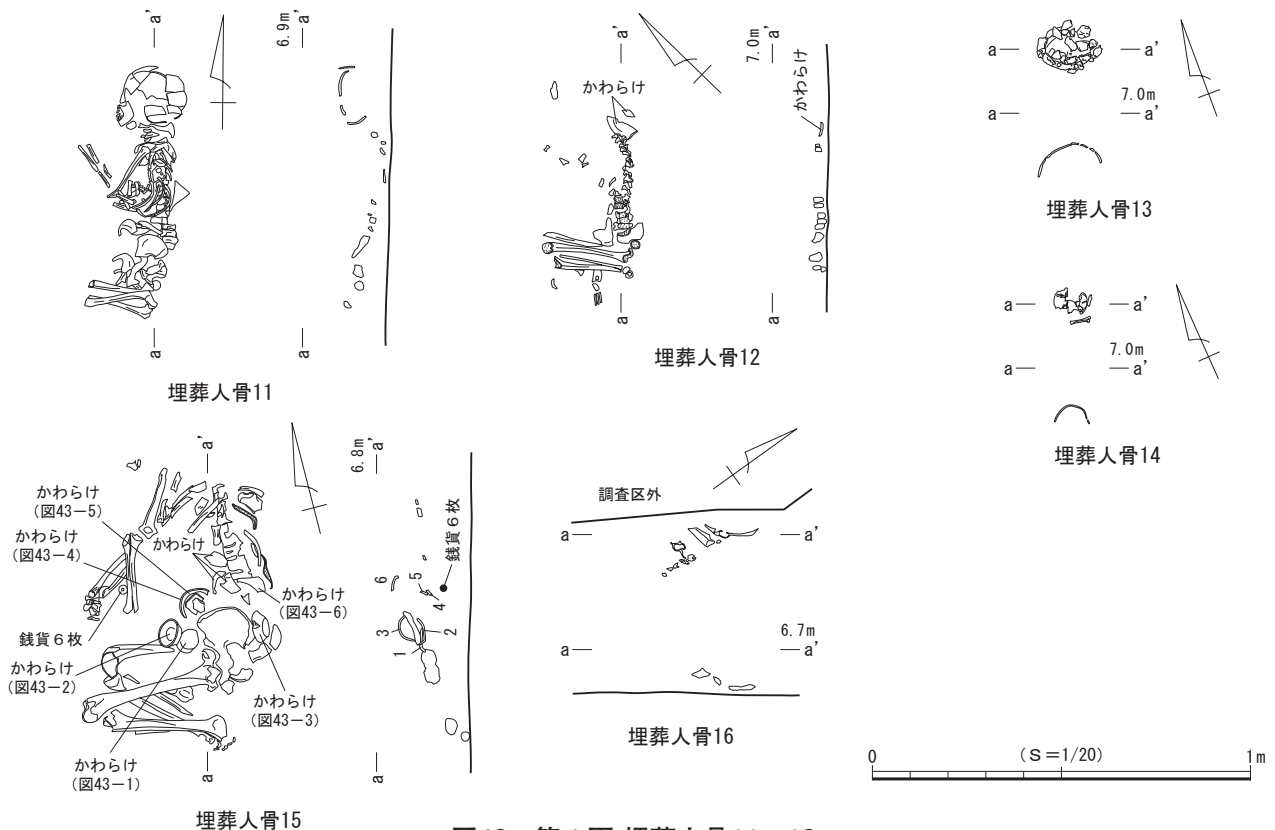


図42 第1面 埋葬人骨11~16

あるいは遊離した頭骨が再埋葬されたと考えられる。頭骨の確認レベルは6.92mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 埋葬人骨14 (図42)

Ⅱ区の北東部に位置し、西側に埋葬人骨13が隣接する。性別不明の0歳と推定される頭骨で、単独で確認された。掘り込みや他の部位は確認できなかったことから、埋葬後に攪乱され頭骨のみが遊離したかあるいは遊離した頭骨が再埋葬されたと考えられる。頭骨の確認レベルは6.90mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 埋葬人骨15 (図42)

Ⅱ区の北壁際に位置し、上位に土坑墓20が構築されている。出土した人骨は55歳以上の男性で、頭位方向はほぼ真北を指す。頭骨は確認されなかったが、頭位を北、手足を西に折り曲げた側臥屈葬の姿勢で埋葬されたと考えられる。人骨の確認レベルは、左上腕骨6.72m、寛骨6.73mを測る。

遺物は腹部と腰部周辺から大形かわらけ1点と中形かわらけ2点、小形かわらけ3点、そして手首辺りから連なった銭貨6枚と出土位置は明らかでないが銭貨2枚が出土している。他の埋葬人骨に比べてかわらけの数が多いが、これらが副葬された遺物と考えられる。

#### 出土遺物 (図43)

遺物はかわらけ10点、磁器1点、陶器14点、瓦質土器1点、金属製品8点が出土し、このうち15点を図示した。

1～6はロクロ成形によるかわらけ、7は常滑窯産の甕で5型式に分類される。8～15は銭貨で、8

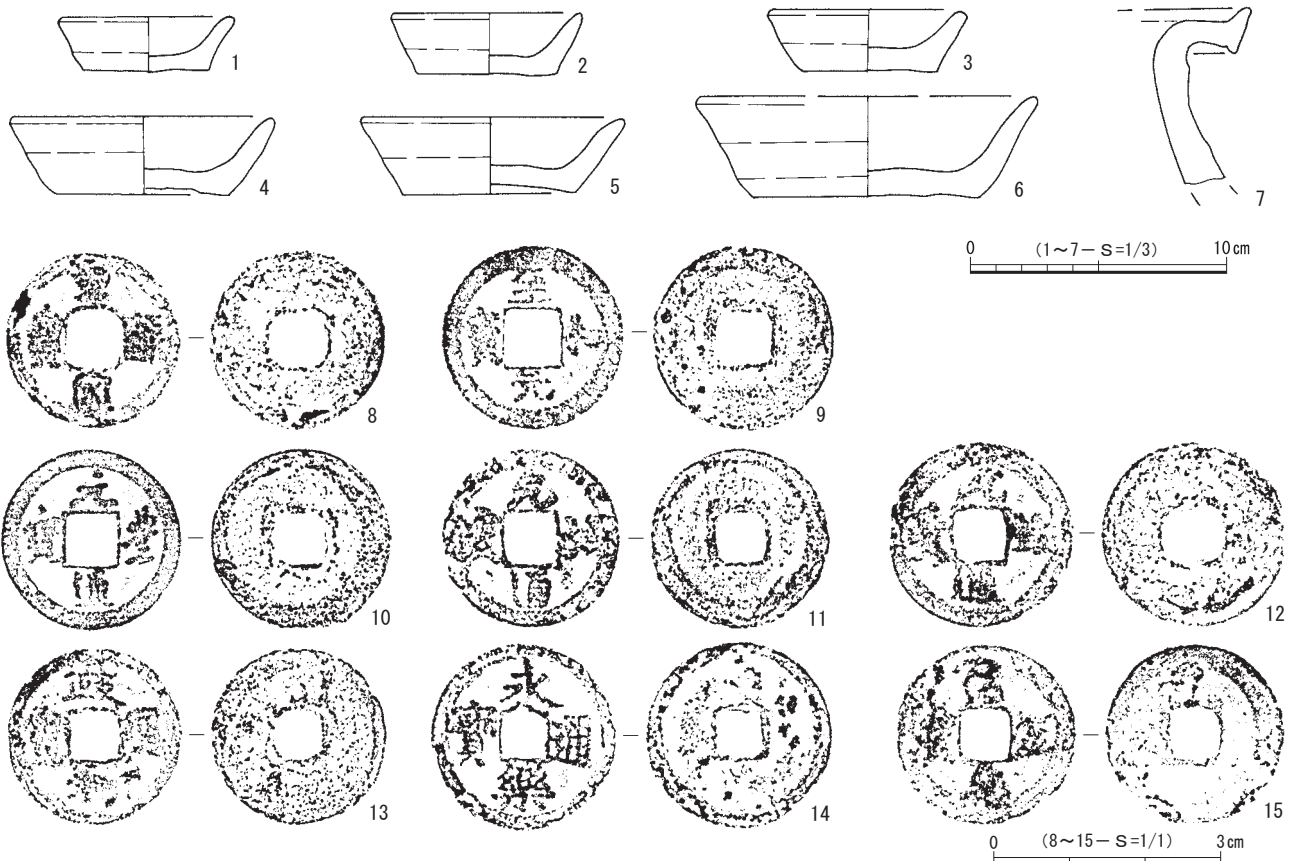


図43 第1面 埋葬人骨15出土遺物

は皇宋通寶(北宋・1038)、9は至和元寶(北宋・1054)、10は元豐通寶(北宋・1078)、11・12は元祐通寶(北宋・1086)、13は政和通寶(北宋・1111)、14は永樂通寶(明・1408)、15は錢名不明である。かわらけの器形や永樂通寶が含まれている点から、15~16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

#### 埋葬人骨16(図42)

Ⅱ区西壁際に位置し、大部分の骨格は調査区外西にある。上位に土坑墓22が構築されている。掘り込みは明確にできなかったが、部分的に15cmほどの落ち込みを確認できた。人骨は35~54歳の女性で、腰椎、寛骨が出土した。人骨の確認レベルは腰骨6.64mを測る。

掘り下げていく過程で、寛骨と腰椎の辺りから小形かわらけが各1点ずつ出土しており、副葬品と考えられる。

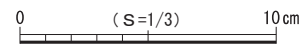
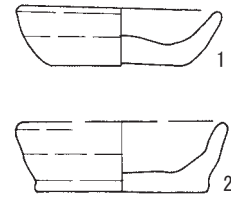


図44 第1面 埋葬人骨16出土遺物

#### 出土遺物(図44)

遺物はかわらけ3点、陶器6点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。かわらけの器形から、15~16世紀代の埋葬人骨と考えられる。

#### (4)土坑

第1面では、Ⅰ区の南東部から1基のみを検出した。土坑の確認面からウマの末節骨が出土したことが特筆される。

#### 土坑1(図45)

Ⅰ区南東部に位置し、北西側で土坑墓6と重複して壊している。平面形は略楕円形を呈する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.40m、短軸87cm、深さ22cmで、坑底面の標高は6.57mを測る。主軸方位はN-42°-Eを指す。覆土は小泥岩ブロックを少量含む暗褐色土で、土坑墓の覆土と類似する。

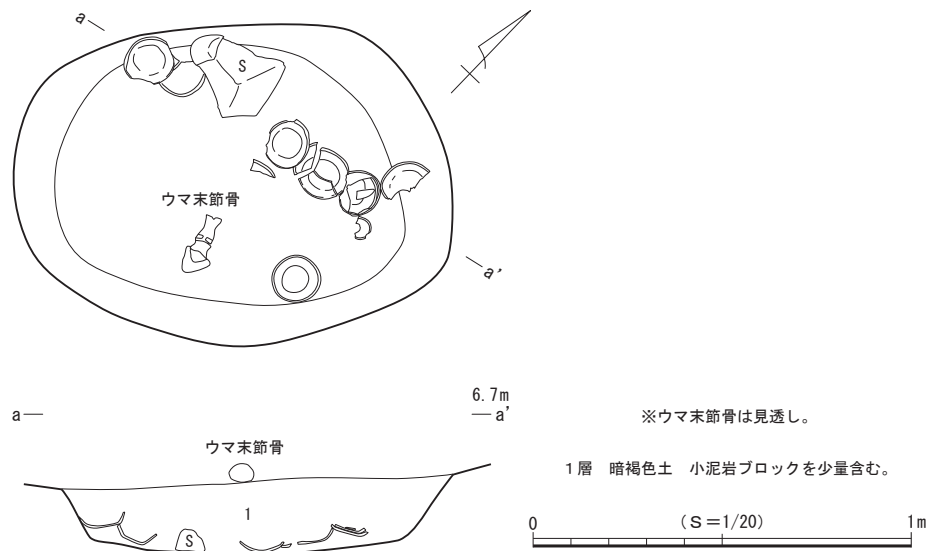


図45 第1面 土坑1



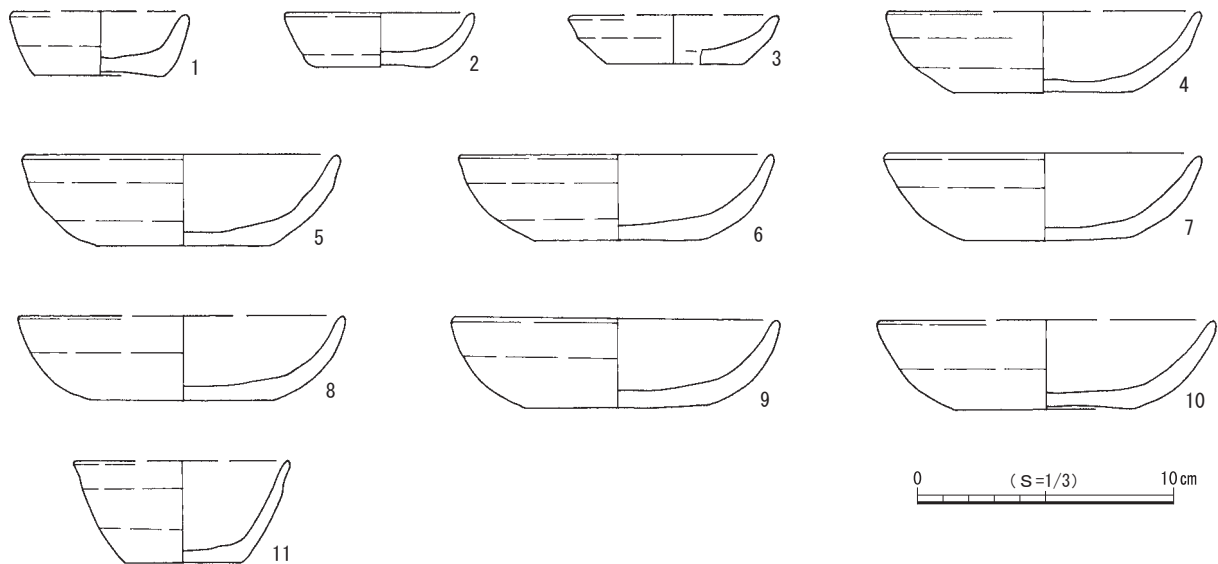


図46 第1面 土坑1 出土遺物

遺物はかわらけ10点、入子1点が底面直上あるいはやや浮いた状態で出土したほか、ウマの末節骨と基節骨・中節骨各1点が確認された。

#### 出土遺物(図46)

遺物はかわらけ10点、陶器1点が出土し、すべて図示した。

1～10はロクロ成形によるかわらけである。11は瀬戸窯産の入子である。かわらけの器形から15～16世紀代の土坑と考えられる。

#### (5) 表採・表土出土遺物(図47～56)

本遺跡は墓地であることから、表土上には従前から石塔類が散在しており、それらが多く採集されている。ここではこのうちの36点とかわらけ2点、陶器1点、銭貨2点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3は瀬戸窯産の折縁深皿である。4～39は石塔類である。4～10は五輪塔の地輪である。11～19は五輪塔水輪で、19には「華」の文字が刻字されている。20～32は五輪塔火輪で、28には「蓮」の文字が刻字されている。33～38は五輪塔空風輪で、38には「妙・法」の文字が刻字されている。39は宝篋印塔の塔身で、4面に「妙法」・「蓮」・「華」・「経」が刻字されている。40・41は銭貨で、40は永樂通寶(明・1408)、41は「元寶」のみ判読できる。

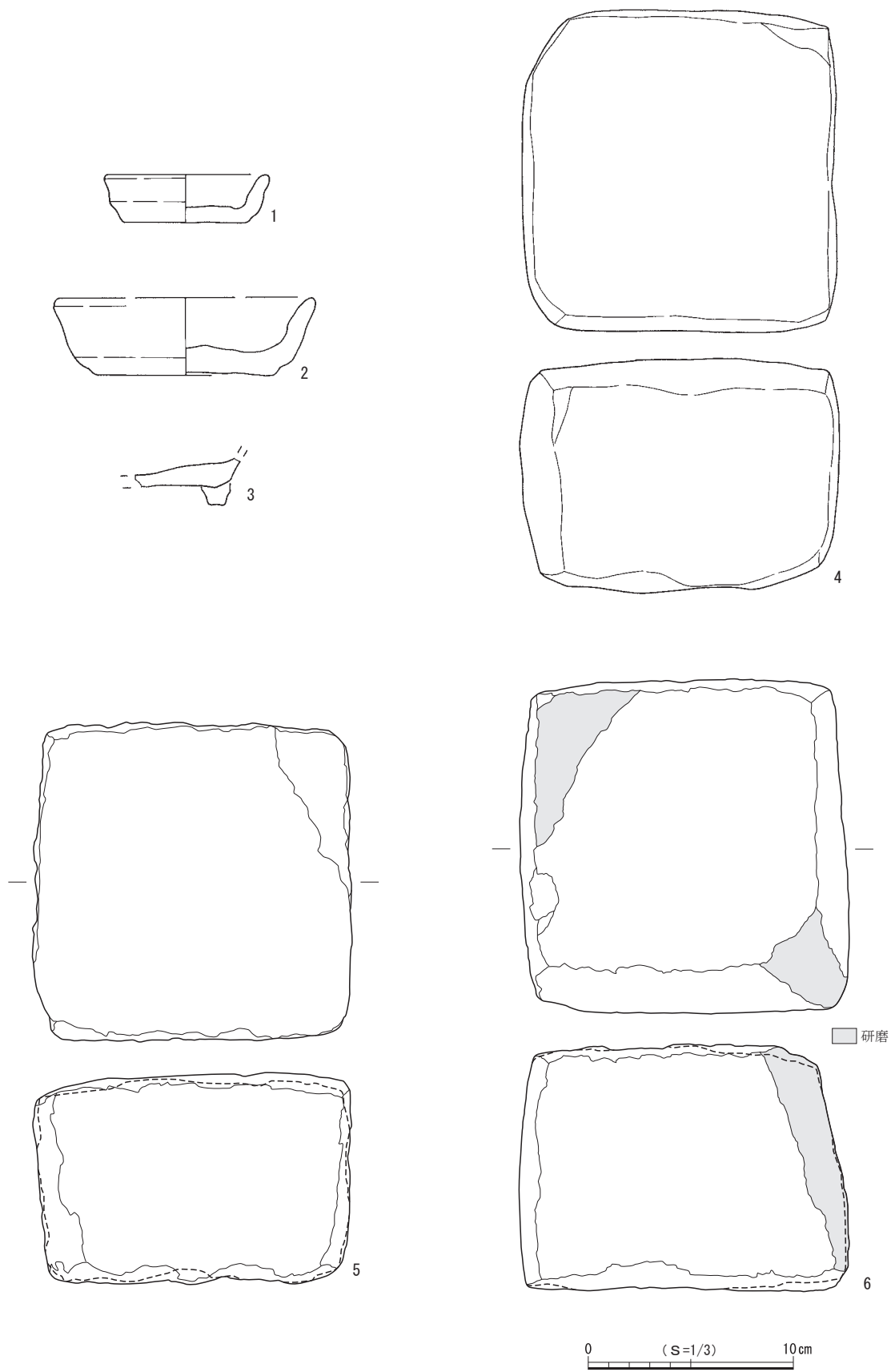


图47 表探·表土出土遺物(1)

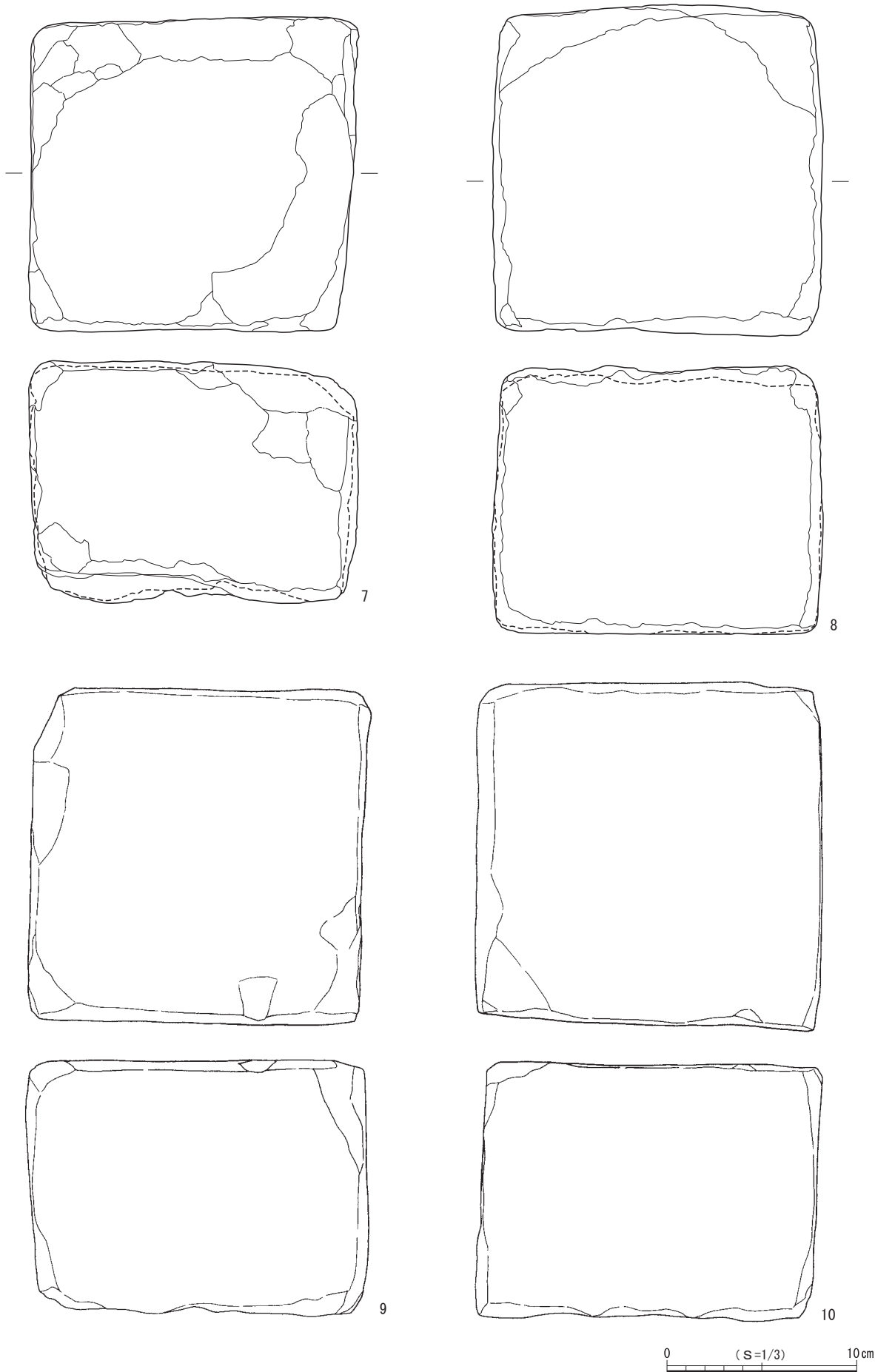


图48 表探·表土出土遺物(2)



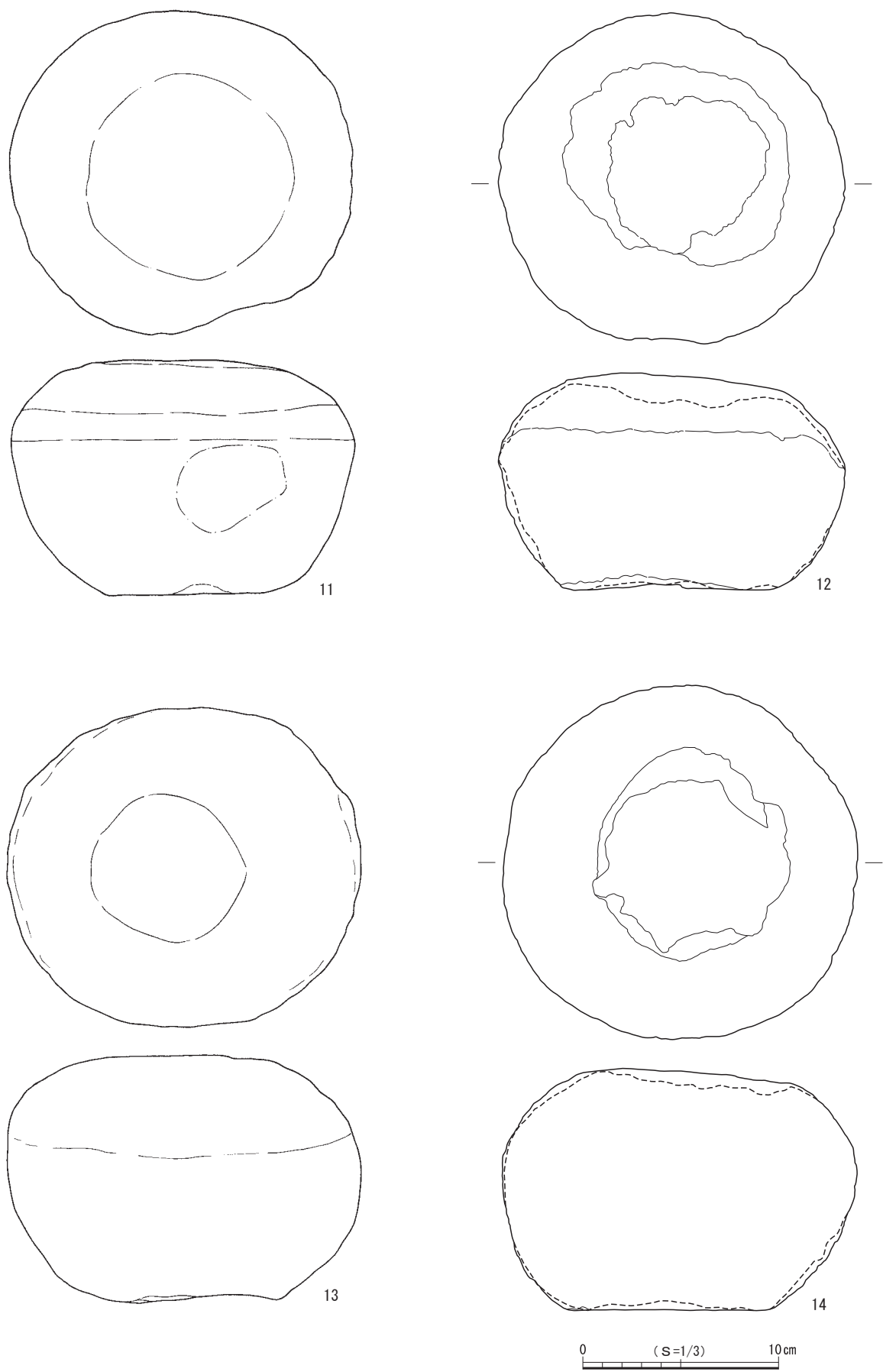


图49 表採・表土出土遺物(3)

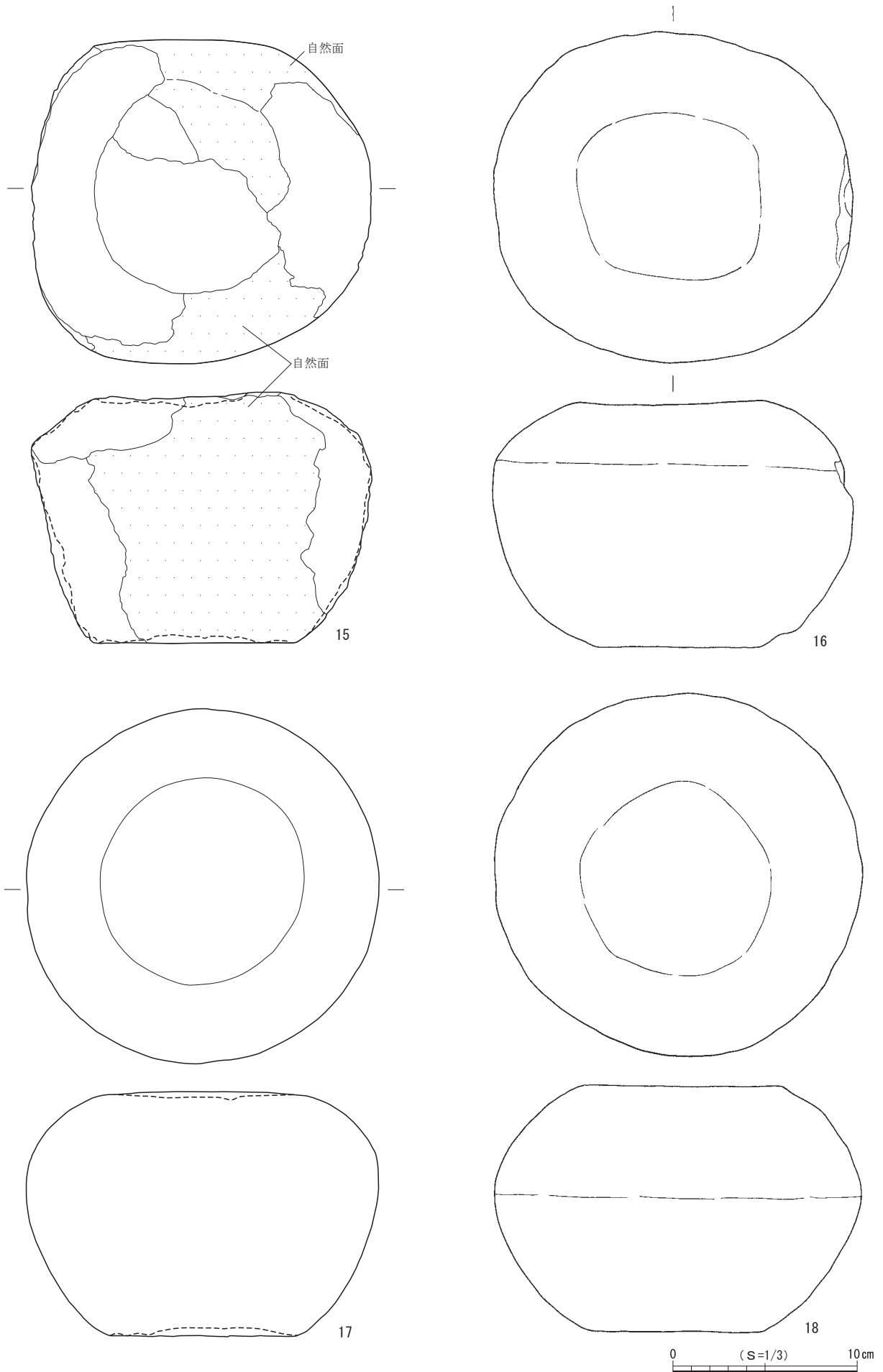
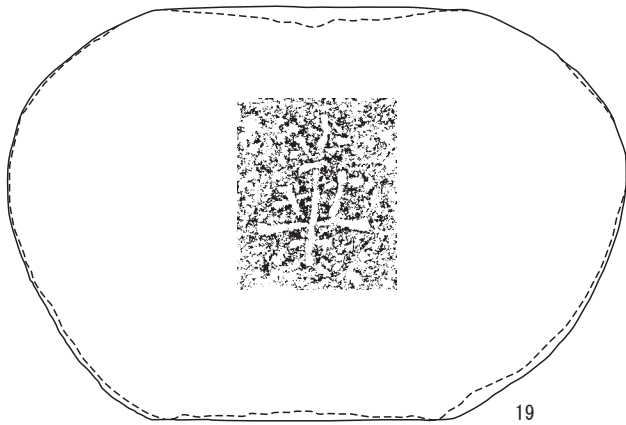
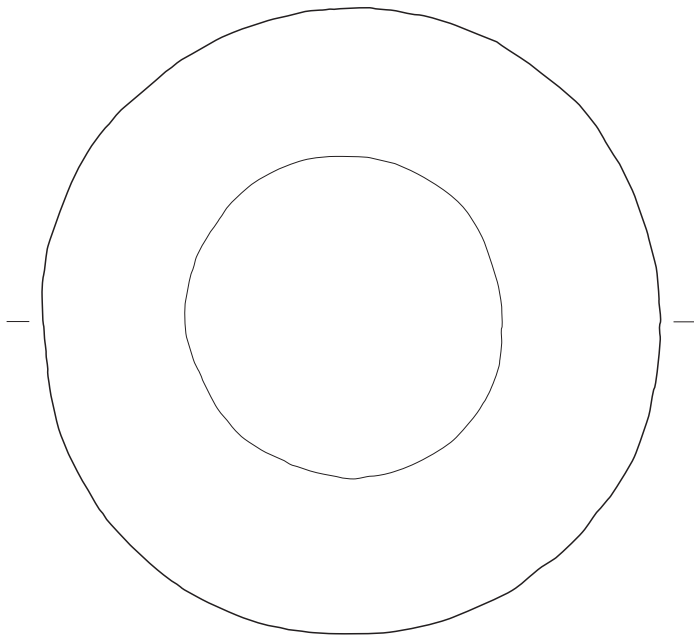
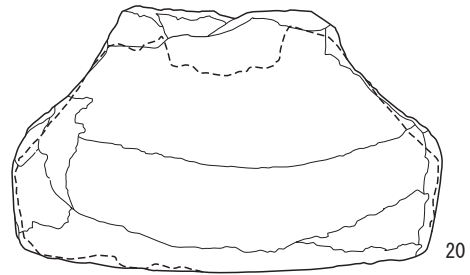
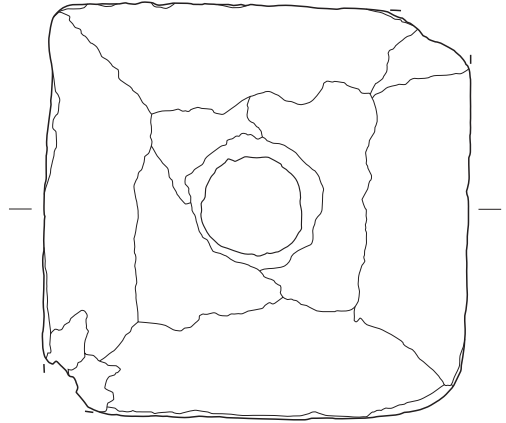


图50 表採・表土出土遺物(4)

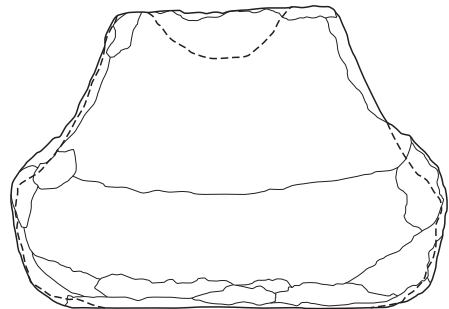
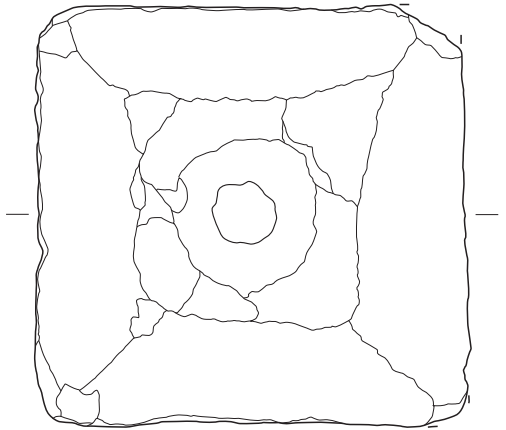


19

0 (S=1/3) 10cm



20



21

图51 表採・表土出土遺物(5)



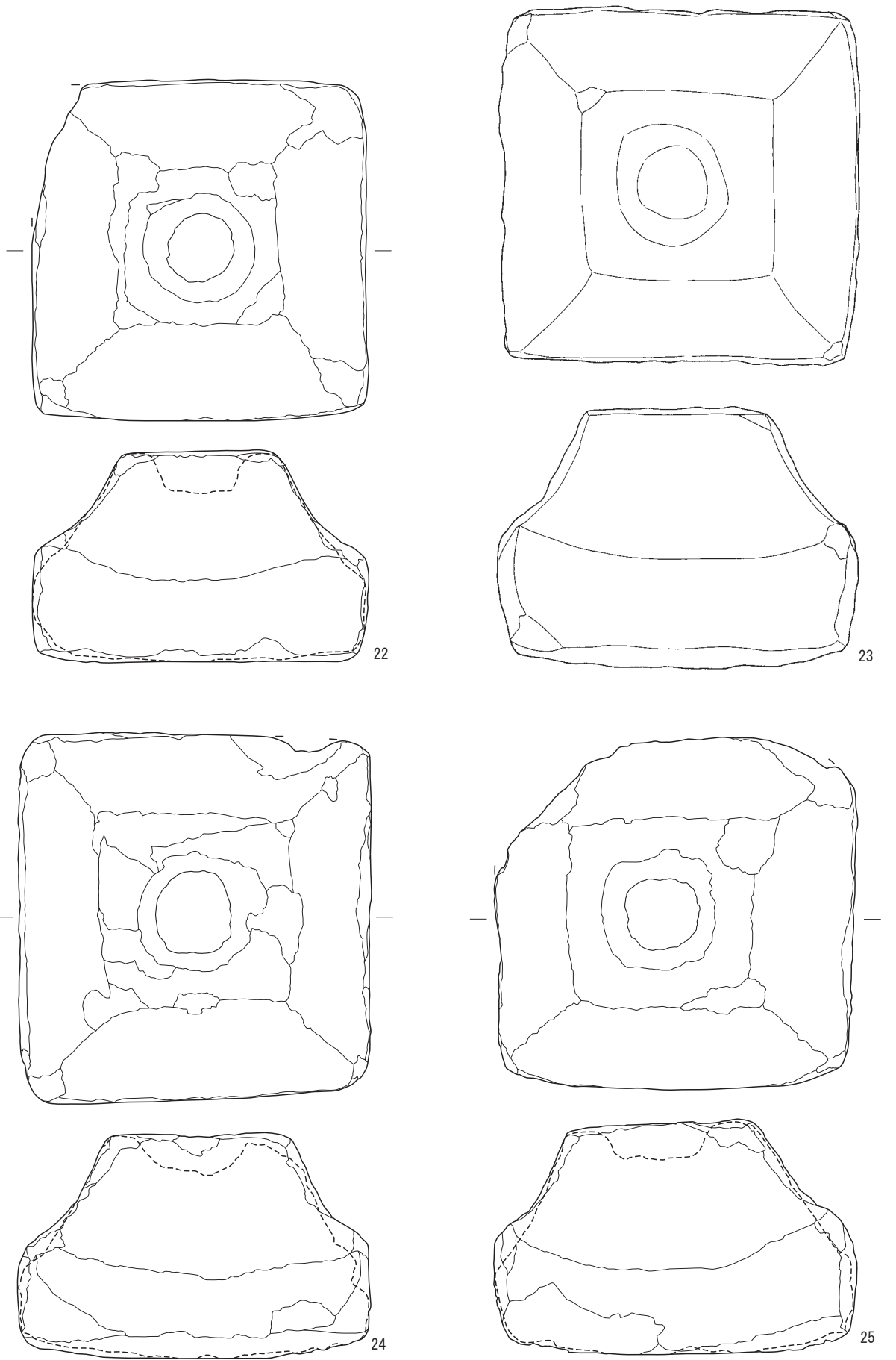


图52 表探·表土出土遺物(6)

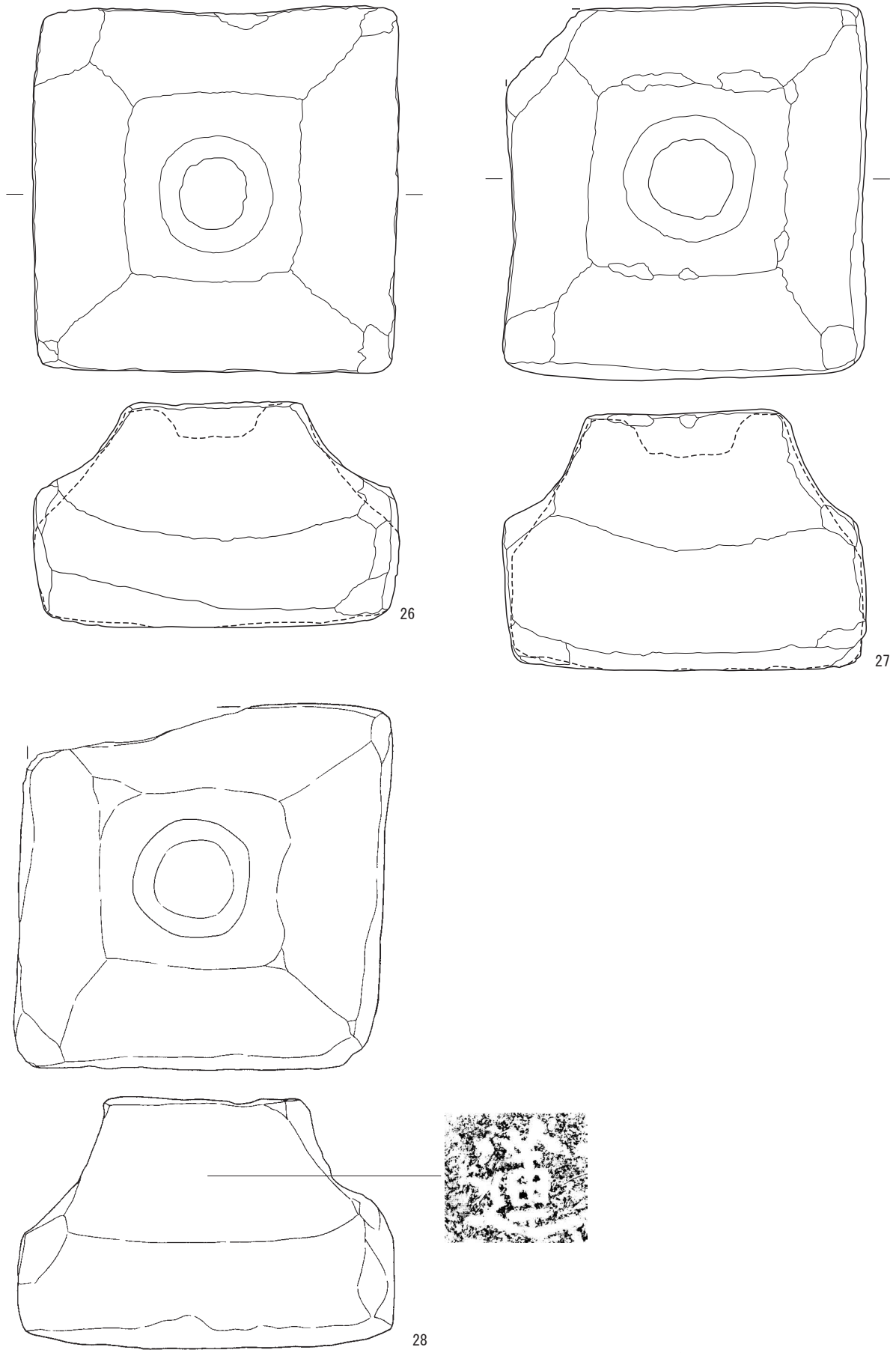
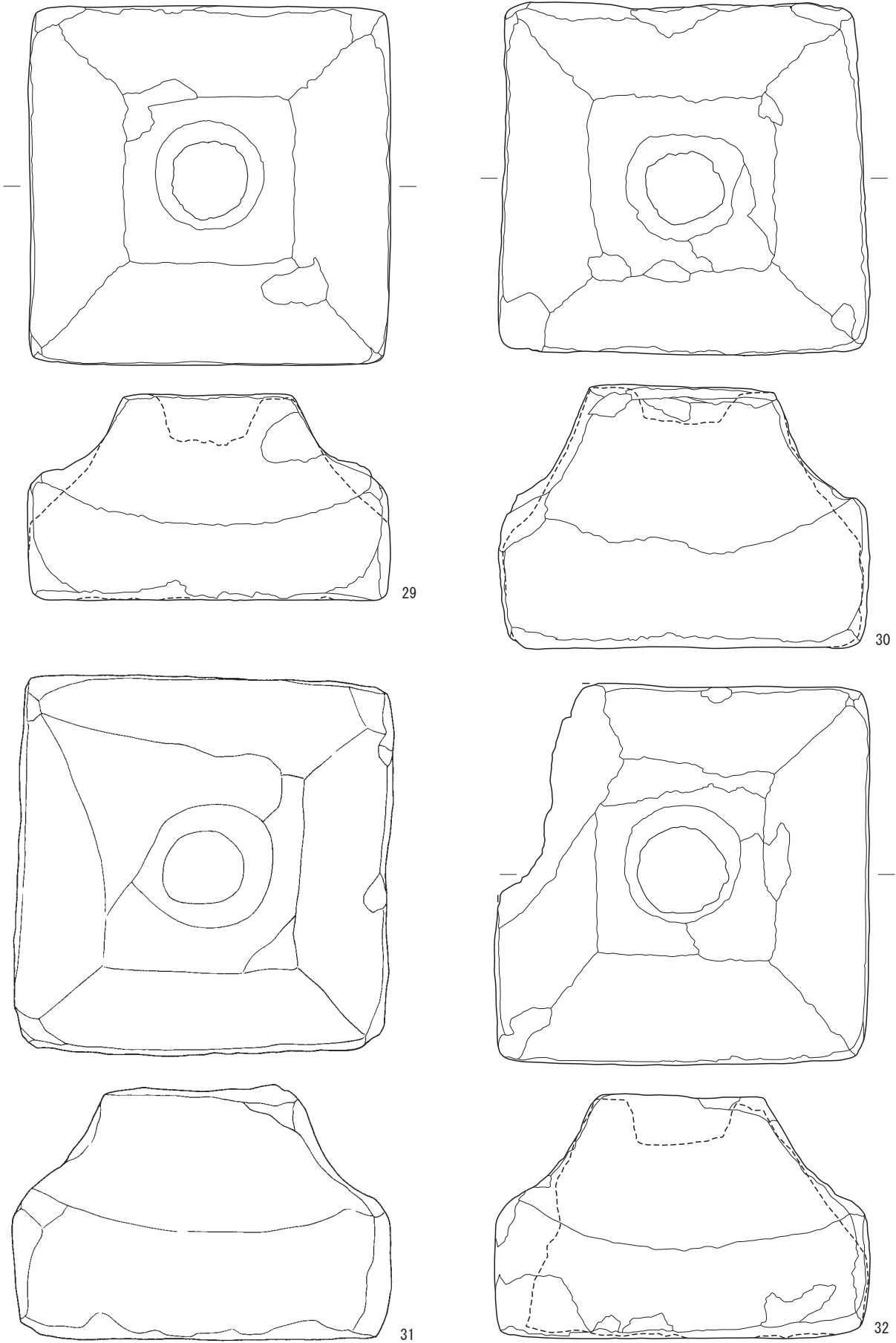
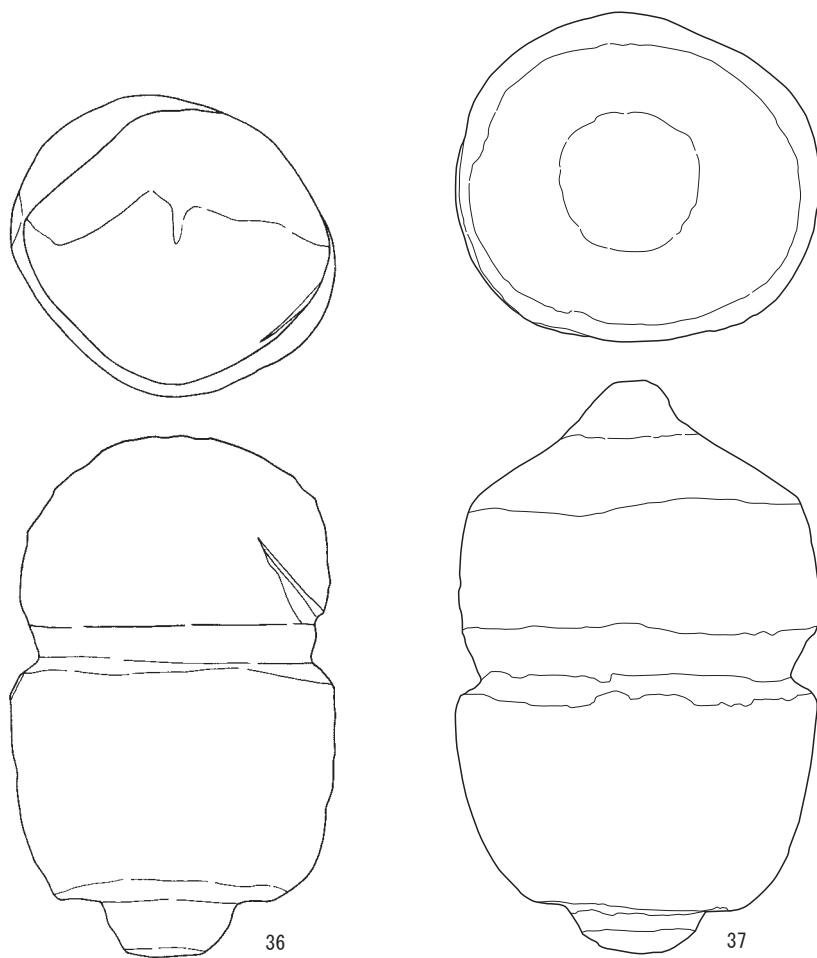
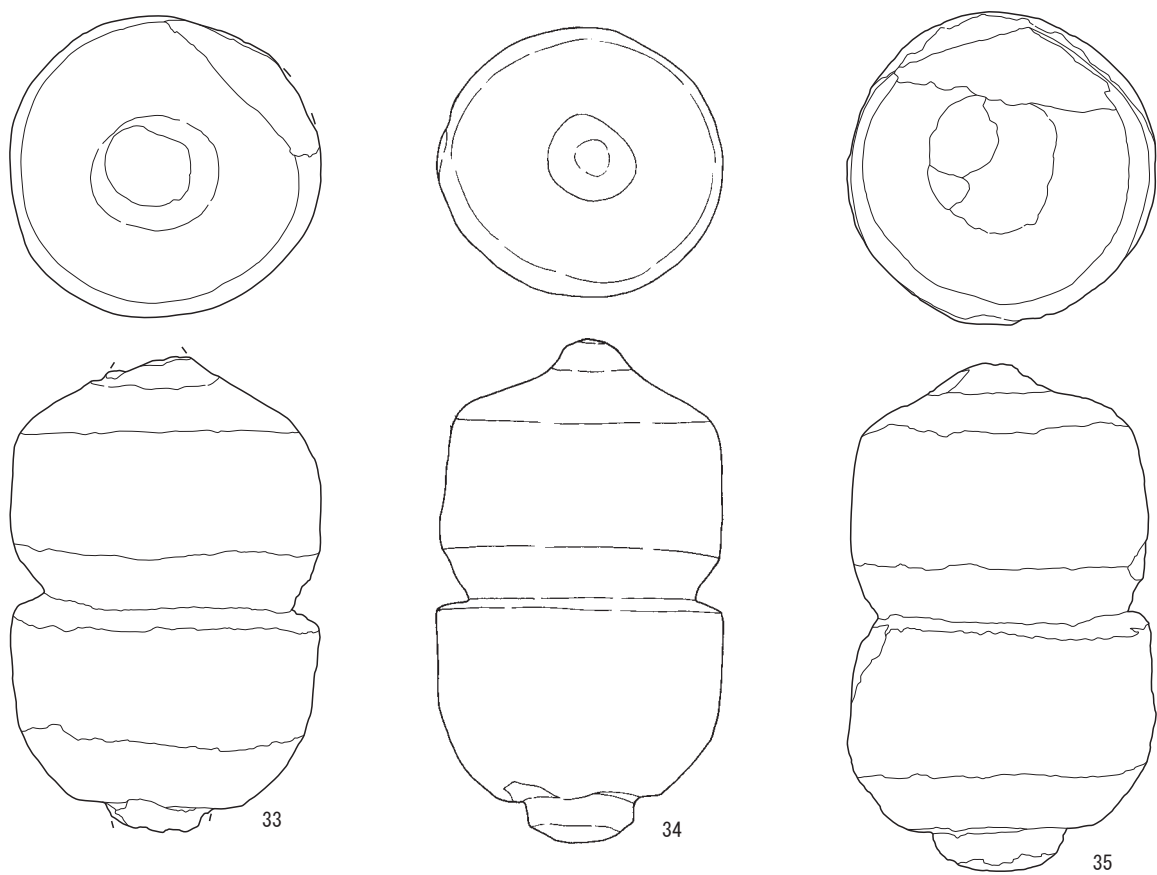


图53 表探·表土出土遺物(7)



0 (S=1/3) 10cm

图54 表採・表土出土遺物(8)



0 (S=1/3) 10cm

图55 表採・表土出土遺物(9)



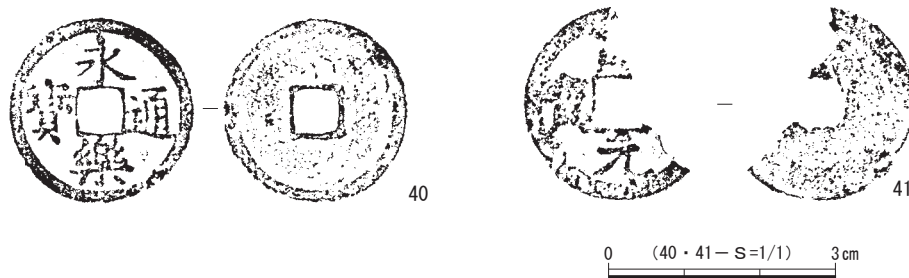
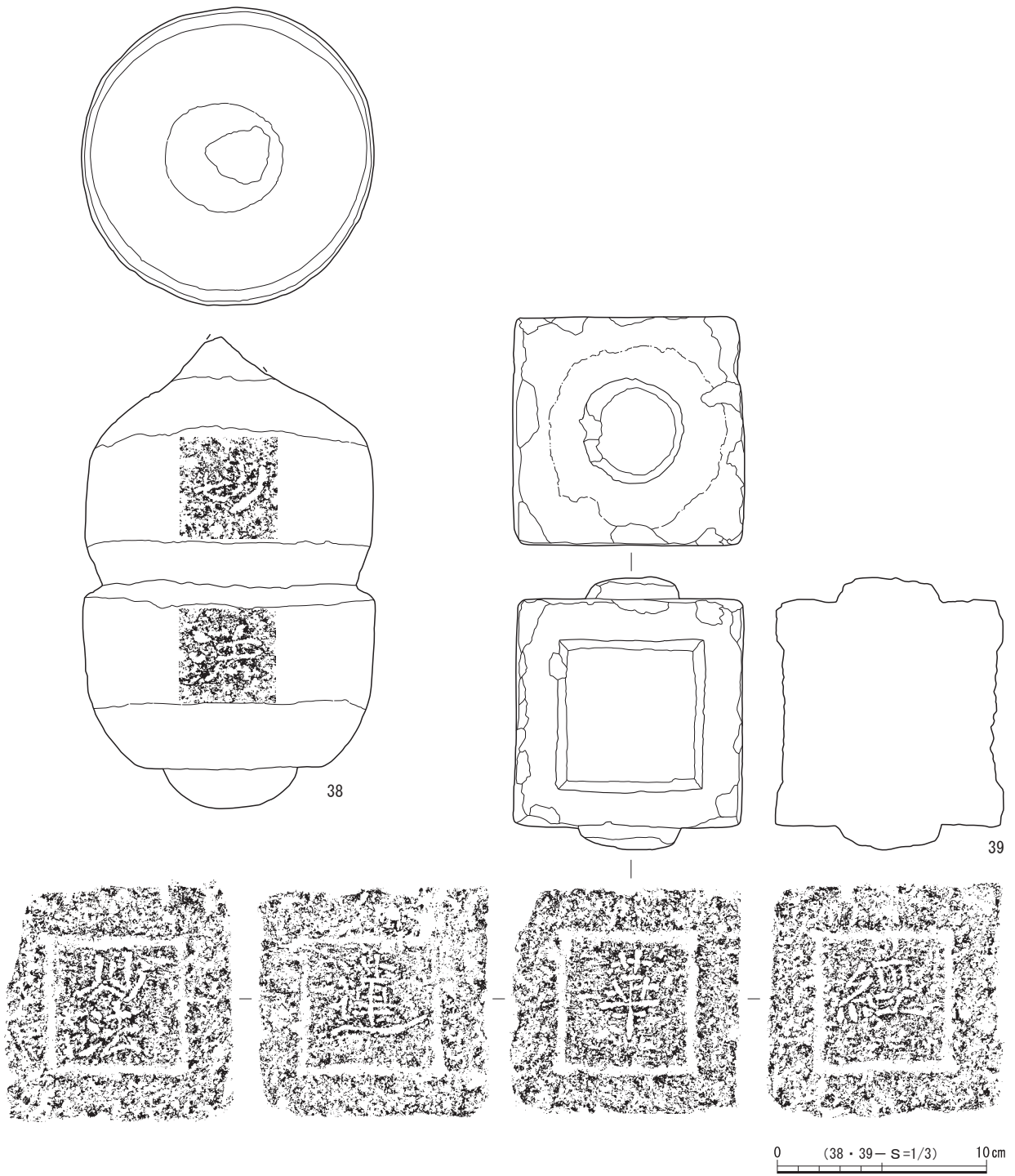


图56 表採・表土出土遺物(10)

(6) 遺構外出土遺物 (図57~62)

第1面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち155点を図示した。

1~71はかわらけ類である。1・2は白かわらけ、3~71はロクロ成形によるかわらけである。5・6・24・28・35・65には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。72~76は舶載磁器類で、72~74は口元白磁皿、75は龍泉窯系青磁の椀Ⅰ類、76は龍泉窯系青磁の椀Ⅱ類である。77~94は陶器類である。77~80は瀬戸窯の製品で、77は折縁深皿、78は合子の蓋、79は縁釉皿、80は袴腰香炉である。81~91は常滑窯産の製品で、81~86が5~7型式に分類される甕、87が片口鉢Ⅰ類、88~90が片口鉢Ⅱ類、91が挿鉢である。92・93は山茶碗窯系の片口鉢、94は常滑の製品を利用した摩耗陶片である。95~100は土器・瓦質土器類で、95~99が火鉢、100が土錘である。101は平瓦である。102~109は石製品である。102・103は滑石製石鍋、104は用途不明の泥岩加工品である。105~108は砥石、109は宝篋印塔の反花座である。110・111は鉄製釘である。112~114は骨製の筭である。115~155は銭貨で、115~120が開元通寶(南唐・960)、121が景德元寶(北宋・1004)、122・123为天聖元寶(北宋・1023)、124~132が皇宋通寶(北宋・1038)、133が嘉祐通寶(北宋・1056)、134が治平元寶(北宋・1064)、135が熙寧元寶(北宋・1068)、136・137が元豐通寶(北宋・1078)、138が元祐通寶(北宋・1086)、139・140が紹聖元寶(北宋・1094)、141・142が聖宋元寶(北宋・1101)、143・144が政和通寶(北宋・1111)、145・146が皇宋元寶(南宋・1253)、147が洪武通寶(明・1368)、148~152が永樂通寶(明・1408)である。153は「元寶」のみ判読が可能であり、154・155の銭名は不明である。

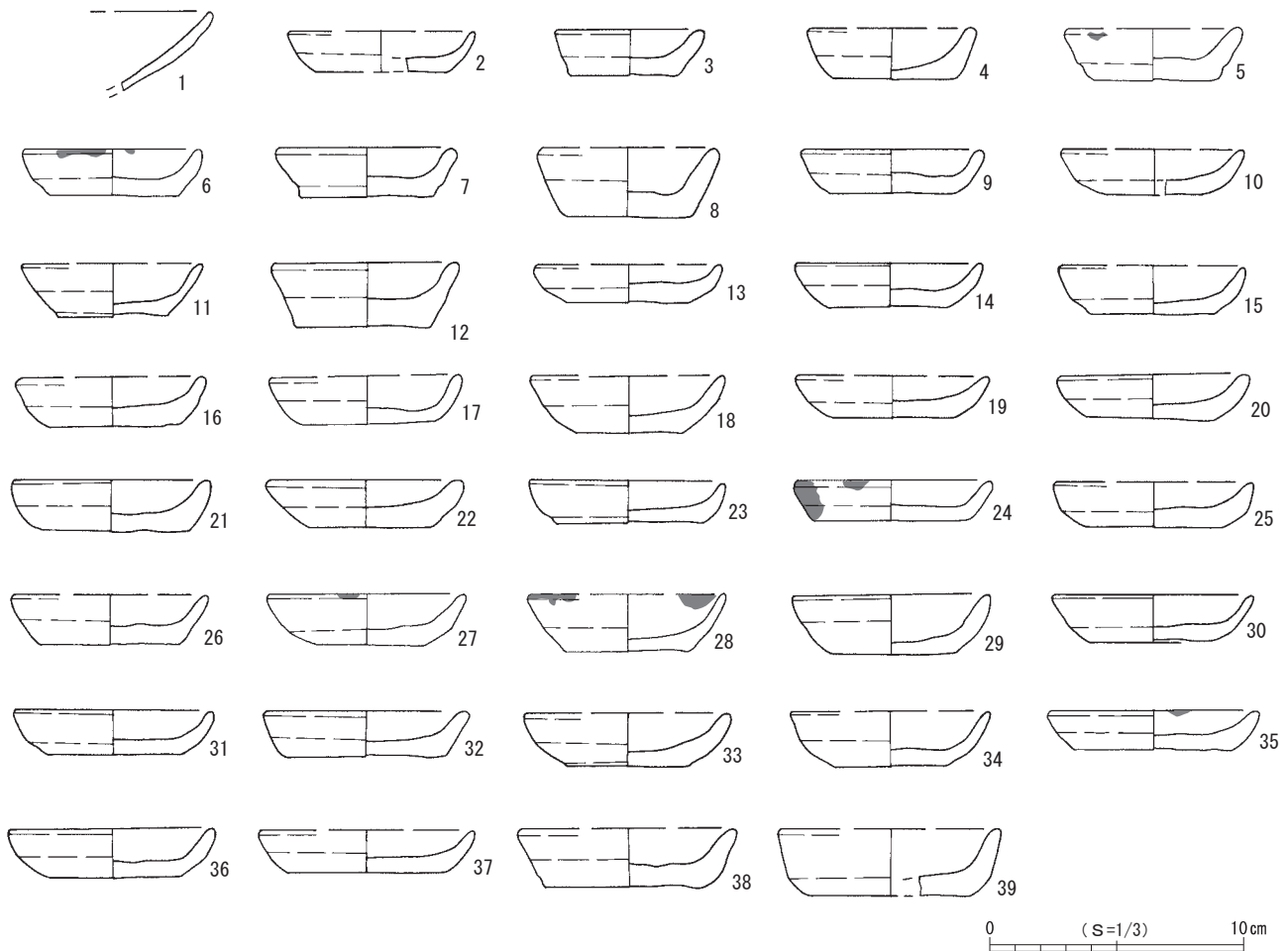


図57 第1面 遺構外出土遺物(1)

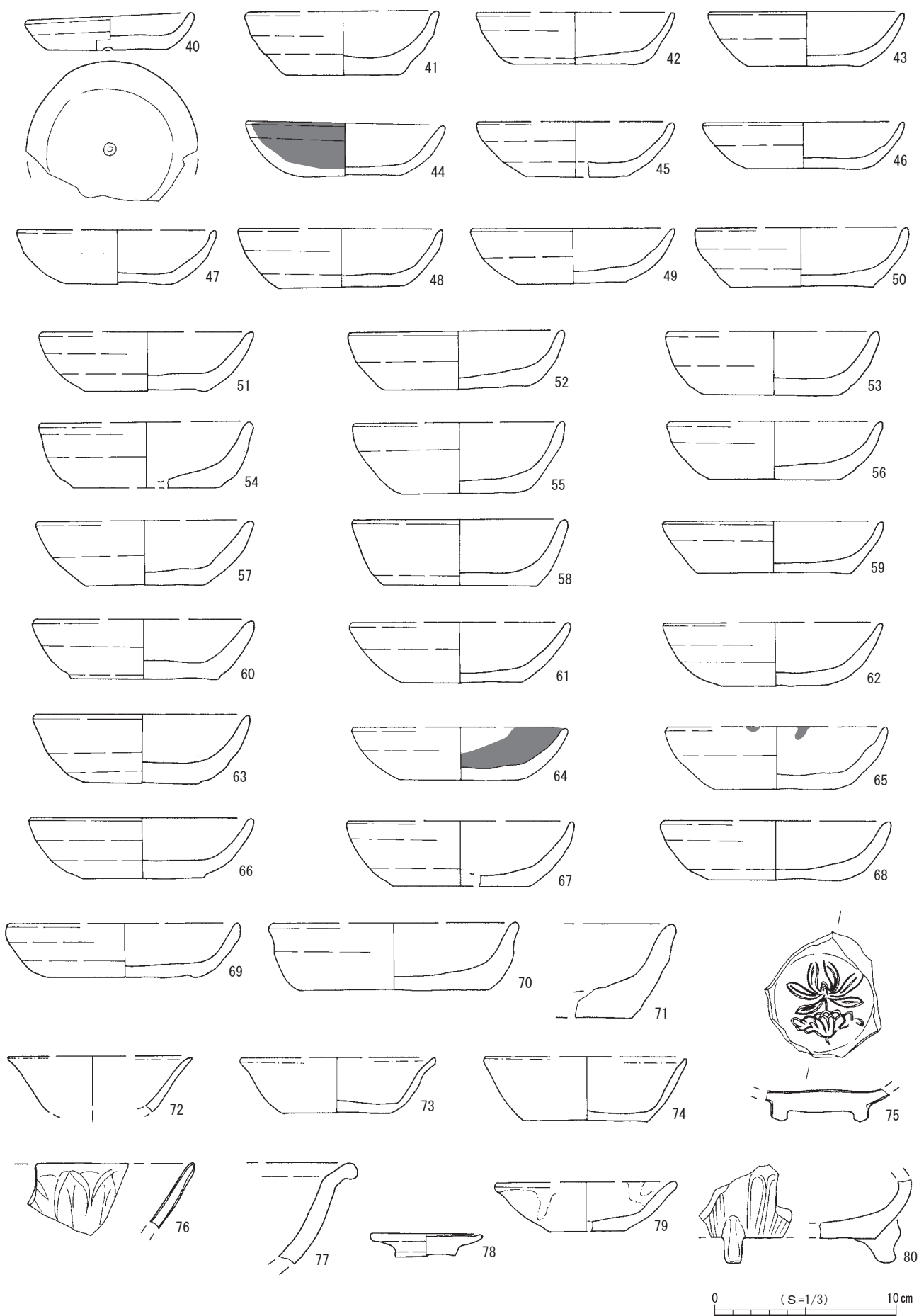


图58 第1面 遺構外出土遺物(2)

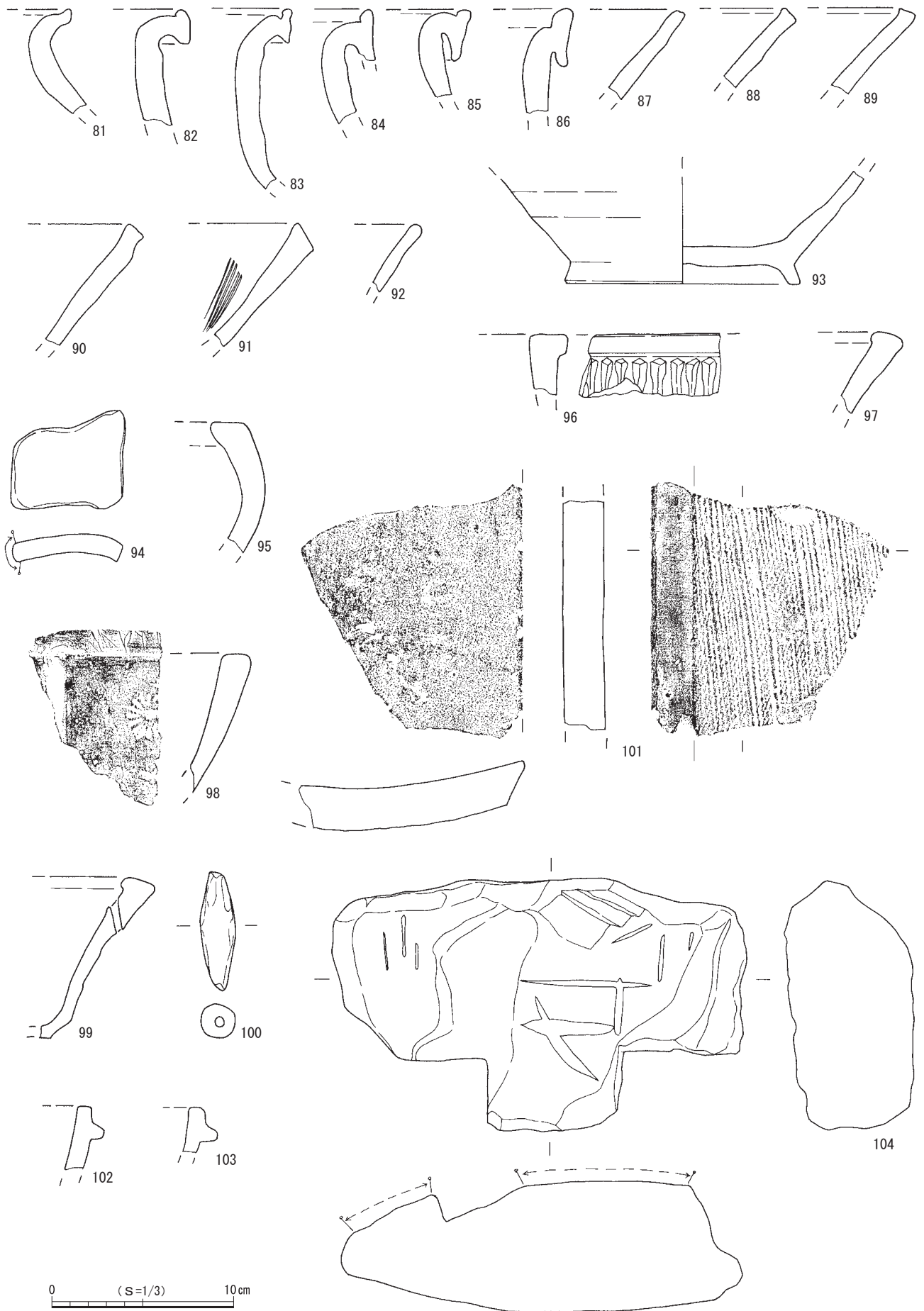


图59 第1面 遺構外出土遺物(3)



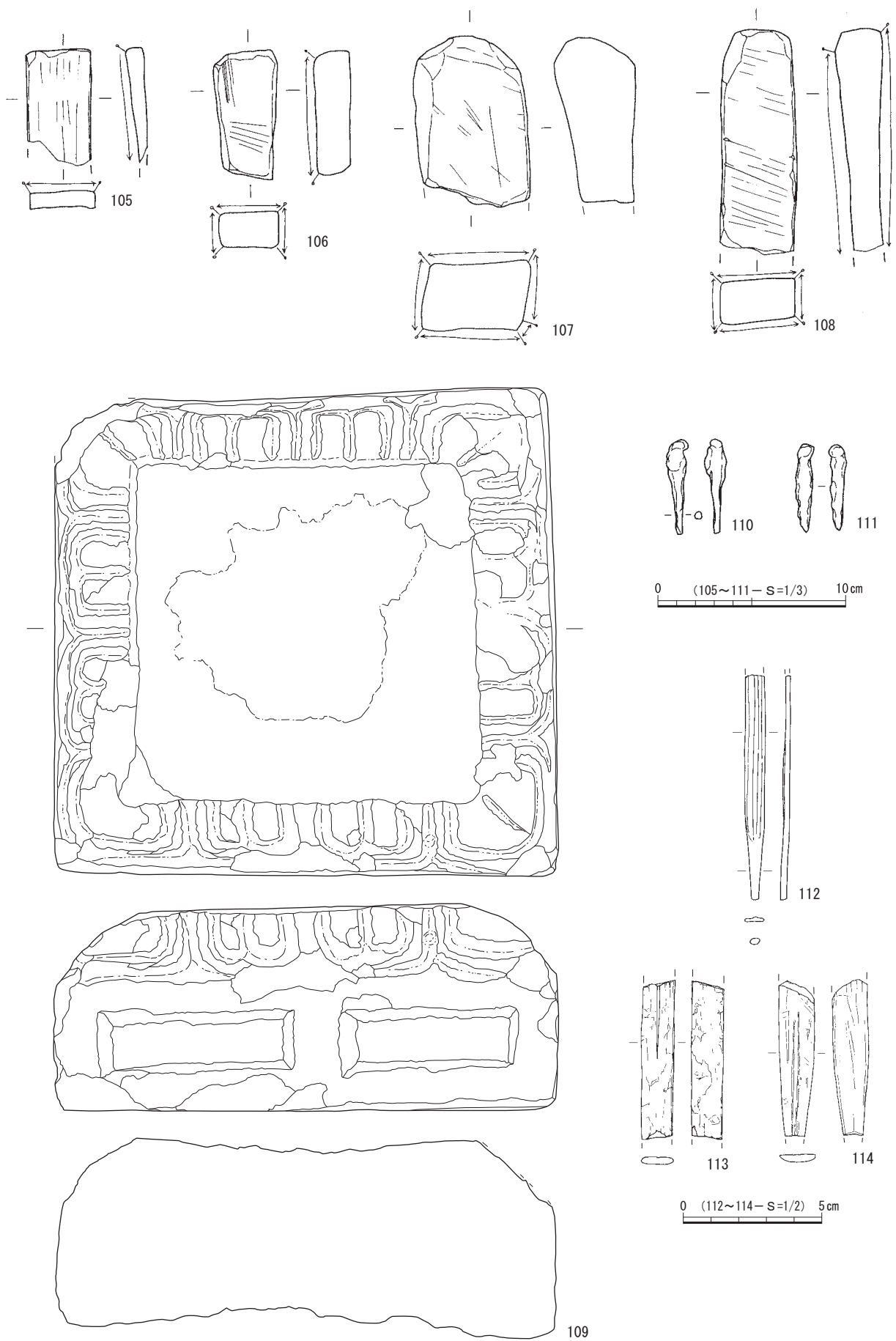


图60 第1面 遺構外出土遺物(4)

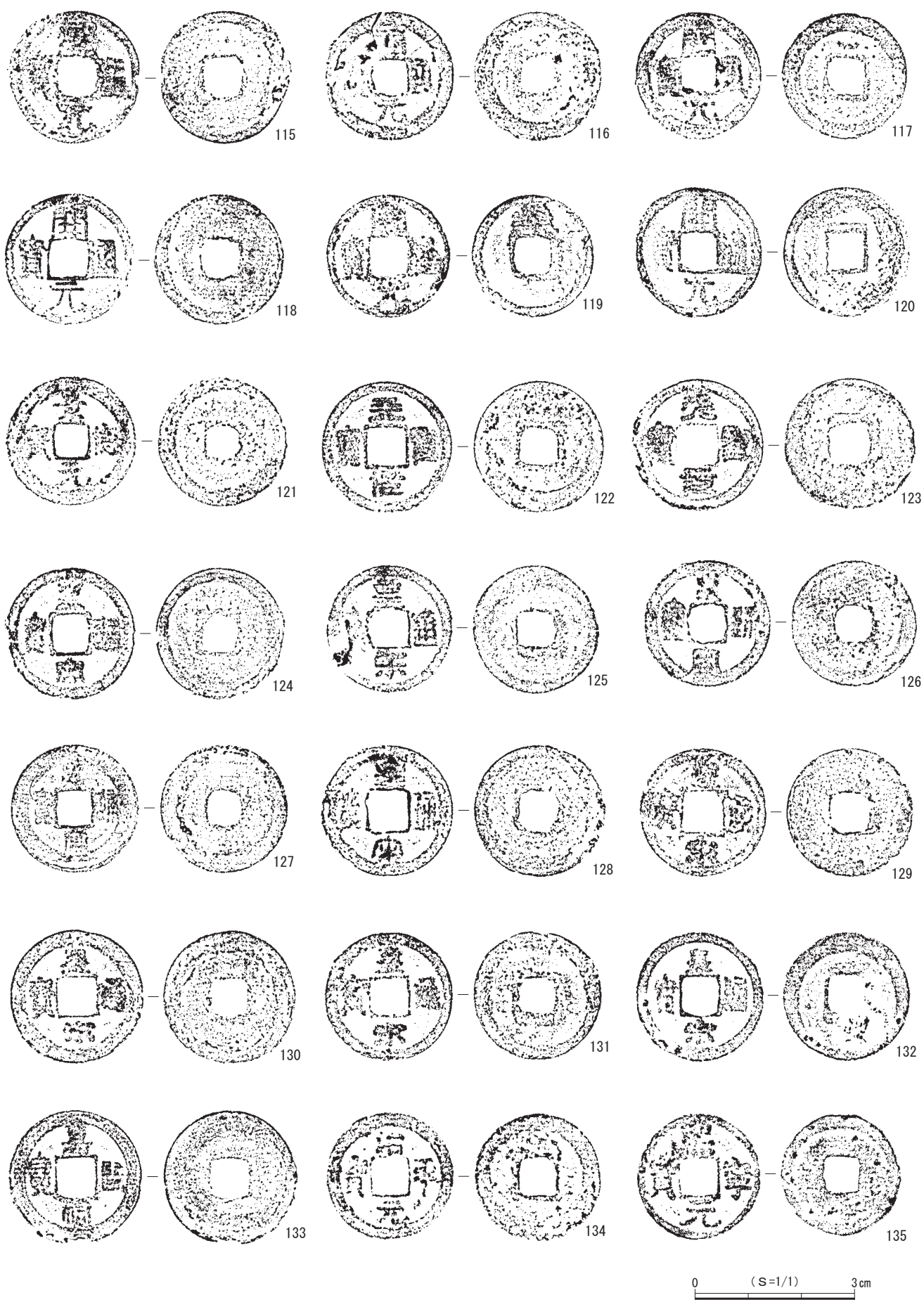


图61 第1面 遺構外出土遺物(5)

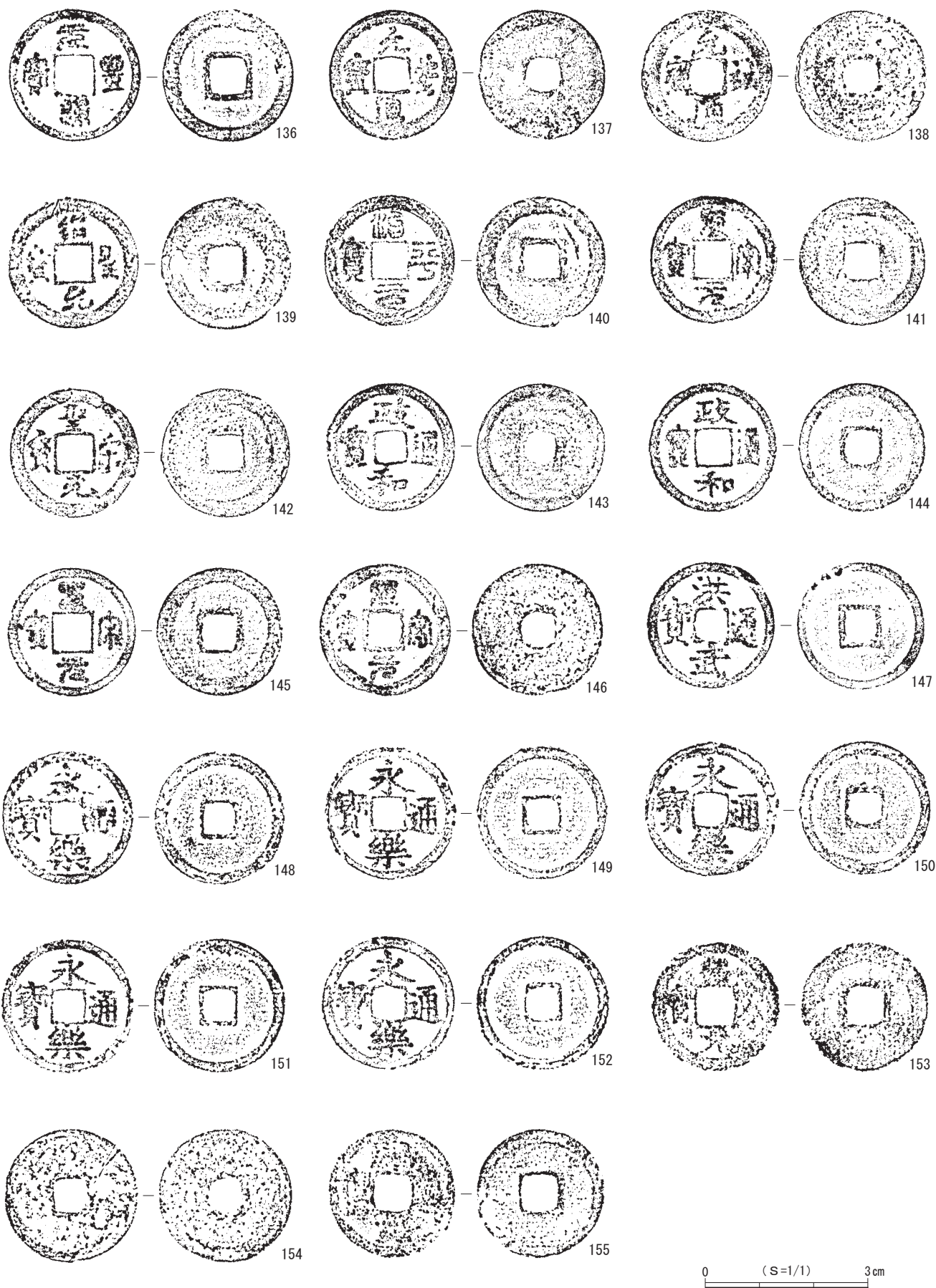


图62 第1面 遺構外出土遺物(6)

## 第2節 第2面の遺構と遺物

土坑墓群の調査の後に、I区では6.72～6.80mの標高で泥岩ブロックを密に含む暗褐色土を検出し、II区では6.60m前後の標高で泥岩による整地面を確認した。この面を当初は第2面として認定したが、上層からの掘り込みの残存が多く、柱穴や礎石などの明確な遺構は確認できなかった。そこで、この土層を掘り下げ、標高6.24～6.29mで砂を含む比較的平坦な暗褐色土層を検出した。この上面で遺構を確認したところ、土坑11基とピット34基を検出し、これらを第2面の遺構として扱った。これらの遺構はI・II区全域に満遍なく分布し、重複するものや調査区外へ延びるものも多い。

出土遺物はかわらけや瀬戸窯産・常滑窯産の陶器類を主とし、それらの年代観から推定すると大枠として14～15世紀に属すると考えられる。

### (1) 土坑

第2面では、I区で5基、II区で6基の合計11基を検出した。調査区外へ延びるものや排水溝によって壊されているものが多く、全体を把握し得た土坑は少ない。平面形は楕円形ないし円形が多く、方形のものは2基と少ない。規模はI区から検出された土坑6が長軸2mを超す大形であるが、他はすべて長軸65～95cmの幅に収まる。確認面からの深さは4～25cmで、全体的に浅いものが多い。覆土中からはかわらけや陶磁器が出土しているが、遺構の性格を示す出土状態は確認できなかった。

### 土坑2 (図65)

I区の北東部に位置し、北側の一部を排水溝で壊されている。西側に土坑6が隣接する。平面形は北東-南西方向に長い楕円形と考えられ、壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸現存長73cm、短軸現存長58cm、深さ5cmで、坑底面の標高は6.16mを測る。主軸方位はN-62°-Eを指す。覆土は地山の砂と木片を少量含んだ暗褐色粘質土である。

#### 出土遺物 (図63)

遺物はかわらけ1点が出土し、図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。かわらけの器形から14～15世紀代の土坑と考えられる。

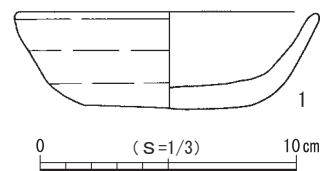


図63 第2面 土坑2出土遺物

### 土坑3 (図65)

I区中央の東壁際に位置し、西側で土坑4と重複し一部を壊している。平面形は略円形で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径65cm、深さ21cmで、坑底面の標高は6.07mを測る。覆土は炭化物と木片、泥岩ブロックをやや多く含む暗褐色土である。

遺物は出土しなかった。

### 土坑4 (図65)

I区中央の東壁寄りに位置し、東側で土坑3、西側で土坑6と重複し、西側半分と東側の一部を壊されている。現存部分から推定すると、平面形は円形と考えられる。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸95cm、短軸現存長34cm、深さ5cmで、坑底面の標高は6.25mを測る。覆土は砂をやや多く含む暗褐色土で、泥岩ブロックの混じりは少ない。



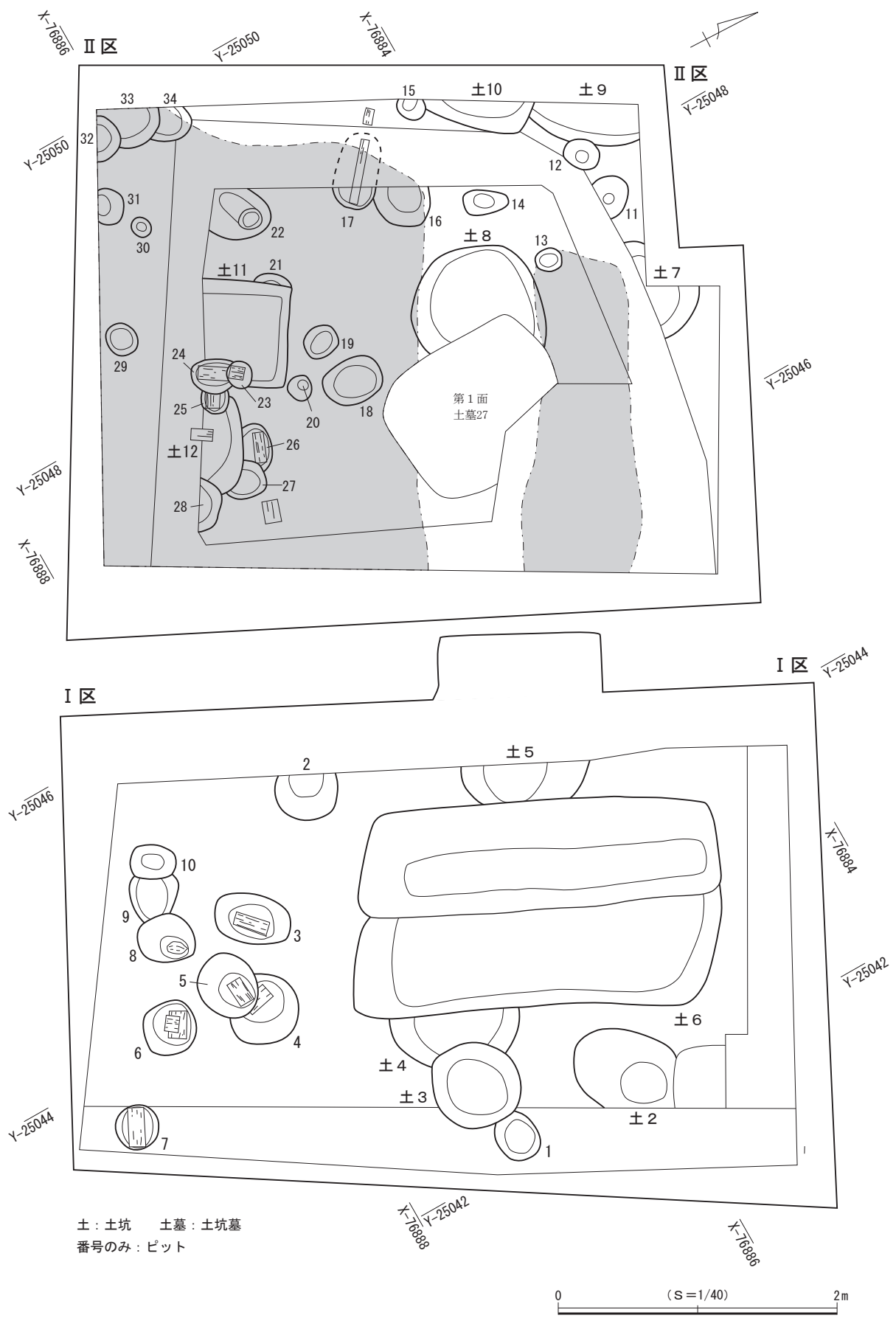


図64 第2面 遺構分布図

遺物はかわらけ1点が出土した。

#### 土坑5 (図65)

I区の北側、西壁際に位置し、全体の約半分が調査区外の西側にある。また、東側で土坑6と重複して東壁の一部を壊されている。現存部分から推定すると、平面形は円形ないし楕円形と考えられ、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は南北現存長93cm、東西現存長42cm、深さ25cmで、坑底面の標高は5.99mを測る。覆土は砂、小泥岩ブロック、炭化物を含む暗褐色土である。また、底面付近から原位置を保っていない礎板状の板材3枚が確認され、板の最上面の標高は6.19mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑6 (図65)

I区の北側中央部に位置し、西側で土坑5、東側で土坑4と重複して両土坑を壊している。平面形は南北に長い長方形で、底面のほぼ中央に南北に縦断する畝状の高まりが認められ、その東西が長方形に低くなる形状を呈している。2基の長方形土坑が並んで構築された可能性もあるが、明確な切り合いが確認できなかったこともあり、ここでは一連の遺構と判断した。壁面は開いて緩やかに立ち上がり、西壁は非常になだらかに傾斜する。南北方向の断面形は皿状を呈する。規模は長軸2.60m、短軸1.50m、深さ23cmで、坑底面の標高は6.07mである。主軸方位はN-26°-Eを指す。

畝状の高まりは底面との比高差が5cmで、断面形はなだらかな山形を呈する。畝状の東側の底面規模は長軸2.20m、短軸65cmで、西側の底面規模は長軸2.18m、短軸33cmを測る。覆土は青灰色砂と木片、木質腐植土を多量に含む暗褐色土である。南側の畝状部上には、上位から掘り込まれた柱穴のものと考えられる礎板が確認されている。礎板は8枚を井桁状に組み、最上部の礎板は東西方向に据えられ上面の標高は6.21mである。

遺物はかわらけ5点、磁器2点、陶器11点が出土した。

#### 土坑7 (図65)

II区の北壁中央に位置し、一部が調査区外の北側へ延びる。南側は排水溝によって壊され、調査し得たのはごく一部である。現存部分から推定すると、平面形は円形と考えられる。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は東西75cm、南北現存長36cm、深さ14cmで、坑底面の標高は6.13mを測る。

遺物は出土しなかった。

#### 土坑8 (図65)

II区中央のやや北寄りに位置する。平面形は略円形と考えられ、東側の一部を土坑墓27に壊されている。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1m、北西-南東93cm、深さ11cm、底面レベル6.15mを測る。覆土は拳大の泥岩をやや多く含む暗褐色土である。上位で確認した泥岩による整地面からの掘り込みか、あるいはその造成に際して埋められた遺構と考えられる。

遺物は出土しなかった。

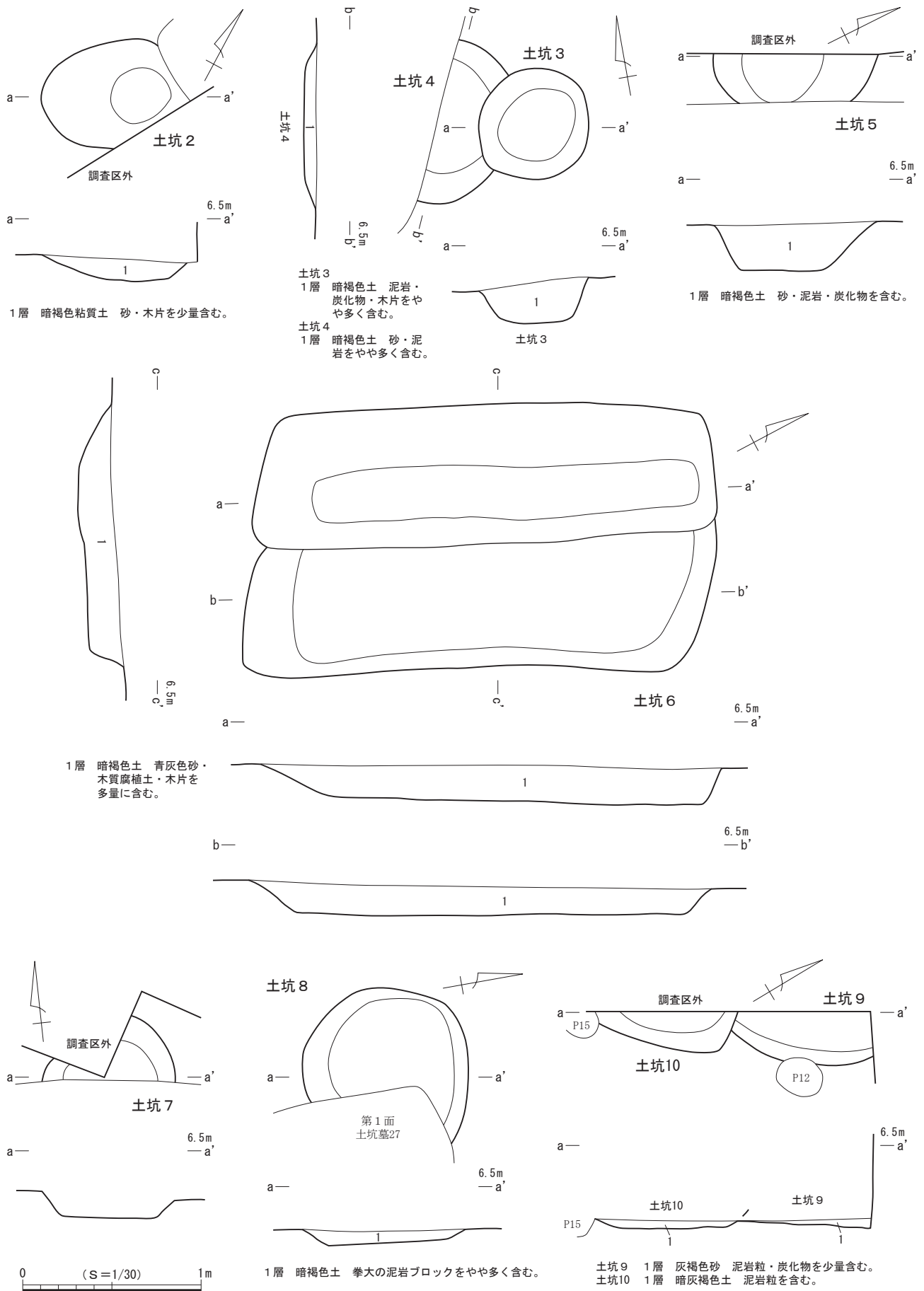


図65 第2面 土坑2～10

### 土坑9 (図65)

Ⅱ区の北西隅に位置し、大半が調査区外の西側に延びている。また、南側で土坑10と重複して壊されており、ごく一部の調査にとどまるため平面形と主軸方位は判然としない。壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は東西30cm、南北79cm、深さ4cmで、坑底面の標高は6.05mを測る。覆土は炭化物と泥岩粒を少量含む灰褐色砂である。

遺物はかわらけ1点が出土した。かわらけの器形から、14～15世紀代の土坑と考えられる。

### 土坑10 (図65)

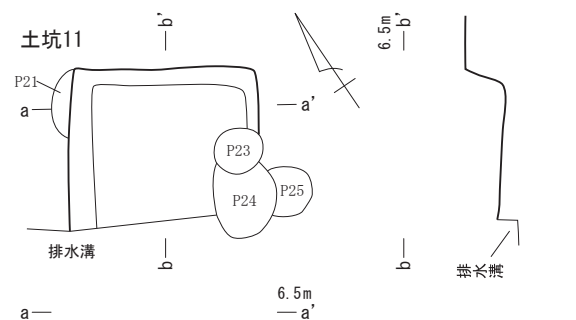
Ⅱ区の北西隅近くに位置し、大半が調査区外の西側に延びている。北側で土坑9と重複し一部を壊している。ごく一部の調査にとどまるため、平面形と主軸方位は判然としない。壁は開いて緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は東西現存長22cm、南北現存長80cm、深さ4cmで、坑底面の標高は6.04mを測る。覆土は泥岩粒を含む暗灰褐色土である。

遺物は陶器1点が出土した。

### 土坑11 (図66)

Ⅱ区中央南側に位置し、北側でピット21を壊し、南側でピット23・24と重複して壊されている。また、南側は調査時の排水溝で壊されており、排水溝の南側で遺構の続きは検出されなかった。平面形は整った方形に近いと考えられ、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長59cm、北西-南東78cm、深さ17cmで、坑底面の標高は6.11mを測る。主軸方位はN-35°-Eを指す。覆土は炭化物小片を多く含んだ灰褐色砂質土で、泥岩ブロックの混じりは少ない。

遺物はかわらけ1点、磁器2点、陶器6点、土器1点が出土した。かわらけの器形から、14～15世紀代の土坑と考えられる。



### 土坑12 (図66)

Ⅱ区南東部に位置し、南側は調査時の排水溝で壊され全体の半分以上が失われている。西側ではピット25、東側ではピット28、北側ではピット26・27と重複し、新旧関係はピット25・28より古く、ピット26・27よりも新しい。平面形は判然としないが、現存部分から推定すると隅丸方形を基調とする。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形と推定される。規模は東西現存長70cm、南北現存長30cm、深さ11cmで、坑底面の標高は6.11mを測る。覆土は、上部が土丹小片と炭化物を多く含む灰褐色粘質土であるが、下部に約20cmの厚さに木質が腐食した明るい茶褐色の土層が堆積している。覆土中から礎板と考

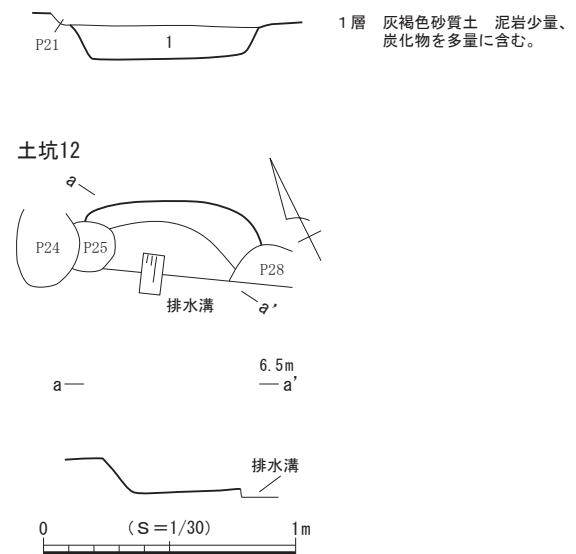


図66 第2面 土坑11・12



られる板材が出土し、上位から掘り込まれたピットに属する遺物と考えられる。

遺物はかわらけ 2 点、磁器 1 点、陶器 6 点が出土した。かわらけの器形から、14～15 世紀代の土坑と考えられる。

## (2) ピット

第 2 面では、I 区で 10 基、II 区で 24 基の合計 34 基を検出した。これらは I・II 区の全域に分布し、特に両区の南側に集中する傾向がある。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は径 17～56cm、深さ 4～32cm とやや幅がある。また、礎板や礎石をもつピットも調査区南側で検出されているが、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピット 31 の覆土は泥岩ブロックと炭を少量含む明褐色土で、ピット 32 は貝片と炭を含む暗褐色砂質土である。

覆土中からはかわらけや鉄釘、陶磁器、瓦質土器、砥石が出土している。

以下、礎板をもつピット 3～7・17・23～26、礎石をもつピット 8 について個別図を掲載し、説明する。

### ピット 3 (図67)

I 区中央の南側に位置し、他の遺構と重複せずに単独で検出した。平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸 56cm、短軸 35cm、深さ 19cm を測る。中央南寄りの底面から 10cm 上方より礎板が 1 枚出土しており、大きさは長さ 25cm、幅 10cm、厚さ 3cm を測る。礎板上面の標高は 6.26m である。覆土は砂を少量含む暗灰色砂質土である。

遺物は鉄製釘 1 点が出土した。

### ピット 4 (図67)

I 区南側に位置し、西側でピット 5 と重複して一部が壊されている。平面形は略円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は径 50cm、深さ 32cm を測る。西壁寄りの底面直上から礎板が 1 枚出土しており、大きさは長さ 20cm、幅 12cm、厚さ 3cm を測る。礎板上面の標高は 6.07m である。覆土は砂を多く含む暗灰色砂質土である。

遺物は出土しなかった。

### ピット 5 (図67)

I 区南側に位置し、東側でピット 4 と重複して一部を壊している。平面形は略円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は径 48cm、深さ 23cm を測る。東壁寄りの底面直上から礎板が 1 枚出土しており、大きさは長さ 18cm、幅 11cm、厚さ 2.5cm を測る。礎板上面の標高は 6.14m である。覆土は木片と炭化物を含む暗褐色土である。

遺物は出土しなかった。

### ピット 6 (図67)

I 区南壁近くに位置し、北側にピット 5 が隣接する。他の遺構と重複せずに単独で検出した。平面形は略円形で、断面形は箱形を呈する。規模は径 39cm、深さ 22cm を測る。北壁寄りから礎板が大小 1 枚ずつ確認され、大は底面直上から、小は底面から 9cm 浮いた状態で出土した。大きさは上方のものが長さ 11cm、幅 10cm、厚さ 1.5cm、下方のものが長さ 20cm、幅 13cm、厚さ 3cm を測る。礎板上面の標高は 6.23m

と6.17mである。覆土は砂をやや多く含む暗褐色土である。

遺物は出土しなかった。

ピット7 (図67)

I区南隅に位置し、北西側にピット6が隣接する。他の遺構と重複せずに単独で検出した。平面形は整つ

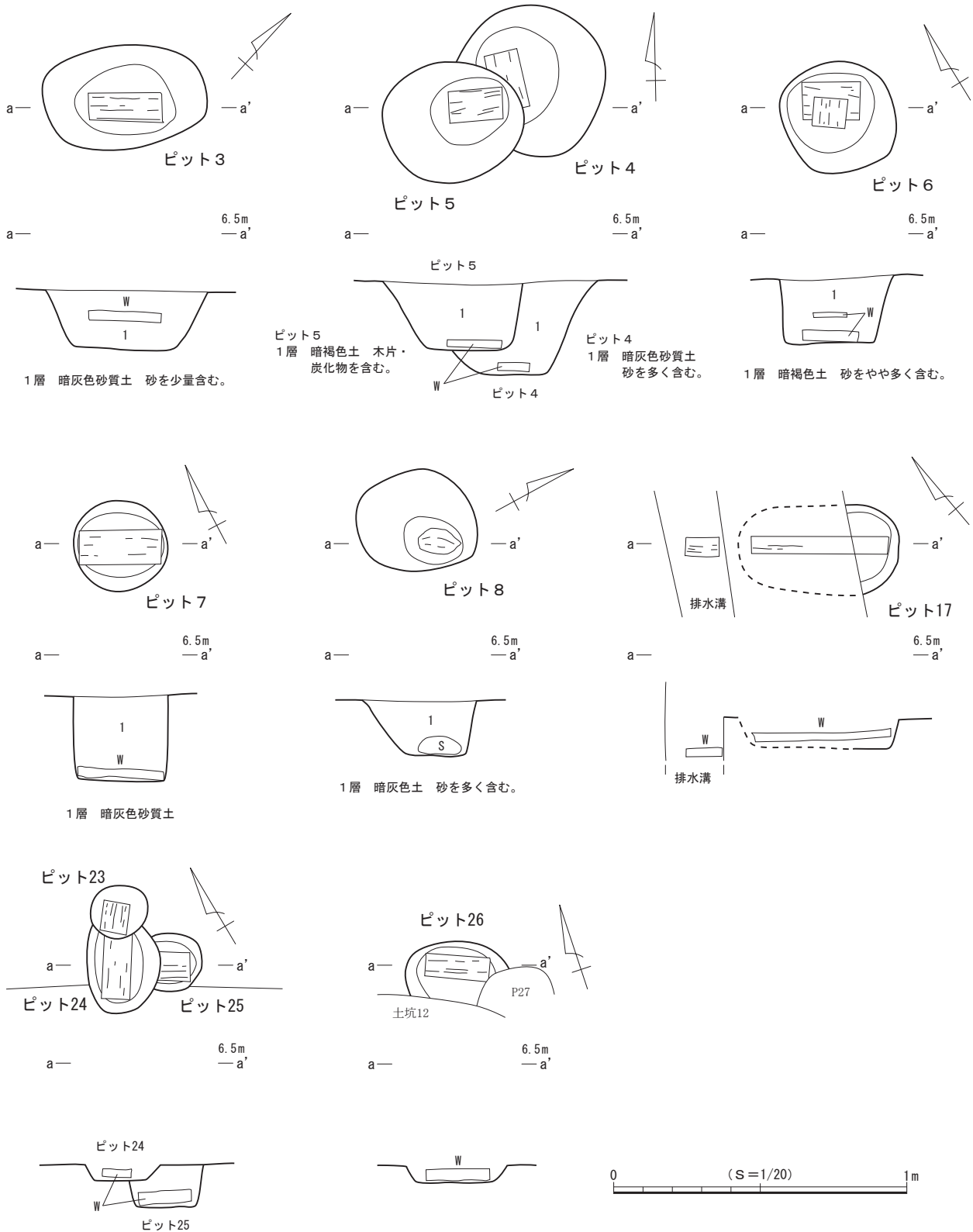


図67 第2面 ピット3～8・17・23～26

た円形で、断面形は箱形を呈する。規模は径32cm、深さ30cmを測る。底面直上から東西の底径にぴったりと収まるように礎板が1枚出土しており、大きさは長さ28cm、幅11cm、厚さ4cmを測る。礎板上面の標高は6.12mで、覆土は暗灰色砂質土である。

遺物は出土しなかった。

#### ピット8 (図67)

I区南壁近くの中央に位置し、西側でピット9と重複して一部を壊している。平面形は略楕円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸41cm、短軸34cm、深さ19cmを測る。西壁寄りの底面直上から礎石が1点出土しており、大きさは長さ15cm、幅8cm、厚さ6cmを測る。礎石上面の標高は6.22mで、覆土は砂を多く含む暗灰色土である。

遺物は出土しなかった。

#### ピット17 (図67)

II区西壁近くの中央に位置し、西側を排水溝によって壊されている。坑底面近くから長い礎板が確認されていることから、平面形は長楕円形と推定され、断面形は逆台形と考えられる。規模は北西-南東方向の現存長16cm、北東-南西30cm、深さ10cmを測る。底面から2~5cm浮いて礎板が1枚出土しており、大きさは長さ70cm、幅10cm、厚さ4cmを測る。礎板上面の標高は6.10mである。なお、この礎板の北西側に隣接して、軸方向を同じくする礎板が1枚出土した。レベルは2cmほど低く、本址との関連は判然としない。

遺物はかわらけ1点、陶器1点が出土した。

#### ピット23 (図67)

II区中央南側に位置し、土坑11とピット24と重複し両遺構の一部を壊している。平面形は円形で、規模は径20cmを測る。西壁寄りから礎板が1枚出土しており、大きさは長さ10cm、幅9cm、厚さ3cmを測る。

遺物は出土しなかった。

#### ピット24 (図67)

II区中央南側に位置し、北側でピット23、東側でピット25と重複し、時期はピット23よりも古く、ピット25よりも新しい。平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長30cm、短軸25cm、深さ4cmを測る。中央やや西寄りのほぼ底面上から礎板1枚が出土しており、大きさは長さ22cm、幅9cm、厚さ3cmを測る。礎板上面の標高は6.14mである。

遺物は出土しなかった。

#### ピット25 (図67)

II区南側に位置し、東側で土坑12、西側でピット24と重複し、時期はピット24よりも古く、土坑12よりも新しい。平面形は円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は径20cm、深さ14cmを測る。南西壁寄りの底面上から礎板が1枚出土しており、大きさは長さ18cm、幅9cm、厚さ4cmを測る。礎板上面の標高は5.86mで、他のピットに伴う礎板よりもやや低い位置から検出されている。

遺物は出土しなかった。

### ピット26 (図67)

Ⅱ区南側に位置し、東側でピット27、南側で土坑12と重複し一部が壊されている。平面形は円形ないし楕円形と推定され、断面形は皿状を呈する。規模は東西現存長35cm、南北現存長21cm、深さ5cmを測る。北壁寄りから1枚の礎板が出土しており、大きさは長さ22cm、幅8cm、厚さ4cmを測る。礎板上面の標高は6.15mを測る。

遺物は磁器1点、陶器1点、瓦質土器1点が出土している。

### ピット出土遺物 (図68)

各ピットからは少量ながら遺物が出土し、そのうち5点を図示した。他のピット出土遺物については、出土遺物一覧表 (表6) を参照されたい。

1はピット27から出土したロクロ成形によるかわらけである。口縁部に煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。2はピット33から出土した常滑窯産の甕で5型式に分類される。3はピット22から出土した山茶碗窯系の片口鉢、4はピット34から出土した山茶碗窯系の片口鉢、5はピット3から出土した鉄製釘である。

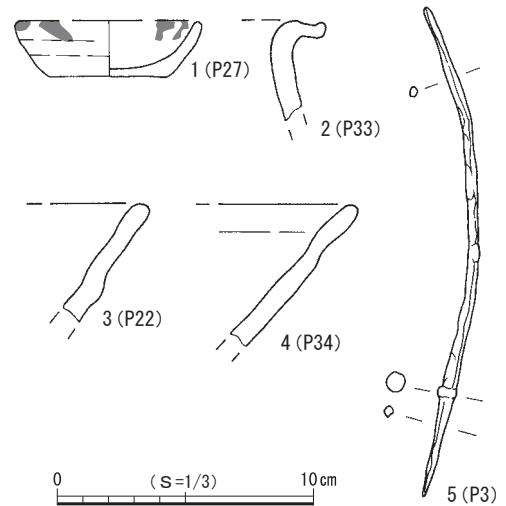


図68 第2面 ピット出土遺物

### (3) 遺構外出土遺物 (図70・71)

第2面では、遺構以外からも多くの遺物が出土し、このうち33点を図示した。

1～20はかわらけ類で、すべてロクロ成形によるかわらけである。1・4・7・19には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。21は瀬戸窯産の卸皿、22は瀬戸窯産の水注である。23は常滑窯産の片口鉢Ⅰ類、24・25は山茶碗窯系の片口鉢である。26は瓦質土器の火鉢、27は石臼である。28は木製の櫛、29は漆器椀である。30は骨製の筭である。31～33は銭貨で、31は祥符元寶 (北宋・1008)、32は元祐通寶 (北宋・1086)、33は元符通寶 (北宋・1098) である。

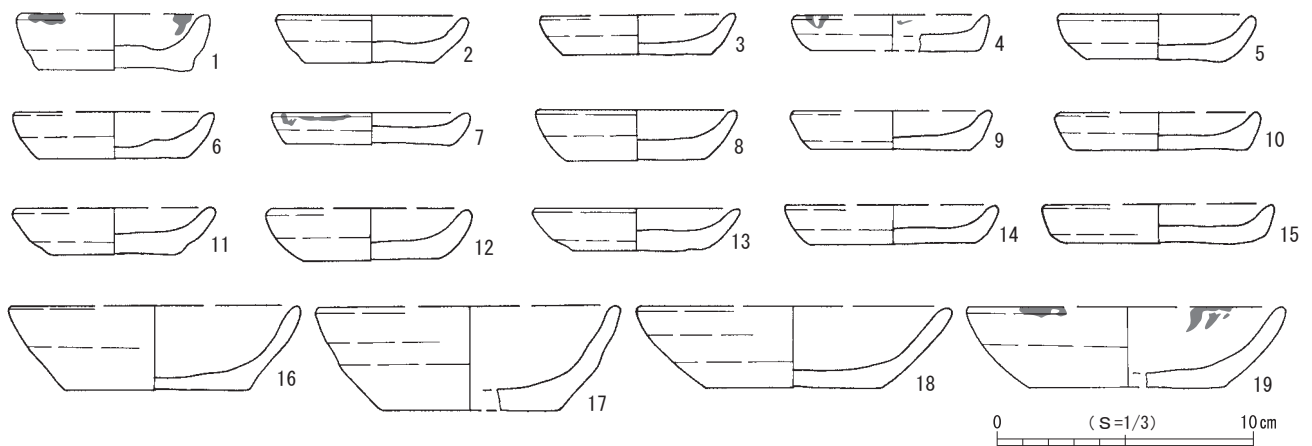


図69 第2面 遺構外出土遺物 (1)



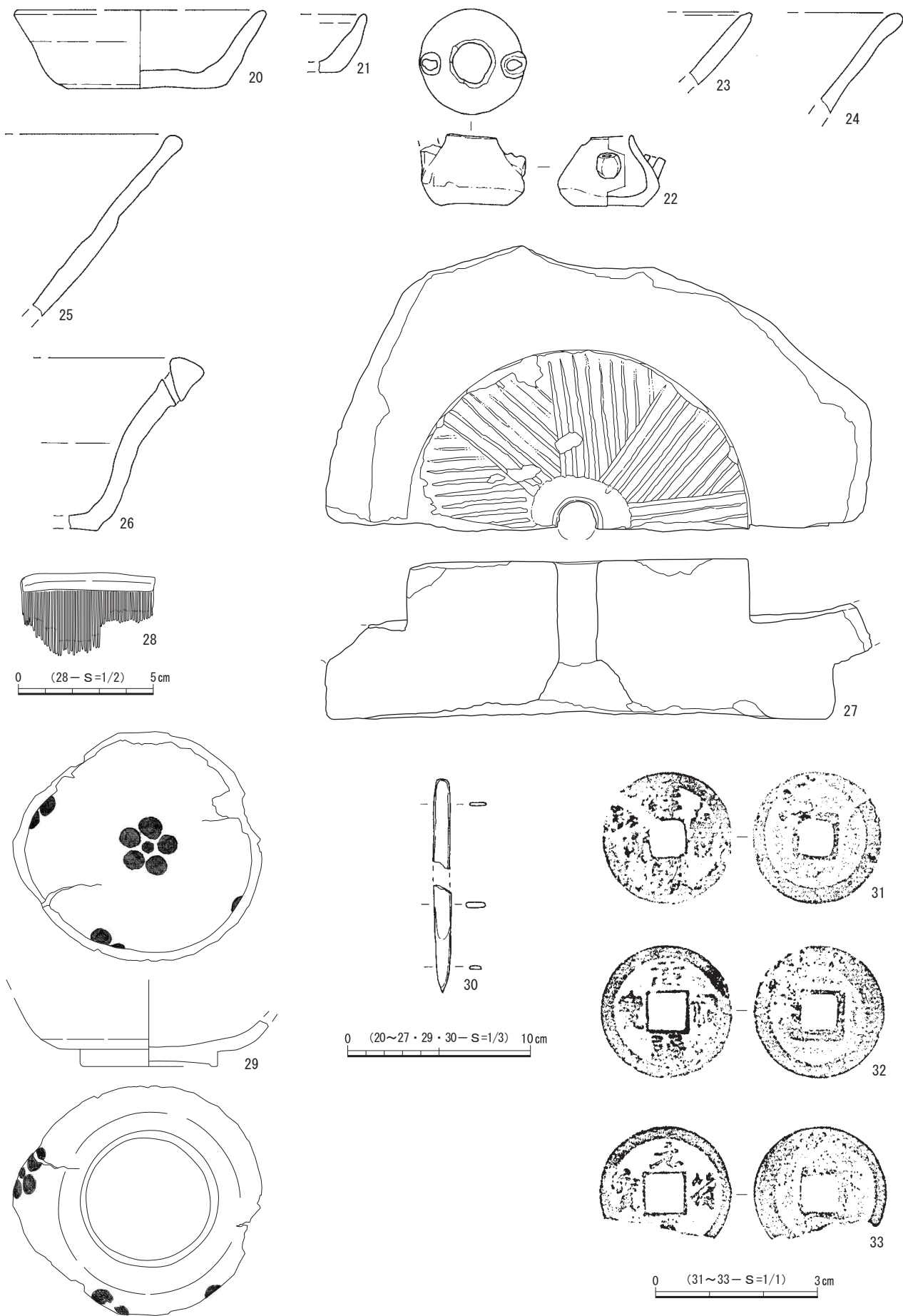


图70 第2面 遺構外出土遺物(2)

## 第四章 自然科学分析

### 第1節 能蔵寺跡出土の人骨

長岡朋人、星野敬吾、清家大樹、平田和明  
聖マリアンナ医科大学解剖学講座

#### はじめに

能蔵寺跡は鎌倉市材木座二丁目に所在し、2006年の鎌倉市教育委員会の発掘調査によって土坑墓から人骨が出土した。近隣には材木座遺跡や由比ヶ浜南遺跡、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡等の中世遺跡があり、本遺跡はこれらの遺跡の東側に位置する。年代はかわらけから戦国時代から江戸時代前期と推定され、これまで調査された鎌倉市の中世遺跡より年代が新しい。能蔵寺跡から出土した人骨は鎌倉市出土人骨の形態学的、古病理学的特徴の地域的な時代変化を探ることができる貴重な資料である。今回、出土人骨の人類学的鑑定を行ったので報告する。

#### 観察方法

人骨の死亡年齢の推定は、腸骨耳状面 (Buckberry and Chamberlain, 2002)、恥骨結合面 (Brooks and Suchey, 1990; Sakaue, 2006)、歯の形成・萌出 (Ubelaker, 1989) と咬耗 (Lovejoy, 1985)、四肢長骨の骨幹長 (Scheuer, 1980) と四肢長骨・寛骨の骨端軟骨の骨化 (Brothwell, 1981) に基づいた。ここで未成人と成人の境界を性別判定が可能になる15歳とし、歯の形成・萌出や骨端軟骨の骨化によって総合的に判断した。

成人の性別判定は、頭蓋における項稜・乳様突起・眼窩上縁・眼窩上隆起・オトガイ隆起の発達の5つの特徴 (Walker, 2008)、寛骨における腹側弧・恥骨下陥凹・恥骨下枝内側面隆起 (Phenice, 1969)、耳状面前溝・大坐骨切痕の輪郭・大坐骨切痕弧と耳状面前縁の重なり・寛骨下端・坐骨恥骨示数の5つの特徴 (Bruzek, 2002) に基づいた。骨の計測はマルチン法 (Martin and Knussmann, 1988; 馬場, 1991) に従った。推定身長は、藤井 (1960) の日本人に基づく身長推定式により、右大腿骨最大長から算出した。

#### 人骨の保存状態

人骨の保存状態は不良であり、骨に強固に付着した泥状の土が乾燥・硬化し、その結果顔面頭蓋のほとんどが破損し観察ができない状態であった。本人骨の状態は、保存良好な人骨が砂中から発掘された由比ヶ浜南遺跡や由比ヶ浜中世集団墓地遺跡と対照的であった。

#### 出土人骨の構成 (表1)

人骨は解剖学位置を保って単体で埋葬されていた。混入人骨片を除くと、出土人骨の個体数は45体であった。そのうち未成人8体 (17.8%)、成人37体 (82.2%) であり、8割以上は成人であった。また、成人は男性4体 (10.8%)、女性31体 (83.8%)、不明2体 (5.4%) であり、大部分が女性であった。

#### 頭蓋形態

頭蓋底や顔面頭蓋は破損していた。女性の脳頭蓋最大長は177.6mm (15体、標準偏差4.1mm)、脳頭蓋最大幅は138.4mm (14体、標準偏差4.6mm)、頭蓋長幅示数は78.2 (14体、標準偏差3.8) であり中頭に分類された。

能蔵寺跡の頭蓋長幅示数は由比ヶ浜南遺跡(75.4)や極楽寺遺跡(75.2)(長岡ほか, 2006)に比べると大きかったが有意差はなかった( $P>0.05$ )。

### 推定身長

右大腿骨最大長から平均身長を求めた結果、男性は155.2cm(2体)、女性は148.5cm(13体、標準偏差2.6cm)であった。女性の身長は由比ヶ浜南遺跡(女性147.3cm)(長岡ほか, 2008)と同程度であったが、材木座遺跡(144.9cm)より高身長であった( $P<0.05$ )。

### 齲齒率・生前喪失歯率

能蔵寺跡の齲齒率は12.9%(45/348)、生前喪失歯率は17.7%(75/423)であった。齲齒率は材木座遺跡(5.5%)(佐倉, 1964)( $P<0.01$ )、由比ヶ浜南遺跡(9.5%)(Oyamada et al., 2007)( $P<0.05$ )より、生前喪失歯率は由比ヶ浜南遺跡(3.7%)(Oyamada et al., 2007)( $P<0.01$ )より有意に高かった。

### ストレスマーカー

能蔵寺跡のエナメル質減形成の割合は上顎中切歯で58.5%(24/41)、下顎犬歯で85.7%(24/28)であり、クリブラ・オルビタリアの割合は28.6%(6/21)であった。江戸時代の一橋高校遺跡と比較すると、エナメル質減形成の割合は上顎中切歯では57.8%、下顎犬歯では83.6%であり(澤田, 2010)、クリブラ・オルビタリアの割合は36.3%で(Hirata, 1990)、いずれも有意な集団差を認めなかった。

### 陥没骨折

女性1体(土坑墓13出土人骨)の右頭頂骨に2箇所陥没骨折を認めた。これらは右頭頂骨の矢状縫合隣接部に前後に並んでおり、前方は直径が約30mmの円形、後方は直径が約20mmの円形の陥没である。陥没部の周縁は滑らかで小孔を認めたため受傷後の治癒が推察された。

### 考察

中世日本人の頭蓋形態の研究は、当時の人々の姿かたちを明らかにし、日本人の身体形質の時代的な移り変わりを理解する手がかりになる。中世人の頭蓋形態の本格的な研究は、鈴木ほか(1956)の鎌倉材木座遺跡出土人骨の報告が最初であり、中世人の長頭・低顔・歯槽性突顎という特徴が明らかになるとともに、その特徴が他の時代には認められないほど顕著であることが分かった。鈴木ほか(1956)は、中世人の形態学的特徴がアイヌなど他の人類集団との置換・混血を原因とせず、食生活などの環境要因で説明できると考えた。その後、古墳時代人から江戸時代人への遺伝的連続性が頭蓋形態(Suzuki, 1969; Dodo and Ishida, 1990, 1992; Pietrusewsky, 1999, 2004)や歯冠形態(Matsumura, 1994)の諸特徴から確認され、材木座遺跡から出土した中世人頭蓋(鈴木ほか, 1956)は、古墳時代から中世、そして江戸時代への遺伝的な連続性のもとで、他の時代に見られないほどの特異的な特徴を示したことになる。さらに、Suzuki(1969)は、中世人骨の研究成果に基づき、短頭化現象を例として歴史時代の日本人頭蓋にも大きな時代変化があったことを明らかにした。

鈴木ほか(1956)の研究の後、各地の中世遺跡から人骨の出土が続き、中世人の著しい長頭・低顔・歯槽性突顎は追加資料によって確認された(e.g. 内藤, 1971・1973・1975・1978a・1978b; 森本・平本, 1978; 池田・多賀谷, 1979; 中橋・永井, 1985; 池田, 1986・1996; 佐熊, 1989; 鈴木, 1963・1989・

1998；Suzuki, 1969；安部, 2002；松下, 2002)。中橋・永井(1985)や佐熊(1989)は、西日本の中世人頭蓋の研究に基づき、他地域と材木座遺跡の頭蓋の形態学的特徴が類似することを示した。その共通する特徴は、「中世人的特徴の汎日本性」(中橋・永井, 1985)と表現された。このように、頭蓋計測的特徴からみていずれの中世人も共通する特異性を持つが、中世人は均質と言えるのだろうか、重要な命題である。

そこで頭蓋形態を能蔵寺跡と他の遺跡と比較した。能蔵寺跡の年代は中世の終わりから近世であり、鎌倉の人々が中世の間にどのように形態を変化させてきたかを探るには重要な資料である。比較資料は鎌倉市由比ヶ浜南遺跡、中世集団墓地遺跡(372地点)、極楽寺遺跡、東京都鍛冶橋遺跡、丸の内遺跡から出土した中世人骨、東京都一橋高校から出土した江戸時代人骨である。自家資料と比較資料はともに女性頭蓋である。結果、能蔵寺跡は他と比べて脳頭蓋最大幅が大きく、より短頭であった(図1・2)。図3は脳頭蓋最大長と脳頭蓋最大幅の散布図であるが、能蔵寺跡は脳頭蓋最大幅が大きい点で中世人骨よりも江戸時代人骨に類似していた。以上、能蔵寺跡の人骨は短頭化が見られる点で中世鎌倉の人々と異なる。

注目すべきことに、頭蓋計測の結果は他の部位の観察においても支持される。すなわち、能蔵寺跡の齲歯率や生前喪失歯率は高く、女性の身長はやや高いことから、これらに関しても能蔵寺跡と中世鎌倉の人々との違いが認められた。能蔵寺跡は中世の後半から江戸時代初期に属し、他の鎌倉の人骨より年代が新しい。本研究の結果は、鎌倉の人々は中世の間に形態学的・古病理学的特徴を大きく変化させてきたことを示す事例である。

## まとめ

(1) 出土人骨の個体数は45体であった。そのうち未成人8体、成人37体であった。また、成人は男性4体、女性31体、不明2体であった。

(2) 女性の頭蓋長幅示数は78.2であり中頭に分類された。また、右大腿骨に基づく成人の平均推定身長は男性が155.2cm、女性が148.5cmであった。

(3) 特殊所見として、1体の成人女性に陥没骨折を認めた。

## 謝辞

人骨の整理にお力添えをいただいた聖マリアンナ医科大学解剖学講座水嶋崇一郎氏、聖マリアンナ医科大学医学部生飯野綾香氏、山口こと葉氏、押方悠仁氏に感謝を申し上げます。

## 文献

安部みき子(2002) 西庄遺跡出土の人骨について. 西庄遺跡発掘調査報告書, 和歌山県文化財センター, 和歌山, pp. 329-350.

馬場悠男(1991) 人類学講座別巻1 II人骨計測法. 雄山閣出版, 東京.

Brooks S. and Suchey J.M. (1990) Skeletal age determination based on the os pubis: a comparison of the Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. *Human Evolution*, 5: 227-238.

Brothwell D.R. (1981) *Digging up bones*. Cornell University Press, Ithaca.

Bruzek J. (2002) A method for visual determination of sex using the human hip bone. *American Journal of Physical Anthropology*, 117: 157-168.

Buckberry J.L. and Chamberlain A.T. (2002) Age estimation from the auricular surface of the ilium: a revised method. *American Journal of Physical Anthropology*, 119: 231-239.



- Dodo Y. and Ishida H. (1990) Population history of Japan as viewed from cranial nonmetric variation. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 98: 269-287.
- Dodo Y. and Ishida H. (1992) Consistency of nonmetric cranial trait expression during the last 2,000 years in the habitants of the central islands of Japan. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 100: 417-423.
- 藤井明 (1960) 四肢長骨の長さとの身長の関係について. 順天堂大学体育学部紀要, 3: 49-61.
- Hirata K. (1990) Secular trend and age distribution of cribra orbitalia in Japanese. *Human Evolution*, 5: 375-385.
- 池田次郎 (1986) 奈良県榛原能峠遺跡出土の人骨について. 能峠遺跡群 I (南山編), 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告, 第48冊, 奈良県立橿原考古学研究所, 奈良, pp. 235-247.
- 池田次郎 (1996) 吹田市五反島遺跡出土の平安時代と推定される人骨について. 吹田市五反島遺跡発掘調査報告書自然科学編, 吹田市教育委員会, 39-62.
- 池田次郎・多賀谷昭 (1979) 刀痕のある中世人頭蓋について. 人類学雑誌, 87: 347-351.
- Lovejoy C.O. (1985) Dental wear in the Libben population: its functional pattern and role in the determination of adult skeletal age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68: 47-56.
- Matsumura H. (1994) A microevolutionary history of the Japanese people from a dental characteristics perspective. *Anthropological Science*, 102: 93-118.
- Martin R. and Knussmann R. (1988) *Anthropologie. Band I.* Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 松下孝幸 (2002) 鎌倉市由比ヶ浜南遺跡集骨墓出土中世人骨の埋葬と個体数および受傷人骨. 由比ヶ浜南遺跡発掘調査団編, 由比ヶ浜南遺跡 (第3分冊・分析編 I), 由比ヶ浜南遺跡発掘調査団, 鎌倉市教育委員会, 鎌倉, pp. 101-134.
- 森本岩太郎・平本嘉助 (1978) 鎌倉市長勝寺遺跡出土人骨について. 長勝寺遺跡, 長勝寺遺跡発掘調査団, 鎌倉市教育委員会, 鎌倉, pp. 152-163.
- 内藤芳篤 (1971) 西北九州出土の弥生時代人骨. 人類学雑誌, 79: 236-248.
- 内藤芳篤 (1973) 人骨. 尾窪一熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査. 熊本県文化財調査報告, 第12集, 熊本県教育委員会, 熊本, pp. 62-78.
- 内藤芳篤 (1975) 塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨について. 熊本県文化財調査報告, 第16集, 熊本県教育委員会, 熊本, pp. 317-321.
- 内藤芳篤 (1978a) 杉谷遺跡出土の中世人骨. 大園山, 杉谷遺跡. 熊本県荒尾市文化財報告, 第3集, 荒尾市, pp. 116-122.
- 内藤芳篤 (1978b) 立石貝塚, 宇佐市大字立石所在の縄文時代貝塚. 大分県文化財調査報告, 第31集, 大分県教育委員会, 大分, pp. 39-45.
- 長岡朋人・平田和明・大平里沙・松浦秀治 (2008) 鎌倉市由比ヶ浜南遺跡から出土した中世人骨の身長推定. *Anthropological Science (Japanese series)*, 116: 25-34.
- 長岡朋人・静島昭夫・澤田純明・平田和明 (2006) 中世日本人の頭蓋形態の変異. *Anthropological Science (Japanese series)*, 114: 139-150.
- 中橋孝博・永井昌文 (1985) 山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨. 下関市教育委員会編, 吉母浜遺跡, 下関市教育委員会, 下関, pp. 154-225.
- Oyamada J., Igawa L., Kitagawa Y., Manabe Y., Kato K., Matsushita T., and Rokutanda A. (2007) Low AMTL ratios in medieval Japanese dentition excavated from the Yuigahama-minami site in Kamakura. *Anthropological Science*, 115: 35-45.
- Phenice T.W. (1969) A newly developed visual method of sexing the os pubis. *American Journal of Physical Anthropology*, 30: 297-301.
- Pietrusewsky M. (1999) A multivariate craniometric study of the inhabitants of the Ryukyu Islands and comparisons with cranial series from Japan, Asia, and the Pacific. *Anthropological Science*, 107: 255-281.
- Pietrusewsky M. (2004) Multivariate comparisons of female cranial series from the Ryukyu Islands and Japan. *Anthropological Science*, 112: 199-211.

- Sakaue K. (2006) Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese skeletal material. *Anthropological Science*, 114: 59-64.
- 佐熊正史 (1989) 中世九州人頭蓋の人類学的研究. 長崎医学会雑誌, 61: 4-21.
- 佐倉朔 (1964) 日本人における齲齒頻度の時代的推移. 人類学雑誌, 71: 53-177.
- 澤田純明 (2010) エナメル質減形成からさぐる縄文・弥生時代人の健康状態. 考古学ジャーナル, 606: 33-37.
- Scheuer J.L., Musgrave J.H., Evans S.P. (1980) The estimation of late fetal and perinatal age from limb bone length by linear and logarithmic regression. *Annals of Human Biology*, 7: 257-265.
- 鈴木尚・渡辺仁・岩本光雄・増田昭三・稲本直樹・三上次男・林都志夫・田邊義一・佐倉朔・香原志勢 (1956) 鎌倉市材木座発見の中世遺跡とその人骨. 日本人類学会編, 岩波書店, 東京, pp. 1-74.
- 鈴木尚 (1963) 日本人の骨. 岩波書店, 東京.
- Suzuki H. (1969) Microevolutional change in the Japanese population from the prehistoric age to the present day. *Journal of Faculty of Science, University of Tokyo, Section V-Anthropology, Volume 3, Part 4*: 279-309.
- 鈴木尚 (1989) 沼津市千本浜の首塚と関東地方の中世日本人頭骨. 人類学雑誌, 97: 23-37.
- 鈴木尚 (1998) 骨が語る日本史. 学生社, 東京.
- Ubelaker D.H. (1989) *Human Skeletal Remains. Excavation, Analysis, Interpretation* (2nd edition). Aldine, Chicago.
- Walker P.L. (2008) Sexing skulls using discriminant function analysis of visually assessed traits. *American Journal of Physical Anthropology*, 136: 39-50.

付表1 出土人骨一覧

遺構番号	残存部位	混入	性別	年齢	身長 (cm)	頭蓋長幅示数
土墓1	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨	乳歯1点の混入がある。	男性	35~54歳	154.7	
土墓2	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	55歳以上		75.0
土墓3	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	55歳以上	148.9	73.7
土墓4	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、足骨		女性	55歳以上		
土墓5	下顎骨、歯、椎骨、肋骨、右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨、足骨		女性	55歳以上		
土墓6	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	15~19歳		77.3
土墓7	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	15~34歳	145.0	82.6
土墓8	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、右腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	15~34歳	144.4	78.5
土墓9	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	55歳以上	150	79.9
土墓10	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左尺骨、左寛骨、左右大腿骨、左脛骨、足骨		女性	55歳以上		
土墓11	椎骨、左尺骨、左右橈骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨 頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、右腕骨、右橈骨、左右尺骨、手骨	上腕骨、左尺骨が重複する。	女性 不明	15~34歳 成人	150.8	
土墓12	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、右橈骨、左右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨		女性	35~54歳	148.3	
土墓13	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、手骨、右大腿骨		女性	15~34歳		79.1
土墓14	頭蓋、下顎骨、椎骨、肋骨、手骨		女性	成人		
土墓15	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右不明腓骨2本、足骨		女性	55歳以上		74.7
土墓16	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	35~54歳	151.1	71.2
土墓17	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左大腿骨		男性	成人		79.6
土墓18	肋骨、左肩甲骨、左鎖骨、左腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	35~54歳		
土墓19	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、右腕骨、左右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		不明	12~14歳		
土墓20	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨	乳歯の混入がある。	女性	55歳以上	143.9	79.9
土墓21	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨、足骨	他に腸骨稜とY字軟骨が未癒合の右腸骨が混入している。	女性	15~34歳	147.3	
土墓22-A	頭蓋、椎骨、右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	35~54歳		
土墓22-B	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	35~54歳	150.6	82.5
土墓23	椎骨、左腕骨、左橈骨、左尺骨、左右寛骨、左大腿骨、左脛骨、足骨		女性?	35~54歳		
土墓24	椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	15~34歳	149.7	
土墓25	左右寛骨、足骨		男性	35~54歳		
土墓26	頭蓋、歯		女性	成人?		76.8
土墓27	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	15~34歳		
埋人1	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左鎖骨、左右上腕骨、右大腿骨、左右脛骨		女性	成人		85.5
埋人2	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、右肩甲骨、右鎖骨、右腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、右寛骨、左右大腿骨、左脛骨、足骨		女性	15~34歳		
埋人3	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨、足骨		女性	35~54歳		
埋人4	下顎骨、椎骨、左右肩甲骨、左右不明上腕骨		不明	成人		
埋人5	椎骨、肋骨、左腕骨、左右橈骨、右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		女性	35~54歳	149.7	
埋人6	頭蓋、下顎骨、歯		不明	1.5歳		
埋人7	左橈骨、左尺骨		不明	0歳		
埋人8	左寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右不明腓骨		女性	55歳以上	151.2	
埋人9	左大腿骨、左脛骨		不明	未成人		
埋人10	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨	右大腿骨骨体が2体分重複する。	女性	15~34歳	150.9	77.8
埋人11	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、左肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左脛骨	下顎骨が混入する。	不明	12~14歳		
埋人12	椎骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨	成人の足骨1点が混入する。	不明	5歳		
埋人13	頭蓋、下顎骨、歯		不明	1.5歳		
埋人14	頭蓋		不明	0歳		
埋人15	椎骨、左右上腕骨、左橈骨、左尺骨、手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足骨		男性	55歳以上	155.7	71.4
埋人16	椎骨、左腕骨、右橈骨、右尺骨、左寛骨、左大腿骨、左脛骨、足骨		女性	35~54歳		
遺構外	頭蓋、下顎骨、歯、椎骨、肋骨、右腕骨、右橈骨、右尺骨、左右大腿骨、右腓骨、足骨					80.7

能蔵寺跡

中世集団墓地 (No.372)

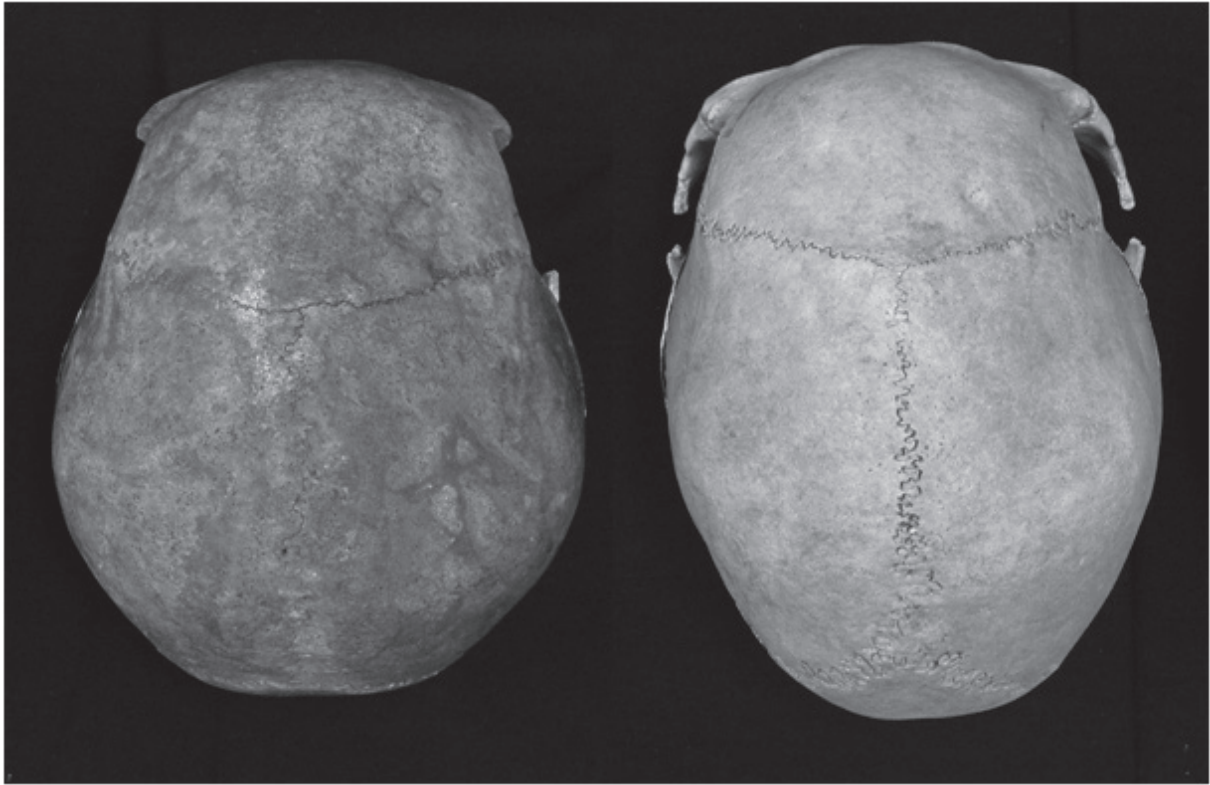


図1 能蔵寺跡と中世集団墓地遺跡の頭蓋上面観(女性)  
能蔵寺跡は中世集団墓地遺跡と比べて脳頭蓋最大幅が大きく、より短頭である。

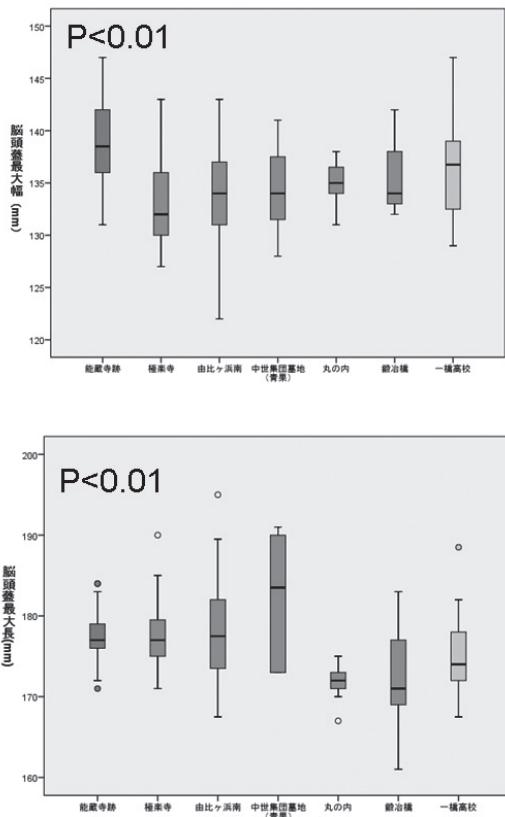


図2 脳頭蓋最大長と脳頭蓋最大幅の集団間比較(女性)  
能蔵寺跡は中世人と比べて脳頭蓋最大幅が大きい。

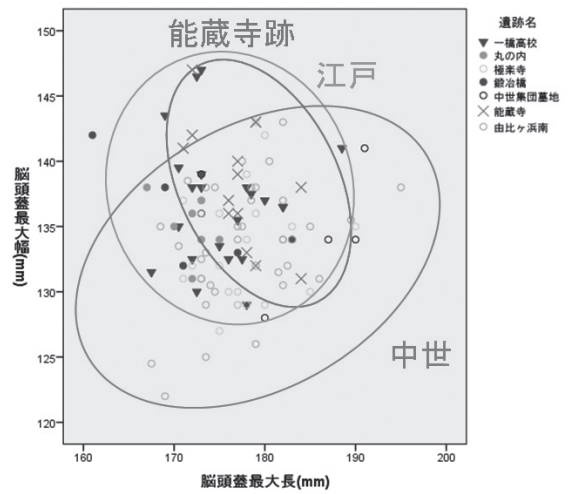


図3 脳頭蓋最大長と脳頭蓋最大幅の散布図(女性)  
能蔵寺跡は中世人と比べて脳頭蓋最大幅が大きく、中世人骨よりも江戸時代人骨に類似する。



第2節 能蔵寺跡出土の動物遺体

金子 浩昌

付表1 検出された動物遺体の種名表

<p><b>軟体動物門</b></p> <p><b>腹足綱</b></p> <p><b>前鰓亜綱</b></p> <p>古腹足目</p> <p>ミミガイ科</p> <p>トコブシ</p> <p>アワビ類</p> <p>ニシキウスガイ科</p> <p>バテイラ</p> <p>ダンベイクキサゴ</p> <p>イボキサゴ</p> <p>サザエ科</p> <p>サザエ</p> <p>タマガイ科</p> <p>ホソヤツメタ</p> <p>エゾバイ科</p> <p>バイガイ</p> <p>新腹足目</p> <p>アッキガイ科</p> <p>レイシガイ</p> <p>アカニシ</p> <p><b>二枚貝綱</b></p> <p>マルスダレガイ目</p> <p>フネガイ科</p> <p>サルボウ</p> <p>イタボガキ科</p> <p>カキ類</p> <p>マルスダレガイ科</p> <p>ハマグリ</p> <p>チョウセンハマグリ</p> <p>カガミガイ</p> <p>シジミガイ科</p> <p>ヤマトシジミ</p> <p><b>脊椎動物門</b></p> <p><b>軟骨魚綱</b></p> <p>ネズミザメ目</p> <p>メジロザメ科</p> <p>メジロザメ類</p> <p><b>硬骨魚綱</b></p> <p>スズキ目</p>	<p>タイ科</p> <p>クロダイ</p> <p>コブダイ</p> <p>マダイ</p> <p>フグ目</p> <p>フグ科</p> <p>フグ類</p> <p>サバ亜目</p> <p>サバ科</p> <p>カジキマグロ類</p> <p><b>鳥綱</b></p> <p>ガンガモ目</p> <p>ガンガモ科</p> <p>カモ類</p> <p><b>哺乳綱</b></p> <p>ネズミ目</p> <p>ネズミ科</p> <p>ドブネズミ</p> <p>ネズミ類</p> <p>クジラ目</p> <p>マイルカ科</p> <p>マイルカ</p> <p>サカマタ</p> <p>ゴンドウクジラ科</p> <p>ゴンドウクジラ</p> <p>ネコ目</p> <p>イヌ科</p> <p>イヌ</p> <p>ネコ科</p> <p>ネコ</p> <p>ウマ目</p> <p>ウマ科</p> <p>ウマ</p> <p>ウシ目</p> <p>イノシシ科</p> <p>イノシシ</p> <p>シカ科</p> <p>ニホンジカ</p> <p>ウシ科</p> <p>ウシ</p>
---	---

## 貝類

全体的に腹足類が多く採られていた。腹足類はアカニシが主体で好まれた貝であった。アワビ類も多かったが破片が多く、個体数を確認することは難しかった。腹足類はホソヤツメタもアカニシに匹敵する数を採っているが、殻は小さく肉量は少なかったと思う。アカニシは大型の殻が多く、殻の背面をていねいに打ち割って肉を採りだしていた。アカニシは美味で、かつ採り易かったと思う。好まれた貝であった。バイガイがそれに次いで多かったが、採り易いこともあったと思う。サザエは、岩礁の貝で採れる数が少なかつたらしい。味は良いので好まれたはずである。

二枚貝類ではハマグリが多く、内湾域で多産し、中程度の大きさの殻であった。味の良いことから好まれた。その他の種類は全く少なかった。

## 魚類

魚類については、内湾のクロダイ、フグ類、外海のサメ類、岩礁棲のコブダイなどがあったが、骨の出土が少なく当時の漁撈の様子などを知ることが難しかった。魚骨の廃棄の場所は異なったのではないだろうか。

### メジロザメ類

椎体2個があり、別個体である。椎骨が1個ずつしかないということは、別にも分けられた可能性もあり、肉が分配されたことも考えられる。

### クロダイ

歯骨が1点出土した。実際はさらに多く採れた魚であったと思う。

### コブダイ

下咽頭骨が1点出土した。岩礁魚で、中世遺跡からの出土は珍しい魚である。

### フグ類

歯冠部上顎骨が1点出土した。おそらく多くはなかったであろう。

## 鳥類

鳥類は、ヒシクイのような大型カモを採っている。おそらくこの辺りに多棲していたのであろう。ガン、大型カモ、ヒシクイ類は稀に捕獲された。

## 哺乳類

哺乳類については、ウシ・ウマの遺体が目立つ。大切に飼育され、騎乗、運搬の役割を果たしたはずである。骨には切断、解体痕があり、皮革、肉も利用されたと考えられる。

### ドブネズミ

当時の街中に生息していたのであろう。

### マイルカ

外海に近い遺跡であり、イルカ漁が行われていたと推定される。鎌倉の遺跡では多数の遺骸がまとまって出土することがある。

### サカマタ

大型の歯が一点出土している。珍しい例である。サカマタの捕獲される機会があったのであろう。顎骨から抜き取られ日常の中で飾り物などとして利用されていたかもしれない。

## イヌ

第1面で下顎骨、尺骨片各1点が出土しているが、骨質が異なり別個体である。イヌ遺体は、断片的である。当初は埋葬された個体が掘り返され散乱したのであろう。このイヌの切歯から推定される年齢は、9～10才位である。切歯の歯冠が全面摩耗していた。他の臼歯の摩耗も強い。遺跡から出土するイヌとしては珍しい例である。恵まれた条件で飼われていたのであろう。下顎骨のサイズは、中型犬で、在来の小型犬よりやや大きい。この頃からこのようなサイズのイヌがみられるようになる。

## ウマ

第1面4点、第2面で5点、不明3点が出土してもっとも多い。検出部位は、中手骨、中足骨が完存し、脛骨は切断加工されていた。脛骨は、骨製品の素材として使うために解体後に集められたものであろう。中手骨と中足骨には切断痕などはみられないが、部分的に打痕がみられるので、棒状の利器として使われたのかも知れない。丈夫な骨である。宮崎県都井岬に生息する日本の在来ウマである御崎馬程度の中小型のウマである。写真2-24～26の指骨はさらに小さいトカラウマ程度であり、体高は117cm前後と最も体高の低いウマと考えられる。中近世のウマとしては珍しいものではない。

## ウシ

ウマと比べると少ない出土量である。関東北の遺跡では、ウシはウマに比べて少ないことが認められる。写真2-27の橈骨の近位端には、切り込みの加工痕がみられる。太刀に着ける栗形の素材であろう。写真2-31の中手骨にも切り込みの痕をみる。写真2-34の中節骨からウシのサイズを推定すると、現生する在来ウシの中で最小のものと考えられ、体高129cmの雄である。

## まとめ

この地に生活した人々は、内湾の河口域という自然条件であったので、貝類では、ハマグリ、アカニシを多獲している。ハマグリは味が良いし、アカニシも味が良い上に大型の殻であれば肉量も多い。殻をていねいに割っている。これまであまり注意されなかったチョウセンハマグリは大型になるが、外海の貝なので多く採れなかった。河口では、ヤマトシジミが多棲すると思うが、数が少ない。あまり好まれなかったのかも知れない。

牛馬の食肉は普通であったと考えられる。また、栗形をつくるための加工痕が顕著に認められ、鎌倉遺跡でのウシ・ウマ骨の特徴といえる。

イヌは鎌倉遺跡からの検出例が多いが、本遺跡では少なかった。下顎骨の一例は、M<sub>1</sub>が破損していたが、低湿性の堆積層からの出土で保存状態が良好である。老齢犬である。屋敷内で飼われていたのであろうか。

能蔵寺跡出土の動物遺体は遺跡付近の環境や、そこに住んだ人々の食性を知る上で貴重な資料である。

## 引用・参考文献

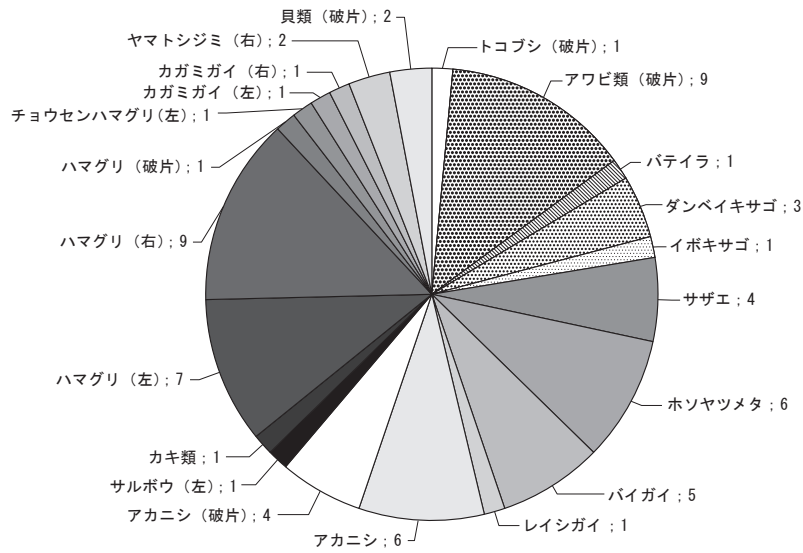
西中川 駿編 1991「古代出土骨から見たわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究」『平成2年度文部科学省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告』鹿児島大学農学部獣医学科

付表2 出土動物遺体一覧

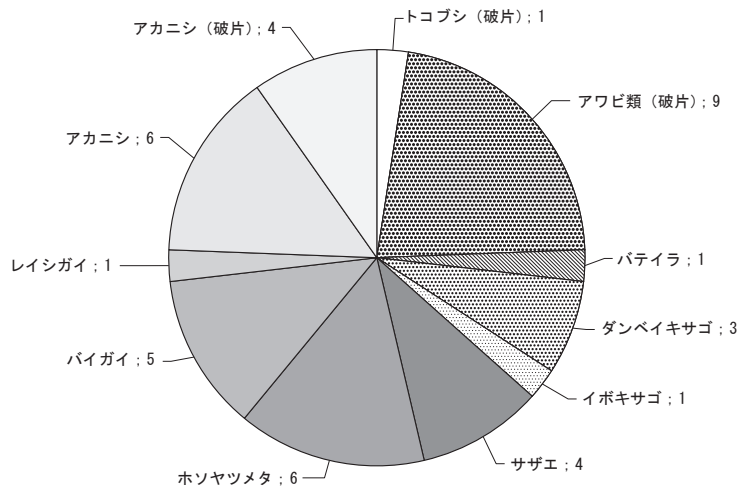
出土遺構	区	面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真 図版	備考
土坑墓1	I	1面	貝類					破片
土坑墓1	I	1面	マダイ	上後頭骨			9	深い刺突痕あり。
土坑墓6	I	1面	ゴンドウクジラ	歯				裂けている。
土坑墓11	I	1面	カジキマグロ類	棘片				
土坑墓15	II	1面	ウシ	上顎臼歯P <sup>4</sup>	左	長：16.46 幅：15.67		
土坑墓18	II	1面	トコブシ					破片
土坑墓18	II	1面	アワビ類					破片8点
土坑墓18	II	1面	ダンベイキサゴ			径：37.65		
土坑墓18	II	1面	ダンベイキサゴ					
土坑墓18	II	1面	イボキサゴ			径：25.32		
土坑墓18	II	1面	サザエ			殻高：37.73		稚貝
土坑墓18	II	1面	ホソヤツメタ			径：59.08		
土坑墓18	II	1面	ホソヤツメタ			径：47.88		
土坑墓18	II	1面	ホソヤツメタ			径：38.90		
土坑墓18	II	1面	ホソヤツメタ			径：35.89		
土坑墓18	II	1面	ホソヤツメタ			径：31.91		
土坑墓18	II	1面	ホソヤツメタ			径：30.03		
土坑墓18	II	1面	バイガイ			殻高：48.91		
土坑墓18	II	1面	バイガイ			殻高：47.39		
土坑墓18	II	1面	バイガイ			殻高：46.17		
土坑墓18	II	1面	バイガイ			殻高：48.61		
土坑墓18	II	1面	バイガイ			殻高：53.46		
土坑墓18	II	1面	アカニシ	殻柱片				
土坑墓18	II	1面	アカニシ					破片4個
土坑墓18	II	1面	サルボウ		左			肋骨36本
土坑墓18	II	1面	ハマグリ		右			右2個、左2個
土坑墓18	II	1面	ハマグリ		左	殻長：69.62		
土坑墓18	II	1面	チョウセンハマグリ		左	殻長：95.59	7	
土坑墓18	II	1面	カガミガイ		右	殻長：74.14	6	左、右
土坑墓18	II	1面	ヤマトシジミ		右	殻長：24.58		
土坑墓18	II	1面	ヤマトシジミ		右	殻長：16.53		
土坑墓18	II	1面	貝類					不明種
土坑墓18	II	1面	焼獣骨					破片
土坑墓25	II	1面	イルカ類	椎体関節片		径：32.80		
土坑墓25	II	1面	イヌ	脛骨		全長：43.43		(幼)
土坑墓25	II	1面	ウシ	中手骨	左		31	中間・両端切り取り加工
土坑1	I	1面	カジキマグロ類	棘片				
土坑1	I	1面	イルカ類	椎体棘片				
土坑1	I	1面	イルカ類	腰椎体				
土坑1	I	1面	イヌ	中足骨近位端				
土坑1	I	1面	ウマ	末節骨	左	長：63.74 近位端幅：67.77	26	小型在来馬の御崎馬と同大。
土坑1	I	1面	ウマ	基節骨	左	長：79.30 近位端幅：48.82 遠位端幅：40.86	24	加工痕を見出すことができなかった。しかし、指部をとり外したことは確かであろう。
土坑1	I	1面	ウマ	中節骨	左	長：44.26 近位端幅：48.11 遠位端幅：41.20	25	
ビット4	I	2面	アカニシ	殻柱				大型
ビット8	I	2面	ウシ・ウマ	骨片				
遺構外	I	1面	ネコ	寛骨臼部	左			
遺構外	I	1面	ウシ・ウマ	骨片				
遺構外	I	1面	ウマ	下顎臼歯M <sup>2</sup>	右	高：23.00 長：26.10 幅：16.14		
遺構外	II	1面	メジロザメ類	椎体		径：22.87 長：9.18	12	
遺構外	II	1面	クロダイ	歯骨	右	全長：31.13		
遺構外	II	1面	コブダイ	下咽頭骨		幅：42.20	8	
遺構外	II	1面	ガン・カモ類	上腕骨～遠位端	右	遠位端幅：21.64		
遺構外	II	1面	ドブネズミ	大腿骨	左	全長：42.36	15	
遺構外	II	1面	ネズミ類	脛骨	右	全長：42.01		
遺構外	II	1面	イヌ	尺骨	右	幅：21.83	18	大型、欠損、切痕
遺構外	II	1面	イヌ	下顎骨	左	下顎骨(顎長)：133.53mm 関節突起長：131.81mm 下顎体高(M <sub>1</sub> 位置)：23.38mm 下顎厚(M <sub>1</sub> 位置)：12.23mm	17	P <sub>4</sub> 、M <sub>1</sub> が欠損。咬耗著し、高齢。切歯全面咬耗。下顎窩深8.38mm、深くおそらく♂。
遺構外	II	1面	イヌ	下顎犬歯	左		16	
遺構外	II	1面	ウマ	脛骨近位端欠	左	遠位端幅：63.48	29	カットマークと犬の咬り痕をみる。トカラ馬、トカラ列島宝島産、最も小さい馬で雄体高117cm。



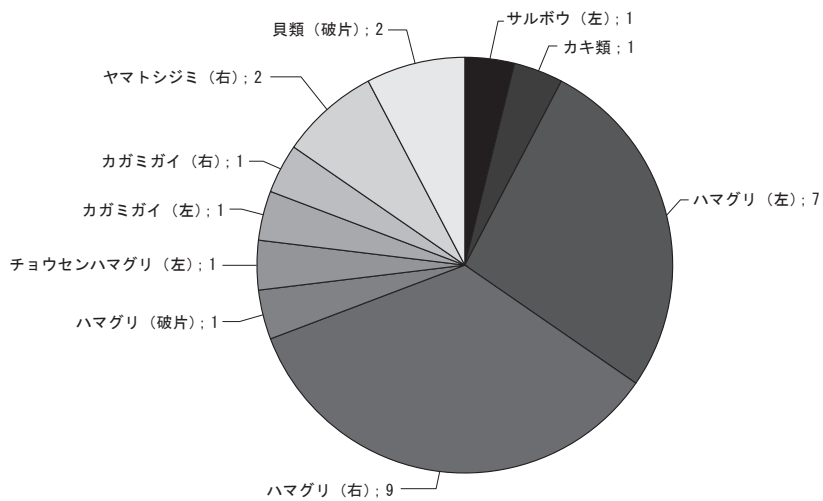
出土遺構	区	面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真 図版	備考
土坑8	II	2面	イス	脛骨近位端	左	近位端幅：34.58		折っている。
土坑12	II	2面	マダイ	歯骨	左	全長：45.00±		
土坑12	II	2面	タイ類	尾椎体		長：22.72		
土坑12	II	2面	ニホンジカ	角分岐部				切断加工
土坑12	II	2面	ニホンジカ	角分岐部	右			切り込み痕
土坑12	II	2面	ウシ	上顎臼歯M <sup>1</sup>	右			
土坑12	II	2面	ウシ・ウマ	肋骨片				
ビット17	II	2面	ウマ	下顎臼歯P <sub>2</sub>	右	歯冠長×同幅：30.94×15.08 高さ：22.69		年齢12才
ビット27	II	2面	ウシ	中足骨				骨製品のための切断痕あり。
ビット32	II	2面	レイシガイ			殻高：52.0±	2	殻は完存
ビット32	II	2面	アカニシ			殻高：100.0±		
ビット33	II	2面	アワビ類					破片
ビット33	II	2面	アカニシ			殻高：95.0±		
ビット34	II	2面	アカニシ			殻高：125.22		
遺構外	I	2面	バテイラ			高：26.0±		
遺構外	I	2面	ダンベイキサゴ			径：28.83	1	
遺構外	I	2面	アカニシ			殻高：113.92	3	
遺構外	I	2面	ハマグリ					破片
遺構外	I	2面	フグ類	歯冠部上顎骨	右	全長：26.85	10	
遺構外	I	2面	カジキマグロ類	椎骨		長：68.80		
遺構外	I	2面	カジキマグロ類	椎骨片		長：66.48		
遺構外	I	2面	カジキマグロ類	椎骨		椎体長：63.35	11	切断された棘片3点
遺構外	I	2面	マイルカ	下顎骨	左			吻部切断、下縁にカットマーク
遺構外	I	2面	サカマタ	歯		歯冠長部：24.22 歯冠短部：20.37 全高：104.12	14	歯根に打欠痕(人為的)
遺構外	I	2面	ニホンジカ	肋骨片				
遺構外	I	2面	ウシ	中足骨	左		33	中間に輪切り痕
遺構外	I	2面	ウシ・ウマ	骨片				
遺構外	II	2面	メジロザメ類	椎体		径：30.42 長：19.70	13	
遺構外	II	2面	トリ類					破片
遺構外	II	2面	カモ類	上腕骨片				ヒシクイなどの大型種
遺構外	II	2面	イス	橈骨遠位端欠	右	近位端幅：14.76		
遺構外	II	2面	イス	上顎臼歯P <sup>4</sup>	右	L：16.91 B：8.95		咬耗なし
遺構外	II	2面	ウマ	上顎切歯I <sup>2</sup>	右		19	5～6才±
遺構外	II	2面	ウマ	中足骨				切断痕をみる。
遺構外	II	2面	ウマ	脛骨(中間)	右	径：43.02	21	カット痕をみる。
遺構外	II	2面	ウマ	橈骨中間	左		20	カット(平滑面を残す)、切り込み痕2条をみる。
遺構外	II	2面	イノシシ	肋骨片				
遺構外	II	2面	イノシシ	下顎切歯I <sub>1</sub>	左	歯冠幅：5.84		歯根開く。
遺構外	II	2面	ウシ	橈骨近位端	右		27	切り込み痕(U字状)
遺構外	II	2面	ウシ	中節骨	左	全長：42.37 近位端幅：31.13	34	現生中型在来牛見鳥牛に近いサイズ(萩市見鳥産)
遺構外	II	2面	ウシ	中手骨～遠位端 切断	左		32	切り込んで折る。鋭利な面。
遺構外	II	2面	ウシ・ウマ	肢骨片				
遺構外	II	2面	ウシ・ウマ	骨片				
遺構外	I	表採	サザエ			径：92.0±	5	有棘
遺構外	I	表採	サザエ			径：80.0±	4	有棘
遺構外	I	-	カキ類					
遺構外	I	-	ウマ	上顎臼歯M <sup>3</sup>		高：39.15 長：26.30 幅：22.75		9～10才(西中川編 1991による)
遺構外	I	-	ウシ	脛骨遠位端	左	遠位端幅：56.75	30	切断されている。体高105cm。
遺構外	II	-	イス	肋骨片				15個(同一個体)
カマ場	II	-	ハマグリ		右	殻長：44.0±～30.0±		右3、左4
カマ場	II	-	ハマグリ		右			右3個
灰褐色砂層	II	-	ハマグリ		右	殻長：84.0±		
西壁側面	II	-	ウシ・ウマ	骨片				切断痕が付く。
南排水溝	II	-	ウシ	脛骨	左		28	(若)、連続切痕
深掘り	-	-	サザエ			殻高：116.0±		
深掘り	-	-	ウマ	中手骨(完形)	左	全長：215.00 近位端幅：48.30 遠位端幅：46.30	22	体高130cm前後、中型在来馬御崎馬
深掘り	-	-	ウマ	中足骨(完形)	右	全長：259.00 近位端幅：45.56 遠位端幅：41.88	23	体高130cm、中型在来馬御崎馬、前面に浅い切痕、後面に浅い切り込みが付く。



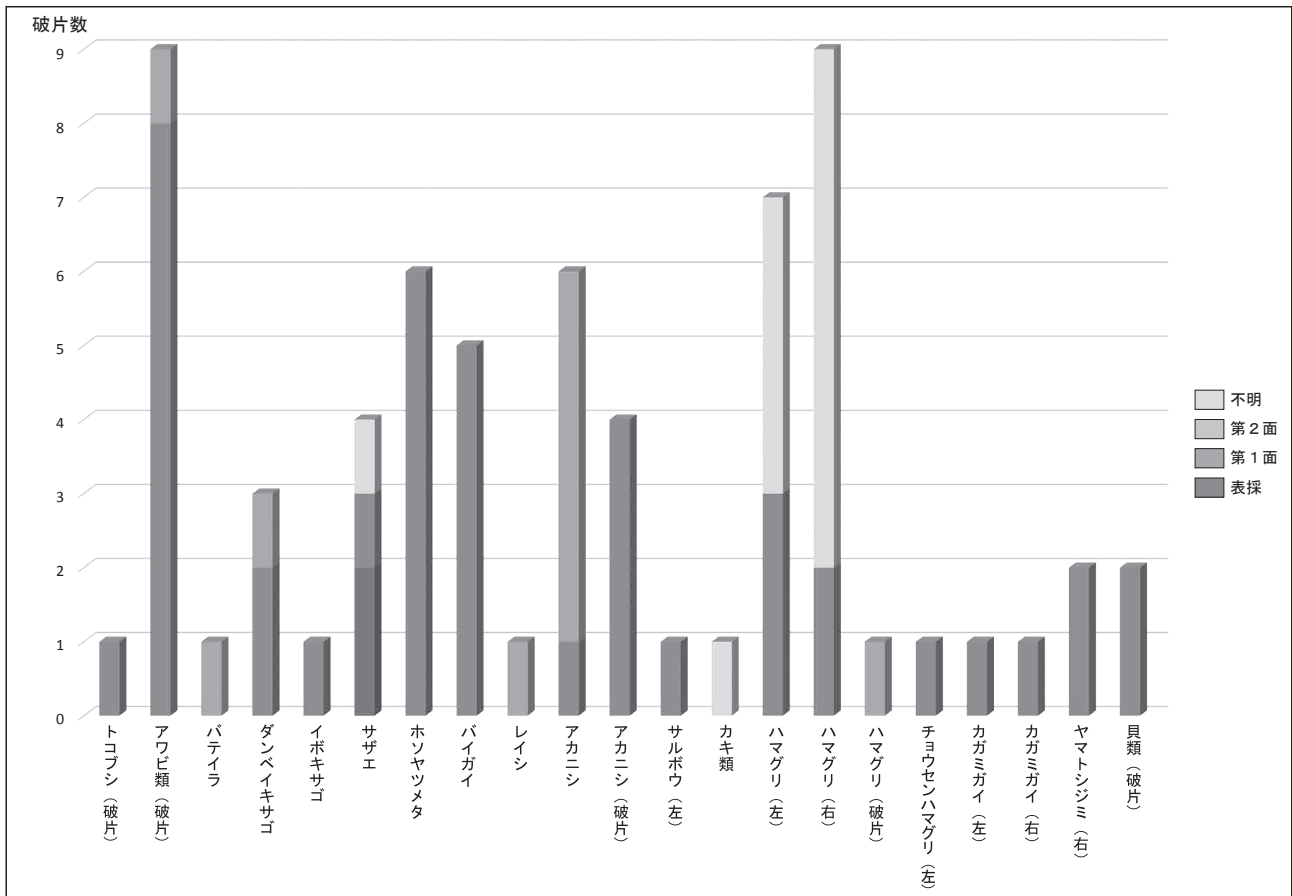
付表3 貝種別出土点数



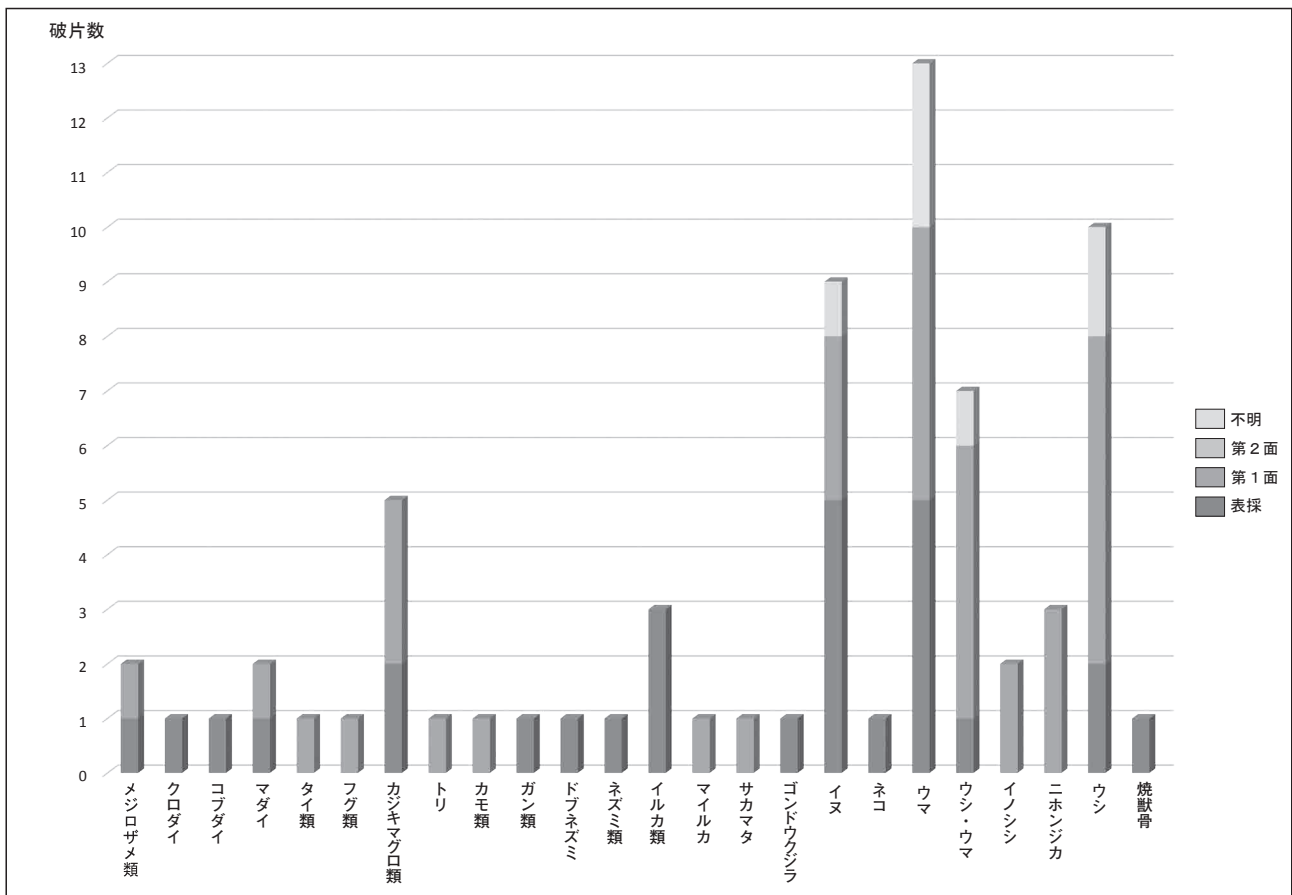
付表4 巻貝種別出土点数



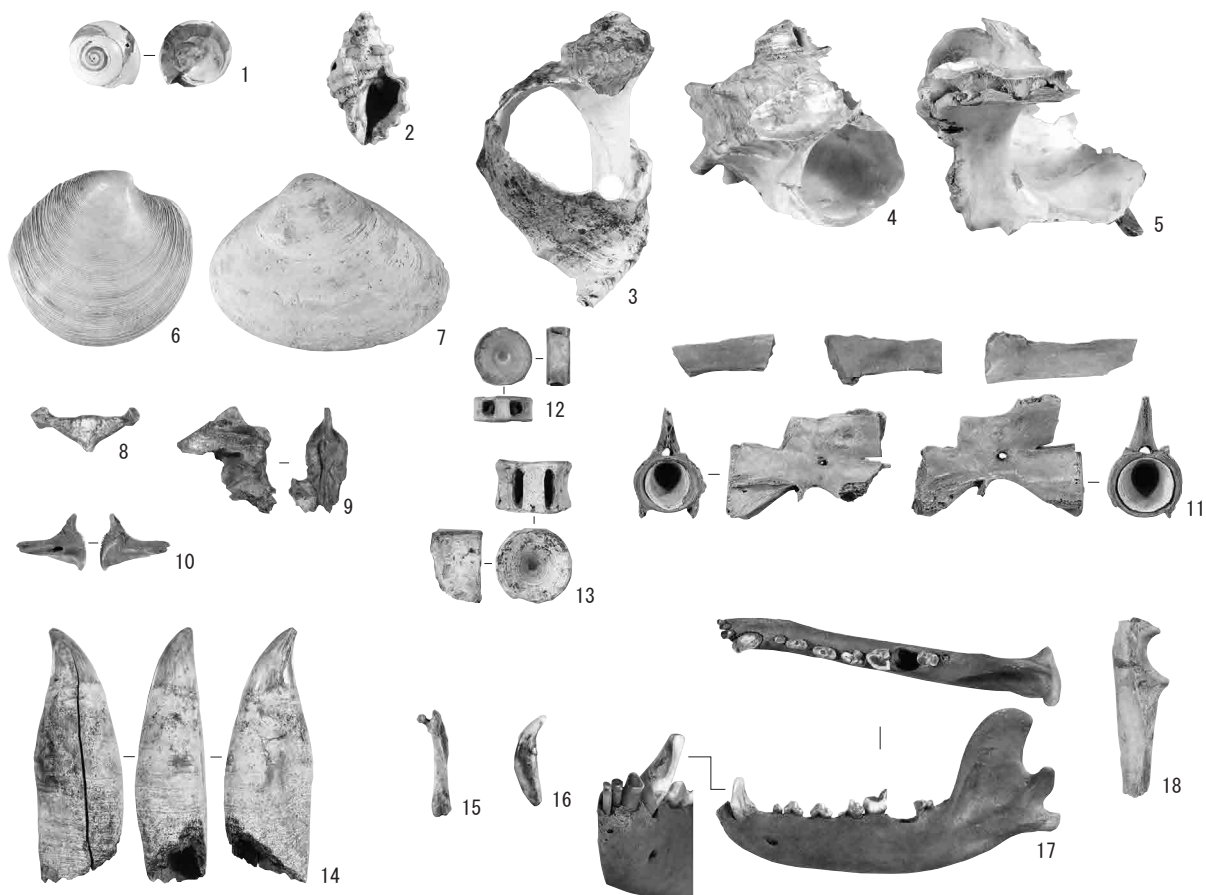
付表5 二枚貝種別出土点数



付表6 層位別軟体動物門点数



付表7 層位別脊椎動物門点数



イヌの下顎切歯と  
犬歯の咬耗状態

写真1 出土動物遺体(1)

付表8 出土動物遺体写真図版対応表(写真1・2)

番号	出土遺構	種別	部位	左右
1	I区第2面	ダンベイキサゴ		
2	ピット32	レイシ		
3	I区第2面	アカニシ		
4	I区表探	サザエ		
5	I区表探	サザエ		
6	土坑墓18	カガミガイ		
7	土坑墓18	チョウセンハマグリ		
8	II区第1面	コブダイ	下咽頭骨	
9	土坑墓1	マダイ	上後頭骨	
10	I区第2面	フグ類	歯冠部上顎骨	右
11	I区第2面	カジキマクロ類	椎骨	
12	II区第1面	メジロザメ類	椎体	
13	II区第2面	メジロザメ類	椎体	
14	I区第2面	サカマタ	歯	
15	II区第1面	ドブネズミ	大腿骨	左
16	II区第1面	イヌ	下顎犬歯	左
17	II区第1面	イヌ	下顎骨	左

番号	出土遺構	種別	部位	左右
18	II区第1面	イヌ	尺骨	右
19	II区第2面	ウマ	上顎切歯 <sup>1)</sup>	右
20	II区第2面	ウマ	橈骨	左
21	II区第2面	ウマ	脛骨	右
22	深掘り	ウマ	中手骨	左
23	深掘り	ウマ	中足骨	右
24	土坑1	ウマ	基節骨	左
25	土坑1	ウマ	中節骨	左
26	土坑1	ウマ	末節骨	左
27	II区第2面	ウシ	橈骨	右
28	II区排水溝	ウシ	脛骨	左
29	II区第1面	ウマ	脛骨	左
30	I区排水溝	ウシ	脛骨	左
31	土坑墓25	ウシ	中手骨	左
32	II区第2面	ウシ	中手骨	左
33	I区第2面	ウシ	中足骨	左
34	II区第2面	ウシ	中節骨	左



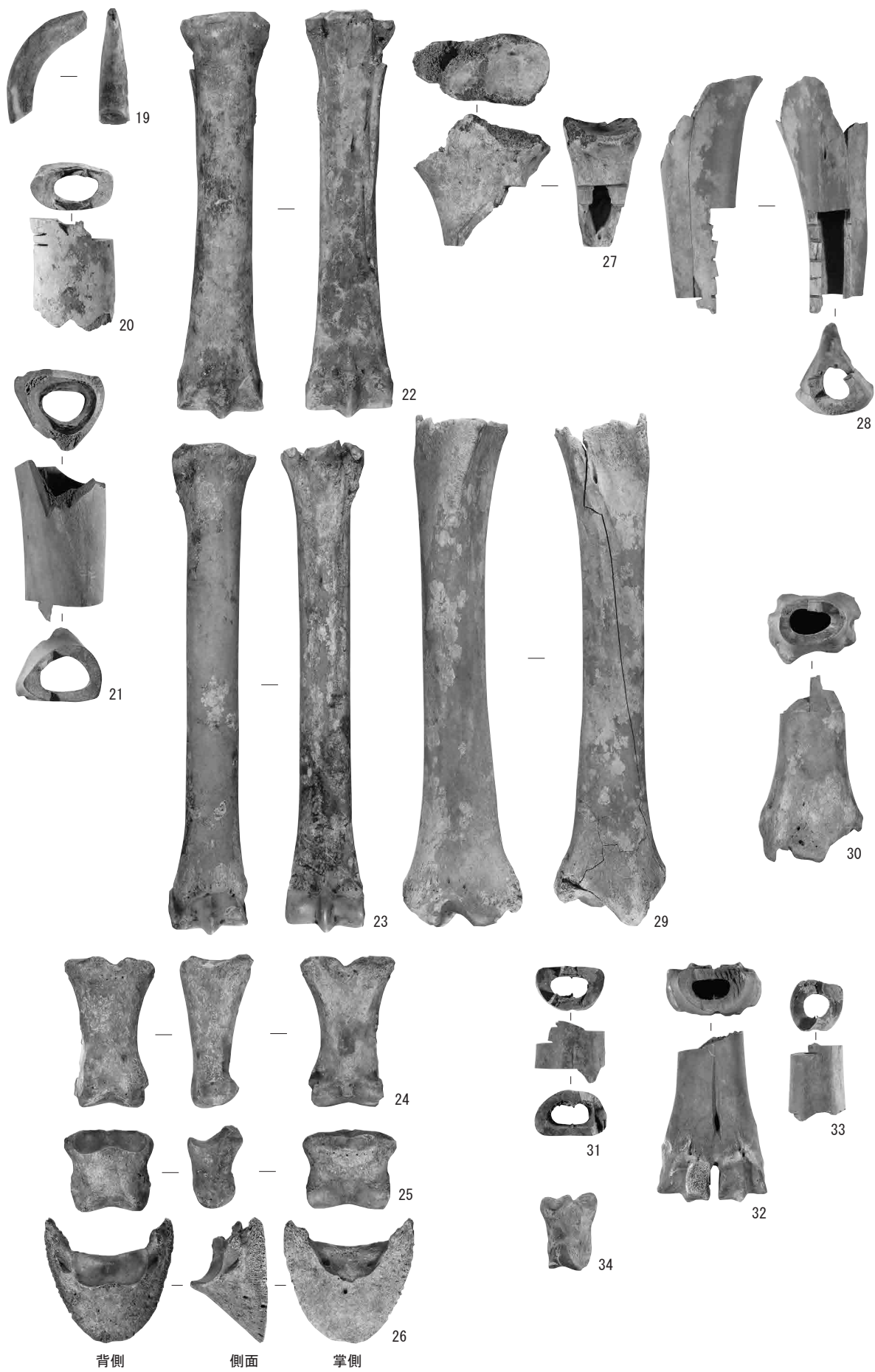


写真2 出土動物遺体(2)

## 第五章 まとめ

能蔵寺跡の調査は今回が5地点目となり、調査区の周辺には現在も多く寺社が点在している。大町大路の南側にあたる本調査地点の周辺域で、中世の墓域に関連する遺構が発見される可能性について言及されてきた(伊丹・川又 2003)。そうした中で、本地点の調査では中世から近世にかけての土坑墓および埋葬人骨が多数検出され、当地における墓域の一端を明らかにすることができた。

今回の調査では、発生土の処理を考慮して対象範囲をⅠ区とⅡ区に分割し、崩落を防止するため両調査区の間幅50～60cmの未調査区を残した。両調査区で確認した遺構検出面は2枚であるが、それぞれの面で検出した遺構には新旧関係が認められ、比較的長い時間幅が考えられる。検出した遺構は火葬墓2基、土坑墓27基、埋葬人骨16体、土坑12基、ピット34基で、第1面は15～17世紀代の土坑墓と埋葬人骨からなる墓域、第2面は14～15世紀代の土坑およびピットで構成される生活域として捉えることができる。土坑墓からは遺存状態の良い人骨28体分が出土し、単独で出土した埋葬人骨を合わせるとその数は45体に及ぶ。出土遺物は、遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して83箱を数え、このうち人骨が54箱にのぼる。

以下、面ごとに遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

### 〈第1面〉

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は北で6.90m、南で7.06mを測る。わずか50㎡ほどの狭小な調査範囲から、火葬墓2基、土坑墓27基、掘り込みを確認し得なかった埋葬人骨16体、土坑1基を検出した。調査区内には遺構の空白地がⅡ区の南側に若干あるものの、Ⅰ・Ⅱ区のはほぼ全面にわたって遺構が重複して分布する状況であった。また、東西南北4方向のいずれも遺構が調査区外に延びている様相が捉えられ、墓域は周辺域にさらに広がっている可能性が考えられる。なお、本地点の北東30mほどに位置する能蔵寺跡材木座二丁目294番3外地点(図2④)では中世前期(13世紀前葉～14世紀中葉)の生活面が4面検出されたが(齋木・降矢 2007)、墓域に関連する遺構は確認されていない。

検出した土坑墓と埋葬人骨の時期は、副葬されたかわらけや銭貨から推定するとおおよそ15～17世紀代と時間幅をもつ。時期が明らかな土坑墓と埋葬人骨の大半は15～16世紀代に属すが、土坑墓1と埋葬人骨5は古寛永通寶を伴うことから近世(17世紀代)に属すると考えられ、墓域の中で新しい段階に位置づけられる。両遺構ともⅠ区の南側で検出され、近接した位置関係にある。なお、Ⅱ区で検出した火葬墓2も出土遺物からは17世紀代と考えられ、土坑墓1と埋葬人骨5との関連が注意される。火葬墓は重複する土坑墓を壊して構築されていることから、本地点で最も新しい遺構となる可能性が高く、墓制が土葬から火葬に移行したことも考えられよう。

次に、土坑墓と埋葬人骨の詳細についてまとめた表4をもとにその様相を概観すると、土坑墓の平面形は隅丸長方形、方形、楕円形の4種類が認められ、方形を基調とするものが20基と全体の7.4割を占める。掘り込みの規模は長軸82～126cm、短軸44～104cmと幅があり、確認面からの深さは10～29cmと浅い。埋葬施設としては木棺の事例が6例あり、このうちの3例は土坑中に埋置されている。木棺の遺存状態は全体に悪かったが、土坑墓27は比較的良好的な状態で確認され、棺床の横板も検出されている。墓標と考えられる出土遺物には、土坑墓3の覆土最上部から出土した地輪をあげることができ、土坑墓20では人骨の足首直上に宝篋印塔の基礎が置かれていた。後者については出土層位から推定すると墓標とは考えにくく、意図的に遺体の上に置いた可能性も想定される。

埋葬姿勢が明らかなものは土坑墓27基と埋葬人骨8体を数え、土坑墓1が仰臥屈葬なのを除くと、他はすべて側臥屈葬であった。また、頭位方向は推定されるものも含めると27例がおおよそ北に向けて置かれ、東や西、南を向くものは合わせても10例に過ぎない。頭位方向における北の優位性をみて取れよう。なお、土坑墓に埋葬される遺体は原則的に1体であるが、土坑墓11と土坑墓22からは2体が検出されている。土坑墓22の場合は、古い人骨Aの東側に人骨Bが頭位方向と埋葬姿勢をほぼ同じくして折り重なるように埋葬されている状況から判断すると、追葬の可能性が考えられよう。

土坑墓の副葬品には、銭貨・かわらけ・ガラス製数珠玉・刀子・漆椀があり、銭貨は21体、かわらけは19体に伴っている。一方で、ガラス製数珠玉や刀子、漆椀は副葬品としては僅少で、刀子と漆椀は各1体、数珠玉は2体に伴って出土したのみである。かわらけは複数個体を副葬したものが14例あり、大きさの異なる2個体を重ねた例(土坑墓3・6)や、合わせ口にして副葬する例(土坑墓24)も認められる。かわらけが副葬される位置は、腕や胸部・背部・腹部・腰部・脚部など一定していない。銭貨については1・2枚が出土する場合もあるが、4～7枚が連なって出土する例が多く、土坑墓20では6連と7連の銭貨が合計13枚も出土している。

出土した人骨についてはすべて人類学的鑑定を行い、その結果を第四章第1節に掲載した。分析方法や形態学的・古病理学的特徴はそちらを参照していただき、ここでは考古学的見地から分析結果について検討してみたい。まず出土人骨は合計45体であり、死亡年齢は乳幼児(0歳と1.5歳)4体、未成人(5～14歳)4体、成人(15歳以上)37体である。成人は15～34歳(10体)、35～54歳(11体)、55歳以上(10体)に細分され、老齢が全体の1/3を占めている。年齢による埋葬場所の区分は認められないが、乳幼児を含む未成人の分布はI区の東端に3体、II区の東端に4体がまとまる傾向がある。

性別については乳幼児と未成人は不明であるが、成人は男性が4体、女性が31体、不明2体という内訳で、女性が全体の86%と非常に高い割合を示すことが明らかとなった。なお、男性4体のうち3体が35～54歳という鑑定結果が得られている。男女の比率が女性に大きく偏る要因の解明は、周辺域の調査を重ねた上で検討しなければならない今後の課題といえよう。

本墓地で少数の男性人骨に着目して女性人骨のあり方との比較を試みると、その分布はI区に1体(土坑墓1)、2区に3体(土坑墓17・25、埋葬人骨15)確認され、特に一定の場所に集中する様相はみられない。また、時期は15～16世紀代(土坑墓17・25、埋葬人骨15)と17世紀代(土坑墓1)に属しており、女性人骨との時期差は認められなかった。副葬品はかわらけと銭貨、先ほど触れた僅少なガラス製数珠玉が成人男性人骨(土坑墓1)に伴っているが、性別による副葬品の区別が存在したのかは判然としない。埋葬姿勢や頭位方向も男性人骨に特有の傾向は認められなかった。

こうした様相から、埋葬姿勢や頭位方向、副葬品は年齢および性別に規制されなかったと考えられるが、乳幼児を含む未成人の埋葬場所については意識されていた可能性が推定されよう。

I区で検出した土坑1からは、10点を数える完形ないし略完形のかわらけが底面直上より出土した。確認面ではウマの蹄が出土しており、墓とは異なる何らかの信仰行為に関わる遺構の可能性も考えられる。

## 〈第2面〉

第1面で検出した土坑墓群の調査後に、I区では標高6.72～6.80mで泥岩ブロックを密に含む暗褐色土を検出し、II区では標高6.60m前後で泥岩による整地面を確認した。この面を当初は第2面として認定したが、上層からの掘り込みの残存が多く明確な遺構が確認できなかったためさらに掘り下げを行った。そして砂を含む比較的平坦な暗褐色土層を検出し、その上面で第2面の遺構群を確認した。検出した遺



構は土坑11基とピット34基で、確認面の標高は6.24～6.29mを測る。これらの遺構はⅠ・Ⅱ区全域に満遍なく分布し、重複するものや調査区外へ延びるものも多い。

土坑は平面形が円形ないし楕円形のもが主体で、方形のものは2基検出された。特徴的なのが方形を呈する土坑6で、長辺が2mを越す大形の土坑である。底面のほぼ中央に長軸方向に縦断する畝状の高まりをもつ特殊な形態であるが、本土坑の性格を示すような遺物の出土状況などは確認できなかった。また、検出した34基のピットのうち、礎板をもつものが10基、礎石をもつものが1基みられた。調査では建物などの施設を構成する規則的な配置は確認できなかったが、建物の一部を構成するピットの可能性が高い。遺構密度は比較的高く、遺構間の重複関係も認められることから、本地点が長期間にわたり生活域として利用されていた様相が看取されよう。出土遺物はかわらけや瀬戸窯産・常滑窯産の陶器類を主とし、それらの年代観から遺構の時期を推定するとおおよそ14～15世紀に属すると考えられる。

最後に本地点の変遷について簡単に述べると、まず第2面は遺構群や出土遺物の様相から、土坑や建物の一部と考えられるピットで構成された生活域として捉えられる。過去に調査された本遺跡の4地点に目を転ずると、12世紀末から14世紀中葉を中心とする遺構群と遺物が確認されている(馬淵 1995、伊丹・川又 2003、齋木・降矢 2007、原 2007)。一方で本調査地点で検出した第2面の遺構群は、出土遺物の年代観からは14～15世紀代と想定され、時期的にやや新しい段階での遺跡形成を指摘することができる。第1面の調査成果からは、中世後半の15～16世紀代には土坑墓で構成される墓域が営まれていたことが明らかとなった。この墓域は近世(17世紀代)まで利用され、さらに新たな要素として火葬墓の出現をみることができる。なお、表採・表土中出土の石塔類には「妙」・「妙法」・「蓮」・「華」・「経」の文字が刻字されたものがみられる。これらの刻字は日蓮宗の題目と考えられ、本遺跡の墓域の宗派を指し示す資料ともなる。

#### 引用・参考文献(著者五十音順)

- 伊丹まどか・川又隆央 2003「能蔵寺跡(No.314)材木座二丁目297番1地点」『平成14年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 鎌倉市教育委員会
- 大三輪龍彦・齋木秀雄ほか 1978『長勝寺遺跡 中世鎌倉の民衆生活を探る』長勝寺遺跡発掘調査団
- 齋木秀雄・鯉淵義紀 2007「能蔵寺跡の調査」『第17回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄・降矢順子 2007「能蔵寺跡(No.314)材木座二丁目294番3外地点」『平成18年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・渡邊美佐子 2000「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目890番7地点」『平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫 2002「材木座町屋遺跡(No.261)材木座四丁目256番地点」『平成13年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 鎌倉市教育委員会
- 鈴木庸一郎ほか 2001『古都鎌倉を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会 鎌倉市教育委員会 財団法人かながわ考古学財団
- 瀬田哲夫 1995「材木座町屋遺跡(No.261)鎌倉市材木座二丁目217番6外地点」『平成6年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 鎌倉市教育委員会



- 原 廣志 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目294番 3 外地点」『平成18年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 鎌倉市教育委員会
- 福田 誠 2000「米町遺跡 (No.245) 大町二丁目2404番の一部地点」『平成11年度発掘調査報告 (第 2 分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1995『能蔵寺跡－材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査－』能蔵寺跡発掘調査団 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1997「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座三丁目364番 1 外地点」『平成 8 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄・鍛冶屋勝二ほか 2008「米町遺跡 (No.245) 大町二丁目2235番 3 地点」『平成19年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 鎌倉市教育委員会
- 田代郁夫 1990「5. 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座四丁目260番 1 外」『平成元年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6 鎌倉市教育委員会
- 木村美代治・田代郁夫 1991「7. 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目144番 3」『平成 2 年度発掘調査報告』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副 武 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
火葬墓2 出土遺物 (図8)							
1	銅製品	銭貨	直径 2.2	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-聖宋元寶(北宋・1101)	完形
2	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659) 2~4まで癒着	完形
3	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-不明 2~4まで癒着	完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-不明 2~4まで癒着	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659) 5・6癒着	略完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659) 5・6癒着	完形
土坑墓1 出土遺物 (図10)							
1	ガラス 製品	数珠玉	直径 0.67	孔径 0.2	厚 0.45	色調:褐色、乳白色	略完形
2	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659)	完形
3	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659)	完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.2	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659)	完形
7	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-古寛永通寶(1636~1659)	完形
土坑墓2 出土遺物 (図11)							
1	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-熙寧元寶(北宋・1068)	完形
土坑墓3 出土遺物 (図12)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.7	2.1	底面-回転糸切 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:暗褐色 焼成:良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・大	13.1	9.0	4.0	底面-回転糸切 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:黄灰色 焼成:良好	完形
3	石製品	五輪塔 地輪	長辺 17.1	短辺 16.4	11.6	石材-安山岩	略完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇○通○(北宋・1038)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-元豊通寶(北宋・1078)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-聖宋元寶(北宋・1101)	完形
7	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-元○○○(北宋か)	完形
土坑墓4 出土遺物 (図13)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	9.8	6.1	2.9	底面-回転糸切 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:暗褐色 焼成:良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	9.3	3.5	底面-回転糸切 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:暗褐色 焼成:良好	完形
3	陶器	東播系 片口鉢	-	-	現 7.5	胎土:粗、白色粒 色調:灰色	口縁部 小破片
4	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	4/5
5	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-治平元寶(北宋・1064)	完形
7	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-熙寧元寶(北宋・1068)	完形
8	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-○○元寶	完形
9	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-嘉○通寶	完形
10	銅製品	銭貨	直径 2.2	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-洪武通寶(明・1368)	完形
土坑墓5 出土遺物 (図14)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	9.4	6.5	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:薄橙色 焼成:良好	完形
2	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-祥符元寶(北宋・1008)	完形
3	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-治平通寶(北宋・1064)	完形

4	銅製品	銭貨	直径 2.1	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-洪武通寶(明・1368)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-不明	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-不明	7/8

土坑墓6出土遺物(図15)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	10.2	6.4	2.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明褐色 焼成:良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・大	19.1	13.5	6.5	底面-回転糸切 胎土:緻密、小石、海綿骨針 色調:橙色 焼成:良好	4/5

土坑墓7出土遺物(図16)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	6.8	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:橙色 焼成:良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(9.4)	4.2	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	1/3
3	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.2	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-政和通寶(北宋・1111)	完形
7	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-政和通寶(北宋・1111)	完形
8	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-宣和通寶(北宋・1119)	完形
9	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-〇平元寶(北宋?)	略完形

土坑墓8出土遺物(図18)

1	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
2	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
3	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-景祐元寶(北宋・1034)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-永樂通寶(明・1408)	完形

土坑墓9出土遺物(図19)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.0	2.0	口唇部に煤附着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	1/2
2	鉄製品	刀子	現長 15.0	刃部幅/ 茎部幅 2.2/0.9	厚 0.5	茎部が細い	略完形
3	鉄製品	刀子	現長 18.5	刃部幅/ 茎部幅 2.0/1.6	厚 0.5	鍛造 刃部と茎部が明瞭ではない	略完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-熙寧元寶(北宋・1068)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-永樂通寶(明・1408)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-不明	略完形

土坑墓10出土遺物(図20)

1	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 5.9	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-薄緑色	口縁-体部 小破片
2	瓦質 土器	火鉢	-	-	現 6.2	胎土:緻密 色調:茶褐色 焼成:良好	口縁-体部 小破片
3	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-熙寧元寶(北宋・1068)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-熙寧元寶(北宋・1068)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-政和通寶(北宋・1111)	完形
7	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-大中通寶(明・1361)	完形
8	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-永樂通寶(明・1408)	完形

土坑墓16出土遺物(図22)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(8.4)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.0	4.5	外面下半-指頭痕 底面-回転糸切 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	4/5

3	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－開元通寶(南唐・960)	完形
4	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－咸平元寶(北宋・998)	完形
5	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－咸平元寶(北宋・998)	完形
6	銅製品	錢貨	直径 2.5	孔径 0.8	厚 0.1	錢名－景祐元寶(北宋・1034)	完形
7	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－皇宋通寶(北宋・1038)	完形
8	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－永樂通寶(明・1408)	完形

土坑墓17出土遺物(図23)

1	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－聖宋元寶(北宋・1101)	完形
---	-----	----	-----------	-----------	----------	------------------	----

土坑墓18出土遺物(図24)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.6	2.9	底面－回転糸切 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	4/5
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.2	2.4	底面－回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	4/5
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	8.8	3.6	底面－回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	3/4
4	陶器	瀬戸 瓶類	-	-	現 4.5	胎土：緻密 色調：胎土－灰褐色	口縁部 小破片

土坑墓20出土遺物(図26)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	5.8	4.8	2.2	底面－回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	3/4
2	土器	ロクロ かわらけ・大	14.6	10.4	6.0	底面－回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	完形
3	ガラス 製品	数珠玉	直径 0.5	孔径 0.2	厚 0.4	胎土：緻密 色調：明褐色	完形
4	石製品	宝篋印塔	長径 16.5	上/臍径 10.7/6.1	12.9	側面－輪郭にて2区分 石材－安山岩	略完形
5	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－天聖元寶(北宋・1023)	完形
6	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－皇宋通寶(北宋・1038)	完形
7	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－元祐通寶(北宋・1086)?	完形
8	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－紹聖元寶(北宋・1094)	完形
9	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－正隆元寶(金・1157)	完形
10	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－永樂通寶(明・1408)	完形
11	銅製品	錢貨	直径 2.5	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－永樂通寶(明・1408)	完形
12	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－永樂通寶(明・1408)	完形
13	銅製品	錢貨	直径 2.2	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－不明	完形
14	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－不明	完形
15	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－不明	完形
16	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－不明	完形

土坑墓21出土遺物(図27)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.0	2.5	底面－回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	9.6	6.4	2.7	底面－回転糸切 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	9.0	4.0	底面－回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：灰褐色 焼成：良好	2/3
4	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－皇宋通寶(北宋・1038)	完形
5	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－至和元寶(北宋・1054)	完形
6	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－元祐通寶(北宋・1086)	完形
7	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名－永樂通寶(明・1408)	完形
8	銅製品	錢貨	直径 2.2	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－元〇〇〇	完形

土坑墓22出土遺物(図28)

1	磁器	青磁 水注	-	-	現 3.0	色調：胎土－乳白色、釉－緑青色 備考：龍泉窯系	注口 小破片
2	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名－治平元寶(北宋・1064)	完形



3	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.8	厚 0.1	銭名 - 不明	完形
土坑墓24出土遺物(図30)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	9.6	7.0	2.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	8.4	3.5	底面 - 回転糸切 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 薄橙色 焼成: 良好	完形
3	骨製品	用途不明	現長 6.7	幅 3.6	厚 0.7	シカ中足骨製	小破片
4	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 熙寧元寶(北宋・1068)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - ○○元寶?	完形
土坑墓25出土遺物(図31)							
1	土器	ロクロ かわらけ・大	14.4	9.2	4.7	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 体部下半 - 指頭痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	完形
土坑墓26出土遺物(図32)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.2	3.0	底面 - 回転糸切 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	9.6	3.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	3/4
3	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 開元通寶(南唐・960)	完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
7	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 不明	完形
土坑墓27出土遺物(図33)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	5.6	1.8	底面 - 回転糸切 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	2/3
2	漆器	椀	-	7.3	現 2.7	黒漆の下地に朱漆による文様(意匠不明)	底部破片
埋葬人骨 2 出土遺物(図34)							
1	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 天聖元寶(北宋・1023)	完形
2	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
3	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 不明	完形
埋葬人骨 3 出土遺物(図35)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.3	2.1	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・大	15.0	9.4	4.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 薄橙色 焼成: 良好	2/3
3	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 3.6	胎土: 粗、白色粒 色調: 茶褐色	口縁部 小破片
4	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
5	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
6	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
7	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
8	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
9	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶(明・1408)	完形
埋葬人骨 4 出土遺物(図37)							
1	ガラス 製品	数珠玉	直径 0.65	孔径 0.2	厚 0.5	色調: 褐色、乳白色	完形
2	ガラス 製品	数珠玉	直径 0.66	孔径 0.18	厚 0.5	色調: 褐色、乳白色	完形
3	ガラス 製品	数珠玉	直径 0.67	孔径 0.18	厚 0.5	色調: 褐色、乳白色	完形
4	ガラス 製品	数珠玉	直径 0.67	孔径 0.18	厚 0.5	色調: 褐色、乳白色	完形
埋葬人骨 5 出土遺物(図38)							
1	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 古寛永通寶(1636~1659)	完形
2	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 古寛永通寶(1636~1659)	完形

3	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
4	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
5	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
6	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
7	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
8	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
9	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
10	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
11	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
12	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
13	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
14	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
15	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
16	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
17	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形
18	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 古寛永通寶 (1636~1659)	完形

埋葬人骨8出土遺物(図39)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.2)	2.2	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、海綿骨針 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	(6.6)	3.4	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2
3	陶器	瀬戸 入子	-	-	現 1.0	胎土: 緻密 色調: 灰色 焼成: 良好	底部 小破片

埋葬人骨10出土遺物(図40)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	4.4	2.6	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.5	5.0	2.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	10.0	7.0	2.7	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明黄褐色 焼成: 良好	2/3
4	石製品	砥石	現長 7.4	幅 3.5	厚 0.9	2面に使用痕跡 石材 - 凝灰岩	2/3
5	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名 - 元豊通寶 (北宋・1078)	完形
6	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
7	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
8	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
9	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
10	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	錢名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形

埋葬人骨12出土遺物(図41)

1	漆器	椀	-	-	現 3.5	黒漆の下地に朱漆による文様(花文)	口縁部 小破片
---	----	---	---	---	----------	-------------------	------------

埋葬人骨15出土遺物(図43)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	5.0	2.3	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.5	2.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 薄橙色 焼成: 良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.2	2.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・中	10.2	6.8	3.1	底面 - 回転糸切 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 薄橙色 焼成: 良好	4/5
5	土器	ロクロ かわらけ・中	10.2	6.8	3.1	底面 - 回転糸切 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 薄橙色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	9.0	3.9	底面 - 回転糸切 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	2/3
7	陶器	常滑 甕	-	-	現 7.0	胎土: 粗、白色粒 色調: 暗褐色 備考: 5型式	口縁部 小破片
8	銅製品	錢貨	直径 2.2	孔径 0.8	厚 0.1	錢名 - 皇宋通寶 (北宋・1038)	完形

9	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.8	厚 0.1	銭名 - 至和元寶 (北宋・1054)	完形
10	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 元豊通寶 (北宋・1078)	完形
11	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 元祐通寶 (北宋・1086)	完形
12	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 元祐通寶 (北宋・1086)	完形
13	銅製品	銭貨	直径 2.2	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 政和通寶 (北宋・1111)	完形
14	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
15	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - ○○元寶	完形

埋葬人骨16出土遺物 (図44)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	2.3	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.6)	2.7	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：浅橙色 焼成：	2/3

土坑1出土遺物 (図46)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	5.0	2.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 焼成：良好	胎土：緻密、赤色粒、砂粒、海綿骨針 色調：暗黄褐色	1/4
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.5	2.2	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	3/4
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	5.4	1.9	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 焼成：良好	胎土：緻密、赤色粒、砂粒、海綿骨針 色調：暗黄褐色	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.0)	3.4	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	1/3
5	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	6.8	3.6	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	4/5
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.0	3.4	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	6.4	3.4	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	完形
8	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.2)	3.4	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	1/2
9	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.2	3.7	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	4/5
10	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(7.2)	3.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：	1/4
11	陶器	瀬戸 入子	(8.4)	4.7	4.0	内面 - 紅付着	胎土：緻密 色調：胎土 - 灰色、紅 - 赤褐色	1/2

表採・表土出土遺物 (図47~56)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.0	2.4	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.8	3.9	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 良好	胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良	3/4
3	陶器	瀬戸 香炉	-	-	現 2.4	胎土：緻密 色調：胎土 - 灰白色、釉 - 淡緑色		底部 小破片
4	石製品	五輪塔 地輪	長辺 15.8	短辺 15.3	12.0	石材 - 安山岩		略完形
5	石製品	五輪塔 地輪	長辺 15.8	短辺 15.8	10.5	石材 - 安山岩		略完形
6	石製品	五輪塔 地輪	長辺 16.6	短辺 16.3	12.2	部分的に研磨されている	石材 - 安山岩	部分的 欠損
7	石製品	五輪塔 地輪	長辺 17.7	短辺 16.9	13.0	石材 - 安山岩		部分的 欠損
8	石製品	五輪塔 地輪	長辺 17.7	短辺 17.4	14.4	石材 - 安山岩		略完形
9	石製品	五輪塔 地輪	長辺 18.1	短辺 18.0	13.7	石材 - 安山岩		略完形
10	石製品	五輪塔 地輪	長辺 18.5	短辺 18.3	13.4	石材 - 安山岩		略完形
11	石製品	五輪塔 水輪	最大径 17.8	上 / 底径 10.6 / 8.4	12.1	部分的に擦痕	石材 - 安山岩	略完形
12	石製品	五輪塔 水輪	最大径 18.0	上 / 底径 11.4 / 11.2	11.3	石材 - 安山岩		略完形
13	石製品	五輪塔 水輪	最大径 18.3	上 / 底径 6.6 / 8.2	12.8	石材 - 安山岩		略完形
14	石製品	五輪塔 水輪	最大径 18.4	上 / 底径 10.0 / 10.4	12.5	石材 - 安山岩		略完形
15	石製品	五輪塔 水輪	最大径 18.8	上 / 底径 10.6 / 11.2	14.0	石材 - 安山岩		周囲 欠け
16	石製品	五輪塔 水輪	最大径 19.5	上 / 底径 10.0 / 9.0	13.5	石材 - 安山岩		略完形
17	石製品	五輪塔 水輪	最大径 19.5	上 / 底径 11.2 / 10.3	13.4	石材 - 安山岩		略完形
18	石製品	五輪塔 水輪	最大径 20.3	上 / 底径 11.0 / 9.8	13.5	石材 - 安山岩		略完形

19	石製品	五輪塔 水輪	最大径 24.5	上/底径 12.3/12.0	16.4	「華」の刻字 石材-安山岩	略完形
20	石製品	五輪塔 火輪	笠径 17.0	上/臍孔径 7.5/5.3	10.5	石材-安山岩	上面・ 笠部欠け
21	石製品	五輪塔 火輪	笠径 17.3	上/臍孔径 8.5/5.6	12.0	石材-安山岩	上面・ 笠部欠け
22	石製品	五輪塔 火輪	笠径 17.9	上/臍孔径 8.0/5.8	11.5	石材-安山岩	略完形
23	石製品	五輪塔 火輪	笠径 18.6~ 19.1	上/臍孔径 10.2/5.7 ~6.2	13.8	石材-安山岩	略完形
24	石製品	五輪塔 火輪	笠径 18.8	上/臍孔径 9.0/6.1	12.0	石材-安山岩	略完形
25	石製品	五輪塔 火輪	笠径 19.3	上/臍孔径 9.8/6.0	12.6	石材-安山岩	上面・ 笠部欠け
26	石製品	五輪塔 火輪	笠径 19.4	上/臍孔径 9.3/6.0	12.0	石材-安山岩	略完形
27	石製品	五輪塔 火輪	笠径 19.3	上/臍孔径 9.5~ 10.2/6.2	14.0	石材-安山岩	略完形
28	石製品	五輪塔 火輪	笠径 19.4~ 19.9	上/臍孔径 9.5~ 10.2/6.2	13.5	「蓮」の刻字 石材-安山岩	笠部欠け
29	石製品	五輪塔 火輪	笠径 19.4	上/臍孔径 9.2/5.8	11.0	石材-安山岩	略完形
30	石製品	五輪塔 火輪	笠径 19.8	上/臍孔径 9.0/5.5	13.6	石材-安山岩	略完形
31	石製品	五輪塔 火輪	笠径 20.2~ 20.4	上/臍孔径 10.2/6.6 ~6.9	11.0	石材-安山岩	略完形
32	石製品	五輪塔 火輪	笠径 20.1	上/臍孔径 8.7/6.3	13.1	石材-安山岩	上面・ 笠部欠け
33	石製品	五輪塔 空風輪	空輪径 12.3	風輪径 12.3	18.9	石材-安山岩	空輪 一部欠け
34	石製品	五輪塔 空風輪	空輪径 11.2	風輪径 11.6	19.9	石材-安山岩	略完形
35	石製品	五輪塔 空風輪	空輪径 11.8	風輪径 12.4	20.1	石材-安山岩	空輪 一部欠け
36	石製品	五輪塔 空風輪	空輪径 12.4	風輪径 12.8	20.7	石材-安山岩	空輪 一部欠け
37	石製品	五輪塔 空風輪	空輪径 14.3	風輪径 14.3	22.7	石材-安山岩	略完形
38	石製品	五輪塔 空風輪	空輪径 13.9	風輪径 14.2	23.0	空輪「妙」、風輪「法」の刻字 石材-安山岩	略完形
39	石製品	宝篋印塔 塔身	長辺 11.2	臍径4.5 ~5.0	13.2	4面に「妙法」・「蓮」・「華」・「経」の刻字 石材-安山岩	略完形
40	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-永樂通寶(明・1408)	完形
41	銅製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-〇〇元寶	2/3

第1面遺構外出土遺物(図57~62)

1	土器	手づくね 白かわらけ	-	-	現 3.2	胎土:緻密 色調:乳白色 焼成:良好	口縁部 小破片
2	土器	ロクロ 白かわらけ・小	(7.4)	(5.2)	1.6	底面-回転糸切 胎土:緻密 色調:乳白色 焼成:良好	1/5
3	土器	ロクロ かわらけ・極小	5.6	4.4	1.8	底面-回転糸切 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:橙色 焼成:良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.4)	4.8	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.6)	(4.8)	2.1	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:やや粗い、赤色粒、海綿骨針 色調:橙色 焼成:良好	1/2
6	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	5.2	1.9	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	5.3	2.0	口唇部に煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:橙褐色 焼成:良好	略完形
8	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(5.2)	2.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:精良、赤色粒、海綿骨針 色調:薄褐色、赤色粒、海綿骨針 焼成:良好	1/2
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.0	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明褐色 焼成:良好	略完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.0)	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、砂粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	1/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.4	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:薄褐色 焼成:良好	1/2
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.4	2.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:橙色 焼成:良好	完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.0)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:薄褐色 焼成:良好	1/4
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	1.8	酸化鉄付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、海綿骨針、赤色粒 色調:薄褐色 焼成:良好	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	5.0	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:緻密、赤色粒、海綿骨針 色調:明黄褐色 焼成:良好	1/2



16	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.0)	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	1/3
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.0	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	3/4
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(4.3)	2.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙褐色 焼成：良好	1/3
19	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.6	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	1/2
20	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.0	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明灰褐色 焼成：良好	完形
21	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.6	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、砂粒、海綿骨針 色調：黄褐色 焼成：良好	略完形
22	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.8	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	略完形
23	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.8	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	略完形
24	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.0	1.7	口縁～体部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：黄褐色～暗褐色 焼成：良好	3/4
25	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.2	1.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	3/4
26	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.4	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	3/4
27	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.3	2.1	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	略完形
28	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.0)	2.2	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/2
29	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.8	2.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	完形
30	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.8	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	略完形
31	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.3	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：赤褐色 焼成：良好	1/2
32	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.4	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	略完形
33	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.0)	2.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	1/2
34	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.4)	2.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/4
35	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.5	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明灰褐色 焼成：良好	略完形
36	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.2	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	完形
37	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.2)	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針、砂粒 色調：明褐色 焼成：良好	1/4
38	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	6.2	2.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/2
39	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	(6.4)	2.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/3
40	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.0	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕→焼成後中心に切削加工 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明灰褐色 焼成：良好	3/4
41	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.6)	(6.4)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/3
42	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.8)	2.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/3
43	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.2	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	2/3
44	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	5.3	3.0	底面一回転糸切 外面二次焼成痕跡 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色～黒褐色 焼成：良好	略完形
45	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(5.6)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙褐色 焼成：良好	1/2
46	土器	ロクロ かわらけ・中	11.0	6.4	2.6	底面一回転糸切 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：赤褐色 焼成：良好	7/8
47	土器	ロクロ かわらけ・中	11.0	6.4	3.0	底面一回転糸切 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：赤褐色 焼成：良好	2/3
48	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	(7.0)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/3
49	土器	ロクロ かわらけ・中	11.3	6.0	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：精良、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	4/5
50	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(8.0)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	1/3
51	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	7.0	3.3	底面一回転糸切 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	3/4
52	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	8.0	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	4/5
53	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	7.4	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：暗橙褐色 焼成：良好	1/2
54	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	8.2	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	1/4
55	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(6.6)	3.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	1/4
56	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.4)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	1/4

57	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(6.6)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	1/4
58	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	8.4	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	2/3
59	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	8.5	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄褐色 焼成：良好	3/5
60	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(8.2)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙褐色 焼成：良好	1/2
61	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	6.6	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄褐色 焼成：良好	2/3
62	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(5.8)	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	完形
63	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	6.5	3.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	略完形
64	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.0	2.9	底面-回転糸切 内底-二次焼成 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：褐色～黒褐色 焼成：良好	1/4
65	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	6.9	3.4	口唇部に煤付着 底面-回転糸切 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	略完形
66	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.0	3.5	底面-回転糸切 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	2/3
67	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(7.4)	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/2
68	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	7.5	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明褐色 焼成：良好	3/4
69	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.0	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄褐色 焼成：良好	1/3
70	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(10.6)	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/2
71	土器	ロクロ かわらけ・大?	-	-	現 5.2	底面-静止糸切? 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/6
72	磁器	白磁 口兀皿	(10.0)	-	現 3.1	色調：胎土-白色、釉-白色 備考：白磁皿Ⅸ類	1/4
73	磁器	白磁 口兀皿	(10.8)	(6.2)	3.0	底面-ヘラ切り 色調：胎土-白色、釉-白色 備考：白磁皿Ⅸ類	1/8
74	磁器	白磁 口兀皿	(11.0)	(7.0)	3.5	底面-ヘラ切り 色調：胎土-白色、釉-白色 備考：白磁皿Ⅸ類	1/8
75	磁器	青磁 碗	-	6.8	現 1.9	劃花文碗 高台・畳付-露胎 色調：胎土-灰白色、釉-緑青色 備考：龍泉窯系青磁碗Ⅰ類	1/3
76	磁器	青磁 碗	-	-	現 3.6	外面-鎚蓮弁文 色調：胎土-灰色、釉-緑青色 備考：龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	口縁部 小破片
77	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 6.2	胎土：緻密 色調：胎土-灰色、釉-淡灰黄色	口縁部 小破片
78	陶器	瀬戸 合子蓋	6.2	3.3	1.3	上面-鉄釉 裏面-無釉 胎土：密 色調：胎土-灰白色、鉄釉-暗褐色	4/5
79	陶器	瀬戸 縁釉皿	(9.8)	(4.2)	2.7	口縁部-灰釉 胎土：緻密 色調：胎土-灰褐色、釉-薄緑色～透明	1/6
80	陶器	瀬戸 袴腰香炉	-	-	現 4.8	脚付 外面-蓮弁文 胎土：密、白色粒 色調：胎土-灰色、釉-緑褐色 備考：古瀬戸中期様式Ⅱ～Ⅲ期	底部 小破片
81	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.1	胎土：粗、白色粒 色調：暗褐色 備考：5型式	口縁部～ 頸部小破片
82	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.5	胎土：粗、白色粒 色調：暗褐色 備考：5～6 a型式	口縁部 小破片
83	陶器	常滑 甕	-	-	現 10.9	胎土：粗、白色粒 色調：暗褐色 備考：6 a型式	口縁部～ 頸部小破片
84	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.4	胎土：粗、白色粒 色調：暗褐色 備考：6 a～b型式	口縁部 小破片
85	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.0	胎土：粗、白色粒 色調：暗褐色 備考：6 b～7型式	口縁部 小破片
86	陶器	常滑 甕	-	-	現 6.0	胎土：粗、白色粒 色調：暗褐色 備考：7型式	口縁部 小破片
87	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	-	現 5.0	胎土：粗、白色粒 色調：茶褐色	口縁部 小破片
88	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.5	胎土：粗 色調：暗褐色	口縁部 小破片
89	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.8	胎土：粗 色調：暗褐色	口縁部 小破片
90	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 6.8	胎土：粗 色調：橙色	口縁部 小破片
91	陶器	常滑 搦鉢	-	-	現 6.8	内面-5本一単位の挿目 胎土：粗、白色粒 色調：茶褐色	口縁部 小破片
92	陶器	山茶碗窯系 片口鉢	-	-	現 3.7	胎土：粗、白色粒 色調：灰色	口縁部 小破片
93	陶器	山茶碗窯系 片口鉢	-	(12.8)	現 6.3	胎土：粗、白色粒 色調：灰褐色	底部 1/3
94	陶器	摩耗陶片	長 6.4	幅 5.5	厚 1.0	常滑甕の破片を転用 破断面摩耗 胎土：粗 色調：暗褐色	-
95	土器	火鉢	-	-	現 7.3	胎土：緻密 色調：橙色 焼成：良好	口縁部 小破片
96	瓦器	火鉢	-	-	現 3.4	外面-剣先文 胎土：緻密 色調：暗灰色 焼成：良好	口縁部 小破片

97	瓦器	火鉢	-	-	現 4.5	胎土：緻密 色調：明灰色 焼成：良好	口縁部 小破片
98	瓦器	火鉢	-	-	現 8.6	胎土：緻密 色調：黄褐色～暗褐色 焼成：良好	口縁部 小破片
99	瓦器	火鉢	-	-	現 9.0	焼成前穿孔(径0.4cm) 胎土：緻密 色調：明灰色 焼成：良好	口縁～底部 小破片
100	土製品	土鉢	長 6.6	幅 1.9	孔径 0.5	胎土：緻密 色調：橙色	略完形
101	瓦	平瓦	現長 14.0	現幅 12.9	厚 2.3	凸面-縄目敲き 凹面-ナデ	1/6?
102	石製品	滑石製石鍋	-	-	現 3.6	色調：灰褐色	口縁部 小破片
103	石製品	滑石製石鍋	-	-	現 2.4	色調：明灰褐色	取手部 小破片
104	石製品	泥岩 加工品	長 22.5	短 14.1	厚 7.3	凸字状 上面-鑿跡	略完形
105	石製品	砥石	現長 6.3	幅 3.6	厚 1.0	1面に使用痕跡 石材-凝灰岩	1/2
106	石製品	砥石	現長 7.0	現幅 3.4	厚 2.0	3面に使用痕跡 石材-砂岩 色調：明灰褐色	2/3
107	石製品	砥石	現長 9.2	幅 6.2	厚 4.4	4面に使用痕跡 石材-凝灰岩	1/2
108	石製品	砥石	長 12.1	幅 4.0	厚 2.5	4面に使用痕跡 石材-凝灰岩	略完形
109	石製品	宝篋印塔 反花座	長辺 27.2	短辺 26.5	11.2	反花-12弁 格狭間-二区画 石材-安山岩	略完形
110	鉄製品	釘	現長 5.0	幅 1.2	厚 0.6	鍛造	3/4
111	鉄製品	釘	現長 4.8	幅 0.8	厚 0.8	鍛造	3/4
112	骨製品	筭	現長 8.1	幅 0.7	厚 0.2	シカ中足骨製	1/2
113	骨製品	筭	現長 5.7	幅 1.2	厚 0.3	シカ中足骨製	1/2
114	骨製品	筭	現長 5.6	幅 1.3	厚 0.3	シカ中足骨製	1/2
115	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
116	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
117	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
118	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
119	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.8	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
120	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-開元通寶(南唐・960)	完形
121	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-景德元寶(北宋・1004)	完形
122	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-天聖元寶(北宋・1023)	完形
123	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.8	厚 0.1	銭名-天聖元寶(北宋・1023)	完形
124	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
125	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.8	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
126	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
127	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
128	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
129	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
130	銅製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.8	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
131	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
132	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-皇宋通寶(北宋・1038)	完形
133	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-嘉祐通寶(北宋・1056)	完形
134	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-治平元寶(北宋・1064)	完形
135	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-熙寧元寶(北宋・1068)	完形
136	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名-元豐通寶(北宋・1078)	完形

137	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 元豊通寶 (北宋・1078)	完形
138	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 元祐通寶 (北宋・1086) ?	完形
139	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 紹聖元寶 (北宋・1094)	完形
140	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 紹聖元寶 (北宋・1094)	完形
141	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 聖宋元寶 (北宋・1101)	完形
142	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 聖宋元寶 (北宋・1101)	完形
143	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 政和通寶 (北宋・1111)	完形
144	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 政和通寶 (北宋・1111)	完形
145	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 皇宋元寶 (南宋・1253)	完形
146	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 皇宋元寶 (南宋・1253)	完形
147	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 洪武通寶 (明・1368)	完形
148	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
149	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
150	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
151	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
152	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 永樂通寶 (明・1408)	完形
153	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - ○○元寶	完形
154	銅製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭名 - 不明	完形
155	銅製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭名 - 不明	完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内( )=推定値

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑2 出土遺物 (図63)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	6.8	3.9	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 暗橙褐色 ~ 暗褐色 焼成: 良好	3/4
---	----	---------------	------	-----	-----	--	-----

ピット出土遺物 (図68)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.6	2.2	口縁部に煤付着 底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明黄褐色 焼成: 良好 出土遺構: ピット27	3/4
2	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.0	胎土: 粗、白色粒 色調: 暗褐色 出土遺構: ピット33 備考: 5 型式	口縁部 小破片
3	陶器	山茶碗窯系 片口鉢	-	-	現 4.7	胎土: 粗 色調: 灰褐色 出土遺構: ピット22	口縁部 小破片
4	陶器	山茶碗窯系 片口鉢	-	-	現 5.6	胎土: 粗 色調: 灰褐色 出土遺構: ピット34	口縁部 小破片
5	鉄製品	釘	現長 19.4	幅 0.6~0.8	厚 0.6~0.8	鍛造 出土遺構: ピット3	略完形

第2面遺構外出土遺物 (図69・70)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	6.0	2.2	口唇部に煤付着 底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.2	1.9	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針、砂粒 色調: 橙褐色 焼成: 良好	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.8)	1.6	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明黄褐色 焼成: 良好	1/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(6.4)	1.4	口唇部に煤付着 底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 橙色 焼成: 良好	1/6
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.2	1.8	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(5.6)	1.8	歪みが大きい 底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 赤橙色 焼成: 良好	2/3
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.2	1.3	口唇部に煤付着 底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.5	2.0	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、砂粒、海綿骨針 色調: 明褐色 焼成: 良好	1/2
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.2)	1.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	6.8	1.5	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 明黄褐色 焼成: 良好	1/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.8	1.9	底面 - 回転糸切 + 板状圧痕 胎土: 緻密、赤色粒、海綿骨針 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3



12	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	5.2	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	1/3
13	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.0	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、砂粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	完形
14	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	6.4	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：灰褐色 焼成：良好	1/2
15	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(7.4)	1.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 砂粒 色調：明黄褐色 焼成：良好	1/2
16	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	(7.0)	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：黄灰色 焼成：良好	1/3
17	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.6)	(7.0)	4.1	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	1/3
18	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.0)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：橙色 焼成：良好	1/4
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.6)	3.2	口唇部に煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：明黄褐色 焼成：良好	1/3
20	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(8.2)	4.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：緻密、赤色粒、海綿骨針 色調：薄橙色 焼成：良好	1/3
21	陶器	瀬戸 御皿	-	-	3.3	胎土：緻密 色調：胎土-灰色	口縁~底部 小破片
22	陶器	瀬戸 水注	2.6	3.6	3.9	外面-鉄釉、体部下半以下無釉 胎土：密 色調：胎土-灰白色、鉄釉-暗褐色	略完形
23	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 4.0	胎土：粗、白色粒 色調：灰色	口縁部 小破片
24	陶器	山茶碗窯系 片口鉢	-	-	現 5.5	胎土：粗、白色粒 色調：灰色	口縁部 小破片
25	陶器	山茶碗窯系 片口鉢	-	-	現 10.0	胎土：粗、白色粒 色調：灰褐色	口縁部 小破片
26	瓦質 土器	火鉢	-	-	9.5	焼成前穿孔(径0.2~0.6cm) 胎土：緻密 色調：灰色 焼成：良好	口縁~底部 小破片
27	石製品	石白 茶臼	受皿径 (30.4)	下臼径/ 孔径 18.8/2.1	8.9	8分画? 9~10溝 石材-安山岩	1/4
28	木製品	櫛	現長 4.9	現幅 3.1	厚 0.4	櫛歯50本遺存	2/3
29	木製品	漆器椀	-	7.4	現 3.8	黒漆の下地に朱漆による文様(花文)	底部破片
30	骨製品	筭	長 (11.8)	幅 0.9	厚 0.6	シカ中足骨製	4/5
31	銅製品	錢貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	錢名-祥符元寶(北宋・1008)?	略完形
32	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名-元祐通寶(北宋・1086)?	完形
33	銅製品	錢貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	錢名-元符通寶(北宋・1098)	7/8

表4 土坑墓・埋葬人骨一覧表

( )=推定値、〈 〉=現存値

区	遺構名	土坑墓形態	規模(cm)	頭位 方向	埋葬姿勢	木 棺(cm)	副葬品	備 考
I	土坑墓1	隅丸長方形	93×74×17	南東	仰臥屈葬	-	錢貨6枚、数珠玉(ガラス製)1個	17世紀代
I	土坑墓2	隅丸方形 もしくは 隅丸長方形	86×(54)×11	西	南面側臥屈葬	-	錢貨1枚	15~16世紀代
I	土坑墓3	隅丸長方形	98×71×26	北	西面側臥屈葬	-	かわらけ(大1、小1)2点、錢貨4枚	15~16世紀代、地輪が覆土 最上部から出土
I	土坑墓4	方形	85×78×14	北	西面側臥屈葬	-	かわらけ(中1、小1)2点、錢貨7枚	15~16世紀代
I	土坑墓5	隅丸長方形	105×82×15	北西	側臥屈葬	-	かわらけ(小)1点、錢貨5枚	15~16世紀代
I	土坑墓6	隅丸長方形	95×68×17	北	東面側臥屈葬	-	かわらけ(大1、中1)2点	15~16世紀代
I	土坑墓7	隅丸長方形	100×78×20	南西	北面側臥屈葬	-	錢貨7枚	15~16世紀代
I	土坑墓8	隅丸長方形	114×95×24	南	東面側臥屈葬	〈43〉×67×〈20〉	錢貨6枚	15~16世紀代
I	土坑墓9	楕円形	107×90×29	西	北面側臥屈葬	-	刀子2点、錢貨3枚	15~16世紀代
I	土坑墓10	隅丸長方形	106×80×18	北東	西面側臥屈葬	〈67〉×(54)×〈15〉	錢貨6枚	15~16世紀代
I	土坑墓11	-	-	北西	側臥屈葬	〈52〉×〈26〉×〈10〉	-	-
II	土坑墓12	略正方形	76×72×19	西	南面側臥屈葬	-	-	-
II	土坑墓13	-	-	北	西面側臥屈葬?	〈29〉×43×〈5〉	-	15~16世紀代
II	土坑墓14	-	-	北	南面側臥屈葬?	〈15〉×45×〈10〉	-	-
II	土坑墓15	隅丸長方形	112×〈70〉×19	北	西面側臥屈葬	-	-	15~16世紀代
II	土坑墓16	隅丸長方形	〈122〉×100×16	北東	南東面側臥屈葬	-	かわらけ(中)2点、錢貨6枚	15~16世紀代
II	土坑墓17	隅丸長方形?	〈42〉×51×19	北東	南西面側臥屈葬	-	錢貨1枚	15~16世紀代
II	土坑墓18	長方形?	〈78〉×〈63〉×15	東?	側臥屈葬?	-	かわらけ(中1、小2)3点	15~16世紀代
II	土坑墓19	隅丸長方形	91×64×16	北西	南面側臥屈葬	-	-	15~16世紀代
II	土坑墓20	楕円形	97×70×20	北東	南西面側臥屈葬	-	かわらけ(大1、小1)2点、錢貨13枚、数 珠玉(ガラス製)1個	15~16世紀代、覆土中に宝 篋印塔基礎出土
II	土坑墓21	隅丸長方形	〈105〉×74×15	北	西面側臥屈葬	-	かわらけ(大1、小2)3点、錢貨5枚	15~16世紀代、土坑底面に 玉石を敷く
II	土坑墓22- 人骨A	楕円形?	〈107〉×〈80〉×24	北	西面側臥屈葬	-	錢貨2枚	-
II	土坑墓22- 人骨B	-	-	北?	側臥屈葬?	-	-	-

II	土坑墓23	隅丸長方形?	〈90〉×〈27〉×16	北?	側臥屈葬?	-	-	15~16世紀代
II	土坑墓24	長方形	113×68×10	西	南面側臥屈葬	-	かわらけ(中1、小1)2点、銭貨2枚	15~16世紀代
II	土坑墓25	方形	82×79×12	北?	側臥屈葬?	-	かわらけ(大)1点	15~16世紀代
II	土坑墓26	長方形	〈26〉×44×62	北	西面側臥屈葬?	-	かわらけ(大1、小1)2点、銭貨5枚	15~16世紀代
II	土坑墓27	隅丸長方形	126×104×11	北	南西面側臥屈葬	81×52×12	かわらけ(小)1点、漆椀3点	15~16世紀代、掘り方底面から漆器出土
I	埋葬人骨1	-	-	北	-	-	-	15~16世紀代
I	埋葬人骨2	-	-	北	西面側臥屈葬	-	銭貨4枚、釘2本	15~16世紀代
I	埋葬人骨3	-	-	南	東面側臥屈葬	-	かわらけ(大1、小1)2点、銭貨6枚	15~16世紀代
I	埋葬人骨4	-	-	北	仰臥屈葬?	-	数珠玉(ガラス製)4点	-
I	埋葬人骨5	-	-	西?	仰臥屈葬?	-	銭貨18枚	17世紀代
I	埋葬人骨6	-	-	-	-	-	-	15~16世紀代
I	埋葬人骨7	-	-	-	-	-	-	-
I	埋葬人骨8	-	-	-	-	-	-	15~16世紀代
I	埋葬人骨9	-	-	-	-	-	-	大腿骨、脛骨のみ
I	埋葬人骨10	-	-	北	西面側臥屈葬	-	かわらけ(中1、小2)3点、銭貨6枚	15~16世紀代
II	埋葬人骨11	-	-	北	西面側臥屈葬	-	-	子供か?
II	埋葬人骨12	-	-	北東?	側臥屈葬	-	-	15~16世紀代、子供か?
II	埋葬人骨13	-	-	-	-	-	-	-
II	埋葬人骨14	-	-	-	-	-	-	-
II	埋葬人骨15	-	-	北?	側臥屈葬	-	かわらけ(大1、中2、小3)6点、銭貨8枚	15~16世紀代
II	埋葬人骨16	-	-	-	-	-	かわらけ(小)2点	15~16世紀代

表5 火葬墓・土坑・ピット計測表

〈 〉=現存値

遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
火葬墓1	第1面	〈105〉	〈72〉	20	ピット3	第2面	56	35	19	ピット19	第2面	24	-	17
火葬墓2	第1面	〈178〉	〈85〉	30	ピット4	第2面	50	-	32	ピット20	第2面	19	-	21
土坑1	第1面	140	87	22	ピット5	第2面	48	42	23	ピット21	第2面	28	〈7〉	10
土坑2	第2面	〈73〉	〈58〉	5	ピット6	第2面	39	-	22	ピット22	第2面	〈46〉	38	27(18)
土坑3	第2面	65	61	21	ピット7	第2面	32	-	30	ピット23	第2面	20	-	-
土坑4	第2面	95	〈34〉	5	ピット8	第2面	41	34	19	ピット24	第2面	〈30〉	25	4
土坑5	第2面	〈93〉	〈42〉	25	ピット9	第2面	〈27〉	35	10	ピット25	第2面	20	-	14
土坑6	第2面	260	150	23	ピット10	第2面	33	25	9	ピット26	第2面	〈35〉	〈21〉	5
土坑7	第2面	75	〈36〉	14	ピット11	第2面	30	-	22	ピット27	第2面	〈20〉	29	10
土坑8	第2面	〈100〉	93	11	ピット12	第2面	26	20	22	ピット28	第2面	39	-	4
土坑9	第2面	〈79〉	〈30〉	4	ピット13	第2面	19	15	9	ピット29	第2面	26	-	7
土坑10	第2面	〈80〉	〈22〉	4	ピット14	第2面	32	18	21	ピット30	第2面	17	13	9
土坑11	第2面	78	〈59〉	17	ピット15	第2面	22	16	20	ピット31	第2面	26	-	16
土坑12	第2面	〈70〉	〈30〉	11	ピット16	第2面	40	-	13	ピット32	第2面	〈29〉	-	9
ピット1	第2面	〈33〉	-	32	ピット17	第2面	〈16〉	30	10	ピット33	第2面	〈40〉	〈32〉	18
ピット2	第2面	46	〈32〉	10	ピット18	第2面	43	32	26	ピット34	第2面	30	-	16

表6 出土遺物一覧表

第1面

火葬墓2			土坑墓2			土坑墓4		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形極小	1		白かわらけ	1		かわらけ ロクロ成形小	1
	かわらけ ロクロ成形大	1		かわらけ ロクロ成形小	1		かわらけ ロクロ成形大	1
	かわらけ ロクロ成形大	1		かわらけ ロクロ成形大	1			
【青磁】			【陶器】			【青磁】		
龍泉窯系	皿I類	1	瀬戸	花瓶	2	龍泉窯系	椀I類	1
【陶器】			瀬戸	花瓶	2	【陶器】		
瀬戸	瓶子(灰釉)	1	渥美	甕	1	瀬戸	鉢	1
	花瓶(褐釉)	1	常滑	甕	4	魚住	片口鉢	1
	小皿	1	【石製品】			常滑	甕	22
常滑	甕	2		滑石製鍋	2		山茶碗	1
【金属製品】				砥石	1	【金属製品】		
	銭貨	6	【金属製品】				銭貨	7
	釘	1		銭貨	1	合計		
	合計	15		釘	1	合計		
合計				合計	15	合計		
土坑墓1			土坑墓3			土坑墓5		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形小	1		かわらけ ロクロ成形小	1		かわらけ ロクロ成形小	1
	かわらけ ロクロ成形大	1		かわらけ ロクロ成形大	1	合計		
【陶器】			【陶器】			合計		
瀬戸	入子	2	常滑	甕	3	合計		
常滑	甕	4	山茶碗窯	片口鉢	1	合計		
【瓦質土器】			【瓦質土器】			合計		
	火鉢	1	【ガラス製品】			合計		
【ガラス製品】			【金属製品】			合計		
	数珠玉	1	【金属製品】			合計		
【金属製品】			【金属製品】			合計		

かわらけ	ロクロ成形中	1
かわらけ	ロクロ成形大	1
【陶器】		
常滑	甕	6
【金属製品】		
	銭貨	5
合計 14		

土坑墓6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形中	1
かわらけ	ロクロ成形大	1
合計 2		

土坑墓7		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ		1
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形大	1
【金属製品】		
	銭貨	7
	釘	1
合計 11		

土坑墓8		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形大	1
【石製品】		
	板碑	1
【金属製品】		
	銭貨	6
合計 8		

土坑墓9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	2
かわらけ	ロクロ成形大	3
【陶器】		
常滑	甕	7
【金属製品】		
	銭貨	3
	刀子	2
合計 17		

土坑墓10		
産地	器種	破片数
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【金属製品】		
	銭貨	6
合計 8		

土坑墓12		
産地	器種	破片数
【白磁】		
	口元皿	2
【陶器】		
瀬戸	鉢	2
	山茶碗	2
常滑	甕	12
	片口鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
合計 20		

土坑墓13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形大	1

【陶器】		
瀬戸	花瓶(褐釉)	1
合計 2		

土坑墓15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形中	1
かわらけ	ロクロ成形大	6

【陶器】		
常滑	甕	3
	広口壺	1
	播鉢	1
合計 13		

土坑墓16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形中	2
かわらけ	ロクロ成形大	1
【金属製品】		
	銭貨	6
合計 9		

土坑墓17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形大	2
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	2
【金属製品】		
	銭貨	1
	釘	1
合計 8		

土坑墓18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	2
かわらけ	ロクロ成形大	1
【陶器】		
瀬戸	瓶類	1
常滑	甕	1
合計 5		

土坑墓19		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形大	2
【陶器】		
常滑	甕	1
合計 3		

土坑墓20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形大	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1

【陶器】		
常滑	甕	2
	片口鉢Ⅱ類	1
	山茶碗	1
【石製品】		
	宝篋印塔(基礎)	1
【ガラス製品】		
	数珠玉	1

【金属製品】		
	銭貨	12
合計 21		

土坑墓21		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	2
かわらけ	ロクロ成形大	1

【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1

【陶器】		
常滑	甕	6
【石製品】		
	五輪塔(地輪)	1
【金属製品】		
	銭貨	5
合計 16		

土坑墓22		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	水注	1
【金属製品】		
	銭貨	2
合計 3		

土坑墓23		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形大	1
【陶器】		
常滑	甕	1
合計 3		

土坑墓24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形中	1
【金属製品】		
	銭貨	2
【骨製品】		
	用途不明	1
合計 5		

土坑墓25		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形大	1
【白磁】		
	壺	1
【陶器】		
常滑	甕	2
合計 4		

土坑墓26		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形大	1
【金属製品】		
	銭貨	5
合計 7		

土坑墓27		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形小	1
かわらけ	ロクロ成形大	2
【陶器】		
常滑	甕	3
【木製品】		
	漆器椀	1
合計 7		

埋葬人骨1		
産地	器種	破片数







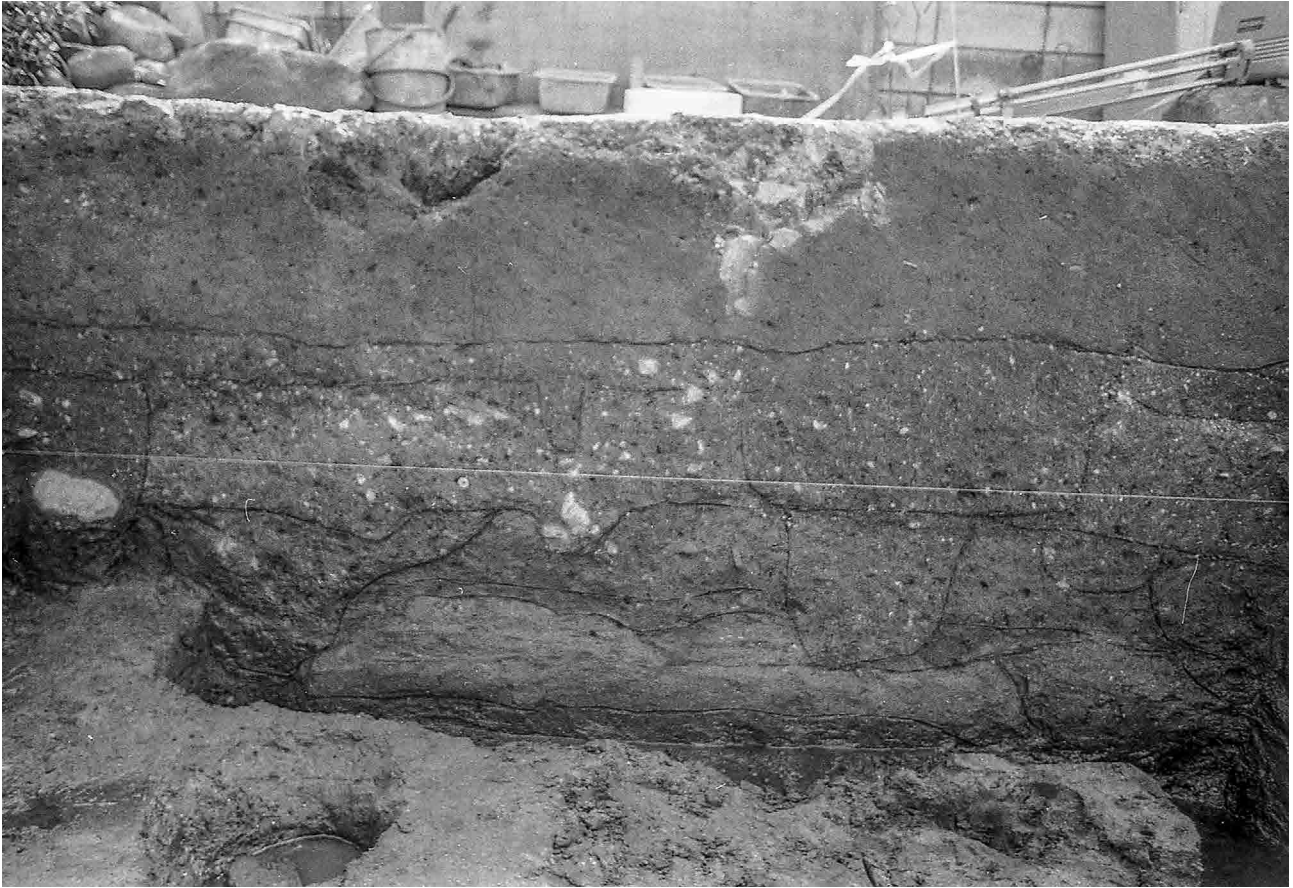


1. 調査区近景(南西から)



2. 調査区近景(北西から)





1. I区南壁土層断面(北から)



2. II区南壁土層断面(北から)





1. I区第1面全景(北から)



2. I区第1面調査風景(北から)





1. II区第1面北半(南から)



2. II区第1面南半(北から)





1. 第1面 土坑墓1人骨出土状態(西から)



2. 第1面 土坑墓2人骨出土状態(南から)





1. 第1面 土坑墓3人骨出土状態(東から)



2. 第1面 土坑墓4人骨出土状態(東から)

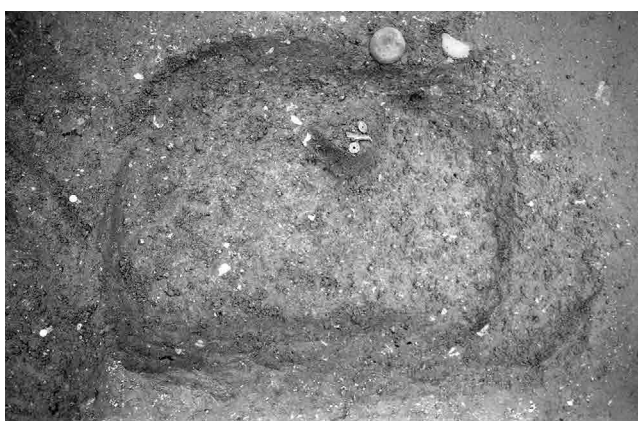




1. 第1面 土坑墓1 銭貨出土状態1 (北西から)



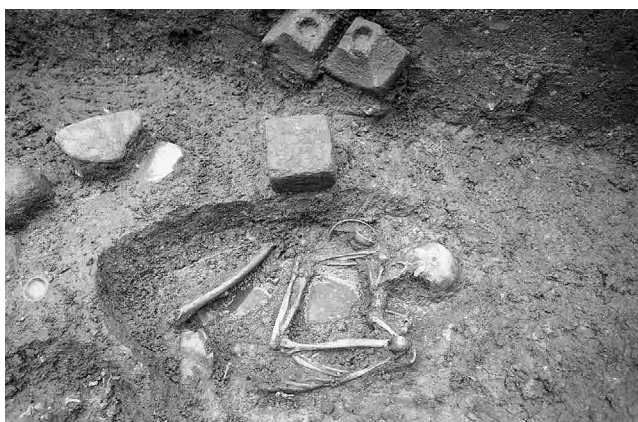
2. 第1面 土坑墓1 銭貨出土状態2 (西から)



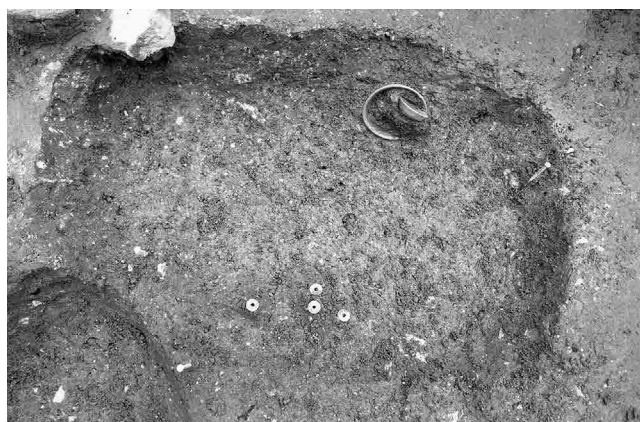
3. 第1面 土坑墓1 完掘状態 (西から)



4. 第1面 土坑墓2 銭貨出土状態1 (北から)



5. 第1面 土坑墓3 人骨および地輪出土状態 (東から)



6. 第1面 土坑墓3 掘り方および副葬品出土状態 (東から)



7. 第1面 土坑墓4 掘り方および副葬品出土状態 (南東から)



8. 第1面 土坑墓4 銭貨 (図13-4~10) 出土状態





1. 第1面 土坑墓5人骨出土状態(西から)



2. 第1面 土坑墓6人骨出土状態(南東から)

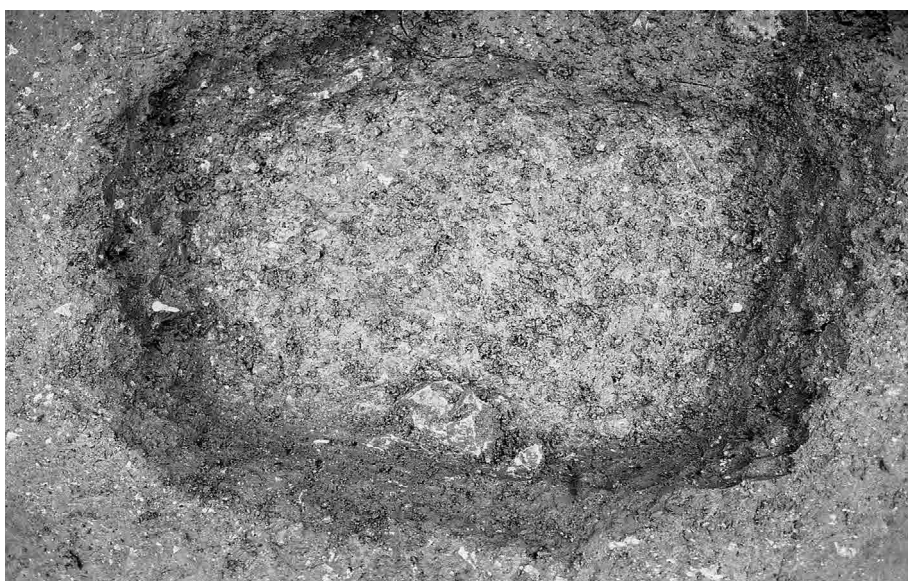




1. 第1面 土坑墓6かわらけ出土状態1 (西から)



2. 第1面 土坑墓6かわらけ出土状態2 (南東から)



3. 第1面 土坑墓6完掘(北西から)





1. 第1面 土坑墓7人骨出土状態(北西から)



2. 第1面 土坑墓8人骨出土状態(北から)





1. 第1面 土坑墓9人骨出土状態(北から)



2. 第1面 土坑墓10人骨出土状態(南東から)





1. 第1面 土坑墓10木棺底板出土状態(西から)



2. 第1面 土坑墓11人骨出土状態(南西から)



3. 第1面 土坑墓14人骨出土状態(北から)





1. 第1面 土坑墓12人骨出土状態(東から)



2. 第1面 土坑墓13(左)・17(右)人骨出土状態(南西から)





1. 第1面 土坑墓15人骨出土状態(南から)



2. 第1面 土坑墓16人骨出土状態(南東から)





1. 第1面 土坑墓17人骨出土状態(南西から)



2. 第1面 土坑墓18人骨出土状態(南東から)





1. 第1面 土坑墓19人骨出土状態(北東から)



2. 第1面 土坑墓20人骨出土状態(南東から)





1. 第1面 土坑墓15・21・22(右から)人骨出土状態(南西から)



2. 第1面 土坑墓22人骨A・B出土状態(東から)





1. 第1面 土坑墓24人骨出土状態(北から)



2. 第1面 土坑墓24錢貨出土状態  
(南西から)



3. 第1面 土坑墓24かわらけ出土  
状態(南から)





1. 第1面 土坑墓23人骨出土状態(西から)



2. 第1面 土坑墓25人骨出土状態(東から)



3. 第1面 土坑墓26人骨出土状態(北から)





1. 第1面 土坑墓27人骨出土状態(南東から)



2. 第1面 土坑墓27木棺および掘り方検出状態(南から)





1. 第1面 土坑墓27木棺検出状態(西から)



2. 第1面 土坑墓27木棺アップ



3. 第1面 土坑墓27完掘状態(東から)



4. 第1面 土坑墓27漆器碗出土状態

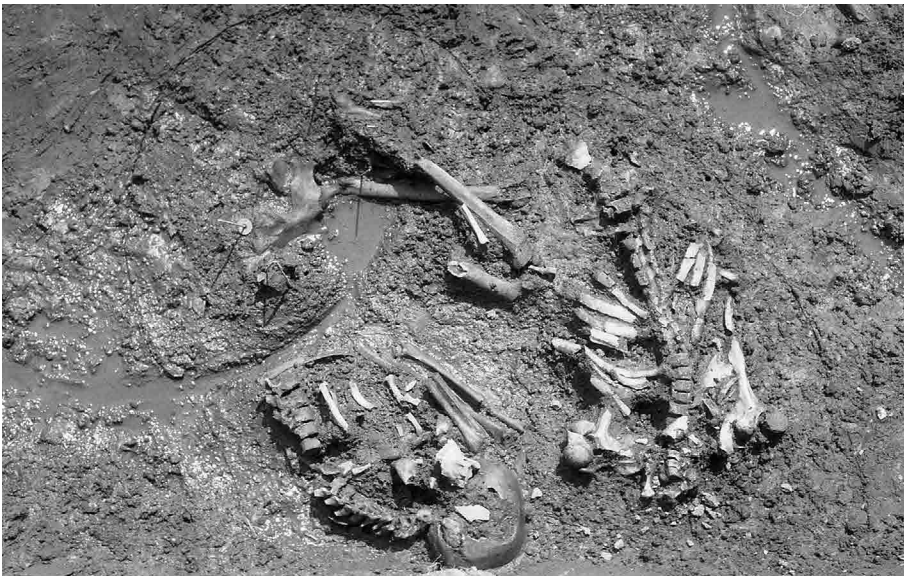


5. 第1面 埋葬人骨3出土状態(南から)





1. 第1面 埋葬人骨1 (左)・5 (右) 出土状態 (西から)



2. 第1面 埋葬人骨2 (左)・4 (右) 出土状態 (北から)



3. 第1面 埋葬人骨3 銭貨出土状態 (北西から)

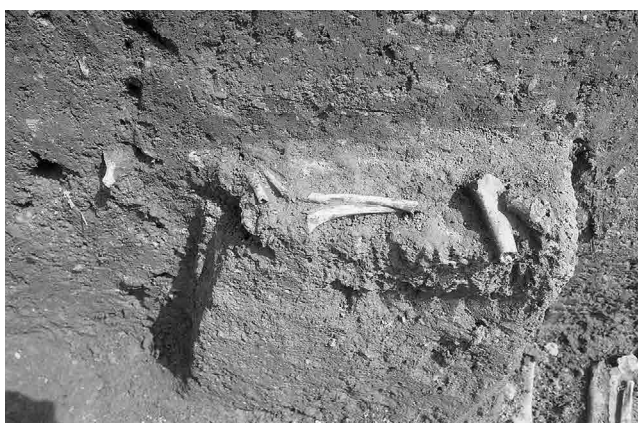




1. 第1面 埋葬人骨4数珠玉出土状態



2. 第1面 埋葬人骨6出土状態(北西から)



3. 第1面 埋葬人骨7出土状態(北西から)



4. 第1面 埋葬人骨8(右)・9(左)出土状態(北東から)



5. 第1面 埋葬人骨10出土状態(東から)





1. 第1面 埋葬人骨11出土状態(東から)



2. 第1面 埋葬人骨15出土状態(北西から)





1. 第1面 埋葬人骨12出土状態(北西から)



2. 第1面 埋葬人骨13出土状態(南東から)



3. 第1面 埋葬人骨14出土状態(南から)



4. 第1面 埋葬人骨16出土状態(北西から)



5. 第1面 火葬墓1 灰層検出状態(南から)



6. 第1面 火葬墓2 火葬骨検出状態(南から)



7. 第1面 土坑1 遺物出土状態(北西から)



8. 第1面 土坑1 かわけ出土状態近接(北西から)





1. I区第2面全景(北から)



2. II区第2面全景(北西から)





1. 第2面 土坑2 (北西から)



2. 第2面 土坑6 (北西から)



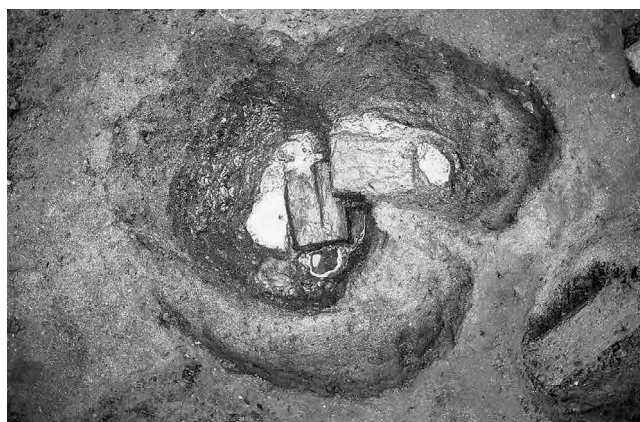
3. 第2面 ピット3・6・8 (北東から)



4. 第2面 土坑6 覆土中礎板出土状態



5. 第2面 ピット3 (北東から)



6. 第2面 ピット4・5 (北から)



7. 第2面 ピット6 (北東から)



8. 第2面 ピット7 (西から)





1. 第1面 火葬墓2出土遺物

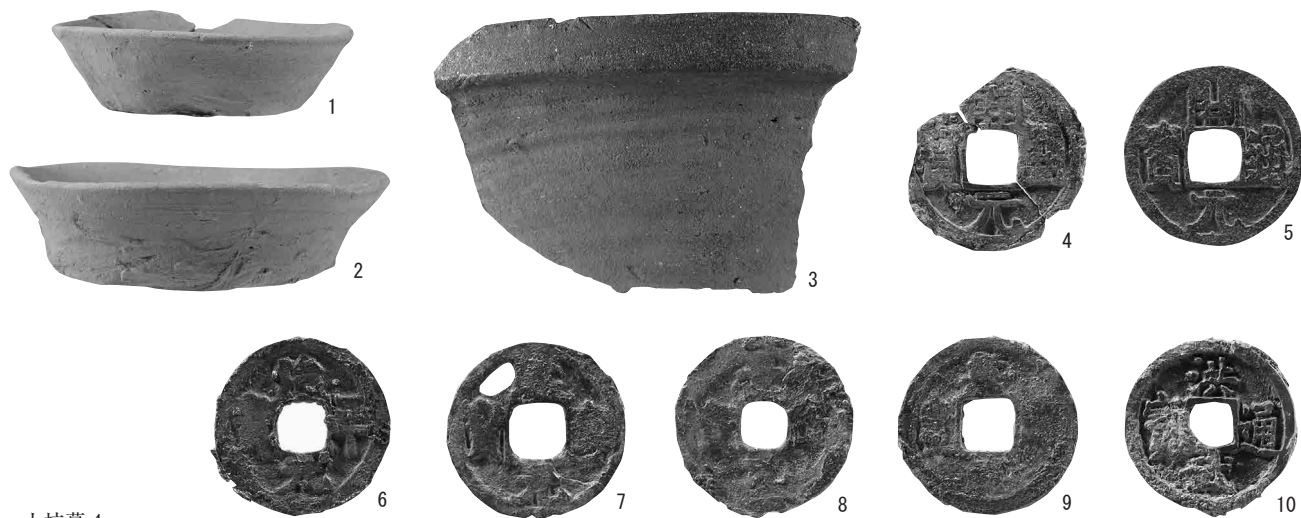


土坑墓1



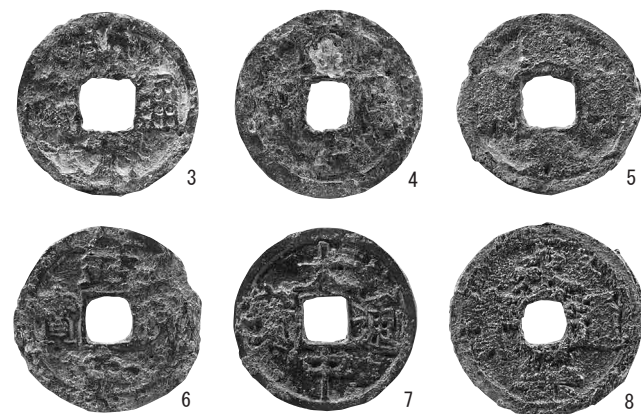
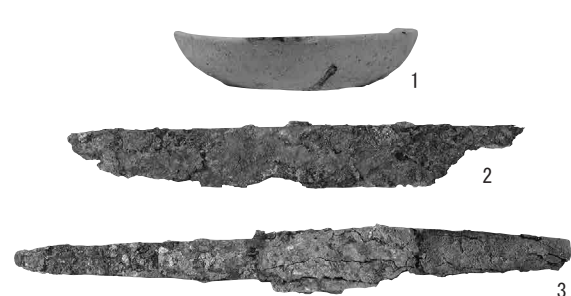
土坑墓2

土坑墓3



土坑墓4

2. 第1面 土坑墓出土遺物(1)



1. 第 1 面 土坑墓出土遗物 (2)

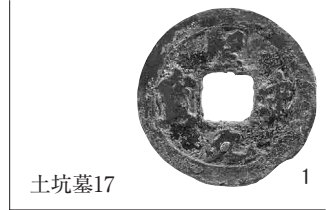




1



2



土坑墓17

1



3



4



5



6



7



8

土坑墓16



1



2



3



4

土坑墓18



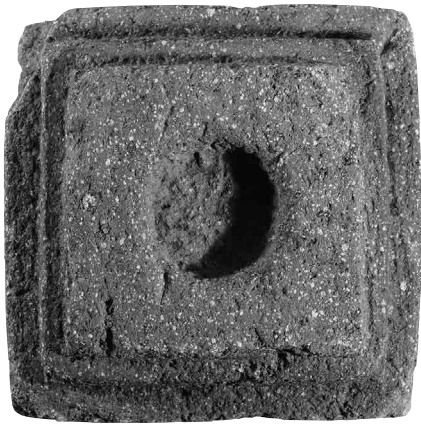
1



2



3



1



5



6



7



8



9



10



11



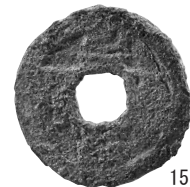
12



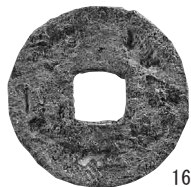
13



14



15



16

土坑墓20

1. 第1面 土坑墓出土遺物(3)





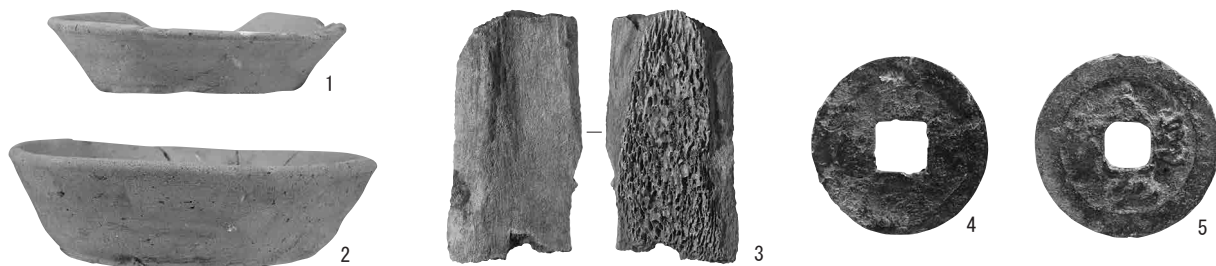
土坑墓21



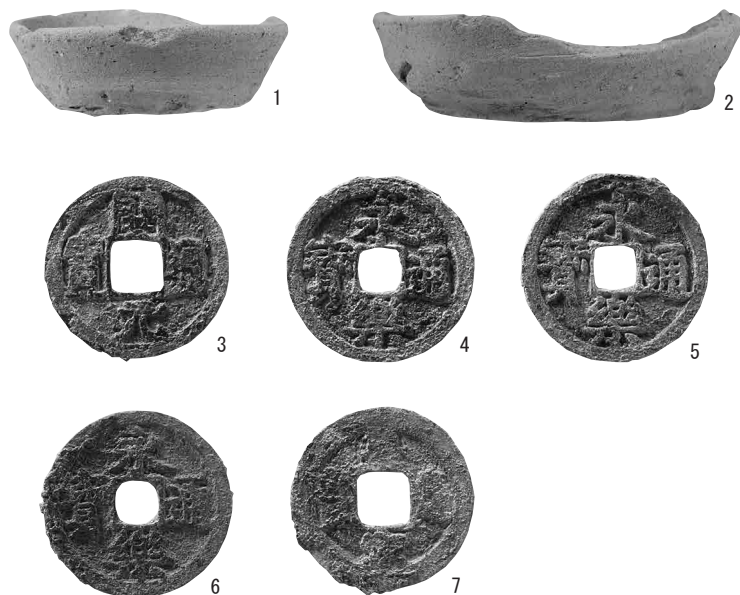
土坑墓22



土坑墓25



土坑墓24



土坑墓26



土坑墓27

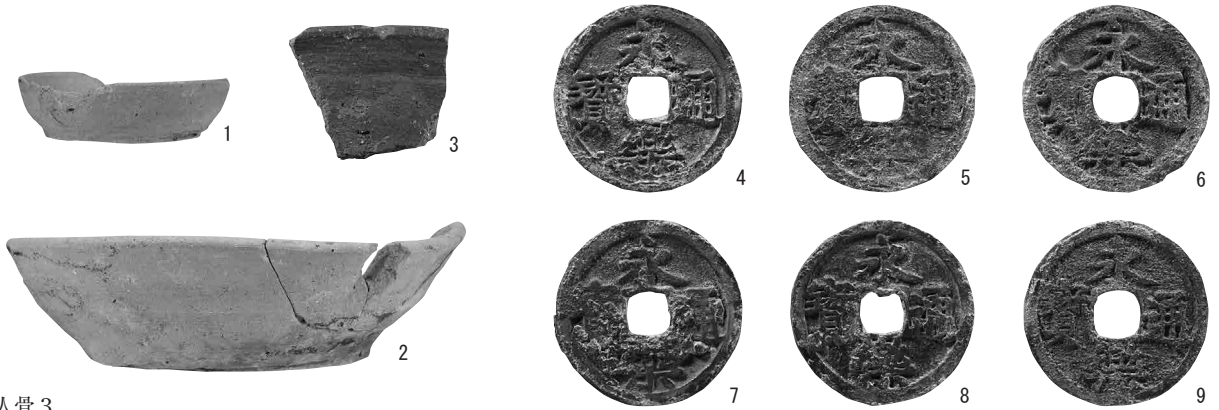
1. 第1面 土坑墓出土遺物(4)

图版 32

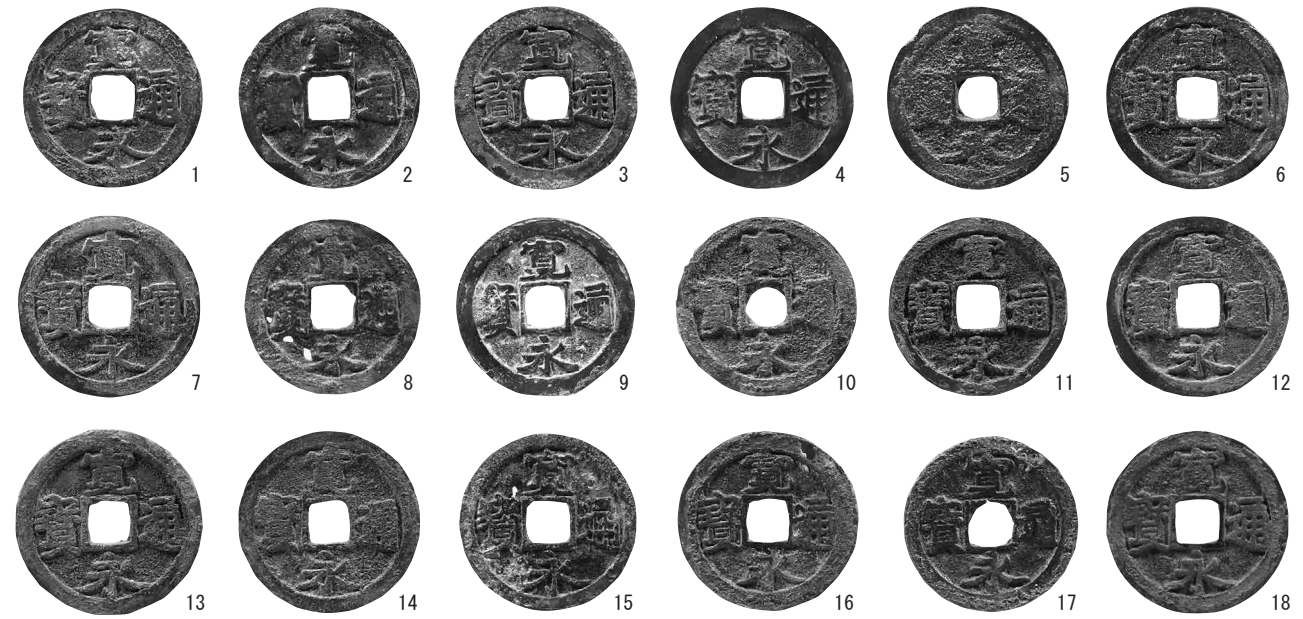


埋葬人骨 2

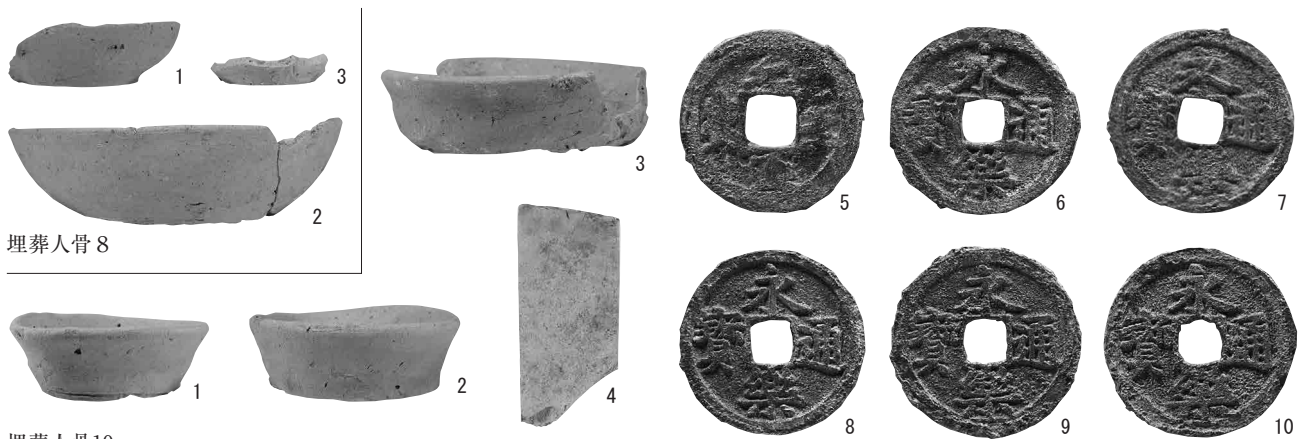
埋葬人骨 4



埋葬人骨 3



埋葬人骨 5

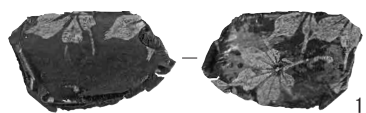


埋葬人骨 8

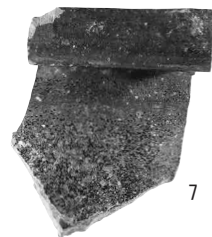
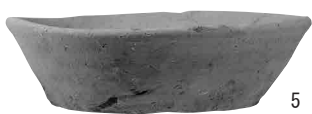
埋葬人骨 10

1. 第 1 面 埋葬人骨出土遺物 (1)



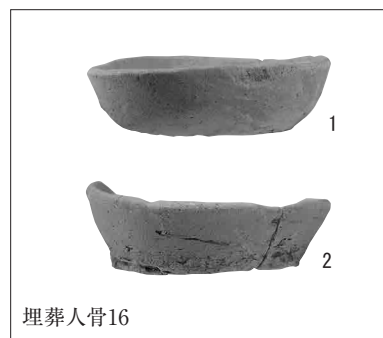


埋葬人骨12

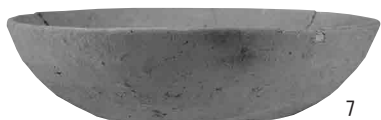
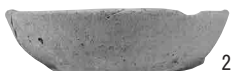


埋葬人骨15

1. 第1面 埋葬人骨出土遺物(2)

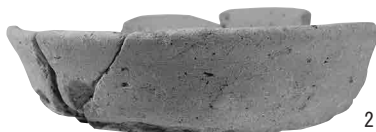


埋葬人骨16



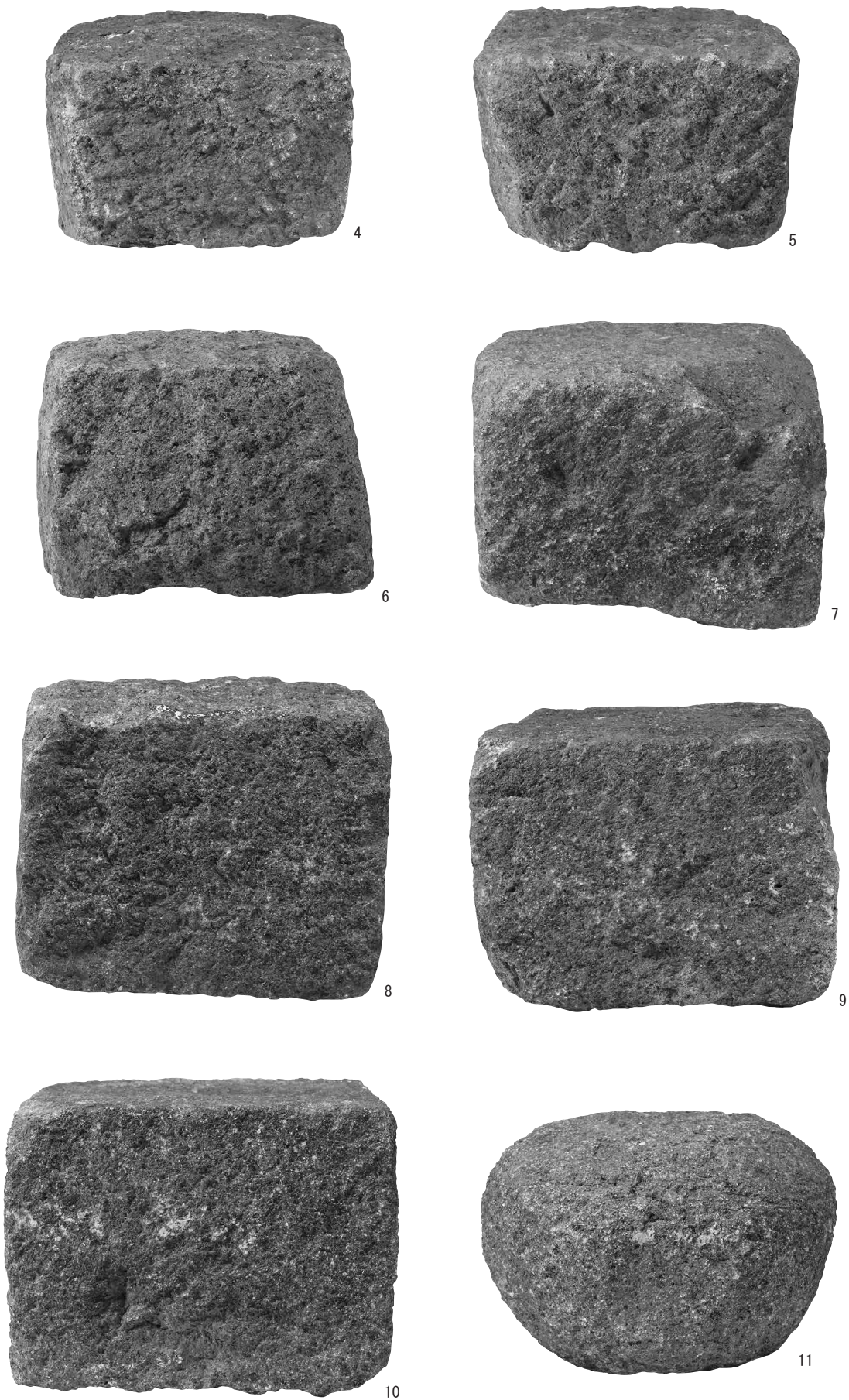
土坑1

2. 第1面 土坑出土遺物



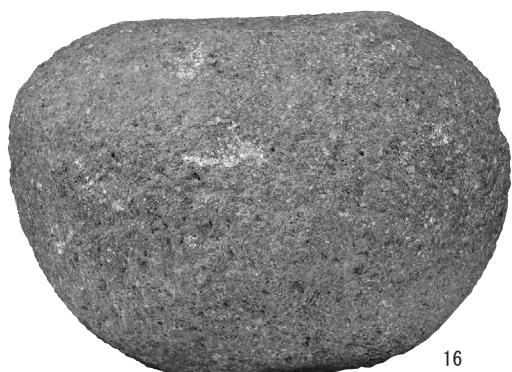
3. 表採・表土出土遺物(1)





1. 表採・表土出土遺物(2)





1. 表採・表土出土遺物(3)





1. 表採・表土出土遺物(4)





28



29



30



31



32



33



34

1. 表採・表土出土遺物(5)





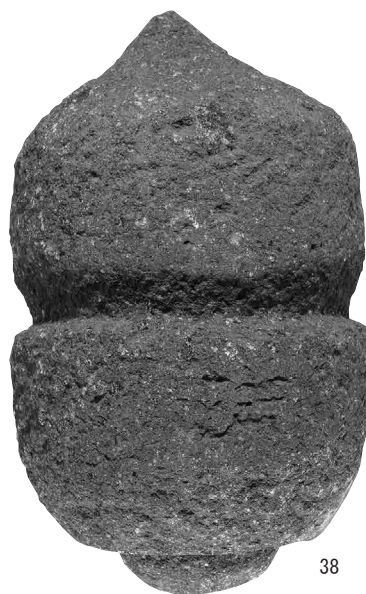
35



36



37



38



39

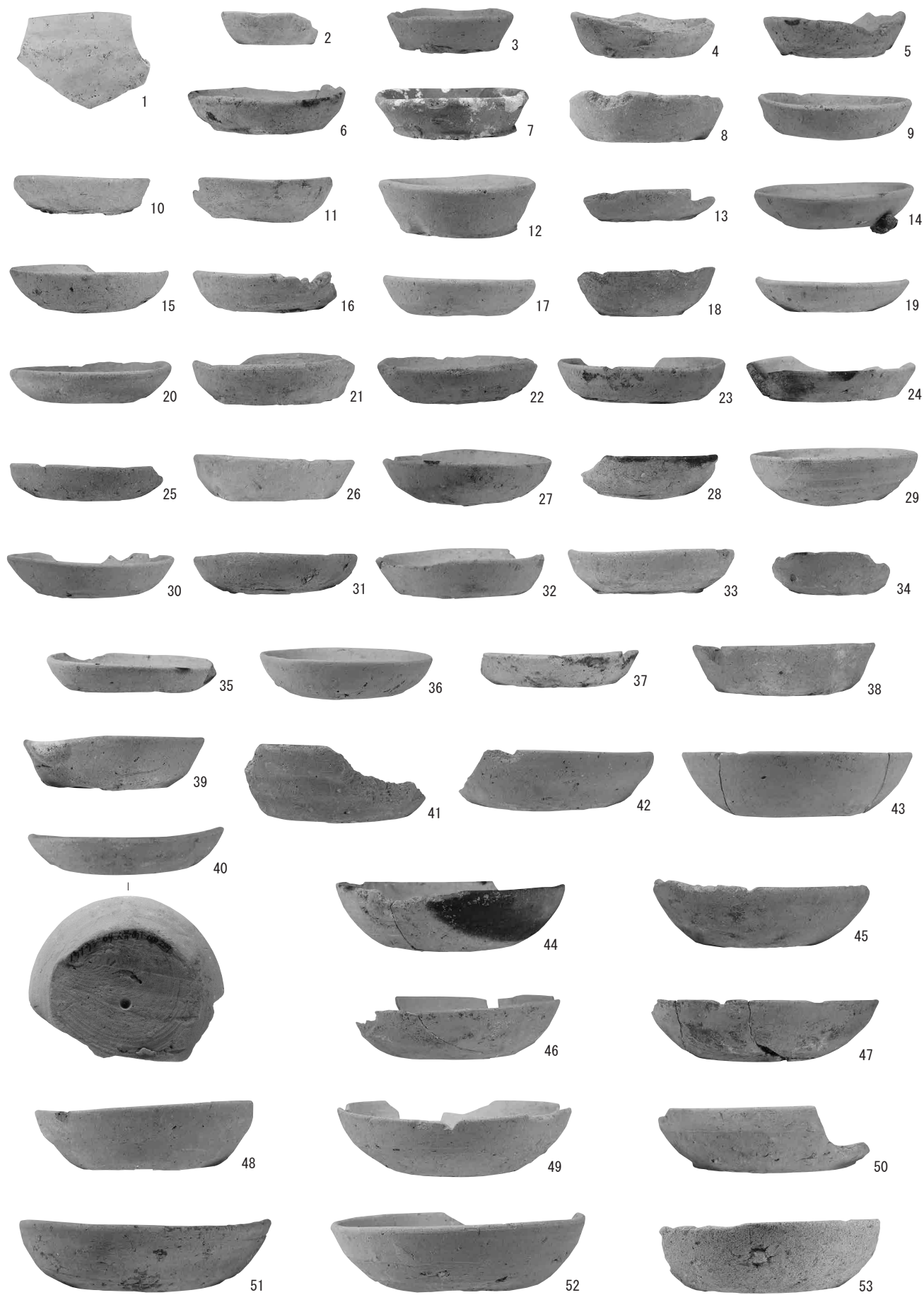


40



41

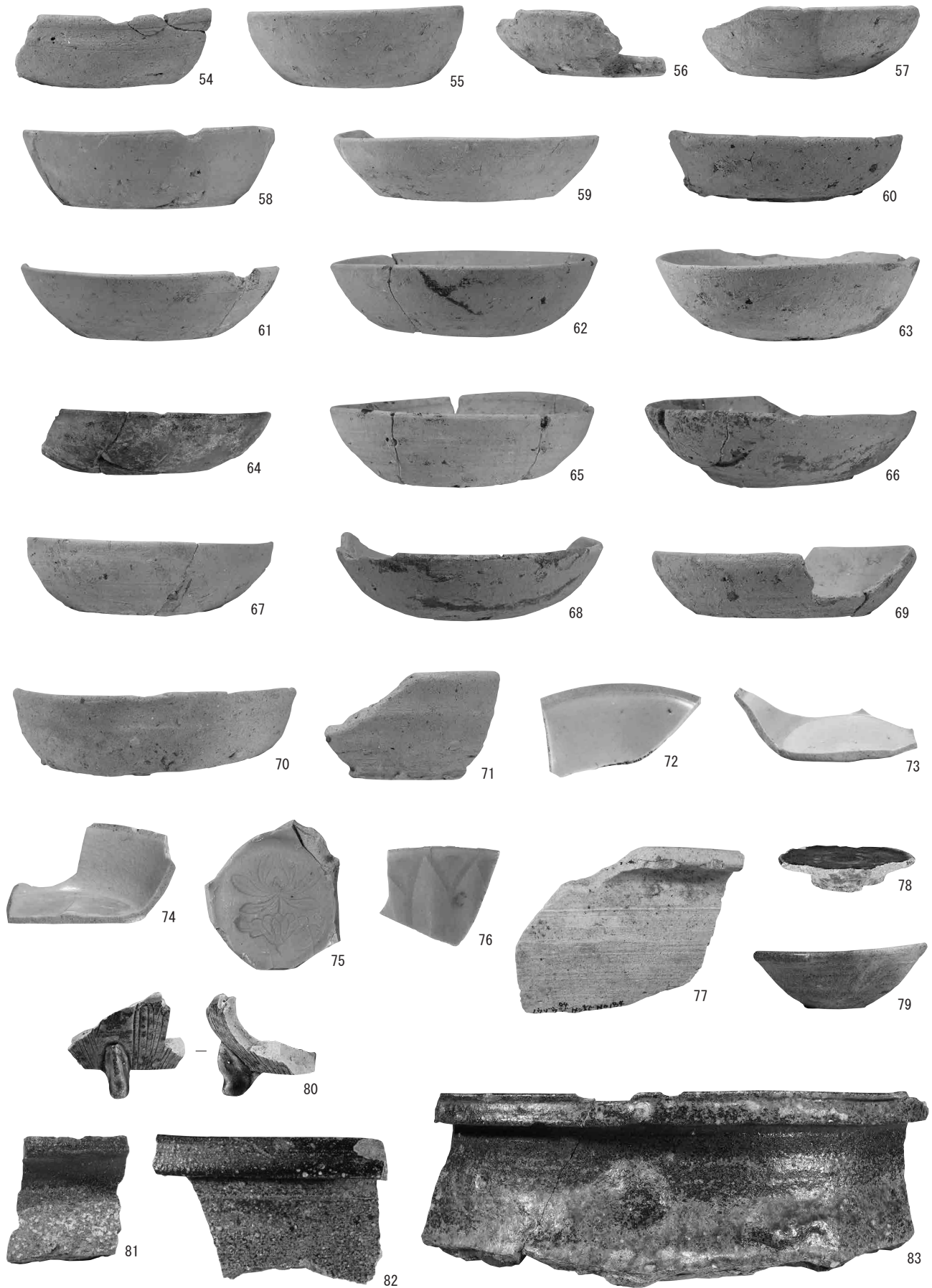
1. 表採・表土出土遺物(6)



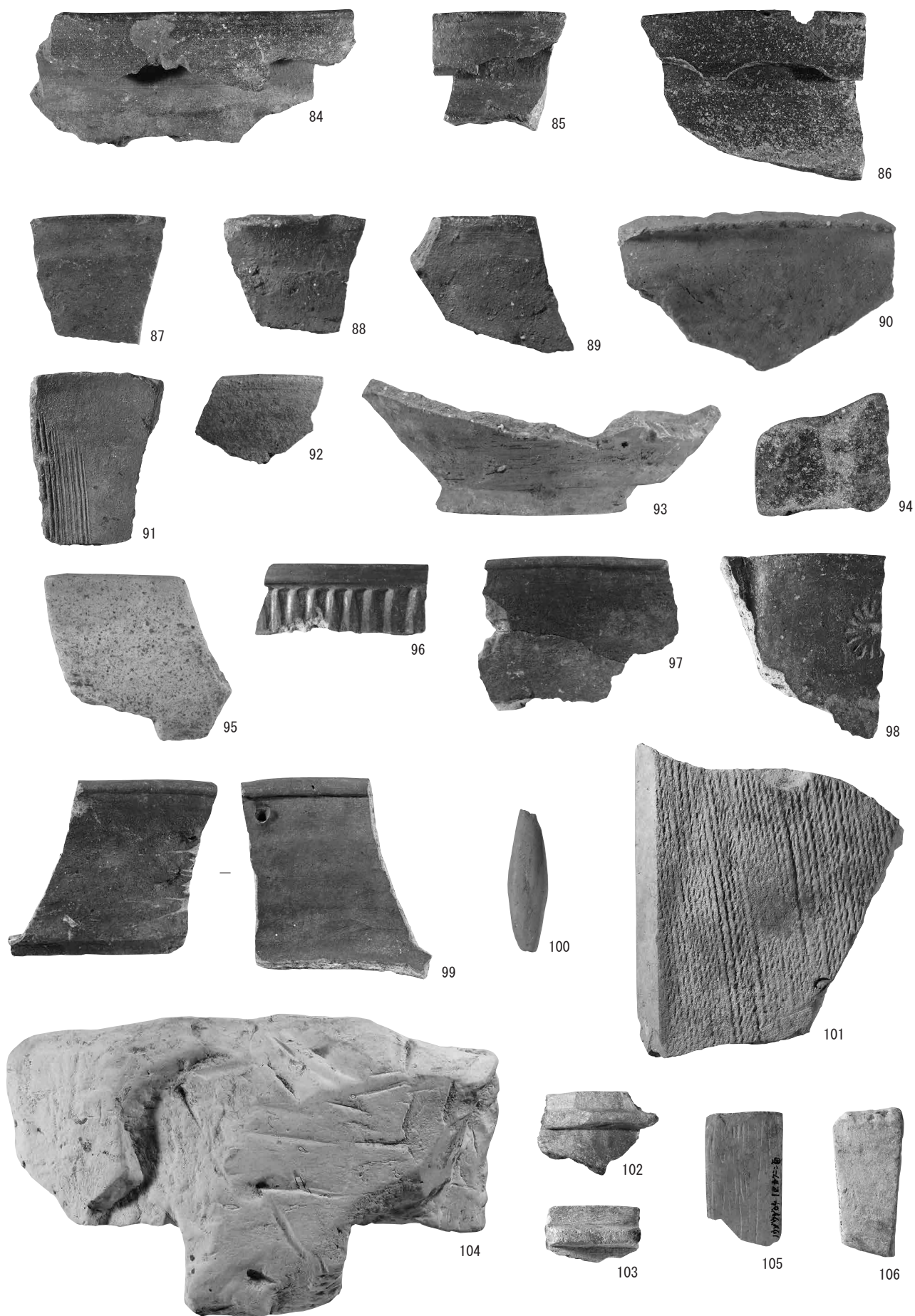
1. 第1面 遺構外出土遺物(1)



图版 40



1. 第1面 遺構外出土遺物(2)



1. 第1面 遺構外出土遺物(3)





107



108



110



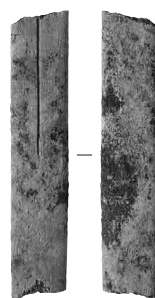
111



109



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



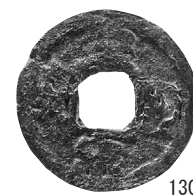
127



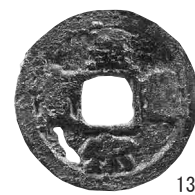
128



129



130



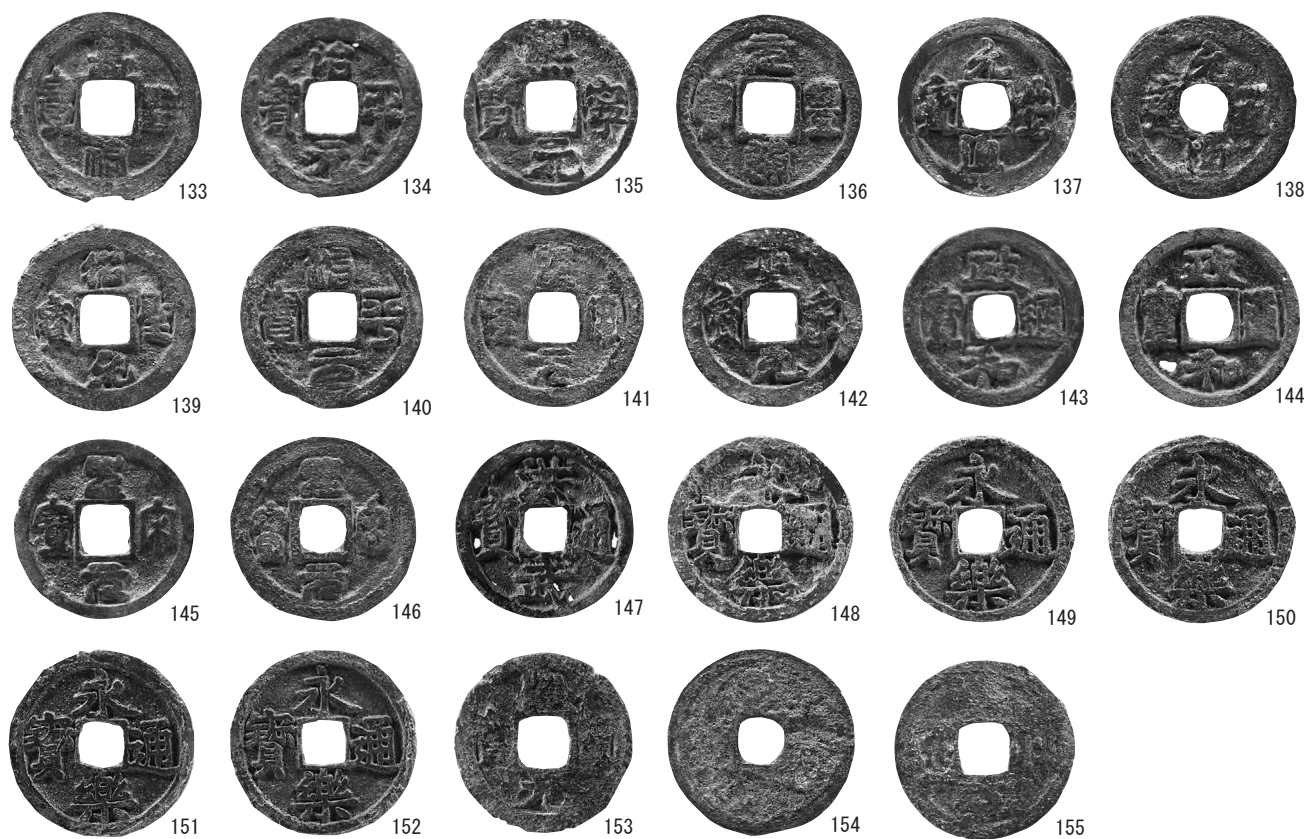
131



132

1. 第1面 遺構外出土遺物(4)



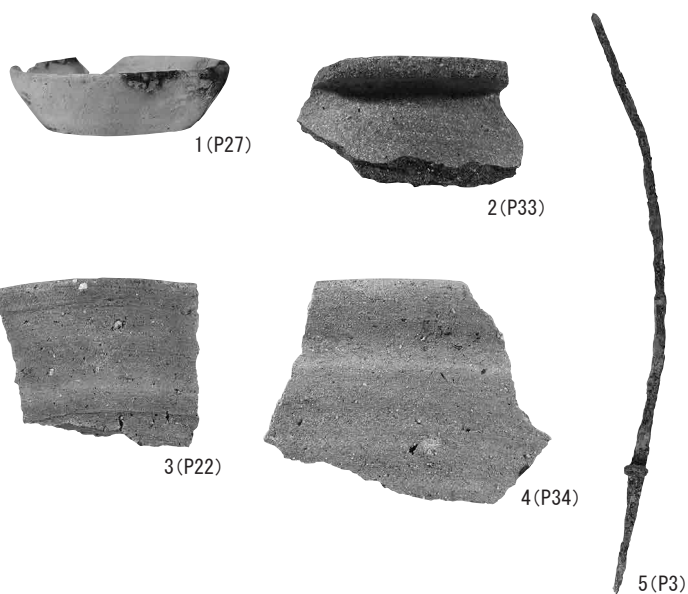


1. 第1面 遺構外出土遺物(5)

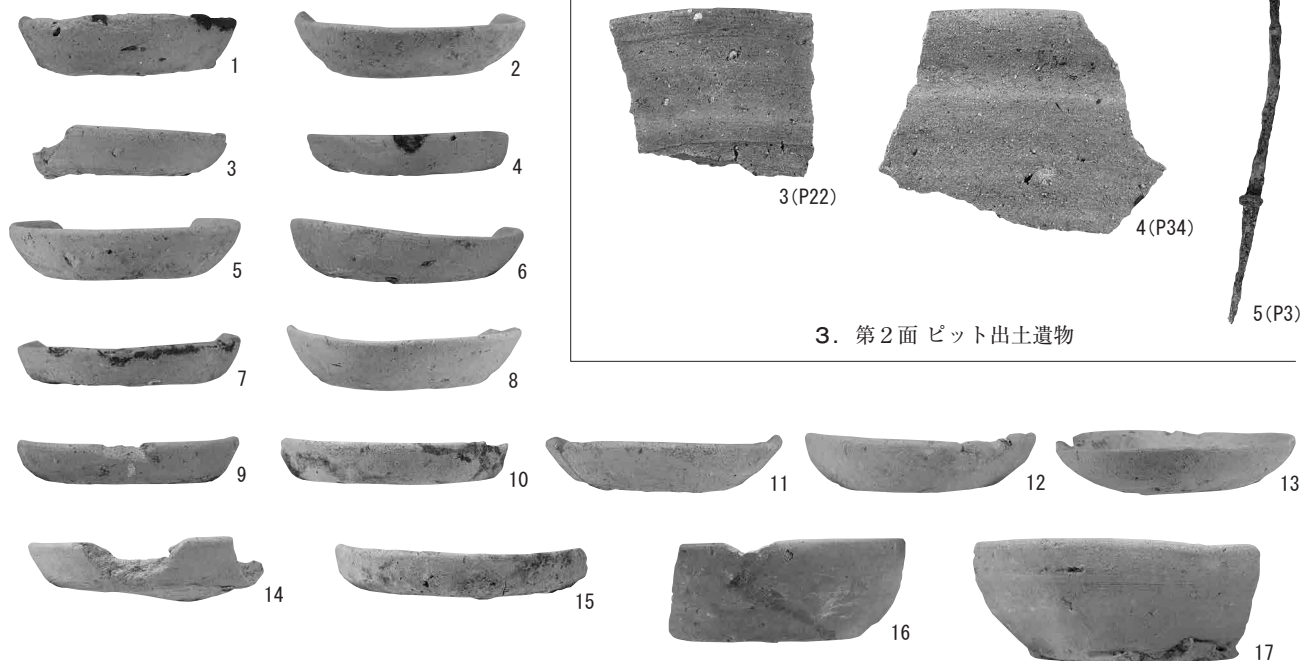


土坑 2

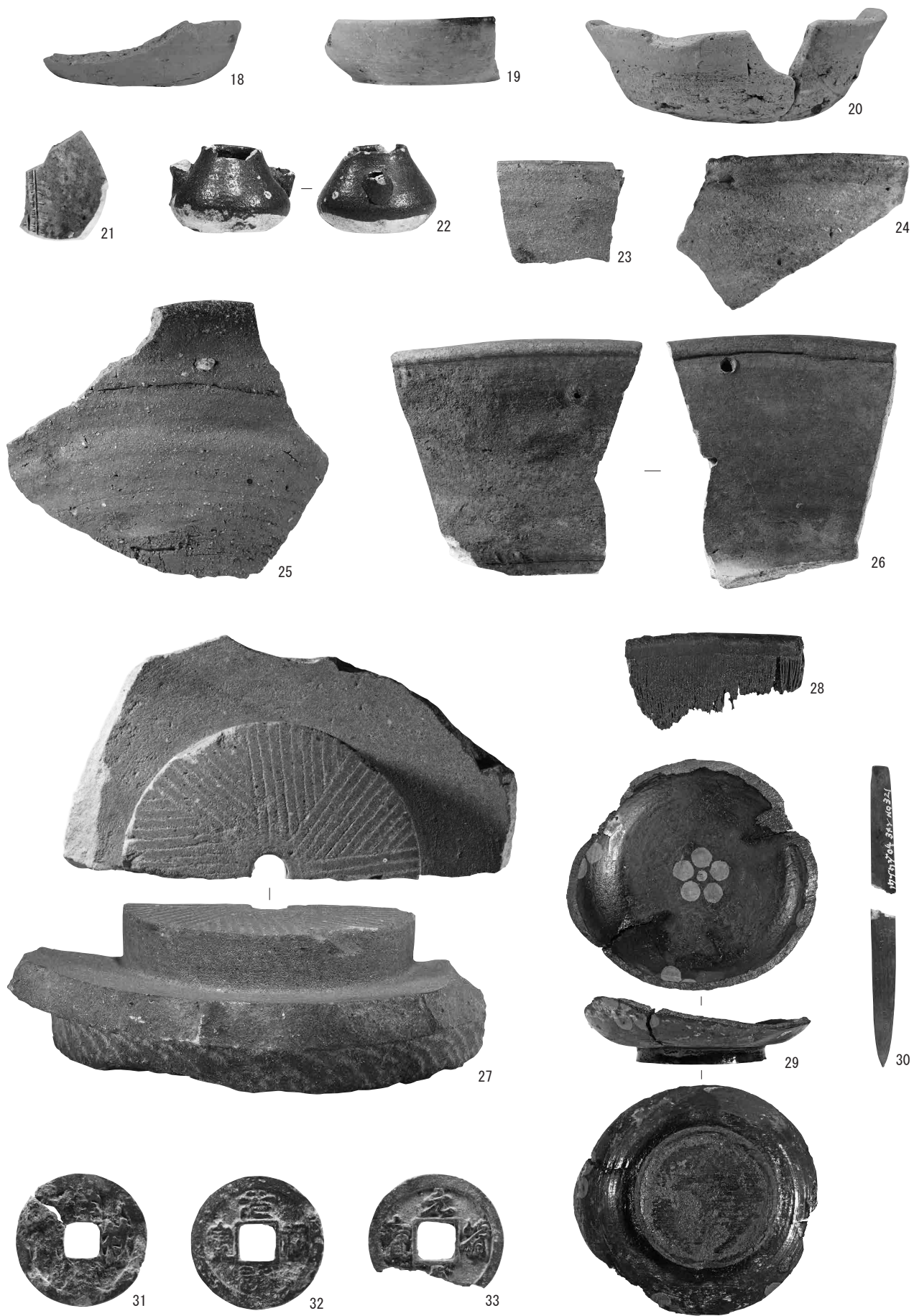
2. 第2面 土坑出土遺物



3. 第2面 ビット出土遺物



4. 第2面 遺構外出土遺物(1)



1. 第2面 遺構外出土遺物(2)



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成29年度発掘調査報告							
巻次	34 (第5分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	永田史子・齋藤修佑							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2018年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 おおまちいっちょうめ 大町一丁目 1084番4	14204	242	35° 18′ 58″	139° 33′ 10″	20071106 ～ 20071207	16	個人専用 住宅 (地盤表層改良 工事)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ゆきのしたいっちょうめ 雪ノ下一丁目 187番4	14204	242	35° 19′ 24″	139° 33′ 10″	20080215 ～ 20080314	25	個人専用 住宅 (柱状改良工事)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 こまちいっちょうめ 小町二丁目 349番1の一部	14204	242	35° 19′ 11″	139° 33′ 9″	20080826 ～ 20080912	14	個人専用 住宅 (柱状改良工事)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 こまちさんちょうめ 小町三丁目 418番4	14204	242	35° 19′ 17″	139° 33′ 23″	20100121 ～ 20100324	58	個人専用 住宅 (柱状改良工事)
しゃかどういせき 釈迦堂遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 じょうみょうじいっちょうめ 浄明寺一丁目 598番21	14204	257	35° 19′ 13″	139° 33′ 53″	20090109 ～ 20090206	17	個人専用 住宅 (鋼管杭工事)
しゃかどういせき 釈迦堂遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 じょうみょうじいっちょうめ 浄明寺一丁目 598番35	14204	257	35° 19′ 14″	139° 33′ 54″	20090210 ～ 20090316	20	個人専用 住宅 (鋼管杭工事)
とくせんじあと 徳泉寺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちあざびがしかなれい 山ノ内字東管領 やしき 屋敷168番4	14204	173	35° 20′ 0″	139° 32′ 59″	20081202 ～ 20081215	20	個人専用 住宅 (柱状改良工事)
のうぞうじあと 能蔵寺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 さいもくぎにちちょうめ 材木座二丁目 293番2	14204	314	35° 18′ 35″	139° 33′ 16″	20060810 ～ 20061106	52	個人専用 住宅 (柱状改良工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	竪穴状遺構、井戸、土坑、ピット	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器、土器、瓦質土器、瓦、石製品、骨製品、金属製品	15世紀前葉の井戸・土坑および13世紀前葉～後葉の竪穴状遺構を中心とした遺構群を検出。
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	道路状遺構、土坑、木組遺構、ピット	かわらけ、舶載磁器、国産陶器、土器、瓦質土器、瓦、土製品、石製品、木製品、骨製品、金属製品	13世紀中葉～15世紀前葉の遺構群を検出。東側側溝を伴う道路状遺構を確認。
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	溝状遺構、ピット	土師器、かわらけ、舶載磁器、国産陶磁器、瓦、金属製品	13世紀中葉～後葉の若宮大路の東側側溝と思われる溝状遺構を検出。



わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都 市	中 世	井戸、砂利敷遺構、溝状遺構、土坑、ピット	土師器、須恵器、かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器、土器、瓦、石製品、木製品、金属製品	古墳時代以前および13世紀中葉～16世紀代の遺構群を検出。石組構造の井戸を検出。
しゃかどういせき 釈迦堂遺跡	都 市	中 世	溝状遺構、石列、土坑、不明遺構	かわらけ、舶載磁器、国産陶器、土器、石製品	13世紀末～15世紀前葉の遺構群を検出。
しゃかどういせき 釈迦堂遺跡	都 市	中 世	溝状遺構、土坑、ピット	かわらけ、舶載磁器、国産陶器、土器、瓦質土器、土製品、石製品、木製品、金属製品	13世紀後葉～15世紀代の遺構群を検出。青白磁梅瓶の優品が出土。
とくせんじあと 徳泉寺跡	寺 院	中世・近世	地業、河川	かわらけ、舶載磁器、国産陶器、瓦質土器、瓦、石製品	15世紀～18世紀代の河川とそれに伴う地業を検出。
のうぞうじあと 能蔵寺跡	墓	中世・近世	火葬墓、土坑墓、土坑、ピット	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器、土器、瓦質土器、石製品、木製品、骨製品、金属製品、ガラス製品	15世紀～17世紀代の墓地を検出。埋葬人骨多数出土。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34

平成 29 年度発掘調査報告

(第 5 分冊)

発行日 平成 30 年 3 月 30 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 光写真印刷株式会社